第一編　仏教一般

【五時】

釈迦が一代五十年の間に説いた教えを、天台大師は分類解釈して五時八教とした。五時とは、釈迦の教説を、説法の順序にしたがって、華厳時、阿含時、方等時、般若時、法華涅槃時の五つに分類したものである。

釈迦が三十で成道してから二十一日間、伽耶城の近くの菩提樹の下で華厳経を説いたのを華厳時という。その後、波羅奈国の鹿野苑などで十二年間にわたって阿含経などの小乗の教えを説いて仏法に誘引したのを阿含時という。次の十六年間、欲界と色界の中間、大宝坊で維摩経、観経、大日経、阿弥陀経、金光明経などを説き、小乗の教えを弾訶して大乗教を慕わせたのを方等時という。その後の十四年間に鷲峯山、白露池などで摩訶般若など皆空の教えを説いて衆生の機根を陶汰したのを般若時という。こうして、釈迦は四十二年の間さまざまな教えを説いて衆生の機根が調った後、中天竺摩訶陀国の霊鷲山と虚空会の二処三会で八年間に法華経を説き、方便・権教を捨てて一切衆生が成仏できる真実の教えを顕わし、二乗作仏の記別を授けたのを法華時といい、さらに、入滅の直前、一日一夜涅槃経を説いて、重ねて仏性を談じたのを涅槃時というが、ふつう法華涅槃時とする。

五時の説法を図示すれば次のとおりである。

場所　伽耶城の近くの菩提樹下、七処八会

派

華厳時

期間　二十一日間

経　大方広仏華厳経

位　法華経に次ぐ大乗経、乳味と名づく

別・円二教を説く、兼と名づく

頓教、擬宜の教

これを依経とした宗　華厳宗

阿含時

場所　波羅奈国の鹿野苑

期間　十二年間

経　増一阿含、長阿含、中阿含、雑阿含の四経

位　小乗経、酪味と名づく

蔵教のみを説く、但と名づく

漸教（秘密、不定教もあり）

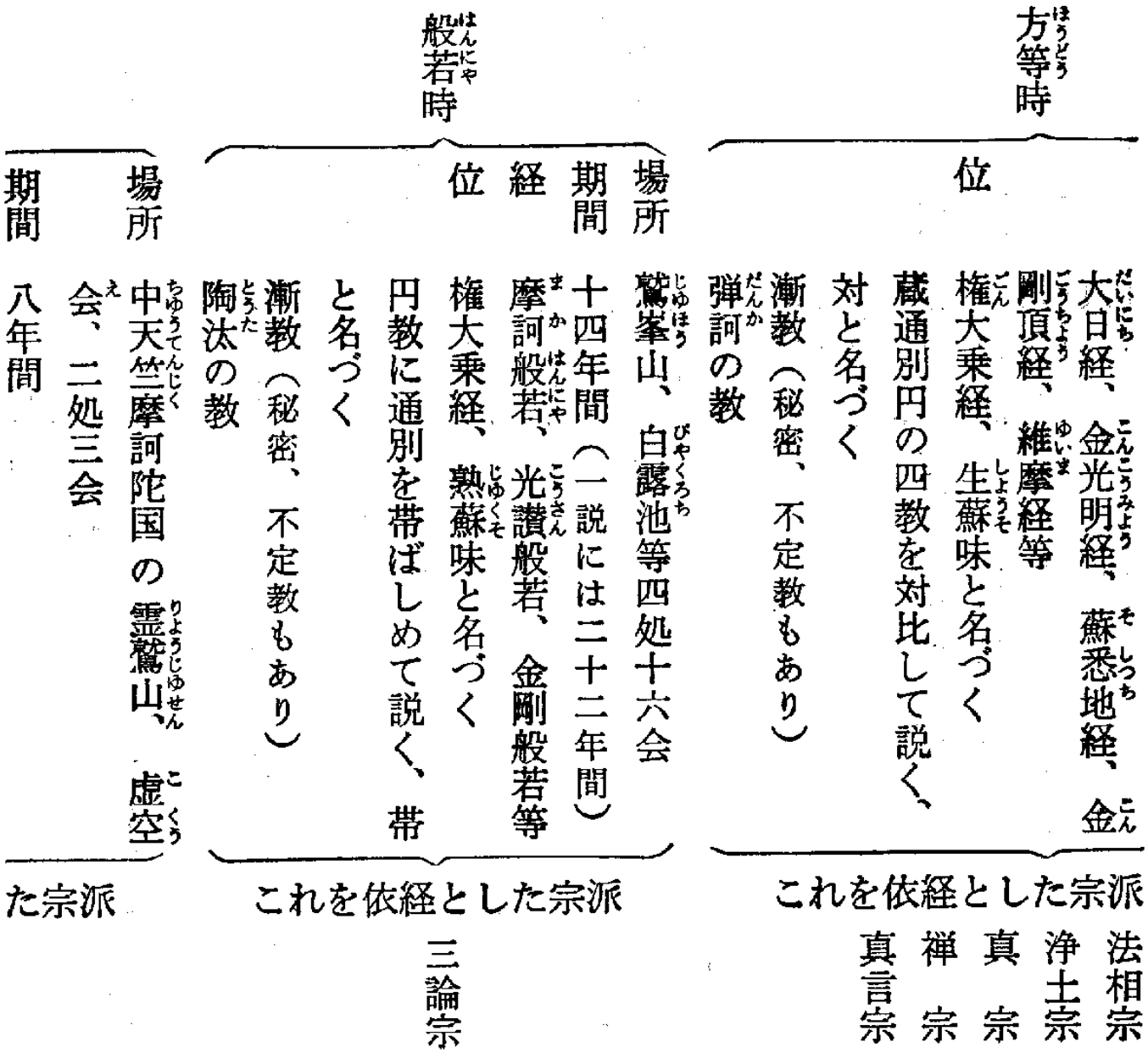
誘引の教

これを依経とした宗派　倶舎宗　成実宗　律宗

場所　欲界色界の二界の中間　大宝坊

期間　十六年間（一説には八年間）

経　勝鬘経、解深密経、楞伽経、首楞厳経、観経、雙観経、阿弥陀経、


方等時
位
大日経、金光明経、蘇悉地経、金
剛頂経、維摩経等
権大乗経、生蘇味と名づく
蔵通別円の四教を対比して説く、
対と名づく
漸教（秘密、不定教もあり）
弾訶の教
これを依経とした宗派
法相宗
浄土宗
真宗
禅宗
真言宗
般若時
場所
期間
経
位
鷲峯山、白露池等四処十六会
十四年間（一説には二十二年間）
摩訶般若、光讃般若、金剛般若等
権大乗経、熟蘇味と名づく
円教に通別を帯ばしめて説く、帯
と名づく
漸教（秘密、不定教もあり）
陶汰の教
これを依経とした宗派
三論宗
場所
期間
中天竺摩訶陀国の霊鷲山、虚空
会、二処三会
八年間
た宗派

法華経二十八品、涅槃経	経	
実大乗経、醍醐味と名づく	位	
円教		
頓教（秘密、不定なし）		
開会の教		

天台宗	
経と	し
これを依	

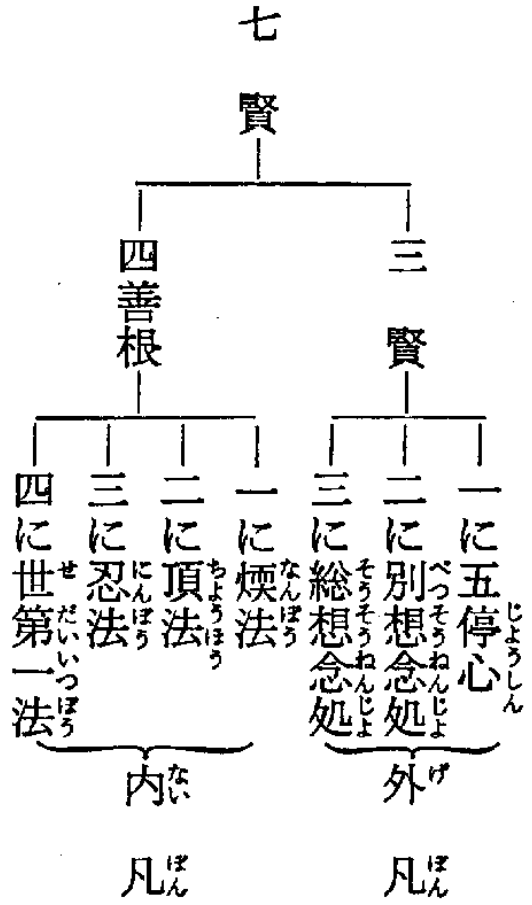
しかし、この説時については異説もある。日蓮大聖人は、守護国家論において、この点を詳しく解明されたのち「大部の経大概是くの如し此より已外諸の大小乗経は次第不定なり、或は阿含経より已後に華厳経を説き法華経より已後に方等般若を説く皆義類を以て之を収めて一処に置くべし」（四〇ジー）と仰せになっており、釈迦が対告衆の機根に応じて、種々前後して法を説いたことがわかるのである。なお五味については説法の次第にしたがって右の表のように配当する場合と、教説の高低にしたがって、阿含を乳味に配し、以下方等を酪味、般若を生蘇味、華厳を熟蘇味とする場合とがある（曾谷殿御返事一〇五九ジー）。いずれの場合にも、法華涅槃時を醍醐味とすることには変わりはない。

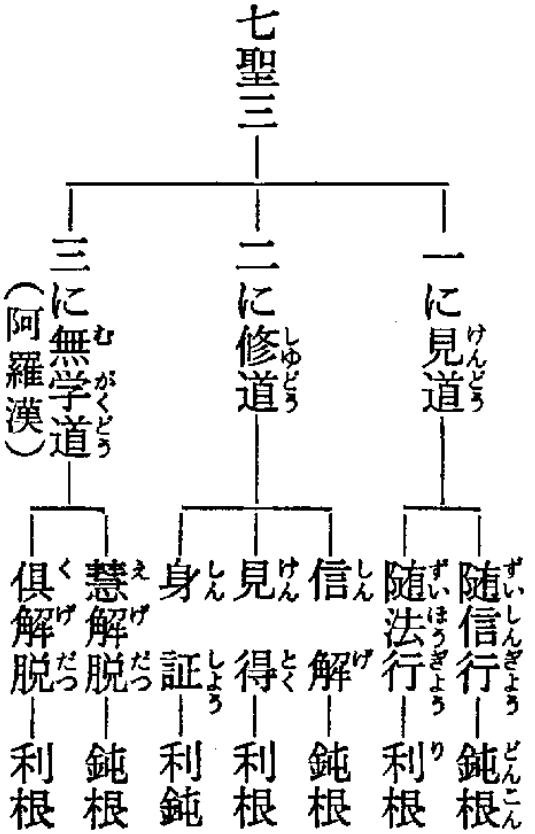
【八教】

八教とは教えの内容から釈迦一代の教説を分類、解釈したもので、化法の四教と化儀の四教である。

化法の四教　化法の四教とは、教説の内容から分類したもので、一には三蔵教・二には通教・三には別教、四には円教である。（一代聖教大意三九〇ジー）

三蔵教とは阿含経の意であり、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の六道内の因果の道理を明かしている。三蔵とは、一には経蔵（または定蔵）・二には律蔵（または戒蔵）・三には論蔵（または慧蔵）である。戒蔵とは五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒の戒律を説いている。定蔵とは味禅・定禅・無漏禅である。慧蔵とは苦・空・無常・無我の智慧である。このように三蔵経には戒・定・慧を説いているけれども、その本体は戒律である。またこの教の意は、依報には六界・正報には十界を明かし、依報にしたがってこの経を名づければ「六界を明かす経」と名づけ、また、正報にしたがってこの経を名づければ声聞経ともいう。それは正報は十界を明かしているが、縁覚・菩薩・仏といってもその内容は声聞の悟りにとどまるにすぎないから、こう呼ばれるのである。声聞について七賢・七聖の位があり、六道を凡夫としている。





（詳細の説明は一代聖教大意三九二ページ）

次に通教とは大乗の初めである。一応は戒定慧の三学を説いているけれども大旨は六道を出ない。教えの内

容が蔵教にも通じ、後の別教にも通ずるので通教という。蔵教の空観が、一切の諸法を生滅無常なりとする折空観なのに比べて、通教では無生滅の四諦・十二因縁・六度を観じて、体空の真諦をみるという。しかし蔵通二教ともに六道の凡夫に仏性があるとはいわず、この教えを修行すれば声聞・縁覚・菩薩・仏と思い思いに成道すると説いている。（一代聖教大意三九三ページ・三九四ページ）また通教では十地を説いている。

一、乾慧地　六、離欲地
二、性地　七、已弁地
三、八人地　八、辟支仏地
四、見地　九、菩薩地
五、薄地　十、仏地

次に別教とは、前の蔵通二教とも、後の円教とも別なので別教という。この教えは戒定慧の三学を述べ、声聞・縁覚を除きただ菩薩だけを対象として歴劫修行を説いているため界外独菩薩の法ともいう。この教によって三惑を断ずるとしているが、見思の惑は界内の通惑であり、塵沙は仮諦、無明は中諦の惑で界外の別惑とし、これを破して仮諦と中諦の理を悟ると説く。このように三諦各別で円融しないので、その説くところを但中の理といい、次第の三観とも但中の観ともいう。この教えの位を五十二位に分けて説いている。

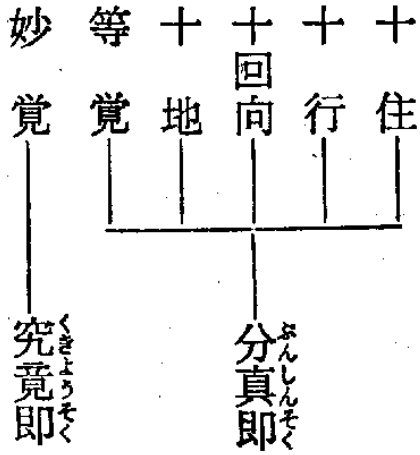
十信（見思惑を伏す）――外凡
十住（見思惑を断じ塵沙惑を伏す）
十行（塵沙惑を断ず）――内凡

十回向（無明惑を伏す）　　）
十　地（十品の無明を断ず）　　聖
等　覚（同じく十一品を断ず）
妙　覚（同じく十二品を断ず）　　（一代聖教大意三九四ジー・三九五ジー）

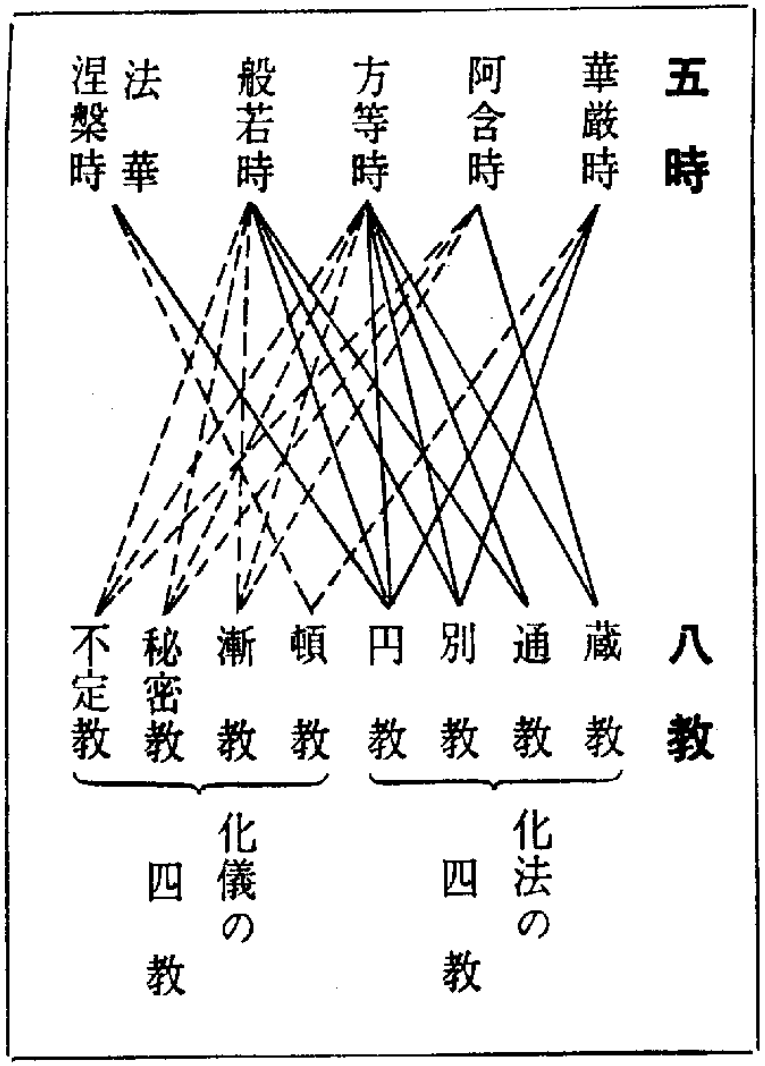
この教えの意は、五十二位の一々の位に多倶低劫を経てようやく仏に成ると説き、一人として一生のあいだに成仏する者はない。また一つの位の修行だけで仏になる者はなく、それぞれの位であらゆる修行を積んで成仏すると説く。

次に円教とは、三諦・十界・十如・三千の諸法が円融円満なるに名づける。円教に二つあり、爾前の円と法華の円である。爾前の経においても凡夫が位の次第を経ずに成仏すると説き、あるいは煩悩を断じないでも成仏すると説いている教えがある（一代聖教大意三九六ジー）。法華の円については三諦・十界互具・一念三千等、別項で詳しく解説する。なお、この教の位を六即位に配立して、

五品弟子凡外凡
　名字即
　観行即
十　信
内凡
　相似即
　理　即



等とするが、日蓮大聖人の仏法における六即の配立は御義口伝下（七五二ページ）に示されているとおりである。



化儀の四教

化儀の四教とは頓・漸・秘密・不定であり、化法の四教をもって衆生の機根を調熟していく教化の方法で釈迦の教説を分類したもの。すなわち、誘引の手段をとらず、率直に大乗を説くのが頓教であり、小を説いてしだいしだいに誘引するのを漸教といい、同じ説法を聞いておのおの別々に会得させるのを秘密教といい、得益の不同を不定教という。

法華経は、この八経中いずれに属するかについて、天台、妙楽は「超八」と解釈し、八教に超越している

と説いている。また日蓮大聖人は次のように仰せになっている。

曾谷入道殿御返事（一〇五七ページ）　妙楽大師の記に云く「若し超八の如是に非ずんば安んぞ此の経の所聞と為さん」云云、彼彼の諸経の題目は八教の内なり網目の如し、此の経の題目は八教の網目に超えて大綱と申す物なり。

御講聞書（八一一ページ）　此の経の如是は爾前の諸経の如是に勝れて超八の如是なり、超八醍醐の如是とは速疾頓成の故なり。

五時と八教との関係を図示すれば、前頁のようになる。

【四箇の格言】

日蓮大聖人は宗旨建立の初めにあたって、それまでの一切の仏法は時機不相応であるとして次のように破折された。これを四箇の格言といっている。

秋元御書（一〇七三ページ）　而るを日蓮一人・阿弥陀仏は無間の業・禅宗は天魔の所為・真言は亡国の悪法・律宗・持斎等は国賊なりと申す云云。

御義口伝上（七一三ページ）　今日蓮等の類いは無間自説なり念仏無間・禅天魔・真言亡国・律国賊と喚ぶ事は無問自説なり。

諫暁八幡抄（五八五ページ）　我が弟子等が愚案にをもわく我が師は法華経を弘通し給うとてひろまらざる上

大難の来れるは真言は国をほろぼす念仏は無間地獄・禅は天魔の所為・律僧は国賊との給うゆへなり、例せば道理有る問注に悪口のまじわれるがごとし云云。

この四箇の格言によって、日蓮大聖人御在世当時盛んだった念仏、禅、真言、律の各宗の教義の誤りは、短いお言葉で完璧に破折しつくされているのである。（各宗の教義の項参照）

日蓮大聖人出世の本懐は三大秘法の建立にあらせられることはいうまでもないが、その建立に先立って四箇の格言を説かれたのは、破邪なくして立正はないからである。

【浄土宗の教義】

（**発生**）中国では曇鸞（西紀四七六～五四二年）が天竺の菩提留支三蔵に会って「観無量寿経」を受け、阿弥陀の力によって浄土往生ができると説いて浄土の教えを弘め、その後、道綽（西紀五六二～六四五年）善導（西紀六一三～六八一年）などに受け継がれた。わが国の元祖は法然（西紀一一三三～一二一二年）。

（**教義**）無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経を浄土の三部経として、この世の中は穢土であり、死んだ後に西方の極楽浄土へ往生するのを理想とし根本としている。そのために釈尊一代の仏教を聖道門・浄土門の二つに分け、浄土宗以外の一切の経教を修行するのは難行道であり、浄土門は易行道であると立てる。そして聖道門においては「いまだ一人も得道した者がない」とか「千人の中に一人も成仏する者はない」として、このような雑修・雑行を捨て「百人が百人とも往生のできる」念仏宗に帰依せよと主張している。（立正安国論二二ページ等）

法然は、選択集において、捨閉閣抛すなわち浄土三部経以外の教えを一切、雑修・雑行として、捨てよ閉じよ閣け抛てといって、正法たる法華経を誹謗している。本尊には阿弥陀の一仏のみを立てる。

（破折）浄土の三部経は方等部であり、四十余年の説で権教方便の教えである。後八年の法華経こそ実教であり、釈尊の出世の本懐であることは、無量義経に「四十余年未顕真実」とあり、また法華経方便品に「正直に方便を捨てて但無上道を説く」とあることで明らかである。しかるに念仏宗の開祖たちは捨閉閣抛といって三部経以外の教えを一切、雑修・雑行として正法たる法華経を誹謗している。これは阿弥陀如来の前身である法蔵比丘が立てた四十八願のうちの第十八願の「いかなる罪人・悪人でも阿弥陀を念ずれば西方十万億土の極楽浄土へ往生することができる。ただし五逆罪と誹謗正法の者をば除く」（頼基陳状一一五四ページ）という誓文に背くから、現在の念仏宗で往生のできるわけがない。まして法華経譬喩品第三には「この経を毀謗する者は無間地獄に堕つ」と説かれているから「念仏は無間地獄の法なり」と決定されるのである。

【禅宗の教義】

（発生）霊山会上で釈尊が、黙然として花を拈って大衆に示した時、すべてその暗示的意味を理解することができなかったなかに、迦葉だけがその意味を悟って破顔微笑した。そして大梵天王問仏決疑経（これは偽経である）にある「正法眼蔵・涅槃の妙心・実相無相・微妙の法門があり、文字を立てず教外に別伝して迦葉に付嘱する」との経文どおり承伝して第二祖阿難、第三祖商那和修と代々相伝付嘱して第二十八祖の達磨にいたり、

それ以来、中国から日本へと弘通されてきた、と禅宗ではいう（蓮盛抄一五〇ページ）。わが国においては栄西（西紀一一四一～一二一五年・臨済宗）、道元（西紀一二〇〇～一二五三年・曹洞宗）、隠元（西紀一五九二～一六七三年・黄檗宗）が派祖。

（**教義**）禅宗は、戒・定・慧の三学のうちで、特に定の部面を強調している。すなわち、仏教の真髄は決して煩雑なる教理の追究ではなくて、坐禅修道することによって直接に自証体得することができると説き、そのために、不立文字、教外別伝、直指人心、見性成仏が教えの根本として掲げられている。

（**破折**）禅宗のように経文は月をさす指であり、禅は「見性成仏」である等と説くのは、経文を否定し、凡夫である自己を過信した仏法を破壊する業である。ゆえに仏は涅槃経に「願って心の師と作って心を師とせざれ」と説き、また「仏の所説に順わざる者有らば当に知るべし是れ魔の眷属なり」と説いている。そのため日蓮大聖人は「禅は天魔の所為」と破折されるのである。また不立文字を立てながら楞伽経を引き、あるいは偽経である像法決疑経を引くのは自語相違であり、まして、楞伽経は四十余年の権教であり「未顕真実」と破られている経である。

【真言宗の教義】

（**発生**）その流派によって東密（東寺流）・台密（天台派）に分かれている。大日如来が色究竟天法界宮において大日経を説き金剛頂経を説いた。金剛薩埵がそれらを結集して南天の鉄塔においた。釈尊滅後七百年ごろ、

竜樹菩薩がその鉄塔の扉を開き、両経を金剛薩埵より授かり、これを竜智菩薩に伝え、竜智はさらに「大日経」等を善無畏（西紀六三七～七三五年）に、「金剛頂経」等を金剛智（西紀六七〇～七四一年）に授けたと説いている。後に、その法は不空（西紀七〇五～七七四年）、慧果（西紀七四五～八〇五年）と伝承された。この間インド、中国においては、まだ真言宗という名はなかった。わが国の空海（弘法大師・西紀七七四～八三五年）は最澄（伝教大師）と共に渡唐し、慧果より金剛、胎蔵両部の秘奥を伝授され、帰朝後、真言宗の立宗を宣言した。

（**教義**）その主張は、法華経等の一切経は応身の釈迦仏が説法したものであり、大日経は法身大日如来の説法である。大日如来に比較するならば釈尊は無明の辺域すなわち迷いの凡夫のようなものであり、ゾウリ取りにもおよばない。また法華経は釈尊一代の仏経中でも第三の劣であり、戯論である。（真言天台勝劣事一三四ページ等）また一念三千は大日経の法門であり、法華経にもこれが説かれているから「理は同じ」であるが、大日経には印と真言とが詳しく説かれているので「事においてすぐれている」等々と説いている。本尊として大日如来・薬師如来をおき、脇士に金剛薩埵・不動明王・虚空蔵菩薩等の仏・菩薩を配置している。

（**破折**）依経の大日経等は、権教四十余年の説であることは前節のとおりである。真言宗の最も悪法である理由は、一代の教主たる釈尊の悪口をいい、卑下して、法身仏たる大日如来を立てることにある。一身即三身と現われる仏こそ、われわれ衆生に智慧と慈悲をもって接することができるのであり、法身の理は、われわれの生活とは直接になんの関係もない。大日法身といえども釈尊の説法であり、しかも四十余年の権教である（真言天台勝劣事一三六ページ）。それのみか中国では天台の一念三千の法をひそかに取り入れて自宗の極理とし、日

本の弘法にいたっては、さらに口をきわめて法華天台を罵倒している。

このように本来の主人をさしおいて無縁の主を立てるところから、真言は亡国・亡家・亡人の法であるとされるのである。

【律宗の教義】

（発生）開祖は中国の道宣（西紀五九六～六六七年）。わが国では聖武天皇の天平勝宝六年（西紀七五四年）に来朝した鑑真が、東大寺に戒壇を建て、聖武天皇はじめ四百余人に戒を授けたことから始まる。後に唐招提寺を建立して根本道場と定めた。

鎌倉時代に極楽寺を建てた忍性良観（西紀一二一七～一三〇三年）が出現して日蓮大聖人に敵対しながらも、幕府の権力者の帰依をうけて隆盛をきわめたが、以後、代々衰え、現在では唐招提寺を総本山として、わずかにその余命を保っているにすぎない。

（教義）四分律すなわち戒律を根本とし、小乗経を依経とする。四分律とは内容的分類ではなく、釈尊滅後百年ごろ、曇無徳尊者が四度にわたって、戒律について編纂したもので、その意味をあらわして四分律という。

（破折）律宗の教えは正法時代の小法であり、日本では像法の中ごろ、法華経迹門が流布する前に、しばらく衆生の機根を調養するため弘まった宗旨である。個人主義的色彩が強く、仏法の根本精神に合致しない。ゆえに伝教大師は法華経の迹門を弘めるにあたり、まず他の南都五宗と共に律宗も破折しており、日蓮大聖人も律

国賊と喝破されたのである。

なお、法華経宝塔品第十一に「此の経は持ち難し、若し暫くも持つ者は、我即ち歓喜す、諸仏も亦然なり、是の如きの人は、諸仏の歎めたもう所なり、是れ即ち勇猛なり、是れ則ち精進なり、是れを戒を持ち、頭陀を行ずる者と名づく、則ち為れ疾く、無上の仏道を得たり」

また観心本尊抄（二四六ページ）に「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」とあるように、末法においては、御本尊を受持することが即持戒なのであり、釈尊の爾前教に説かれているような戒律をそのまま守ることは、われわれにとって有害無益なのである。

【華厳宗の教義】

（発生）東晋（西紀三一七～四一九年）のころ中国に伝わり、杜順（西紀五五七～六四〇年）智儼（西紀六〇二～六六八年）を経て法蔵（西紀六四三～七一二年）にいたって大成され、澄観（西紀七三八～八三九年）らによって弘伝された。わが国へは聖武天皇の天平十二年（西紀七四〇年）に新羅の僧・審祥（西紀？～七四二年）が良弁（西紀六八九～七七三年）に伝え、一時は南都仏教の中心勢力となった。奈良の東大寺がその本山である。鎌倉時代以後はまったく振るわず、現在では東大寺を中心に五十数寺院があるにすぎない。

（教義）華厳宗は華厳経を依経とする。本尊は盧舎那仏で、文殊と普賢の二菩薩が脇士となっている。四種の

法界を立て十玄六相を説いているが、理論偏重に陥り、事行の面がぜんぜんなおざりにされている。

聖密房御書（八九六ページ）　唐の代に高宗の后・則天皇后と申す人の御時・法蔵法師・澄観なんど申す人・華厳宗の名を立てたり、此の宗は教相に五教を立て観門には十玄・六相なんど申す法門なり。

（破折）華厳経は化法のうえからみれば別教のなかに円教を加味したもので、化儀のうえからみれば頓教で権大乗に属する教えである。したがって二乗作仏も定まらず、空仮中の三諦もばらばらで融通せず、理論的にも完璧とはいえない。ところが法蔵・澄観はひそかに法華経の一念三千の法門を自宗に取り入れ、華厳経第一、法華経第二、涅槃経第三と立て、仏の真意を隠蔽したが、結局、華厳経のなかには一念三千の法門は説いていないので、かえって教義の貧しさを露顕する結果となった。

観心本尊抄（二四六ページ）　華厳経・大日経等は一往之を見るに別円四蔵等に似たれども再往之を勘うれば蔵通二教に同じて未だ別円にも及ばず本有の三因之れ無し何を以てか仏の種子を定めん。

開目抄上（一九〇ページ）　華厳宗は澄観が時・華厳経の心如工画師の文に天台の一念三千の法門を偸み入れたり、人これをしらず。

【天台宗の教義】

（発生）天台大師（西紀五三八～五九七年）は中国の陳朝の天嘉元年、二十三歳の時、光州の大蘇山で慧思（南岳大師）に師事し、四安楽行を授けられ法華三昧を行じた。大建七年、三十八歳の時、天台山にはいり修

行すること十数年、国王の詔によって金陵（南京）へ帰り、「大智度論」「仁王経」を講義した。その後五十歳の時「法華文句」、五十六歳で「法華玄義」、翌年「摩訶止観」を述べて天台の三大部を完成させ、その間、南三北七の誤った教義を破折した。

天台の正法は第四祖章安大師（西紀五六一～六三二年）によって伝承され、中興の祖と仰がれた第九祖妙楽（西紀七一一～七八二年）により、大いに興隆した。

わが国の伝教大師（西紀七六七～八二二年）は延暦二十三年に唐へ渡り、妙楽の弟子・行満座主および道邃和尚によって天台の教えを伝授付嘱され、帰国後、比叡山に一乗止観院（いまの根本中堂）を建立し、宮中において南都六宗と法論を行ない、三乗を破して法華一乗の義を顕揚した。次いで義真（西紀七八一～八三三年）は、勅命によって迹門の円頓戒壇を叡山に建立した。

（教義） 法華経を正依の経とし、涅槃経、華厳経をはじめ、諸大乗経に説かれている円文をもって傍依の経とする。教相・観心の二門をもって綱要とし、教相に五時八教を立て、観心には三諦円融の理を唱え、摩訶止観で説いたところの一念三千、一心三観の理を証することによって即身成仏を期す。比叡山の根本中堂の本尊は薬師如来である。

（破折） 観心本尊得意抄（九七二ページ）　叡山天台宗の過時の迹を破し候なり、設い天台伝教の如く法のままありとも今末法に至ては去年の暦の如し何に況や慈覚自り已来大小権実に迷いて大謗法に同じきをや、然る間・像法の時の利益も之無し増して末法に於けるをや。

右の日蓮大聖人の御金言のように、像法の衆生を救った天台・伝教大師の教えのとおり修行したところで、

いま末法では功徳がない。まして慈覚以後の比叡山は真言の誤った法をまじえて天台真言宗となってしまい、先師の教えに反したのであるから、天台宗の教えを末法において実践しても功徳がないのは当然である。

【三惑】

三惑とは見思惑、塵沙惑、無明惑のこと。開目抄上（一八八ページ）に「元品の無明の根本猶を・かたぶけ給へり況や見思枝葉の麤惑をや」と三惑の名をあげられている。釈迦仏法においては、苦しみの原因は煩悩にあるゆえに、煩悩を完全に滅すれば一切の苦悩は消滅し、ただちに成仏の境地を得ることができると説いている。この煩悩の数は八万四千あるが、性質のうえから大別すると界内見思の惑、界外化導障塵沙の惑、中道障無明の惑という三惑に分かれる。（一代聖教大意三九三ページ）

第一に見思の惑とは三界六道の苦果を招く惑であり、さらに分けて見惑と思惑とする。見惑は事物の道理に迷う惑で、また十使があり、五利使（身見・辺見・邪見・見取見・戒禁取見）と五鈍使（貪・瞋・癡・慢・疑）で、さらに三界の四諦にあてて八十八使となる。思惑は倶生惑といって、生まれると同時についてくる煩悩、欲界に貪・瞋・癡・慢、色界に貪・瞋・慢、無色界に貪・癡・慢とあてて八十一品とする。

第二に塵沙の惑とは、二乗や菩薩が修行の過程で、小果に執著し、空理に執著し、あるいは化導の障りとなる等の惑で、その数が無量のところから塵沙惑と呼び、大乗の大菩薩だけがよくこの惑を断破することがで

きる。

第三に無明惑とは中道法性を障える一切の生死煩悩の根本であり、別教には十二品・円教には四十二品を立てている。四十二のうち最後の無明惑を元品の無明といい、これを断じ尽くせば仏になれる。

以上の三惑は釈迦仏法において浅きより深きにいたる立て分けであるが、末法の今日においては根本の惑はただ一つである。すなわち三大秘法の大御本尊を信じない者が元品の無明惑であり、信じ奉るときには無量の惑がたちまち断破して、煩悩即菩提・生死即涅槃と開覚するのである。

御義口伝上（七五一ページ）元品の無明を対治する利剣は信の一字なり無疑曰信の釈之を思ふ可し。

御義口伝上（七二五ページ）此の信の字元品の無明を切る利剣なり其の故は信は無疑曰信とて疑惑を断破する利剣なり。

治病大小権実違目（九九七ページ）法華宗の心は一念三千・性悪性善・妙覚の位に猶備われり元品の法性は梵天・帝釈等と顕われ元品の無明は第六天の魔王と顕われたり。

右の御金言のように、われわれは信心修行の過程にあって、心していくべきは元品の無明、第六天の魔王との戦いである。

【空仮中の三諦】

三諦の諦とは、審諦すなわち「つまびらか」または「あきらか」という意味で、十分に実相を見ることであ

る。仏の悟りの真実の理をいう。仮とは一切の万法が、おのおのが仮に因縁によって和合している皮相の面のみをいう。たとえば、咲いている花の姿のみを見ればこれは仮である。いつ散ってしまうかわからない、仮和合の状態である。空とは万法の一切の性分のことで、有とも無とも固定できない。有無の二道以外の冥伏された状態、しかも一刹那をとらえれば、このどちらかに固定している不思議な実在である。花が芽ぐみ、色とりどりの花を咲かせるその性分、また大宇宙の運行等がこれである。この二面を備えて、しかも動かすことのできない厳然たる本質、これが中諦である。花が枯れても咲いても、その草木自体の本質には変わりはないのである。この三が即十如実相であり、法・報・応の三身である。図示すれば、

相――応身如来――仮諦
性――報身如来――空諦
体――法身如来――中道

さらに、日蓮大聖人の御書によって解説することとする。

一念三千法門（四一二ページ）

されば当宗には天台の所釈の如く三遍読に功徳まさる、第一に是相如と相性体力以下の十を如と云ふ如と云うは空の義なるが故に十法界・皆空諦なり是を読み観ずる時は我が身即・報身如来なり八万四千又は般若とも申す、第二に如是相・是れ我が身の色形顕れたる相なり是れ皆仮なり相性体力以下の十なれば十法界・皆仮諦と申して仮の義なり是を読み観ずる時は我が身即・応身如来なり又は解脱とも申す、第三に相如是と云うは中道と申して仏の法身の形なり是を読み観ずる時は我が身即法身如来なり又は中道とも法性とも涅槃と

も寂滅とも申す、此の三を法報応の三身とも空仮中の三諦とも法身・般若・解脱の三徳とも申す此の三身如来全く外になし我が身即三徳究竟の体にて三身即一身の本覚の仏なり、是をしるを如来とも聖人とも悟とも云う知らざるを凡夫とも衆生とも迷とも申す。

さらに同じく一念三千法門（四一六ページ）

観念せずと雖も始に申しつるごとく所謂諸法如是相如云云と読む時は如は空の義なれば我が身の先業にうくる所の相性体力・其の具する所の八十八使の見惑・八十一品の思惑・其の空は報身如来なり、所謂諸法如是相云云とよめば是れ仮の義なれば我が此の身先業に依って受けたる相性体力云云其の具したる塵沙の惑悉く即身応身如来なり、所謂諸法如是と読む時は是れ中道の義に順じて業に依って受くる所の相性等云云、其に随いたる無明皆退いて即身法身の如来と心を開く、此の十如是・三転によまるる事・三身即一身・一身即三身の義なり三に分るれども一なり一に定まれども三なり。

以上の御文にあるように、日蓮正宗においては、修行に正行と助行があり、正行には題目、助行に方便、寿量の読誦を行なうが、方便品の十如是を三回くり返して読むことは、あくまでも、空・仮・中の三諦に読むことにより、一切を三身如来と観ずるためである。一心三観は、天台が立てたのであるが、日蓮大聖人の仏法よりいうならば、一心とは、大御本尊を信ずる一念の心であり、この信の一念に三諦を成ずることができるのである。

十如是のうちの三如是（相性体）が、三諦または三身如来であり、終わりの七如是は、三如是を本としていて十如是となるのである。したがって十如是も、あくまでも三身如来のうえから論じられるものである。こ

のことについての日蓮大聖人の御文を次にあげてみることにする。

十如是事（四一〇ページ）

初めに如是相とは我が身の色形に顕れたる相を云うなり是を応身如来とも又は解脱とも又は仮諦とも云うなり、次に如是性とは我が心性を云うなり是を報身如来とも又は般若とも又は空諦とも云うなり、三に如是体とは我が此の身体なり是を法身如来とも又は中道とも法性とも寂滅とも云うなり、されば此の三如是を三身如来とは云うなり此の三如是が三身如来にておはしましけるを・よそに思ひへだてつるがはや我が身の上にてありけるなり、かく知りぬるを法華経をさとれる人とは申すなり此の三如是を本として是よりのこりの七つの如是はいでて十如是とは成りたるなり。

以上の関係を、いま一度わかりやすくするために表にしてみると次のようになる。

三如是	三諦	三身	三徳	三転読誦
如是相	仮諦	応身	解脱	如是相
如是性	空諦	報身	般若	是相如
如是体	中道	法身	法身	相如是

また、一念三千を三諦よりみるならば、百界は仮諦であり千如が空諦、三千世間が中道となり、一念三千と法門は多いが、所詮は、三諦であり、三身如来を説いているのである。この三身如来こそ、別していうならば

久遠元初の自受用身たる日蓮大聖人である。そして弘安二年十月十二日ご建立の大御本尊こそが、一念三千の当体なのである。ゆえに、この御本尊を信じて題目を唱えることにより、三身即一の仏と成り、幸福境涯に到達することができるのである。

一念三千理事（四〇八㌻）弘の五に云く「一念の心に於て十界に約せざれば事を収むること偏からず三諦に約せざれば理を摂ること周からず十如を語らざれば因果備わらず三世間無んば依正尽きず」文。

これは、天台が理観の一念三千を説く理由であるが、末法の事の一念三千においても、一念に信心がなければ、仏界を欠いて十界を成ぜず、したがって「事を収むること偏からず」――その人生は、この宇宙の法則、妙法のリズムに合わない生活をしていくことになる。「三諦に約せざれば理を摂ること周からず」――信心なくしては、法界の理、しかもいちばん根本の妙理が一身にあらわれないから、あらゆる願望も叶わず、むなしく人生の苦海に沈んで出る時がなくなることになる。信心こそ、人生の根本であり、誤れる思想、宗教のとりことなること以上に恐ろしいことは、この世にないのである。

一念三千法門（四一三㌻）にいわく、

十界の衆生・各互に十界を具足す合すれば百界なり百界に各各十如を具すれば千如なり、此の千如是に衆生世間・国土世間・五陰世間を具すれば三千なり、百界と顕れたる色相は皆総て仮の義なれば仮諦の一なり千如は総て空の義なれば空諦の一なり三千世間は総じて法身の義なれば中道の一なり、法門多しと雖も但三諦なり此の三諦を三身如来とも三徳究竟とも申すなり始の三如是は本覚の如来なり、終の七如是と一体にして無二無別なれば本末究竟等とは申すなり、本と申すは仏性・末と申すは未顕の仏・九界の名なり究竟等と

申すは妙覚究竟の如来と理即の凡夫なる我等と差別無きを究竟等とも平等大慧の法華経とも申すなり、始の三如是は本覚の如来なり本覚の如来を悟り出し給へる妙覚の仏なれば我等は妙覚の父母なり仏は我等が所生の子なり。

十界に十界を具して運動しているのが人生であり、社会である。しかも、当面する人生社会は皆わが一念の業によって決まっているので、誕生から息を引き取るまで、これ以外に人生はありえない。この実相は、科学がどう発達して、宇宙旅行が始まろうとも、世の中が資本主義から社会主義化、共産化しようとも、どんな学問が、どんな学説を立てて人生を説明しようとも、永遠に変わることのない実相である。しかも、その奥、内面においては、十如の因果をそなえているのである。ゆえに仏と仏のみが究尽あそばされた実相は、衆生の迷妄とは大いに異なるといわれるのである。この悟りこそ仮諦である。

この仮の相である百界の世界を、目に見えない性分まで深く観察していけば、十如是の整然たる因果があることが明らかになる。この十如是の文こそ、略開三顕一の文であり、一念三千の法門の出処である。百界は、無軌道に起滅しているのではなく、十界のいずれにせよ、十種の生命の実相に区分してみることができる。この十種の生命観が、すなわち十如であり、妙法の法理からすれば千如の因果からはみ出すような現象は、なに一つとしてありえない。ことごとく、整然たる妙法そのものの体内の運行であり、さればこそ、法界の一切は、妙法蓮華、当体蓮華そのものであると示されるのである。ただし、真実の当体蓮華をあらわすことは信行を励む者のなかのことであり、他は、理即の位、すなわち理論上においてそうなのである。この十如・千如の因果の悟りが空諦である。

この百界千如も、一念の所有者である個人の五陰と、その統一体である衆生と、その舞台である国土と、この三世間を問題にしなかったならば、空理・空論に終わる以外にない。三世間がなければ依正は尽きないのである。それによって三千世間を成じ、その三千は即一念であり、その一念は即三千であり、すなわち、それによって完全なる法身が得られるのであるから、これが中道実相である。

ここにおいて、法界の生命の法理が、のこらず摂し尽くされるゆえに「三諦に約せざれば理を摂ること周からず」といわれるのである。

釈尊の説法は五十年、前四十二年は未顕真実の化他の教え、法華八か年は皆是真実の自行の教えである。説法の期間は長く、法門は多いが、すべては三諦を説いたにすぎない。総じてあらゆる仏の説はしめくくっていえば三諦の法門である。この本意を知らずして部分によって宗を立てるゆえに、各宗・各派は、教主の本意に背いてしまうのである。

三世諸仏総勘文教相廃立（五七三ページ）にいわく、

頓と漸と円とは三教なり是れ一代聖教の総の三諦なり頓・漸の二は四十二年の説なり円教の一は八箇年の説なり合して五十年なり此の外に法無し何に由ってか之に迷わん……総の三諦とは譬えば珠と光と宝との如し此の三徳有るに由って如意宝珠と云う故に総の三諦に譬う若し亦珠の三徳を別別に取り放さば何の用にも叶う可からず隔別の方便教の宗宗も亦是くの如し珠をば法身に譬え光をば報身に譬え宝をば応身に譬う此の総の三徳を分別して宗を立つるを不足と嫌うなり之を丸じて一と為すを総の三諦と云う、此の総の三諦は三身即一の本覚の如来なり又寂光をば鏡に譬え同居と方便と実報の三土をば鏡に遷る像に譬う四土も一土なり三

身も一仏なり今は此の三身と四土と和合して仏の一体の徳なるを寂光の仏と云う寂光の仏を以て円教の仏と為し円教の仏を以て寤の実仏と為す余の三土の仏は夢中の権仏なり、此れは三世の諸仏の只同じ語に勘文し給える総の教相なれば人の語も入らず会釈も有らず若し之に違わば三世の諸仏に背き奉る大罪の人なり天魔外道なり永く仏法に背くが故に之を秘蔵して他人に見せざれ。

さらに同じく三世諸仏総勘文教相廃立（五七四ページ）にいわく、

三世の諸仏は此れを一大事の因縁と思食して世間に出現し給えり一とは中道なり法華なり大とは空諦なり華厳なり事とは仮諦なり阿含・方等・般若なり已上一代の総の三諦なり、之を悟り知る時仏果を成ずるが故に出世の本懐成仏の直道なり因とは一切衆生の身中に総の三諦有って常住不変なり此れを総じて因と云うなり縁とは三因仏性は有りと雖も善知識の縁に値わざれば悟らず知らず顕れず善知識の縁に値えば必ず顕るるが故に縁と云うなり、然るに今此の一と大と事と因と縁との五事和合して値い難き善知識の縁に値いて五仏性を顕さんこと何の滞りか有らんや。

以上に明らかなとおり、三世の諸仏の意図は、総の三諦を説き、衆生にこれを悟らしめんがために出世されるのである。

釈尊の化導の次第は、五時の説法中、阿含より般若までは仮諦を説き、華厳において空諦を説き、法華において中道を説き、一代説法をしめくくって、総の三諦を完成したのである。日蓮大聖人は、久遠元初の自受用報身如来として、文底下種の仏法を、一幅の大御本尊として顕わされ本未有善のわれらに賜いて、「三世の諸仏と一心と和合して妙法蓮華経を修行し障り無く開悟す可し」（三世諸仏総勘文教相廃立五七五ページ）と申しておられるのである。

当体義抄（五一二ページ）にいわく、

所詮妙法蓮華の当体とは法華経を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり、正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は煩悩・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三観・三諦・即一心に顕われ其の人の所住の処は常寂光土なり、能居所居・身土・色心・倶体倶用・無作三身の本門寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等の中の事なり是れ即ち法華の当体・自在神力の顕わす所の功能なり敢て之を疑う可からず。

この御文について日寛上人は次のように仰せである。当体義抄文段（富要四巻三九六ページ）

三観三諦即一心に顕れの文。三諦は是れ境、三観は是れ智、故に知んぬ但法華経を信じて南無妙法蓮華経と唱うれば、即本地難思の境智の妙法を即我れ等が一心に悟り顕わし、本門寿量の当体の蓮華仏と顕わるるなり、是れを本覚無作の一心三観と名づくるなり、修禅寺決十八に云く、本門実証の時は無思無念にして誰れ造作すること無し故に無作と云うなり云云。

ゆえに御本尊を信ずる者は一心三観の観念観法を要せずして、信心によってただちに大御本尊の偉大なる対境のなかへはいりうるのである。

ちなみに、一心三観の法門は、南岳大師が、天台大師に伝え、天台はこれによって理の一念三千の法門を完成した。出処は前にも述べたとおり略開三の十如実相の文である。

再往これをみれば、三諦の法門は名目は台家より出ているが、実義は文底下種の大法より生じているのである。

【四諦】

諦は真実不虚の義で「仏智をもってあきらめた誤りなきもの」という意味で、それが四あるから四諦という。すなわち苦諦（世間の果報）、集諦（世間の苦果の因縁）、滅諦（出世間の悟り）、道諦（悟りを得るの道）、以上の四であるが、これを平易にいえば、この世の中は苦悩の集積であり、しかも、それを滅して涅槃の境涯にいたる道を説き示すという意味である。小乗の四諦を例にとると、苦諦は三界六道の生死、集諦は三界に生まれてくる原因たる見惑・思惑の煩悩、滅諦は前の苦集を滅した涅槃の境涯、道諦は滅諦にはいるべき修行法となる。

天台は玄義に次の四種の四諦を説いている。すなわち蔵・通・別・円のおのおのの四諦である。

生滅の四諦	蔵教	無量の四諦	別教
無生の四諦	通教	無作の四諦	円教

【十二因縁】

三界における迷いの因果を十二に分けたものである。（一念三千理事四〇六ページ）

十二因縁とは、一に無明で、過去世の無始以来もっていた煩悩。二に行で、過去世の善悪の行業。三に識

で、母の胎内にはいる五陰（色・受・想・行・識）。四に名色で、身心が胎内で発育しはじめるが、いまだ四根（眼・耳・鼻・舌）のない状態。五に六処（六入）で、六根を具足して胎内から生まれ出ようとするをいう。六に触で、幼児の間は苦楽の弁別がないまま物に触れているをいう。七に受で、六、七歳以後、苦楽等を識別して受けるをいう。八に愛で、十四、五歳以後、事物に対して、あるいは異性に対して生ずる愛欲。九に取で、成人して事物を貪り欲するをいう。十に有で、現世の因により来世の果を定めるをいう。十一に生で、来世の生を受け母の胎内にはいるをいう。十二に老死で、来世に老い死するをいう。

これを過去・現在・未来の三世に配当すると、無明と行とは過去の因、識と名色と六処と触と受とは現在の果、愛と取と有とは現在の三因なり、生と老死は未来の両果にあたる。すなわち識等の現在の五果は過去の無明と行との二因が元となり、生老死の未来の果は愛取有の現在の三因によるのである。このように、この十二の因縁が連鎖のように連なって、あるいは生まれ、あるいは死に、たえず六道の苦界を流転するのである。これがいわゆる「六道輪廻」である。

流転の十二因縁とは「無明は行に縁たり、行は識に縁たり……」等のようにして生死の苦界に流転していく姿である。

還滅の十二因縁とは「無明滅すれば則ち行滅す、行滅すれば則ち識滅す……」等のように根本の無明を打ち破って煩悩を断じていく法である。

なお「私に云く中有の人には十二因縁具に之無し又天上にも具には之無く又無色界にも具には之無し」（一念三千理事四〇七ページ）と。

【六波羅蜜】

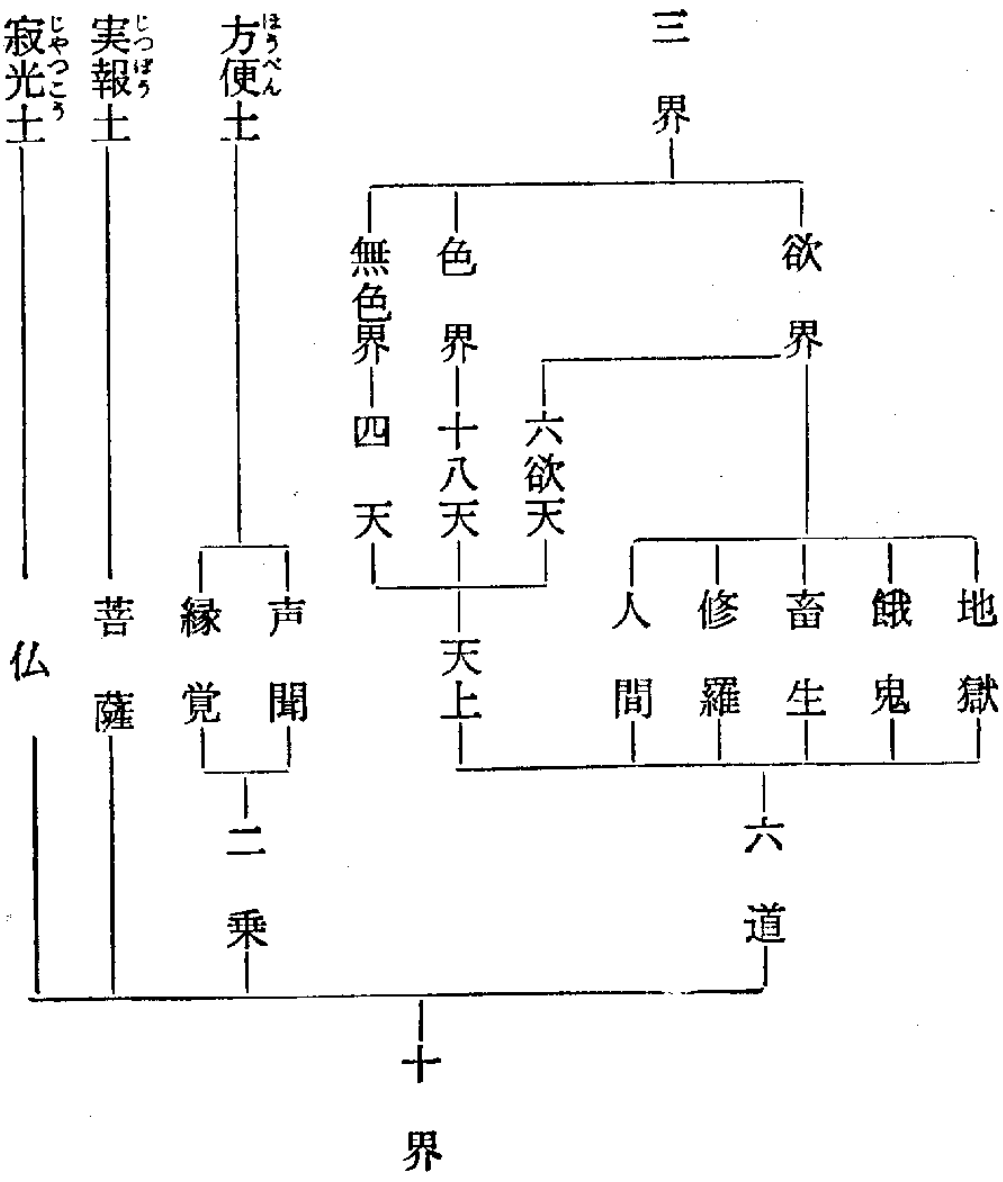
または六度ともいい「彼岸にいたる」の意。布施（檀）・持戒（尸羅）・忍辱（羼提）・精進（毘梨耶）・禅・智慧（般若）の六行であり、その行は万差であるから六度万行という。菩薩等がこの六法を修して生死の此岸よりよく涅槃の彼岸にいたる。主として通教・別教における教え。

爾前経においては菩薩の歴劫修行を説いてきたが、無量義経にいたって「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も六波羅蜜自然に在前す」と説いて妙法の功徳をたたえ、即身成仏を説いている。しかし末法ご出現の三大秘法の大御本尊こそ、真に「六波羅蜜自然在前」の大功徳があらせられ、われわれは、この御本尊を受持し奉るときに、一切の因果の功徳を身に体することができるのである。（観心本尊抄二四六ページ）

【三界】

悪い思想のために迷いの煩悩に禍いされて、いつまでも六道輪廻を繰り返している三種の境界（欲界、色界、無色界）のことである。

欲界とは、下は地獄界から上は天上界の六欲天までのすべてをいい、食欲、性欲などの存在する境涯、すなわち欲望の世界である。



色界とは、欲界の外の浄妙の色法、すなわち物質だけが存在する天上界の一部。

無色界というのは物質のない精神の世界で最上の天上界をさす。

欲望の世界でもそれぞれの境涯によってその住所が異なり「地獄は地の下一千由旬以下のところにあり、餓

鬼は地の下五百由旬のところ、畜生は水陸空に住し、修羅は海のほとり、海の底に住し、人は四大州に住する。また天については、四天王の住所は須弥山の中腹、由乾陀山にある。この山の四つの峰に四天王が住んでいる。東は持国天、南は増長天、西は広目天、北は多聞天である。忉利天は須弥山の頂にあって三十三天に分かれ、帝釈天は喜見城にいて他の三十二天を統領している。夜摩天以上は、さらにその上にあり、空中にあるので、先の地居天に対し空居天と名づける。そして色天、無色天はさらにその上にある」と説かれている。

また六道以外の四聖の住所については、二乗は三界の外にある方便土に、菩薩は菩薩行の果報によって実報土という黄金世界に、仏は清浄な楽土たる寂光土に住するとも説かれている。

しかし日蓮大聖人は十字御書（一四九一ページ）に「抑地獄と仏とはいづれの所に候ぞとたづね候へば・或は地の下と申す経文もあり・或は西方等と申す経も候、しかれども委細にたづね候へば我等が五尺の身の内に候とみへて候」と仰せである。

戸田前会長は「仏界というと、仏の住む清浄な世界が、宇宙のどこかに固定しているように考えられる。また菩薩界といえば、観音菩薩や弥勒菩薩等の、絵で表現されているような生活が、宇宙のどこかにあるように考えられる。また地獄界といえば、鬼の住む世界であって、そこで悪いことをした人が、盛んにいじめられている特殊な世界があると考えられる。しかし、これらの考え方はぜんぶ誤りである。ただそういう生命を知らしめんがための譬えとして、仏典の中に表現されているが、それは権大乗以下の教典の説明法であって、決して実在するのではないのである」と述べている。しかして、三界六道も、方便土・実報土・寂光土もすべて、われわれの生命・生活のなかにあることを知るのである。

【八相作仏】

仏が応身または化身を現じて、作仏（または成道）を中心とする八種の相を示現して説法教化することをいう。八相とは下天、託胎、出胎、出家、降魔、成道、転法輪、入涅槃をいう。ただし、別教の初地、円教の初住の位以上の菩薩は部分的に八相成道を示現することがある。

下天とは詳しくは生天下天という。一たび兜率天の内院に生じ八相成道を示すべき時機の到来を待ち、いよいよ時機が熟したのを察して、人界に下り生ずることをいう。

託胎とは凡夫の入胎の時のような倒心（父母に対して愛心または瞋心を起こすことなどをいう）なく、入胎、出胎ともに過去に積み重ねた功徳によって、正しい智慧を失わずに仏母の胎に託することをいう。

出胎とは、母后の右脇より生まれ、七歩歩いて「天上天下唯我独尊三界皆苦我当度之」と述べたことをいう。

出家とは、世の無常を感じ、これを救うべく正覚を得るために出家修行することをいう。

降魔とは、仏道修行がすでに終わり、まさに無上道を成ぜんとするとき、魔王が障礙してこれを阻もうとするが、菩薩の心は金剛のように、清浄の智慧力をもって障魔を破ってこれを降伏することをいう。

成道とは、魔すでに散じて仏道を成就し、三十二相八十種好を具足した微妙法身の仏如来となること。

転法輪とは、仏の説法をいう。

入涅槃とは、化導を終わって涅槃に入り、生身の化をやめて、後に経教、あるいは舎利を留めて世を利益す

ることをいう。

大小権実等の経教の差により、八相にも多少の差異がある。しかし日蓮大聖人のお立ち場からは次のように述べられている。

上野殿後家尼御返事（一五〇六ページ）　八相も生死の二字をいでず、斯悟かくさとるを法華経の行者の即身成仏と申すなり。

【三十二相】

衆生の機根に応じて出現する仏が具えるべき三十二の特別の相。仏がこの三十二相を現わして、見る者をして愛好尊敬せしめ、それによって仏が人中の天尊であり、衆聖の主であることを知らしめるためのもので、八十種好と一緒にして仏の相好という。

ただし三十二相は総であり、八十種好は別である。三十二相も八十種好がないと円満ではない。すなわち輪王、帝釈、梵天も三十二相をそなえているが八十種好がないために微妙ではない。

いま三十二相を列挙すれば左のようになる。（多くの説があるなかの一つ）

一・足下安平立相、二・足下千輻輪相、三・手足長指相、四・足跟広平相、五・手足指縵網相、六・手足柔軟相、七・足趺高満相、八・伊泥延腨相、九・正立手摩膝相、十・陰蔵相、十一・身広長等相、十二・毛上向相、十三・一孔一毛相、十四・真妙金色相、十五・面各丈光相、十六・細薄皮相、十七・七処隆満相、十八・

両腋下隆満相、十九・上身如師子相、二十・大直身相、二十一・肩円好相、二十二・四十歯相、二十三・歯斉相、二十四・四牙鮮白相、二十五・師子王頬相、二十六・常得上味相、二十七・広長舌相、二十八・梵音深遠相、二十九・真青眼相、三十・牛眼睫相、三十一・頂上肉髻相、三十二・眉間白毫相。

又心法かけたり……木画の二像の前に経を置けば三十二相具足するなり。

木絵二像開眼之事（四六八ページ）　仏滅後は木画の二像あり是れ三十一相にして梵音声かけたり故に仏に非ず

【阿羅漢】

小乗教を修行して獲得する最高の悟り、声聞の四種の聖果（須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢）の最高位。

この位は三界における見惑・思惑を断じ尽くして、涅槃真空の理を実証し、三界に再び生まれてくる素因をきれば無余涅槃にはいり、再び三界に生まれることはない。

また学ぶべきことがないゆえに無学と名づけ、見思を断尽するゆえに殺賊といい、極果に住して人天の供養に応ずる身なるがゆえに応供といい、この生が尽きると無余涅槃に入り、再び三界に生ずることがないゆえに不生と名づけられる。

しかし二乗ゆえに利己主義者である。

転じて指導者、仏法の修行者という意味に使われることもある。

【戒定慧】

戒とは戒学ともいい、戒律のことである。梵語では尸羅といい、禁戒すなわち「能く仏道を行ずる者の身口意の三業の悪を止め非を防ぐ」の義である。

依義判文抄（富要三巻一一三ページ）にいわく「凡そ戒は防止を以て義と為す、非を防ぐが故に淳なり、悪を止むるが故に善なり」と。

戒を堤に譬え、戒堤ともいわれる。三業の水をせき止めて、非悪にいたらしめるがゆえである。また賊を捕うるに譬える。悪業をほしいままにせぬゆえである。

定とは、定学ともいい、禅定のことである。静慮の義で、仏道を行ずる者に対して「能く慮を息め縁を静めて、心を散乱させぬようにして、法性、仏性を見得し、涅槃の道を悟らせる」ための修行である。

戒堤に対し、定水とも称せられ、この禅定のなかに正しき智慧を生じさせるのである。したがって、煩悩を断つ智慧を生じさせるがゆえに、煩悩を賊に譬え、煩悩の賊の動乱をおさえるを定というのである。

所詮は、戒がもととなって定を得る、定には定禅・無漏禅等がある。

慧とは、慧学ともいい、智慧のことである。仏道を修行する者に対して「能く煩悩惑障を断破して、真理の本性を顕発し、証得せしむる」の義である。

慧を天月に譬え、定水に映る池月ともいわれる。自他を照らして明了ならしめるがゆえである。智慧は煩悩

を断ち、惑障を破するがゆえに、賊を斬るに譬えられる。羅什三蔵のような人は、この慧に勝れた人といわれる。

小乗教の戒定慧について、一代聖教大意（三九〇ページ）にいわく「三蔵とは一には経蔵亦云定蔵二には律蔵亦云戒蔵三には論蔵亦云慧蔵なり但し経律論の定戒慧・戒定慧・慧定戒と云う事あるなり」と。

三蔵とは阿含経であり、小乗教である。三蔵教の経は定、律は戒、論は慧、戒定慧の三学は経律論となる。修行の次第に約せば戒定慧、もし説法の次第に約せば定戒慧、もし法門の次第に約せば慧定戒、あるいは慧戒定、あるいは慧戒定等円のように、始めも終わりもなく、三学は相互に相関連をもつものである。

一代聖教大意（三九〇ページ）に「戒蔵とは五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒なり・定蔵とは味禅定名・浄禅・無漏禅なり・慧蔵とは苦・空・無常・無我の智慧なり」と小乗教における戒定慧の三学を説かれている。

この戒定慧の三学の勝劣の関係については、

一代聖教大意（三九〇ページ）戒定慧の勝劣と云うは但上の戒計りを持つ者は三界の内の欲界の人天に生を受くる凡夫なり、但し上の定計りを修する人は戒を持たざれども定の力に依って上の戒を具するなり、此の定の内に味禅・浄禅は三界の内・色無色界へ生ず無漏禅は声聞・縁覚と成って見思を断じ尽し灰身滅智するなり、慧は又苦・空・無常・無我と我が色心を観ずれば上の戒・定を自然に具足して声聞・縁覚とも成るなり、故に戒より定は勝れ定より慧は勝れたり、而れども此の三蔵教の意は戒が本体にてあるなり、されば阿含経を総結する遺教経には戒を説けるなり。

所詮、阿含小乗教においては、戒定慧の三学を論ずるといえども、戒律が主体となっていることを明かされ

ている。

大乗教の戒定慧については、

一代聖教大意（三九三ページ）次に通教とは大乗の始なり又戒定慧の三学あり。

さらに、一代聖教大意（三九四ページ）にいわく、

次に別教又戒定慧の三学を談ず此の教は但菩薩計りにて声聞縁覚を雑えず、菩薩戒とは三聚浄戒なり五戒・八戒・十善戒・二百五十戒・五百戒・梵網の五十八の戒・瓔珞の十無尽戒・華厳の十戒・涅槃経の自行の五支戒・護佗の十戒・大論の十戒・是等は皆菩薩の三聚浄戒の内・摂律儀戒なり、摂善法戒とは八万四千の法門を摂す、饒益有情戒とは四弘誓願なり定とは観練熏修の四種の禅定なり慧とは心生十界の法門なり……此の教は大乗なり戒定慧を明す・戒は前の蔵通二教に似ず尽未来際の戒・金剛宝戒なり。

同じく、一代聖教大意（三九六ページ）次に円教とは此の円教に二有り一には爾前の円・二には法華・涅槃の円なり、爾前の円に五十二位・又戒定慧あり云云。

大乗戒には、諸大乗教を通じて三聚浄戒（摂律儀戒・摂衆生戒・不殺生戒）があり、また十重禁戒（不殺生戒・不偸盗戒・不邪淫戒・不妄語戒・不飲酒戒・不説四衆過罪戒・不自讃毀他戒・不慳貪戒・不瞋恚戒・不謗三宝戒）があると説かれている。

御義口伝上（七一九ページ）文句の四に云く「於戒有欠漏とは律義失有るをば欠と名け定共道共失あるをば漏と名く」と。

律儀戒とは、仏が大律条儀則を設けて抑止した戒であり、定共戒とは静慮戒とも釈し、三種戒の一つで、修

定の中に自然防非止悪の徳ある戒で、よく色無色に生まれる戒であり、道共戒とは無漏律儀とも釈し、三種戒の一つで、修行の結果、見惑断の無漏見道の智慧に自ら具する防非止悪の徳ある戒で、しぜんに備わる戒である。

以上述べた戒定慧の三学は、釈尊の脱益仏法における三学であって、末法下種仏法の戒定慧の三学とはならないのである。

四信五品抄（三四〇ページ）問うて云く末代初心の行者何物をか制止するや、答えて曰く檀戒等の五度を制止して一向に南無妙法蓮華経と称せしむるを一念信解初随喜の気分と為すなり是れ則ち此の経の本意なり。

末法の初心の者の仏道修行は布施、持戒等の五波羅蜜の修行をしてはならない、南無妙法蓮華経と唱えることが法華経の根本意であると。すなわち五戒、十戒、二百五十戒というような戒律、たとえば、生物を殺すな、ウソをつくなというような戒律をたもつことは、仏道修行の根本ではないのであって、これを止められているのである。

四信五品抄（三四一ページ）教大師末来を誡めて云く「末法の中に持戒の者有らば是れ怪異なり市に虎有るが如し此れ誰か信ず可き」云云。

伝教大師の言を引いて末法無戒をお説きになられているのである。

しかし、無戒だから題目さえ唱えていれば、盗み、殺生をしてもよいということではない。一切の戒律は皆、南無妙法蓮華経の修行に含まれるのである。これは題目を唱えて折伏を行じている者の日々の行動を振り返ってみるならば、自然に智慧、精進、忍辱、持戒、布施、禅定等の徳がそなわっていることは明らかであ

る。無量義経に「六波羅蜜自然在前」とあるのはこのことをいうのである。

しからば、日蓮大聖人の仏法における戒定慧の三学はどうであろうか。

御義口伝下（七六〇ページ）第廿五建立御本尊等の事。御義口伝に云く此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり、戒定慧の三学は寿量品の事の三大秘法是れなり。

いわゆる、戒定慧の三学は日蓮大聖人の仏法においては三大秘法となると説かれている。すなわち、釈尊の仏法においては戒定慧の三学をもってその特質となしたが、日蓮大聖人の仏法では定を御本尊としてご建立になり、戒は戒壇、慧は題目の三大秘法となるのである。

このことは、次の御抄を拝するならば明らかである。

上行所伝三大秘法口訣（富要一巻四五ページ）一には本門寿量の大戒、虚空不動戒を無作の円戒と名づけ本門寿量の大戒壇と名づく、二には本門寿量の本尊、虚空不動定、本門無作の大定を本門無作事の一念三千と名づく、三には本門寿量の妙法蓮華経、虚空不動慧を自受用本分の無作の円慧と名づく。

観心本尊抄（二四六ページ）釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う。

教行証御書（一二八二ページ）此の法華経の本門の肝心・妙法蓮華経は三世の諸仏の万行万善の功徳を集めて五字と為せり。

上行所伝三大秘法口訣裏書き（富要一巻四七ページ）受持即受戒なり、経に云く是を持戒と名づく。

末法のわれら衆生が持つべき唯一絶対の戒は、以上の文において明らかである。

しかるに、日蓮大聖人滅後、五老僧の内の一人である日昭は、叡山の戒壇を踏むことを主張し、他の四老僧と意見が二途に分かれ論争したのである。

五人所破抄（一六一五ページ）　又五人の立義既に二途に分れ戒門に於て持破を論ず云云。日興が云く、夫れ波羅提木叉の用否・行住四威儀の所作・平蹺の時機に随い持破に凡聖有り、爾前迹門の尸羅を論ずれば一向に制禁す可し、法華本門の大戒に於ては何ぞ又依用せざらんや。但し本門の戒躰・委細の経釈・面を以て決す可し云云。

所詮、末法におけるわれわれの戒は、次の御書を拝すれば明らかである。

大学三郎殿御書（一二〇五ページ）　設い世間の諸戒之を破る者なりとも堅く大小・権実等の経を弁えば世間の破戒は仏法の持戒なり。

ゆえに、大御本尊建立の後にあっては、堅く御本尊を受持し、誤った宗教や、その教義を破折するのが第一の持戒であり、世間の戒、釈迦仏法の戒等はまったく無用であるのみか、かえって害毒となるのである。

教行証御書（一二八二ページ）　此の五字の内に豈万戒の功徳を納めざらんや、但し此の具足の妙戒は一度持って後・行者破らんとすれど破れず是を金剛宝器戒とや申しけんなんど立つ可し、三世の諸仏は此の戒を持って法身・報身・応身なんど何れも無始無終の仏に成らせ給ふ。

日蓮大聖人の戒は、金剛宝器戒といい、釈迦仏法における戒律の修行ではなく、ひとたび御本尊を受持したら、たとえ退転したとしても御本尊とは離れられないという戒である。末法今時の三学は、金剛不動戒、金剛不動定、金剛不動慧である。

釈尊の法華経では、色香美味と説き、天台はこれを戒定慧に釈し、日蓮大聖人の仏法では三大秘法に釈する

のである。したがって、御本尊を拝んでいること自体が戒定慧の三学を修していることになる。

四信五品抄（三三九ページ）問う末法に入って初心の行者必ず円の三学を具するや不や、答えて曰く此の義大事たる故に経文を勘え出して貴辺に送付す、所謂五品の初二三品には仏正しく戒定の二法を制止して一向に慧の一分に限る慧又堪ざれば信を以て慧に代え・信の一字を詮と為す、不信は一闡提謗法の因・信は慧の因・名字即の位なり。

末法凡愚の衆生には、南無妙法蓮華経の境涯をすぐつかむほどの智慧がない。したがって御本尊を信ずる、その「信」の一字をもって智慧に代えるのだと仰せられている。

すなわち「以信代慧」の信心が根本であるとお説きになられている。

【五逆罪】

父を殺す、母を殺す、阿羅漢を殺す、仏身より血を出す、和合僧を破すの五罪を五逆罪といい、無間地獄に落ちるとされている。五無間業ともいう。（聖愚問答抄四七七ページ）

阿羅漢とは、声聞の四果のうち、最上の阿羅漢果を得たもので、「阿羅漢を殺す」とは現在では立派な指導者や仏法を修行する者を殺すこと。「仏身より血を出す」とは仏の身を傷つけることをいう。すなわち釈尊は九横の大難のなかに足の指より血を出されたことがあり、日蓮大聖人は小松原の法難において、ひたいに傷をうけられた。このような危害を加えた者が、この逆罪を犯したことになる。「和合僧を破す」とは仏道修行に

励んでいる僧侶の集団を破壊することである。この場合の僧とは僧侶に限定されたものではなく、正法修行者の団体をさす。現在、創価学会が信心修行に励んでいるなかにあって、その和合僧の組織を乱し、あるいは修行の妨げとなる者等は当然これにあたるのである。

以上が通途の五逆罪であって、経によっては別に立てているものもある。

【三災七難】

三災とは、大の三災、小の三災があり、大は壊劫の時に起きる火災・風災・水災である。小は穀貴・兵革・疫病の三つである。

穀貴　五穀の価が高いこと、すなわち物価騰貴。

兵革　兵は剣等の武器、革は甲冑の意味で、戦争のこと。

疫病　伝染病、流行病がはやること。肉体の病ばかりでなく精神分裂症、ノイローゼ、思想の混乱なども疫病の一つである。

七難は経文により多少の差異はあるが、いま薬師経の七難をあげれば、

人衆疾疫の難　伝染病、流行病等がはやり多くの人が死ぬ難。

他国侵逼の難　他国から侵略される難。

自界叛逆の難　仲間同士の争い、同士打ちをいう。

星宿変怪の難　星等の天体の運行に異変があったり、彗星が現われたりすること。
日月薄蝕の難　日蝕・月蝕をいう。
非時風雨の難　季節はずれの暴風や強風。
過時不雨の難　雨期にはいってもなお雨が降らない天候の異変。

国にこうした三災七難の競い起こる原因については次に明らかである。
仁王経　若し一切の聖人去らん時は七難必ず起らん。
大集経　若し国王有って無量世に於て施戒慧を修すとも我が法の滅せんを見て捨てて擁護せずんば是くの如く種ゆる所の無量の善根悉く滅失して其の国当に三の不祥の事有るべし、一には穀貴、二には兵革、三には疫病なり。

立正安国論（一七ページ）　世皆正に背き人悉く悪に帰す、故に善神は国を捨てて相去り聖人は所を辞して還りたまわず、是れを以て魔来り鬼来り災起り難起る言わずんばある可からず恐れずんばある可からず。

すなわち、一国の民衆が正法を信ぜず、誤れる法を信ずるゆえに三災七難が競い起こるのである。これらの災難から国を救う方途について、立正安国論にさらに次のように仰せられている。

如かず彼の万祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには。（二四ページ）
唯須く凶を捨てて善に帰し源を塞ぎ根を截べし。（二五ページ）
謗法の人を禁めて正道の侶を重んぜば国中安穏にして天下泰平ならん。（二七ページ）
早く天下の静謐を思わば須く国中の謗法を断つべし。（三〇ページ）

夫れ釈迦の以前仏教は其の罪を斬ると雖も能忍の以後経説は則ち其の施を止む、然れば則ち四海万邦一切の四衆其の悪に施さず皆此の善に帰せば何なる難か並び起り何なる災か競い来らん。（三〇ジー）

すなわち、広宣流布こそ三災七難を根本から止め、平和楽土建設の直道なのである。

現在では日蓮大聖人ご在世当時と比較して七難の出かたが逆次に出ている。（池田大作著「立正安国論講義」一〇三ジー参照のこと）

【五濁】

法華経方便品第二　舎利弗、諸仏は五濁の悪世に出でたもう。所謂劫濁、煩悩濁、衆生濁、見濁、命濁なり。

まず、劫濁とは時代の濁りである。飢饉・疫病・戦争等が起こって、時代そのものが乱れること。

時代によって、混乱した、濁りきった時代もあり、比較的平和な時代もある。時代の濁りといっても、実体というものはないが、他の四濁が激しく盛んであり、その濁りが、長くつづいている場合、劫濁という。劫とは長時という意味でこれは相対的なものである。

したがって、ある一年間の乱れを劫濁ともいえるし、五年、十年、また百年、二百年の乱れも劫濁といえる。

次に、衆生濁とは、社会全体の濁りであり、別に本体があるわけではない。

しかし、現在の社会をみたときに、いかに濁りきっているかがわかるのである。悪徳政治家たちは、既成の

権威にしがみつき、私利私欲にあけくれている。

こうした政治家を生むのも、結局、民衆の無気力、無知、そして長いものにまかれろ式の封建性が原因しているのである。

このような社会全体の濁りが衆生濁である。

以上の二つの濁りは、全体の濁りであり、総合的にみたうえでの濁りである。次にあげる煩悩濁、見濁、命濁は、いずれも個人個人についていえるものである。

煩悩濁は、五鈍使、すなわち、貪、瞋、癡、慢、疑という、むしろ本能的な迷いである。

自分の利益ばかりをむさぼるように求めて、他人をかえりみないのは「貪」である。

事態を冷静に判断できず、すぐに感情に走り、生活を破壊するのは「瞋」である。

目先のことのみにとらわれ、自分の一生を台無しにするのは「癡」である。

少々のことを鼻にかけ、正しいものを受け入れようとしないのは「慢」である。

なんでも疑いの目を向け自暴自棄になるのは「疑」である。

次に見濁とは、思想の濁りである。

先の五鈍使が生命それ自体にそなわった、いわば誰にでもある本能的な濁りであるのに対し、五利使という才智ある邪見、煩悩で、識者の思想的な迷いである。

次に、命濁とは、生命それ自体の濁りである。

すなわち、煩悩濁や見濁が原因で、生命それ自体が濁り、生命力が弱まり、意欲がなくなっていることをい

うのである。

御義口伝上(七一七ページ)　日蓮等の類いは此の五濁を離るるなり、我此土安穏なれば劫濁に非ず・実相無作の仏身なれば衆生濁に非ず・煩悩即菩提生死即涅槃の妙旨なれば煩悩濁に非ず・五百塵点劫より無始本有の身なれば命濁に非ざるなり、正直捨方便但説無上道の行者なれば見濁に非るなり、所詮南無妙法蓮華経を境として起る所の五濁なれば、日本国の一切衆生五濁の正意なり……法華経不信の者を以て五濁障重の者とす。

【劣応身・勝応身】

応身とは境(法身)智(報身)一如の身(これを真身という)より、衆生を救うために衆生の機根にしたがって応現する仏身をいう。

劣応身とは初地以前の凡夫二乗に対して応現する仏身、すなわち八相成道の仏身で、三身中の応身である。一丈六尺の仏身であり、老比丘の相をしている仏をいう。小乗三蔵教の仏で、四土のなかには凡聖同居土に住む。

勝応身とは、法報応の三身中の報身に自受用と他受用があり、その他受用の報身を応身と名づけ、劣応身に対して勝と名づける。

初地以上の菩薩に対して応現する仏身であり、大乗の初門たる通教の仏である。四土のなかには方便有余土に住んでいる。

【劫】

仏法上、時間を示す単位として「劫」が用いられる。劫の分類については、経論により多種多説であるが、大別して小劫・中劫・大劫の三種の劫があり、また中間劫に減劫・増劫・増減劫があり、倶舎論においては成・住・壊・空の四劫が説かれている。

また小・中・大劫といっても、同じ梵語を経論によって、あるときは小劫と訳し、あるときは中劫と訳すなどまちまちであるが、一般的には次のようである。

小劫とは住劫の初め、人寿無量歳より百年に一歳を減じつつ、ついに人寿十歳にいたる。これを第一減劫とする。次に人寿十歳より百年に一歳を増して人寿八万歳にいたる。また八万歳より百年に一歳を減じて人寿十歳にいたる。これを第二の増減劫とする。以下第十九にいたるまで、このように増減すること十八回、最後に人寿十歳より百年に一歳を増して無量歳にいたる、これを第二十の増劫とする。第一はただ一減、第二十はただ一増であるけれども、その時節の長さは各中間の一増減に等しい。この一増減の時節を一小劫と名づける。したがって一小劫は千六百万年より二千年を減じた数にあたる。（人寿八万歳より、百年に一歳を減じて人寿零歳にいたり、さらに零歳より百年に一歳を増して八万歳にいたるとすれば千六百万年となるが、実際には十歳以下にはならないで千六百万年より二千年を減じた長さが一小劫となる）

中劫とは、以上のように住劫の一減より中間十八の増減、第二十の一増にいたる、この二十増減の時節を合

わせて中劫とする。すなわち一中劫は二十小劫にあたる。（顕謗法抄四四七㌻参照）

大劫とは四中劫をいい、四中劫とは、成・住・壊・空をいう。一つの世界が成立するまでの期間を成劫、成立以後衆生の住んでいる期間を住劫、火災・風災・水災等の三災によって、それが壊れる期間を壊劫、消滅して空となる期間を空劫という。そして空劫が過ぎればまた成劫がはじまり、この成・住・壊・空の四劫が循環して尽きることがないと説かれている。

増、減、増減劫の三種の劫は、住劫二十小劫中の差別を示すもので、住劫のなかで、初めの第一劫は減劫、最後の第二十劫は増劫、中間の十八劫は増減劫になるのであり、合して二十増減して住劫を終わり壊劫にはいるのである。

このように住劫に二十小劫があると共に、壊劫、空劫、成劫にもおのおの二十小劫ある。ただしこの三劫には増減の別はない。前述のように、この成住壊空の四劫を総括して一大劫（四中劫）といい、これが一つの生命体の初めから終わるまでの時間である。

しかし末法において大御本尊を信ずる者は、未来永劫にいたるまで、飢饉・疫病・刀兵の三災や、住劫の終わりに起こる火・風・水の三災にもおびやかされることのない、また成住壊空の変化にも影響されない絶対の幸福をつかむことができることを、日蓮大聖人は次のように仰せられている。

観心本尊抄（二四七㌻）今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり此れ即ち己心の三千具足・三種の世間なり。

【十羅刹女】

十羅刹女は法華以前には悪鬼であったが、法華以後においては善鬼となり、法華経を護持する者、すなわち御本尊を受持する者を守護する。

法華経陀羅尼品第二十六　爾の時に羅刹女等有り、一を藍婆と名づけ、二を毗藍婆と名づけ、三を曲歯と名づけ、四を華歯と名づけ、五を黒歯と名づけ、六を多髪と名づけ、七を無厭足と名づけ、八を持瓔珞と名づけ、九を皐諦と名づけ、十を奪一切衆生精気と名づく。是の十羅刹女、鬼子母、並びに其の子、及び眷属と倶に仏所に詣でて、同声に仏に白して言さく、世尊、我等亦、法華経を読誦し受持せん者を擁護して、其の衰患を除かんと欲す。若し、法師の短を伺い求むる者有りとも、便を得ざらしめん。

この文の後に十九句の呪を説く。さらに「若し我が呪に順ぜずして、説法者を悩乱せば、頭破れて七分に作ること、阿梨樹の枝の如くならん」と説き、自らもまた法華の行者を擁護せんと誓う。仏これを印可し、特に皐諦女の名をあげ、法師の擁護を命じた。御書には次のようにある。

爾前二乗菩薩不作仏事（四二六ページ）　十羅刹女も仏道を悟り云云。

日女御前御返事（一二四六ページ）　十羅刹女と申すは十人の大鬼神女・四天下の一切の鬼神の母なり……此の十羅刹女は上品の鬼神として精気を食す疫病の大鬼神なり、鬼神に二あり・一には善鬼・二には悪鬼なり、善鬼は法華経の怨を食す・悪鬼は法華経の行者を食す。

経王殿御返事（一一二四ページ）　鬼子母神・十羅刹女・法華経の題目を持つものを守護すべしと見えたり……

十羅刹女の中にも皐諦女の守護ふかかるべきなり。

報恩抄（三二三ページ）　但一の冥加には景信と円智・実成とが・さきにゆきしこそ一のたすかりとは・をもへども彼等は法華経十羅刹女のせめを・かほりて・はやく失ぬ。

【声聞の十大弟子】

摩訶迦葉　摩訶とは大という意味で、尼倶利陀長者という大金持ちの子として生まれながら、一切の財産や煩悩を捨てて、乞食行などの難行苦行に徹して頭陀第一となる。仏滅後は付法蔵の第一として二十年の間、小乗教を弘めた。

舎利弗　舎利弗は梵語、身子と訳す。方便品の対告衆。仏の説法の真意をよく理解したので智慧第一といわれた。法華経譬喩品において華光如来の記別を与えられた。（開目抄上一九一ページ・二三二ページ）

大目犍連　目連ともいい神通第一とうたわれた。しかしその神通力で、餓鬼道に落ちた母親を救えなかったという話は有名。（盂蘭盆御書一四二七ページ）

摩訶迦旃延　論議第一といわれ、よく布教に努めた。

阿㝹楼駄　阿那律ともいわれ天眼第一、三千世界のすべてを見通す天眼通に秀でていた。誕生のとき、母の胎内からご飯のはいった鉢をもって出て、一生涯、衣食に恵まれたという。（時光御返事一五四九ページ）

富楼那　富楼那弥多羅尼子ともいう。説法第一といわれ、仏の教えをよくわきまえ、ひろく説法した。

須菩提　解空第一、思索にすぐれ、よく諸法の真理を悟ったといわれる。

阿難　阿難陀ともいう。釈尊の従弟で、仏に常随給仕して一代聖教すべてに通達して多聞第一といわれた。釈尊滅後は付法蔵の第二として活躍した。

羅睺羅　釈尊が出家する前の息子、密行第一といわれた。

優婆離　持戒第一といわれ、戒律を持つことに秀でていた。

【釈尊の九横の大難】

釈尊が在世中に受けた九つの大難である。御書に列挙された九難を解説する。

（一）孫陀梨の謗　釈尊が孫陀梨に謗られた。釈尊が過去世に浄眼といったとき、いまの孫陀梨である婬女鹿相を殺し、辟支仏にその罪を転嫁した因縁で謗じられるのであるという。

（二）金鉤またはバラモン城の嬈　釈尊が阿難を連れてバラモン城を乞食し、食物が得られずに空鉢であったとき、年老いた下婢が、供養する物がなくて、捨てようとしたくさい潘淀を供養した。バラモンがこの臭食の報いを謗った。

（三）阿耆多王の馬麦　バラモン種の豪族小王である阿耆多王が釈尊および五百の僧に来国を請い、王は遊楽にふけって供養を忘れ、一行を餓死せしめようとして九十日の間、馬に食わせる麦を与えた。

（四）瑠璃の殺釈　すなわち無量の釈子が波瑠璃王に殺されたこと。波瑠璃は仏在世の舎衛国の王であり、父の波斯匿王が欺かれて釈迦族の卑賤な婢と結婚したのをうらんで、即位の後、釈迦族を全滅させたという。しかし釈尊の予言のとおり、七日目に焼死して無間地獄に落ちたという。

（五）乞食空鉢　釈尊が阿難を連れバラモン城にはいろうとしたとき、王は民衆が釈尊に帰依するのをねたんで、布施し法を聴く者に罰金を課して制止したので、衆人は皆、耳を閉じてしまい、供養する者もなく、空鉢であったという。

（六）旃遮女の謗、または旃遮バラモン女が鉢を腹にふせし　バラモンの旃遮女が腹に鉢を入れて釈尊のところにきて、釈尊の子であると誹謗した。そのとき、帝釈がネズミに変化して、衣の裏の鉢をつないでいるヒモを嚙み切ったため、鉢が地に落ちたので衆人は皆歓喜したという。また旃遮女はこのため地が裂けて無間地獄に落ちたという。

（七）調達が山を推す、また提婆が大石をとばせし　提婆達多が釈尊を怨んで殺そうとし、耆闍崛山で岩石を持ちあげて釈迦の頭めがけてなげうった。山神金ぴらは釈迦を守るため手で石を受けとめたが、小片が散って釈尊の足の親指を破って血を出したという。

（八）寒風に衣を索む　冬至前後の八夜に寒風が吹きすさんで竹を破ったという。そのとき釈尊は三衣を索めて寒さを防いだという。

（九）阿闍世王の酔象を放ちし　阿闍世王が提婆達多にそそのかされ、父王を幽閉して新王となり、さらに釈尊を殺して提婆を立てようとし、悪象に酒を飲ませて放ち、釈尊を踏み殺そうとした。

第二編　法華経に関するもの

【法華経八巻二十八品】

法華経は八巻二十八品からなり、開経の無量義経、結経の仏説観普賢菩薩行法経各一巻を入れて十巻ともいう。その内容を巻別にあげれば、

無量義経（開経）＝徳行品第一、説法品第二、十功徳品第三

妙法蓮華経巻一＝序品第一、方便品第二

妙法蓮華経巻二＝譬喩品第三、信解品第四

妙法蓮華経巻三＝薬草喩品第五、授記品第六、化城喩品第七

妙法蓮華経巻四＝五百弟子受記品第八、授学無学人記品第九、法師品第十、見宝塔品第十一

妙法蓮華経巻五＝提婆達多品第十二、勧持品第十三、安楽行品第十四、従地涌出品第十五

妙法蓮華経巻六＝如来寿量品第十六、分別功徳品第十七、随喜功徳品第十八、法師功徳品第十九

妙法蓮華経巻七＝常不軽菩薩品第二十、如来神力品第二十一、嘱累品第二十二、薬王菩薩本事品第二十三、妙音菩薩品第二十四

妙法蓮華経巻八＝観世音菩薩普門品第二十五、陀羅尼品第二十六、妙荘厳王本事品第二十七、普賢菩薩勧発品第二十八

仏説観普賢菩薩行法経（結経）

次に品々の大意を、おおむね妙法蓮華経並開結（日蓮正宗第六十六世日達上人編）によって概略説明する。

序品第一

序品は、通じては法華経全体の序分であり、別しては迹門十四品の序分であるから、通序と別序とに分けることができる。

通序とは諸経に通じているところの序分のことで、必ず「如是我聞」の句が最初にあり、それから「一時」「仏」が「どこ」で「誰」と共にいたというふうに書かれるのである。

この序品の通序は、信・聞・時・主・処・衆の六成就からなり、別序はこの経にかぎる序分であって、集衆・現瑞・疑念・発問・答問の五序から成り立っている。

まず、現瑞序では、この土の六瑞（説法・入定・雨華・地動・衆喜・放光）を現じ、その放光瑞で、東方万八千土を照らすことによって、他の土の六瑞を現じて、仏の化導の甚深であることを示している。

そこで、現瑞を縁として、弥勒菩薩が大衆の代表としての問いを発し、それに文殊師利菩薩が惟忖（思考）して答えるのである。

その答中に、過去無量無辺不可思議阿僧祇劫という、久遠における日月燈明仏の説法化導を示して、いまの釈迦仏の現瑞の相が、燈明仏の現瑞と同じであることを説くのである。

この序品で、すでに本門の久遠実成の由来を、ひそかに説き示しているのである。

方便品第二

方便品は、十方仏土のなかには唯一仏乗の教法のみであることを説いたのである。

まず方便という語を、天台大師は三義に解釈している。

第一を法用方便という。衆生教化の方法として、衆生の機根に応じ、衆生の好むところに随って説法をし、

真実の門に誘引する用をなし、利益をなすことをいう。すなわち声聞乗の人には四諦の法を説き、縁覚乗の人には十二因縁の法を説き、菩薩乗の人には六度の法を説いたようなのは、教化の方法が人々の機根に相応しておのおの功用利益をしたから、これを方便説といい、一般に通ずる義である。

第二を能通方便といい、方便とは真実に対する語で真実に入る門との意である。法師品の「方便の門を開いて真実の相を示す」の文からとったのである。

これはなんのために方便の法を説くのかというと、別に真実の理があって、それへ入らせる門戸になるという方便の性質を示したものである。これも一般に通ずる義である。

以上の二つは、方便品に「正直に方便を捨てて、但無上道を説く」と説かれている方便の教えで、四十二年間に説かれた阿弥陀経、大日経、蘇悉地経等の権教で説かれているもので、現在では用いない。

第三を秘妙方便といい、爾前経において、三乗即一乗法なることを秘して明かさなかったのを秘方といい、その秘方をいま打ち明けて三乗即一乗法なりと顕わしたのが妙であり、妙を便と名づけるのである。秘方とは三乗法をいい、三乗法がすなわち一乗法であることを妙便というのである。これによって、この経が方便品と名づけられ、またこれが法華経に限る方便の義釈でもある。

また、秘とは仏と仏のみが知っていること、妙とは衆生の思議しがたい境涯をいう。末法の衆生は種々の悩みや、凡夫そのままの愚かな境涯に住んでいるが、その身そのままが久遠元初以来、御本仏日蓮大聖人の眷属であり、仏なのだと悟ることが、秘妙方便である。

そして、法用、能通の義による一乗法とは別の三乗法を方便という。

すなわち法華以前の方便は体外の方便といい、一乗法と同体の三乗法を体内の方便であるという。法華経の方便は、体内の方便というのである。

これまで、三乗法即一乗法であることを秘していたのを打ち明けて、三乗即一乗なりと顕わすのを、開三顕一とも開権顕実とも開顕とも開会ともいうのである。

この経の所詮を要約すると、教行人理の四一開会であって、

教に約すれば、三乗即一乗であり、

行に約すれば、汝等所行是菩薩道であり、

人に約すれば、二乗作仏であり、

理に約すれば、諸法実相四仏知見であり、

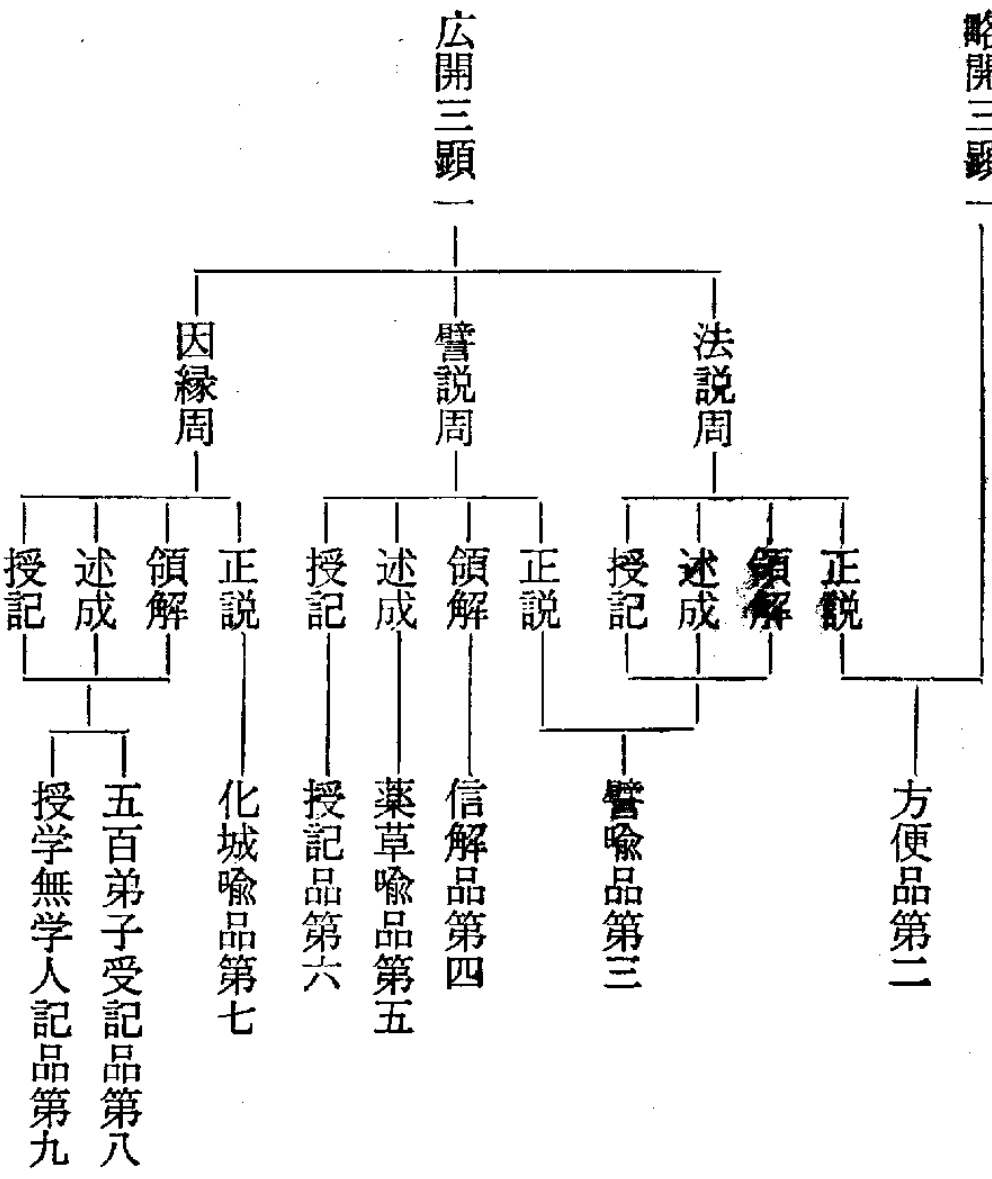
この四一について、顕一を説くのである。

そして、開三顕一については、まず略開三顕一と広開三顕一との二つに分けられ、略開三顕一は十如是の文であって、いわゆる一念三千の法門は、これから出ているのである。

釈尊は、五千の衆が礼仏而退の後、純有貞実の衆のみであるのを見て、「増上慢の人、退くも亦佳し」として広開三顕一を説かれ、三周の説法がある。方便品は、そのうち法説周の正説の段にあたる。

法華経迹門では、法説周、譬説周、因縁周の三周の声聞が成仏を許され、それぞれ正説、領解、述成、授記が説かれている。

三周の声聞に対する説法を図示すると次のようになる。



その化導の方法は五仏（十方諸仏、過去仏、未来仏、現在仏、釈迦仏）同道であることを示し、必ず三乗をもって衆生の機根を調熟し、最後に一乗の究竟法を説いて、仏の出世の功徳の終わりを示しているのである。

譬喩品は三周の説法のうち喩説周である。

譬喩品第三

迹門正宗分のうち、広開三顕一は、三周の説法で始終するのである。その法説周においての正

説は、方便品で説かれるが、この時、上根の舎利弗一人が、諸法実相の妙理を悟って、そして、三乗を開いて一乗を顕わすことが成仏の法であることを領解し、その舎利弗の領解に対して、釈尊が承認して、さらに相違のないことを述べ、そして舎利弗の劫・国・名号を説いて未来成仏の保証を与え、そこで一座の四衆八部が歓喜して、法説周の一段の法門は終わるのである。

そこで舎利弗は、他の声聞が未領解であるから、釈尊に向かって詳説を請い、爾時舎利弗白仏言世尊から始まって、釈尊は、三車火宅の譬喩を説かれるので、これが、この品の譬説周の正説段をなすのである。

この三車火宅の譬えによって、三車三乗の権を開し、一車一乗、すなわち大白牛車の実を顕わすのである。

なお、この品には「若し人信ぜずして、此の経を毀謗せば……其の人命終して阿鼻獄に入らん」と戒められ、憍慢、懈怠、計我、浅識、著欲、不解、不信、闇蔽、疑惑、誹謗、軽善、憎善、嫉善、恨善の十四誹謗が説かれている。

信解品第四

この品は、譬説周のなかの領解段であって、釈尊が前品で三車火宅の譬えをもって、開三顕一の旨を説かれたので、須菩提、迦旃延、迦葉、目連の四大声聞が、初めてその旨を領解し、長者窮子の譬えを説いて領解の旨を述べたのである。

長者窮子の譬えでは、巧みに種熟脱の三時を五時にわたって説いて領解のままを述べて説いている。

一には、父子相失は、大通智勝仏の時の下種から中間、退大取小を譬え、

二には、父子相見は、熟益、今番出世の仏による華厳の擬宜に譬え、

三には、父命追誘は、阿含、方等の誘引、弾呵を譬え、

四には、領知家業は、般若淘汰を譬え、
五には、正付家業は、正しく法華の開会、脱益を譬えたものであって、
そして、最後に、仏恩の広大甚深を賛嘆して終わるのである。

薬草喩品第五

前の信解品において、四大声聞が三車一乗の譬えを聞いて、三乗方便一乗真実の旨を知り、これを長者窮子の譬えをもって領解したのであるが、さらに一歩を進め、教は本来一相一味であるけれども、衆生の機根に随って、三乗五乗の別をなしていることを、十分に解していないので、釈尊は「一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木、各差別有るが如し」と三草二木の譬え（雲雨薬草の喩）を説いて、実相一味の法が、機によって三乗五乗と分かれることを示した。

すなわち、釈尊が、四大声聞の領解を述成したところであるから、所潤の薬草を取って薬草喩品と名づけられるのである。

五乗七方便は、共に差別の利益をこうむるものであるが、一地の所生、一雨の所潤であることを説いているのであるから、結局は差別の五乗七方便は、ただちに仏智の一仏性に開会せられて、無差別の仏海に帰入することを知らせるので、すべて仏の善巧方便であることを教えられているのである。

授記品第六

授は与える義、受は得くる義、記は事を記すということであって、すなわち成仏の事を記すので、仏意によれば授記、機情によれば受記で、いずれを書いてもさしつかえない。また、行因、得果、劫国、仏寿、正像、国浄の六事を分別するので、記別ともいう。

この品では、四大声聞の当来成仏の事を六事に分別するので、記別であり、また仏意にまかせて授記品とい

うのである。そして授記については、爾前経にも菩薩、善人、男、人天の授記はあるが、二乗、悪人、女人、畜生の授記は、法華経独特であるから、法華経にかぎり二乗作仏というのである。

この品で中根のための譬説周は終わり、最後の二頌半の偈頌に下根の声聞のために「宿世の因縁、吾れ今当に説くべし、汝等善く聴け」と宿世の因縁を説いて開悟せしめようと、次の化城喩品を説くことになるのである。

化城喩品第七

この品は、法華三周のなかの、第三因縁周の正説を説いたものである。

法説・譬説の二周ではまだ領解しない下根の声聞のために、久遠以来の師弟の宿世の因縁を説いて、ついに得道させるのである。

まず、前段に、三千塵点劫の久遠における大通智勝仏の出世成道を説き、十六王子の請いによって半満権実の法輪を転じ、ついに法華経を説いて出世の本懐を遂げて入定し、次に十六王子が法華経を覆講して大衆に結縁するのである。

次に後段では、この因縁を譬喩として説くために、化城の譬喩を説かれて、二乗の涅槃は、化城のようなもので真実ではなく、「宝処は近きに在り、此の城は実に非ず。我が化作ならくのみ」であると説き、「仏道は長遠なり。久しく勤苦を受けて、乃し成ずることを得べし」と説かれるのである。化城は三乗であり、宝処は一仏乗の譬えである。

五百弟子受記品第八

この品と次の授学無学人記品の二つは、因縁周の授記段である。

因縁周でも領解、述成の二段はあるが、前の譬説周の領解段(信解品)、述成段(薬草喩品)のように長くないので、これを授記中に摂したのである。

この品は、まず最初に、下根の声聞を代表して富楼那の黙然領解があり、釈尊は富楼那の過去の修行が満足したことを明かし、法明如来の記別を授け、次いで、千二百人にしだいに授記したが、別して阿若憍陳如、優楼頻嬴迦葉をはじめ莎伽陀（須利槃特）などの五百人に、普明如来の同一名号で同時に授記したのである。次に釈尊は、迦葉を通じて、この会にいない一切の声聞にも、授記を説かれた。授記を得た五百の声聞は、歓喜踊躍して貧人繋珠の譬え（衣裏珠の譬えともいう）を述べて、仏恩の深重を得解したのである。

授学無学人記品第九

この品もまた、下根の阿難、羅睺羅をはじめとして学無学の二千の授記を明かすのである。

学とは、まだ惑を断じ尽くさず、まさに真理を修学している者、すなわち四果の聖者のなかの前三果（預流、一来、不還の三果）の人をさす。無学とは、惑を断じ尽くして、このうえに学ぶ必要のない者、すなわち阿羅漢果の人のことである。

まず、阿難に山海慧自在通王仏、羅睺羅に蹈七宝華仏の記別を与え、さらに学無学二千人は同類同性の人々であるから、同一名号の宝相如来の記別を授けられたのである。

そこで、学無学二千人と称して別に一品を設けて、授学無学人記品としたのである。

法師品第十

この品から安楽行品までの五品は、迹門の流通分で、在世の人々のみでなく、来世の人々をも利益する説法である。

次の宝塔品と共に、釈尊みずから弘経の功徳深重を説いて、流通を勧められているのである。

特にこの品では、この経の弘通を勧導して末法の弘経の人法と、弘経の方軌を示されている。

法師とは、妙法を弘通する大師で、五種の人がよく妙法を弘通するのである。

五種とは受持、読、誦、解説、書写で、この五種をもって妙法蓮華経を弘通するのが五種法師であって、続いて華香、瓔珞、抹香、塗香、焼香、繒蓋、幢旛、衣服、伎楽、合掌の十種供養を合わせ説かれている。

そして「末法において、一人のためにも妙法蓮華経を説く者は、如来の使なり、如来の所遣として如来の事を行ずるなり」と示されている。

次いで所持の法を、法、人、処、因、果に約して歎美し、高原穿鑿の譬えを説かれ、弘経の方軌に、衣、座、室の三軌を「薬王、若し善男子、善女人有って、如来の滅後に、四衆の為に是の法華経を説かんと欲せば、云何が応に説くべき。是の善男子、善女人は、如来の室に入り、如来の衣を著、如来の座に坐して、爾して乃し四衆の為に広く斯の経を説くべし。如来の室とは一切衆生の中の大慈悲心是れなり。如来の衣とは柔和忍辱の心是なり。如来の座とは一切法空是れなり。是の中に安住して、然して後に、不懈怠の心を以って、諸の菩薩、及び四衆の為に、広く是の法華経を説くべし」と説かれている。

見宝塔品第十一

前品と同じく弘経の功徳深重を説いて流通を勧めるうち、七宝の塔が大地から涌出して虚空に住在するのを人々が見るから、見宝塔品と題するのである。

まず、宝塔の中から大音声があって、皆これ真実と称歎したのに、人々は驚き、大楽説菩薩は何の因縁によって「塔有り、涌出し、音声を発す」の三問をすれば、すなわち釈尊から三答があった。

続いて、十方分身を召し、三変土田のことがあって、二仏並座し、仏は神通力をもって人々を虚空に置き、大音声に唱募し「付属の時至る（当に涅槃に入るべし）、付属して在る有り」と三箇の鳳詔をなし、後の上行

などが涌出する伏線をなしている。

また、品末には、六難九易を示して流通を勧めているのである。

この品では、多宝塔の出現に、証前起後の深旨があるのである。証前とは、塔中から多宝如来が大音声をもって「釈迦牟尼世尊、所説の如きは皆是れ真実」と、なおこれを証したことからいい、また起後とは後の本門寿量品を起こすための遠序である。

この品から嘱累品までの十二品は、虚空で説かれたから虚空会といい、前後の霊山会と並べて二処三会というのである。

提婆達多品第十二

この品は、前の法師品と見宝塔品が功徳の深重をあげて流通を勧めたのに対して、かつての提婆の弘経と、釈尊の成道の両方を兼ね益した前例を引いて、功徳の深重を証し流通を勧めるのである。

まず、前段に国王と阿私仙人の昔の話をあげ、釈尊が「果を採り水を汲み薪を拾い食を設け」て千年間給仕するところの苦行のありさまを説いている。その阿私仙人は、いまの提婆達多である。この大権の聖者が、業因感果の理を示すために自ら五逆の姿を示し、現身に地獄に落ちたが、妙法の功力によって、天王如来の記別を受けたのである。

次に、智積菩薩の問いによって文殊菩薩の海中の弘経のありさまを説き、これによって八歳の竜女の成仏を説き、さらに舎利弗の疑問によって即身成仏を示すのである。

迹門の正宗分八品では声聞の作仏の得記を明かし、流通分にはいって法師品は善人成仏を明かしたのに対し

て、この品では悪人と女人の成仏を説き、宝塔品では釈迦多宝の二仏並座は、一切衆生の色身が本有の境智を顕わしているので、すなわち理性の即身成仏を説いたのであるが、この品では地獄の提婆達多と、海中から出た畜生である竜女の成仏を説いたのであるから、事相の即身成仏を説かれたのである。

勧持品第十三

この品は前々品の宝塔品の三箇の鳳詔によって、命に応じて、二万の菩薩は此土に、五百の阿羅漢、八千の学無学および六千の比丘尼などは他土に弘経することを誓願するのである。しかし、釈尊は、黙然として八十億那由佗の菩薩を見て弘経を勧め、これらの菩薩は十方世界の弘通を発誓して、釈尊の守護を乞うのである。また、偈文を説いて、如来滅後の三類の強敵はあるけれども、衣・座・室の弘経の三軌によって「我不愛身命、但惜無上道」の誓言を発したことを説いたものである。

安楽行品第十四

この品は法華経四要品の一つで、方便品の理によってこの安楽行を修し、後の寿量品の仏果を感ずるのであって、普門品ではその働きを述べるのである。

前品では、深行の菩薩が弘経の甚難を歎じ、五百および八千の声聞が娑婆を恐れて他土の弘経を誓うようなものであるから、文殊菩薩は、浅行初心の行者が濁悪世で安楽に妙法蓮華経を修行する方法を問い、釈尊はこれに対して、身・口・意・誓願の四種の安楽行を説き、初心の人はこれに住して妙法蓮華経を弘通し修行することを示されたのである。その相は、止（定）と観（慧）と慈悲との三法をもって、身・口・意・誓願の四行を導くから四安楽行というのである。

一に身安楽行とは、止に住するゆえに身の十悩乱を離れ、観に住するゆえに一切法が空であり、如実相であり、無所有性であることがわかるからそれらに著せず、慈悲に住するゆえに礼拝行道など、一切の威儀ことご

とく利他のためにすることである。

二に口安楽行とは、止に住するゆえ、不説過、不軽慢、不歎毀、不怨嫌であり、観のゆえに但説大乗であり慈悲に住するゆえに読経し、仏を賛嘆し、自然に利他するをいうのである。

三に意安楽行とは、止に住するゆえに、散乱悪想を離れ、観に住するゆえに、如来、菩薩、十方の菩薩、一切衆生の四人に四観あり、慈悲に住するゆえに所修の禅定、智慧ことごとく一切衆生のためにすることである。

四に誓願安楽行とは、止に住するゆえに、怨親平等であり、観に住するゆえに、所対の衆生に無著であり、慈悲に住するゆえに一切衆生において、抜苦与楽の誓願を発することである。法師品の衣・座・室の三軌と、この品の四安楽行とは、互いに弘経の方軌の表裏をなすのである。

なお、四安楽行を説いた後、髻中明珠の喩えを説き、経の妙を歎じて「此の法華経は諸仏如来の秘密の蔵なり、諸経中に於いて、最も其の上に在り」と説かれているのである。

従地涌出品第十五

この品から経末までの十四品が本門で、開近顕遠をもって大意としている。

本門のなかにも、また序・正・流通の三段があり、この品の初めから「汝等自ら当に是れに因って聞くことを得べし」までは本門の序分であって、次の「爾の時、釈迦牟尼仏、弥勒菩薩に告げたまわく」からの半品と寿量品および分別功徳品の十九行の偈の終わり「一切の善根を具して以って無上の心を助く」までは正宗分で、次の「現在の四信の爾の時、仏、弥勒菩薩摩訶薩に告げたまわく」から経末までが流通分となっているのである。

この品の前半では、他方来の迹化の八恒河沙の大菩薩が、此土娑婆世界の弘経を請うたけれども、釈尊は許

さないで、迹門の大地を破って、上行などの四菩薩を上首とした本眷属六万恒河沙の菩薩衆を召して涌出させるのである。

下方涌出の菩薩は三十二相を具し、しかも多数であることに、此土の菩薩は疑念を起こし、弥勒菩薩が請を結び、なお他土の無量の菩薩も疑念を生じ、十方分身の諸仏がおさえて、本門の涌出序、疑念序を終わる。後半は、前の大衆の疑念を代表して弥勒が請うたので、いよいよ釈尊の遠寿を顕わそうとした正宗分の小序ともいうべき誡許の一段がある。

そして、略開近顕遠を説き、動執生疑するのである。そのなかで、弥勒菩薩は「父少く子老ゆ」の喩えを説き「願わくは今、解説を為せ」と騰疑致請して、ついに寿量品が説かれることになるのである。

如来寿量品第十六

如来とは、十方三世の諸仏、二仏、三仏、本仏、迹仏の通号である。別して本地三仏の別号である。寿量とは十方三世・二仏・三仏の諸仏の功徳を詮量するので、寿量品という。いまは正しく本地の三仏の功徳を詮量するのである。

この品の一章こそ、釈尊出世の本懐、一切衆生成仏得道の真実義である。寿量品が説かれたことによって釈迦仏法はすべて完結するのである。寿量品は釈迦一代五十年の説法の完結編であり、生命であり、眼目である。日蓮大聖人いわく「一切経の中に此の寿量品ましまさずは天に日月無く国に大王なく山海に玉なく人にたましゐ無からんがごとし、されば寿量品なくしては一切経いたづらごとなるべし」（寿量品得意抄一二一一ページ）と、この品の重要なことを説かれている。

前品で、弥勒菩薩が大衆を代表して疑念を釈尊に問うたので、まず、この品の初めに釈尊は「汝等当に如来

の誡諦の語を信解すべし」と三誡せられたが、弥勒は大衆の上首となって、「我等当に仏の語を信受したてまつる」と三請してやまなかったので、釈尊はさらに重誡して「如来秘密神通之力」を説いて、広く開近顕遠し、断疑生信するのである。

文は、法説と譬説と偈頌の三段に分けられるのであるが、法説では、三世常住の益物が中心となり、正しく五百塵点劫の久遠の本地を開顕して、「我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由佗劫なり」と説かれ、譬説では、良医の喩えを説かれ「擣篩和合」の良薬を服せしめて、不失心者は病ことごとく除き愈えしめたが失本心の者には、是好良薬を今留在此して、遣使還告して、未来の益を説かれているのである。偈頌は、長行を重頌している自我偈のことである。

しからば、文底の立ち場から如来寿量品を読めば、どうなるか。

日蓮大聖人は御義口伝下（七五二ジ一）にいわく「如来とは釈尊・惣じては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身なり、今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり」と。

同じく御義口伝下（七五三ジ一）にいわく「然りと雖も而も当品（如来寿量品）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云」と。

分別功徳品第十七

この品は、略広に開近顕遠して、菩薩大衆は種々の功徳を得たのであるが、その功徳の浅深不同を分別することを説いたので、分別功徳品というのである。

この品は二段に分かれていて、初めから弥勒が領解を述べた偈頌の終わりまでは、本門の正宗分で、そのなかに授記と領解とがあり、まず総じて菩薩に法身の記を授け、大衆の供養があり、次いで、領解、分別供養がある。

次に、後半、「爾の時、仏、弥勒菩薩摩訶薩に告げたまわく」から終わりまでは流通分に属し、次の品の終わりまでは初品の因の功徳を明かすのであって、まず一念信解、略解言趣、広為他説、深信観成の現在の四信と、随喜品、読誦品、解説品、兼行六度品、正行六度品の滅後の五品を説き、次品の終わりまでにもおよんでいる。日蓮大聖人は、南無妙法蓮華経の正行を、初信の位にとっておられる。

随喜功徳品第十八

前品の流通からこの品の終わりまでは、初品の因の功徳を明かしている。前品は、初めから「当に知るべし、是れを深信解の相となづく」までは、現在の四信の行相と功徳を明かし、それから終わりまでは、滅後の五品の行相と後分の四品の功徳を明かしており、この品は初めから終わりまで初品の随喜品の因の功徳を説いているのである。

随喜とは、事理に随順し、己れを喜び、人を喜ぶなりとして、釈尊の本地深遠の理性の常住を聞いて信順するのを理に順うといい、仏の三世益物の一切処に遍きを聞いて信順することを事に順うという。己れを喜ぶとは、諸法実相の理（迹門）および久遠本地の事（本門）を聞いて信解するので歓喜を生じ、人を喜ぶとは、仏も衆生も無作三身を具したりと観ずるをもって、一切衆生に正道を悟らせようとする大慈悲心を発することをいう。この品では、五十展転して相教えることを説き、その第五十番目の人の随喜をもって、その功徳の大きさを説いているのである。

法師功徳品第十九

流通分のなかの弘経の功徳が深いことを明かしたなかで、初随喜品の因の功徳を明かして流通を勧めるのである。

すなわち、五種法師（受持・読・誦・解説・書写）が、おのおの、六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）清浄の功徳を明かしたので、これは五品のなかの初品の随喜品（天台の観行即）の人が、十信位（相似即）に上って得られるところであるから、初品の果の功徳を説くというのである。

この品は、総じては、六根の功徳を明かし、八百、千二百とおのおの功徳の数の異なりはあるけれども、結局は、六根の功徳は、互いに円融して功徳の差別はないのである。また、別しては、おのおの清浄を得ることを説いている。

常不軽菩薩品第二十

流通分のなかで弘経の功徳が深いことを明かしたなかの第三段、法華経を信じる者と毀る者との罪福を引いて証とし、流通を勧めるのである。

この品を常不軽菩薩品と称するのは、過去の常不軽菩薩の因縁を引いて説いているからである。不軽とは、身に不軽の行を立て、口に不軽の教えを述べるから、不軽というのである。この品は釈尊の本生譚に事よせて、威音王仏の滅後像法の法華経を受持した常不軽菩薩は六根清浄を得たものであることを説いて、今日の釈迦仏の滅後の受持の修行を勧めたのである。

前品では六根清浄の果の功徳を明かしたが、この品では六根清浄の因の修行を説いた。すなわち六根清浄を得ようと思うならば、難に耐えて一心に弘経すべきであることを教えたのである。

また、不軽軽毀の四衆は、千劫に阿鼻地獄で大苦悩を受くと説き、法華経の信毀罪福の果報を明らかに説いているのである。

なお「我深敬汝等、不敢軽慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、当得作仏」（我深く汝等を敬う、敢て軽慢せず、ゆえんはいかん、汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし）の文は、不軽の二十四字の法華経として有名である。

如来神力品第二十一

分別功徳品の半品と、随喜功徳品、法師功徳品、不軽品の三品半は功徳流通を明かし、次の八品は付嘱流通を説くのである。付嘱流通とは、釈尊の付嘱によって経典の流通を勧めることである。

この品は、地涌の菩薩が、釈尊の勅命を受けて、弘経することを説いたのである。

神力品と名づけるゆえんは、深法を付嘱するために十種の神力を現ずるからである。そして、結要勧持して、称歎付嘱、結要付嘱、勧奨付嘱、釈付嘱とし、結要付嘱に「要を以って之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の経に於いて宣示顕説す」とあり、これを天台大師は、五重玄の依文とし、日蓮大聖人は三大秘法の依文とせられたのである。

嘱累品第二十二

この品は、一切の菩薩に如来が摩頂付嘱することを明かすのである。

嘱累とは、諸菩薩を累わして、弘経を嘱託することである。

諸菩薩は付嘱を受けて「世尊の勅の如く当に具さに奉行すべし」と三誓して付嘱のことが終わって、諸の分身仏をおのおの本土に還らせて、多宝仏の塔を閉じて元のようにしたのである。

薬王菩薩本事品第二十三

この品からの五品は、付嘱流通のなかの化他流通である。

この品は弘法の師を勗めるのであって、宿王華菩薩の問いに対し、釈尊は日月浄明徳如来の本事と、その仏から付嘱を受けた薬王菩薩の本事を説いたのであるから、薬王菩薩本事品というのである。

文中に薬王菩薩が苦行して色身三昧を得、報恩に焼身供養したことを説いてある。ここで諸仏の同賛があり「善い哉、善い哉、善男子、是れ真の精進なり、是れを真の法をもって如来を供養すと名づく」と説かれた。

後段では薬王品十喩の譬えを説かれ、さらに、有名な「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布す」の文がある。

妙音菩薩品第二十四

この品と次の観世音菩薩普門品とは、化他流通中の受法の弟子を勗めるために説いたものである。

妙音菩薩の名は、この菩薩が浄光荘厳国、浄華宿王智如来のもとから、この娑婆世界に来至する時「経る所の諸国六種に震動して、皆悉く七宝の蓮華をふらし、百千の天楽、鼓せざるに自ら鳴る」とあり、それはこの菩薩が過去に十万種の伎楽を仏に供養し、八万四千の宝鉢を奉った因縁によって、いまは浄華宿王智仏の国に生まれて種々の神力があるからである。この品は、妙音菩薩の三十四身普門示現のことを説いているので、この品名があるのである。

この品では、妙音菩薩は、身を六道に分けて一乗を弘宣するので、身に定形がない。これは滅後に衆生の仏道を修するところの一切の人法に対して、軽賤の思いを生ずべからずと受法の弟子を戒め、さらに法華経を行

ずる者は、普現色身三昧を成ずることができると、教えられているのである。

観世音菩薩普門品第二十五

この品は、昔から法華四要品の一つとされていて、寿量品の仏が、不思議の化用を垂れて衆生を済度することを説いているので、化他流通中の前品妙音品と共に、受法の弟子を戒めるために説いたのである。

観世音菩薩は、この土に因縁が厚いとされているので、法華経中ではこの一品が、特に別行して、観音経と称せられて、古来から多くの人によって読誦せられたのである。しかるに、日蓮大聖人は、御義口伝下（七七六ページ）にいわく「今末法に入って日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る事は観音の利益より天地雲泥せり、……観音既に法華経を頂受せり然らば此の経受持の行者は観世音の利益より勝れたり云云」と。

この品名については、観世音とは人であり、普門は法であり、これについて前後二番の問答をもって説いているからである。それには、観世音とは化他についての名であるとし、衆生の三業の善を生ぜしめるために、一に観世音、二に観世意、三に観世身と説いて、口業に他の二業を摂して、観世音と称したのである。また普門とは現身説法の妙用をさして普門というのである。

この品では、三十三身十九説法を説いて供養を勧めたのに対して、無尽意菩薩は頸に繋げた宝珠の瓔珞を与えたが、観世音菩薩は受けようとしなかったけれども、釈尊の勧めによって、これを受け、この瓔珞を二分して、釈尊と多宝仏塔に奉ったことが説かれている。このことは、観世音は菩薩であるから、無上世尊であるところの二仏に廻施して、施者の福をますます大ならしめることになるのである。

陀羅尼品第二十六

この品は、化他流通中、悪世の弘経者に対して、神呪を説いて守護し、弘通させることを説いたのである。

陀羅尼とは梵語で総持と翻訳する。総は総摂の義、持は任持の義で、一字の中に無量の義を総摂し、一義の中に一切の義を任持するの意である。陀羅尼はよく悪を遮し、よく善を持するのである。呪をもって護るのに五段がある。すなわち、薬王菩薩、勇施菩薩、毘沙門天王、持国天王、十羅刹女の五番の神呪である。

妙荘厳王本事品第二十七

前品は呪（法）をもって、末世弘経の師を守るのに対して、この品は化他流通中の人をもって法を守るを説き明かしたのである。

人とは浄徳夫人と浄蔵・浄眼の二子をさす。この三人相寄って外道邪見の父・妙荘厳王を正法に転入帰正させることを説いたので、これは人をもって法を守ることを示したものである。

品末では、浄蔵・浄眼の二子を「今の薬王菩薩、薬上菩薩、これなり」と明かしているのであるから、薬王・薬上菩薩の本事品とも見られるのである。

普賢菩薩勧発品第二十八

この品は、神力品以下の付嘱流通中の自行流通を勧めるのである。

普賢菩薩が、東方宝威徳上王仏の国にいて、この娑婆世界で、釈尊が法華経を説くのを聞いて来至し、釈尊に仏の滅後にこの法華経をいかにしてたもつべきであるかと問うたのに対して、釈尊は、一に諸仏に護念せられ、二に諸の徳本を植え、三に正定聚に入り、四に一切衆生を救う心を起こすべしとの四法成就を説いて、法華経を再演したことを表わしているのである。

そこで、普賢菩薩は誓願を立てて、後五百歳の濁悪世に法華経を受持する行者を守護し、悪魔、魔民、鳩槃

茶などの怖れを防ぎ、しかももしは行き、もしは立ってこの経を読誦すれば、自ら六牙の白象王に乗って、その人を供養して守護し、または示教利喜し、なおまた、陀羅尼呪を説いて、持経者を守護することを誓い、法を守ることを誓い、すなわち人法守護を誓っているのである。この普賢菩薩の方からいえば、この品は化他の流通となるのであるが、法華経の説法がまったく終わったので、菩薩、声聞、天、竜、人非人などの一切の一会の大衆は歓喜して、仏語を受持して去ったのである。

無量義経

中国南北朝時代の斉、この斉は、周末戦国時代の斉と区別するために、その国王の姓の蕭を取って蕭斉というが、無量義経はその蕭斉の時代に応州の朝廷寺にいた中天竺の人、曇摩迦陀耶舎によって翻訳されたのであって、羅什三蔵より約百年の後の翻訳といわれている。

この経の説処は、その経文に「一時、仏、王舎城耆闍崛山の中に住したまい、大比丘衆万二千と倶なりき」とあるから、法華経と同じく霊鷲山において説かれたことは明らかである。

この経の説時は、法華経の序品に「諸の菩薩の為に大乗経の無量義、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説きたもう、仏、此の経を説き已って結跏趺坐し無量義処三昧に入って、身心動じたまわず」とあり、この三昧より安詳として起って、方便品を説かれたのであって、無量義経説法品に「仏の言わく、善男子是の一の法門を名づけて無量義と為す」とあるから、この無量義経は法華経の直前に説かれたことがわかる。

なお、説法品に「無量義とは一法より生ず」と説かれ、この一法より無量の義を生ずるのであるが、この一法とは何かということは、明確に説かれていない。この一法こそ、次の法華経において説かれる妙法蓮華経で

ある。そこで、この無量義経は、法華経の序分であるということがいえるのである。

日蓮大聖人は、御義口伝下（七八五㌻）に「法華経八巻は処なり無量義経は無量義なり、無量義は三諦・三観・三身・三乗・三業なり法華経に於一仏乗・分別説三と説いて法華の為の序分と成るなり」と、また「法華の為の序分開経なり」と説かれている。

このように、無量義経は法華経の序分で、開経として大切な経であり、徳行品、説法品、十功徳品の一巻三品の経である。

徳行品第一

この経は、徳行品、説法品、十功徳品の三品に分けられているが、通じて序分、正宗分、流通分の三分品ということができる。

この徳行品は、つまり、この経の序分である。この経を説く釈迦牟尼仏は、いかに立派な仏であるかをたたえているので、そのたたえる人は普通の人々でなく、菩薩や大比丘である。その菩薩は、戒、定、慧、解脱、解脱知見等の立派な徳が具わり、しかも、不思議の徳によって立派な働きをなす大菩薩であり、大比丘は真実にあらゆる迷いや苦しみを離れた人々である。それらの大菩薩は文殊師利菩薩等、大比丘は舎利弗等であり、それらの人々が集まって大荘厳菩薩が、代表して、偈文をもって釈迦牟尼仏を賛嘆しているのである。かかる立派な菩薩や大比丘が賛嘆する仏はいかに立派であるかを示し、それによって、その仏の説法がいかに立派で、ありがたいかを表わしているのである。

偈文においては、仏の法身、色身、報身、応身の四身にわたってたたえて、最後の文に仏が一切衆生を救う

ために難行苦行し、精進を重ねたのは、大慈悲のゆえである。それゆえに「能く諸の勤め難きを勤めたまえるに帰依したてまつる」と帰依を表わしている。

説法品第二

この品は、この経の正説で、大荘厳菩薩および八万の菩薩が仏を賛嘆する偈文を述べ終わってから、釈尊は、自分は久しからず涅槃に入る、もし疑問があるなら問うべしといったところ、大荘厳菩薩および八万の菩薩は「疾かに無上正覚を成ずるには何等の法門を修行すべきか」を問うた。

釈尊は「一法門有り」と答えたところ、菩薩たちは「この法門とは何か、その意義は何か、そして、それをどう修行すべきか」と三点をあげて質問した。釈尊はこの質問に答えた。それがこの説法品である。

初めに「この一の法門を名づけて無量義と為す」と説き、「無量義とは、一法より生ず、その一法とは即ち無相なり」と説き明かしているが、結局は一法は実相であって、「仏眼を以って一切諸法を観ずるに、宣説すべからず、所以はいかん、諸の衆生の性欲不同なることを知れり、性欲不同なれば種種に法を説き、種種に法を説くこと方便力を以ってす、四十余年には未だ真実を顕わさず」と有名な句を説いており、実相の一法は、この経でもついに明らかには説かず、法華経へはいって初めて説いたのである。

この品には「方等十二部経、摩訶般若、華厳海空を説いて、菩薩の歴劫修行を宣説す」とも説かれて、爾前の諸大乗経は歴劫修行しなければならぬことを示されていることも、注意しなければならない。

十功徳品第三

この品は、この無量義経を修行していかなる利益があるかを説いたので、いわゆるこの経の流通分にあたる

のである。

大荘厳菩薩が「此の微妙甚深無上大乗無量義経を説きたもう。真実甚深であるから、もし人々が、この経を聞けば、大利益があり、そして修行すれば早く無上正覚を成ずることができる。このように、この経は不思議であるから、もっと広く人々のために甚深不思議の事を演べたまえ」と申したので、釈尊は、在世にもあれ、滅後にもあれ、この経を受持、読、誦、解説、書写、如説修行すれば、十不思議功徳力があると、第一より第十までの不思議の功徳があることを説いたのである。

かくのごとく無量義経は法華経の開経序分であることは明白であって、五重三段の第二・第三重に、無量義経が序分におかれているが、御義口伝下（七九四ページ）に「妙法の序分無量義経なれば十界悉く妙法蓮華経の序分なり」とあって、第五重、文底三段からみるときは、無量義経のみならず一切経ことごとく妙法蓮華経の序分となるのである。

観普賢菩薩行法経

観普賢菩薩行法経は、中国南北朝時代の初期における宋の国、この宋は後の宋と区別するために、その国王が劉の姓であったので名を取って劉宋という、その劉宋の時代に罽賓国（加湿弥羅国＝現今のインド Kaśmira 地方）の人、曇無密多によって、漢文に翻訳されたのであって、いまより約千五百年以前であるといわれる。

この経の説所は、その経文に「一時、仏、毗舎離国、大林精舎、重閣講堂に在して、諸の比丘に告げたまわく」とあることから、毗舎離国（中インド十六大国の一つで摩伽陀国の北方といわれる）の大林精舎での説法と知ることができる。

また、この経の説時は、同じく経文中に「広く説くこと妙法華経の如し」とも、「大乗方等経を誦習するを以っての故に、即ち夢中に於いて、釈迦牟尼仏、諸の大衆と耆闍崛山に在して、法華経を説き一実の義を演べたもうを見ん」と、また「耆闍崛山を見るに、……此の光の至る処の十方分身の釈迦牟尼仏一時に雲のごとく集まり、広く妙法を説きたまうこと妙法華経の如し」等と説かれているのを見ると、この経は、法華経を説かれた後であることを知ることができる。

なお「却って後三月あって、我当に般涅槃すべし」と説かれてあるので、釈尊入滅の三月前の説法であると考えられる。

これらを総合するに、釈尊が霊鷲山で法華経を説かれてより、そこをたたれ、拘尸那城跋提河にいたる途中、毗舎離国、大林精舎で説かれた経であるということになるのである。

本経は一巻で、品を分かってはいない。この経は通じて法華経の流通分である。

御義口伝下（七八五ページ）に「依正の二法悉く法華経なりと結し納めたる経なれば此の普賢経を結経とは云うなり」とあるように、法華経の結経とされるのである。

一経中は、序・正・流通の三段に分かれている。

序分

まず尊者阿難、長老摩訶迦葉、弥勒菩薩摩訶薩の三大士は「却って後三月あって、我当に般涅槃すべし」と聞いたので、驚いて、釈尊に向かって仏の入滅の後に「煩悩を断ぜず五欲を離れず」して、一乗真実の境涯に達するには、いかに修行すべきかを問うのである。

正宗分

釈尊は、これに答えて、大乗経典すなわち法華経を誦し、法華経を修し、法華経の意を発する者は、いまから自分の説く所を修せよとて、六根を清浄にして法華経を誦せば、六牙の白象に乗る普賢菩薩を観ずると説き（六牙とは六根清浄をあらわし、白象とは正しき道理を見つめて静なるをあらわし、普賢菩薩は理をあらわすのであって、これらのことは静寂なる正しき道理を意味するのである。つまり法華経で説く諸法実相をいうのである）普賢菩薩を観ずるによって、いっそう深く懺悔して釈迦牟尼仏、多宝仏塔、十方分身の諸仏を見ること、すなわち自ら仏身を成ずることを説かれているのである。

懺悔とは、普通に考えるところの改悛の情を現わすことだけではないのであって、仏法でいう懺悔とは、仏の常住を信じ、自己の向上発展をはかり、成仏の境涯に達せんと努力することである。

その方法は、法華経を専心に読誦することであると説かれている。

また、この経文中に、日蓮大聖人がしばしば引用になられる「仏の三種の身は方等より生ず。是れ大法印なり。涅槃海を印す。此の如き海中より能く三種の仏の清浄の身を生ず」の文もある。

流通分

そこで、釈尊は、阿難に「大乗経を誦し、第一義甚深の空法を思わば、一弾指の頃に百万億阿僧祇劫の生死の罪を除却せん」と示され、懺悔のため受戒を説き、末法の自誓自戒を示され、最後に第一より第五にいたる五段の懺悔の法を教えて、滅後の四衆が、かくのごとき懺悔の法を修習すれば「久しからずして当に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし」と説かれて、経文を終わっている。

【如是我聞】

「是の如きを、我聞きき」と読む。あらゆる経文の冒頭には、必ずこの一句がある。したがって、妙法蓮華経序品第一の冒頭にも、この一句がある。

序品は、通じては法華経の総序であり、別しては迹門十四品の序分であるから、通序、別序に分けることができる。通序は諸経に通じているところの序分のことである。

御義口伝上（七〇九ページ）にいわく、

第一如是我聞の事。

文句の一に云く如是とは所聞の法体を挙ぐ我聞とは能持の人なり記の一に云く故に始と末と一経を所聞の体と為す。

御義口伝に云く所聞は名字即なり法体とは南無妙法蓮華経なり能持とは能の字之を思う可し、次に記の一の故始末一経の釈は始とは序品なり末とは普賢品なり法体とは心と云う事なり法とは諸法なり諸法の心と云う事なり諸法の心とは妙法蓮華経なり、伝教云く法華経を讃むると雖も還って法華の心を死すと、死の字に心を留めて之を案ず可し不信の人は如是我聞の聞には非ず法華経の行者は如是の体を聞く人と云う可きなり、爰を以て文句の一に云く「如是とは信順の辞なり信は則ち所聞の理会し順は即ち師資の道成ず」と、所詮日蓮等の類いを以て如是我聞の者と云う可きなり云云。

【迹門と本門】

迹とは影という意味で、本体、実体に対する言葉。門とは真実に入る門、法門という意味である。

法華経二十八品のうち序品第一より安楽行品第十四までを迹門、涌出品第十五より勧発品第二十八までを本門という。迹門の肝心は方便品第二で、諸法実相に約して理の一念三千を説き、また二乗の作仏を説く。本門の肝心は寿量品第十六にあり、久遠実成を説き顕わし、因果国に約して事の一念三千を説き、そのうえで神力品において地涌の菩薩に法を結要付属している。釈迦は法華経の前十四品では、インド応誕の立ち場で理論上の実相観を述べたのに対して、後の十四品では永遠の生命観に立って、事実の上から宇宙および生命の実相を述べているので、迹門と本門に立て分けられるのである。以上の点は諸御書にお示しのとおりである。

開目抄上（一九七ページ）　此等の経経に二つの失あり、一には行布を存するが故に仍お未だ権を開せずとて迹門の一念三千をかくせり、二には始成を言うが故に尚未だ迹を発せずとて本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代の綱骨・一切経の心髄なり（以上は爾前四十余年の権経）、迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顕本せざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水中の月を見るがごとし・根なし草の波の上に浮べるにたり（以上は迹門十四品）、本門にいたりて始成正覚をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打ちやぶって本門の十界の因果をとき顕す、此即ち本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も

無始の九界に備りて・真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし（以上本門）。

文底秘沈抄（富要三巻七一ページ）　迹門を理の一念三千と名づく是れは諸法実相に約して一念三千を明す故なり、弘の五の中に云く「既に諸法と云う故に実相即十なり既に実相と云う故に十即実相なり」云云……北峯に云く「諸法十界十如を出でず故に三千を成ず」云云、又本門を事の一念三千と名づくるは是れ因果国に約して一念三千を明す故なり、本尊抄に云く「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり、仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり、此れ即ち己心の三千具足の三種の世間なり」云云、此の文の中に因果国明らかなり、文句第十に云く「因果是れ深事」等云云。

そして迹門と本門には天地のような勝劣があるゆえに、御書には次のようにある。

治病大小権実違目（九九六ページ）　法華経に又二経あり所謂迹門と本門となり本迹の相違は水火天地の違目なり、例せば爾前と法華経との違目よりも猶相違あり爾前と迹門とは相違ありといへども相似の辺も有りぬべし、所説に八教あり爾前の円と迹門の円は相似せり爾前の仏と迹門の仏は劣応・勝応・報身・法身異れども始成の辺は同じきぞかし、今本門と迹門とは教主已に久始のかわりめ百歳のをきなと一歳の幼子のごとし、弟子又水火なり土の先後いうばかりなし、而るを本迹を混合すれば水火を弁えざる者なり。

妙一女御返事（一二六一ページ）　又法華経の弘まらせ給うべき時に二度有り所謂在世と末法となり、修行に又二意有り仏世は純円一実・滅後末法の今の時は一向本門の弘まらせ給うべき時なり、迹門の弘まらせ給うべき時は已に過ぎて二百余年になり、天台伝教こそ其の能弘の人にてましまし候いしかどもそれもはや入滅し給いぬ、日蓮は今時を得たり豈此の所嘱の本門を弘めざらんや、本迹二門は機も法も時も遥に各別なり。

【三種の法華経】

法華経といえば、釈尊の説いた二十八品の法華経のみと思われているが、法華経にも次の三種がある。すなわち正法時代の法華経、像法時代の法華経、末法時代の法華経である。

仏法の流布には時が大切である。

釈尊滅後の千年間を正法、その後の千年間を像法、また釈尊滅後二千年以後を末法という。正法の時代は釈尊に縁の深い衆生がひじょうに多い時代であり、像法の時代の衆生は縁が浅い。そして末法の時代は、釈尊にはぜんぜん縁のない衆生ばかり生まれてくる。さらに釈尊の説いた仏法に少しの功徳もなくなった時を末法というのである。

正法、像法の時代には釈迦仏法に利益があるが、末法の時代には釈尊の出世の本懐といわれる法華経二十八品にもまったく利益はなくなり、ただ末法の御本仏日蓮大聖人の仏法にのみ利益があるのである。

さて、正法の法華経とは、釈尊出世の本懐である法華経二十八品であり、像法の法華経とは、天台の説いた摩訶止観である。そして末法の法華経とは、末法の御本仏であられる日蓮大聖人の説かれた南無妙法蓮華経の七文字の法華経である。

したがって「日蓮宗」と名のりながら稲荷や鬼子母神や帝釈天などの謗法物と一緒に、末法の衆生に無縁の釈迦仏像などをまつるのは、大きな誤りといえよう。

【七譬】

法華経には七つの譬えが説かれている。これを法華経の七譬という。

三車火宅の譬（譬喩品第三に説かれる）これは長者が火宅に遊ぶ諸子を救うために、羊・鹿・牛の三車を与えることを約束し、火宅より救い出す。三車は三乗を意味し、後に与えた大白牛車は一仏乗に譬える。

文底の意は、人生の目的は成仏にあり、大白牛車とは御本尊のことである。

長者窮子の譬（信解品第四に説かれる）長者の子が、それを知らずに流浪し困窮するが、長者の方便によって長者の子であることを自覚する。これが、秘妙方便である。

文底の意では、われわれはもともと仏であり、罰をうけたり迷うことがあっても、退転なく信心していくならば必ず成仏するという意である。

三草二木の譬（または薬草の譬え、薬草喩品第五に説かれる）三草とは人天・二乗・蔵教の菩薩に譬え、二木とは通教・別教の菩薩に譬え、すべてが一地一雨すなわち一仏乗から生まれたことを説いた。

文底の意は、御本尊の功徳は平等であり、人生の目的は成仏にあることを教える。

化城宝処の譬（化城喩品第七に説かれる）三千塵点劫の譬えである。宝処に行くのに途中化城をもうけて引導した。二乗を化城に、宝処を一仏乗に譬えている。

文底の意では、宝処とは御本尊であり成仏である。

貧人繋珠の譬（または衣裏珠の譬え、五百弟子受記品第八に説かれる）貧人が親友より無価の宝珠をもらったが、謗法の酒に酔っていたので、自分が宝珠を持っているのを知らなかった。これも秘妙方便の譬えである。

文底の意は、御本尊を信ずれば、われわれはもともと仏であることを知る。しかしながら謗法していることによって、知ることができないとの意である。

髻中明珠の譬（または頂珠の譬え、安楽行品第十四に説かれる）ある大王が、最高の勇気ある者に無上の宝である髻中の明珠を与えた。この明珠は法華経であると説く。

文底の意では、御本尊こそあらゆる宝に超越した明珠であり、大功徳の根源である。

良医病子の譬（または譬如良医の譬え、如来寿量品第十六に説かれる）良医すなわち仏に三乗の病子があって、他の毒薬、すなわち邪宗を信じて大不幸になる。このとき、良医の父が帰ってそれを救う。

文底の意では、良医とは御本仏日蓮大聖人、病子とは末法の衆生で、信ずる者も不信の者も共に救われるとの意である。

【開三顕一】

三とは声聞・縁覚・菩薩の三乗、一とは一仏乗、三乗を開いて一仏乗を顕わすということ。釈尊はインドで成道以来、四十二年にわたって方便権教を説いてきたが、後八年の法華経を説くにあたり、その開経たる無量

義経には「四十余年には未だ真実を顕さず」と説き、次いで方便品には「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」「正直に方便を捨てて、但無上道を説く」と宣言している。すなわち方便品の説法は、四十余年にいまだかつて聞かざる大法であることが知られるのである。

方便品では十如実相を説き一念三千を明かしている。これによって、爾前経で各別に説いた空諦・仮諦・中諦も円融相即していると説く。

従来説いてきた権教は、実教のために説いてきたのであり、いまここに権を開いて実を示し、実を示すとき権を廃するのである。これが開三顕一であり、方便品に「一仏乗に於いて分別して三と説きたもう」「一乗の法のみ有り、二無く亦三無し、仏の方便の説をば除く」というのがこれである。

天台大師は三種の教相中、第一に根性の融不融の相を立てた。爾前経では衆生の根性が不融なるがゆえに声聞・縁覚・菩薩等と、その機根にしたがって説法の内容もバラバラであったが、法華経方便品にいたって根性は円融し、一切衆生の人生の目的は一仏乗にある、すなわち成仏することであることが明らかにされたのである。（釈迦一代五時継図六五三ページ参照）

【開示悟入】

方便品にある広開三顕一の文であり、その文は、

諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもう。舎利弗、云何なるをか諸仏世尊は、唯一

大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舎利弗、是れを諸仏は唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと為づく。

開示悟入の四仏知見は、衆生がもともともっている仏界を開発することを示したもので、ゆえに開三顕一になるのである。知見とは仏界を知見・覚知すること、すなわち体得すること。開示悟入は仏の念願であり、その根本は三大秘法の御本尊になる。また信心によってのみ開示悟入できるのである。

開示悟入については、御義口伝上（七一六㌻）に開仏知見の開とは信心の異名であり、示仏知見の示とは南無妙法蓮華経を示し、悟仏知見の悟とは即身成仏と悟り、入仏知見の入とは悟る当体・直至道場となることなど詳細な解釈があり、また日常生活にあっても開示悟入の法則は重要な基準となるのである。

【三周の声聞】

法華経迹門で声聞の弟子が、次々と成仏を許されて授記を受ける。ただしこの声聞のなかにも、法理を聞いてすぐ悟れる上根の人もあれば、法理を聞いてもよくわからず、たとえ話や因縁話を聞いて初めてわかる中根、下根の人もいた。ゆえに同じ法華経の迹門を聞いても、悟りには前後がある。すなわち法説、譬喩説、因

縁説の三つの説法にしたがって、それぞれの法を聞いて得道したのである。これを三周の声聞という。

まず舎利弗等は方便品の法説を聞いて授記を受ける。これを法説周という。次に譬喩品等の譬え話を聞いて須菩提・迦旃延・迦葉・目連等が授記を受ける。これを喩説周（譬喩説周）という。第三に化城喩品で大通智勝仏以来の因縁を聞いて富楼那・阿難をはじめ下根の声聞が授記を受ける。これを因縁周因（縁説周）という。以上、三段階に分けられたのを三周の声聞というのである。

【一大事因縁】

法華経方便品に次のようにある。

所以は何ん。諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもう。舎利弗、云何なるをか諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが故に世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう（開示悟入）。舎利弗、是れを諸仏は唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと為づく。

仏の出世の目的は開示悟入の一大事因縁のためであるということ。文底の立ち場からいえば、一大事因縁とは南無妙法蓮華経のことである。

日蓮大聖人は御義口伝上（七一六ページ）に次のように仰せである。

御義口伝に云く一とは法華経なり大とは華厳なり事とは中間の三味なり、法華已前にも三諦あれども砕けたる珠は宝に非ざるが如し云云、又云く一とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり縁とは経なり云云、又云く我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は経なり此の五尺の身妙法蓮華経の五字なり、此の大事を釈迦如来・四十余年の間隠密したもうなり今経の時説き出したもう此の大事を説かんが為に仏は出世したもう……又云く一とは中諦・大とは空諦・事とは仮諦なり此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華経是なり、此の五字日蓮出世の本懐なり之を名けて事と為す。

また日寛上人は文底秘沈抄（富要三巻六九ページ）で、一大事の文を三大秘法に読まれている。

一は謂く本門の本尊なり、是れ則ち一閻浮提第一の故なり、又閻浮提の中二無く亦三無し、是の故に一と云うなり、大は謂く本門の戒壇なり、旧より勝るなりと訓ず権迹の諸戒に勝るるが故なり、又景勝の地を尋ねて建立するが故なり、事は謂く本門の題目なり、理に非ざるを事と曰う是れ天台の理行に非ざる故なり、又事を事に行ずるが故に事と言うなり。

【三変土田】

宝塔品で釈迦が三度国土を変じて浄土としたことをいう。土田とは国土・土地・場所の意味である。

宝塔品では多宝如来の宝塔が涌現し、釈迦がその塔を開こうとして、十方分身の諸仏を呼び集め坐らせるた

めに、まず白毫の光りを放って娑婆世界を変じて清浄にし、諸の天人を他土に移し、さらに八方おのおの二百万億那由佗の世界を変じて清浄にし、諸の天人を他土に移した。そしてそこへ十方分身の諸仏を集めて多宝の塔を開き、十方世界は通じて一仏土である相を現わした。これを三変土田または三変浄土という。

日寛上人は観心本尊抄文段下（富要四巻二五三ページ）に「釈籤の第七の意三変土田を以って正しく同居の浄に約し兼ねて実報方便となす故に、三変は同居の浄土方便実報なり」と説かれている。

同居とは凡聖同居土、すなわち娑婆世界のことで、釈迦が直接教化する国土のこと。方便とは方便有余土、すなわち方便道を修行して見思惑を断じたが、まだ塵沙惑・無明惑を残している二乗、菩薩の住む国土のこと。実報とは実報土で、菩薩のうちで中道を証得し、無明を断破したものが住む国土である。この三土を迹土といい、本仏の住処である寂光土を本土という。

宝塔品では三土を浄化して通じて一仏土にしたというが、本門にいたって本仏が顕われおわれば、ことごとく常寂光土となるのである。

【三千塵点劫と五百塵点劫】

三千塵点劫は化城喩品第七にある。

我過去世の、無量無辺劫を念うに、仏両足尊有しき、大通智勝と名づく。人あって力を以って、三千大千の土を磨って、此の諸の地種を尽くして、皆悉く以って墨と為して、千の国土を過ぎて、乃ち一の塵点を下さ

ん、是の如く展転し点して、此の諸の塵墨を尽くさんが如し、是の如き諸の国土の、点せると点せざると等を、復尽く抹して、塵と為して一塵を一劫と為ん、此の諸の微塵の数に、其の劫復是れに過ぎたり。

また五百塵点劫は如来寿量品第十六にある。

譬えば、五百千万億那由佗阿僧祇の三千大千世界を、仮使人有って、抹して微塵と為して、東方五百千万億那由佗阿僧祇の国を過ぎて、乃ち一塵を下し、是の如く東に行きて是の微塵を尽さんが如き……是の諸の世界の、若しは微塵を著き、及び著かざる者を尽く以って塵と為して、一塵を一劫とせん。我成仏してより已来、復此に過ぎたること百千万億那由佗阿僧祇劫なり。

以上のように迹門には化導の始まりを三千塵点劫と説き、本門には成仏を五百塵点劫の昔にありとして久遠以来の師弟の関係を説き明かしている。しかして三千塵点劫は長い昔であっても、五百塵点劫に対すれば、昨日のようなものであり、また五百塵点劫といえども、久遠元初以来、本有常住の御本仏たる日蓮大聖人に対すれば、昨日のようなものである。

【記小久成】

記小の小とは二乗、記とは授記のことで、迹門において二乗が釈迦から成仏の授記を授けられたことをいう。久成とは久遠実成のことで、本門寿量品で五百塵点劫の本地を顕わしたことをいう。法華経が爾前経と比較して法門の内容がすぐれている二つの特徴をいい表わしたものである。

爾前経では二乗作仏は説かれず、したがって十界互具、一念三千が明かされていないが、法華経迹門にくると、二乗作仏が説かれる。本門寿量品では始成正覚の方便を開いて久遠の成道が明かされた。

爾前経に記小久成が明かされていないことについては、顕謗法抄（四五八㌻）に「諸大乗経の中の理は未開会の理いまだ記小久成これなし法華経の理は開会の理・記小久成これあり」とあり、このことは開目抄上（一九七㌻）にも説かれている。

また、真言宗では大日経に記小久成が説かれているとして、「大那羅延力」が二乗作仏を、「我一切本初」が久遠実成を表わしているなどとしているが、日寛上人は三重秘伝抄（富要三巻二七㌻）のなかで「彼の経の始末に都て二乗作仏の義無し、若し有りと言わば正しくその劫・国・名号は如何……我一切本初とは是れ法身本有の理に約す、何ぞ今経の久遠実成に同じからんや……故に知んぬ真言教中に記小久成・一向に之無きことを」と破折されている。

【略開近顕遠】

略して、ほぼ近（始成正覚）を開いて、遠（久遠実成）を顕わす、ということで、仏の生命の長遠なことをほぼ説いた涌出品の文をいう。

釈尊は爾前四十余年の経でも、また無量義経でも法華経方便品でもインドに生まれてから修行して成仏したと説いている。（開目抄上一九六㌻）

ところが法華経の本門にはいった最初の涌出品で地涌の菩薩が出現したのを見て、一座の大衆は大いに驚き、これら地涌の菩薩たちは、どこの国からきたのか、なんという仏の弟子で、なんという仏法を修行したのか等と質問した。

これに答えて仏は「我れ伽耶城菩提樹下に於いて坐して、最正覚を成ずることを得て、無上の法輪を転じ、爾して乃ち之を教化して、初めて道心を発さしむ、今皆不退に住せり、悉く当に成仏を得べし、我今実語を説く、汝等一心に信ぜよ、我久遠より来、是れ等の衆を教化せり」と説いている。すなわち地涌の菩薩こそ自分の第一の弟子であるといった。これが略開近顕遠の文である。

【広開近顕遠】

「広く近を開いて遠を顕わす」と読む。略開近顕遠の文が、さらに広開近顕遠の説かれる因となるのである。涌出品において「我久遠より来、是れ等の衆を教化せり」と説かれたのを聞いた大衆はさらに驚き、釈迦仏は成仏してより、いまだ四十余年にしかならないのに、どうしてこれほどたくさんの弟子を教化することができたのかと再び質問した。正しく、これに答えて説かれたのが如来寿量品の広開近顕遠である。

寿量品第十六　然るに善男子、我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由佗劫なり。

すなわち一切世間の者は皆、釈尊が、この世で出家して成仏したと思っているが、実は自分が成仏したのは五百塵点劫という想像もできない遠い昔であると説いた。これによって仏の生命の長遠が説き顕われ、その仏

界には無始の九界を具し、また九界にも無始の仏界が具しているという、本因本果の法門が明かされたのである。（開目抄上一九七㌻）

【発迹顕本】

迹を発って本を顕わす。

インドに出現して初めて成道した釈尊の始成正覚の姿は、衆生を利益するための垂迹であり、その本地は五百塵点劫以来三世常住の仏であるが、爾前経から法華経迹門まではその本地を明かさなかった。法華経の迹門方便品第二では十如実相・二乗作仏を説いて理の一念三千を明かしたが、まだ始成正覚の姿を開かなかった。本門の寿量品第十六にきて、久遠実成、すなわち五百塵点劫という久遠の昔に、すでに成道していたと、その本地を明かした。

この始成正覚の迹の姿を発って、久遠の本地を顕わしたことを発迹顕本という。これによって、真の十界互具、一念三千が説き明かされたのである。釈尊の出世の本懐はこの寿量品にあり、永遠の生命を説いて結縁の一切衆生得道の道を明かしたのである。

開目抄上（一九七㌻）此等の経経（爾前経）に二つの失あり、一には行布を存するが故に仍お未だ権を開せずとて迹門の一念三千をかくせり、二には始成を言うが故に尚未だ迹を発せずとて本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代の綱骨・一切経の心髄なり、迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二

種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顕本せざれば・まこと実の一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、乃至本門にいたりて始成正覚をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打ちやぶって本門の十界の因果をとき顕す、此即ち本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて・真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

【六難九易】

法華経見宝塔品に説かれていて、法華経を持つことのむずかしさを、譬えをもって示したものである。

諸の善男子、各諦かに思惟せよ、此れは為れ難事なり、宜しく大願を発すべし、諸余の経典、数恒沙の如し、此等を説くと雖も、未だ難しと為すに足らず、若し須弥を接って、他方の、無数の仏土に擲げ置かんも、亦未だ難しと為ず、若し足の指を以って、大千界を動かし、遠く他国に擲げんも、亦未だ難しと為ず、若し有頂に立って、衆の為に、無量の余経を演説せんも、亦未だ難しと為ず、若し仏の滅後に、悪世の中に於いて、能く此の経を説かん、是れ則ち難しとす、仮使人有って、手に虚空を把って、以って遊行すとも、亦未だ難しと為ず、我が滅後に於いて、若しは自らも書き持ち、若しは人をしても書かしめん、是れ則ち難しとす、若し大地を以って、足の甲の上に置いて、梵天に昇らんも、亦未だ難しと為ず、仏の滅度の後に、悪世の中に於いて、暫くも此の経を読まん、是れ則ち難しとす、仮使劫焼に、乾ける草を担い負って、中に入って焼けざらんも、亦未だ難しと為ず、我が滅度の後に、若し此の経を持ちて、一人の為にも説かん、是

れ則ち難しとす、若し八万、四千の法蔵、十二部経を持ちて、人の為に演説して、諸の聴かん者をして、六神通を得せしめん、能く是の如くすと雖も、亦未だ難しと為ず、我が滅後に於いて、此の経を聴受して、其の義趣を問わん、是れ則ち難しとす、若し人法を説いて、千万億、無量無数、恒沙の衆生をして、阿羅漢を得、六神通を具せしめん、是の益有りと雖も、亦未だ難しと為ず、我が滅後に於いて、若し能く、斯の如き経典を奉持せん、是れ則ち難しとす。

すなわち六難とは一に広説此経難、二に書持此経難、三に暫読此経難、四に少説此経難、五に聴聞此経難、六に受持此経難である。

また九易とは一に余経説法易、二に須弥擲置易、三に世界足投易、四に有頂説法易、五に把空遊行易、六に足地昇天易、七に大火不焼易、八に広説得通易、九に大衆羅漢易である。

【竜女・提婆】

竜女とは竜の女身をいい、大海の娑竭羅竜王の女、八歳の竜女をさす。この竜女が文殊師利菩薩が竜宮で法華経を説いたのを聞いて菩提心を起こし、次いで霊鷲山で釈尊の説法を聞いて即身成仏の相を示し、女人成仏の現証を現わした。これを竜女作仏というのである。法華経にのみ説かれた法門であり、提婆達多品第十二に説かれている。

開目抄下（二二三ページ）　宝塔品の三箇の勅宣の上に提婆品に二箇の諫暁あり、提婆達多は一闡提なり天王如

来と記せらる、涅槃経四十巻の現証は此の品にあり、善星・阿闍世等の無量の五逆・謗法の者の一をあげ頭をあげ万ををさめ枝をしたがふ、一切の五逆・七逆・謗法・闡提・天王如来にあらはれ了んぬ毒薬変じて甘露となる衆味にすぐれたり、竜女が成仏此れ一人にはあらず一切の女人の成仏をあらはす、法華已前の諸の小乗教には女人の成仏をゆるさず、諸の大乗経には成仏・往生をゆるすやうなれども或は改転の成仏にして一念三千の成仏にあらざれば有名無実の成仏往生なり、挙一例諸と申して竜女が成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし。

これを提婆品の二個の諫暁といい、一代諸経の成仏・不成仏を明らかにしたものである。

提婆達多は、一生を通じて徹底的に仏に反対した一闡提でありながら、しかも法華経においては天王如来と授記されている。

そして善星比丘や阿闍世王等のように、釈尊在世の無量の五逆罪謗法の者のなかから、極悪の提婆をあげて、その成仏を明かしたことは、一切の五逆・七逆の罪を犯した謗法・闡提もすべて天王如来の授記によって、成仏を決定されたのである。

また竜女の成仏も、ただ一人の成仏を顕わしたものではなくて、一切の女人の成仏を顕わしたものである。法華経以前のもろもろの小乗経には、女人の成仏を許さなかった。またもろもろの大乗経には、女人の成仏を許すようであるけれども、それは即身成仏ではなくて、改悔し発心した後に許される改転の成仏であり、一念三千の即身成仏ではないから、有名無実の成仏往生である。

「一を挙げて諸に例す」とあるように、竜女の成仏は末代女人の成仏の道をふみあけたものなのである。

【大通智勝仏】

法華経化城喩品に説かれる仏である。三千塵点劫という遠い昔に出世して法華経を説いたといわれる仏で、大相という時代に好成国の転輪聖王の太子として生まれた。国王となって十六人の王子をもったが、後に出家して修行を積み仏となった。二万劫の間、法華経を説かなかったが、十六王子の請いによって説いた。そのとき、十六王子と少しの声聞は法華経を信受して功徳を得たが、多くの衆生は疑いを起こして信じなかったので、十六王子が諸国へ行って父の説いた法華経を繰り返して多くの衆生を化導した。これを大通覆講といい、その説法を聞いたことを大通結縁という。

十六人のうち、東方に二仏、すなわち阿閦と須弥頂、東南方に二仏、師子音と師子相、南方に二仏、虚空住と常滅、西南方に帝相と梵相、西方に阿弥陀と度一切世間苦悩、西北方に、多摩羅跋栴檀香神通と須弥相、北方に雲自在と雲自在王、東北方に壊一切世間怖畏と、そして第十六番目が釈迦牟尼仏である。

【三箇の勅宣】

釈尊滅後の弘経を勧めたのが宝塔品の三箇の勅宣である。提婆品の二個の諫暁と合わせ五箇の鳳詔という。

開目抄下（二一七ページ）疑て云く当世の念仏宗・禅宗等をば何なる智眼をもって法華経の敵人・一切衆生の

悪知識とはしるべきや、答えて云く私の言を出すべからず経釈の明鏡を出して謗法の醜面をうかべ其の失をみせしめん生盲は力をよばず、法華経の第四宝塔品に云く「爾の時に多宝仏・宝塔の中に於て半座を分ち釈迦牟尼仏に与う、爾の時に大衆二如来の七宝の塔の中の師子の座の上に在して結跏趺坐し給うを見たてまつる、大音声を以て普く四衆に告げ給わく、誰か能く此の娑婆国土に於て広く妙法華経を説かん、今正しく是れ時なり、如来久しからずして当に涅槃に入るべし、仏此の妙法華経を以て付属して在ること有らしめんと欲す」等云云、第一の勅宣なり。（付嘱有在）

又云く「爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を説いて言く、聖主世尊・久しく滅度し給うと雖も宝塔の中に在して尚法の為に来り給えり、諸人云何ぞ勤めて法に為わざらん、又我が分身の無量の諸仏・恒沙等の如く来れる法を聴かんと欲す各妙なる土及び弟子衆・天人・竜神・諸の供養の事を捨てて法をして久しく住せしめんが故に此に来至し給えり、譬えば大風の小樹の枝を吹くが如し、是の方便を以て法をして久しく住せしむ、諸の大衆に告ぐ我が滅度の後誰か能く此の経を護持し読誦せん今仏前に於て自ら誓言を説け」、第二の鳳詔なり。（令法久住）

「多宝如来および我が身集むる所の化仏当に此の意を知るべし、諸の善男子・各諦かに思惟せよ此れは為れ難き事なり、宜しく大願を発こすべし、諸余の経典数・恒沙の如し此等を説くと雖も未だ為れ難しとするに足らず、若し須弥を接って他方無数の仏土に擲げ置かんも亦未だ為れ難しとせず、若し仏滅後・悪世の中に於て能く此の経を説かん是則ち為れ難し、仮使劫焼に乾れたる草を担い負うて中に入って焼けざらんも亦未だ為れ難しとせず、我が滅度の後に若し此の経を持ちて一人の為にも説かん是則ち為れ難し、諸の善男子・

我が滅後に於て誰か能く此の経を護持し読誦せん、今仏前に於て自ら誓言を説け」等云云、第三の諫勅なり、（六難九易）第四・第五の二箇の諫暁・提婆品にあり云云。

以上が宝塔品の三箇の勅宣である。

【本門八品の意味】

本門の八品とは涌出品より嘱累品にいたる八品であり、この八品の間に地涌の菩薩が来現していたのである。虚空会の儀式は宝塔品より起こって嘱累品に終わる。すなわち本門の八品というのは付嘱の儀式がなされた期間であり、その肝要である本尊と本仏は、寿量品で説き顕わされているのである。しかるに日蓮宗八品派は八品正意と立てているので、ここに関連する御文を若干引いて、その非を破折しておこう。

観心本尊抄（二四七㌻）　此の本門の肝心南無妙法蓮華経の五字に於ては仏猶文殊薬王等にも之を付属し給わず何に況や其の已外をや但地涌千界を召して八品を説いて之を付属し給……是くの如き本尊は在世五十余年に之れ無し八年の間にも但八品に限る。

観心本尊抄（二五三㌻）　地涌千界は……但八品の間に来還せり。

御義口伝下（七七〇㌻）　惣じて妙法蓮華経を上行菩薩に付属し給う事は宝塔品の時事起り・寿量品の時事顕れ・神力属累の時事竟るなり。

御義口伝下（七八二㌻）　宝塔品に事起り……涌出寿量に事顕れ神力・属累に事竟るなり。

新尼御前御返事（九〇五ページ）今此の御本尊は……宝塔品より事をこりて寿量品に説き顕し神力品・属累に事極りて候いしが云云。

日女御前御返事（一二四三ページ）抑此の御本尊は在世五十年の中には八年・八年の間にも涌出品より属累品まで八品に顕れ給うなり。

以上の各御書にご明示のように宝塔の出現は宝塔品より起こり、宝塔中に釈迦多宝の二仏および地涌の大菩薩等が雲集せる儀式は、涌出品より起こって、付嘱の終了する神力品・嘱累品で終わるのである。本尊と仏はただ寿量品に限る。ゆえに本尊抄（一二四八ページ）においても「未だ寿量の仏有さず」「本門寿量品の本尊並びに四大菩薩」と仰せられて「八品の仏」「八品の本尊」とは説かれていない。また開目抄上（一八九ページ）には「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり」下山御消息（三五九ページ）には「寿量品の肝要たる南無妙法蓮華経の五字」等と明かされ、すべて「八品の文底」「八品の肝要」等とは説かれていない。ゆえに八品正意・八品の題目等と立てるのは大きな誤りである。

【勧持品】

勧持品第十三では八十万億那由佗の大菩薩が仏滅後の弘経を誓っている。すなわち法師品より仏は滅後の弘法を勧進し、宝塔品には三箇の勅宣（開目抄下二一八ページ）を下して「我が滅度の後誰か能く此の経を護持し読誦せん、今仏前に於て自ら誓言を説け」といい、さらに提婆品には悪逆の提婆と畜生の竜女の成仏を説いて、

二箇の諫暁（開目抄下二二三㌻）を説いた。これに対して諸の大菩薩は、仏滅後の五濁悪世に三類の強敵をうけ、いかなる迫害をうけようとも、わが身命を愛せずと誓い、勧持品の二十行の偈で結んだ。

勧持品の二十行の偈とは、諸の菩薩が「仏の滅度の後の恐怖悪世の中に於いて、我等当に広く説くべし」と、末法に俗衆増上慢、道門増上慢、僭聖増上慢の三類の強敵が出現することを予告した後「是の経を説かんが為の故に、此の諸の難事を忍ばん、我身命を愛せず、但無上道を惜しむ」と誓った偈である。

日蓮大聖人は、これを末法本仏出現の予言とされて、次のように仰せられている。

開目抄上（二〇二㌻）而るに法華経の第五の巻・勧持品の二十行の偈は日蓮だにも此の国に生れずば・ほ殆どをど世尊は大妄語の人・八十万億那由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし。

開目抄下（二二三㌻）已上五箇の鳳詔にをどろきて勧持品の弘経あり、明鏡の経文を出して当世の禅・律・念仏者・並びに諸檀那の謗法をしらしめん、日蓮といゐし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて返年の二月・雪中にしるして有縁の弟子へをくれ（贈）ばをそろしくて・をそろし（畏）からず・みん（見）人いかに・をぢ（怕）ぬらむ、此れは釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国・当世をうつし給う明鏡なりかたみともみるべし。勧持品に云く（以下勧持品の偈があり）

法華経においては、次いで涌出品に地涌の菩薩が出現し、寿量品を説法の後、不軽品にいたって末法の折伏弘通を如実に示している。その関連について、

寺泊御書（九五三㌻）過去の不軽品は今の勧持品今の勧持品は過去の不軽品なり、今の勧持品は未来は不軽品為る可し、其の時は日蓮は即ち不軽菩薩為る可し。

【多宝の塔】

迹門の流通分である見宝塔品第十一において多宝塔が虚空に起ち、釈迦・多宝の二仏が宝塔の中に並座し、十方分身の諸仏、迹化他方の大菩薩・二乗・人天等がこれに連なっていわゆる虚空会の儀式が説かれている。この宝塔はその名のように、七宝で飾られている。

見宝塔品第十一　爾の時に仏前に七宝の塔あり。高さ五百由旬、縦広二百五十由旬なり。地より涌出して、空中に住在す。種種の宝物をもって、之を荘校せり。五千の欄楯あって、龕室千万なり。無数の幢旛、以って厳飾と為し、宝の瓔珞を垂れ、宝鈴万億にして、其の上に懸けたり。四面に皆、多摩羅跋栴檀の香を出して、世界に充偏せり。其の諸の旛蓋は、金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、真珠、玫瑰の七宝を以って合成し、高く四天王宮に至る。

御義口伝上（七三九ページ）　御義口伝に云く七宝とは聞・信・戒・定・進・捨・慙なり、又云く頭上の七穴なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは有七宝の行者なり云云。

そして、この多宝の塔は虚空にあって、釈迦仏多宝仏が坐を並べ、日月が同時に青空へ並び出でたような荘厳さであった。人天大会の大衆は星を連ねるように虚空にならび、分身の諸仏は大地の上で、宝樹の下の師子座にましました。このように荘厳雄大な儀式は爾前経では、とうてい見ることができなかった儀式である。

これははなはだ非科学的のように思われるが、しかし、仏法の奥底からこれをみるならば、きわめて自然な

儀式である。もしこれを疑うなら序品の時にすでに大不思議がある。数十万の菩薩や声聞や十界の衆生が、ことごとく集まって釈尊の説法を聞くようになっているが、こんなことができるかどうか。拡声器もなければまたそんな大きな声が出るわけがない。まして八年間も、それが続けられるわけがない。すなわちこれは釈尊己心の衆生であり、釈尊己心の十界であるから、何十万集まったといっても不思議はない。ゆえに宝塔品の儀式も、観心の上に展開された儀式なのである。われわれの生命には、仏界という大不思議の生命が冥伏している。この生命の力および状態は、想像もおよばなければ筆舌にも尽くせない。しかしこれをわれわれの生命体の上に具現することはできる。現実にわれわれの生命それ自体も、冥伏せる仏界を具現できるのだと説き示したのが、この宝塔品の儀式なのである。すなわち釈尊は宝塔の儀式をもって、己心の十界互具一念三千をあらわしているのである。日蓮大聖人は、同じく宝塔の儀式を借りて、寿量文底下種の法門を、一幅の御本尊として建立されたのである。されば御本尊は、釈尊の宝塔の儀式を借りてこそおれ、日蓮大聖人己心の十界互具一念三千――本仏のご生命なのである。

次に多宝の塔には二つの意があり、一にはすでに説いてきた迹門を真実なりと証明するため、二には後に本門を説き起こすためである。これは天台の法華文句に法華経見宝塔品の多宝の塔を釈して述べている。すなわち見宝塔品で多宝塔が涌現して、多宝如来が「善哉善哉……妙法華経……如所説者皆是真実」と証明したのは前十品の迹門の真実なることを証明したのであり、これを証前（迹門を証するの意）の宝塔といい、次に多宝塔を開かんがために十方分身の諸仏を集め二仏並座して、滅後の弘通を付嘱すべき地涌の菩薩を召して、寿量品（本門）を説く起となる。これを起後（本門を起こすの意）の宝塔というのである。

御義口伝上（七三九ページ）には「御義口伝に云く宝とは五陰なり塔とは和合なり五陰和合を以て宝塔と云うなり、此の五陰和合とは妙法の五字なりと見る是を見とは云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は見宝塔なり」と仰せである。

【霊鷲山】

梵語では耆闍崛山といわれる霊鷲山は、インドのベンガル州にある山で、三千年前、釈尊が、法華経を説いた場所のことである。その南の尸陀林が死人捨て場で鷲がきたので「鷲山」といい、三世諸仏の心法である法華経がとどまっているので「霊山」という。

御義口伝下（七五六ページ）第十四時我及衆僧倶出霊鷲山の事。御義口伝に云く霊山一会儼然未散の文なり、時とは感応未法の時なり我とは釈尊・及とは菩薩・聖衆を衆僧と説かれたり倶とは十界なり霊鷲山とは寂光土なり、時に我も及も衆僧も倶に霊鷲山に出ずるなり秘す可し秘す可し、本門事の一念三千の明文なり御本尊は此の文を顕し出だし給うなり、されば倶とは不変真如の理なり出とは随縁真如の智なり倶とは一念なり出とは三千なり云云……出とは霊山浄土に列出するなり霊山とは御本尊並びに日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者の住所を説くなり云云。

すなわち日蓮大聖人の仏法から、これをみれば、人法一箇の本門戒壇の大御本尊の住所こそ霊鷲山である。また総じては大御本尊を信じて題目を唱える者の住所はいかなる所でも霊鷲山なのである。具体的には娑婆世

界、そのなかにも日本国、日本国のなかにも富士大石寺こそ霊鷲山である。「霊山の一会儼然として未だ散らず」との文の意もここにある。

【自我偈】

法華経の如来寿量品第十六にある有名な偈で、自我得仏来から速成就仏身までをいう。

偈とは偈他の略称で、仏の徳、仏の教えを賛嘆する詩のこと。偈他は梵語で、訳せば頌という。また偈には通偈と別偈があって、別偈のなかの重頌というのは、長行に説いたのを、さらに重ねて、偈頌をもって説くのをいう。自我偈はこれにあたり、寿量品の肝心を再び述べたものである。

法蓮抄（一〇四九ページ）自我偈の功徳は唯仏与仏・乃能究尽なるべし、夫れ法華経は一代聖教の骨髄なり自我偈は二十八品のたましひなり。

御義口伝下（七五九ページ）自とは九界なり我とは仏身なり偈とはことわるなり本有とことわりたる偈頌なり深く之を案ず可し、偈様とは南無妙法蓮華経なり云云。

御義口伝下（七五九ページ）自とは始なり速成就仏身の身は終りなり始終自身なり中の文字は受用なり、仍って自我偈は自受用身なり法界を自身と開き法界自受用身なれば自我偈に非ずと云う事なし、自受用身とは一念三千なり、伝教云く「一念三千即自受用身・自受用身とは尊形を出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり」云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者是なり云云。

日蓮大聖人の仏法では、以上のような、重々の深意があるのである。

【三世間】

三世間とは五陰世間と衆生世間と国土世間である。

世間とは差別の義である。Aの人とBの人を比べてその二人の五陰の差別を五陰世間という。仏界の衆生と人界の衆生とを比べるような差別を衆生世間という。同様に国土の差別を国土世間という。

五陰とは色・受・想・行・識である。色とは色質すなわち物質、わが肉体をいい、受とは受領の義で六根（五官と意識）をもって外界の事物を受領することをいい、想とはその受領した外境に対して、種々の思想を生ずることをいい、行とはその思想によって、また自己が視聴言動の行為を現わすことをいい、識とは思慮分別するところの智慧をいう。この五陰はつまり各人自己の心身をいうのであり、この自己の心身はみなそれぞれ他と相違があるので五陰世間という。陰とは〝おおいかくす〟の意と〝あつまる〟の二つの意味がある。〝おおいかくす〟という意味で九界に約せば善法をおおいかくしており、仏界に約せば慈悲におおわれていることになる。〝あつまる〟の意味で九界に約せば生死の苦しみのあつまりであり、仏界に約せば常楽が集まっていることになる。

五陰が仮に和合するのを衆生という。十界にはそれぞれの衆生がおり、仏界は尊極の衆生である。各衆生それぞれ差別を生じて、十界の衆生となっているところを衆生世間というのである。五陰世間と衆生世間とは自

他の両面をあらわしたものである。

国土とは十界の衆生（正報）が住する依報・非情の国土をいうのである。仏は寂光土、菩薩は実報土、二乗は方便土、天は宮殿、人は大地、地獄は赤鉄に住する等のようなものである。このように衆生の住する国土に差別があるので国土世間という。

【今此三界】

法華経譬喩品第三の文で、釈尊は娑婆世界の一切衆生の主であり師であり親であることを明かして、「今此の三界は、皆是れ我が有なり（主の徳）、其の中の衆生は、悉く是れ吾が子なり（親の徳）、而も今此の処は、諸の患難多し、唯我れ一人のみ、能く救護を為す（師の徳）」とある。

三界とは衆生の輪廻する境界を三種類に分けたもの。六道の凡夫の住処をいう。欲界、色界、無色界の三つで、欲界とは欲望の世界、色界とは物質だけが存在する世界、無色界とは物質のない精神の世界をいう。

産湯相承事（八七九ページ）　日蓮は天上・天下の一切衆生の主君なり父母なり師匠なり、今久遠下種の寿量品に云く「今此三界皆是我有（主君の義なり）其中衆生悉是吾子（父母の義なり）而今此処多諸患難（国土草木）唯我一人能為救護（師匠の義なり）」と云えり、三世常恒に日蓮は今此三界の主なり。

日蓮大聖人こそ、主師親の三徳を具備された、末法の本仏であることを明らかにされている。

ここに、日蓮大聖人が、譬喩品を久遠下種の寿量品とされたのは、御本仏の内証の立ち場からである。す

なわち「久遠下種の寿量品」とは、わが内証の寿量品と等しく、寿量品の仏こそ三徳具備の仏であるゆえに文は譬喩品にあるといえども、その義は寿量品の文底にある。

【不軽品の意義】

法華経の常不軽菩薩品第二十には、大要次のように説かれている。ずっと遠い昔に威音王如来という仏がいた。この仏の滅後、像法年間に、常不軽菩薩という菩薩がいて「我深く汝等を敬う。敢えて軽慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし」といって一切の人々をことごとく礼拝していた。ときに国中に謗法者が充満しており、不軽菩薩を見て、皆これを迫害した。しかし、いかなる迫害にも屈することなく、不軽菩薩は、もっぱら礼拝の一行を全うしていた。かくて不軽菩薩は仏身を成就することを得たが、不軽を軽賤した者は、その罪によって千劫阿鼻地獄に落ちて大苦悩をうけ、その罪を畢え已って、また不軽菩薩の教化をうけ成道することができた、と。日蓮大聖人は、この不軽菩薩について次のように仰せられている。

佐渡御書（九六〇㌻）　日蓮は過去の不軽の如く当世の人人は彼の軽毀の四衆の如し人は替れども因は是一なり。

曾谷入道等許御書（一〇二七㌻）　今は既に末法に入って在世の結縁の者は漸漸に衰微して権実の二機皆悉く尽きぬ彼の不軽菩薩末世に出現して毒鼓を撃たしむるの時なり。

聖人知三世事（九七四㌻）　我が弟子達之を存知せよ日蓮は是れ法華経の行者なり不軽の跡を紹継するの故

に軽毀する人は頭七分に破・信ずる者は福を安明に積まん。

反対する者にも強いて法を説き、信じない者は謗法の罪によって、いったん地獄へ落ちて後、救われることを教示されているのである。日蓮大聖人の仏法とこの不軽菩薩の振舞いは、法体は異なるが、弘経の方軌、方程式は同じである。これを逆縁の功徳という。日蓮大聖人の仏法は、釈迦仏法では救えない謗法不信の者をも救う力があると、次のように仰せられている。

諫暁八幡抄（五八九㌻）　仏は法華経謗法の者を治し給はず在世には無きゆへに、末法には一乗の強敵充満すべし不軽菩薩の利益此れなり。

【浄蔵・浄眼】

法華経妙荘厳王本事品第二十七に説かれている。昔、雲雷音宿王華智仏という仏がいて、その時の王を妙荘厳王といった。王の夫人を浄徳夫人といい、そこに浄蔵・浄眼という二人の子供がいた。

この浄蔵・浄眼は仏の教えを信じ、無量の功徳を得て、母の浄徳夫人と共に出家し、仏のもとで修行した。父はこれに反対したので、母は二人の子供に「おまえたち二人で、父の面前で不思議を現じてみせなさい」といった。そこで二人の子供は大いに仏道に励み、父の前でいろいろな神通力を現じて見せたのである。父王は感心して「おまえたちは、誰について、このような、不可思議な力を学んだのだ。自分もその師匠のもとについて、教えをうけたい」といって、さっそく二人に従って仏の教えをうけ、仏道を成就することができたので

ある。そのときの妙荘厳王とは、いま法華経の会座にいる華徳菩薩であり、浄蔵・浄眼は薬王・薬上菩薩なのである。

さらに、さかのぼった過去世では、この四人は共に仏道修行に励む仲間であった。四人とも修行に出かけてしまっては、食事の用意をする留守番がいなくなってしまうので、四人のなかの一人が食糧を集め、薪をつくり、水をくんで給仕を務め、三人はもっぱら仏道修行に励んで、ついに成仏することができた。仏に給仕した者が、その功徳によって国王と生まれたとき、他の三人はそれぞれ夫人と、二人の王子に生まれて、国王を折伏して入信させ、ついに仏道を成就せしめることができたというのである。

【四衆】

経文の所々に「爾の時に世尊、四衆に囲繞せられ……云云」とあるが、仏が説法するときに必ず集まっている四種類の衆生を四衆という。

その四衆には二つの意味がある。一つは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を四衆、または四部の衆という。比丘とは男の出家・僧のこと、比丘尼は女の出家・尼のこと、優婆塞は男の在家の信者、優婆夷は女の在家の信者のこと。もう一つの四衆は発起衆、影響衆、当機衆、結縁衆の四種類の衆生をいい、これを説会の四衆ともいうのである。

発起衆とは、仏に対して説法を請い、あるいは疑問を出したり、問答などを起こして仏の説法を発起させ

て、化導を助ける人をいう。当機衆とは、仏の説法を聞き、教えをうけて、その場でわかる人をいい、結縁衆というのは、そこで縁を結んで、未来に悟る人をいうのである。影響衆とは、仏のそばに従っていて、その仏の立派なことを証明する役目の衆生がそれである。たとえば、舎利弗尊者や弥勒菩薩は仏に質問をする、これは発起衆である。文殊や観音や妙音等の菩薩は、他の仏土から、釈尊の仏法を助けにきているのだから影響衆である。

このうち、発起衆は最も大事で、質問会等において質問を発する人は、これにあたる。

また、仏が、誰も質問しないのに、自ら「諸仏智慧、甚深無量……」と説き出す説法の方式を「無問自説」といい、その他、説法のやり方に十二の方式がある。そのために釈尊の経典を十二部経とも呼ぶ。

普通は、発起衆が仏に質問を発して、ついで仏が四衆に向かって説法をするという方式がとられている。

【本化付嘱と迹化付嘱】

本化の菩薩、すなわち地涌の菩薩に対する付嘱を本化付嘱といい、別付嘱ともいう。それに対して迹化他方の菩薩などに対する付嘱を迹化付嘱といい、総付嘱ともいうのである。

本化付嘱は法華経神力品第二十一に説かれる。すなわち神力品に「爾の時に千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出せる者皆仏前に於て一心に合掌し尊顔を瞻仰して仏に白して言さく世尊・我等仏の滅後・世尊分身の所在の国土・滅度の処に於て当に広く此の経を説くべし」と、滅後流通の誓いを発するのである。

この発誓について天台は「但下方の発誓のみを見たり」と述べて、地涌の菩薩の発誓であることを証している。また道暹は「付属とは此の経をば唯下方涌出の菩薩に付す何が故に爾る法是れ久成の法なるに由るが故に久成の人に付す」と天台の文を解釈して、輔正記の中で述べている。本化の菩薩である上行等は久成の大菩薩である。

かくして、神力品に四句の要法が説かれ、結要付嘱をもって、文底深秘の本門の本尊、妙法蓮華経の五字が付嘱された。これを本化に対する別付嘱というのである。そして、これは皆、滅後末法のためであって、末法出現の三大秘法の大御本尊の流通分となっている。

次いで、嘱累品第二十二では「爾の時に釈迦牟尼仏・法座より起って大神力を現じ給う右の手を以て無量の菩薩摩訶薩の頂を摩で乃至今以て汝等に付属す」と説いているように、地涌の大菩薩を先頭にして迹化他方の諸菩薩、梵天・帝釈・四天王等にいたる大衆に付嘱がなされた。本化・迹化に通じて付嘱されるゆえに、これを総付嘱ともいうのである。

さらに、総付嘱は法華経一経だけでなく前後一代の一切経にわたり、一代諸経を付嘱するについて体外の辺を迹化に付嘱した。これには二意があり、一には正像二千年の機のため、二には末法弘通の序分のためである。また一代諸経の体内の辺は本化に付嘱して文底の流通としたのである。ゆえに神力品では正宗を付嘱し、嘱累品では流通を付嘱している。御書に「神力嘱累に事極まる」等と仰せられているのはこの意である。

次いで薬王品以下涅槃経等にも地涌の菩薩が去って後に重ねて付嘱があり、これを捃拾遺属という。（観心本尊抄二五一ページ一八行より二五二ページ一七行まで）

【摩訶止観】

天台大師が荊州玉泉山において著わしたもので、全十巻よりなり、法華経の肝心である理の一念三千が説き明かされているので、像法の法華経という。「摩訶止観」を著わしたことが、天台大師の出世の本懐である。「法華玄義」「法華文句」と共に天台の三大部とされている。

本書によって天台は諸大乗教の円義を総摂して一念三千の法門を立て、法華円頓の行法をあますところなく明かした。

天台大師の弟子・章安も摩訶止観冒頭の釈に「止観の明静なる前代に未だ聞かず」と書き、仏法の極意を説き明かしていることは、いまだかつて聞かなかったことである、と摩訶止観を称嘆している。

日蓮大聖人は兄弟抄（一〇八七ページ）に、次のように仰せになっている。

されば天台大師の摩訶止観と申す文は天台一期の大事・一代聖教の肝心ぞかし、仏法漢土に渡って五百余年・南北の十師・智は日月に斉く徳は四海に響きしかどもいまだ一代聖教の浅深・勝劣・前後・次第には迷惑してこそ候いしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず、妙法蓮華経の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を取り出して三国の一切衆生に普く与へ給へり、此の法門は漢土に始るのみならず月氏の論師までも明し給はぬ事なり、然れば章安大師の釈に云く「止観の明静なる前代に未だ聞かず」云云、又云く「天竺の大論尚其の類に非ず」等云云、其の上摩訶止観の第五の巻の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞ

かし、此の法門を申すには必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず、第五の巻に云く「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」等云云、此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ。

【六即】

天台大師が、法華経の円意で立てた修行の位である。すなわち理即、名字即、観行即、相似即、分真即、究竟即の六即位である。

理即とは迷いの凡夫であっても理の上で仏界を具しながらいまだ仏界が顕現されない位。名字即とは「三位の諦を聞く」位、また「一切の法は皆是れ仏法なりと通達し解了する」位とされている。観行即とは止観に「所行は所言のごとく所言は所行のごとし」とあるように、実践がともなう位。相似即とは「八十八使の見惑を断じ、八十一品の思惑を断じ、九品の塵沙を断じた」位とされている。分真即とは、四十二位の無明のうち最後の元品の無明だけを残してあとの四十一品を断じた位とされる。究竟即とは元品の無明を断じた極聖の位をいう。

末法の信心にあてはめて、日蓮大聖人の御書には次のようにある。

御義口伝下（七五二ページ）第一南無妙法蓮華経如来寿量品第十六の事。……六即の配立の時は此の品の如来は理即の凡夫なり頭に南無妙法蓮華経を頂戴し奉る時名字即なり、其の故は始めて聞く所の題目なるが故

なり聞き奉りて修行するは観行即なり此の観行即とは事の一念三千の本尊を観ずるなり、さて惑障を伏するを相似即と云うなり化他に出づるを分真即と云うなり無作の三身の仏なりと究竟したるを究竟即の仏とは云うなり。

すなわち、理即の位は、いまだ信心しない人。名字即とは御本尊をいただいて信心した人。観行即とは朝晩の勤行をきちんとやり、功徳を感じている人。相似即とは三障四魔を粉砕していく人。分真即とは折伏に励み、御本尊流布に邁進している人。究竟即の仏とは永遠の生命を感得した、成仏の境涯に達した方で、別しては、無作三身如来であられる御本仏日蓮大聖人お一人である。そして、日蓮大聖人の下種仏法では「即身成仏」のゆえに名字妙覚といい、名字即の凡夫が御本尊を拝んで、仏の生命を感得したときが、すなわち妙覚の仏である。ゆえに天台宗のような立て分けはいらないのである。

【五十二位】

大乗の菩薩の修行する位を五十二に立て分けたもの。釈迦仏法の別教である華厳経や菩薩瓔珞本業経に説かれている。

十信（信心・念心・精進心・慧心・定心・不退心・回向心・護法心・戒心・願心）
十住（発心住・治地住・修行住・生貴住・具足方便住・正心住・不退住・童真住・法王子住・灌頂住）
十行（歓喜行・饒益行・無違逆行・無屈撓行・無癡乱行・善現行・無著行・難得行・善法行・真実行）

十回向（救護衆生離衆生相回向・不壊一切回向・等一切諸仏回向・至一切処回向・無尽功徳蔵回向・入一切平等善根回向・等随順一切衆生回向・真如相回向・無縛無著解脱回向・入法界無量回向）
十地（歓喜地・離垢地・発光地・焔慧地・極難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地）
等覚
妙覚

五十二位
- 十信——退位・凡夫菩薩未だ見思を断ぜず
- 十住
- 十行——不退位
- 十回向——見思塵沙を断ぜる菩薩
- 十地
- 等覚——無明を断ぜる菩薩
- 妙覚——無明を断じ尽くした仏

一代聖教大意（三九五ページ）此の教（別教）の意は五十二位を一一の位に多倶低劫を経て衆生界を尽して仏に成るべし一人として一生に仏に成る者無し、又一行を以て仏に成る事無し一切行を積んで仏と成る微塵を積んで須弥山と成すが如し、華厳・方等・般若・梵網・瓔珞等の経に此の旨分明なり、但し二乗界の此の戒を受くる事を嫌ふ、妙楽の釈に云く「偏く法華已前の諸経を尋ぬるに実に二乗作仏の文無し」文。

この御文のとおり、五十二位の段階を経て成仏した者はいないのである。

【三種の教相】

天台が、法華経と爾前経との勝劣を、三種の点において明らかにしたものである。

第一に根性の融不融の相

爾前経では衆生の根性が種々に分かれて不同であり、その機根に応じて法が説かれた。すなわち声聞・縁覚・菩薩と、その説法もバラバラであった。これは根性の不融である。

しかるに、法華経の迹門にくると、衆生の根性が熟して、みな一様になったため、法華一乗の法を聞くに耐えられるようになった。すなわち根性が円融して、すべて法華経の一仏乗に統合されたのである。そして、方便品でまず舎利弗が成仏の記別を受け、ついで譬喩品では迦葉等の四大声聞が、記別を受けるのである。

これは根性の融である。

第二に化導の始終不始終の相

観心本尊抄（二四九ページ）に「設い法は甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず還って灰断に同じ化の始終無しと云は是なり」とある。仏の弟子に対する化導は、まず仏が弟子に仏種を下すことに始まる。ついで、それを熟させ、ついに得脱させることで、化導は終わるのである。これすなわち、化導の始終である。

しかるに、この過程が明らかにされたのは、法華経の迹門化城喩品第七において、大通下種、三千塵点劫が明かされたのが初めである。すなわち過去三千塵点劫の昔に、釈迦牟尼仏は、大通智勝仏の第十六王子とし

て、父の大通仏が説いた法華経を説法した。その法華経を聞いて仏の種子を植えた者が、いま法華経を聞いて成仏する声聞の弟子であると、その化導の始めを説き明かした。そして三千塵点劫の昔に下種した弟子の根性が熟したゆえに、いままたこの世に出現して、四十余年のあいだ教化してこれを調熟し、最後に法華経を説いて得脱させると、今日の化導の始めを明かしたものである。

第三に師弟の遠近不遠近の相

師弟の遠近と不遠近とは、仏の久遠の本地の開顕と不開顕との差である。すなわち、爾前経では、仏はその本地をかくして、この世に生まれて、初めて菩提樹の下で成道した始成正覚の仏であると説く。しかるに法華経本門寿量品では、五百塵点劫の昔に成仏し、それ以来、この娑婆世界に出現して衆生を教化してきたと仏の本地を明かされた。ここで、いまこの世での仏と弟子との関係は近いものである。しかし、この近い関係は、この世だけの関係ではなく、その過去をたずねれば、実は遠い五百塵点劫以来の長い間の師弟の関係があることが明らかにされたのである。このように仏と弟子との関係は、近くして、また遠いのである。これ師弟の遠近の相である。

「本此の仏に従って初めて道心を発し亦此の仏に従って不退地に住す」とは、この師弟の遠近の相を述べたものである。しかるに、仏の本地が明かされない爾前経ならびに迹門においては、仏は始成正覚の仏であるゆえ、仏と弟子との関係も、たんにこの世かぎりのものであるにすぎず、遠近の相が明かされないゆえ、不遠近というのである。

これを図表にし、また日蓮大聖人の第三の法門と比較するならば、

一、根性の融不融の相
　融は法華
　不融は爾前
　方便・譬喩品―迹門

二、化導の始終不始終の相
　始終は法華
　不始終は爾前
　化城喩品―迹門

三、師弟の遠近不遠近の相
　遠近は法華本門
　不遠近は爾前迹門
　寿量品―本門

在世

日蓮大聖人の第三の法門とは、

一、権実相対
　迹門跨節（かせつ）
　爾前当分
　迹門

二、本迹相対
　本門跨節
　迹門当分
　本門

三、種脱相対
　種本跨節
　脱本当分
　種本

末法

すなわち、日蓮大聖人の法門からみれば、天台の三種の教相の根性の融不融の相と化導の始終不始終の相は共に法華経迹門第一の法門で、権迹（ごんしゃく）相対である。次に師弟の遠近不遠近の相は日蓮大聖人の本迹相対第二法門となるのである。さらに日蓮大聖人の第三の法門とは一重立ち入った種脱相対であり「日蓮が法門は第三法門なり」と仰せられたのがこれである。

常忍抄（九八一ページ）　総じて御心へ候へ法華経と爾前と引き向えて勝劣・浅深を判ずるに当分・跨節の事に三つの様有り日蓮が法門は第三の法門なり、世間に粗夢の如く一二をば申せども第三をば申さず候、第三の法門は天台・妙楽・伝教も粗之を示せども未だ事了えず所詮末法の今に譲り与えしなり。

四条金吾殿御返事（一一一六ページ）　今日蓮が弘通する法門は・せばきやうなれども・はなはだふかし、其の故は彼の天台・伝教等の所弘の法よりは一重立入りたる故なり、本門寿量品の三大事とは是なり、南無妙法蓮華経の七字ばかりを修行すればせばきが如し、されども三世の諸仏の師範・十方薩埵の導師・一切衆生皆成仏道の指南にてましますなれば・ふかきなり。

【五種の妙行】

五種頓修の妙行とも、五種の修行とも、五種法師ともいう。

法華経法師品第十にある文で「若し復人有って、妙法華経の、乃至一偈を受持、読誦し、解説、書写し、此の経巻に於いて、敬い視ること仏の如くにして云云」とある。

また、天台の文句には「此の品に五種法師あり、一に受持、二に読、三に誦、四に解説、五に書写なり云云」とある。

すなわち五種とは受持、読、誦、解説、書写をいうのであって、読とは経文を見ながら読むこと、誦とは暗誦することである。また解説とは化他のために法を説くことであり、書写とは経文を書写する修行である。

しかし、末法今時においては日蓮大聖人は受持即観心とされ、

日女御前御返事（一二四五ページ）法華経を受け持ちて南無妙法蓮華経と唱うる即五種の修行を具足するなり、

此の事伝教大師入唐して道邃和尚に値い奉りて五種頓修の妙行と云う事を相伝し給ふなり。

受持をもって末法の正行とし一切の修行をすべて包含するのである。すなわち唱題・受持は正行、方便・寿量の二品読誦は助行となるのである。

さらに、観心本尊抄（一二四六ページ）には「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」と、受持即観心を明かされている。文の心は釈尊の因位の万行・果位の万徳は妙法五字に具足しているのであるから、妙法五字を受持すれば万行を修行したのと同じことになるのであると仰せである。日寛上人は末法相応抄上（富要三巻一五二ページ）に、御本尊を受持して唱題することに五種の妙行を含むことを明かされている。

法師功徳品に云く「若善男子、善女人、受持是法華経、若読若誦若解説若書写、是人当得六根清浄」云云、

此の文の中・若し字の顕わす所の五種の妙行に随って一行を修すれば即ち六根浄を得るなり……況んや復・五種の妙行は一部に限るに非ず、今信者の為に更に三義を示さん。

一には一字五種の妙行、修禅寺決に云く「妙の一字に於いて五種法師の行を伝う、広く五種を行せば心散乱する故に要に非ず、大師好んで常に此の行を修し、亦之を以て道俗に授く、和尚云く一字五種の妙行」云云。

二には要法五種の妙行、又云く「天台大師・毎日行法日記に云く読誦し奉る一切経の総要毎日一万返」云云、玄師伝に云く「一切経の総要とは所謂南無妙法蓮華経の五字なり」云云。

三には略品五種の妙行、大覚抄十八（月水御書一二〇一ページ）に云く「二十八品の中に勝れて・めでたきは方便品と寿量品にて侍り、余品は皆枝葉にて候なり、されば常の御所作には方便品の長行と寿量品の長行とを習い読ませ給え」云云。

三義分明・宛も日月の如し故に広く之を行ぜずと雖も五種の妙行を闕くこと無し一部読誦の輩還りて闕く所有り、本因妙抄（八七五ページ）に云く「彼は一部を読誦すと雖も二字を読まざること之在り・此れは文文句句・悉く之を読む」云云。

また日寛上人は如説修行抄筆記（富要四巻四〇八ページ）のなかで、次のようにいわれている。

五種法師の中の受持・読・誦・書写の四種の修行は自行であり、解説は化他である。自ら妙法を受持し、読誦し、書写するのは自らの修行である。他人を教導して修心をなさしめるのは化他である。

五種の行という名は在世と同じであるけれども、行の相は不同なのである。すなわち妙法を受持し、妙法を読誦し、妙法を解説するのである。また妙法を書写するのである。法華経一部を広く修行するのではなくて、略を簡んで肝心の五種の行である。

御義口伝下（七八三ページ）にいわく「此の妙法等の五字を末法・白法隠没の時上行菩薩・御出世有って五種の修行の中には四種を略して但受持の一行にして成仏す可しと経文に親り之れ有り……此の経を受持し奉る心地は如説修行の如なり此の如の心地に妙法等の五字を受持し奉り南無妙法蓮華経と唱え奉れば忽ち無明煩悩の病を悉く去って妙覚極果の膚を瑩く事を顕す云云」と。

日女御前御返事（一二四五ページ）にいわく「法華経を受け持ちて南無妙法蓮華経と唱うる即五種の修行を具足

するなり……日蓮が弟子檀那の肝要是より外に求る事なかれ」と。

中古の掟に云く「日蓮聖人は方便寿量の両品を助行に用いたもうなり。文を見て両品を読むは読、そらに自我偈を誦むは誦なり、今此三界の文を講じ塔婆などに題目を書写するは受持等の五種の妙行と意得べきなり」受持無行余行徒然の故に受持の行は肝心である。釈に云く「信力の故に受け念力の故に持つ」と。末法今時の受持というのは本門の本尊たる題目の五字を信ずる義である。

御義口伝下（七八三ページ）に云く「五種の修行の中には四種を略して但受持の一行にして成仏す可しと経文に親り之れ有り」と。同じく（七七二ページ）云く「末法当今は此の経を受持する一行計りにして成仏す可しと定むるなり」と。

故に末法は但受持の一行である。この受持の一行の中に余の四行を具すのである。読誦とは南無妙法蓮華経と唱えることである。故に御義口伝上（七四三ページ）に云く「読持此経の事、御義口伝に云く五種の修行の読誦と受持との二行なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは読なり此の経を持つは持なり此経とは題目の五字なり」云云。

解説していわく、御義口伝下（七五六ページ）に云く「末法に入って説法とは南無妙法蓮華経なり今日蓮等の類いの説法是なり」、御義口伝上（七四三ページ）にいわく「説とは南無妙法蓮華経なり、今日蓮等の類いは能須臾説の行者なり」と。

以上が日寛上人の如説修行抄筆記の一節である。これらの御文言によると、末法当今は受持の一行のなかに五種の行があるのである。熟益の五種の行を捨てて下種仏法の末法に相応した五種の妙行を立てるのである。

【従因至果・従果向因】

従因至果は従因向果ともいい、因より果に至るの意であり、従果向因とは果より因に向かうの意である。従因至果については、百六箇抄（八五五ページ）に「従因至果・中間今日の本迹、像法の修行は天台・伝教・弘通の本迹は中間・今日の迹門を因と為し本門修行を果と為るなり」と。またいわく「本果の妙法蓮華経の本迹、今日の本果は従因至果なれば本の本果には劣るなり、寿量の脱益・在世一段の一品二半は舎利弗等の声聞の為の観心なり、我等が為には教相なり、情は迹劣本勝なり、又滅後像法相似・観行解了の行益も以て是くの如し、南岳・天台・伝教の修行の如く末法に入って修行せば帯権隔歴の行と成って我等が為には虚戯の行と成る可きなり、日蓮は一向本・天台は一向迹・能く能く之を問う可し」とある。

また日寛上人は、末法相応抄下（富要三巻一七四ページ）に百六箇抄の「今日の本果は従因至果す本の本果に劣る」の文をあげて「謂く今日の本果は迹の因門を開して本の果門を顕わす故に従因至果なり」と。

すなわちインド応誕の釈尊は（今日の本果）迹の因門を開して本の果門（久遠五百塵点劫本果第一番成道の果）を顕わすゆえに従因至果なのである。ここにおける所顕の本果とは本因に望むならばなお本のうえの迹でしかないのである。

次に従果向因について、

百六箇抄（八六三ページ）久遠従果向因の本迹、本果妙は釈迦仏・本因妙は上行菩薩・久遠の妙法は果・今日

の寿量品は花なるが故に従果向因の本迹と云うなり。

御義口伝上（七二九ページ）末法に至って従果向因の一雨を弘通するなり一雨とは題目に余行を交えざるなり。因に向かうとは久遠にたちもどるということである。

さらに末法相応抄下（富要三巻一七四ページ）には「本の本果は迹の本果を開して本の本因を顕わす故に従果向因なり、勝劣を言わば今日の本果は迹の因門を開して本の果門を顕わす、所顕の本果を若し本因に望むれば仍本の上の迹なる故に今日の本果は劣るなり、若し本の本果は迹の本果を開して本の本因を顕わす、所顕の本因は独一の本門の故に本の本果は勝るるなり、所顕の法門・勝劣殊なりと雖も今日の本果は同じく是れ色相荘厳の応仏昇進の自受用身なり」と。

すなわち従果向因は本の本因、下種独一本門のことをさすのである。

生活に約して論ずれば、折伏をうけて入信し、仏道修行に励んで幸福になっていく姿は従因至果であるが、その幸福になったという結果のそもそもの根本原因をたずねていくと、久遠元初以来、御本仏日蓮大聖人の本眷属として、三大秘法を信じていたという本因がわかるわけで、これが従果向因といえる。「地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」（諸法実相抄一三六〇ページ）とは従果向因である。

【四句の要法】

法華経神力品第二十一に次のようにある。

爾の時に仏、上行等の菩薩大衆に告げたまわく、諸仏の神力は、是の如く無量無辺不可思議なり。若し我、是の神力を以って、無量無辺百千万億阿僧祇劫に於いて、嘱累の為の故に、此の経の功徳を説かんに猶尽すこと能わじ。要を以って之を言わば、如来の一切の所有の法（名）、如来の一切の自在の神力（用）、如来の一切の秘要の蔵（体）、如来の一切の甚深の事（宗）、皆此の経に於いて宣示顕説す。是の故に汝等如来の滅後に於いて、応当に一心に受持、読、誦、解説、書写し、説の如く修行すべし。所在の国土に、若しは受持、読、誦、解説、書写し、説の如く修行すること有らん。若しは経巻所住の処、若しは園中に於いても、若しは林中に於いても、若しは樹下に於いても、若しは僧坊に於いても、若しは白衣の舎にても、若しは殿堂に在っても、若しは山谷曠野にても、是の中に、皆応に塔を起てて供養すべし。所以は何ん。当に知るべし。是の処は即ち是れ道場なり。諸仏此に於いて阿耨多羅三藐三菩提を得、諸仏此に於いて法輪を転じ、諸仏此に於いて般涅槃したもう。

以上の全文は、結要付嘱の文であり、四つに分けることができる。初めに称歎付嘱、これは付嘱する法体・本門の本尊の功徳を歎ずるのである。「此の経の功徳を説く」とは妙法蓮華経の功徳である。

二に「要を以って之を言わば」からが、本尊付嘱である。この文を四句の要法といい、特に結要付嘱の中心をなしているのである。これは如来の一切の名体宗用、すなわち本門の本尊・妙法蓮華経の五字を宣示顕説するのである。ゆえに「皆此の経に於いて」というのである。また、この本尊をもって、地涌千界に付嘱するから本尊付嘱という。

上行菩薩結要付属口伝（五四一ページ）　結要付属の事

結要勧持四―
- 初に称歎付属・爾時仏告　猶不能尽
- 二に結要付属・以要言之　宣示顕説
- 三に正勧付属・是故汝等　起塔供養
- 四に釈勧付属・所以者何　而般涅槃

疏の十に云く「爾時仏告上行の下は是れ第三に結要付属なり」と云云、又云く「結要に四句有り、一切法とは一切皆是れ仏法なり此は一切皆妙名を結するなり・一切力とは通達無礙にして八自在を具す此れは妙用を結するなり・一切秘蔵とは一切処に遍して皆是れ実相なり・此れは妙体を結するなり・一切深事とは因果は是れ深事なり此は妙宗を結するなり、皆於此経宣示顕説とは総じて一経を結する唯四ならくのみ其枢柄を撮って之を授与す」と云云。

天台大師は、四句の要法をもって結要付嘱といい、本尊付嘱とはいわなかった。それはなぜかといえば、「内鑑冷然」であり、末法に譲るために、はっきりとはいわなかったのである。いまは末法であるから、末法適時の説き方をするわけである。次にその明文をあげることにする。

観心本尊抄（二四七ページ）　此の本門の肝心南無妙法蓮華経の五字に於ては仏猶文殊薬王等にも之を付属し給わず何に況や其の已外をや但地涌千界を召して八品を説いて之を付属し給う、其の本尊の為体本師の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華経の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏・釈尊の脇士上行等の四菩薩云云。（その本尊の体たらくとは、すなわち本門の肝心、南無妙法蓮華経の五字をさして「其の本尊」というのである）

新尼御前御返事（九〇五ページ）今此の御本尊は教主釈尊・五百塵点劫より心中にをさめさせ給いて世に出現せさせ給いても四十余年・其の後又法華経の中にも迹門はせすぎて宝塔品より事をこりて寿量品に説き顕し神力品・属累に事極りて候いしが……上行菩薩等を涌出品に召し出させ給いて、法華経の本門の肝心たる妙法蓮華経の五字をゆづらせ給いて云云。

以上の二文を思い合わすならば、本尊付嘱の義は明らかである。

三に「是の故に汝等」の下は題目勧奨であり、四に「所在の国土の下」は戒壇勧奨である。（さらに詳しくは日寛上人の依義判文抄第三の第七の神力品の爾時仏告上行等の文を参照・富要三巻一二三ページ）

また、これを天台の五重玄に約せば、

如来の一切の所有の法―名玄義（三大秘法全体をさす）
如来の一切の自在の神力―用玄義……戒壇
如来の一切の秘要の蔵―体玄義……本尊
如来の一切の甚深の事―宗玄義……題目

となる。この文に三大秘法は明らかである。

すなわち妙法蓮華の名のなかに用（仏の化導する働き）体（仏の悟りの実体）宗（仏の悟りに達すべき行）があり、この用・体・宗は即本門の三大秘法にあてはまるのである。自在の神力は疑いを断じて信を生じさせる用で、われわれを大御本尊に帰依せしめ、成仏得道に入らしめるゆえに本門の戒壇であり、秘要の蔵は御本仏の体だから本門の本尊であり、甚深の事は修行だから本門の題目である。

第三編　日蓮大聖人の教義

【宗教の五綱】

日蓮大聖人の仏法は、世界最高唯一の宗教であり、しかも、ただ日蓮正宗にのみ正しく承継されている。日蓮正宗以外の他の日蓮宗各派は、いずれも日蓮大聖人の教えを歪曲し、誹謗する邪宗教である。およそすべての物に測る基準があるように、宗教の正邪・勝劣・高低・浅深も、厳正細密な基準による判別すなわち宗教批判の原理によって判定され、誤りのない宗教が選び出されなくてはならない。現代において比較宗教学等があるが、古来、仏教各派では、教判によって法門を立てる根拠とし、他宗との勝劣異同を明らかにしてきたのである。中国においては、天台大師が五時八教判、三種の教相判等の優秀な教判をもって天台宗を宣揚した。日本に出現の日蓮大聖人は、全世界の哲学・宗教界を通じて、まったく卓絶した古今無類の総合的な教判を打ち立てた。これが宗教の五綱である。現代の思想、哲学においても、このようなすぐれた科学的な思想批判の原理は存在しないのである。日蓮大聖人は、この厳密な宗教批判の原理によって、すべての宗教の優劣を判定して、哲学的に思想的に科学的に最高のすぐれた大仏法を樹立したのである。

すなわち日蓮大聖人は開目抄下（二三二㌻）に「智者に我義やぶられずば用いじとなり」また妙一女御返事（一二五九㌻）に「其の理にまけてありとも其の心ひるがへらずば・天寿をも・めしとれかし」すなわち「もし万が一にも私より偉大なる聖哲が現われて、私の教義が打ち破られない限り、父母を殺されるような迫害があっても、日本の国王としようというような誘惑があっても、いささかもひるまず正法を弘め、全民衆の柱、

眼目、大船とならんという誓いを絶対に破るまい」また「もし私の教義が少しでも間違っているとわかっても改めないならば、私の命をとってください」という有名な宣言をなされ、あくまでも厳格な科学的な態度と絶対の確信に立っていたのである。

さらに、日蓮大聖人は「日蓮仏法をこころみるに道理と証文とにはすぎず、又道理証文よりも現証にはすぎず」（三三蔵祈雨事 一四六八㌻）と述べ、高い教義の文献的な証拠である文証、教えが道理にあって科学的、哲学的な批判にたえうる理証、また信ずる者がすべて救われるという現証の三証具足をもって万全を期している。

日蓮大聖人の宗教の五綱とは宗教の五義ともいい、教、機、時、国、教法流布の先後の五つであり、弘長二年（西紀一二六二年）二月、伊東の流罪において著わし、教機時国抄（四三八㌻）に説かれてある。教、機、時、国、教法流布の先後判のなかで、教判は禅宗を除く各宗派でそれぞれ立てているが、天台宗の教判が特にすぐれていた。また機判については、浄土宗が力を入れていたが、まったく見当違いな機判である。さらに時判、国判は伝教大師が述べているが、いまだ完全でなかった。教法流布の先後に関してはいまだ誰人も説いていなかった。しかるに、末法の御本仏日蓮大聖人が、ここに実践のうえに立って、宗教の五綱という偉大かつ完全なる宗教批判の原理を打ち出したのである。

教を知るとは

「教を知る」とは、仏・菩薩の説いた経・律・論および、あらゆる聖賢の思想・哲学・宗教のなかで、いずれが最高であるかを見きわめていくことである。これには、五重相対、五重三段、四重興廃、四重浅深、三重秘伝等の教判がある。詳しくは別項で論ずることとする。

教機時国抄（四四〇㌻）所以に法華経は一切経の中の第一の経王なりと知るは是れ教を知る者なり。

機を知るとは

「機を知る」とは、衆生が教を受けられる状態にあるかどうかを見定めることである。釈尊の十大弟子の一人で智慧第一といわれた舎利弗も、衆生の機根を知らずに説法して失敗したといわれている。ここで、民衆がいかなる教えによって成仏するか、永遠の絶対的幸福をうるか、その民衆の機根を知らなければならない。

釈尊の仏法では、衆生の機根に利鈍・純雑がある等と説いており、それぞれの機根に応じて、別々の教えを説いた。それは、釈尊の仏法の衆生は、何度もこの世に生まれてきては、一人仏道修行を励んできた本已有善、すなわち本より已に善のある衆生である。釈尊の在世に救われなかった者も、釈尊滅後千年の正法時代、釈尊滅後千年から二千年までの像法時代にみな出現して得道した。

しかるに釈尊滅後二千年以後の末法の衆生は、本未有善、すなわち本よりいまだ善あらざる衆生で、ぜんぜん釈尊の仏道修行を積んでいないけれども、日蓮大聖人の仏法を信じて即身成仏する機根の衆生である。日蓮大聖人は、教機時国抄（四三八ページ）に「謗法の者に向っては一向に法華経を説くべし毒鼓の縁と成さんが為なり……信謗共に下種と為ればなり」と述べている。積善の功がない衆生であり、しかも即身成仏の大仏法であるゆえに、強いて説いて信・謗ともに救うのである。

末法の法華経とは、とりもなおさず三大秘法の南無妙法蓮華経のことである。すなわち三大秘法の仏法以外に幸福になれないのが、末法の機根である。

また、教育の発達した二十世紀の現代に、葬式以外になんの用もないような既成仏教や、想像する以外に立証できない天地創造神を立てるキリスト教等を、はたして、まじめに信ずることができるであろうか。科学的

な生活を営んでいる現代人は、唯心思想、唯物思想を止揚する日蓮大聖人の色心不二の大生命哲学を求めて集いきたるのが当然といえよう。特に批判力たくましい青年層や学生層が、日蓮正宗創価学会に、多数入会している現実が、これを証明している。

時を知るとは

時の流れに逆行したために、悲劇的な終末をむかえざるをえなかった人々は、古今東西の歴史に数多く現われてくる。いわんや、仏法を学ぼうとする者は、まず時を知らなければならない。仏法の時といえば、正像末の三時が、最も大事である。すなわち釈尊は、自分の入滅後を三つの時代に大きく区分している。初めの千年を正法時代、次の千年を像法時代、釈尊滅後二千年以後を末法時代という。時は社会全体に大きく影響をもつゆえ、釈尊も説く時いまだこないときには、父母等にも聖賢にも、軽々しく最高の法華経を説くことがなかった。

釈尊の予言のように、正法時代には法華経の精神をもとに竜樹・天親が権大乗を弘め、像法時代には天台・伝教が法華経の迹門を弘めたのが、仏法の正統であった。しかして現在は末法の時代であると知るのが時を知ったことである。

釈尊は三千年前の法華経等に、明確に、末法の時代は、釈尊の仏法は滅して、次に偉大なる本仏が出現し、全世界の民衆を救うであろうと予言している。

その教説に寸分もたがわず出現なされたのが、末法の御本仏日蓮大聖人である。ゆえに日蓮大聖人の仏法を信ずる人こそ、真に時を知る人である。

さらに、日蓮大聖人の仏法が流布されていくうえにも時があった。日蓮大聖人は建長五年、御年三十二歳で

三大秘法のなかの題目をまず唱えられ、次に弘安二年、御年五十八歳で本門戒壇の大御本尊を建立され、次に本門の戒壇を建立せよと滅後の弟子にご遺命になった。日蓮大聖人滅後六百八十余年、いま南無妙法蓮華経を唱える者は、全国に数千万人となった。しかし日蓮正宗信徒以外は、肝心の御本尊を知らないゆえに、狐や蛇や先祖の戒名、あるいは釈尊像や鬼子母神等の誤れる本尊に向かって南無妙法蓮華経を唱えている現状であった。

この時にあたって、日蓮正宗創価学会は、第二代戸田会長が昭和二十六年五月三日、会長就任と共に「いまこそ本尊流布の時なり」と叫んで、日蓮正宗の正しい大御本尊を、日本全国民いな全世界の民衆に流布し、真の幸福生活、平和社会を実現するために折伏の大前進を開始した。そして、いま、第三代池田会長の時代に、さらに本尊流布は全世界にわたって着々となされている。

国を知るとは

その国の国情を知らなければ仏法を流布することはできない。日蓮大聖人は教機時国抄（四三九ページ）に「国とは仏教は必ず国に依って之を弘むべし国には寒国・熱国・貧国・富国・中国・辺国・大国・小国・一向偸盗国・一向殺生国・一向不孝国等之有り、又一向小乗の国・一向大乗の国・大小兼学の国も之有り、而るに日本国は一向に小乗の国か一向に大乗の国か大小兼学の国なるか能く之を勘うべし」と述べている。

すなわち、その国によって、邪智・謗法の国、無智・悪国、仏法に縁の薄い国、小乗教に縁のある国、大乗教に縁のある国等がある。

日本は大乗に縁のある国であり、特に法華経に縁が深い国である。法華経陀羅尼品では、四方を守る四天王

のなかで、東方・北方を守る持国天王、毘沙門天王の二天のみが法華経を持つものを守護すると誓っている。これは、インドより東北方の中国および日本に法華経が流布することを暗示しているものである。また瑜伽論には「東方に小国有り其の中に大乗の種姓のみ有り」と書かれている。また漢訳妙法蓮華経の訳者として仏教学者である、羅什三蔵の師・須利耶蘇摩三蔵は、羅什に法華経を与えて、ねんごろに「仏日西山に隠れ遺耀東北を照す茲の典東北の諸国に有縁なり汝慎んで伝弘せよ」といったという。

これらは、すべてインドの東北にあたる日本国をさすことは明らかであり、日本国に大乗仏法、特に法華経の弘まるべきことを説いているのである。

像法時代、伝教大師は比叡山に法華経迹門の戒壇を立て、日本民衆はことごとく法華経に帰依して法華経迹門の広宣流布は成就した。いまは日蓮大聖人が末法の御本仏として、三大秘法の大仏法を日本に建立された。

観心本尊抄（二五四ページ）　此の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し。

三大秘法禀承事（一〇二二ページ）　霊山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か。

顕仏未来記（五〇八ページ）　仏法も又以て是くの如し正像には西より東に向い末法には東より西に往く……仏法必ず東土の日本より出づべきなり。

諫暁八幡抄（五八八ページ）　天竺国をば月氏国と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑国をば日本国と申すあに聖人出で給わざらむ、月は西より東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき相なり、日は東より出づ日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり。

これは日本出現の大仏法が中国、インド、さらに全世界へと流布するという予言であり、いまやその予言は明らかに的中しつつある。全世界の国々の民衆はこの大動乱の最中に、大仏法を求めているという姿を知るのを、正しく国を知るというのである。

教法流布の先後を知るとは

「教法流布の先後を知る」とは、先に弘まった教えを知って、後の教えを弘めよということである。宗教批判の原理によって明らかなように、外道よりも内道、小乗教よりも大乗教、権大乗教よりも実大乗教、法華経迹門よりも本門としだいに教えが高くなっている。

いまだ仏教の弘まったことがない国ならば小乗教を弘めてもよい場合がある。しかし法華経の迹門が広宣流布したことのある日本の国には、いまさら小乗教や権大乗教を弘めても、なんの役にも立たない。すなわち日本には、日蓮大聖人の立てた本門寿量品文底下種の三大秘法が弘められるべき順序となっている。このことを知るのが「教法流布の先後を知る」ことである。

【五重の相対】

五重の相対とは、一切の宗教を比較検討し、その浅深・高低・優劣を判釈する五つの批判原理をいう。一、内外相対、二、大小相対、三、権実相対、四、本迹相対、五、種脱相対であり、この判定によって、日蓮大聖人が立てられた三大秘法の仏法が最高であることが明らかになるのである。

内外相対

内とは内道で仏教のことをいう。外とは外道で仏教以外のバラモン教、キリスト教、イスラム教、儒教、ヒンズー教等をさす。日本の新興宗教である天理教、PL教等も外道の一つである。この比較の基準は因果の理法にある。

仏教は、因果すなわち原因結果の法則のうえに立って教えを説くので、科学的であるが、外道は因果を無視した教えを立てるので、非科学的であり、民衆を幸福にする生活指導の宗教とはなりえない。ゆえに、内外相対して、内道の仏教が勝れ、外道は劣るのである。

たとえば、キリスト教の天地創造説や処女懐胎、復活、昇天説等の唯心的、観念的な生命論は、非科学的であるのに反し、仏教の生命観、宇宙観は、むしろ現代科学をリードする哲学であるといえる。

大小相対

仏教のなかにも、大乗教と小乗教がある。小乗教とは、倶舎宗、成実宗、律宗などをさし、阿含の四経をよりどころとして、小乗の戒律を立てる教えで、少ない範囲の人を、あるわずかな期間だけ救えるのである。しかし大乗教は、小乗教より教えが高邁であり、多くの民衆を長い期間にわたって救うことができる。ゆえに大乗教が勝れ、小乗教は劣るのである。

インドより中国、日本に伝来した仏教は、ほとんど大乗教であり、大乗教は現在、セイロン、ビルマ、タイ国等の東南アジアに弘まっている。しかし、最近、根本仏教、原始仏教等を唱える一部のものが阿含経等を重視しようというような動きがあるが、哲学的、思想的、歴史的に論じて、浅薄な根拠に基づく愚論である。また、日本の新興宗教のなかには、小乗教の理法をとって低級教義の補助としているものがあるのも、おかしなことである。

権実相対

同じ大乗教のなかにも、権大乗教と実大乗教がある。権とは真実に対して権という意味で、西方十万億土に極楽浄土があるとか、あらゆる理想を整えた金ピカの仏がいると説くのなどはこれである。権大乗の教えは、念仏宗、真言宗、禅宗などが立てる経文にあり、法華経を説くための誘引の教えであり、方便、権の教えにすぎない。これに対して、実大乗教とは法華経のことであり、法華経には真実の生命観、宇宙の実相、幸福生活確立の指導原理が説かれている。

釈尊は法華経の前に説いた無量義経において「四十余年未顕真実」すなわち「四十余年にわたって説いてきた権大乗の教えは、いまだ真実の哲学を説いていない。これから説く法華経こそ、まさしく真実の教えである」と宣言し、さらに法華経方便品第二においても「正直捨方便」すなわち「すなおに方便の教である権大乗教を捨て、唯一の正法、法華経を信ぜよ」と自ら命じていることを忘れてはならない。ゆえに、実大乗の法華経が勝れ、権大乗の華厳、法相、浄土、禅、真言、三論宗等の依経は劣っているのである。

本迹相対

法華経二十八品には本門と迹門とがある。迹門とは前半の十四品で、インドで仏になった釈尊が理論上の実相観を述べたものである。すなわち、諸法実相十如是の法門のうえから理の一念三千を説き、声聞（学者階級）や縁覚（一芸に秀でた人々）や菩薩（民衆を救っていく立ち場の人）や、それぞれ衆生が好むところに従って説いてきたいままでの権教を破り、人生の目的はただ一つ成仏する（絶対的な幸福境涯をつかむ）ことにあると示している。本門とは、後の十四品で、仏の具体的な振舞いや永遠の生命観に立った宇宙観等を説き、行動のうえから事の一念三千を説いている。

本門は真実の姿で、迹門はその影にあたり、また本門は実際生活のうえから説き、迹門は理論的、学問的な

説明をしているようなものである。たとえていえば、迹門とは家の設計図のようなものであり、本門は実際に建てた家のような関係にある。ゆえに、本門は勝れ、迹門は劣っているのである。

中国の天台大師は、迹門を表にし本門を裏にして理の一念三千を説き、その立ち場から本迹は異なるけれども不思議一なりと説いて天台宗を立てた。しかし、日蓮大聖人の独一本門の教えには遠くおよばない。しかるに、日蓮宗各派のなかでも、日蓮大聖人の滅後に、日興上人以外の五老僧は天台の弟子と名のり、本迹一致の邪義を立てた者がある。その流れが、いまの日蓮宗身延派や中山派などである。

日蓮大聖人は「法華経に又二経あり所謂迹門と本門となり本迹の相違は水火天地の違目なり、例せば爾前と法華経との違目よりも猶相違あり」（治病大小権実違目九九六ページ）と明らかに示されている。これに対して、本迹一致門流は、教相勝劣・観心一致というような邪義を立てたこともあったが、同じく「一念三千の観法に二つあり一には理・二には事なり天台・伝教等の御時には理なり今は事なり観念すでに勝る故に大難又色まさる、彼は迹門の一念三千・此れは本門の一念三千なり天地はるかに殊なりことなりと御臨終の御時は御心へ有るべく候」（治病大小権実違目九九八ページ）等の明文に打ち破られて本迹一致門流からも、多くの本迹勝劣を立てる新しい宗派ができることになった。日蓮宗身延派などの本迹一致派は、このように打ち破られ続けてきたので、最近では一致であるような、ないような、あいまいな教義を立てている。

種脱相対

法華経本門の中心は如来寿量品第十六である。ここに文上脱益、文底下種という二つの法門がある。そもそも仏教には種熟脱の法門があり、これを知らないで仏教を学べば、大きな混乱が起こるのである。ある時に、ある仏に従って、衆生が初めて説法を聞くのを下種という。長い間養育されていくの

を熟といい、最後にまたその仏にあって成仏得道するのを脱と名づける。この下種益、熟益、脱益を三益という。

法華経本門には、釈尊の仏法を信じた人々は、五百塵点劫という大昔に下種をうけ、たいへん長い間調熟されて、三千年前に釈尊がインドに出現して法華経本門寿量品を説いたのを信じて脱すると説いている。ゆえに如来寿量品第十六の文上の教えを脱益というのである。しかるに、過去に下種されながら釈尊の寿量品にあえなかった者や、インドに生まれたときに下種をうけた者は、釈尊滅後の正法千年間にいろいろな仏法の教えによって成仏した。また成仏できずに残った衆生に対して、釈尊入滅後一千年から二千年にわたる像法時代の教主・天台大師は、理の一念三千の珠を摩訶止観につつんだ観念哲学をもって、調熟しつつ得道せしめた。これを熟益の教えという。

しかして、同じ寿量品に、五百塵点劫と限られた仏でなく、宇宙と共に実在する無始無終の常住の本仏、久遠元初の自受用報身如来のことが説かれている。釈尊はもとより、あらゆる仏がみなこの久遠元初の自受用報身如来に教えをうけて成仏することができたという根本の仏である。この仏は南無妙法蓮華経をもともと所持しており、釈尊滅後二千年すぎた末法の時代に、あらゆる釈尊の仏教が滅した時に出現して、本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目という三大秘法を打ち立てられることを示されている。これを文底下種の法門という。

現代のわれわれは、この日蓮大聖人の仏法を信ずれば、釈迦仏法のような長い期間にわたる修行の必要もなく、現世において絶対の幸福を勝ち取ることができる。すなわち、この文底下種仏法は、下種益、熟益、脱益の三益をぜんぶ即時にそなえている。ゆえに下種の教えが勝れ、熟脱の教えは劣るのである。

釈迦仏法の衆生は、文上脱益の衆生であり、現在の末法の衆生は、釈尊には直接に縁のない衆生であるゆえ

に、日蓮大聖人の文底下種法門によらなければ救われない。すなわち釈尊は末法には法華経のごとき白法も隠没すると予言し、日蓮大聖人は「今末法に入りぬれば余経も法華経もせんなし、但南無妙法蓮華経なるべし」（上野殿御返事一五四六ページ）また「法華経は文字はありとも衆生の病の薬とはなるべからず」（高橋入道殿御返事一四五八ページ）と仰せである。

日蓮宗と名のる宗派は多くあるが、本迹の勝劣まではわかっても、この第五の種脱相対の法門はいかなるところもわからず、ただ日蓮正宗のみが伝える深秘の法門である。ゆえに種脱相対して立てた法華経本門寿量品の文底下種の三大秘法を立てることを、あらゆる全世界の思想、哲学、宗教等を通じて、真に「教を知るもの」といえるのである。

次に種脱相対とは、日蓮正宗で勝手に立てたのではないかと疑う者がいるが、決してそうではない。種脱相対の法門こそ、日蓮大聖人の最高の明らかな教説である。

日蓮大聖人のご相伝の書を別にすれば、開目抄と観心本尊抄はひじょうに重要な御書である。日蓮大聖人は開目抄に五重の相対を明かし、最後に種脱相対を説かれた。また観心本尊抄には五重の三段を明かして文底下種三段に説かれたのである。四重の相対とか四重の三段等を立てるのは、まったくの邪説である。御書のどこを拝してもそのようなことは説かれていない。すなわち開目抄上（一八九ページ）にいわく「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり」と。観心本尊抄（二四九ページ）にいわく「在世の本門と末法の始は一同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり」と。

また御義口伝上（七三五ページ）には「酒とは無明なり無明は謗法なり……酒に重重之れ有り権教は酒法華経は

醒めたり、本迹相対する時迹門は酒なり始覚の故なり本門は醒めたり本覚の故なり、又本迹二門は酒なり南無妙法蓮華経は醒めたり」と仰せである。すなわち「法華経の迹門と本門とは共に酒で、南無妙法蓮華経のみが醒めている」という仰せは、明らかに第五の種脱相対であり、文底下種三段にあたるものである。

ゆえに本迹相対を知らない日蓮宗身延派や中山派などは、三重の相対、三重の三段までしかないのである。また種脱相対を知らない顕本法華宗、本門法華宗、仏立宗等は、四重の相対、四重の三段までしか立てられないのである。これでは無明であり、謗法であり、日蓮大聖人の仏法ということはできない。

さらに、せっかく第五の法門として種脱相対とか教観相対とかいいながら、種熟脱は法門の違いではなく利益の違いだけの体同益異である等と主張するものがいる。しかし、第五の種脱相対、文底下種三段の法門は、種と脱の利益はもちろん違いがあり、その法門も、説法する仏も、序、正、流通の三段の立て分けも、化導の始終も、すべて異なることを知らなければ、仏法を学んでいるとはいえない。

御義口伝下（七五三ページ）に「惣じては迹化の菩薩此の品に手をつけいろうべきに非ざる者なり、彼は迹表本裏・此れは本面迹裏・然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云」と。

このように迹表本裏といい本面迹裏といえば、法門自体が変わってくるのが当然である。しかして、天台・伝教の教と末法の教とを厳然と区別したうえで、さらに「然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか」とし て、在世脱益と滅後下種の相を明らかにお示しになっている。釈尊在世は寿量品で脱益、末法の時代は南無妙法蓮華経で下種益、在世の仏は釈尊、末法の仏は日蓮大聖人との法門が明々白々としている。

【三証】

宗教の優劣、浅深を定める基準の一つ。文証、理証、現証の三つをいう。文証とは証文のこと。一つの教義または主張がどんな文献によっているかを調べて測定の基準とする。理証とは道理のこと。文証が道理にかなっているかどうかを調べる。現証とは、現実の証拠のこと。その教えがはたして現実に証拠を示すことができるかどうかをみる。

文証　文書、記録などの証拠のこと。仏法の場合は、一つの教義または主張が、なにかの教典によっているか。もし文献があるとすれば、どんな経または論釈によっているかを検討して判定の標準とする。一応もっともらしい教えであっても、口伝えのものでは信用するにたりない。また仏説でないものは、それが一見まことしやかにみえても、外道として却けられるのである。

涅槃経に「若し仏の所説に順わざる者あらば当に知るべし是の人は是れ魔の眷属なり」とある。その一例として、禅宗などは経論によらないといって、教外別伝、不立文字を立てるが、これなどは明らかに、文証の点から邪義と判定することができる。蓮盛抄（一五三ページ）に「謂く教外と号し剰さえ教外を学び文筆を嗜みながら文字を立てず言と心と相違せず豈天魔の部類・外道の弟子に非ずや、仏は文字に依って衆生を度し給うなり、問う其の証拠如何、答えて云く涅槃経の十五に云く『願わくは諸の衆生 悉く皆出世の文字を受持せよ』文、像法決疑経に云く『文字に依るが故に衆生を度し菩提を得』云云、若し文字を離れば何を以てか仏事とせん

禅宗は言語を以て人に示さざらんや若し示さずといはば南天竺の達磨は四巻の楞伽経に依って五巻の疏を作り慧可に伝うる時我漢地を見るに但此の経のみあって人を度す可し汝此れに依って世を度す可し云云、若し爾れば猥に教外別伝と号せんや……」とある。

日蓮大聖人は、文証の有無が、正邪の判定に重要な鍵となることを教えられている。教行証御書（一二七九ページ）に念仏を破折されて「次に念仏の……捨閉閣抛の文、此等の本経・本論を尋ぬべし……若し慥なる経文なくんば是くの如く権経より実経を謗ずるの過罪、法華経の譬喩品の如くば阿鼻大城に堕落して展転無数劫を経歴し給はんずらん」と。また聖愚問答抄上（四八一ページ）には「但し仏法は強ちに人の貴賤には依るべからず只経文を先とすべし」と。また「涅槃経の第六には依法不依人とて普賢・文殊等の等覚已還の大薩埵・法門を説き給ふとも経文を手に把らずば用ゐざれとなり、天台大師の云く『修多羅と合する者は録して之を用いよ文無く義無きは信受す可からず』文、釈の意は経文に明ならんを用いよ文証無からんをば捨てよとなり、伝教大師の云く『仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ』文……」と。

理証

道理のこと。いくら文証があるからといって、それが筋道のとおらないものでは万人を納得させ肯定させることはできない。四条金吾殿御返事（一一六九ページ）には「仏法と申すは道理なり道理と申すは主に勝つ物なり」とある。古今東西を通じて、一切の人を納得させる性質、普遍妥当性を有するものでなければならない。同一原因は同一結果を、時と場所とにかかわらず具現し、かつそれが、最高価値をもたらす結論をもたなければならない。しかもその幸福は、万代不易の幸福であって、何ものにもくずされない幸福でなければならない。

現証　現実の証拠のこと。たとえ崇高な哲理であっても、それが実際に証明されなければなんにもならない。ゆえに三三蔵祈雨事（一四六八㌻）には「日蓮仏法をこころみるに道理と証文とにはすぎず、又道理証文よりも現証にはすぎず」と、現証が他の二証にすぐれて重要なことを明かされている。

自然科学の各分野においては、思索の結果得たところの理論を実験によって確認する方法によっているが、宗教においても、この教義を信ずれば幸福になると提唱する以上、自然科学の方式と同じように、その教義が生活上に、はたしていかなる結果をもたらしたか、自他ともに幸福を確認できるかどうかを調べてみなければならない。教行証御書（一二七九㌻）に「一切は現証には如かず」と。

【三重秘伝】

三重とは、五重の相対のうち、権実相対、本迹相対、種脱相対の三相対のことであり、この三重の妙旨、特に三番目の種脱相対が、日蓮正宗のみに伝えられてきた法門であり、他門の日蓮宗各派が知らないところから、秘伝というのである。

開目抄上（一八九㌻）にいわく「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知ってしかも・いまだ・ひろいいだ（拾出）さず但我が天台智者のみこれをいだ（懐）けり」

右の御文を日寛上人は文底秘沈の真文であるとし、三重に分けて、六巻抄の第一に「三重秘伝抄」として著わし、天台の法門との差をはっきりと述べて、日蓮正宗の奥義を明かされている。

すなわち一念三千の法門は、

但法華経……権実相対、第一法門

但本門寿量品…本迹相対、第二法門

但文底……種脱相対、第三法門

等と仰せられている。これが三重秘伝である。

【四重興廃】

宗教批判の原理の一つ。爾前経、法華経迹門、法華経本門、本門の観心と従浅至深して大教の興ることにより、前の大教が廃れる次第を説く教判のことである。すなわち、

① 爾前の大教興れば、外道廃る

② 迹門の大教興れば、爾前廃る

③ 本門の大教興れば、迹門廃る

④ 観心の大教興れば、本門廃る

以上が四重の興廃であるが、観心とは天台の教観相対を意味する場合もあり、ただちに文底下種法門とはいえない。しかし日蓮大聖人が引用される場合には五重相対と同趣旨であって、観心とは文底下種、三大秘法の南無妙法蓮華経である。

【五重三段】

日蓮大聖人は観心本尊抄（二四八㌻）において、序分・正宗分・流通分の三段を五重に立てられて、一切の教法を批判し、文底下種本門こそ末法の正意なりと立てられている。序分とは一経の序論で、正宗分とは一経の本論であり、流通分とはすでに説かれた経の趣旨を後代に伝える意をもって説かれたものである。

第一重、一代一経三段
- 序分……華厳・阿含・方等・般若等の法華以前の諸経
- 正宗分……無量義経・法華経・観普賢経の十巻
- 流通分……涅槃経等

第二重、法華一経十三段
- 序分……無量義経・序品
- 正宗分……方便品より分別功徳品の半十九行の偈（「以て無上の心を助く」まで）の十五品半
- 流通分……分別功徳品の半、現在の四信の十一品半と普賢経一巻

第三重、迹門熟益三段
- 序分……無量義経と序品
- 正宗分……方便品より人記品までの八品
- 流通分……法師品より安楽行品までの五品

第四重、本門脱益三段

- 序　分……涌出品の半分（「汝等自ら当に是れに因って聞くことを得べし」まで）
- 正宗分……涌出品の後半分（「爾の時釈迦牟尼仏告げ」から）と寿量品と分別功徳品の半分（「一善根を具して以って無上の心を助く」まで）の一品二半
- 流通分……分別功徳品の後半分から観普賢経まで

以上を通途の四重三段といい、一代仏教の中心は法華経、法華経の中心は方便品から分別功徳品の前半分までの十五品半にあり、また迹門十四品と本門十四品の二経に分けられていて、本門十四品の中心は寿量品を中心としたその前後の半分ずつ、いわゆる一品二半であって、迹門の正宗分のおよぶところではないから、法華経の中心は一品二半と示されたものである。

これは釈尊の所説の在世の法華経であって、さらに末法については日蓮大聖人は、寿量文底の意に約して三段に分けられたのである。

すなわち、寿量文底下種の南無妙法蓮華経が、一切の経々の正宗分となる。釈尊の出世の本懐たる法華経といえども、末法出現の御本仏日蓮大聖人の弘通を助けるための種々の説法であった。

第五重、文底下種三段

- 序　分……十方三世諸仏の微塵の経々
- 正宗分……寿量文底下種の南無妙法蓮華経
- 流通分……過去大通智勝仏の法華経から今日の釈迦仏の一代五十余年の諸経ならびに十方三世諸仏の微塵の経々の体内の辺

第五重の正宗分からみれば、第四重の本門脱益三段の正宗分の寿量品は、文上脱益となるのである。

【文底秘沈】

文底とは、文上に対する語。法華経本門寿量品の文底に三大秘法の御本尊を秘し沈められているゆえに、文底秘沈という。

開目抄上（一八九ページ）「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり」の御文による。

この御文は、すなわち、文底深秘の真文であり、肝要の御文である。

日寛上人は、この御文によって三重秘伝（本文参照）の深義を著わされ、その三重秘伝抄に「久遠下種名字の妙法は一代経の中には但法華経、法華経の中には、但本門寿量品、本門寿量品の中には但文底に秘沈するなり、ゆえに一念三千文底秘沈と云うなり」と述べられている。この一念三千とは法体を示し、御本尊は寿量品の文底に秘し沈められているゆえに、文底秘沈というのである。これについて、古来幾多の異説があるゆえ、日寛上人は開目抄文段にて、次のごとく、正邪の分別を明かされている。

一、文底秘沈文

問うこれいずれの文となすや、答う他家の古抄に多くの義勢あり、乃至、

今謂く諸説皆是れ人情なり、何ぞ聖旨に関せん、問う正義如何、答う此れは是れ当流一大事の秘要なり然りといえども今一言を以て之を示さん、謂く御相伝に云く「本因妙の文なり云云」若し文上を論ぜば只住上に在り、ゆえに寿命未尽と云うなり、若し住上に非ざれば曷んぞ常寿を得んや、ゆえにこの文を釈して「初住

に登る時已に常寿を得たり云云」

当に知るべし後後の位に登る所以は並びに前前の所修に由る、ゆえに知んぬ「我本行菩薩道」の文底に久遠名字の妙法を秘沈し給うなり、蓮祖の本因妙抄云云、興師の文底大事抄云云、秘すべし秘す可し云云。

以上のごとく、日寛上人の御文に明白な御教示があるにもかかわらず、日蓮宗の他門流においては、容易にその真実を把握することができない。すなわち迹門始成を簡びて本門寿量をあらわすことまでは説いている者が多いけれども、「文底秘沈」については、まったく見当がつかないでいる。

文底の実義すなわち種脱相対の上において、日蓮大聖人を下種の本仏と拝すべきは当然であり、これこそ宗祖大聖人の深秘の御本尊であり、しかも正しくこれを相伝し、末法の一切衆生を教導しているのは、日蓮正宗のみである。

【文底下種三段】

前項、五重三段によって明らかなように、日蓮大聖人出世のご本懐は文底下種三段にある。その正宗分は久遠元初の唯密の正法たる三大秘法の南無妙法蓮華経である。それ以外の、あらゆる一切経は、ことごとく序分となる。しかして三大秘法の建立されて後は、ことごとくその流通分となる。すなわち、一切の経教の体外（体内体外の項参照）の辺は大御本尊の序分となり、体内の辺は流通分となるのである。

観心本尊抄文段（富要四巻二七七㌻）文底下種の三段とは、正宗は前の如く久遠元初の唯密の正法を以て

正宗と為す、惣じて一代五十余年の諸経・十方三世の微塵の経経・並びに八宗の章疏を以て或は序分に属し或は流通に属す、謂く彼の体外の辺は以て序分と為す、彼の体内の辺は以て流通に属するなり、其の証如何、謂く序分は前の如し、若し流通の意は宗祖云く「此の大法を弘通せしむるの法は必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏を習学すべし等云云」（一〇三八㌻）即ち此の文意なり、故に知んぬ今は但迹本二門を用いて流通と為るは仍是れ文略なり、則ち知んぬ今此の三段は三世諸仏の微塵の経経一塵も余すことなく・十方法界の露一滴も漏らさず皆咸く文底下種の序・流通なり。

この文で「迹本二門を用いて流通と為る……」とは、観心本尊抄の御文が迹門と本門をあげて流通分を説明なされているからである。

【流通分】

法華経本迹二門とも末法の流通分として依用されることは、観心本尊抄の文底下種三段に明らかなところであるが、なお次に流通分の意義を示せば、次のように述べられている。

四信五品抄（三三八㌻）流通の一段は末法の明鏡尤も依用と為すべし、而して流通に於て二有り一には所謂迹門の中の法師等の五品・二には所謂本門の中の分別功徳の半品より経を終るまで十一品半なり。

観心本尊抄（二五〇㌻）寿量の法門は滅後の為に之を請ずるなり。

観心本尊抄（二五二㌻）前の五神力は在世の為後の五神力は滅後の為なり、爾りと雖も再往之を論ずれば一

向に滅後の為なり。

法華取要抄（三三三ページ）方便品より人記品に至るまでの八品に二意有り……逆次に之を読めば滅後の衆生を以て本と為す……本門に於て二の心有り一には涌出品の略開近顕遠は前四味並に迹門の諸衆をして脱せしめんが為なり、二には涌出品の動執生疑より一半並びに寿量品・分別功徳品の半品已上一品二半を広開近顕遠と名く一向に滅後の為なり……誰人の為に広開近顕遠の寿量品を演説するや、答えて曰く寿量品の一品二半は始より終に至るまで正く滅後衆生の為なり滅後の中には末法今時の日蓮等が為なり。

御義口伝下（七六六ページ）惣じては流通とは未来当今の為なり、法華経一部は一往は在世の為なり再往は末法当今の為なり、其の故は妙法蓮華経の五字は三世の諸仏共に許して未来滅後の者の為なり、品品の法門は題目の用なり体の妙法・末法の用たらば何ぞ用の品品別ならむや。

百六箇抄（八六四ページ）本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利益の為なり、然る間・日蓮修行の時は後の十四品皆滅後の流通分なり。

百六箇抄（八六七ページ）応仏と天台とは正宗一品二半を本門と定め現文の勝劣、報仏と日蓮とは流通を本と定む文底の勝劣なり。

曾谷殿御返事（一〇五五ページ）既に上行菩薩・釈迦如来より妙法の智水を受けて末代悪世の枯槁の衆生に流れかよはし給う。

御本尊七箇の相承（富要一巻三二ページ）序正流通の中には何れぞや、師の曰はく流通分の大曼荼羅なり流通とは末法なり、久遠本果の名字の妙法蓮華経の法水末代我等が耳に流入す可しと云ふ三仏（釈迦・多宝・分身）の御約束

なり、在世は正宗が面と成り・滅後は流通が面と成るなり、経文解釈分明なり。

三位日順・摧邪立正抄（富要一巻四一ページ）正宗は在世の衆生を化し、流通は滅後の相を示す。

以上のごとく一往法華経をみれば、在世の衆生は釈尊正宗分の寿量品においてことごとく成仏し、この時には上行菩薩が釈尊の化導を助けるために出現したのである。しかし、末法にいたって再往これをみれば、釈尊の法華経は、末法出現の御本仏日蓮大聖人の弘通を助けるために種々の説法をしており、これがすなわち流通分である。ゆえに日蓮大聖人は文底下種仏法を弘通せられるにあたり「此の大法を弘通せしむるの法には必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏を習学すべし」（曾谷入道等許御書一〇三八ページ）等と述べられているのである。また日蓮大聖人は、究竟の極説たる本門戒壇の大御本尊を建立された弘安二年をもって正宗分となすべきはもちろんのことであるが、滅後の流通分として三大秘法広宣流布・本門戒壇建立を末代に遺付されたのである。

【一品二半】

一品二半とは法華経の寿量品の一品と、涌出品の半品および分別功徳品の半品である。この一品二半には二意がある。いわゆる天台所立の一品二半と、日蓮大聖人が、文底下種の正宗分として用いられている一品二半である。

観心本尊抄（二四九ページ）一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教と名く。

観心本尊抄（二四九ページ）在世の本門と末法の始は一同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此

れは但題目の五字なり。

すなわち前者の文は日蓮大聖人ご正意の一品二半であり、後者の文は天台所立の在世脱益の一品二半である。日蓮大聖人出世の本懐は、久遠元初の自受用身として三大秘法の御本尊を建立され、われら民衆に授与することにある。それを最も明らかに表明されているのは文底下種三段である。この文底下種三段において、正宗分として述べられている文は「寿量の序分なり」の「寿量」と、「一品二半よりの他は小乗教・邪教云云」の「一品二半」である。「寿量」と「一品二半」とは名前は異なるが同じく文底下種仏法の正宗分である。

また脱益の三段にも一品二半がある。文底下種三段にも一品二半がある。言葉は同じであるけれども、その義の異なることを知らなくては、文底下種仏法の真意はわからないのである。いまこれを明らかにするために、一品二半をここに示して、しかる後にこれを説明する。

一品二半とは涌出品の後の半品と、寿量品と、分別功徳品の前の半品をいうが、天台の配立と日蓮大聖人の配立とには、涌出品の半品において相違がある。天台の涌出品の半品は、略開近顕遠と動執生疑とをもって涌出品の半品として、日蓮大聖人の配立では、動執生疑だけをもって涌出品の半品としているのである。

従地涌出品の半品の文は次のとおり。

略開近顕遠の文　（天台の配立はこれより）

爾の時に世尊、是の偈を説き已って、弥勒菩薩に告げたまわく、我今、此の大衆に於いて汝等に宣告す。阿逸多、是の諸の大菩薩摩訶薩の、無量無数阿僧祇にして地より涌出せる、汝等昔より未だ見ざる所の者は、我是の娑婆世界に於いて、阿耨多羅三藐三菩提を得已って、是の諸の菩薩を教化示導し、其の

心を調伏して、道の意を発さしめたり。此の諸の菩薩は、皆是の娑婆世界の下、此の界の虚空の中に於いて住せり。諸の経典に於いて、読誦通利し、思惟分別し、正憶念せり。阿逸多、是の諸の善男子等は、衆に在って多く所説有ることを楽わず、常に静かなる処を楽い、勤行精進して、未だ曾て休息せず。亦、人天に依止して住せず。常に深智を楽って、障礙有ること無し。亦常に諸仏の法を楽い、一心に精進して無上慧を求む。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、阿逸汝当に知るべし、是の諸の大菩薩は、無数劫より来、仏の智慧を修習せり、悉く是れ我が所化として、大道心を発さしめたり、此等は是れ我が子なり、是の世界に依止せり、常に頭陀の事を行じて、静かなる処を志楽し、大衆の憒鬧を捨てて、所説多きことを楽わず、是の如き諸子等は、我が道法を学習して、昼夜に常に精進す、仏道を求むるを為っての故に、娑婆世界の、下方の空中に在って住す、志念力堅固にして、常に智慧を勤求し、種種の妙法を説いて、其の心畏るる所無し、我れ伽耶城、菩薩樹下に於いて坐して、最正覚を成ずることを得て、無上の法輪を転じ、爾して乃ち之を教化して、初めて道心を発さしむ、今皆不退に住せり、悉く当に成仏を得べし、我今実語を説く、汝等一心に信ぜよ、我久遠より来、是れ等の衆を教化せり。

（これより日蓮大聖人の配立）

動執生疑の文

爾の時に弥勒菩薩摩訶薩、及び無数の諸の菩薩等、心に疑惑を生じ、未曾有なりと怪んで、是の念を作さく、云何ぞ世尊、少時の間に於いて、是くの如き無量無辺阿僧祇の諸の大菩薩を教化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめたまえる。即ち仏に白して言さく、世尊、如来太子たりし時、釈の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり。是れより已来、

始めて四十余年を過ぎたり。世尊、云何ぞ此の少時に於いて、大いに仏事を作したまえる。仏の勢力を以ってや、仏の功徳を以ってや、是の如き無量の大菩薩衆を教化して、当に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしめたもうべき。世尊、此の大菩薩衆は、仮使人有って、千万億劫に於いて、数うとも尽くすこと能わず。其の辺を得じ。斯等は久遠より已来、無量無辺の諸仏の所に於いて、諸の善根を植え、菩薩の道を成就し、常に梵行を修せり。世尊、此の如き事は、世の信じ難き所なり。譬えば人有って、色美しく、髪黒くして年二十五なる、百歳の人を指して、是れ我が子なりと言わん。其の百歳の人、亦年少を指して、是れ我が父なり我等が生育せりと言わん。是の事信じ難きが如く仏も亦是の如し。得道より已来、其れ実に未だ久しからず。而るに此の大衆の、諸の菩薩等は、已に無量千万億劫に於いて、仏道の為の故に勤行精進し、善く無量百千万億の三昧に入出住し、大神通を得、久しく梵行を修し善能く次第に諸の善法を習い、問答に巧みに、人中の宝として、一切世間に甚だ為れ希有なり。今日世尊、方に仏道を得たまいし時、初めて発心せしめ、教化示導して、阿耨多羅三藐三菩提に向わしめたりと云う。世尊、仏を得たまいて未だ久しからざるに、乃し能く此の大功徳の事を作したまえり。我等は復、仏の随宜の所説、仏の所出の言、未だ曾て虚妄ならず、仏の所知は、皆悉く通達し給えりと信ずと雖も、然も諸の新発意の菩薩、仏の滅後に於いて若し是の語を聞かば、或は信受せずして、法を破する罪業の因縁を起さん。唯然なり世尊、願わくは為に解説して、我等が疑を除きたまえ。及び未来世の諸の善男子、此の事を聞き已りなば、亦疑を生ぜじ。

爾の時に弥勒菩薩、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、仏昔釈種より、出家して伽耶に近く、菩提樹に坐したまえり、爾しより来尚未だ久しからず、此の諸の仏子等は、其の数量るべからず、久し

く已に仏道を行じて、神通智力に住せり、善く菩薩の道を学して、世間の法に染まざること、蓮華の水に在るが如し、地より涌出し、皆恭敬の心を起して、世尊の前に住せり、是の事思議し難し、云何ぞ信ずべき、仏の得道は甚だ近く、成就したまえる所は甚だ多し、願わくは為に衆の疑を除き、実の如く分別し説きたまえ、譬えば少壮の人、年始めて二十五なる、人に百歳の子の、髪白くして面皺めるを示して、是れ等我が所生なりといい、子も亦是れ父なりと説かん、父は少く子は老いたる、世を挙って信ぜざる所ならんが如く、世尊も亦是くの如し、得道より来甚だ近し、是の諸の菩薩等は、志固くして怯弱無し、無量劫より来、而も菩薩の道を行ぜり、難問答に巧みにして、其の心畏るる所無く、忍辱の心決定し、端正にして威徳有り、十方の仏の讃めたもう所なり、善能く分別し説けり、人衆に在ることを楽わず、常に好んで禅定に在り、仏道を求むるを為っての故に、下の空中に於いて住せり、我等は仏に従って聞きたてまつれば、此の事に於いて疑無し、願わくは仏未来の為に、演説して開解せしめたまえ、若し此の経に於いて、疑を生じて信ぜざること有らん者は、即ち当に悪道に堕つべし、願わくは今為に解説したまえ、是の無量の菩薩をば、云何にしてか少時に於いて、教化し発心せしめて、不退の地に住せしめたまえる。（以上経文）

このように一品二半といっても、文上脱益の一品二半と文底下種の一品二半は、名前は同じでも義は異なるのである。この名同義異の義異はどうして生じたかというに、天台の配立は在世脱益のためであり、日蓮大聖人の配立は末法下種のためだからである。

また、天台の配立を略広開近顕遠の一品二半といい、日蓮大聖人の配立を広開近顕遠の一品二半と名づけるのである。されば一品二半と寿量品は同じであるゆえに、天台の配立を略広開近顕遠の寿量品、日蓮大聖人の

配立を広開近顕遠の寿量品と名づけるのである。また天台の一品二半を在世の本門と呼び、日蓮大聖人の一品二半を末法の本門と名づけるのである。

日蓮大聖人の一品二半が一向に滅後末法のためであることは左の御書に明らかである。

法華取要抄（三三四ページ）本門に於て二の心有り一には涌出品の略開近顕遠は前四味並に迹門の諸衆をして脱せしめんが為なり、二には涌出品の動執生疑より一半並びに寿量品・分別功徳品の半品已上一品二半を広開近顕遠と名く一向に滅後の為なり……問うて曰く誰人の為に広開近顕遠の寿量品を演説するや、答えて曰く寿量品の一品二半は始より終に至るまで正く滅後衆生の為なり滅後の中には末法今時の日蓮等が為なり。

その他、観心本尊抄（二四九ページ）に「彼は一品二半此れは但題目の五字なり」と仰せられ、また本因妙抄（八七七ページ）に「迹の上の本門寿量ぞと得意云云」等とあるように、法華経本門が迹門の衆生を得脱せしめ、迹門の説法を証するための本門寿量品であると考えるのを脱益の文の上と申すのであり、文底とは「久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達の正観云云」と仰せられている辺からも明らかである。

これによって略広開近顕遠の一品二半は、第四の本門脱益三段の正宗分であり、広開近顕遠の一品二半は、第五の文底下種三段の正宗分であることがわかるであろう。

しこうして、日蓮大聖人はなぜ天台の略開近顕遠を除き、動執生疑の半品をもって正宗分になされたかというに、これに深意がある。寿量品は一つの文ではあるが、その意には両辺がある。文上は在世脱益のため、文底は末法下種のためである。ここにおいて弥勒菩薩の疑請する内容から考えれば「我等は復、仏の随宜の所説、仏の所出の言、未だ曾て虚妄ならず、仏の所知は、皆悉く通達し給えりと信ずと雖も」との意より「て、

文上脱益在世のための寿量品を略開近顕遠に属せしめ「然も諸の新発意の菩薩、仏の滅後に於いて、若し是の語を聞かば、或は信受せずして、法を破する罪業の因縁を起さん」との意よりして、文底下種末法のための寿量品を動執生疑の文に属せしめるのである。これすなわち、弥勒の質問した内容によって、日蓮大聖人はこのように立て分けられたのである。

しかるに、日什（顕本法華宗の開祖・日蓮大聖人滅後百年ごろ）門流では、一品二半の南無妙法蓮華経といっているが、これは彼の門流はいまだに文底の大事を知らないから、第四の三段、在世脱益の一品二半をとっているにすぎない。

ここに日蓮大聖人の内証の一品二半がはっきりとして、末法の真の仏法、文底下種の本尊が確立すれば、他はすべて小・邪・末・覆の教にほかならないのである。

【地涌の菩薩】

法華経従地涌出品第十五において、釈迦の説法を助け、滅後の弘教を誓った本化の菩薩のこと。すなわち、宝塔品より仏が滅後の弘経を勧進し、大菩薩衆は勧持品で滅後弘経の誓願を立てたが、涌出品にいたって「止みね善男子」といって諸大菩薩の弘経を制止した時、忽然として大地より涌出したのが、地涌の菩薩である。地涌の大士、地涌千界の大菩薩、本化の菩薩、四大菩薩ともいう。無量無数の大菩薩中に四人の大導師があり、上行、無辺行、浄行、安立行の四菩薩がこれである。しかして本化地涌の出現に疑いをもち、その大衆の

疑問に応じて寿量品の説法があって後、神力品にいたって地涌の菩薩に付嘱がなされたのである。末法にご出現の日蓮大聖人は、すなわち地涌の大導師・上行菩薩の再誕であらせられることは、諸御書に明かされているところである。

百六箇抄（八六四ページ）本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利益の為なり、然る間・日蓮修行の時は後の十四品皆滅後の流通分なり。

要するに本門の序分は、迹化他方の菩薩では、わが内証の寿量品を譲り与えることができない、本化の菩薩でなければ末法において、この大御本尊の弘教はできないとして、地涌の菩薩を呼び出したのである。この序分では、末法において大御本尊を弘通すべき人および資格を定められたものである。

さて迹化・他方・本化の菩薩とはいかなる菩薩をさすかというに、一には菩薩所住の所に約すのと、二には仏の本迹に約して定まるのである。

第一に菩薩所住の所に約すならば、本化の菩薩とは下方空中に住するゆえに下方というのである。この菩薩については、

御義口伝上（七五一ページ）此の四菩薩（本化）は下方に住する故に釈に「法性之淵底玄宗之極地」と云えり、下方を以て住処とす下方とは真理なり、輔正記に云く「下方とは生公の云く住して理に在るなり」と云云、此の理の住処より顕れ出づるを事と云うなり。

また他方の菩薩とは、この娑婆世界以外の仏国土に住する菩薩をさす。すなわち薬王、観音、妙音等である。この他方の菩薩に対して文殊、弥勒等の迹化の菩薩を旧住の菩薩というのである。

第二に仏の本迹の教化に約するならば、すなわち下方の菩薩は、仏の本地において教化した菩薩であるから本化といい、経に「我久遠より来是等の衆を教化せり」といっているのである。文殊等の菩薩は、仏が迹中に教化した菩薩であるから迹化といい、また他方の菩薩は本地の教化でもなく、迹中の教化でもない、ただ他仏の弟子であるから、他方というのである。もしこの意を知るならば、この三種の菩薩とわれらとの関係の親疎がおのずから明らかとなるであろう。

御義口伝上（七五一ページ）に「本化の菩薩の所作としては南無妙法蓮華経なり此れを唱と云うなり導とは日本国の一切衆生を霊山浄土へ引導する事なり、末法の導師とは本化に限ると云うを師と云うなり」とある。本化の菩薩は本来、南無妙法蓮華経を受持しきった振舞いである。迹化の菩薩と本化の菩薩とは、根本的な相違がある。

諸法実相抄（一三六〇ページ）日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや……末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり、日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが、二人・三人・百人と次第に唱へつたふるなり、未来も又しかるべし、是あに地涌の義に非ずや、剰へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華経と唱へん事は大地を的とするなるべし。

所詮、地涌の菩薩とは、日蓮大聖人の弟子であり、御本尊を受持し、ひたすら、広宣流布に邁進する人である。

また、四菩薩は常楽我浄の四徳を表わしている。この点については別項で解説をする。

【寿量品の三妙合論】

三妙合論とは、仏自らの因果と、所住の国土とに約して、時間、空間にわたって生命の真実の姿を明かされたものである。

三妙とは、天台大師が法華玄義に立てた本門の十妙、すなわち本因妙・本果妙・本国土妙・本感応妙・本神通妙・本説法妙・本眷属妙・本涅槃妙・本寿命妙・本利益妙のなかの、本因妙・本果妙・本国土妙をいい、法華経寿量品第十六にこの三妙が整足して説かれている。寿量品の三妙合論とは、

一、本因妙……我本行菩薩道の文

二、本果妙……我実成仏已来の文

三、本国土妙……娑婆世界説法教化の文

すなわち、本因妙とは仏の境涯を得るための根本の原因、仏になるための修行をいい、本果妙とは仏の本体、本地であり、本国土妙とは仏の所住の国土で、このように、仏の本因、本果、本国土が説かれてこそ、生命の真実の姿が明らかになる。寿量品で三妙が説かれて、釈迦の行動、実際生活をとおして一念三千が説かれるのである。したがって仏の実体が明瞭でない迹門を理といい、本門を事というのである。

だが、これは五百塵点劫久遠実成の釈迦の三妙で、末法の御本仏日蓮大聖人すなわち久遠元初の教主釈尊の三妙とにおいて格段の相違がある。

三妙合論でいうところの本因妙とは九界の意であるから、九界の代表としての血脈付法の日興上人にあたり、本果妙は仏界であるから日蓮大聖人、本国土妙は日本国の中にも、大御本尊のいます富士大石寺となるのである。この三妙合論がいかに重要であるかを、さらに解説する。

仏は浄土のみにいて、娑婆世界にはいないというのが、法華経以前の説である。しかし、寿量品には「娑婆世界」といって本国土妙が説かれている。それは仏が娑婆世界に凡夫と共に、菩薩と共に、また声聞・縁覚と共に、あるいは畜生・餓鬼などと共に、皆いっしょに十界おのおの同居している。この不思議さを本国土の妙というのである。仏の本国というものは娑婆世界であるというのである。

しかもその仏の境涯を得るのは本因があり、それが「我本行菩薩道」というところである。「我実成仏已来」これは、仏の本体である。すなわち、文底よりこれを論じると、御本尊にあたる。これを文上においては「五百千万億那由佗阿僧祇の三千大千世界があって、これをすりつぶして粉として」というところが、御本尊の境智をおっしゃっているのである。

すなわち、文底からこれを論ずると、大宇宙即御本尊であり、南無妙法蓮華経の生命というものは、「我実成仏已来」我れ仏を得てよりこのかた、仏になってよりこのかた大宇宙と共にあると読むべきが文底である。

しかも娑婆国土以外には、本当の仏はいないのである。娑婆にいない仏は迹仏であり、権仏である。娑婆世界におられる仏こそ、真実の仏である。

その仏になるには、みな菩薩の道を行じたのである。「我本行菩薩道」である。しかし、これを文底より論じていくところに、本果妙の釈尊の仏法と、本因妙の教主釈尊との相違が、はっきりしてくるのである。

というのは、文上から、これをこのまま眺めても「我実成仏已来」ということは、すなわち御本尊の本体である。ゆえに、この御本尊の本体を本体として、釈尊が姿を現じているから、本果の世界を現わしているのである。ところが日蓮大聖人になると、仏自体の立派な姿を現じられない。すなわち、仏になる本因を論じ、仏になる本因を行ずるのである。ゆえに本因妙の仏という以外にないのである。日蓮大聖人が生まれながらにして御本尊の体を現わし、御本尊の行を行じられたならば、それは菩薩道でなくなるのである。

菩薩道というのは、菩提薩埵といって、仏になる道を行ずるのをいうのである。

御書のどこを拝読しても、われ仏になって、霊山であなた方を救ってやるとか、これだけの難を忍んだので、私はそのうちに仏になれるだろうと書いてはいないのである。日蓮大聖人のご行動は、本地内証の位においては、仏でいらせられても、行ずるところは、菩薩道である。その菩薩を一括して、すなわち文上でいえば、五十二位の本因初住の文底にあるところの南無妙法蓮華経という、仏の本体を直接信じて、われわれは仏になるのであるから、日蓮大聖人の仏法は本因の妙なのである。ゆえに日蓮大聖人を本因の仏と称し、寿量文上の仏をもって本果の仏と称し、ここに本果妙と本因妙の区別があるのである。

【三時の弘教】

釈尊滅後、正法一千年、像法一千年、末法万年の三時に、論師、人師が出現し、時代の衆生の機根に応じた法を説き、一切衆生を救うという次第の順序をいう。

正法一千年間の弘教

釈尊の在世中に、弘宣付嘱、伝持付嘱を受けたといわれる付法蔵の二十四人が、次次と生まれてきて、仏法を伝持弘通してきた。これら付法蔵の導師は、正法時代の四依の菩薩として、その時代相応の教法を弘めた。すなわち、摩訶迦葉が釈尊から付嘱を受け、付法蔵第五の提多迦までの百年間は、ただ小乗教だけを弘通した。

次の弥遮迦より付法蔵第十の富那奢までは、正法の前の五百年・解脱堅固の時代に小乗教を面として、ごくわずかの大乗教を弘通した。

正法の後の六百年から一千年までの五百年間には、馬鳴菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅睺尊者・僧佉難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子尊者等が出現し、初めは外道を学び、次に小乗教を究めて、後には諸大乗教をもって、諸小乗教をさんざんに打ち破っている。これらの諸大菩薩たちは、大乗教をもって小乗教を破ったが、諸大乗教と法華経との勝劣は分明に説いてはいない。大小相対を立てたのみで権実の相対は立てなかった。法華経の肝要たる本迹の十妙、迹門の二乗作仏、本門の久遠実成、已今当最為第一の妙、百界千如、一念三千等の法門は分明には説いていない。これらは正法の後の五百年で、大集経の禅定堅固にあたる時代であった。

像法一千年間の弘教

正法時代一千年を過ぎた後は、インドに仏法が充満していたが、あるいは小乗をもって大乗を破り、あるいは権教をもって実教を隠没するというように、仏法がさまざまに乱れたので、得道する者はようやく少なくなり、仏法によって悪道に堕ちる者が多くなった。像法時代にはいって十五年、仏法が中国へ渡った。像法の前半五百年のうち、初めの百年間は、中国の道教とインドの仏法

との論争が激しく行なわれ、いずれが真実とも決定しかねており、たとえ仏法が真実なりと決定しても、深く信ずる人はいなかった。

このような状態であったから、仏法のなかにも大乗・小乗の別、権教・実教の別があるなどと立て分けるならば、同じ仏教のなかに相違があるので、疑いを起こしてかえって退転し、外道につく者が出てくる。このような恐れがあったから、最初に仏教を伝えた摩騰、竺蘭は自分では知っていたが、大小とか権実の立て分けは何もいわないでいた。

その後、魏・晋・斉・宋・梁の五代の間、仏法のなかで、大小・権実・顕密を争ったが、おのおの流派を生ずるばかりで、何が正当か決定できなかった。このときは、南三北七といって、仏法は十派に分裂していた。すなわち、南には三時・四時・五時とそれぞれの教判を立てる三派が生まれ、北には五時・半満・四宗・五宗・六宗・二宗の大乗・一音等とそれぞれの教判のもとに、偏執して争っていた。しかし、これらの十派の主張の大綱は南の三派中の第三、光宅寺の法雲に代表される華厳経第一、涅槃経第二、法華経第三に一致していた。この時、出現した天台（西紀五三八～五九七年）は、五時八教、三種教相等の最高の教判を示して、公場対決により十宗を屈伏せしめ、法華経迹門の広宣流布を成し遂げたのである。そして、理の一念三千、三諦円融等の法門を説き、弟子・章安に、摩訶止観を説くことによって、出世の本懐を遂げた。こうして、像法の初めの五百年、読誦多聞堅固の時代は、天台の法華経を根底とした、隋・唐時代の華やかな文化が築かれたのであった。

天台の死後、玄奘三蔵が「法華経は勝れた経であるが、深密経には劣る」と主張した。法蔵法師等も、天台に打破られた華厳経を持ち出し、その後、新訳された華厳経をもって「一華厳、二法華、三涅槃」の邪義をか

まえた。さらに後世まで、大きな悪影響をおよぼしたのは、善無畏、金剛智、不空らの真言宗である。彼らの説は「華厳・深密・般若・涅槃・法華経等の勝劣は、顕教内の勝劣であり、釈尊の説法の範囲である。大日経は、大日如来の説法であって、法華経の顕教と相対すれば彼の諸経は民の方言、この大日経は天子の一言である。華厳経、涅槃経は梯を立ててもおよびもつかないが、法華経に相似た経である。しかし、法華経は釈尊の所説で、民の正直語で、この大日経は大日如来の説、天子の正言である。正言である点では似ているけれども、仏の資格は、釈尊と大日如来とでは、天地雲泥である」と誑言を吐いたのである。

しかも、この誤りを指摘する人もないまま、諸宗はすべて真言宗に転落してしまった。天台宗第九祖の妙楽は、このままに過ぎるならば、天台宗の正義も滅びてしまうだろうと考え、天台の本疏について註釈書を三十巻つくった。摩訶止観輔行伝弘決、法華玄義釈籤、法華文句疏記である。この三十巻の書は、本書の中で重複しているところは一方を削り、意味の明瞭でないものは、これをはっきりしたのみか、天台の時代にはなかったために、天台の破折をのがれていた法相宗と華厳宗と真言宗とを、一時に論破した書である。かくして、天台の正義が再び宣揚されたが、妙楽の死後は、衰亡の一途をたどっていった。しかし、妙楽の弟子・行満座主および道邃和尚のとき、日本の伝教が唐に渡り、一心三観一念三千の深旨を伝付せられた。こうして、伝教は南都六宗の邪義を徹底して責めたため、南都六宗七大寺の学者は蜂起し、烏合した。延暦二十一年(八〇二年)正月十九日、桓武天皇は、高雄寺に行幸になり、七大寺の学僧と伝教を召しあわせ、公場対決を命じられた。六宗の学僧たちは、一一に経や論釈に照らして責められ、一言も答えられなかった。天皇も驚かれて、伝教に詳しくお尋ねがあり、重ねて勅宣を下して十四人の学者たちを厳しく責められたので、みな帰伏の謝り状を

奉った。この伝教の仏教統一は、仏教の真髄が、法華経の哲学にあり、天台の五時八教の教判、理の一念三千、三諦円融の法門等を最高の法理として認めさせたことに大きな意義がある。八二二年、伝教の入滅の直後、迹門の戒壇の建立が聴許せられている。しかし、中国の天台宗が善無畏等によって、真言に転落したのに対し、日本においても、弘法が、天台宗の正義を乱す元凶となった。

清澄寺大衆中（八九三ページ）に「真言宗は法華経を失う宗なり、是は大事なり……日本国の法華経の正義を失うて一人もなく人の悪道に堕つる事は真言宗……」とある。

伝教は中国へ留学して帰るとき、天台、真言をわが国へもってきて、天台宗を日本の皇帝に授け、真言を六宗の僧に習学させた。その後、伝教は、真言をはっきりと破折しなかったが、その原因は、一には、戒壇を建てるか否かの争論が激しかったため、なるべく敵を少なくして戒壇を建立せんがためであり、二には、末法に破折させようと残されたものと思われる。しかし、伝教の依憑集では、はっきりと真言を破折している。その後、真言宗は開祖の弘法、天台宗の慈覚らの悪僧によってますます邪義が激しくなった。弘法は、十住心論、秘蔵宝鑰二教論に、法華経は大日経に対すれば「戯れの論」であり「大日如来に比べたら釈迦は無明の辺域である」とか、「天台が真言の醍醐を盗んで天台宗を醍醐と定めた」と反対のことをいうにいたった。後には慈覚・智証は、身は天台の座主でありながら、真言を第一とし、理同事勝と立てている。

結局、誰もこの邪義を破折するものがいないままに、日本国中に、真言の邪義が弘まった。これは、承久の乱による、後鳥羽上皇等、三上皇が、鎌倉幕府の手によって島流しにされるという現実を生み、このことは、真言亡国の現証といえよう。像法時代は、中国、日本と、天台宗の法華経迹門が流布されたが、結局、真言の

悪法により、亡国の姿となって、末法にはいったのである。

末法の御本仏日蓮大聖人の御弘通

末法にはいって二百二年、建長五年（西紀一二五三年）四月二十八日、日本の国に初めて末法の衆生を救う三大秘法の南無妙法蓮華経が唱えられた。日蓮大聖人が御年三十二歳にして、末法の一切衆生を救わんと立宗宣言をなされたのである。報恩抄（三二八ページ）に「問うて云く天台伝教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り……一には日本・乃至一閻浮提・一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝・外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇士となるべし、二には本門の戒壇、三には日本・乃至漢土・月氏・一閻浮提に人ごとに有智無智をきらはず一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱うべし、此の事いまだ・ひろまらず一閻浮提の内に仏滅後・二千二百二十五年が間一人も唱えず……」とある。この御文は三大秘法を顕わされた御文で、きわめて重要な意味がある。第一には日蓮大聖人の三大秘法は、釈迦も含めて、滅後、迦葉、阿難、馬鳴、竜樹、天台、伝教等のいまだかつて弘通したことのない大白法なのである。その理由を曾谷入道等許御書（一〇二八ページ）に「一には自身堪えざるが故に二には所被の機無きが故に三には仏より譲り与えられざるが故に四には時来らざるが故なり」と教示になっている。すなわち、日蓮大聖人は、久遠元初以来、文底秘沈の名字の妙法を受持されていたゆえに、自身能堪であられ、また末法の衆生の機根は本因下種の機であるから、日蓮大聖人は本因下種の要法たる三大秘法を弘められたのである。また付嘱については文底本因妙は迹化の菩薩に対しては付嘱されず、ただ本化地涌の菩薩にかぎり付嘱があったのである。また時については、後五百歳中広宣流布とあるように、日蓮大聖人の三大秘法こそ末法流布の大白法なのである。さて、三大秘法の相貌については、報恩抄の文に説き明か

されている。

すなわち、本門の本尊については「本門の教主釈尊を本尊とすべし」（三二八㌻）とあるが、これは、人本尊を示されたものである。教主釈尊には、多くの義があり、蔵教、通教、別教、法華経迹門、本門、本門寿量品文底下種の教主釈尊とある。ここに仰せの教主釈尊とは、本門寿量品文底下種の教主釈尊である。すなわち、久遠元初の自受用身であられ、末法に日蓮大聖人とご出現の教主であらせられる。この久遠名字の釈尊は人法一箇であらせられ、本尊となすところの教主釈尊とは、事行の一念三千の大曼荼羅である。本門の題目については「一同に他事をすてて」が信、「南無妙法蓮華経と唱う」とは行の題目である。本門の戒壇については三大秘法抄等にお示しのとおりである。また同じく報恩抄（三二九㌻）に「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし（流布）、日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり、無間地獄の道をふさぎぬ、此の功徳は伝教・天台にも超へ竜樹・迦葉にもすぐれたり、極楽百年の修行は穢土一日の功徳に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか」と仰せであるが、ここで、日蓮大聖人の三徳を明かされ、末法の御本仏たることを証明されている。「日蓮が慈悲……未来までもながるべし」は親の徳、「日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり」は師の徳、「無間地獄の道をふさぎぬ」は主の徳。そしてこの主師親の三徳を具備した日蓮大聖人の功徳は、迹仏たる天台・伝教にも超えるものであると結ばれている。さて、この三大秘法は、末法今時にこそ、必ず流布する大法なのである。

撰時抄（二六四㌻）には妙法流布の必然を次のように明かされている。

「今末法に入って二百余歳・大集経の於我法中・闘諍言訟・白法隠没の時にあたれり仏語まこと（実）ならば定んで

一閻浮提に闘諍起るべき時節なり、……是をもって案ずるに大集経の白法隠没の時に次いで法華経の大白法の日本国並びに一閻浮提に広宣流布せん事を疑うべからざるか、……大地は反覆すとも高山は頽落すとも春の後に夏は来らずとも日は東へかへるとも月は地に落つるとも此の事は一定なるべし」とある。

歴史的にみて、当時は、世界中が戦乱のなかにあった。日本では、承久の乱により三上皇が島流しされ、天皇が廃せられた翌年（西紀一二二二年）に、日蓮大聖人は御誕生になった。その後も国内には内紛や謀叛が相次いで起こり、中国大陸では蒙古の勃興により各国が征服されて、次第に日本にもその危機が迫りつつあった。弘安二年（西紀一二七九年）には南宋が滅びている。西は中央アジアからヨーロッパに、東は朝鮮半島までことごとく蒙古の版図にはいってしまった。西洋では東ローマ帝国が滅亡しラテン帝国の時代であり、第五次、第六次、第七次の十字軍が派遣されて、激烈な宗教戦争が戦われていた。この時には国が滅亡することはなかったが、日蓮大聖人滅後六百数十年にして、日本は世界の各国と大戦争し、ついに敗戦亡国の運命に陥った。

この第二次世界大戦こそ、釈尊の予言した前代未聞の大闘諍であり、この時こそ、化儀の広宣流布の時機と確信し、創価学会は立ち上がったのである。

【五五百歳広宣流布】

末法において、日蓮大聖人の三大秘法の大仏法が、日本国中、さらには全世界に弘まることであり、「五五

百歳」とは、釈尊が大集経に未来の時を予言して説いているように、釈尊滅後第五番目の五百年、闘諍堅固の時、すなわち末法をいう。

「我が滅後に於て五百年の中は解脱堅固・次の五百年は禅定堅固 已上一千年 次の五百年は読誦多聞堅固・次の五百年は多造塔寺堅固 已上二千年 次の五百年は我が法の中に於て闘諍言訟して白法隠没せん」と。また法華経の第七薬王品には「我が滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布」と。

弥勒菩薩の瑜伽論に云く「東方に小国有り其の中に唯大乗の種姓のみ有り」

肇公の翻経の記に云く「大師須梨耶蘇摩左の手に法華経を持し右の手に鳩摩羅什の頂を摩で授与して云く仏

日西に入って遺耀将に東に及ばんとす此の経典東北に縁有り汝慎んで伝弘せよ」

遵式の筆に云く「始め西より伝う猶月の生ずるが如し今復東より返る猶日の昇るが如し」

根本大師の記に云く「代を語れば則ち像の終り末の初・地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば則ち五濁の生・闘諍の時なり」

又云く「正像稍過ぎ已って末法太だ近きに有り法華一乗の機・今正しく是れ其の時なり何を以て知る事を得ん安楽行品に云く末世法滅の時なり」（以上は曾谷入道等許御書一〇三七ページ・一〇三八ページ）

天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」（撰時抄二五九ページ）

妙楽大師云く「末法の初め冥利無きにあらず」（撰時抄二六〇ページ）

以上のごとく釈尊をはじめとした多くの予言に対して日蓮大聖人は、次のごとく仰せられて五五百歳に広宣流布実現を確信されている。

撰時抄（二六〇ページ）　彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華経と唱うる癩人とはなるべし。

諸法実相抄（一三六〇ページ）　末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり、日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが、二人・三人・百人と次第に唱へつたふるなり、未来も又しかるべし、是あに地涌の義に非ずや、剰へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華経と唱へん事は大地を的とするなるべし。

以上の御文にみるように、広宣流布のご確信を述べられ、最後に本門戒壇の建立を、第二祖日興上人に遺付せられたのである。

さらに日蓮大聖人は末法に必ず広宣流布すべきのみならず、日本より起こる日蓮大聖人の仏法が、中国・インドにまで流布すべき確信を、次のごとく述べられている。

聖人知三世事（九七四ページ）　教主釈尊既に近くは去って後三月の涅槃之を知り遠くは後五百歳・広宣流布疑い無き者か。

顕仏未来記（五〇七ページ）　此の人は守護の力を得て本門の本尊・妙法蓮華経の五字を以て閻浮提に広宣流布せしめんか……遵式の云く「始西より伝う猶月の生ずるが如し今復東より返る猶日の昇るが如し」等云云、……仏記に順じて之を勘うるに既に後五百歳の始に相当れり仏法必ず東土の日本より出づべきなり。

諫暁八幡抄（五八八ページ）　天竺国をば月氏国と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑国をば日本国と申すあに聖人出で給わざらむ、月は西より東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき相なり、日は東より出づ日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり。

【舎衛の三億】

仏法の聞きがたいことをいう。仏の在世に生まれ合わせてさえも、なお仏を見ず、仏について聞かない者が多いことを、舎衛国の実例によって示したもの。次に舎衛と三億とに分けて解説する。

舎衛——本来、憍薩羅国の都城の名。国号としてもつかわれる。つぶさには、室羅筏悉底という。舎衛はその訛略。ほかに舎婆提、尸羅跋提、捨羅婆悉帝夜等の名もある。釈迦はこの国の迦比羅衛城に生まれた。大智度論巻三に「舎婆提城には九億の家あり、是の中に若し少時のみ住したまわば、多人を度することを得ず。是れを以っての故に、多く住したまえり」とあるごとく、仏はここに止住すること二十五年、国王・波斯匿、大臣・須達多をはじめ多数の民衆を教化した。しかし、かかる恵まれた環境にありながら、舎衛国において釈迦の教えを眼のあたり聞いた家は、全体の三分の一にすぎなかった。三分の一は、仏のいることを耳にはしたが、見たことはなく、また三分の一は、見たことはおろか聞いたこともなかったという。大智度論巻九に「仏は此の重罪にして見仏の善根を植えざる人のために説いていわく、仏世には値い難し。優曇波羅樹の華の、時時一たび有るがごとしと。説くが如くんば、舎衛の中に九億の家あり。三億の家は眼に仏を見、三億の家は耳に仏有りと聞くも、しかし眼に見ず。三億の家は聞かず見ずと。仏、舎衛に在すこと二十五年、しかも此の衆生は聞かず見ず、何に況んや遠き者をや」とある。また止観巻四の上には「世に仏有りて法を説き人を度すと雖も、しかもそれ等においてまったく利益なし。たとい値遇することをうるも、開解すること能わず、振丹の

一国覚らず知らず、舎衛の三億聞かず見ず、諸天に着楽し、および難処に生じて、来たり聴受せず」とある。三億――大論、止観の文により、舎衛の三億とは、九億の家の三分の一、すなわち仏を眼のあたり見ない者三億、またはまったく聞いたことのないもの三億をさすことは明らかである。古代インドにおいては、今日の十万を億と名づけた。

したがって、舎衛の三億は三十万であり、舎衛全体では九十万戸があったと推定される。しかし、釈迦在世に盛んだった国勢も、滅後は次第に衰退し、ついに滅びて十九世紀中葉までは、その古址も判然としない状態であった。

【一念三千】

一念三千は仏教の極理である。釈尊はこれを本懐として法華経迹門方便品にいたり「諸法実相」に約して、ほぼこれを説いた。ついで本門寿量品にいたり「因果国の三妙」に約して仏身の振舞いのうえからこれを説いた。これを受けて天台大師は像法時代に出現して、摩訶止観の第五で次のように説いたのである。

観心本尊抄（二三八ページ）　摩訶止観第五に云く世間と如是と一なり開合の異なり。「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、此の三千・一念の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れば即ち三千を具す乃至所以に称して不可思議境と為す意此に在り」

さて、十界とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏である。十如とは如是相・性・体・

力・作・因・縁・果・報・本末究竟等である。三世間とは五陰と衆生と国土の世間である。

五陰とは色・受・想・行・識の五であり、陰とは〝おおいかくす〟の意と〝あつまる〟の二つの意味がある。〝おおいかくす〟の意で九界に約せば善法をおおいかくしており、仏界に約せば慈悲におおわれていることになる。〝あつまる〟の意味で九界に約せば生死のあつまりであり、仏界に約せば常楽があつまっていることになる。

五陰が仮に和合するのを衆生という。十界にはそれぞれの衆生がおり、仏界は尊極の衆生である。国土世間とは十界の住する所である。仏は寂光土、菩薩は実報土、二乗は方便土、天は宮殿、人は大地、地獄は赤鉄に住する等のごときである。

世間とは差別の義である。Aの人とBの人を比べて五陰の差別を五陰世間という。仏界の衆生と人界の衆生の差別を衆生世間という。同様に国土の差別を国土世間という。（十界互具、十如是、三世間の項参照）

ところで、一念三千には事と理があり、迹門は理の一念三千であり、本門は事の一念三千である。与えて論ずれば迹門を理の一念三千と名づけるが、奪っていえば迹門を真実の一念三千ということはできない。

観心本尊抄（二五三㌻）像法の中末に観音・薬王・南岳・天台等と示現し出現して迹門を以て面と為し本門を以て裏と為して百界千如・一念三千其の義を尽せり、但理具を論じて事行の南無妙法蓮華経の五字並びに本門の本尊未だ広く之を行ぜず所詮円機有って円時無き故なり。

開目抄上（一九七㌻）迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顕本せざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水中の月を

見るがごとし・根なし草の波の上に浮べるにに似たり。本迹の一念三千に以上のような相違があるとはいえ、文底下種本門に対するときは、法華経の本迹二門ともに理の一念三千となる。すなわち一念三千の法門とは、寿量品の文底に秘し沈められた三大秘法の南無妙法蓮華経である。

開目抄上（一八九㌻）一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知ってしかも・いまだ・ひろいいだ拾出さず但我が天台智者のみこれをいだ懐けり。

本因妙抄（八七七㌻）問うて云く寿量品・文底の大事と云う秘法如何、答えて云く唯密の正法なり秘す可し秘す可し一代応仏のいきをひかえたる方は理の上の法相なれば一部共に理の一念三千迹の上の本門寿量ぞと得意せしむる事を脱益の文の上と申すなり、文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達の正観・事行の一念三千の南無妙法蓮華経是なり。

【事と理】

諸法の実相は事と理に分けられる。事とは宇宙の森羅万象の事実の姿をいい、その姿のなかにある法則が理である。ゆえに生命を論ずる場合は必ず事理の二面から論じなければならない。

釈尊の時代には、宇宙の具体的事相、また世間の具体的人間の姿を通して、絶対にくずれない生命の実相を悟るために、具体的修行を説いた。六波羅蜜行もその修行のなかの一つである。そしてこの修行を事といい、

この修行を通じて、生命の実相の理を悟ろうとした。ゆえに釈迦仏法においては、事より理が勝れているのである。そして法華経に一念三千の法理を説き明かしたのである。

しかし末法にはいると事と理の内容は変わるのである。すなわち、日蓮大聖人は一念三千の理を、凡身のわれわれに悟らせるために、具体的にどうすべきかをお考えになり、宇宙の生命、すなわち、一念三千の法理の当体として一幅の大曼荼羅をご図顕になられたのである。ゆえにこの大曼荼羅には、一念三千の理を含むゆえに事は理より勝れていることになる。そしてこの曼荼羅を信受し唱題することにより、一念三千の当体をわが凡身に湧現できるのである。実に甚深の法門なのである。

草木成仏口決（一三三九ページ）　一念三千の法門をふりすすぎたてたるは大曼荼羅なり、当世の習いそこないの学者ゆめにもしらざる法門なり。

【十界互具】

十界互具とは地獄より仏界にいたる十界のおのおのに十界を具していることである。

観心本尊抄（二四〇ページ）　法華経第一方便品に云く「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云云是は九界所具の仏界なり、寿量品に云く「是くの如く我成仏してより已来甚大に久遠なり寿命・無量阿僧祇劫・常住にして滅せず諸の善男子・我本菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命今猶未だ尽きず復上の数に倍せり」等云云此の経文は仏界所具の九界なり、経に云く「提婆達多乃至天王如来」等云云地獄界所具の仏界なり、

経に云く「一を藍婆と名け乃至汝等但能く法華の名を護持する者は福量るべからず」等云云、是れ餓鬼界所具の十界なり—以下略—

右の御文中で、法華経方便品の文は、凡下の衆生にも仏の知見がそなわっていることを示している。もし凡夫に仏の知見が、まったくないならば、開くところの何ものもないことになるのである。次の寿量品の文は、仏界に九界を具足しているとの御文である。菩薩の道を行じたということが、なぜ仏界所具の九界となるか。それは菩薩道を九界の代表としてあげ、無数の河川が流れて海へはいると、同じく一つの海水となるが、しかもそのなかに河川の水をそのまま含むように、九界の所行はそのまま仏界の徳に具足していることを示すのである。次の「提婆達多乃至天王如来」の文は地獄界に仏界を具している。いわんや余の八界を具足していることはいうまでもないとの意である。次いで「餓鬼界所具の十界」以下はこれに準じて知るべきである。

さて末法における真実事行の十界互具については、次のようなご教示がある。

本尊七箇の相承（富要一巻三一ページ）真実の十界互具は如何、師の曰く唱えられ給う処の七字は仏界なり、唱え奉る我等衆生は九界なり、是れ即ち四教の因果を打ち破って真の十界の因果を説き顕わす、此の時の我等は無作三身にして寂光土に住する実仏なり、出世の応仏は垂迹施権の権仏なり秘す可し秘す可し。

当体義抄文段（富要四巻三九五ページ）蓮祖は是れ本果妙の仏界なり、興師は是れ本因妙の九界なり、富士山は即是れ本国土妙なり、若し爾らば種が家の本因・本果・本国土・三妙合論の事の一念三千にして、即是れ中央の本門の本尊なり。

このように明らかにお示しのように、われわれ凡夫の一念に大御本尊を信じ奉る瞬間に仏界を具し、御本仏

日蓮大聖人のご一念も他の九界を具足していることが真実の十界互具である。種が家の本因・本果とは、日蓮大聖人が本果妙の仏界に居し、血脈付法の大導師・日興上人が本因妙九界の代表となられるのである。次の御文のごときも一往は在世脱益の儀式に通じるといえども、再往の実義は末法下種が家の本因本果・真実の十界互具と拝すべきである。

開目抄上（一九七㌻）　本門にいたりて始成正覚をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打ちやぶって本門の十界の因果をとき顕す、此即ち本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて・真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

【十如是】

方便品において「唯、仏と仏と、乃し能く究尽し給える諸法の実相」として説かれたのが「如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等」の十如是である。その意はわれわれの精神も肉体も、もちろんのこと、宇宙のあらゆる森羅万象は、ことごとくそれぞれの外に現われている相貌があり、また性質性分があり、そのものの実体があり、したがってそれのおよぼす力を内在していて、発動しては作用となり、変化を起こす原因と、因を助けて変化させる縁とが合致して結果を生む。その報はそのまま相であり、したがって相性体力作因縁果報をそなえて、すなわち本末究竟して等しと説くのが十如実相である。これは略開三顕一の文であり、天台はこれによって理の一念三千を立てたのである。

観心本尊抄（二三九ページ）釈籤第六に云く「相は唯色に在り性は唯心に在り体・力・作・縁は義色心を兼ね因果は唯心・報は唯色に在り」等云云、金錍論に云く「乃ち是れ一草・一木・一礫・一塵・各一仏性・各一因果あり縁了を具足す」等云云。

三重秘伝抄（富要三巻一八ページ）止観の第五巻に至りて正しく一念三千を明すなり、此れに二意あり、一は如是に約して数量を明す所謂百界・三百世間・三千如是なり、二に世間に約して数量を明す所謂百界・千如是・三千世間なり、開合異ると雖も同じく一念三千なり云云。

以上の文におけるように、一念三千の法門の最初は十界互具より始まる。この十界互具は爾前経にはいまだ説かれていないのである。ゆえに日蓮大聖人は次のごとく仰せである。

開目抄上（一八九ページ）一念三千は十界互具よりことはじまれり、法相と三論とは八界を立てて十界をしらず況や互具をしるべしや、倶舎・成実・律宗等は阿含経によれり六界を明めて四界をしらず。

すなわち、法華経迹門にいたり、二乗作仏を説き、九界即仏界の義を明かし、十界互具を説き明かすのである。したがって、十界の各界にそれぞれ十界を具すから百界となるのである。

さらに、方便品で「唯、仏と仏と、乃し能く諸法の実相を究尽したまえり。所謂諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等なり」と十如是を説くことにより、百界は千如となる。この迹門の一念三千を、理の一念三千というのである。次いで釈尊は、本門を説き、寿量品にいたって始成正覚を打ち破って久遠実成を説く、そして三妙合論に約して一念三千を明かすゆえ、本門の一念三千を、事の一念三千というのである。また、迹門は、百界千如であるが、本門は、国土世間が説か

れるところからも三千になるのである。このことは、観心本尊抄（二四九ページ）に「十界久遠の上に国土世間既に顕われ一念三千殆んど竹膜を隔つ」とある御文に明らかである。

しかし、本門を事の一念三千というも、末法の法華経たる、日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華経よりみるならば迹本ともに理の一念三千となり、文底独一本門を事の一念三千の法門というのである。かかるゆえに「一念三千殆んど竹膜を隔つ」というのである。このように十如是の文こそ、一念三千の出発となる重要な文であり、また迹門の仏は、これにすべてを尽くしているのである。

しかし、十章抄（一二七四ページ）に「一念三千の出処は略開三の十如実相なれども義分は本門に限る」とあるように、迹門は文のみであり、その義は本門である。しかも、久遠元初の文底下種の法門にいたって、初めて真実の事の一念三千となるのである。したがって日蓮大聖人の仏法において、初めて真に生命の本質を説き明かされたといえるのである。

次に、十如是の一つ一つについて説明を加えてみることにする。

如是相とは、外面の姿であり、物質・肉体である。如是性とは内面の性質であり、精神・心・智慧等をいうのである。如是体とは、生命である。如是力とは内在している力。如是作とはその力が働き出すことをいうのである。その働きはまたその生命自体にとっては何らかの因となる、これを如是因というのである。因は外界の助縁と和合して果を生む、これが如是縁、如是果である。さらに果に何らかの報いを感ずるのが如是報である。初めの如是相を本として終わりの報を末として本末は究竟して等しい、これを如是本末究竟等というのである。

以上、一般論的に十如是を説明したが、さらに、日寛上人、戸田前会長の教えより、十如是を詳しく説明した文をあげてみることにする。

三重秘伝抄（富要三巻一七ページ）にいわく、

如是相とは譬えば臨終に黒色なるは地獄の相・白色なるは天上の相等の如し、如是性とは十界の善悪の性・其の内心に定まり後世まで改まらざるを性と云うなり、如是体とは十界の身体色質なり、如是力とは十界各各の作すべき所の功能なり、如是作とは三業を運動し善悪の所作を行うなり、善悪に亘りて習因習果あり、先念は習因・後念は習果なり、是れ即ち悪念は悪を起し善念は善を起す、後に起す所の善悪の念は前の善悪の念に由る故に前念は習因・即ち如是因なり、後念は習果・即ち如是果なり、善悪の業体を潤ずる助縁は是れ如是縁なり、習因習果等の業因に酬いて正しく善悪の報を受くるは是れ如是報なり、初めの相を本となし、後の報を末と為し、此の本末の其の体究って中道実相なるを本末究竟等と云うなり云云。

ここで戸田前会長が九界に約して十如是を解説した文をあげてみよう。

たとえば、ある人が十万円の札束を拾ったとする。その瞬間に次のような働きがある。しかし、この例は生命活動の一瞬間の働きであるということを忘れてはならない。

如是相　拾った瞬間のその人の姿、かたちである。金が欲しくてたまらない餓鬼の境涯にいる人は、うれしさのため、何もかも忘れ、相好をくずし、夢中で喜んでいる姿になる。地獄界の人、たとえば、一人の子が病気で死にそうな状態に悩んでいる父親が、この十万円を拾った瞬間は、札束を拾ったのか、くず紙の束を拾ったのか、わからぬような姿で、また捨てようとするような態度であるかもしれぬ。また声聞界、縁覚界の人は、

自分だけは幸福でも、他人のことなどは、少しも考えぬ境涯の人であるから、この十万円の束を拾ったとするならば、掛かり合いになってはならない、めんどうなことが起こってはならないと思い、これを捨てて逃げようとする姿を示すであろう。このような、十万円を拾ったときの喜びの姿、驚きの姿、迷惑そうな姿、気の毒そうな姿等が如是相である。

如是性　その時の心の動きであり、畜生界の人は、拾った姿を人に見られたくないと思うであろうし、人間界の人は、拾った物は交番に届けるのが当然だという、一般通念にもとづいている心の状態であろう。また菩薩界の人は、落とした人がかわいそうだ、早く届けてやりたいという心で、いっぱいではなかろうか。

如是体　修羅界の人は腹を立て、その場に投げようとする姿が、体があらわれるだろう。餓鬼界の人は、十万円の束をしっかりにぎりしめて、落としてはならないという餓鬼の姿を示すであろう。このように、その人の性分とその人の姿に、種々の体をなすのである。すなわち、驚いた体、喜んだ体、当惑した体、人に見られはしないかと、あたりを見回そうとする生命体などがあるであろう。

如是力　畜生界の人は、ノラ犬が食べ物をかくれて食べるときのような力が出る。地獄界の人は、十万円の金をもったときも、なんの力も湧いてはこないだろう。菩薩界の人は、落とした人に一刻も早く届けてやりたい心で、いっぱいであるから、その方法等について、勇気凛然たる力が湧いてくるはずである。

如是作　前の力が働きとなって現われ、声聞・縁覚の人は、自分に迷惑がかからないようにしようという一心であるから、そっとそこに置こうとする働きが満ちる。畜生界の人は、十万円の金をわがものにしようとする意図が満ちて、鼠が穀物をとろうとする働き。犬が食物を盗みとらんとする働きが、そこに現われるであろ

う。このように、拾った十万円を持っている、その人の瞬間には、十万円をどうすべきかという働きを保っているのである。

如是因　その十万円を拾ったということが何かの因になる。すなわち世の中をおもしろく愉快に暮らしている天界の人は、拾ったことが愉快で、また天界の因となる。菩薩界の人は、拾った十万円で人を救い、菩薩行の因を積むであろう。地獄界の人は、十万円拾っても、あいかわらず悩みに沈んでいるだけであるから、地獄の因を積んでいるにすぎない。これでは、幸福への道は開けないのである。また拾ったという、その瞬間に十万円を拾うべき因もあるのである。

如是縁　地獄界の人は拾った十万円が、また外界の縁となり、そこにさらに悩みが起こるような縁になって苦悩を深める。人をあわれみ、世を思う徳高い菩薩界の人は、この十万円と結んだ瞬間の縁は、落とした人をあわれむの心から、あわれみ深い人が、けがをした人と会ったような縁と似ているであろう。声聞・縁覚界の人は、オレ一人よければ、それでよいという個人主義の人だから、十万円を拾った瞬間に、その縁はあたかも、貴婦人がゲジゲジにあったような縁に似たものではなかろうか。

如是果　人間界の心平らかな人は、十万円をもったということに対して責任を感ずるような心になる果があるであろう。すなわち十万円拾った瞬間の心の状態が果である。

如是報　個人主義的な声聞・縁覚界の人にとって、その十万円は不愉快をおぼえる一個の物にすぎず、餓鬼界の人は一割の謝礼金を考えるだろうし、天界の人は、拾った人もうれしく、落とした人もおもしろいといっている人であるから、十万円の金は、よいおもちゃであるくらいの報をうけているのであろう。

如是本末究竟等　如是相を始め（本）とし、如是報を終わり（末）として、本末究竟して中道法相である。畜生界の人は如是相から如是報にいたるまで、一貫して十万円に執着しきっている姿で、相性体力作因縁果報まで、究竟して等しく、この状態以外の何ものもない。修羅界の人も、如是相から如是報にいたるまで、一貫して腹を立てきっている状態で、相性体力作因縁果報みな究竟してこの姿である。声聞・縁覚界の人は、如是相から如是報にいたるまで一貫して、みな関係したくないという個人主義的状態で、相性体力作因縁果報まで究竟して等しくこの姿である。菩薩界の人は、如是相から如是報にいたるまで、一貫して思いやり深い状態で、相性体力作因縁果報まで等しく同じである。

以上の説明のように、十如是は、九界おのおのについていえる。次に仏界に約して十如是を説明してみることにする。しかし、仏界は現じ難いものであるがゆえに、われわれ凡愚には、なかなか理解しがたいことである。ゆえに前章と同じく、戸田前会長の講義のなかより、仏界に約して説明された文をあげてみよう。

如是相　仏にもお姿がある。迹門の仏と、本門の仏と、文底秘沈の仏とは、みな相が違います。ピカピカしたアミダみたいな仏相、あんなのは考えてみたって、ウソだということがわかるでしょう。そんなウソのものを信じて、たよりにしても、しようがないのです。ところが、末法の御本尊、文底秘沈の御本尊の如是相というのは、凡夫のお姿そのままではないか、凡夫相でいらせられる。それが本当のお姿である。

如是性　仏の性分を持っていらっしゃる。日蓮大聖人は、お姿は凡夫のお姿であるが、お心は御本仏の性分である。

如是体　そして、日蓮大聖人という御本体を作られている。これは、御本尊についても同じくいえる。

如是力　力を持っておられる。同じ仏でも、迹門の仏と、本門の仏と、文底秘沈の仏とは、力が違う。文底秘沈、南無妙法蓮華経という力は、日蓮大聖人というお力は、あらゆる仏を作られている。

如是作　力あるところ、必ず作用がある。

如是因　作用があるのには、原因がある。日蓮大聖人が末法にお生まれになって、文底秘沈の大法を説かれる因は、久遠元初に、すでにできているのである。

如是縁　その縁は、末法の衆生というものを縁になさっていらっしゃる。われわれが縁になっているのである。われわれは、釈尊になんにも縁がない。だから、釈尊の仏法なんかでは絶対に成仏できない、幸福になれない。そういうしまつの悪い者が生まれてきた時だから、それを縁としてご出現になったのである。

如是果　よって、竜の口のご難を受けられ、仏の境涯をあらわされた。

如是報　報いを受けられた。御本仏としてのひじょうに平らかな境涯を九か年、身延の山でおすごしあそばして、仏の境涯を楽しまれたのが報です。

如是本末究竟等　これを仏の姿に読みますれば、如是相という日蓮大聖人のお姿、如是性という本仏のお心、また、如是体という本体にしても、力にしても作用にしても、因縁果報ことごとく御本仏の姿それ自体でしょう。本も末も、究竟して等しいでしょう。御本尊と申し上げますれば、如是相も、如是性も、如是体も、力作因縁果報ことごとく御本尊なのである。一貫していなければダメなのである。

以上、仏界の十如が明らかであるように、この諸法実相の文は、実に、大御本尊のお姿をお説きになった文なのである。

【三身】

法身、報身、応身を三身という。宇宙のすべての生命、またわれわれの生命にも三身を具している。応身とは肉体（外界にあらわれた色形）、報身は智慧（内面に備わっている力）、法身は生命（本来永遠の実在）である。爾前の経教においては、種々の仏が説かれるが、いずれも娑婆世界でなく他土に住し、始成の仏である。しかもただ法身のみであったり、報身のみであったり、あるいは応身仏である。これに対し、寿量品においては「久遠本有常住・此土有縁深厚」の三身具足の釈迦如来が説かれて、生命の実相が説き示されるのである。寿量品の目的は報中論三といって、報身を要として総体の三身を説くのである。しかして文底の意は、久遠元初の自受用無作三身を示していることであり、御義口伝等によって明らかである。

四条金吾釈迦仏供養事（一一四四㌻）三身とは一には法身如来・二には報身如来・三には応身如来なり、此の三身如来をば一切の諸仏必ずあひぐす（相具）譬へば月の体は法身・月の光は報身・月の影は応身にたとう、一の月に三のことわりあり・一仏に三身の徳まします……天台大師の云く「仏三世に於て等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝えず」云云。

三大秘法禀承事（一〇二二㌻）寿量品に云く「如来秘密神通之力」等云云、疏の九に云く「一身即三身なるを名けて秘と為し三身即一身なるを名けて密と為す又昔より説かざる所を名けて秘と為し唯仏のみ自ら知るを名けて密と為す仏三世に於て等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝えず」等云云。

開目抄上（一九八ページ）　雙林最後の大般涅槃経・四十巻・其の外の法華・前後の諸大経に一字一句もなく法身の無始・無終はとけども応身・報身の顕本はとかれず。

法華真言勝劣事（一二五ページ）　今大日経並に諸大乗経の無始無終は法身の無始無終なり三身の無始無終に非ず。

御義口伝下（七五二ページ）　如来とは……別しては本地無作の三身なり……無作の三身とは末法の法華経の行者なり。

さて、三身常住について論ずるならば、爾前においては、あるいは応身を説き、あるいは報身を説き、あるいは法身を説くといえども、いずれも単法身等であり、いまだ三身即一ではなかった。

法華経迹門にきても応即法身の分野で、いまだ自受用身ではない。本門にいたり、初めて応仏昇進の自受用身ではあるが、長寿を明かして自受用報身とあらわれたのである。ここにおいて、爾前各別の三身が整足されて、一身即三身、三身即一身であることが明らかとなり、すなわち、報中論三といわれるゆえんである。しかし、これも本果第一番、五百塵点劫における垂迹化他第一番成道の仏身であるから、いまだ常住の体そのものではなく、本有無作の三身、久遠元初の自受用報身如来のご出現がなければ、常住の体は明らかとはならないのである。

さて、爾前の三身はバラバラであるから、始成の仏身であり、かつ滅度の仏となる。迹門にきたって、初めて十如実相が説かれ、相性体が体の三身であり、力作因縁等の七如是が用の三身であることを示して、三身即一の実相が示され、寿量開顕への理がまず示される。ここにおいて、十界互具し法界の実相は十如を出でず、

相性体の三諦が仏の実体であることが明らかになった。

後、寿量品において長寿を明かされ、能化の円仏も所化の大衆も、みな等しく永遠であると示されて、この三身は常住のものなりと決定したのである。もちろん、国土世間も同様、永遠と決まったのである。

「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり」との観心本尊抄（二四七㌻）の御文のとおりである。

「此の三如是の本覚の如来は十方法界を身体と為し十方法界を心性と為し十方法界を相好と為す是の故に我が身は本覚三身如来の身体なり……然るに此の金剛不壊の身を以て生滅無常の身なりと思う僻思は譬えば荘周が夢の蝶の如しと釈し給えるなり」と三世諸仏総勘文教相廃立（五六二、五六七㌻）にお示しである。

裏返していえば、この三諦をわが身の外と思っているのが九界の迷いであり、十方法界の相性体はわが身の上のことであると知れば悟りであり、ここに大御本尊を拝した悟り、本有無作の三身があるのである。「法界の五大は我が五大」との御文も同意である。法界は常住なるゆえに、法界の相性体そのものである無作三身も常住である。詳しくは三世諸仏総勘文教相廃立にお示しである。

四土四教の仏は、土も仏も総の三諦の鏡に映った影にすぎない。ただ、この総の三諦の円仏のみが常住の真仏であり、ゆえに「上上品の寂光の往生を遂げ須臾の間に九界生死の夢の中に還り来って身を十方法界の国土に遍じ心を一切有情の身中に入れて内よりは勧発し外よりは引導し内外相応し因縁和合して自在神通の慈悲の力を施し広く衆生を利益すること滞り有る可からず」（三世諸仏総勘文教相廃立五七四㌻）と教示されているのである。

【因果倶時】

因果とは、原因・結果であって「因果倶時」と「因果異時」の二つの場合がある。因果倶時とは本質論であり、因果異時とは現象面をとらえた見方である。

春蒔いた種が原因となって、その結果、夏に花が咲くとするような場合は、因果異時である。

因果倶時とは瞬間の生命に因と果をそなえていることである。卑近な例でいえば指先に火がふれて「あつい！」と感ずる。火が触れるのは因で熱いと感ずるのは果であるが、それは一瞬の因果である。また怒ると人相が変わる。怒るは因で人相の変わるのは果であるが、これも一瞬の因果である。

その他、結果の現われるまでに時間を要するような場合であっても、その本質をたずねれば、一瞬の生命にあらゆる幸・不幸等の因果を同時にそなえているのである。この「因果倶時不思議の一法」を妙法蓮華と名づけるのである。仏法のうえから論ずれば、これにも、また次のような二つの場合がある。

一には九界を因とし仏界を果とする場合である。あらゆる生命は十界をそなえており、九界即仏界、仏界即九界と因果倶時・十界宛然と一念の心法に互具していることを「因果倶時不思議の一法」というのである。

二には十界各具の因果である。地獄界のごときは瞋って悪口をいう、瞋るは因で、悪口をいうは果であり、しかも一刹那にこのような悪の境智和合がある。仏界のごときは御本尊を信じて題目を唱える。信心は因で唱題は果であり、しかも一念の刹那にこの因果を具す。これを妙法蓮華と名づけるのである。

この一瞬の因果を開くならば、

開目抄下（二三一ページ）天台云く「今我が疾苦は皆過去に由る今生の修福は報・将来に在り」等云云、心地観経に曰く「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」等云云。

すなわち、過去のあらゆる因が現在の果であり、現在の一瞬一瞬の生活はすべて因となって未来の果を結ぶ。信心修行の一日たりとも怠ってならない理由はここにあるのである。

【三宝】

三宝とは仏法僧のことで、別名を三尊ともいう。仏宝とはいうまでもなく、宇宙の実相を見きわめられ、主師親の三徳をそなえられた仏であり、法宝とは仏の説いた教法、僧宝とはその法を学び伝持していく方をいうのである。

三宝の立て方は、正法、像法、末法、それぞれ、その時代により異なる。釈尊の法華経による三宝は、仏宝＝釈尊、法宝＝法華経二十八品、僧宝＝上行菩薩であり、末法の三宝は、唯授一人の相承を、清純に伝承している日蓮正宗のみが知る深秘の法門である。すなわち仏宝は、久遠元初の自受用報身如来であられる日蓮大聖人、法宝は事の一念三千・南無妙法蓮華経の大御本尊、僧宝とは血脈付法の御弟子日興上人である。

身延派をはじめとする邪宗日蓮宗は、釈迦多宝の二仏を仏宝とし、南無妙法蓮華経の主題の五字を法宝と

し、日蓮大聖人を僧宝と立てているが、これは大なる僻見である。なぜならば、仏法僧はその内容において、一体不二でなければならないのに、すでに仏宝と法宝とに勝劣の矛盾があり、日蓮大聖人を僧宝とする等は、日蓮大聖人こそ下種の御本仏たることを知らぬ証である。

諸法実相抄（一三五八㌻）　されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候へ。

撰時抄（二八四㌻）　日蓮は日本第一の法華経の行者なる事あえて疑ひなし、これをもってすいせよ漢土月支にも一閻浮提の内にも肩をならぶる者は有るべからず。

百六箇抄（八六三㌻）　下種の法華経教主の本迹。自受用身は本・上行日蓮は迹なり、我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり。

以上の御文から、末法の仏宝は、日蓮大聖人であることは明白である。

【種熟脱】

種とは下種のことで、仏にあって、仏になる種を得ることであり、熟とは過去の下種が薫発し、調養することで、脱とは下種された仏種が調養して、ついに仏と同じ境涯を得るにいたる、すなわち成仏することをいう。

秋元御書（一〇七二㌻）　種熟脱の法門・法華経の肝心なり、三世十方の仏は必ず妙法蓮華経の五字を種として仏になり給へり。

観心本尊抄（二四九ジ）設い法は甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず還って灰断に同じ化の始終無しとは是なり。

以上のように種熟脱の法門は仏法を論ずるにあたって肝要である。日蓮大聖人は「法華経は種の如く仏はうへての如く衆生は田の如くなり」（曾谷殿御返事一〇五六ジ）と仰せられている。すなわち下種し熟し脱するの過程が明らかにされたのは、法華経の迹門化城喩品において、大通下種三千塵点劫の法門が最初である。すなわち大通智勝仏の時に下種をうけて、それがしだいに熟して釈尊にあい、さらに未来不可思議劫を経て成仏すると説くから、これを熟益仏法という。次いで本門寿量品においては五百塵点劫以来の種熟脱が明らかにされて師弟の遠近が説き示されている。

これを要するに釈迦仏法においては五百塵点劫に下種し、大通仏および爾前四十余年・法華経の迹門までを熟益となして、本門寿量品にいたって脱せしめるのが文上至極の義である。ゆえに脱益仏法という。

しかるに末法においては本未有善の衆生であるから寿量文上の脱益の仏法はまったく利益がなく、文底下種仏法のみが真に末法の衆生を救う利益があるのである。日蓮大聖人の文底下種仏法は、下種益といい、妙法五字の下種をうけ、直達正観して、ただちに仏の境涯を得るのであって、末法においては、この下種益の御本尊によってのみ成仏することができるのである。ゆえに観心本尊抄（二四九ジ）には「彼は脱此れは種なり」と仰せられ、御義口伝下（七五三ジ）には「当品（寿量品）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す」と仰せられている。

【五重玄】

五重玄とは天台大師が法華経を解釈するにあたって、法華玄義に説いた名・体・宗・用・教で、詳しくは、釈名・弁体・明宗・論用・判教のことである。

これを平易に説明すれば、名は万物の名前であり、体は万物の当体であり、宗は万物おのおのがそなえている特質であり、用はその働き作用であり、教はその活動が影響するをいう。

すなわち万物ことごとくこの五重玄をそなえている。天台大師は、法華経神力品の結要付嘱の文を、この五重玄の依文としているが、この文はまた、日蓮大聖人が末法で建立の三大秘法の依文でもある。すなわち「要を以て之を言えば如来の一切の所有の法（名）如来の一切の自在の神力（用・戒壇）如来の一切の秘要の蔵（体・本尊）如来の一切の甚深の事（宗・題目）皆此経に於て宣示顕説す」と。教は名体宗用のあるところ、必ずそなわっているのである。また三大秘法の大御本尊は、次のようであると御書にお示しになっている。

当体義抄（五一三ページ）聖人理を観じて万物に名を付くる時・因果倶時・不思議の一法之れ有り之を名けて妙法蓮華と為す（已上は名玄義）此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し（已上は体玄義）之を修行する者は仏因・仏果・同時に之を得るなり（已上は宗玄義）、聖人此の法を師と為して修行覚道し給えば妙因・妙果・倶時に感得し給う（已上は用玄義）。

これを、わかりやすく、説明するならば、名玄義は、妙法蓮華経の御本尊の名前であり、体とは、十界・十

如・三千の諸法、すなわち一念三千の当体の御本尊のことである。宗とはこの御本尊を信じて題目を唱えるとき、仏因・仏果を同時に感得する、受持即観心の特質をいう。また一切衆生を、仏因・仏果・倶時感得（即身成仏）して救いきる力を用とするのである。

【三因仏性】

仏性には三因仏性があることが説かれているが、三因仏性とは、正因仏性、了因仏性、縁因仏性の三つである。

大涅槃経邪正品にいわく「一切衆生仏性ありと雖も、かならず持戒に因りて、然して後乃ち見る、仏性を見るに因りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得」と。

「一切衆生仏性あり」ということは、正因仏性である。正法を信じていない人でも、理の一念三千の当体であり、仏性を存しているのである。ゆえに、御本尊に題目を唱えることによって、仏性が開発するのであって、ここに「一切衆生仏性あり」ということができる。

次に「持戒に因りて、然して後乃ち見る」の「持戒」とは、すなわち縁因仏性である。「持戒」すなわち、御本尊を持つことによって、仏性を開発することができる。

次には「仏性を見るに因りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得」の「仏性を見る」とは、すなわち了因仏性である。

天台大師の金光明経玄義にいわく「云何なるか三仏性なる、仏とは名づけて覚となす、性とは不改に名づ

く、不改は是れ常に非ず、無常に非ず、土の内に金の蔵せるが如し、天魔外道も壊ること能わざるを、正因仏性と名づく、了因仏性とは、覚智は常に非ず、無常に非ず、智、理と相応し、人の能く金の蔵せるを知るが如く、此の智破壊すべからざるを了因仏性と名づく。縁因仏性とは、一切の常に非ず、無常に非ざる功徳善根覚智を資助し、正性を開顕す、草穢を耘り除いて、金の蔵せるを掘出するが如きを、縁因仏性と名づく、当に知るべし、三仏性皆常楽我浄にして、三徳と無二無別なり、すでに金光明の三字を見て三徳に譬うるなり」

以上、三因仏性について、土中の金をもって説明しているのである。すなわち、土中の金は、いまだ誰にも発見されないところの金であって、発見はされないが、一切衆生ことごとく仏性を存す、すなわち、金を蔵しているのである。これ正因仏性というのである。人が土中に金の蔵することを知ることは、その人の智慧によるのである。すなわち、御本尊に縁をもつことによって、仏性が開発される、これが縁因仏性である。そして仏性を了知することができるのである。これ了因仏性なのである。

四明知礼の拾遺記に扶釈して「正は謂く中正、了は謂く照了、縁は謂く助縁、縁因は了因を資く、了は正因を顕わす、正因は勝縁を起こす、亦た是れ正因は了因に発り、了因は縁因に導かれ、縁因は正因を厳り、正因は勝縁を起こす」と。

すなわち三因仏性は、互いに関連しあって、一仏性を存するのである。

御義口伝下（七六八ページ）内証には汝等三因仏性の善因あり、事に顕す時は善果と成って皆当作仏す可しと礼拝し給うなり云云。

右の御義口伝は不軽品の文である。不軽品について日寛上人は末法相応抄に詳しく解説されている。

末法相応抄（富要三巻一四五ページ）文の十に云く「読誦経典は則ち了因性・皆行菩薩道は即ち縁因性・不敢軽慢而復深敬は即正因性」文。

すなわち御本尊に向かって、経典を読誦し成仏することができる、これ了因仏性である。

御本尊によって仏道修行することが縁因仏性である。人おのおのに正因仏性があり、御本尊を知ることが了因であり、御本尊に題目をあげることが縁因であり、それによって成仏することができる、すなわち了因仏性となるのである。

始聞仏乗義（九八三ページ）凡そ心有る者は是れ正因の種なり随って一句を聞くは是れ了因の種なり低頭挙手は是れ縁因の種なり。

又証真云く「聞法を下種と為す了因の種なるが故に、発心を結縁と為す仏果の縁なるが故に」

仏にあって破することができない、天魔外道にあっても壊ることのできない、本有実相の理を正因仏性と名づけるのである。本有の妙智よく実相にかなって、真性に通達照了するを了因仏性と名づけ、功徳善根が外よりきて内外相応じて、了因の智慧をたすけて、正因仏性を開発せしむるを、縁因仏性というのである。

観心本尊抄（二三九ページ）金錍論に云く「乃ち是れ一草・一木・一礫・一塵・各一仏性・各一因果あり縁了を具足す」等云云。

次に三因仏性を一念三千、空仮中の三諦、法報応の三身との関連からみることとする。

日寛上人の観心本尊抄文段（富要四巻二三五ページ）を拝するに、

此れ即ち性得の三因仏性なり。各一仏性とは正因仏性なり、此の正因仏性即ち是れ一念三千なり。故に各一

因果と云うなり、謂く因果とは即ち是れ十如是の因果の二法なり、実相必ず諸法、諸法必ず十如、十如必ず十界、十界必ず身土、故に因果の二法即ち是れ一念三千なり。故に三千即中の辺を以って正因仏性と名るなり、此の三千即中の正因仏性の体に於て、三千即空、三千即仮の用を具足するなり、三千即仮は即ち是れ縁因仏性、三千即空は是れ了因仏性なり、故に具足縁了と云うなり。弘五中十四に云く、三千即空性は了因なり、三千即仮性は縁因なり、三千即中性は正因なり云云。

文の性得の三因仏性の性得とは、その性それ自体に有するところのものをいうのである。しかして、正因仏性とは、三千即中の辺をもって名づけるのであって、空仮中の三諦の中諦にあたり、あらゆるものの性のなかに、改められざる仏の性として自在している。また、正因仏性の体において、三千即空は了因仏性であり、三千即仮が縁因仏性の働きを具足するのである。

すなわち、正因仏性は体にして、縁因・了因仏性は用である。ゆえに体用を得るのである。御本尊の功徳によって仏身を感ずるとき、法身如来と現われる。了因仏性とは、智と理とを相応して覚智すること、すなわち仏性を了することで、空諦であり、報身如来と現われる。縁因仏性とは、功徳善根が外よりきたる、すなわち大御本尊を信じ、題目を唱え、折伏することによって、内外相応じて、了因の智慧を助けて、正因仏性を開発する仏性であって、仮諦であり、応身如来と現われる。

妙法尼御前御返事（一四〇三ページ）　我等衆生悪業・煩悩・生死果縛の身が、正・了・縁の三仏性の因により て即法・報・応の三身と顕われん事疑ひなかるべし、妙法経力即身成仏と伝教大師も釈せられて候。

正了縁の三因仏性が、即法報応の三身と現われることは、この御文によって明らかになるものである。

観心本尊抄（二三九ページ）金錍論に云く「乃ち是れ一草・一木・一礫・一塵・各一仏性・各一因果あり縁了を具足す」等云云。

この御文は、人間の生命はもちろんのこと、草にも、木にも、塵にも、実在する物にはことごとく仏性があるのであって、その仏性を正了縁の三因仏性といい、御本尊の功徳によって、仏身を成ずるときには、法報応の三身如来と現われるのである。

【四悉檀】

仏法を弘通するにあたって摂受・折伏と共に必要なことは四悉檀である。四悉檀とは仏法を弘めるにあたっての方軌を示したもので、第一義悉檀・対治悉檀・世界悉檀・為人悉檀の四つであり、悉檀とは梵語で「偏く施す」「皆施」等の意である。

第一義悉檀とは真実義悉檀ともいって、法門を第一に立て「本門寿量品の肝心、文底秘沈の大法であるこの御本尊こそ、最高最第一である」等と説くことである。対治悉檀とは、断悪悉檀ともいい、強く相手の邪義を打ち破ることである。世界（世間）悉檀とは、世間一般の事象（自然現象・社会問題）等によせて仏法をわからせていく説き方である。為人悉檀とは、個人個人の身によせて、仏法の道理を説くことで、貧乏で悩む者には、その原因と打開の法を、病気の者には、それにむいた説き方で教える等である。

このうち第一義と対治とは折伏型であり、世界と為人とは摂受型であるが、また正像年間には摂受を表にし

ながら四悉檀を立て、末法には折伏を表に立ててしかも四悉檀を心にかけて弘法すべきである。

顕立正意抄（五三七ページ）　四悉檀を以て時に適うのみ。

太田左衛門尉御返事（一〇一五ページ）　予が法門は四悉檀を心に懸けて申すならば強ちに成仏の理に違わざれば且らく世間普通の義を用ゆべきか。

【三方便】

天台が、法華文句に、方便品の題を釈したとき、法華経の方便の意と、他経（爾前経）のいわゆる方便の意とを区別するために説かれたもの。三方便とは一に法用方便、二に能通方便、三に秘妙方便の三種である。

一に法用方便とは、衆生の機根に応じ、衆生の好むところに随って説法をし、真実の門に誘引しようという教えの説き方である。

二に能通方便とは、衆生が低い経によって、悟ったと思っていることを、だめだと弾呵して真実の門に入らしめる方便である。

以上二つの方便は方便品第二の長行に「正直に方便を捨てて但無上道を説く」と説かれる方便教で、釈迦が四十二年間にわたって小乗・権大乗教で説いたものである。したがって、この場合は、法華経を説くための手段、すなわち真実でない権の教えであるという意味に使われているのであるから用いてはならないのである。

三に秘妙方便とは、秘妙門とも訳すべき法門で、実教である。秘とは仏と仏のみが知っていること、妙とは

衆生の思議しがたい境涯であり、具体的にいうならば、長者窮子の譬えや、衣裏珠の譬えによってわかるように、末法の衆生は種々の悩みや、凡夫そのままの愚かな境涯に住んでいるけれども、その身そのままが、久遠元初以来、御本仏日蓮大聖人の眷属であり、仏なのだと悟る、これが秘妙方便である。悩んでいるときのわれわれも、仏であると自覚して折伏行に励むときも、その体は一つでその人に変わりはない。これは仏のみ知れる不思議であるから秘妙方便という。

御義口伝上（七一四ページ）所詮謗法不信の人は体外の権にして法用能通の二種の方便なり爰を以て無二無別に非るなり、今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱え奉るは是秘妙方便にして体内なり故に妙法蓮華経と題して次に方便品と云えり……一切衆生実相の仏なれば妙なり不思議なり謗法の人今之を知らざる故に之を秘と云う、又云く法界三千を秘妙とは云うなり秘とはきびしきなり三千羅列なり是より外に不思議之無し云云。

【相待妙・絶待妙】

彼と此と相対して取捨を定め、文底下種の大御本尊のみが唯一無二の即身成仏の直道であると決定するのが相待妙である。絶待妙とは大御本尊を信じて修行するにあたっては、法華経はもとより一切経・あらゆる論釈を取り入れて用いる立ち場である。

一代聖教大意（四〇三ページ）相待妙の意は前の四時の一代聖教に法華経を対して爾前と之を嫌い、爾前をば当分と言い法華を跨節と申す、絶待妙の意は一代聖教は即ち法華経なりと開会す。

以上の御文で、当分とは、ある一部分の範囲内で論じ、跨節とは、より全体観のうえに論ずることである。また開会すれば、あらゆる経々がすべて一味平等となるかといえば、そうではない。開会のうえにも勝劣がある。十章抄（一二七五ページ）設い開会をさとれる念仏なりとも猶体内の権なり体内の実に及ばず。

【体内・体外】

華厳経・阿含経等は、体外の権経であり邪教・未得道教である。しかし法華経が説かれて、法華経の体内に開会し入れられて後は体内の権となるのである。また法華経においても、迹門は本門が説かれて会入の後でなければ体外の迹門であって体内の迹門とならない。

当流行事抄（富要三巻一八二ページ）に「通じて迹門に於いて自ら両意有り、一には顕本已前の迹門・是を体外の迹門と名づく即ち是れ本無今有の法なり譬えば不識天月但観池月の如し、二には顕本已後の迹門・是を体内の迹門と名づく即ち本有常住の法と成るなり例せば従本垂迹如月現水の釈の如し」とある。

さらに本門寿量品といえども、文底が顕われなければ体内とはならない。当流行事抄（富要三巻一八九ページ）に「是れ則ち顕と未顕と知と不知と天地遙かに異なり、謂く文底未だ顕われざるを名づけて体外と為す猶・不識天月但観池月の如し、文底已に顕わるれば即ち体内と名づく・池月は即ち是れ天月の影と識るが如し、且く我実成仏の文の如き若し本地第一・本果自行の成道を我実成仏と説くと言わば即ち是れ体外の寿量品なり、若し迹中最初の本果化他の成道を我実成仏と説くと言わば即ち是れ体内の寿量品なり」とある。

末法今時においては、直達正観の南無妙法蓮華経を知らない一切法は、体外である。上野殿御返事（一五四六ページ）に「今末法に入りぬれば余経も法華経もせんなし、但南無妙法蓮華経なるべし」とある。しかし絶待妙の立ち場からみると、三大秘法の御本尊を信ずるものには、体外の権経・実経は、体内の権経・実経となる。すなわち、妙法を知った上での一切法は体内となるのである。御義口伝上（七一四ページ）に「妙法蓮華経の体内に爾前の人法を入るを妙法蓮華経方便品とは云うなり」とある。

体内の権　権経を相待妙から見ると、体外の権経となるが、実経が説かれてのち絶待妙からみると体内の権教となる。諸宗問答抄（三七七ページ）に「絶待妙と申すは開会の法門にて候なり、此の時は爾前権教とて嫌ひ捨らるる所の教を皆法華の大海におさめ入るるなり、随って法華の大海に入りぬれば爾前の権教とて嫌わるる者無きなり」とある。しかし同じ体内であっても権経は実経に劣る。十章抄（一二七五ページ）に「設い開会をさとれる念仏なりとも猶体内の権なり体内の実に及ばず」とある。

体内の実　釈迦の最高の説法である実教（法華経二十八品）は体内であるが、三大秘法の御本尊が建立された末法においては、それ自体を独立して考えると体外となる。しかしながら、三大秘法の御本尊を信ずるものにとっては、体内の実となる。それゆえ、方便品・寿量品を助行として読誦するのである。当流行事抄参照。

【外用と内証】

外用は内証に対する語。仏、菩薩が衆生教化のために、内証をかくして外部に見せた相貌を外用という。内

証は内心のさとり、自己の心証によって仏法の哲理を体得すること。立正観抄（五三一ページ）に「問う天台大師真実に此の一言の妙法を証得したまわざるや、答う内証爾らざるなり、外用に於ては之を弘通したまわざるなり、所謂内証の辺をば秘して外用には三観と号して一念三千の法門を示現し給うなり」とある。

すべてのものに内証と外用がある。日蓮大聖人は、外用の辺にのぞめば上行の再誕日蓮であり、内証は久遠元初の自受用報身の再誕日蓮である。ゆえに文底秘沈抄（富要三巻七七ページ）に「問う久遠元初の自受用身とは即ち是れ本因妙の教主釈尊なり、而して諸門流一同の義に曰く『蓮祖は即ち是れ本化上行の再誕』と云云、其の義文理分明なり、処々に之を示すが如し、今何ぞ蓮祖を久遠元初の自受用身と称し奉るや。答う外用浅近は実に所問の如し、今は内証深秘の故に自受用報身の再誕と云うなり。血脈抄に云く久遠名字已来本因本果の主・本地自受用報身の垂迹・上行菩薩・再誕・本門の大師日蓮等云云。若し外用の浅近に望めば上行の再誕日蓮なり、若し内証の深秘に望まば本地自受用の再誕日蓮なり、故に知ぬ本地は自受用身・垂迹は上行菩薩・顕本は日蓮なり」と。

また、天台、伝教にも、内証外用があることが示されている。等海抄三、伝法護国論、山門縁起を引いた後、文底秘沈抄（富要三巻七九ページ）に「若し外用浅近は天台即ち是れ薬王の再誕なり伝教亦是れ天台の後身なり、然りと雖も台家内証の深秘は倶に釈尊と是れ一体なり、他流の輩は内証深秘の相伝を知らざる故に外用の一辺を執するのみ」と。また「蓮祖の本地内証外用の事」（富要三巻三〇四ページ）に「凡そ蓮祖大聖人は若し外用を論ぜば本化上行菩薩の再誕、諸抄の中に或は仏の御使と云ひ、或は霊山相伝等と云ふが如き是れなり、若し内証を論ずれば、久遠元初の本因妙の教主釈尊なり、諸文の中に、日蓮は日本国の一切衆生の主師親等と

云うが如き是なり」本因妙口決に「是れ又内証外用の二途を以って意得べし」と。このように外用・内証は明らかであり、正しい相伝がないゆえに、外用の姿にこだわって大聖人を菩薩と下すような邪義を立てれば、それは堕地獄の徒という以外ない。

【依義判文】

依義判文とは「義に依って文を判ずる」のであり、依文判義とは「文に依って義を判ずる」のである。法華経の文によって立てる教義というものは、末法に必要のない熟脱の法であるが、文底下種の大御本尊の義によって法華経の文を判ずれば、法華経の文にも三大秘法が明らかに説かれているようなものである。

十章抄（一二七四ページ）一念三千の出処は略開三の十如実相なれども義分は本門に限る・爾前は迹門の依義判文・迹門は本門の依義判文なり、但真実の依文判義は本門に限るべし。

以上の御文によって、本門を文底独一本門と拝するならば、法華経の本迹二門とも文底独一本門の依義判文であり、ただ真の依文判義は日蓮大聖人がご建立の独一本門に限るべしとなるのである。

なお依義判文については日寛上人の依義判文抄を参照すべきである。

撰時抄（二七二ページ）に「最大の深密の正法経文の面に現前なり」と仰せられる意味は、法華経本迹二門を文底独一本門の義によって判ずるゆえに顕然となるのである。すなわち三大秘法の依文が寿量品の「是好良薬今留在此」のように明らかに示されているのである。

また日蓮大聖人の御書を拝読するにあたっても依義判文は大切である。釈尊の仏像造立を賛嘆せられたからといって、釈尊を本尊とすべきでない。念仏を破折するために法華経を立てられたからといって、法華経さえやればそれでいいというわけではない。他宗派との論争は、特にこの点を明らかにして臨まなければならない。

【前三・後三】

法華経涌出品において、迹化他方の菩薩達が、滅後末法に、娑婆世界に住して、法華経を弘通したいと誓ったのに対し、釈尊は「止みね善男子」と、これをとどめ、下方より本化地涌の菩薩を召して、寿量品の肝心たる妙法蓮華経の五字をもって一閻浮提の一切衆生に授与せしめた。

さて迹化他方の菩薩に仏滅後の弘教を中止してなぜ本化を召し出したかというに、これについて天台は前三後三の釈を説いて明らかにしている。いまその前三後三の六種の釈を述べるならば次の御書に明らかである。

上行菩薩結要付属口伝（五四〇ページ）

文句の九に云く涌出品下「如来之を止めたもうに凡そ三義有り、

前三
- 一、汝等各各に自ら己が任有り若し此の土に住せば彼の利益を廃せん。
- 二、他方は此土結縁の事浅し宣授せんと欲すと雖も必ず巨益無からん。
- 三、若し之を許さば則ち下を召すことを得ず下若し来らずんば迹を破することを得ず遠を顕すことを得ず。

是の三義をもって如来之を止めたもうと為す、下方を召して来らしむるに亦三義有り、

後三
- 一、是れ我が弟子なり我が法を弘むべし。
- 二、縁深広なるを以て能く此の土に遍じて益し分身の土に遍して益し他方の土に遍して益す。
- 三、開近顕遠することを得。

是の故に彼を止めて下を召すなり」と云云。

また日寛上人（三重秘伝抄第一、本尊抄講義録参照）は第一に他方・本化の前三後三として、

前三
- 一、他方は釈尊の直弟に非る故に、義疏第十に云く「他方は釈迦の所化に非ず」と、
- 二、他方は各任国有り、故に天台云く「他方は各各自らの任国有り」と、
- 三、他方は此土結縁の事浅し、故に、天台云く「他方は此土結縁の事浅し」と、

後三
- 一、本化は釈尊の直弟の故に、天台云く「是れ我が弟子我が法を弘むべし」と、
- 二、本化は常に此土に住する故に、曾谷入道等許御書（一〇三二ページ）に云く「娑婆世界に住すること多塵劫なり」と、
- 三、本化は結縁の事深きが故に、天台云く「縁深厚を以て能く此土に遍じて益す」と、

次に迹化・本化の前三後三とは、

前三
- 一、迹化は釈尊名字即の弟子に非る故に、本尊抄（二五〇ページ）に云く「迹化の大衆は釈尊初発心の弟子等に非ず」と、
- 二、迹化は本法所持の人に非ざる故に、本尊抄（二五一ページ）に云く「又爾前迹門の菩薩なり本法所持の人に非ず」と、

三、迹化は功を積むこと浅き故に、新尼抄（九〇五ページ）に云く「観音薬王等は智慧美じく覚えある人人と雖も、法華経を学す日浅く末代の大難忍び難かるべし」等云云。

後三

一、本化は釈尊名字即の弟子なるが故に、本尊抄（二五三ページ）に云く「地涌千界は教主釈尊の初発心の弟子なり」と、

二、本化は本法所持の人なる故に、輔正記に云く「法是れ久成の法なるを以ての故に久成の人に付す」と御義口伝上（七五一ページ）に云く「此の菩薩は本法所持の人なり」と、

三、本化は功を積むこと深き故に、下山御消息に云く「五百塵点劫以来一向に本門寿量の肝心を修業し習い給う上行菩薩等」云云。

このように迹化・他方と地涌の大菩薩の根本的な相違を知るならば、仏が迹化の菩薩等を制止して本化の菩薩を召し出した意味がわかるであろう。

【立正安国論】

文応元年七月、時の執権・北条時頼にあてた国諫の書である。他の御書と異なり、主客問答十段によって構成されている。御勘由来等に明らかなように、当時鎌倉においては、法然の念仏宗をはじめ、禅宗、真言宗等がはびこり、政治的にも動乱たえまなく、地震、大風、疫病等の天変地夭により、民衆は塗炭の苦しみにあえいでいた。

日蓮大聖人は民衆救済のために、その根本原因を「世皆正に背き人悉く悪に帰す」ゆえであると、念仏を正

意に大折伏を現じ、仏法の肝要たる妙法蓮華経に帰せよと叫ばれている。

特に為政者の自覚をうながし、治国の者が宗教の正邪に迷い、正法を失うならば、必ず国の滅びる大難があると、大集経、仁王経、金光明経、薬師経等に照らされて、予言されている。

しかして大聖人の予言どおり、自界叛逆難、他国侵逼難が実現したのである。後段にいたり「汝早く信仰の寸心を改めて速に実乗の一善に帰せよ、然れば則ち三界は皆仏国なり仏国其れ衰んや」と正法に帰依することによってのみ、真の平和な国土を建設することができると仰せである。現在われわれの広宣流布への戦いも、この安国論の精神によるのであって、安国論こそ、末法一切衆生への強烈な指導書であり、一大予言書であると共に、国家安穏・天下泰平の一国治術の一大法則なのである。（詳しくは立正安国論講義を参照されたい）

【開目抄】

文永九年二月に、佐渡においてご述作である。日蓮大聖人の御遺文中、最も重大な、十大部の一つで、上下二巻からなっている。法本尊開顕の観心本尊抄に対して、人本尊の開顕の書であり、日蓮大聖人の仏法における、教行証のうち、教にあたる最も重要な御書である。

日蓮大聖人は次のようにこの御書の重要かつ、特異性をお述べになっている。

種種御振舞御書（九一九ページ）去年の十一月より勘えたる開目抄と申す文二巻造りたり、頸切るるならば日蓮が不思議とどめんと思いて勘えたり、此の文の心は日蓮により（依）て日本国の有無はあるべし。

開目抄下（二二三ページ）　此れは釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国・当世をうつし給う明鏡なりかたみともみるべし。

本文は、初めに「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり所謂主師親これなり」（開目抄上一八六ページ）と、一般に、尊敬すべき主目を打ち出され、中国の儒教、インドのバラモン、さらに仏教にはいって、種々の主師親とその依経等、これらを五重相対によって判釈され、文底下種本門の教主釈尊こそ、末法における真実の主師親であることを述べられている。しこうして「此れをしれる者は但日蓮一人なり」（開目抄上二〇〇ページ）、「日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり」（開目抄下二三七ページ）と結論されて、ご自身こそ、末法の御本仏であることを明かされている。（詳しくは日寛上人の開目抄文段、開目抄講義上下巻を参照されたい）

【観心本尊抄】

日蓮大聖人が佐渡ご流罪中、文永十年四月、御年五十二歳のご述作である。富木日常を主として、弟子中に賜わった御書である。十大部中、立正安国論、開目抄と共に極理中の極理、仏法哲理の真髄を説き明かされた重要な御書の一つである。本抄を説かれるにさきだって、前年、開目抄をおしたためになり、末法の御本仏たることを開顕されているが、さらに本抄においては、五重三段により法本尊の開顕がなされ、末法の衆生は、この御本尊を信ずべきことを、理論と実際とをもって説き明かされている。

題号は「如来滅後五五百歳に始む観心の本尊抄」と時・応・機・法の四義に照らして拝読すべきで、その意

は「如来滅後五五百歳に、上行菩薩始めて弘む、観心の本尊抄」となり、本文に「但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり」（二四九㌻）と仰せられているように、釈尊の教相脱益の本尊を破し、文底深秘の事の一念三千の当体たる御本尊をお示しである。ゆえに日蓮大聖人は「此の事日蓮身に当るの大事なり」（二五五㌻）と仰せられている。

また観心とはわれら衆生の観心であり、但本門の御本尊を受持し、信心無二に南無妙法蓮華経と唱えることで「我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」（二四六㌻）と仰せられ、受持即観心の義を明かされている。当抄が、受持即観心を説かれ、われわれの信心修行を明かされているので、教・行・証のなかの行にあたるのである。（詳しくは日寛上人の観心本尊抄文段、十大部講義第四巻を研究されたい）

【十大部】

日蓮大聖人御遺文中、特に重要な御書十編をいう。

唱法華題目抄（一～一六㌻）

文応元年五月、鎌倉においてご述作である。問答形式により、教を上げ機を下して、法華経を否定する念仏者の所論を破し、大小権実教判をもって、広く諸宗の無得道なことを折伏され、「妙法蓮華経の五字を唱うる功徳莫大なり諸仏・諸経の題目は法華経の所開なり妙法は能開なりとしりて法華経の題目を唱うべし」と述べられて、妙法の題目こそ、成仏の大法であると説かれている。

立正安国論（一七～三五ページ）

文応元年七月、鎌倉においてご述作である。時の執権・北条時頼にあてて、三災七難のよってきたる原因は、一国をあげて念仏をはじめとする邪宗・邪義の尊崇により、神天上して、守護なきゆえである、災いを止め平和国土の建設は、妙法五字の正法によらねばならぬ、為政者たるもの、宗教の邪正を心にかけねばならぬ、と厳しく戒められた諫暁の書である。日蓮大聖人が三度の高名と仰せられるなかの第一にあたる。

開目抄（一八六～二三七ページ）

文永九年二月、佐渡・塚原においてご述作である。日蓮大聖人の仏法のうち、教にあたる重要な御抄で、日蓮大聖人出世のご本懐たる三大秘法の御本尊建立にさきだち、本書において、人本尊を開顕あそばされ、日蓮こそ末法における主師親の三徳具備の御本仏であるとのご宣言の書である。

観心本尊抄（二三八～二五五ページ）

文永十年四月、佐渡においてご述作である。日蓮大聖人の仏法における行にあたる、重要な御抄である。初めに末法の観心とは、受持即観心なることを明かし、次に五重三段によって、一切教を判釈されて、文底深秘の大法・本地難思・境智冥合・本有無作・事の一念三千の妙法五字をもって、末法幼稚の本尊となされている。すなわち妙法五字こそ、末法流通の正体であると、法本尊開顕の書である。

撰時抄（二五六～二九二ページ）

建治元年、身延においてご述作である。

「夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし」と、仏法流布に時の大事なことをまず述べられ、広く正像

末に流布の法体を明かし、竜樹、天台、伝教等が内鑑冷然して、妙法を説かなかったことを明かし、次に諸宗の教主を破折して、日蓮大聖人こそ末法下種の教主、一閻浮提第一の法華経の行者、即御本仏であると、文証をあげて確信されている。

報恩抄（二九三～三三〇ページ）

建治二年七月、身延においてご述作である。旧師道善房死去を聞いて、追善謝徳のために、したためられ、清澄の浄顕房、義浄房の両人へ送られている。当抄の送文（三三〇ページ）に「此の文は随分大事の大事どもをかきて候ぞ」と仰せられているように、広く諸宗を、別して真言宗の謗法なることを、慈覚、智証等をあげて破折せられ、日蓮大聖人の大折伏は、一切衆生報恩のためであり、正しく本門の三大秘法は必ず広宣流布するのであると結ばれている。

法華取要抄（三三一～三三八ページ）

文永十一年五月、身延においてご述作である。初めに一代諸経の勝劣を明かし、広略要の法華経の中でも、広略を簡んで、要中の要すなわち三大秘法の御本尊こそ、末法弘通の本体であると述べられている。

四信五品抄（三三八～三四三ページ）

建治三年四月、身延山においてご述作である。法華経分別功徳品の四信と五品とについて、末法の法華経の行者の位を示され、その位が爾前迹門の円人に百千万倍すぐれることを明かされて、一念信解、初随喜こそ、名字即の凡夫位にあるわれら衆生の修行の肝要であり、ただ御本尊を信じて題目を唱えることが成仏の直道であると述べられている。

下山御消息（三四三～三六四ページ）

建治三年六月、身延においてご述作である。ご門下の因幡房日永に代わっておしたためになり、下山領主の兵庫五郎光基に与えられた御抄である。光基に対して、念仏を捨てて、法華経に帰することが、最も正義であり至忠至孝であることを述べられている。まず日永が念仏を捨て正法を信じた経過を述べ、四箇の格言をもって、念仏、禅、真言、律の邪義を破折され、三度の国諫がいれられず、そのことによって身延へ入山されたいきさつが明かされている。特に念仏堕地獄を強調された御抄である。

本尊問答抄（三六五～三七四ページ）

弘安元年九月、身延においてご述作、浄顕房日仲に与えられた御抄である。

問答形式により、本尊の義を明かし、通じては諸宗の本尊、別しては真言宗の本尊を厳しく破折されている。すなわち三大師等の謗法をあげ、承久の乱の現証をもって、真言亡国の旨を断定され、最後に日蓮大聖人の妙法五字の御本尊の未曾有なるを説き、法華経の題目（三大秘法）こそ末法弘通の御本尊であると述べられている。

【大綱と網目】

法華経と爾前経を相対して、法華は大綱であり、爾前は網目であるとする。そのゆえは法華経のみ成仏得道の教えであって、爾前経には得道するという文はあってもその実義がない。しかし爾前経といえども、成仏の

文以外は、法華経のためにこれを用いる。あたかも大綱を引けば、すべての網目がそれぞれの立ち場で働きをなすようなものである。これは絶待妙の立ち場から論ずる場合である。

日蓮大聖人が立正安国論や、そのほかの御書に、爾前の経文を引いて文証とされたのは、以上の理由によるのである。また三大秘法の建立されて以後には、法華経本迹二門はもちろんのこと、あらゆる経教がすべて大綱たる大御本尊の網目となるのである。

観心本尊得意抄（九七二ページ）総じて一代聖教を大に分って二と為す一には大綱二には網目なり、初の大綱とは成仏得道の教なり、成仏の教とは法華経なり、次に網目とは法華已前の諸経なり、彼の諸経等は不成仏の教なり……法華の為の網目なるが故に法華の証文に之を引き用ゆ可きなり。

また末法においては三大秘法が大綱となり、法華経をはじめ一切の経教がことごとく網目となる。

御義口伝下（七六六ページ）天台の「綱維を提ぐるに目として動かざること無きが如し」等と釈する此の意なり、妙楽大師は「略して経題を挙ぐるに玄に一部を収む」と、此等を心得ざる者は末法の弘通に足らざる者なり。

右の御義口伝は、常不軽品に流通を釈せられた続きの御文である。すなわち三大秘法の南無妙法蓮華経に一切を収めて、法華経本迹二門もまったく三大秘法の網目として依用されるとの意である。

第四編　三大秘法

【三大秘法】

日蓮大聖人の教義の根本は三大秘法であり、大聖人出世のご本懐は三大秘法の建立である。三大秘法とは本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目である。

末法における戒定慧を、虚空不動戒、虚空不動定、虚空不動慧といい、日蓮大聖人が三大秘法として決定された。

本門の本尊とは、日蓮大聖人が弘安二年十月十二日に御図顕の本門戒壇の大御本尊である。本門の題目とは、本門戒壇の大御本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えて修行することである。本門の戒壇とは、本門の本尊を安置し奉って信心修行に励む場所をいう。

日蓮大聖人は建長五年四月二十八日、初めて題目をご建立になり、ついで佐渡において御本尊の開顕があり、弘安二年には本門戒壇の大御本尊を建立あそばされ、広宣流布・本門戒壇の建立は未来に遺命あそばされたのである。しかして三大秘法の依文を御書に拝するとき、

四条金吾殿御返事（一一一六ページ）文永九年五十一歳　今日蓮が弘通する法門は・せばきやうなれども・はなはだふかし、其の故は彼の天台・伝教等の所弘の法よりは一重立入りたる故なり、本門寿量品の三大事とは是なり。

義浄房御書（八九二ページ）文永十年五十二歳　寿量品の自我偈に云く「一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず」云云、日蓮が己心の仏界を此の文に依って顕はすなり、其の故は寿量品の事の一念三千の三大秘法

を成就せる事・此の経文なり秘す可し秘す可し。

法華行者逢難事（九六五ページ）文永十一年五十三歳　竜樹・天親は共に千部の論師なり、但権大乗を申べて法華経をば心に存して口に吐きたまわず此に口伝有り　天台伝教は之を宣べて本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華経の五字と之を残したもう。

法華取要抄（三三六ページ）文永十一年五十三歳　問うて云く如来滅後二千余年・竜樹・天親・天台・伝教の残したまえる所の秘法は何物ぞや、答えて云く本門の本尊と戒壇と題目の五字となり。

報恩抄（三二八ページ）建治二年五十五歳　問うて云く天台伝教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り求めて云く何物ぞや、答えて云く三あり、末法のために仏留め置き給う。

御義口伝下（七五二ページ）寿量品の事の三大事とは是なり。

御義口伝下（七六〇ページ）建立御本尊等の事。御義口伝に云く此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり、戒定慧の三学は寿量品の事の三大秘法是れなり、日蓮慥に霊山に於て面授口決せしなり。

この三大秘法は、釈尊出世の本懐たる法華経の本門寿量品の文底に秘し沈められているのであり、同じく神力品において付嘱されている。ゆえに、

三大秘法抄（一〇二一ページ）問う所説の要言の法とは何物ぞや、答て云く夫れ釈尊初成道より四味三教乃至法華経の広開三顕一の席を立ちて略開近顕遠を説かせ給いし涌出品まで秘せさせ給いし実相証得の当初修行し給いし処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり。

三大秘法抄（一〇二三ページ）　此の三大秘法は二千余年の当初・地涌千界の上首として日蓮慥かに教主大覚世

尊より口決相承せしなり、乃至法華経を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は此の三大秘法を含めたる経にて渡らせ給えばなり。

三大秘法の開合

さて、このように三大秘法といっても、実は御本尊の一大秘法に収まるのである。ゆえに諸御書に「教主釈尊の一大事の秘法を霊鷲山にして相伝し・日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり」（南条殿御返事一五七八㌻）等と仰せられている。

本門の御本尊を安置し奉り、信心・修行するのが題目であり、安置し奉る所がすなわち戒壇である。このように三大秘法は合しては一大秘法となり、さらに開いては六大秘法となる。すなわち本尊に人と法、題目に信と行、戒壇に事と義がある。

人の本尊とは久遠元初の自受用身たる日蓮大聖人であらせられ、法の本尊とは文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華経である。人法に開くといっても人即法、法即人で而二不二であらせられる。題目とは御本尊を信じ奉り唱題・折伏することであり、すなわち信・行に開かれる。

信のない行は盲が千里の道をくわだてるようなものであり、行のない信は跛が千里の道をくわだてるようなものである。いずれも目的を達することはできない。すなわち信・行に開くといっても、二にして、しかも一である。

また戒壇には事と義がある。文底秘沈抄に「夫れ本門の戒壇に事有り義有り、所謂義の戒壇とは即ち是れ本門の本尊所住の処・義戒壇に当る故なり……事の戒壇とは一閻浮提の人懺悔滅罪の処なり但然るのみに非ず梵天帝釈等も来下して踏みたもうべき戒壇なり」とある。

【本門戒壇の大御本尊】

末法に日蓮大聖人の建立あそばされた御本尊は、つぶさに観心本尊抄にお示しの大曼荼羅である。

観心本尊抄（二五四㌻）此の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し。

右にお示しのとおり、弘安二年十月十二日に建立の本門戒壇の大御本尊が、末法の一切衆生即身成仏の御本尊である。すなわち日蓮大聖人は聖人御難事（一一八九㌻）に「余は二十七年にして出世の本懐を遂げた」と仰せあそばされたのである。

この本尊に人と法とがある。人とは久遠元初の自受用身即日蓮大聖人であらせられ、法とは寿量文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華経である。人法といえども即一箇であり、一念三千即自受用身・自受用身即一念三千であらせられる。日蓮大聖人は当時の宗教界が本尊に迷っている状態を、次のように仰せられた。

開目抄下（二一五㌻）而るを天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり、倶舎・成実・律宗は三十四心・断結成道の釈尊を本尊とせり、天尊の太子が迷惑して我が身は民の子とをもうがごとし、華厳宗・真言宗・三論宗・法相宗等の四宗は大乗の宗なり、法相・三論は勝応身にたる仏を本尊とす天王の太子・我が父は侍と・をもうがごとし、華厳宗・真言宗は釈尊を下げて盧舎那の大日等を本尊と定む天子たる父を下げて種姓もなき者の法王のごとくなるに・つけり、浄土宗は釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とをもうて教主をすて

たり、禅宗は下賤の者・一分の徳あって父母をさぐるがごとし、仏をさげ経を下す此皆本尊に迷えり、例せば三皇已前に父をしらず人皆禽獣に同ぜしが如し。

また、諫暁八幡抄（五八四ページ）には「これいまだ道理有りて法の成就せぬには本尊をせむるという事を存知せざる者の思いなり」とて、現実に大衆を幸福にすることのできない場合は、その信仰している本尊を責めるべき道理を明かされている。

しこうして末法の今日、われら凡夫は何を本尊とすべきかについて、

本尊問答抄（三六五ページ）問うて云く末代悪世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや、答えて云く法華経の題目を以て本尊とすべし……不空三蔵の法華儀軌は宝塔品の文によれり、此れは法華経の教主を本尊とす法華経の正意にはあらず、上に挙ぐる所の本尊（法華経の題目）は釈迦・多宝・十方の諸仏の御本尊・法華経の行者の正意なり……本尊とは勝れたるを用うべし。

本尊問答抄（三六六ページ）問うて云く然らば汝云何ぞ釈迦を以て本尊とせずして法華経の題目を本尊とするや、答う上に挙ぐるところの経釈を見給へ私の義にはあらず釈尊と天台とは法華経を本尊と定め給へり。ここに仰せられる法華経の題目とは、寿量文底下種三大秘法の南無妙法蓮華経にほかならないのである。種脱相対、第三法門、三大秘法等の項で論ずるごとく、日蓮大聖人の終窮究竟の極説は実にここにある。「本尊とは勝れたるを用うべし」のお言葉をよく拝するならば、内外相対や権実相対のうえに立つ釈尊を本尊とすべき理由がないのである。三大秘法の御本尊とは、

観心本尊抄（二四七ページ）其の本尊の為体本師の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華経の左右に釈迦牟

尼仏・多宝仏・釈尊の脇士上行等の四菩薩・文殊弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し迹化他方の大小の諸菩薩は万民の大地に処して雲閣月卿を見るが如く十方の諸仏は大地の上に処し給う迹仏迹土を表する故なり。

日女御前御返事（一二四三ページ）　されば首題の五字は中央にかかり・四大天王は宝塔の四方に坐し・釈迦・多宝・本化の四菩薩肩を並べ……総じて序品列坐の二界八番の雑衆等一人ももれず、此の御本尊の中に住し給い妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊とは申すなり。

以上のように三大秘法の御本尊は明々赫々たるにもかかわらず、大多数の日蓮宗各派は釈尊を本尊として本仏とあおいでいる。その邪見は実に根強いものであるが、いま、次の両文を引いて彼等の曲解を批判し、もってその邪義を叱正しよう。

報恩抄（三二八ページ）　答えて云く一には日本・乃至一閻浮提・一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝・外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇士となるべし。

三大秘法禀承事（一〇二二ページ）　寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり。

これらの御文に「教主釈尊」とあるのをみて、釈迦本尊を立てるのは、実に迷論の至極である。報恩抄に仰せの「教主釈尊」とは「南無妙法蓮華経をご所持あそばされている仏」の意で即日蓮大聖人であらせられる。もしインド応誕の釈迦仏ならば、それは多宝と共に脇士となっているではないか。また三大秘法抄に仰せの「本有無作三身の教主釈尊」もまったく同意である。なぜかとなれば、次に引く御義口伝を心して拝すべきで

ある。

御義口伝下（七五二ページ）　されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり。

御義口伝下（七五九ページ）　自受用身（ほしいままにうけもちいるみ）とは一念三千なり、伝教云く「一念三千即自受用身・自受用身とは尊形（そんぎょう）を出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり」云云、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者是なり云云。

御義口伝下（七五九ページ）　久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘（まま）と云う義なり、無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働かざるなり、卅二相八十種好を具足せず是れ繕（つくろ）わざるなり本有常住の仏なれば本の儘（まま）なり是を久遠と云うなり。

御義口伝下（七六〇ページ）　本尊とは法華経の行者の一身の当体なり。

末法における本尊とは法華経の行者たる日蓮大聖人の一身の当体である。釈尊は実にこの三大秘法を修行してこそ成仏したのである。

三大秘法禀承事（一〇二一ページ）　問う所説の要言の法とは何物ぞや、答て云く夫れ釈尊……実相証得（じっそうしょうとく）の当初（そのかみ）修行し給いし処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり。

すなわち三大秘法の御本尊とは、釈尊自身が成道以前に題目を唱えて修行した御本尊であらせられるのである。かくのごとく、日蓮大聖人の仏法の根本は三大秘法であり、三大秘法の根本は日蓮大聖人が一切衆生を救われるため出世の本懐（ほんかい）として、弘安二年十月十二日建立された本門戒壇の大御本尊である。この大御本尊は、

現在まで日蓮正宗富士大石寺に、清純に伝承されており、本門戒壇建立の時には、本門戒壇に安置されるべき大御本尊である。

日蓮大聖人は御一代の間に幾つかの御本尊をお認めになり、それぞれ信心に励む出家の弟子、在家の檀那に授けられている。その御本尊を一機一縁の御本尊といい、日蓮大聖人滅後において、第二祖日興上人は、大本門寺建立の時には本門戒壇の大御本尊のもとに結集されるべきであると命ぜられている。

弘安二年十月十二日、日蓮大聖人は、当時ひき起こされていた熱原の法難を機会として、日興上人の指導する熱原地方の信者の強信さをたたえつつ、出世の本懐達成の時として、本門戒壇の大御本尊を建立された。この本門戒壇の大御本尊は、一機一縁の御本尊とはその意味が異なり、末法万年のほか未来永遠の一切衆生が、ことごとく帰依して即身成仏の大功徳がえられる大御本尊であり、一閻浮提（世界）の衆生に与えられた大御本尊である。日蓮大聖人は、この本門戒壇の大御本尊を建立になり、第二祖日興上人に付嘱されたことが、出世の本懐であらせられた。

聖人御難事（一一八九ページ）　去ぬる建長五年太歳癸丑四月二十八日に安房の国長狭郡の内東条の郷・今は郡なり、天照太神の御厨や右大将家の立て始め給いし日本第二のみくりや今は日本第一なり、此の郡の内清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして午の時に此の法門申しはじめて今に二十七年・弘安二年太歳己卯なり、仏は四十余年・天台大師は三十余年・伝教大師は二十余年に出世の本懐を遂げ給う、其中の大難申す計りなし先先に申すがごとし、余は二十七年なり其の間の大難は各各かつしろしめせり。

日蓮正宗二十六世、学匠日寛上人は、観心本尊抄文段に、本門戒壇の大御本尊建立の不思議について、次の

ように述べている。

観心本尊抄文段（富要四巻二一九ページ）智者大師は隋の開皇十四年御年五十七歳、四月二十六日より止観を始め、一夏にこれを説き、四年後同十七年御年六十歳、十一月御入滅なり。わが大聖人は、文永十年四月二十五日当抄を終り、弘安二年御年五十八歳、十月十二日に戒壇本尊を顕わし、四年後弘安五年御年六十一歳十月の御入滅なり。これに三事の不可思議あり。一には、天台大師は五十七歳に止観を説き、蓮祖大聖は五十八歳に戒壇の本尊を顕わす。また天台は六十歳御入滅、蓮祖は六十一歳御入滅なり。是れ則ち像末の教主の序、あに不思議にあらずや。二には、天台は四月二十六日に止観を始め、蓮祖は四月二十五日に当抄を終る。天台は十一月御入滅なり、蓮祖は十月御入滅なり。蓮祖後に生まれ給うといえども下種の教主なり、故に義前にあり、この故に蓮祖は二十五日に当抄を終り十月の入滅なり。天台は前に生まれ給うといえども熟益の教主なり、故に義後にあり、この故二十六日に止観を始め、十一月の入滅なり。種熟の序あに不思議にあらずや。三には、天台蓮祖同じく入滅四年已前に終窮究竟の極説を顕わす、むしろ不思議にあらずや。

また日寛上人は「なかんずく弘安二年十月十二日の本門戒壇の大御本尊は、究竟中の究竟、本懐の中の本懐なり、すなわちこれ三大秘法随一なり、いわんや一閻浮提（世界）総体の大御本尊なるがゆえなり」（富要四巻二二一ページ）といわれている。さらに、日寛上人は、本門戒壇の大御本尊の功徳について「是れすなわち諸仏諸経の能生の根源にして、諸仏諸経の帰趣するところとなり、故に十方三世の恒沙の諸仏の功徳、十方三世の微塵の経々の功徳、皆咸く此の文底下種の本尊に帰せざるなし、譬えば百千枝葉同じく一根に趣くが如し、故に此の本尊の功徳は無量無辺にして、広大深遠の妙用有り、故に暫くも此の本尊を信じて南無妙法蓮華経と

唱うれば、則ち祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来らざるなく、理として顕われざるなきなり。妙楽の所謂『正境に縁すれば功徳多し』は是なり」（富要四巻二一三ページ）と仰せられている。

このようなすばらしい三大秘法の大御本尊が、七百年の昔から日本の国に厳存し、しかも、今日では日蓮正宗富士大石寺の奉安殿に安置されている。不幸に悩む人々、よりよき社会を現出させようという人々は、一日も早くこの大御本尊を信じたてまつり、自分自身の幸福と社会の繁栄を期すべきである。

大御本尊への疑難を破す

末法の御本仏日蓮大聖人が、弘安二年十月十二日、一閻浮提総与の本門戒壇の大御本尊をご建立あそばされて、出世のご本懐を遂げられたことは、厳然たる事実である。しかるに、日蓮宗各派では、そのことについて「日蓮大聖人や日興上人や、そのほか古い記録には何も書いていない。日蓮正宗第九世の日有上人が偽作したものだろう」というような、種々の悪口をいっている。これらの疑難を、ここで、まとめて破折しておきたい。

まず反問するが、もし本当に日蓮正宗が本門戒壇の大御本尊を偽作した宗教だったとしたら、日蓮大聖人の教えは一体どこにあるだろうか。仮に身延派の稲荷や竜神、また中山派の鬼子母神等を正統の日蓮宗と考えるならば、それはかえって大聖人のご意思に反している。なぜなら、大聖人の仏法の肝要は南無妙法蓮華経であり、衆生界を本尊とせよとは仰せになっていないからである。日蓮大聖人の御本尊は多くあるが、それぞれ脇書があって「だれだれに授与する」とか「どのような目的で、これをしたためた」等と書かれている。なるほど弘安二年に本門戒壇の大御本尊を顕わされたという、そのとおりの御書はない。しかし現存するほかの御本尊でも、御書にいつお書きになったなどとあるものは、ほとんどなく、御本尊はその脇書が重大なのである。

弘安二年の本門戒壇の大御本尊は、日蓮大聖人のご真筆で「本門戒壇也、願主弥四郎国重等」と、はっきりおしたためになっていて疑う余地はない。

次に御書にはなくても、日昭・日朗などの五老僧が知らないわけはないという。ところが、それは、一般の常識的な考えであって、当時の実情を知らない者のいうことである。六老僧といえば、いかにも立派に聞こえるが、常随給仕をされた日興上人を除く五人は、それぞれ地方に在住しており、しかも当時は題目流布が中心であった。したがって真の本尊論も理解できず、日蓮大聖人の滅後にすぐ天台の弟子だといいはじめ、本尊は釈尊だなどといっているくらいであるから、話にならない。

日興上人は、日目上人に対する御相承書すなわち「日興跡条条の事」（富要五巻三一ページ）には「日興が身に充て給わる所の弘安二年の大御本尊」を日目に相伝すると仰せられている。これこそ日蓮大聖人から身にあてて賜わられた、弘安二年の本門戒壇の大御本尊である。しかも「日興跡条条の事」は日興上人の正副二通の疑う余地のないご真筆が厳然と富士大石寺に存在するのである。

身延派の批判では、この御相承書の弘安二年の本尊は、現在大石寺でいう本門戒壇の大御本尊ではないという。そのわけは「弘安二年の板まんだら」といっていないからだという。これはいかにも身延流の考え方で、現在の身延派は、本尊がなんだかわからない。いちいち紙曼荼羅、板曼荼羅、稲荷、鬼子母神、釈尊の仏像などといわなければ、ただ本尊といわれてもわからない。そんなところから、日興上人の御付嘱状を疑い、非難しているが、富士大石寺で御本尊といえば、昔から今日まで、南無妙法蓮華経の大曼荼羅に決まりきっている。弘安二年の大御本尊といえば、本門戒壇の大御本尊と決まっているのである。身延派の頭で大石寺をみる

から、そのような愚論をいうのである。

日蓮宗各派で本門戒壇の大御本尊について述べたのは「当家諸門流継図の事」が最も早い。しかし、この書は作者、年代ともに未詳であり、内容から、文禄、慶長年間に身延派の僧が書いたものといわれる。これには「日興上人が板本尊と御影像を盗んで身延から逃げ出した」と悪口をいっている。この書の日興上人身延離山に関する記録は、まことにデタラメなことで定評がある。しかし、これは本門戒壇の大御本尊についての悪口ではなく、かえって、本門戒壇の大御本尊が知られていたことの証明になるのである。後に、日憲という僧が、この書に追い書きして、富士大石寺に参拝して大御本尊にお目通りしたといって、そのお姿を述べているが、そうとうに誤っていて見るにたえない。しかし、これとても大御本尊の悪口ではない。このほか、戒壇の大御本尊を彫刻申し上げた日法上人の玉沢門流では、古くから本門戒壇の大御本尊の悪口をいって、日蓮大聖人の御文字を削りとった木屑の方は、わが玉沢にありなどという低級なことをいっていた。これも、かえって本門戒壇の大御本尊が厳然と顕われた証明になるのみである。

次に、日有上人の偽作説について、いったい、いつ誰がいい始めたのであろうか。それは、驚くなかれ、明治時代になってからである。まず日有上人に対する悪口は、北山の日浄・日専に始まるといわれている。

日有上人のご入滅は文明十四年（日蓮大聖人滅後二〇一年）で、その後、日浄・日専らが「有師は癩病で死んだ」等と悪口した。それから約百年の後、要法寺の日辰（天正四年、日蓮大聖人滅後二九五年）と房州保田妙本寺の日我（天正十四年、日蓮大聖人滅後三〇五年）の二人が、これについて述べた記録があるから、比べてみよう。

まず日辰の祖師伝には「日辰が重須（北山）にいた時、東光寺の僧がやってきていうには、大石寺の第四世日道は、佐渡で日代の本尊を焼いたら、癩病になって河内の杉山に隠居した。第九世日有も癩病になり、第十二世日鎮は狂気になり、現在の十三世日院は中風を病み痴人のようになった」と。日辰は大石寺日院上人に、通交したいと申し入れ、拒絶されたのでその腹いせに、大石寺の有名なご法主上人を皆、バカだ、中気だ、癩病だと書いたのである。しかし、本門戒壇の大御本尊に対する悪口は、一言もいっていない。

次に日我は、観心本尊抄抜書に「久遠寺の板本尊今大石寺にあり、大聖御存日の時造立なり」といっている。この日辰と日我はほぼ同時代の人で、共に大学者といわれた人であるが、同じ一つのことをぜんぜん反対に書いているのである。どちらかといえば、日辰のほうは日尊の流れであるから、そんなに大石寺を目のかたきにしなくてもよさそうな立ち場である。日我のほうが日郷の流れであるから、敵対の立ち場であるが、事実は反対の立ち場でみていることも、おもしろい対照である。

そして、日辰と同じ要法寺の日陽は、祖師伝付録に元和三年（日蓮大聖人滅後三三六年）に大石寺を訪れて「日本第一の板本尊」を拝したと、感激して書いている。

さらに同じく要法寺の三妙院日王、講題某に送る書にいわく「大石寺宝蔵に安んじ奉る戒壇の大御本尊は最も大切にして……本門寺建立の時には本堂にかけ奉る大御本尊なること異論なし」と。

これらは、いずれも、日蓮大聖人滅後三百年ないし三百四十年ぐらいの人々の記であり、富士大石寺に大御本尊あり、との事実を、ありのままに認めているのである。

その後、日寛上人（日蓮大聖人滅後四四五年）が著述なされた対邪宗問答の「末法相応抄」にせよ「当流行

事抄」にせよ、本門戒壇の大御本尊について疑難のなかったことを証明している。また「本迹問答十七条」（日蓮大聖人滅後二百年ごろ）「辰春問答」（滅後二五〇年ごろ）「破七兵衛之邪問書」（滅後五五〇年ごろ）「砂村問答」（滅後五五〇年ごろ）においても、同じく方便品・寿量品法華経一部の読不読、さらには、本迹一致か勝劣か、造仏像の要不要などを論じているのみで、戒壇の大御本尊に対する邪難は、一つも見うけられないのである。

このように、日我、日陽、日王の言、また、その前後における対邪宗との問答の内容をみるに、その当時は、大石寺にごく近い北山あたりの邪説を除いては、一般に、本門戒壇の大御本尊について、疑難をさしはさむ余地がなかったと思われる。

しかるに日蓮大聖人滅後五百六十六年、徳川末期の嘉永二、三年ごろ行なわれた「勝地論」では、初めて本門戒壇の大御本尊に対する疑難が現われてくる。この「勝地論」と同じ年、あるいは、前後して行なわれた対邪宗との問答である要法寺日生の「大石破門一二三」（「勝地論」と同年の嘉永三年）「破愚邪正立論」（同じく嘉永三年）要法寺の智伝日誌（後の玉野日志）の「破石金剛論」（嘉永四年）にも、同じく「戒壇の板本尊と一機一縁の本尊」についての邪難が述べられている。もちろん、これらの邪難に対しては、当時の先師が完全に破折を加えているのは申すまでもない。

本門戒壇の大御本尊に対する邪難が、本格的に起こってきたのは、明治十一年末、北山本門寺住職の玉野日志なる者が、日蓮正宗第五十五世日布上人に対し、書簡をもって、本門戒壇の大御本尊についての邪義をかまえてきたことに始まる。

玉野日志は、もと要法寺の僧であったが、驕才を認められて、滅亡に瀕した北山本門寺に迎えられ、売名のために問答をもちかけたのである。玉野日志の論難は、日澄上人がすべて大破折を加えられ、玉野日志は大敗北を喫した。結果、自らの非をさとって、本門戒壇の大御本尊に対する虚妄の説をわびている。しかし、その後いくばくもなく、明治十五年、五十歳で死去して、すべては終わった。ここに、戒壇の大御本尊に悪口をいう根拠も理由も何もなくなったわけである。

日辰の祖師伝には、有師癩病とあるが、もちろんそのような事実はない。しかも戒壇の御本尊を板に彫刻したとは書いていない。日志はこれを結びつけて、日有上人は戒壇の御本尊を板に彫ったため、癩病になったとまことしやかに書いている。さらに日志の新説は、江戸時代末に、久遠院便妙が友だちに話した言葉だといって、大石寺にある戒壇の御本尊を日有上人が彫刻したと書いている。まことに「死人に口なし」で、お話にならない。

ところが、その後、すでに鎧袖一触に破折しつくされた玉野日志の悪口を、性こりもなく持ち出したのが、明治年間では、横浜問答で破折された国柱会の田中智学、顕本法華宗の本多日生、身延派の清水竜山、さらに清水梁山等であるが、あまりたいしたことはなく、いずれも日蓮正宗側から徹底的に破折されている。

昭和の代となり、日蓮正宗創価学会が正法広布の大前進を開始して、昭和三十年三月十一日、かの有名な小樽問答で邪宗身延派を完全に打ち破ったことによって、身延派は滅亡の退勢挽回をはかり、身延派の学者を動員して「創価学会批判」なるものを発行し、本門戒壇の大御本尊の悪口をいった。

ところが、まことに驚きあきれたことには、それはすべて破折しつくされた玉野日志の悪口のむしかえしに

すぎないものであった。心あるものの嘲笑をかい、さらに創価学会の「創価学会批判の妄説を破す」によって大破折を加えられ、完全に沈黙してしまった。

「創価学会批判」のなかで、彼らは、日蓮の説をうのみにして、勧請形式（身延派あたりは好んで勧請という）なるものを持ち出したが、日蓮が大きな間違いをおかしているので、まったくお話のほかであった。そのほか「卑賤な弥四郎国重が願主であるのはおかしい」等の疑難があったが、釈迦在世においてすら、寿量品を発起した弥勒菩薩が、文殊等と比較にならない低位であることを忘れてはならない。大勇猛心をもって死身弘法の任にあたる弥四郎国重が願主で、その本門戒壇の大御本尊が第二祖日興上人に付嘱されたのに、なんの不思議とすることがあろうか。そのほかも、まったく論ずるに足らないみじめな論難であった。

その後、同じ悪口を繰り返しているのが、仏立宗の田中日広とか、顕本法華宗の窪田哲城、身延にやとわれた顕本の長谷川義一、身延派の石川泰道、星野日亮、国柱会の田中香浦、高田聖泉、本化妙宗連盟の高橋智遍等である。内容はすべて身延の「創価学会批判」よりも低級なるものでまったくお話にならない。

特に、前立正大学教授であった身延派の安永弁哲は「板本尊偽作論」を著わしたが、その誤れる邪説を追及され、謝罪文を新聞に発表して逃げて行くえをくらますという醜態を演じた。これは、歴代管長への悪口を並べたもので、身延派のなかでも批判されているようなしろものであるが、悪口のためのロジックがひどすぎるので、日蓮正宗布教会では、同年九月「悪書板本尊偽作論を粉砕す」を発行して破折を加えている。

とにかく富士大石寺には本門戒壇の大御本尊が厳然とおわしまし、その偉大な功徳とご威光によって、創価学会は六百数十万世帯と全世界に大発展をしているのである。

すなおに信心して大利益をうける者と、あいかわらずとるにたらない非難・攻撃をして、無間地獄に沈むものとの現実の証拠はどうにもならないことを知るべきである。

【戒壇建立】

戒壇とは戒を授ける壇場である。仏法に帰依し、その教えを信じ行ずる者が、定められた戒律を受持することを誓う場所である。

小乗戒・大乗戒・法華経迹門の戒などがあり、壇の形式もさまざまである。しかるに、日蓮大聖人の仏法でいう戒壇は、釈迦仏法で説く戒壇とは、根本から意義を異にしている。

つまり、三大秘法総在の大御本尊が安置され、全人類を救う根本道場として、広宣流布の時、建立される事の戒壇をいうのである。

まず、過去における戒壇建立をみると、インドにおいて、釈迦成道十年、周の穆王十三年の時、摩訶陀国、弗迦沙王のために法を説き、そのとき、楼至菩薩の請願によって祇園精舎の外院の東南に建立したのが、戒壇の起こりである。

仏祖統記（宋志磐撰五十四巻）第三に「仏祇園の外院の東南に戒壇を建立せしむ地より立ちて三重を相となしもって三空を表す。帝釈また覆釜を加えもって舎利を覆う大梵天王無価の宝珠をもって覆釜の上に置くこれを五重となし五分法身を表す云云」とある。

また、中国における戒壇建立の最初は、仏教渡漢後三六八年、劉宋の文帝元嘉十一年（四三四年）に、罽賓国（大月氏の南方、いまの北インド・カシミール地方）の沙門・求那跋摩が、南林寺に戒壇を建て、僧尼のために授戒をしたときが最初である。

次に、大乗戒壇においては、唐の代宗の永泰元年（七六五年）、大興善寺に方等の戒壇を建て、都の僧尼に勅令を発し、臨壇大徳各十人を置いた。これが大乗教の戒壇の初めで、以後、唐・宋の時代に、数十か所の戒壇が建立された。

わが国においては、第三十代欽明天皇の十三年（西紀五五二年）仏教が伝来し、その後、第四十六代孝謙天皇の勝宝六年（西紀七五四年）、勅を奉じて入唐した日本の学僧・栄叡、普照と共に、唐僧・鑑真が来朝し、東大寺に小乗の戒壇を建立した。

ついで、唐招提寺に戒壇を建立し、天皇、上皇、后妃および百官を登壇させ、授戒した。以後、下野（栃木）の薬師寺、筑紫（福岡）の観世音寺に戒壇が設けられ、天下の三戒壇と称した。

また、比叡山迹門の戒壇は延暦二十四年（西紀八〇五年）に、唐僧・道邃より大乗円頓戒をうけて帰朝した伝教大師が、翌年二月、叡山において弟子一百余人に大乗円頓を授け、円頓戒壇建立を朝廷に奏請し「顕戒論」二巻を著わし、その必要性を説いた。

伝教大師の願いは、存生中には達せられず、滅後わずか六日目、つまり弘仁十三年（西紀八二二年）六月十一日、大乗戒壇建立の許可が下りた。比叡山上における授戒は、翌年四月に行なわれ、初めて迹門理の戒壇が建立された。これらわが国の戒壇建立は、東大寺の戒壇、迹門の延暦寺の戒壇と共に、勅命によって建てられ

たのである。

末法の本門戒壇建立とは、化法である題目の流布、本尊建立とは異なり、具体的な化儀の広布に属する問題である。

この事の戒壇は、絶対唯一の大御本尊のましますところであり、したがって最勝の地を選んで戒壇を建立すべきなのである。

文底秘沈抄に「霊山浄土に似たらん最勝の地とは、まさにこの富士山なるべし、ゆえに富士山において本門の戒壇これを建立すべきなり」とある。

富士こそ日本一の名山であり、不思議にも御本尊の名号と等しく、古来から大日蓮華山と称していたのである。

したがって日興上人の門徒存知の事にも「凡そ勝地を撰んで伽藍を建立するは仏法の通例なり、然れば、駿河国・富士山は是れ日本第一の名山なり、最も此の砌に於て本門寺を建つべきなり」とあり、また三位日順の詮要抄にも「天台大師は漢土天台山においてこれを弘宣す、かの山名を取って天台大師と号す、富士山または日蓮山と名づく最もこの山において本門寺を建つべし、彼は迹門の本寺、これは本門の本山なりここに秘伝有り」とある。

この戒壇建立の地については、身延派などが、大聖人が九か年住まわれたことをよりどころにしたり、「かかる不思議なる法華経の行者の住処なれば争か霊山浄土に劣るべき」という御文をたてに、身延戒壇建立などといっているが、いたずらに謗法と化した身延は「法妙なるが故に……所尊し」という道理に反するものである。

三大秘法抄（一〇二三ページ）に、

「叡山に座主始まって第三・第四の慈覚・智証・存の外に本師伝教・義真に背きて理同事勝の狂言を本として我が山の戒法をあなづり戯論とわらいし故に、存の外に延暦寺の戒・清浄無染の中道の妙戒なりしが徒に土泥となりぬる事云うても余りあり歎きても何かはせん、彼の摩黎山の瓦礫の土となり栴檀林の荊棘となるにも過ぎたるなるべし」

とある御文からも明瞭であろう。

更に三大秘法抄（一〇二二ページ）に、

「戒壇とは王法仏法に冥じ仏法王法に合して王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて有徳王・覚徳比丘の其の乃往を末法濁悪の未来に移さん時勅宣並に御教書を申し下して霊山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か時を待つ可きのみ事の戒法と申すは是なり、三国並に一閻浮提の人・懺悔滅罪の戒法のみならず大梵天王・帝釈等も来下して踞給うべき戒壇なり」

と、滅後の弟子に遺命されたのである。

【末法の本仏】

末法の本仏は日蓮大聖人であらせられる。釈尊は在世脱益の教主であり、末法下種本因妙の教主は日蓮大聖人である。釈迦仏法と日蓮大聖人の仏法との比較・勝劣は、種脱相対、第三法門、事理の一念三千等の項で明

らかに知ることができる。

本項には、主として、釈尊は末法の衆生には無縁の仏であること、末法に主・師・親三徳を具備した大慈大悲の仏は日蓮大聖人であられること、および御書に「教主釈尊」と仰せられているその釈尊とは、日蓮大聖人ご自身を指示しておられることなどについて述べる。

観心本尊抄（二四九ページ）　在世の本門と末法の始は一同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり。

経王殿御返事（一一二四ページ）　日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし。

御義口伝下（七五二ページ）　如来とは釈尊・惣じては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身なり、今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり、寿量品の事の三大事とは是なり。

御義口伝下（七五三ページ）　然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云。

諸法実相抄（一三五八ページ）　されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候へ、経に云く「如来秘密神通之力」是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし、凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり。

御義口伝下（七八三ページ）　守護章には有為の報仏は夢中の権果・無作の三身は覚前の実仏と云云、今日蓮等

の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は無作の三身覚前の実仏なり云云。

御義口伝下（七八四ページ）今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は無作三身の本主なり云云。

以上のごとく、釈尊と日蓮大聖人とはぜんぜん違うのである。しかして、日蓮大聖人はご一生を通じ、主・師・親三徳の御本仏として三大秘法を弘通された。これについての若干の御書をあげれば、

開目抄上（二三七ページ）日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり。

佐渡御書（九五七ページ）日蓮は此関東の御一門の棟梁なり・日月なり・亀鏡なり・眼目なり・日蓮捨て去る時・七難必ず起るべし。

開目抄上（二〇二ページ）されば日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は・をそれをも・いだきぬべし。

報恩抄（三二九ページ）日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし、日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり、無間地獄の道をふさぎぬ。

百六箇抄（八六三ページ）自受用身は本・上行日蓮は迹なり、我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり。

百六箇抄（八六三ページ）久遠元始の天上天下・唯我独尊は日蓮是なり、久遠は本・今日は迹なり、三世常住の日蓮は名字の利生なり。

御義口伝下（七六六ページ）末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり。

撰時抄（二八四㌻）　日蓮は日本第一の法華経の行者なる事あえて疑ひなし。

下山御消息（三六三㌻）　教主釈尊より大事なる行者……日蓮。

その他この種の例文は各御書に繁多であるが、略すこととして、次に教主釈尊に種々の義があり「南無妙法蓮華経を弘通する仏」という意味の場合は、すなわち日蓮大聖人であることを示す。

百六箇抄（八六四㌻）　本因妙を本とし今日寿量の脱益を迹とするなり、久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり。

本因妙抄（八七七㌻）　釈尊・久遠名字即の位の御身の修行を末法今時・日蓮が名字即の身に移せり。

船守弥三郎許御書（一四四六㌻）　過去久遠五百塵点のそのかみ唯我一人の教主釈尊とは我等衆生の事なり。

新池殿御消息（一四三七㌻）　主師親の釈尊をもちひぬだに不思議なるに、かへりて或はのり或はうち或は処を追ひ或は讒言して流罪し死罪に行はる。

釈迦仏像を本尊としない理由

次に釈迦仏像を本尊としない理由は、日寛上人の末法相応抄下（富要三巻一五六㌻）にことごとく明かされている。いまはその概要を記す。詳しくは末法相応抄を熟読するのが至当である。

一、道理

第一に釈尊は熟脱の教主であり、末法は下種の時である。すなわち色相荘厳の仏は在世熟脱の教主で末法下種の本仏ではない。

第二に三徳の縁が浅いゆえに用いない。正像の衆生は本已有善なるがゆえに、色相の仏に縁が厚く、末法の

衆生は本未有善なるがゆえに色相の仏には縁が薄い。

第三に色相の仏は人法勝劣があるゆえに用いない。すなわち本尊とは勝れたるを用うべきであり、色相の仏は劣り、法が勝れるゆえに、法を本尊となすべきである。

二、文証

法華経法師品第十には「経巻所住の処に塔を立つべし、舎利を安くべからず」とある。文句の八には「此の経は法身の舎利であるから、生身の舎利を安くべからず」とある。また法華三昧には「法華経一部を安置し、形像舎利を安んずるべからず」とある。

日蓮大聖人は本尊問答抄（三六五ページ）に「法華経の題目を以て本尊とすべし、釈尊を本尊とすべからず」と仰せられ、日興上人は門徒存知の事に「五人は一同に釈迦を本尊とすべしと云う、日興云く妙法蓮華経の五字を本尊と為すべし」と。

以上はいずれも取意であり、そのほか類文は無数なれば、これを略す。

三、遮難

御書に釈迦像の造立を賛嘆され、あるいは日蓮大聖人が釈尊の一体仏をご所持になったことを理由として難ずる者がある。しかるに日蓮大聖人のご正意は、まったく釈尊の仏像ではないが、しかも、これを許された理由は次のごとくである。

第一に佐渡以前等の御書は一宗弘通の初めであり、ご正意ではなくても用捨よろしきにしたがわれた。

第二に当時は日本国じゅう一同に阿弥陀を本尊としていた。ゆえに門下が阿弥陀を捨てて釈尊を立てたのを

賛嘆された。

第三に日蓮大聖人の観見の前には、釈尊の一体仏も、まったく一念三千自受用身の本仏と映ぜられた。また報恩抄、三大秘法抄等に「教主釈尊を本尊と為すべし」等の御文がある。これらの教主釈尊とは「南無妙法蓮華経をご所持になる仏」の意であり、五重三段では、第五の文底下種三段において立つ仏である。なおその理由は別項に論ずるとおりである。

【人法一箇】

釈迦仏法における色相荘厳の仏は法勝人劣であり、久遠元初の自受用身は人法体一である。すなわち色相荘厳の仏は、化他のためにわが身を飾り、世間の人情に随順して――他人に気兼ねをしながら法を説くので、そのような迹仏は本有常住の妙法に劣るのである。

これに対し久遠元初の自受用身（本仏）は久遠本有常住の仏であり、妙法蓮華経の五字を、本来から所持されている。

すなわち自受用身というも即一念三千の妙法、妙法というも即自受用身で、人法一体である。

御書にはこの点について、次のごとくお示しになっている。

日女御前御返事（一二四四㌻）伝教大師云く「一念三千即自受用身・自受用身とは出尊形の仏」

御義口伝下（七五九㌻）自受用身とは一念三千なり、伝教云く「一念三千即自受用身・自受用身とは

尊形を出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり」云云。

御義口伝下（七六〇ページ）本尊とは法華経の行者の一身の当体なり云云。

また法華経においても、法師品第十にいわく「若しは経巻所住の処には、乃至此の中には、已に如来の全身有す」、宝塔品第十一にいわく「若し能く持つこと有らば則ち仏身を持つなり」、観普賢経にいわく「此の経を持つ者は即仏身を持つ」等々とあるは、すべて人法体一の証文である。

これに反して仏は法より出生するとか、仏を供養する功徳は法を供養するに劣る等々の経文は、色相荘厳の迹仏に約するゆえ、人法勝劣を生ずるのである。五百塵点劫成道・本果第一番の寿量品の釈尊ですら、文底下種仏法に対すれば応仏昇進の自受用身であり、法が勝れ人が劣るのである。

われわれの人生においても、人法一箇の原理を生活に具現することが幸福の要因である。たとえば社会的評価（法）と自分自身の智慧力量（人）が相応しなかったら、生活は不幸にならざるをえない。人法一箇の大御本尊を信じて、あらゆる環境を変えていく偉大なる力を身につけていくべきである。

【当体蓮華】

天台大師は法華玄義に、蓮華には当体蓮華と譬喩蓮華の二義があることを説いている。当体蓮華とは妙法蓮華であり、妙法の当体すなわち南無妙法蓮華経の当体をいう。譬喩蓮華とは、華草の蓮華であり、これをもって当体蓮華を説明しているのである。

当体義抄（五一三ページ）至理は名無し聖人理を観じて万物に名を付くる時・因果倶時・不思議の一法之れ有り之を名けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し之を修行する者は仏因・仏果・同時に之を得るなり。

当体義抄（五一三ページ）又劫初に華草有り聖人理を見て号して蓮華と名く此の華草・因果倶時なること妙法蓮華に似たり故に此の華草同じく蓮華と名くるなり水中に生ずる赤蓮華・白蓮華等の蓮華是なり、譬喩の蓮華とは此の華草の蓮華なり此の華草を以て難解の妙法蓮華を顕す。

すなわち当体蓮華が先にあり、次に因果倶時の姿が当体蓮華に似ている華草にも蓮華と名づけたというのである。しからば、当体蓮華とは、具体的に何をさすかといえば、

当体義抄（五一〇ページ）問う妙法蓮華経とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち妙法蓮華の当体なり、問う若爾れば我等が如き一切衆生も妙法の全体なりと云わる可きか、答う勿論なり。

当体義抄（五一一ページ）問う一切衆生悉く妙法蓮華経の当体ならば我等が如き愚癡闇鈍の凡夫も即ち妙法の当体なりや、答う当世の諸人之れ多しと雖も二人を出でず謂ゆる権教の人・実教の人なり而も権教方便の念仏等を信ずる人は妙法蓮華の当体と云わる可からず実教の法華経を信ずる人は即ち当体の蓮華・真如の妙体是なり。

当体義抄（五一二ページ）所詮妙法蓮華の当体とは法華経を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身是なり、正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は煩悩・業・苦の三道・法身・般若・解脱の三徳と転じて三観・三諦・即一心に顕われ其の人の所住の処は常寂光土なり、能居所居・身土・色心・倶体

俱用・無作三身の本門寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等の中の事なり是れ即ち法華の当体・自在神力の顕わす所の功能なり敢て之を疑う可からず之を疑う可からず。

当体義抄（五一八ページ）　問う末法今時誰れ人か当体蓮華を証得せるや、答う……日蓮が一門は正直に権教の邪法・邪師の邪義を捨てて正直に正法・正師の正義を信ずる故に当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を顕す事は本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華経と唱うるが故なり。

御義口伝下（七五四ページ）　無作の三身の当体の蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等なり南無妙法蓮華経の宝号を持ち奉る故なり云云。

すなわち一往は十界の依正、われわれ一切衆生も含めて宇宙の万物が当体蓮華といえる。しかし再往は、権教方便の教え、邪宗教を信ずる者は当体蓮華とはいえず、ただ末法の御本仏日蓮大聖人の三大秘法の御本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱える者のみが、真の当体蓮華といえるのである。しかして、その人は、即身成仏の大功徳を、わが身に、わが生活に体得できるのである。

次に、御義口伝と日寛上人の文段を拝してみよう。

御義口伝上（七〇八ページ）　蓮華とは因果の二法なり是又因果一体なり……法界は妙法なり法界は蓮華なり法界は経なり蓮華とは八葉九尊の仏体なり。

当体義抄文段（富要四巻三九四ページ）　一には十界三千の妙法の当体を直に蓮華と名づくるがゆえに当体蓮華というなり、この義入文の相分明なり、二には一切衆生の胸間の八葉を蓮華と名づく、是れを当体蓮華と云う。

終わりに、天台大師は、譬喩蓮華を用いて、すなわち迹門の三譬、本門の三譬等によって、当体蓮華を説明し、さらに十如是が、本門の十妙等についても譬喩蓮華をもって説き、また迹門の開三顕一の蓮華、本門の開近顕遠の蓮華等も説いているが、所詮は迹中化他の所説であり、本地難思の境智冥合の本有無作の当体蓮華は顕わしていないのである。

【色心不二】

色心不二の仏法哲学は、現代世界の二大思想たる唯物論、唯心論（観念論）を打ち破り指導していく大生命哲学である。色とは肉体・物質をいい、心とは精神・心をいう。古来、二元論では肉体と精神はまったく独立する二つの実体であると考え、唯物論者は精神よりも肉体のほうがより根本の実体であると説き、唯心論者（観念論者）は精神こそ真の実体であると唱えた。しかし、これらはすべて誤りである。なぜなら人が行動を起こすとき、精神と体の働きは一体のものであり、決して独立した二つの実体ではない。

しかして東洋仏法の真髄たる日蓮大聖人の哲学において、色と心すなわち肉体と精神は一体不二のものであるという根本原理を説き明かしたのである。

十如是事（四一〇ページ）　如是相とは我が身の色形に顕れたる相を云うなり　是を応身如来とも又は解脱とも又は仮諦とも云うなり、次に如是性とは我が心性を云うなり是を報身如来とも又は般若とも又は空諦とも云うなり。

御義口伝上（七〇八ページ）　帰命とは南無妙法蓮華経是なり、釈に云く随縁不変・一念寂照と、又帰とは我等が色法なり命とは我等が心法なり色心不二なるを一極と云うなり、釈に云く一極に帰せしむ故に仏乗と云うと。

諸宗問答抄（三八〇ページ）　凡そ心と色法とは不二の法にて有る間かきたる物を以て其の人の貧福をも相するなり、然れば文字は是れ一切衆生の色心不二の質なり。

観心本尊抄（二三九ページ）　草木の上に色心の因果を置かずんば木画の像を本尊に恃み奉ること無益なり。

真言見聞（一四六ページ）　十界互具は思いもよらず・まして非情の上の色心の因果争が説く可きや。

すなわち「色心不二なるを一極と云うなり」の一極とは、生命と約して拝すべきである。唯物論、唯心論等の生命観のうえに築かれた哲学は、人々を救えなかったばかりでなく、むしろ不幸にしてきたのである。しかして色心不二の生命哲学を根本とする仏法哲学のみが、人々を真に救い幸福にできるのである。三大秘法の大御本尊こそ、色心不二の大哲学によって打ち立てられた人類救済の大仏法であることを知らなければならない。

【下種本因妙】

種熟脱の法門は仏法の肝要である。末法においては、釈迦仏法は脱益の仏法であって利益がなく、日蓮大聖人の下種益の仏法のみが衆生を利益するのである。

秋元御書（一〇七二ページ）　種熟脱の法門・法華経の肝心なり、三世十方の仏は必ず妙法蓮華経の五字を種と

して仏になり給へり。

観心本尊抄（二四九ページ）　在世の本門と末法の始は一同に純円なり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり。

曾谷入道等許御書（一〇二七ページ）　而るに今時の学者時機に迷惑して或は小乗を弘通し或は権大乗を授与し或は一乗を演説すれども題目の五字を以て下種と為す可きの由来を知らざるか。

御義口伝下（七五三ページ）　当品（寿量品）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す。

次に、本因妙とは天台大師が法華玄義に説いた法華経本門の十妙の一つであり、本仏の妙因の修行をいうのである。しかして、本因妙について、釈迦仏法の本因妙すなわち脱益家の本因妙と、日蓮大聖人の仏法の本因妙すなわち下種本因妙との二種がある。

先師の古義（日蓮正宗教学叢書・祖文纂要・日霑上人集）にいわく、

凡そ本因妙に付て二種あり謂く台家文上と当家文底となり台家の本因妙とは我本行菩薩道の文に依って境智行位の四妙を具足する初住に無明を断じ中道を証するの時を以て本因妙と名づくるなり是れ台家文上の本因妙の相なり三益に約すれば脱益の位なり豈に其の已前なからんや、謂く入住已前久久遠遠の当初無教の時に於て内薫自悟する一迷先達の時を当家の文底下種の本因妙と名づく則ち今の総勘文抄（五六八ページ）の文意是れなり、文に凡夫の時とは名字即にして位妙なり我が身地水火風空とは境妙なり之を知るとは智妙なり即座開悟と云う豈に修行なからんや是れ行妙なり、此の四妙具足する是れを種家の本因妙の相と云ふ是れ則ち我

が蓮宗の極致なり此の他本因妙抄血脈抄等の文義之れを略す。

さらに下種仏法と脱益の仏法とを相対すれば、下種仏法は本因妙の仏法であり、日蓮大聖人は下種本因妙の教主である。また脱益の仏法は本果妙の仏法であり、釈尊は脱益本果妙の教主である。

御講聞書（八〇八ページ）本因の因と云うは下種の題目なり、本果の果とは成仏なり、因と云うは信心領納の事なり、此の経を持ち奉る時を本因とす其の本因のまま成仏なりと云うを本果とは云うなり、日蓮が弟子檀那の肝要は本果より本因を宗とするなり、本因なくしては本果有る可からず、仍て本因とは慧の因にして名字即の位なり、本果は果にして究竟即の位なり。

百六箇抄（八五四ページ）本因妙の教主・本門の大師・日蓮。

百六箇抄（八六三ページ）下種の法華経教主の本迹。自受用身は本・上行日蓮は迹なり、我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり。

【即身成仏】

即身成仏とは、当位即妙や凡夫即極等と同じ意味であり、われわれ凡夫が凡夫そのままの姿で成仏することをいっている。仏さまはどこにいるかとなれば、われわれ衆生が御本尊を受持して題目を唱える当体であり、それ以外の仏の当体はない。

御講聞書（八三七ページ）此の荘厳とは別してかざり立てたるには非ず当位即妙の荘厳なり、煩悩即菩提・生

死即涅槃是なり。

当体義抄（五一二ページ）　正直に方便を捨て但法華経を信じ南無妙法蓮華経と唱うる人は……無作三身の本門寿量の当体蓮華の仏とは日蓮が弟子檀那等の中の事なり。

諸法実相抄（一三五八ページ）　凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり。

日女御前御返事（一二四四ページ）　此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり。

そのほか、この種の類文は多数ある。凡夫は当体の本仏であるが、迷いの道に陥って自分の生命が仏であることを知らない。それゆえ御本尊を信じて修行すれば、信をもって慧に代えて自分自身が永遠に実在する仏であることを覚知する。これを即身成仏というのである。しかして、改転の成仏等は釈迦仏法で女人が男子に身を変えてから成仏する等と説くので、真の即身成仏ではない。

【主師親の三徳】

一切衆生を救済すべき本仏・本尊は、必ず主・師・親の三徳を具備している。すなわち、眷属を守る力のある主徳と、眷属を指導しうる師徳と、眷属を慈愛する親徳があるべきである。世間には、それぞれ主徳、師徳、親徳の一分をそなえた人はあるが、三徳具備は仏に限るのである。

法華経譬喩品第三　今此の三界は皆是れ我が有なり（主）、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり（親）、而

も今此の処は諸の患難多し、唯我れ一人のみ能く救護を為す（師）。

南条兵衛七郎殿御書（一四九四ページ）　釈迦如来は我等衆生には親なり師なり主なり……ひとり三徳をかねて恩ふかき仏は釈迦一仏に・かぎりたてまつる。

祈禱抄（一三五〇ページ）　仏は人天の主・一切衆生の父母なり・而も開導の師なり、父母なれども賤き父母は主君の義をかねず、主君なれども父母ならざればおそろしき辺もあり、父母・主君なれども師匠なる事はなし・諸仏は又世尊にてましませば主君にては・ましませども・娑婆世界に出でさせ給はざれば師匠にあらず・又「其中衆生悉是吾子」とも名乗らせ給はず・釈迦仏独・主師親の三義をかね給へり。

また仏といっても、小乗の仏よりも大乗の仏、権大乗の仏よりも実大乗の仏、法華迹門の仏よりも法華本門の仏、本門の仏よりも文底下種の本仏と次第があり、末法今時においては、ただ文底下種の本仏、日蓮大聖人のみが衆生を救済する三徳具備の仏である。

色相荘厳なる本門の釈尊といえども、本未有善の末法の衆生には三徳の縁がなく、また力がないことを知るべきである。

開目抄上（一八六ページ）　夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり所謂主師親これなり。

開目抄下（二三七ページ）　日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり。

開目抄下（二三二ページ）　我日本の柱（主）とならむ我日本の眼目（師）とならむ我日本の大船（親）とならむ等とちかいし願やぶるべからず。

報恩抄（三二九ページ）　日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし（親）、日本

国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり（師）、無間地獄の道をふさぎぬ（主）。

新池殿御消息（一四三七ページ）　主師親の釈尊（文底の釈尊即日蓮大聖人）をもちひぬだに不思議なるに、かへりて或はのり或はうち或は処を追ひ或は讒言して流罪し死罪に行はる。

御義口伝下（七五七ページ）　第十六我亦為世父の事。御義口伝に云く我とは釈尊一切衆生の父なり主師親に於て仏に約し経に約す、仏に約すとは迹門の仏の三徳は今此三界の文是なり、本門の仏の主・師・親の三徳は主の徳は我此土安穏の文なり師の徳は常説法教化の文なり親の徳は此の我亦為世父の文是なり、妙楽大師は寿量品の文を知らざる者は不知恩の畜生と釈し給えり・経に約すれば、諸経中王は主の徳なり能救一切衆生は師の徳なり又如大梵天王一切衆生之父の文は父の徳なり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は一切衆生の父なり無間地獄の苦を救う故なり云云、涅槃経に云く「一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ如来一人の苦」と云云、日蓮が云く一切衆生の異の苦を受くるは悉く是れ日蓮一人の苦なるべし。

一谷入道御書（一三三〇ページ）　日蓮は日本国の人人の父母ぞかし・主君ぞかし・明師ぞかし・是を背ん事よ、念仏を申さん人人は無間地獄に堕ちん事決定なるべし。

曾谷入道等許御書（一〇二七ページ）　正像二千余年には猶下種の者有り例せば在世四十余年の如し……今は既に末法に入って在世の結縁の者は漸漸に衰微して権実の二機皆悉く尽きぬ。

諸法実相抄（一三五八ページ）　凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり、然れば釈迦仏は我れ等衆生のためには主師親の三徳を備へ給うと思ひしに、さにては候はず返って仏に三徳をかふらせ奉るは凡夫（名字凡夫の本仏日蓮大聖人）なり。

【久遠名字即】

久遠とは本有常住の生命観であり、名字即とは六即位のなかで、初めて仏法の信仰にはいった位である。日蓮大聖人の仏法においては、久遠名字即の凡夫こそ本仏であり、また名字即の位において真に即身成仏できる衆生である。

御義口伝下（七五九㌻）御義口伝に云く此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘と云う義なり、無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働かざるなり、卅二相八十種好を具足せず是れ繕わざるなり本有常住の仏なれば本の儘なり是を久遠と云うなり、久遠とは南無妙法蓮華経なり実成無作と開けたるなり云云。

三世諸仏総勘文教相廃立（五六六㌻）十法界の依報・正報は法身の仏・一体三身の徳なりと知って一切の法は皆是れ仏法なりと通達し解了する是を名字即と為す名字即の位より即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し。

さて久遠名字本因妙の仏法は日蓮大聖人の仏法であり、釈尊は三十二相八十種好をもって身を荘厳する本果脱益の仏である。すなわち下種本因妙の仏は名字凡夫の姿で世に出現するのである。

三世諸仏総勘文教相廃立（五六八㌻）釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき、後に化他の為に世世・番番に出世・成道し在在・処処に八相

作仏し云云。

右の御文において凡夫位で開悟した釈迦如来とは、末法に凡夫位で出現する日蓮大聖人と一体である。ついで化他のために身を荘厳して出世成道する釈尊が、すなわち本果妙の釈尊である。本果第一番成道の釈尊ですら、垂迹化他の仏であって、常住の本仏ではない。この点において日蓮正宗と他の諸宗とは、その教義がまったく相容れないのである。

当体義抄（五一三ページ）至理は名無し聖人理を観じて万物に名を付くる時・因果倶時・不思議の一法之れ有り之を名けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し之を修行する者は仏因・仏果・同時に之を得るなり、聖人此の法を師と為して修行覚道し給えば妙因・妙果・倶時に感得し給うが故に妙覚果満の如来と成り給いしなり。

右の御文について日寛上人は次のごとく釈せられている。すなわち因果倶時の下は名玄義、此の妙法蓮華の一法の下は体玄義、之を修行する者はの下は宗玄義、聖人此の法を師と為しての下は用玄義なりと。ここに本因妙下種家の仏法を五重玄に配立してきわめて明らかとなるのである。

すなわち聖人とは名字即の釈尊なるがゆえに位妙にあたる。この名字凡夫の釈尊が一念三千の妙法蓮華経を本尊として修行したので、すなわち境妙である。修行とは信心・唱題であり、信心は智妙にあたり、唱題は行妙である。この境智行位を合して本因妙となし、この本因妙の修行によって即座に開悟し本果にいたるのである。これこそ日蓮大聖人の仏法の奥底であり極説である。

当体義抄（五一三ページ）釈尊五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に成道を唱え能証所

証の本理を顕し給えり。

右の御文においても日蓮宗各派は天台に准じて五百塵点の当初を本果第一番の釈尊であると立てている。しかし、当流の意は久遠元初名字凡夫位の御時をさして、五百塵点の当初という。

百六箇抄（八六四ページ）　久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり云云。

本因妙抄（八七七ページ）　釈尊・久遠名字即の位の御身の修行を末法今時・日蓮が名字即の身に移せり。

【境智冥合】

境は客観世界であり、智は主観的智慧である。たとえば一家の生活を安定しようとして努力し、実際に安定したとする。一家の生活は境であり、努力する自分が智で、安定した生活は境智冥合である。こうしてみると、われわれの生活には境智の冥合しない場合が実に多い。たとえ一家を安定し、事業が繁盛したとしても、自分自身の悩みはもちろん、他人や社会の苦しみを徹底的に救済できるわけがない。

しかるに仏の智慧は甚深無量であり、境智冥合の当体なのである。すなわち宇宙全体を境として、そのすべてを解決できる智をもっておられるのが仏である。また人と法の一致、人法一箇でもある。ゆえに、

曾谷殿御返事（一〇五五ページ）　夫れ法華経第一方便品に云く「諸仏の智慧は甚深無量なり」云云、釈に云く「境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量と云う」と、抑此の経釈の心は仏になる道は豈境智の二法にあらずや、されば境と云うは万法の体を云い智と云うは自体顕照の姿を云うなり、而るに境の淵

ほとりなく・ふかき時は智慧の水ながるる事つつがなし、此の境智合しぬれば即身成仏するなり。

われわれ衆生の場合にあっては、境智の合することはむずかしい。されば、われわれは日蓮大聖人ご建立の大御本尊を信じ修行するときに、御本尊を境とし、わが生命を智として、ここに真実の境智冥合がある。

御義口伝上（七一六ページ）衆生に此の機有って仏を感ず故に名けて因と為す、仏機を承けて而も応ず故に名けて縁と為す。

これすなわち凡夫の修行に仏身の応ずる境智冥合の御本尊の功徳をお示しの御書である。

天台大師の文句第九下に「境智和合する則は因果有り、境を照すこと未だ窮らざるを因と名け、源を尽すを果と為す」と説いて、客観世界を未だ達観できない九界を因とし、宇宙の実相を達観した境智和合の終わりを仏界の果となしたのも、このことを指示している。さらに多宝如来を境とし釈迦仏を智に配するときもある。

四条金吾殿御返事（一一一七ページ）諸法をば多宝に約し実相をば釈迦に約す、是れ又境智の二法なり多宝は境なり釈迦は智なり、境智而二にして・しかも境智不二の内証なり、此等はゆゆしき大事の法門なり煩悩即菩提・生死即涅槃と云うもこれなり。

【末法の観心】

観心とは自己の生命の実体を見つめて、幸福を証得することである。ゆえに末法においては御本尊を信じて修行する以外にない。

人間の生命はこの世だけの偶然であるかどうか、現実の生活は物質的にも精神的にも苦しむのはなぜか、どうすれば個人も社会も真に幸福になれるのか、このようなことを解決するのが教えであり、修行である。あらゆる宗教にはそれぞれ特有の教えがあり修行がある。仏教でもそれぞれの経典によって修行の方法もその結果として得られる悟りも異なる。観心についても、正法一千年の観心と像法一千年の観心と異なり、また末法には像法時代の天台宗のごとく一念三千の観念観法をこらしても、まったく無益有害である。しからば末法の観心はいかにというに、日蓮大聖人は観心本尊抄に詳しくこれをご教示になっている。以下順を追ってその概要を拝する。

すなわち観心本尊抄（二四〇㌻）にいわく「出処既に之を聞く観心の心如何、答えて曰く観心とは我が己心を観じて十法界を見る是を観心と云うなり」とて明鏡に向かって自具の十界・百界千如・一念三千を観るべきことをお示しになっている。ここに明鏡とは大御本尊であることはいうまでもない。

これについで己心の十界は信じられないとの問いに、六道を明かし四聖を明かすが、さらに「問うて曰く教主釈尊は（此れより堅固に之を秘す）」（二四二㌻）以降には、凡夫の一念に仏界を具しているというのは絶対に信ずることができないとの反問を掲げ、法華経も天台も誤りなりと断定した。それに対する答えとして「但し初の大難を遮せば……」（二四五㌻）より本尊の妙用・大功徳を明かして、この御本尊を受持することが即観心であると結論あそばされている。その文は、

観心本尊抄（二四六㌻）釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う。

すなわち妙法五字の御本尊を受持することが即観心である。釈尊の過去無量劫にわたって積んできた因位の修行および果位の万徳は、ことごとく妙法五字の御本尊に具足している。

われらがこの御本尊を受持したてまつれば、自然に仏と等しくなる。すなわち凡夫即諸法実相の仏と開顕するのである。

【教相・観心】

教相と観心は相対する語である。教相とは、仏所説の教法のありさまを表面的に解釈するのをいう。観心とは「己心を観じて十法界を見る」といわれるように、教相の主要点の意を三大秘法の立ち場から観ずるのをいうのである。すなわち法華経においても釈迦仏法の立ち場は表面的解釈にすぎないから教相であり、日蓮大聖人の仏法の立ち場は悟りの面から観ずるゆえに観心となる。

百六箇抄（八五六ページ）　在世観心法華経の本迹。一品二半は在世一段の観心なり天台の本門なり、日蓮が為には教相の迹門なり云云。

本因妙抄（八七五ページ）　彼の観心は此の教相。

本因妙抄（八七二ページ）　四に会教顕観・教相の法華を捨てて観心の法華を信ぜよと。

本因妙抄（八七四ページ）　仏は熟脱の教主・某は下種の法主なり、彼の一品二半は舎利弗等の為には観心たり、我等・凡夫の為には教相たり。

観心本尊抄送状（二五五ページ）　観心の法門少少之を注して大田殿・教信御房等に奉る。

十法界事（四二〇ページ）　法華本門の観心の意を以て一代聖教を按ずるに蓮羅果を取って掌中に捧ぐるが如し、所以は何ん迹門の大教起れば爾前の大教亡じ・本門の大教起れば迹門爾前亡じ・観心の大教起れば本迹爾前共に亡ず。

百六箇抄（八六六ページ）　下種三種教相の本迹。二種は迹門・一種は本門なり、本門の教相は教相の主君なり、二種は二十八品・一種は題目なり、題目は観心の上の教相なり。

百六箇抄（八五五ページ）　本果の妙法蓮華経の本迹。今日の本果は従因至果なれば本の本果には劣るなり、寿量の脱益・在世一段の一品二半は舎利弗等の声聞の為の観心なり、我等が為には教相なり。

【受持即観心】

受持とは、法華経法師品第十に説かれた五種妙行（受持・読・誦・解説・書写）の一つであるが、正像末における意義はそれぞれ異なり、特に末法今時においては受持の一行のみが、最も大切である。すなわち三大秘法の御本尊を受持する一行によって、成仏を決定するのである。

法華経法師品第十　妙法華経の、乃至一偈を受持、読誦し、解説、書写し、此の経巻に於いて、敬い視ること仏の如くにせん。

法華文句　此の品（法師品）に五種法師あり、一に受持、二に読、三に誦、四に解説、五に書写なり。

大論　信力の故に受け念力の故に持つ。

御義口伝下（七八三ページ）　此の妙法等の五字を末法・白法隠没の時上行菩薩・御出世有って五種の修行の中には四種を略して但受持の一行にして成仏す可しと経文に親り之れ有り。

次に、受持の一行に、総体の受持と別体の受持の二つの義がある。総体の受持とは、受持・読・誦・解説・書写の五種の妙行を受持の一行に含めて受持と名づけるのである。法華経の文の所々に「能く斯の経を持つ云云」また神力品の偈のなかに「斯の経を受持すべし」等とあるのがこれである。二に別体の受持とは五種の妙行のなかの第一、第二、第三等あるうちの第一の受持である。神力品の長行のなかに「応当に一心に受持、読、誦、解説、書写し、説の如く修行すべし」等と説くのがこれである。

「受持の一行にして成仏す可し」という日蓮大聖人の仰せ、および観心本尊抄の意は、総体の受持であり五種の妙行を通じて受持としている。

すなわち、信心は受持が家の受持であり、口唱は受持が家の読誦であり、折伏・指導等は受持が家の解説であり、御法主上人の御本尊書写は受持が家の書写となるのである。

観心とは、我が己心を観じて十法界を見ることをいい、これに天台流の観心と末法の観心がある。天台流に読むときは、己心の十法界を観見することである。しかして末法の観心とは、文底より読めば、己心を観ずるというのは御本尊を信ずることであり、十法界を見るというのは妙法を唱えることである。すなわち末法の観心とは、御本尊に対する信心をいうのである。

観心本尊抄（二四〇ページ）　観心とは我が己心を観じて十法界を見る是を観心と云うなり。

しかして、次の観心本尊抄の文は、受持即観心の義をあらわしている。

観心本尊抄（二四六ページ）　釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う。

独一本門の大御本尊を受持することそれ自体が、末法の観心となる。そのまえに引く無量義経の「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も六波羅蜜自然に在前す」という文は、因位の万行が妙法五字に具足するの義をあらわしているのであり、これ受持即観心を説くのである。

「釈尊の因行果徳の二法」とは、権迹本の釈尊の因行果徳の二法である。「妙法五字に具足す」とは、開結本地難思の境智の妙法である。ゆえに一切諸仏の因位の万行・果位の万徳は皆ことごとくこの妙法五字に具足し、末法下種の大御本尊の功徳は無量無辺で広大深遠の力用をそなえているのである。

「我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」とは、正しく受持即観心の義である。

「此の五字」とは大御本尊であり、御本尊を受持することそれ自体が功徳を成ずるのであるから受持即観心である。なぜ受持をもって即観心と名づけるかといえば、およそ当下種家の観心は、ただ信心口唱をもって観心とするのであって、受持とは総体の受持が家における受持すなわち正しく信心口唱であるから、受持即観心というのである。

さらに観心本尊抄の受持即観心の心のなかには、四種の力用を明かしている。「我等受持」とは信力・行力であり、「此の五字」とは法力であり、「自然に譲り与える」とは仏力である。（詳しくは「観心本尊抄講義」を参照のこと）

【煩悩即菩提】

煩悩とは、梵語では吉隷舎という。見惑（我見、辺見等の妄惑）、思惑（貪瞋癡等の迷情）、塵沙惑、無明惑の三惑等が、心を煩わし身を悩ますことをいい、いわゆる人生・生活における悩み苦しみ不幸である。菩提とは梵語であり、道、覚などと訳す。仏法の悟りの境地をいい、いわゆる人生・生活における喜び楽しみ幸福である。煩悩は無明の発達したもので、菩提は法性の発展したものであるともいえる。

釈迦仏法においては、煩悩を断じ尽くし三惑を断じて、初めて菩提の境地が得られると説く。しかし、日蓮大聖人の仏法においては、三大秘法の御本尊を信ずることによって、煩悩を断ぜずに煩悩はそのまま菩提となるという煩悩即菩提を説くのである。実際生活において煩悩は断ぜられるものではないし、また信心によって煩悩がそのまま菩提になる日蓮大聖人の仏法は、まことにすばらしいといわざるをえない。民衆救済、広宣流布を願う大煩悩は、そのまま大菩提になることを思うならば、われわれは、すべからく信心強盛に大煩悩の火を燃やすべきである。

法華玄義　煩悩即菩提と達するを名づけて慧と為す。

生死一大事血脈抄（一三三八ページ）　相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華経・臨終正念と祈念し給へ、生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ、煩悩即菩提・生死即涅槃とは是なり。

四条金吾殿御返事（一一一七ページ）　諸法をば多宝に約し実相をば釈迦に約す、是れ又境智の二法なり多宝は

境なり釈迦は智なり、境智而二にして・しかも境智不二の内証なり、此等はゆゆしき大事の法門なり煩悩即菩提、生死即涅槃と云うもこれなり……普賢経に云く「煩悩を断ぜず五欲を離れず諸根を浄むることを得て諸罪を滅除す」止観に云く「無明塵労は即是菩提生死は即涅槃なり」

【常楽我浄】

四徳のこと。一切の生命は常住の実在であり、現世は清らかな楽土であるとの意。信心生活に約せば、永遠の生命を覚知し、絶対の幸福生活を営むことをいう。

常とは無常に対し永遠の意。生命は三世にわたり、永遠に連続して不滅であること。楽とは苦に対し、人生は楽しむためにあり、娑婆世界は楽土であるということ。また生死煩悩の苦を明らかに見つめ、それを涅槃菩提の楽とすること。我とは無我に対し、生命の本質をいい、仏が我が宇宙に遍満していることをいう。浄とは空（不浄）に対し、清らかの意。染法を離れ浄法であって身も国土も鏡のごとく清浄な存在をいう。

釈尊は当時のインドの社会が、現世主義、享楽主義であるのを見て、この世は苦であり、空であり、無常であり、無我であると説いた。そして、このような苦・空・無常・無我の世を捨て、出家して道を求めよと説いたのが爾前経である。しかして出世の本懐たる法華経には常楽我浄と説いて、この世は、われも人も国土も、本有常住の実在であり、清く楽しいものであると開顕したのである。それは寿量品第十六の「常住此説法」「我此土安穏」「自我得仏来」、薬王品第二十三の「如清涼池」の文等である。

松野殿御返事（一三八七ページ）諸仏菩薩は常楽我浄の風にそよめき娯楽快楽し給うぞや。

日蓮大聖人は地涌の四菩薩の徳をこの四徳に配せられている。

御義口伝上（七五一ページ）上行は我を表し無辺行は常を表し浄行は浄を表し安立行は楽を表す、有る時には一人に此の四義を具す二死の表に出づるを上行と名け断常の際を踰ゆるを無辺行と称し五住の垢累を超ゆる故に浄行と名け道樹にして徳円かなり故に安立行と曰うなりと。

【総別の二義】

総別の二義とは、総判と別判との二義である。「総じて」とは、一往の表面的な立ち場であり、別してとは再往のさらに深く突っ込んで考えた場合の立ち場である。ゆえに総判は劣り別判は優れるのである。

総別は相対的なものであるから、別判のなかにも、さらに総別が論ぜられて、究極の別判は三大秘法の大御本尊に到達するのである。

総別の二義は、仏法の正邪を論じ、教義の浅深を述べるのに、まことに大事な教判である。なぜならば、たとえば釈尊一代の教法をみるのに、総じては五時八教はすべて真実であるが、別しては法華経こそ釈尊出世の本懐の教えであり、他の四味三教はいまだ真実を顕わさぬ爾前経である。さらに総じては法華経二十八品なかんずく本門寿量品は究竟円実の教えであるが、別しては本門寿量品の肝心、三大秘法の南無妙法蓮華経のみが最高真実の教えである。総別の二義を立てなければ、中途半端な教えをもって事たれりということになるゆえ

に、大切な教判になるのである。

曾谷殿御返事（一〇五五ページ）　釈尊より上行菩薩へ譲り与へ給う然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む、又是には総別の二義あり総別の二義少しも相そむけば成仏思もよらず輪廻生死のもといたらん。

御義口伝下（七五二ページ）　如来とは釈尊・惣じては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身なり、今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり。

【生死一大事血脈】

生死とは生老病死の略で、人生、生活のことである。一大事とは人生の最大事なことであり、御義口伝では方便品の一大事因縁の文を妙法蓮華経に配し、一大事の文を空仮中の円融三諦すなわち南無妙法蓮華経に配している。さらに我が身が妙法五字なりと悟って即身成仏するのが一大事であるとしている。さらに一大事とは三大秘法である。血脈とは信心の血脈である。また仏法の相承は血脈相承であるべきである。

生死一大事血脈抄には、生死一大事血脈について、詳しい解釈があり、日蓮大聖人の弟子として異体同心に大御本尊を信じ南無妙法蓮華経を唱えて成仏するのが、生死一大事血脈であると仰せである。

御義口伝上（七一六ページ）　一とは妙なり大とは法なり事とは蓮なり因とは華なり縁とは経なり云云……此の五尺の身妙法蓮華経の五字なり……此の大事を説かんが為に仏は出世したもう我等が一身の妙法五字なりと

開仏知見する時・即身成仏するなり。

御義口伝上（七一七ページ）　一とは中諦・大とは空諦・事とは仮諦なり此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華経是なり、此の五字日蓮出世の本懐なり之を名けて事と為す。

文底秘沈抄（富要三巻六九ページ）　仏は法華を以て本懐と為すなり乃至文底に三大秘法を秘沈する故なり、何を以て識ることを得んや、一大事の文是なり。一は謂く本門の本尊なり乃至大は謂く本門の戒壇なり乃至事は謂く本門の題目なり。

生死一大事血脈抄（一三三六ページ）　夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華経是なり、其の故は釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華経の五字過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり。

生死一大事血脈抄（一三三七ページ）　久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり。

生死一大事血脈抄（一三三七ページ）　総じて日蓮が弟子檀那等自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する処の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か。

生死一大事血脈抄（一三三八ページ）　相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華経・臨終正念と祈念し給へ、生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ、煩悩即菩提・生死即涅槃とは是なり、信心の血脈なくんば法華経を持つとも無益なり。

身延相承書（一六〇〇ページ）　血脈の次第　日蓮日興。

【染浄の二法】

われわれの生命は、即一念三千の妙法の当体であるが、染浄の二法によって、それぞれ幸・不幸を現出する。生命の染法とは、悪縁によって間違った宗教を信じたために、汚れた生命の状態である。生命の浄法とは、善縁正法によって浄らかな生命の状態になることである。

染とは迷妄の法であり、浄とは清浄な法である。染は九界で浄は仏界である。

すなわち染法とは、間違った宗教を信じて仏法に反対し、汚れた生命となり、不幸な生活に陥ることである。浄法とは、末法の大正法である日蓮大聖人の三大秘法を信じて、清浄なる生命、幸福な生活を営むことである。たとえ、いままでいかに間違った宗教を信じて大不幸にあえいでいようと、浄法によって成仏の境涯をつかめるのである。

当体義抄（五一〇ページ）法性の妙理に染浄の二法有り染法は熏じて迷と成り浄法は熏じて悟と成る悟は即ち仏界なり迷は即ち衆生なり、此の迷悟の二法二なりと雖も然も法性真如の一理なり。

当体義抄（五一一ページ）当世の諸人之れ多しと雖も二人を出でず謂ゆる権教の人・実教の人なり而も権教方便の念仏等を信ずる人は妙法蓮華の当体と云わる可からず実教の法華経を信ずる人は即ち当体の蓮華・真如の妙体是なり。

【示同凡夫】

御本仏である日蓮大聖人が、末法に凡夫の姿をもって出現された。これを示同凡夫という。

御義口伝下（七六六ページ）末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり。

仏が凡夫と同じ姿を示し、自ら凡夫即極の現証をあらわして、その範をもたらされるのである。民衆を化導するためには相手の社会へ飛び込んでいかなくてはできない。悪人の社会を導くにしても、自ら悪人の姿をもって悪人の社会へはいらなくては不可能である。また日蓮大聖人が立派な姿をして大邸宅に住まわれ、何一つ不自由なき生活を一生の間送られていたとするなら、貧窮下賤のわれわれが日蓮大聖人の教えによって幸福になれるとは考えられない。

すなわち、われわれの折伏にあっても、自分自身が貧乏で悩み病気で苦しんでいたのが、御本尊の功徳によって救われたからこそ、無智の大衆も御本尊の功徳を信じられるのである。以上のような道理から日蓮大聖人は示同凡夫としてご出現あそばされたことを拝すべきである。

佐渡御書（九五八ページ）日蓮も又かくせめらるるも先業なきにあらず。

日寛上人はまた示同凡夫について次のように仰せられている。

開目抄文段（富要四巻三二六ページ）には、開目抄下巻の末に、日蓮大聖人の逢難と迫害する者が逆に安穏なる

ことを示して、その理由は日蓮大聖人に宿謗（前世の謗法）があるゆえに現世の応報であるとされ、しからば本仏になぜ宿謗があるのかとの問いに対して「示同凡夫の辺に拠る」ゆえであると仰せられている。

観心本尊抄文段（富要四巻二三三㌻）では、観心本尊抄に「夫れ智者の弘法三十年・二十九年の間は云云」とあるご文中、二十九年は恐らく二十七年の誤りであろう、もし日蓮大聖人のご正筆が二十九年となっているとしても、日蓮大聖人は示同凡夫のゆえに不慮の書き誤りがあっても当然である。その例は他の御書にもあると仰せられている。

【如来秘密神通之力】

如来秘密神通之力とは、法華経如来寿量品の一文である。この文は、無作三身の依文であり、本門の本尊の依文である。三大秘法の御本尊のみが、一切衆生を即身成仏させてくださる如来秘密神通之力をもっておられるのである。世の邪宗の行者などが神通力をもつわけはないのである。

法華経如来寿量品第十六　爾の時に世尊、諸の菩薩の、三たび請じて止まざることを知しめして、之に告げて言わく、汝等諦かに聴け、如来の秘密神通の力を。

如来とは、仏であり、久遠元初自受用身、末法御本仏たる日蓮大聖人であられる。秘密とは「一身即三身なるを名づけて秘となし、三身即一身なるを名づけて密となす」また「昔より説かざる所を名づけて秘となし、唯仏のみ自ら知しめしたもうを名づけて密となす」と。すなわち仏の甚深の働きをいうのである。神通之力と

は、神は法身、通は報身、力は応身である。これ無作の三身の依文たるゆえんである。すなわち、神通之力とは、御本仏の偉大なるお力をいうのである。

御義口伝下（七五二ページ）第二如来秘密神通之力の事。御義口伝に云く無作三身の依文なり、此の文に於て重重の相伝之有り、神通之力とは我等衆生の作作発発と振舞う処を神通と云うなり獄卒の罪人を苛責する音も皆神通之力なり、生住異滅の森羅三千の当体悉く神通之力の体なり、今日蓮等の類いの意は即身成仏と開覚するを如来秘密神通之力とは云うなり、成仏するより外の神通と秘密とは之れ無きなり、此の無作の三身をば一字を以て得たり所謂信の一字なり、仍って経に云く「我等当信受仏語」と信受の二字に意を留む可きなり。

諸法実相抄（一三五八ページ）されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候へ、経に云く「如来秘密神通之力」是なり、如来秘密は体の三身にして本仏なり、神通之力は用の三身にして迹仏ぞかし、凡夫は体の三身にして本仏ぞかし、仏は用の三身にして迹仏なり。

三大秘法抄（一〇二二ページ）寿量品に建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり、寿量品に云く「如来秘密神通之力」等云云。

【自受用身の勝劣】

自受用身とは仏自身の働きによって、一切の衆生を救うために、みずから出現された仏をいう。他受用身に

対する。

寿量品において五百塵点劫顕本の釈迦仏は自受用身であり、他受用身ではない。しかし文上の釈尊は、衆生の機にしたがって応現し、昇進した応身仏に過ぎぬから応仏昇進の自受用身と呼ぶ。

それに対して、日蓮大聖人は、すべての仏法の根源である妙法をもともと所持されていた御本仏であられるから、久遠元初の自受用身という。その相違は天地の勝劣があり、略してこれをあげると次のごとくなる。

（末法相応抄・富要三巻一七六ページ）

一に本地と垂迹、二に自行と化他、三に名字凡身と色相荘厳、四に人法体一と人法勝劣、五に下種の教主と脱益の化主。以上の五個は、われわれの実生活にあてて、さらに深く思索すべき点である。

【本因の境智行位】

天台大師は法華玄義に、迹門の十妙、本門の十妙を説いた。迹門の十妙とは境・智・行・位・三法・感応・神通・説法・眷属・利益である。本門の十妙とは本因・本果・本国土・本感応・本神通・本説法・本眷属・本利益・本涅槃・本寿命である。天台の説く境・智・行・位は、もとより釈尊の法華経を解釈したものであるが、末法に流布する本因妙下種仏法の境智行位は、次のごとく御書にお示しになっている。

三世諸仏総勘文教相廃立（五六八ページ）釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき。

右の御文で、凡夫はすなわち名字即で位妙、知の一字は能証の智で智妙、また以信代慧のゆえに知は信にあたり、信心は題目の修行となるゆえに行妙である。我が身等は境妙であり、すなわちこれが本因妙下種家の境智行位である。

当体義抄（五一三㌻）聖人此の法を師と為して修行覚道し給えば云云。

聖人とは名字即の釈尊で位妙、此の法を師と為すとは境妙、修行には始終があり、始はすなわち信心で智妙、終はすなわち唱題で行妙となり、この四妙を合して本因妙となすのである。

【初住位の本因と久遠元初の本因】

天台大師は瓔珞経によって、別教・円教の菩薩の位を五十二位に分けた。いわゆる十信・十住・十行・十回向・十地・等覚・妙覚である。十住の初めの位を初住といい、不退の位としている。

また天台大師は法華文句の九に、法華経寿量品の「我本行菩薩道」の文を解釈して、本因初住としている。すなわち寿量品には三妙合論が明かされ、「我実成仏已来」は本果妙、「娑婆世界説法教化」は本国土妙、「我本行菩薩道」を本因妙の文としている。この「我本行菩薩道」についても、十信はいまだ不退の位にあらずとし、初住位において初めて不退の位とし、すでに常寿を得たりと説いている。これが本因初住である。

しかるに、日蓮大聖人の仏法においては、久遠元初の本因妙を立て、天台の初住の本因と厳格に区別される。すなわち名字凡夫位において直達正観の事行の一念三千を説くのである。

開目抄上（一八九ページ）　一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり。しからば、事行の一念三千の法門は、寿量品のいずれの文の底に沈められたかといえば、古来多くの邪義があったが、唯一の相伝家・日蓮正宗では、次のように正義を明かしている。

三重秘伝抄（富要三巻五〇ページ）　師の曰く「本因初住の文底に久遠名字の妙法・事行の一念三千を秘沈したまえり」云云、応に知るべし、後々の位に登るは前々の行に由るなり云云。

しかして、本因初住とは、

撰時抄文段（富要四巻三四六ページ）　五百塵点劫は本果の所証なり、復倍上数は本因の初住なり、復倍上数の当初は本因の所証なり。

すなわち、われらは、この本因初住の文底に秘し沈められた三大秘法によってのみ、即身成仏がかなうのである。

本因妙抄（八七七ページ）　文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達の正観・事行の一念三千の南無妙法蓮華経是なり。

【随縁真如の智】

真如とは、中道、法性、実相、生命等をいい、真如の体性は永遠に変じないが、縁に随って種々の相を起こす。これを随縁真如の智といい、変わらない性を不変真如の理という。

たとえば、天の月の実体は不変真如であり、雲によって相の変わる天月は随縁真如である。また、われわれの変わらざる生命は不変真如であり、染浄の二法で変わる生命の姿は随縁真如である。

また、本迹相対すれば、迹門は不変真如の理に帰し、本門は随縁真如の智といえる。

御義口伝上（七〇八ページ）帰と云うは迹門不変真如の理に帰するなり命とは本門随縁真如の智に命くなり。

御義口伝上（七一〇ページ）火の二義とは一の照は随縁真如の智なり一の焼は不変真如の理なり。

御義口伝上（七二九ページ）雖一地所生一雨所潤等の事。御義口伝に云く随縁不変の起る所の文なり、妙楽大師云く「随縁不変の説は大教より出で木石無心の言は小宗より生ず」と。

【本仏論の遮難】

日蓮大聖人を本仏とあおぐことは日興上人以来、富士門流の教義および信仰の肝心であり核心であるが、近年にいたって他門流では、それが後世の創作であり、特に日寛上人が創始したかのごとき説をなすものがある。そもそも日蓮大聖人が末法の御本仏であられることは、日蓮大聖人ご自筆の御書をもっても明らかであるが、日寛上人以前の宗門において日蓮大聖人を本仏とあおいでいた二、三の証拠をあげ、もってこれを明らかにしよう。

日興上人はご在世当時より、身をもって御本仏日蓮大聖人に常随給仕されたことは疑う余地のない史実である。しかして日興上人はどのように日蓮大聖人を敬称されていたかについて、ご自筆のご書状からうかがうと

次のようになっている。なお、これらのご書状は御供養の品を日興上人が仏前に供えて報恩の意を表されたとのお手紙である。（堀日亨著「富士日興上人詳伝」より）

「本師」と呼ばれたもの一通
「聖人」と呼ばれたもの十二通
「御影」と呼ばれたもの一通
「聖人御影」と呼ばれたもの四通
「法華聖人」と呼ばれたもの七通
「法主聖人」と呼ばれたもの一通
「御経日蓮聖人」と呼ばれたもの一通
「仏」と呼ばれたもの一通

以上のごとく、御供養のお礼などにあたって釈迦仏法中の仏菩薩を、一切おしるしにならず、ただひたすら日蓮大聖人御一人に対して仏の礼をとられたことが明らかである。また日興上人ご自身が第二祖として、日蓮大聖人の仰せのままに顕わされた御本尊は二百数十幅が現在厳存し、決して一体も釈尊像などは作っていないのである。

三位日順　本因妙口決（富要二巻八三ページ）

久遠元初自受用報身とは本行菩薩道の本因妙の日蓮大聖人を久遠元初の自受用身と取り定め申すべきなり。

右の日順師は身延派を捨てて日興上人に帰依した人である。

日眼　五人所破抄見聞（富要四巻一ページ）

威音王仏と釈迦牟尼とは迹仏なり、不軽と日蓮とは本仏なり。

化儀抄（富要一巻七七ページ）には、また次のごとく明らかに、日蓮大聖人を本仏とあおぐべしと仰せられている。

今日の寿量品と云うも迹中の寿量なり、乃至本門は如何と云うに久遠の遠本・本因妙の所なり、夫とは下種の本なり……当宗には……釈迦をば本尊には安置せざるなり、乃至釈迦の因行を本尊とするなり、其の故は我等が高祖日蓮聖人にて在すなり。

そのほか参考に示せば、日興上人の教えをうけた秋山孫次郎の譲り状には「御仏大上人」と述べられており（大白蓮華第三十八号、六ページ）、また家中抄には、日興上人が本因妙抄を日目・日代・日順・日尊に伝えられたとある。これらはすべて日寛上人以前の出来事ではないか。

【御義口伝】

御義口伝は、日蓮大聖人のご内証の立ち場よりの法華経の講義を、第二祖日興上人が筆記されて、日蓮大聖人のご印可を得たものである。御義口伝には、日蓮大聖人の文底下種の法門が明かされており、まことに重要な御書である。

同じく日蓮大聖人の法華経の講義を聞いて日向の書き残した御講聞書（日向記ともいう）と比べると、内容に天地の開きがある。これは、いかに日興上人が師の教えの奥底をくみとっていたか、教学においてすぐれて

いたかということが、明白にわかるのである。

御義口伝は上下二巻に分かれている。巻上には序品の七箇の大事から涌出品一箇の大事まで収められている。巻下には寿量品廿七箇の大事から普賢経五箇の大事まで、および別伝として廿八品に一文充の大事、廿八品悉く南無妙法蓮華経の事等が収録されている。

御義口伝は、初めに天台大師の法華文句を引き、次に「御義口伝に云く」という述べ方で、日蓮大聖人の甚深の法門が明かされている。巻上の最初には、南無妙法蓮華経について、詳しく説かれ、上下巻を通じて珠玉のごとき御書である。

一代五十年の説法、五千、七千巻の仏教典ありといえども、法華経こそ釈尊の出世の本懐の経典であり、古来、幾多の人師・論師の解釈があるが、像法の天台大師は、釈迦仏法の立ち場で、最もよく説ききった。しかし、末法の御本仏日蓮大聖人は文底の立ち場から、さらに深奥より完璧の解釈をなされた。これが御義口伝である。御義口伝巻下の初めの「第一南無妙法蓮華経如来寿量品第十六の事」という御文は、はっきりと天台流の法華経と峻別して雲泥の法門の差のあることを示しているのである。

次に御義口伝のなかの有名な文証を、二、三あげてみよう。

御義口伝上（七〇八ページ）　色心不二なるを一極と云うなり。

御義口伝上（七三五ページ）　本迹二門は酒なり南無妙法蓮華経は醒めたり。

御義口伝下（七五二ページ）　今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり。

御義口伝下（七五三ページ）当品（寿量品）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す。

御義口伝下（七六〇ページ）本尊とは法華経の行者の一身の当体なり。

御義口伝下（七六六ページ）末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり、法とは題目なり僧とは我等行者なり、仏とも云われ又凡夫僧とも云わるるなり。

【我が身即妙法蓮華経】

宇宙を構成する要素を地水火風空の五種とし、この五種はまた妙法蓮華経であり、一切の万物はすべてこの五種類の要素で成り立っている。ゆえに人間の賢愚の差や時代の別なく一人残らず妙法蓮華経の当体である。

三世諸仏総勘文教相廃立（五六八ページ）五行とは地水火風空なり五大種とも五蘊とも五戒とも五常とも五方とも五智とも五時とも云う、只一物・経経の異説なり内典・外典・名目の異名なり、今経に之を開して一切衆生の心中の五仏性・五智の如来の種子と説けり是則ち妙法蓮華経の五字なり、此の五字を以て人身の体を造るなり本有常住なり本覚の如来なり。

御義口伝上（七一六ページ）我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は経なり此の五尺の身妙法蓮華経の五字なり。

御義口伝下（七六七ページ）塔婆とは五大の所成なり五大とは地水火風空なり此れを多宝の塔とも云うなり。

【直達正観】

「直ちに正観に達する」意である。爾前経では歴劫修行を立て、菩薩が六度万行を永遠に修していくのが成仏の道であると説いた。しかして法華経の序分・無量義経では「速疾頓成」を説いて歴劫修行を否定し、提婆品では竜女の即身成仏があらわれて現証を示し、寿量品の最後にも「速成就仏身」と衆生の即身成仏を説いている。

しかし釈迦仏法では熟益・脱益の機根の衆生が対象であり、法門もやはり熟脱の法門である。末法における文底下種仏法は、御本尊を受持して題目を唱え即身成仏する。それ以外の一切の経や仏では成仏できないし、またそれ以外の一切の修行を用いない。これが直達正観である。

御講聞書（八二九ページ）速疾頓成の義を忽と云うなり。

本因妙抄（八七七ページ）文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達の正観・事行の一念三千の南無妙法蓮華経是なり。

【福十号に過ぐ】

十号とは仏の十種の尊称であり、如来・応供・正徧知・明行足・善逝・世間解・調御丈夫・天人師・仏・

世尊という。舎利弗や迦葉等の声聞は、法華経の迹門に未来の成仏を許されて、皆この十号を授けられたのである。

以上あげた十種の徳力のうち、第六の世間解を無上士と世間解の二つに開いて、第九の仏までを十号と称し、この十号をそなえた者を総称して世尊というとする説もある。十号の大要は次のとおりである。

①如来。森羅万象の本源を知り、因果の理法にのっとって、真実の永遠の生命観を体得した者をいう。

②応供（応受供養）。人天の供養をうけるに足る者。

③正偏知（正等覚）。一切の智をそなえていて、万法を明らかに理解する者のこと。また、あらゆる人を平等に無上の境地へ導き入れる者をいう。

④明行足。過去、現在、未来の三世を達観し、一切の善行を修して満足する者をいう。

⑤善逝（好去）。無量の智慧をもって、種々の煩悩を断じ尽くし、よく仏の境地に到達する者をいう。

⑥世間解。万象の因果の理法をさとりつくす者をいう。種々の迷いを断じ尽くし、衆生のなかでこのうえなくすぐれているので、無上士ともいう。

⑦調御丈夫。大丈夫の力用をそなえ、さまざまな法を説き、一切衆生を調伏制御して、仏道を成ぜしめる力用をそなえている者。すなわち、智慧、勇気をもち、多数の民衆を幸福へ導く大指導者のこと。

⑧天人師。万人の師として指導しきれる者をいう。

⑨仏（仏陀、智者、覚者）。智徳円満なる者をいう。

⑩世尊　あらゆる人から尊敬される者。また世間の英雄という意味で、仏を世雄ということもある。

しかるに妙楽大師は「供養する有らん者は福十号に過ぐ」といって、末法に日蓮大聖人の仏法を信ずる者の功徳を賛嘆している。これに対して日蓮大聖人は、次のように仰せである。

法蓮抄（一〇四四ページ）　是れ程に貴き教主釈尊を一時二時ならず一日二日ならず一劫が間掌を合せ両眼を仏の御顔にあて頭を低て他事を捨て頭の火を消さんと欲するが如く渇して水ををもひ飢えて食を思うがごとく間無く供養し奉る功徳よりも戯論に一言継母の継子をほむるが如く心ざしなくとも末代の法華経の行者を讃め供養せん功徳は彼の三業相応の信心にて一劫が間生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すぐべしと説き給いて候、これを妙楽大師は福過十号とは書れて候なり、十号と申すは仏の十の御名なり十号を供養せんよりも末代の法華経の行者を供養せん功徳は勝るとかかれたり。

このように、われわれ末法の衆生の御本尊による功徳がすぐれることは、脱益の釈迦仏法に対して、本因下種の日蓮大聖人の仏法が百千万億倍すぐれているからであり、「末法の本仏」「本門戒壇の大御本尊」「種脱相対」等の項を参照すれば明らかである。

【宿縁深厚】

凡夫の身として、この世に生まれてきたわれわれが御本尊の信仰にはいることができ、しかも現世に即身成仏することは、過去世の宿縁が深厚であるがゆえである。

呵責謗法滅罪抄（一一二六ページ）　妙楽大師の釈にいわく記七「故に知んぬ末代一時も聞くことを得聞き已って

信を生ずる事宿種なるべし」

諸法実相抄（一三六二ページ）　まことに宿縁のをふところ予が弟子となり給う。

法華証明抄（一五八六ページ）　末代の凡夫の身として法華経の一字・二字を信じまいらせ候へば十方の仏の御舌を持つ物ぞかし、いかなる過去の宿習にて・かかる身とは生るらむと悦びまいらせ候。

そのほか、このような類文はたくさんあるが、宿種・宿縁・宿習と同じ意味に用いられている。すなわち過去世に日蓮大聖人の眷属として御本尊を信仰してきたとの意である。普通に宿縁とか宿習という場合は御本尊に限らないのであるが、前引の御文はすなわち以上に解説したとおりである。

このようにして現世において修行を励むならば、未来はまた師弟ともに仏国土に生まれ、また夫婦・親子も共に幸福な生活を永遠に続けることができるのである。

秋元殿御返事（一〇七〇ページ）「在在諸の仏土常に師と倶に生れん……」との金言違ふべきや。

上野殿母御前御返事（一五七〇ページ）　乞い願わくは悲母我が子を恋しく思食し給いなば南無妙法蓮華経と唱えさせ給いて・故南条殿・故五郎殿と一所に生れんと願はせ給へ、一つ種は一つ種・別の種は別の種・同じ妙法蓮華経の種を心に・はらませ給いなば・同じ妙法蓮華経の国へ生れさせ給うべし。

【草木成仏】

草木や土砂等の非情の物質が成仏する、これを草木成仏という。塔婆供養も草木成仏の原理によるのであ

る。一念三千のうえから論ずれば、われわれの一念に十界・百界を具し、また千如是を具するとは有情の範囲であり、さらに衆生世間・五陰世間を具すると共に、国土世間を具する。この国土世間とは依報であり、衣類や土地・家・町村・国等がすべて成仏するとの教えである。しかも草木成仏は一往釈迦仏法にもあるが、再往の実義は文底下種仏法に限るのである。これらに関する御書を拝すれば、

四条金吾釈迦仏供養事（一一四五ページ）　国土世間と申すは草木世間なり、草木世間と申すは五色のえのぐは草木なり画像これより起る、木と申すは木像是より出来す、此の画木に魂魄と申す神を入る事は法華経の力なり天台大師のさとりなり、此の法門は衆生にて申せば即身成仏といはれ画木にて申せば草木成仏と申すなり。

右の御文に「法華経の力」とあるは、文底下種事行の一念三千の大御本尊である。すなわち観心本尊抄（二四六ページ）に「詮ずる所は一念三千の仏種に非ずんば有情の成仏・木画二像の本尊は有名無実なり」と仰せられ、開目抄上（一八九ページ）には「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり」とご判定あそばされている点から明らかである。

また日寛上人は諸御書を案ずるに草木成仏に二意有りとなされて、一には不改本位の成仏、二には木画二像の成仏であるとされている（観心本尊抄文段上・富要四巻二三五ページ）。その大要を左に述べる。

一に不改本位の成仏とは、草木の全体がそのまま本有無作の一念三千即自受用身の覚体である。その意味は次の諸御書に明らかである。

草木成仏口決（一三三九ページ）　口決に云く「草にも木にも成る仏なり」云云、此の意は草木にも成り給へる

寿量品の釈尊なり。

三世諸仏総勘文教相廃立（五七四ページ）　春の時来りて風雨の縁に値いぬれば無心の草木も皆悉く萌え出生して華敷き栄えて世に値う気色なり秋の時に至りて月光の縁に値いぬれば草木皆悉く実成熟して一切の有情を養育し寿命を続き長養し終に成仏の徳用を顕す之を疑い之を信ぜざる人有る可しや無心の草木すら猶以て是くの如し何に況や人倫に於てをや。

御義口伝下（七八四ページ）　森羅万法を自受用身の自体顕照と談ずる故に……桜梅桃李の己己の当体を改めずして無作三身と開見すれば是れ即ち量の義なり。

三世諸仏総勘文抄に仰せのように、無心の草木でありながら、その体は本覚の法身であり、その時節をたがえず花咲き実のなる智慧は本覚の報身であり、有情を養育するは本覚の応身である。これを不改本位の成仏という。

二に木画二像の成仏とは、最初に引く釈迦仏供養事にお示しのとおりであり、また次の御書に明らかである。

木絵二像開眼之事（四六九ページ）　法華経を心法とさだめて三十一相の木絵の像に印すれば木絵二像の全体生身の仏なり、草木成仏といへるは是なり。

【垂迹と再誕】

垂迹とは、本地に対する言葉。「迹を垂れる」と読む。仏が衆生を利益するために種々のところに応化身を

示すことをいう。初発得道の最初を本地といい、化他面にあらわれる時は化権となり垂迹となるのである。垂迹は本地の影であり働きである。つまり本地と垂迹は天月と水月との関係にある。

諫暁八幡抄（五八八ページ）諸の権化の人々の本地は法華経の一実相なれども垂迹の門は無量なり、所謂跋倶羅尊者は三世に不殺生戒を示し鳩摩羅は生生に殺生を示す、舎利弗は外道となり是くの如く門門不同なる事は本凡夫にて有りし時の初発得道の始を成仏の後、化他門に出で給う時我が得道の門を示すなり。

諸仏、菩薩の場合は釈迦を本地とする垂迹であり、釈迦の場合は五百塵点劫の当初すなわち久遠元初があらわれると、釈迦の本地が垂迹となり化他のための応身仏となる。日蓮大聖人の場合は、本地は久遠元初の自受用身であり、それ以後の仏・菩薩は五百塵点劫の仏をはじめとして垂迹化他となる。

ゆえに百六箇抄（八五四ページ）には「久遠名字より已来た本因本果の主・本地自受用報身の垂迹上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮」とある。

末法今時においては、三大秘法の本尊を受持する者の本地は、仏の本眷属たる地涌の菩薩である。そして現在さまざまな姿で信仰活動に励んでいることは垂迹の姿である。

本因妙抄（八七二ページ）には「今日熟脱の本迹二門を迹と為し久遠名字の本門を本と為す、信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華経と唱え奉れば凡身即仏身なり」とある。

再誕とは、ある前世があって、再びこの世に生まれてくること。末法においては、日蓮大聖人は、外用は上行菩薩の再誕であり、その内証深秘の辺は久遠元初の自受用報身如来の再誕である。ゆえに百六箇抄（八五四ページ）に「本地自受用報身の垂迹上行菩薩の再誕・本門の大師日蓮」とある。この文について日寛上人は、文底

秘沈抄（富要三巻七七ページ）に「問う久遠元初の自受用身とは即ち是れ本因妙の教主釈尊なり、而るに諸門流一同の義に曰く『蓮祖は即ち是れ本化上行の再誕』と云云、其の義文理分明なり処々に之を示すが如し、今何ぞ蓮祖を久遠元初の自受用身と称し奉るや、答う外用浅近は実に所問の如し、今は内証深秘の故に自受用報身の再誕と云うなり」と仰せられ、さらに「本地は自受用身、垂迹は上行菩薩、顕本は日蓮なり」と決定されている。また百六箇抄（八六三ページ）には「久遠元始の天上天下・唯我独尊は日蓮是なり」とあり、同じく百六箇抄（八六四ページ）には「久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり云云」とある。この文は日蓮大聖人こそ久遠元初の自受用報身如来であられることを示している。次に総じていえば、創価学会員は地涌の菩薩の再誕である。諸法実相抄（一三六〇ページ）に「日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや……末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱えがたき題目なり」とある。ここに仰せのように日蓮大聖人の教えを信じ題目を唱える創価学会員は、地涌の菩薩の再誕である。

仏や菩薩のとる姿には、再誕の外に後身、化身、分身、垂迹、内証と外用等がある。後身は再誕とほぼ同義。化身は活動や化導において、さまざまな姿をとること。分身は大御本尊とその他の御本尊、久遠元初の御本仏と三世十方の諸仏などの関係にみられるように本体とは別だが、本体あっての分身として意味をもつ。垂迹は本地に対する言葉で、本体の影であり働きである。内証は本地と同じ、外用は衆生の機根に応じて、教義や経文に沿って一応の姿を示すこと。その他に菩薩の示現生がある。これはなにかの目的をもって、菩薩が鳥獣等の姿をとって出現することである。

第五編　信心修行

【摂受・折伏】

仏教には法を弘める方法に二あり、一には摂受、二には折伏である。法華経安楽行品第十四に「他の経典や他宗の僧の過失を説いたり、悪口を言ってはならない」等とあるのは摂受であり、涅槃経に「刀剣や弓矢を持って弘法せよ」また、天台の「法華折伏・破権門理」とあるのが折伏である。すなわち摂受とは摂引容受の義で、相手の違法を容認しつつしだいに誘引していく化導であり、折伏とは破折屈伏の義で、あくまで相手の邪宗邪義を折り正法に伏せしめる実践行為であり、すなわち悪心を折って信心に伏せしめていく厳愛の行為である。このように摂受と折伏は水火のように相容れない法門である。しかして正像年間、熟脱の機根のためには摂受が必要であり、末法には折伏を肝要となすについて、御書には次のように仰せられている。

開目抄下（二三五ページ）　夫れ摂受・折伏と申す法門は水火のごとし火は水をいとう水は火をにくむ、摂受の者は折伏をわらう折伏の者は摂受をかなしむ、無智・悪人の国土に充満の時は摂受を前とす安楽行品のごとし、邪智・謗法の者の多き時は折伏を前とす常不軽品のごとし……末法に摂受・折伏あるべし所謂悪国・破法の両国あるべきゆへなり、日本国の当世は悪国か破法の国かと・しるべし。

佐渡御書（九五七ページ）　仏法は摂受・折伏時によるべし譬ば世間の文・武二道の如しされば昔の大聖は時によりて法を行ず……悪王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮が如し。

現在の日本は謗法の邪宗徒が充満している現状であり、折伏を前とすべきことは当然である。しかるに日蓮宗と名乗りながら日蓮大聖人の時は折伏であり、文化の進んだ今日は摂受である等と立てる者がある。しかも、前引の開目抄下に「末法に摂受・折伏あるべし」等の文をその証拠とする邪見・曲解を、次に日寛上人の開目抄文段を引いて破折する。

開目抄下巻愚記（富要四巻三二八ページ）　末法に摂受折伏あるべし等の文、問う若し爾らば末法に亦摂受を行ずべきや、答う摂折二門に就いて古来の義蘭菊なり、今且らく五義に約す云云、一には教法に約す、謂く其の大旨を論ずれば法華は正しく是れ折伏の教法なり、是れ則ち法華の開顕は爾前の権理を破し法華の実理を顕わす故なり、玄文第九に云く法華折伏・破権門理等云云、本迹開顕准例して知るべし。二には機縁に約す、謂く若し本已有善の衆生の為には摂受門を以て之を将護す、若し本未有善の衆生の為には折伏門を以て之を強毒す、是の故に疏の第十に云く本已有善・釈迦小を以て之を将護す、本未有善・不軽大を以て之を強毒す等云云。三には時節に約す、宗祖云く末法に於ては小大権実顕密共に教のみ有って得道無し、一閻浮提皆謗法と為り畢んぬ、逆縁の為に但妙法蓮華経の五字に限るのみ例せば不軽品の如し云云、下文に云く設い山林に交りて一念三千の観を凝すとも時機を知らず摂折二門を弁えずば争でか生死を離るべき云云、其の外の諸文枚挙に遑あらず云云、四には国土に約す即今文の意なり、謂く末法折伏の時なりと雖も若し横に余国を尋ねば豈悪国無からんや、其の悪国に於ては摂受を前とすべし、然るに日本国の当世は破法の国なること分明なり故に折伏を前と為すべし云云。五には教法流布の前後に約す、既に竜樹・天親・天台・伝教等、前前流布の教法を破して当機益物の教法を弘む、今蓮祖亦爾なり、前代流布の爾前迹門を破して末法適時の大

白法本門寿量の肝心を弘む、其の相諸抄の如し之を略す。

しかして末法の折伏について二義がある。一には法体の折伏であって、法華折伏・破権門理のごときものである。二には化儀の折伏であって涅槃経に「正法を護持せん者は五戒を受けず威儀を修せず応に刀剣、弓箭、鉾槊を持すべし」と、すなわち仙予国王等がこれである。

観心本尊抄（二五四㌻）当に知るべし此の四菩薩折伏を現ずる時は賢王と成って愚王を誡責し摂受を行ずる時は僧と成って正法を弘持す。

いま、化儀の折伏に望んで法体の折伏を判ずるゆえに、日蓮大聖人ご在世中の折伏をも、なお摂受と名づけるのである。ゆえに「摂受を行ずる時は僧と成って正法を弘持す」という。「折伏を現ずる時は賢王と成って愚王を誡責し」は、広宣流布の時、現在の折伏活動を判ぜられているのである。ともあれ、化儀の広宣流布、本門戒壇の建立には、賢王が出現して正法流布にあたることが明らかである。有徳王・覚徳比丘の昔を思い合わせ、創価学会の重大使命を予言した文と拝すべきである。

【順縁・逆縁】

折伏をうけて素直に入信し、この世で功徳をうけ幸福になる者は順縁である。これに反し三年も七年も反対を続け、ついには地獄のような境涯におちいっていく者などは逆縁である。

開目抄下（二二二㌻）此等はさてをく我が一門の者のためにしるす他人は信ぜざれば逆縁なるべし。

法華取要抄（三三六ページ）　末法に於ては大小・権実・顕密共に教のみ有って得道無し一閻浮提皆謗法と為り畢んぬ、逆縁の為には但妙法蓮華経の五字に限る、例せば不軽品の如し我が門弟は順縁なり日本国は逆縁なり。

末法における折伏は相手が信心してもしなくても、大御本尊を堅く受持して邪智・謗法を強折するのである。相手は謗法の罪により、いったんは地獄へ落ちるけれども、御本尊に縁をもった功徳により、将来必ずその罪を滅し終わって、再び御本尊に巡り会って成仏する。これが逆縁の衆生であり、毒鼓の縁ともいう。

教機時国抄（四三八ページ）　謗法の者に向っては一向に法華経を説くべし毒鼓の縁と成さんが為なり、例せば不軽菩薩の如し。

上野殿御返事（一五五五ページ）　天竺に嫉妬の女人あり・男をにくむ故に……年来・男のよみ奉る法華経の第五の巻をとり・両の足にてさむざむにふみ散散けるに、其の後命つきて地獄にをつ・両の足ばかり地獄にいらず・獄卒鉄杖をもって打・うてどもいらず、是は法華経をふみし逆縁の功徳による、今日蓮を悪少輔房にくむ故にせうぼうが第五の巻を取りて予がをもてをうつ打面・是も逆縁となるべきか。

なお、法華経寿量品に「不失心者」とあるのは、久遠元初の闡法下種を忘れないで信心できた順縁の人であり、「余失心者」とあるのは、久遠元初の下種を忘れていま信心できない逆縁の人というべきである。

【三類の強敵】

末法に法華経を弘通すると、その正法の行者を迫害する三種類の強敵が出現する。一に俗衆増上慢、二に

は道門増上慢、三に僭聖増上慢である。

その文は法華経勧持品にある。勧持品で八十万億那由佗の菩薩が、仏滅後における弘経の誓いを説いた。しこうして、その時代の様相と正法の行者を迫害する模様を次のように説き、天台はその文を三類に判釈した。

（開目抄下二二四ページ）

第一類　諸の無智の人の悪口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆当に忍ぶべし。

第二類　悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為れ得たりと謂い我慢の心充満せん。

第三類　或は阿練若に納衣にして空閑に在って自ら真の道を行ずと謂って人間を軽賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること六通の羅漢の如くならん、是の人悪心を懐き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮て好んで我等が過を出さん、常に大衆の中に在って我等を毀らんと欲するが故に国王・大臣・婆羅門・居士及び余の比丘衆に向って誹謗して我が悪を説いて是れ邪見の人・外道の論議を説くと謂わん、濁劫悪世の中には多く諸の恐怖有らん悪鬼其身に入って我を罵詈毀辱せん、濁世の悪比丘は仏の方便随宜の所説の法を知らず悪口し顰蹙し数数擯出せられん。

日蓮大聖人は末法に出現せられ、当時の世相は三類の強敵が充満していて、しかも法華経の予言と寸分違うことなく、一国の迫害を一身に受けられたことを次のように明かされている。

開目抄下（二二五ページ）　当世は如来滅後・二千二百余年なり大地は指ば・はづるとも春は・花は・さかずとも三類の敵人・必ず日本国にあるべし。

如説修行抄（五〇一ページ）　其の上真実の法華経の如説修行の行者の師弟檀那とならんには三類の敵人決定せ

り、されば此の経を聴聞し始めん日より思い定むべし況滅度後の大難の三類甚しかるべしと。

如説修行抄（五〇四ページ）誰人にても坐せ諸経は無得道・堕地獄の根源・法華経独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給いて諸宗の人法共に折伏して御覧ぜよ三類の強敵来らん事疑い無し……されば如説修行の法華経の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ。

日蓮大聖人ご在世中において、俗衆増上慢とは一般社会の人々、道門増上慢とは邪宗の僧等、僭聖増上慢とは極楽寺良観や建長寺道隆等であった。

現在において、俗衆増上慢とは隣人、会社の同僚、社会一般の人々の反対等であり、道門増上慢とは邪宗教の僧や布教師等の怨嫉であり、僭聖増上慢とは国家権力や報道機関等をもって迫害する輩をいうのであろう。これら三類の強敵を呼び起こしたのは日蓮正宗創価学会のみであり、日蓮大聖人の大仏法を広宣流布すべき唯一の団体ということができる。

【三障四魔】

天台大師の摩訶止観第五にあり、御書には、数多くこれを引かれている。

三障とは、一に煩悩障……貪・瞋・癡等により、二に業障……妻子等により、三に報障……国主・父母等により起こる。

四魔とは、一に陰魔……五体により、二に煩悩魔……妄惑のゆえに、三に死魔……修行中の者の若死等によ

り、四に天子魔……第六天の魔王により起こる。

日蓮大聖人は兄弟抄（一〇八七ページ）に「魔競はずは正法と知るべからず」と仰せられて、仏道修行の途上には必ず三障四魔の競い起こるべきことを示されている。また天台の摩訶止観第五の巻の「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」の文を引かれて「此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ」と、ご教訓になっている。しかして、三障四魔を粉砕すれば必ず成仏できることを確信すべきである。

また天子魔の最も恐るべきことを、次のようにお示しになっている。

三沢抄（一四八七ページ）仏にならむとする時には・かならず影の身にそうがごとく・雨に雲のあるがごとく・三障四魔と申して七の大事出現す、設ひ・からくして六は・すぐれども第七にやぶられぬれば仏になる事かたし、其の六は且くをく第七の大難は天子魔と申す物なり。

開目抄上（二〇〇ページ）日本国に此れをしれる者は但日蓮一人なり。これを一言も申し出すならば父母・兄弟・師匠に国主の王難必ず来るべし、いはずば・慈悲なきに・にたりと思惟するに法華経・涅槃経等に此の二辺を合せ見るに・いはずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に堕べし、いうならば三障四魔必ず競い起るべしと・しりぬ。

兵衛志殿御返事（一〇九一ページ）凡夫の仏になる又かくのごとし、必ず三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退くこれなり。

【十四誹謗】

法華経譬喩品第三の文から十四種の誹謗を立てる。その御文は、松野殿御返事（一三八二ページ）「悪の因に十四あり・一に憍慢・二に懈怠・三に計我・四に浅識・五に著欲・六に不解・七に不信・八に顰蹙・九に疑惑・十に誹謗・十一に軽善・十二に憎善・十三に嫉善・十四に恨善なり」此の十四誹謗は在家出家に亘るべし。

①憍慢。増上慢と同意。慢心。おごりたかぶって、仏法をあなどること。②懈怠。仏道修行をなまけること。③計我。我見と同意。自分の勝手な考えで、仏法の教えを判断すること。④浅識。仏法の道理がわからないのに、求めようとしないこと。⑤著欲。欲望にとらわれて、仏法を求めないこと。⑥不解。仏法の教えをわかろうとしないこと。⑦不信。仏法を信じないこと。⑧顰蹙。顔をしかめること。仏法を非難すること。⑨疑惑。仏法の教えを疑って、迷うこと。⑩誹謗。仏法をそしり、悪口をいうこと。⑪軽善。仏法を信じている人を軽蔑し、馬鹿にすること。⑫憎善。仏法を信じている人を憎むこと。⑬嫉善。仏法の信者を怨嫉すること。和合僧を破る働きをする人。⑭恨善。仏道を修行する者をうらむこと。

以上の十四のうち特に一から十までは主として信心をしていない人の謗法であり、終わりの四つは信心している人の謗法である。しかし、再往はこれら十四は在家・出家にわたり、どんな人も具している醜悪な生命のあらわれであり、所詮はそれら内在する悪の生命との対決が大切である。

すなわち、所詮は御本尊を信じるか信じないかによって一切が決定される。ゆえに、日蓮大聖人は次のごとく仰せである。

念仏無間地獄抄（九七ページ）　譬喩品の十四誹謗も不信を以て体と為せり。

【謗法厳戒】

謗法とは法に背くことであり、不信の者、大御本尊を信じない者である。また、大御本尊の信仰にはいっていても、謗法を厳に戒めなければ成仏することはできない。かえって罰をうける結果ともなる。

顕謗法抄（四五五ページ）　謗法とは法に背くという事なり法に背くと申すは小乗は小乗経に背き大乗は大乗経に背く法に背かばあに謗法とならざらん謗法とならば・なんぞ苦果をまねかざらん……不信とは謗法の者なり……謗法とは只由なく仏法を謗ずるを謗法というか。

阿仏房尼御前御返事（一三〇八ページ）　少しも謗法不信のとが候はば無間大城疑いなかるべし。

曾谷殿御返事（一〇五六ページ）　何に法華経を信じ給うとも謗法あらば必ず地獄にをつべし、うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如し。

これらの御文のように、御本尊を疑うことが最も重大な謗法となる。絶対に疑うことなく唯一無二の御本尊を信じ奉ることが、成仏への大直道である。そのためには、また他人の謗法を責め、折伏することが肝要である。

曾谷殿御返事（一〇五六ページ）　涅槃経に云く「若し善比丘あって法を壊る者を見て置いて呵責し駈遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり、若し能く駈遣し呵責し挙処せんは是れ我が弟子真の声聞なり」云云……法華経の敵を見ながら置いてせめずんば師檀ともに無間地獄は疑いなかるべし、南岳大師の云く「諸の悪人と倶に地獄に堕ちん」云云、謗法を責めずして成仏を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるが如くなるべしはかなし・はかなし。

末法においては師子王のような力をもって謗法を破折すべきことは、あらゆる御書にお示しのとおりであり、たとえ自分自身は御本尊を信じていても、謗法を見て責めないならば師も檀那も共に無間地獄へ落ちるとは、最も注意すべきことである。

開目抄下（二三六ページ）　涅槃経に云く乃至「慈無くして詐り親しむは是れ彼が怨なり……彼が為に悪を除くは即ち是れ彼が親なり」

【還著於本人】

還著於本人とは、法華経観世音菩薩普門品第二十五の文であり、「還って本人に著きなん」と読む。邪宗教の祈りによって身を害せられようとした者も、正法を信ずれば少しも害をうけず、還って反対に祈った本人が大罰をまねくということである。すなわち末法の法華経の行者、大御本尊を持つ者をそしり害せんとする者は、かえって、自らの身にそれを受けることになるのである。

日蓮大聖人は、承久の乱の時に朝廷方が真言のあらゆる邪法を用いて鎌倉方を調伏祈禱したが、反対になにも祈りをかけなかった鎌倉方に、さんざんに敗れて、三上皇は島流しになり、真言の僧等は切られたことを、還著於本人の見本として御書に引かれている。

種種御振舞御書（九二一ページ）弘法大師の邪義・慈覚大師・智証大師の僻見をまことと思いて叡山・東寺・園城寺の人人の鎌倉をあだみ給いしかば還著於本人とて其の失還って公家はまけ給いぬ、武家は其の事知らずして調伏も行はざればかちぬ。

兵衛志殿御書（一〇九五ページ）人王八十二三四隠岐の法皇・阿波の院・佐渡の院・当今・已上四人・座主慈円僧正・御室・三井等の四十余人の高僧等をもて平の将軍義時を調伏し給う程に又還著於本人とて上の四王島島に放たれ給いき。

それに日蓮大聖人は、真言の邪法をもって蒙古調伏等を行なえば、かえって日本の国が滅びると仰せられて、邪宗真言宗を徹底的に破折されている。日蓮大聖人を害せんとした東条景信や、平左衛門尉等が、あるいは落馬し、あるいは謀叛の罪によって斬殺された等は、還著於本人である。また四条金吾殿を主君に讒言して失脚させようとした邪宗を信ずる同僚たちが、後にかえって追放され、四条金吾殿は三倍の加増をたまわった等は、還著於本人というべきである。

下山御消息（三六三ページ）而るを今大蒙古国を調伏する公家武家の日記を見るに或は五大尊或は七仏薬師或は仏眼或は金輪等云云、此れ等の小法は大災を消すべしや還著於本人と成りて国忽ちに亡びなんとす。

ゆえに日蓮大聖人の大仏法を奉ずるわれらは、人からいかに怨嫉され、そしられようと、諸天の加護をえ

て、なんの害もなく、かえって怨嫉し、そしった本人が大害をうけるわけである。

【病気の原因】

自分自身が病気になり、あるいは家族や肉親が病気になって悩んでいる者が実に多い。これらの病気のなかでは医者や薬で比較的かんたんに治るものもあるが、医者や薬では絶対に治らない病気がある。仏教においては、そのような病気の原因をどう説き、またどうしたら治ると教えているか。御書には次のように仰せられている。

太田入道殿御返事（一〇〇九ページ）又云く「病の起る因縁を明すに六有り、一には四大順ならざる故に病む・二には飲食節ならざる故に病む・三には坐禅調わざる故に病む・四には鬼便りを得る・五には魔の所為・六には業の起るが故に病む」云云、大涅槃経に云く「世に三人の其の病治し難き有り一には大乗を謗ずる二には五逆罪・三には一闡提是くの如き三病は・世の中の極重なり」云云。

治病大小権実違目（九九五ページ）夫れ人に二の病あり一には身の病・所謂地大百一・水大百一・火大百一・風大百一・已上四百四病なり、此の病は設い仏に有らざれども・之を治す所謂治水・流水・耆婆・扁鵲等が方薬・此れを治するにゆいて愈えずという事なし、二には心の病・所謂三毒乃至八万四千の病なり、此の病は二天・三仙・六師等も治し難し何に況や神農・黄帝等の方薬及ぶべしや、又心の病・重重に浅深・勝劣分れたり。

中務左衛門尉殿御返事（一一七八ページ）　夫れ人に二病あり、一には身の病……二には心の病（前引と同文のゆえ略す）。

以上のように太田入道殿御返事には止観の文を引き、六つの原因をあげて特に業や鬼魔の所為によって起こる病は、仏法によらなければ治すことができないことを示されている。次の治病抄の文は、身の病と心の病とに立て分け、身の病は医者で治るが、心の病は仏法によらなければならないとし、心の病に、また重々の浅深を立てて、六道凡夫の病は小乗教でよい。小乗の病は大乗教で治す、権大乗の病は実大乗の法華経をもって治す、法華経の流布すべき時代に権大乗を流布し、その謗法によって起こる病は、権大乗をもって治そうとしても効力がないのみか、かえってその勢いを増す。法華経にまた二経あり、迹門と本門であって末法には法華経の本門が流布すべきであり、それ以外の経教はすべて謗法となり、かえって病を増長するばかりである、とご教示になっている。

ゆえに、日蓮大聖人が、ご病気の時に御みずから四条金吾殿の良薬を服せられたように、医者や薬で治る病気は、それでよろしい。しかし医者や薬で治らぬ業病や心の病は、正法誹謗の罪で病になったのであるから、あくまでも正法を信ずる以外には治らない。たとえ、治ったようにみえても、他の業病に冒されるのである。その原理は法華経に次の如く説かれている。

法華経普賢菩薩勧発品第二十八　是の経典を受持せん者を見て、其の過悪を出さん。若しは実にもあれ、若しは不実にもあれ、此の人は現世に白癩の病を得ん。若し之を軽笑すること有ん者は、当に世世に、牙歯疎欠、醜唇平鼻、手脚戻曲、眼目角睞に、身体臭穢にして、悪瘡膿血、水腹短気、諸の悪重病あるべし。

法華経譬喩品第三　若し医道を修め、方に順じて病を治せば、更に他の疾を増し、或は復死を致さん、若し自ら病有らば人の救療すること無く、設い良薬を服すとも而も復増劇せん。

【変毒為薬】

御本尊の偉大な功徳により毒を変じて薬となす、すなわち苦悩の多いわれわれの生活にあって、信仰していれば、その苦しみにより、いよいよ信心を深め、かえって大利益を得る。すなわち、小罰を変じて大利益とするのである。

太田入道殿御返事（一〇〇九ページ）　竜樹菩薩の大論に云く「……譬えば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し」云云、天台此の論を承けて云く「譬えば良医の能く毒を変じて薬と為すが如く乃至今経の得記は即ち是れ毒を変じて薬と為すなり」云云。

始聞仏乗義（九八四ページ）　竜樹菩薩・妙法の妙の一字を釈して譬えば大薬師の能く毒を以て薬と為すが如し等云云、毒と云うは何物ぞ我等が煩悩・業・苦の三道なり薬とは何物ぞ法身・般若・解脱なり、能く毒を以て薬と為すとは何物ぞ三道を変じて三徳と為すのみ。

治部房御返事（一四二六ページ）　例せば父母を殺す人は何なる大善根をなせども天・是を受け給う事なし、又法華経のかたきとなる人をば父母なれども殺しぬれば大罪還って大善根となり候。

治部房御返事にお示しの原理は、価値観から拝すれば当然のこととして日常生活に行なわれている道理であ

る。すなわち小善が中善に背くときは中悪となり、中善でも大善に背けば大悪となる。

【転重軽受】

御本尊の功徳力により重罪を転じて軽く受け、現世に謗法の罪をことごとく消滅して即身成仏する、これを転重軽受という。

佐渡御書（九五九ページ）般泥洹経に云く「善男子過去に無量の諸罪・種種の悪業を作らんに是の諸の罪報・或は軽易せられ……及び余の種種の人間の苦報現世に軽く受くるは斯れ護法の功徳力に由る故なり」等云云。右の経文は般泥洹経の文であるが、原理は一つである。すなわち、われわれは過去世に無量の謗法の罪を重ねてきたから現世に苦悩の報いを受けている。しこうして御本尊を受持し信心折伏に励むならば、護法の功徳力により現世に軽くその罪を受ける。

しかし将来長い長い期間にわたって消滅すべき罪報が現世に成仏するため一時に競い起こるから、ともすると疑いを生じやすい。このときが肝心である。自分では大難に驚くことがあっても、実は、自身の過去世の罪を軽く消していることを常に忘れてはならない。

転重軽受法門（一〇〇〇ページ）涅槃経に転重軽受と申す法門あり、先業の重き今生につきずして未来に地獄の苦を受くべきが今生にかかる重苦に値い候へば地獄の苦みぱっときへて死に候へば人天・三乗・一乗の益をうる事の候。

【五十展転】

法華経随喜功徳品第十八に五十展転の功徳について説かれている。すなわち仏の滅後に法華経を聞いて随喜して人に伝え、伝え聞いた人が随喜してさらに他の人に伝え、このようにして五十番目に伝え聞いた人は、聞いた話も随喜の心も、そうとう薄くなっているが、それでも絶大な功徳があるというのである。いわんや、最初に聞法して随喜した人の大功徳は、測り知れないものがあるわけである。

法華経随喜功徳品第十八　阿逸多、如来の滅後に、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、及び余の智者、若しは長、若しは幼、是の経を聞いて、随喜し已って、法会より出でて余処に至らん。若しは僧坊に在り、若しは空閑の地、若しは城邑、巷陌、聚落、田里にして、其の所聞の如く、父母、宗親、善友、知識の為に、力に随って演説せん。是の諸人等、聞き已って随喜して、復行いて転教せん。余の人聞き已って、亦随喜して転教せん。是の如く展転して、第五十に至らん。阿逸多、其の第五十の善男子、善女人の随喜の功徳を、我今之を説かん。汝当に善く聴くべし……我今分明に汝に語る。是の人、一切の楽具を以って、四百万億阿僧祇の世界の、六趣の衆生に施し、又、阿羅漢果を得せしめん。所得の功徳は、是の第五十の人の法華経の一偈を聞いて、随喜せん功徳には如かじ。百分、千分、百千万億分にして、其の一にも及ばじ。乃至算数譬喩も知ること能わざる所なり。阿逸多、是の如く第五十の人の展転して、法華経を聞いて随喜せん功徳、尚無量無辺阿僧祇なり。何に況や、最初会中に於いて、聞いて随喜せん者をや。其の福復勝れたること、無量

無辺阿僧祇にして、比ぶること得べからず。

すなわち第五十人目の、ただ随喜し、ただ自行のみの功徳は、四百万億阿僧祇の世界の六趣四生の一切衆生に八十年の間、一切の楽具を布施し、法を説いて一時に阿羅漢果等の四果を得させる大功徳よりも、百倍、千倍、百千万倍もすぐれているのである。

いわんや、最初に直接に正法を聞いて随喜した人の功徳は無量である。いわんや、末法の御本仏日蓮大聖人の大仏法にあって随喜し、仏勅のままに折伏を行ずる者の功徳は絶大である。日蓮大聖人は、末法に出現する弟子の位を、次のように仰せである。

四信五品抄（三四二ページ）　問う汝が弟子一分の解無くして但一口に南無妙法蓮華経と称する其の位如何、答う此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人に超過するのみに非ず将た又真言等の諸宗の元祖・畏・厳・恩・蔵・宣・摩・導等に勝出すること百千万億倍なり、請う国中の諸人我が末弟等を軽ずる事勿れ進んで過去を尋ぬれば八十万億劫に供養せし大菩薩なり豈熙連一恒の者に非ずや退いて未来を論ずれば八十年の布施に超過して五十の功徳を備う可し天子の襁褓に纏れ大竜の始めて生ずるが如し蔑如すること勿れ蔑如すること勿れ。

【福運】

正法を信ずることによって獲得する、幸福な良き運命、宿命を福運という。反対に邪法を信ずれば不幸な運

命、悪運、不運となるのである。

福運を積んでいくならば、人生、生活は、すべて幸福な境涯に変わっていく。しかして、福運が尽きたときは、どんな方法、手段をもってしても、やることなすことが、すべて逆目に出て不幸な生活になっていく。俗に運の良し悪しを気にする人があるが、真実の意義は、ここにあるのである。

立正安国論（一九ページ）仁王経に云く「我今五眼をもって明に三世を見るに一切の国王は皆過去の世に五百の仏に侍えるに由って帝王主と為ることを得たり、是を為って一切の聖人羅漢而も為に彼の国土の中に来生して大利益を作さん、若し王の福尽きん時は一切の聖人皆為に捨て去らん、若し一切の聖人去らん時は七難必ず起らん」

末法今時において、福運を積むのは、ただ三大秘法の大御本尊を信じて折伏を行ずる以外にはない。いかなる悪運、不運に嘆く人といえども、一たび正法を信ずれば変毒為薬、転重軽受の大功徳によって、大福運を身につけることができるのである。現在、恵まれた生活を営んでいる人は、一応は過去に積んだ福運によるといえるが、今世において正法を信じなければ、必ずいつかは福運が尽きるときがくるのである。いわんや、正法に反対して誹謗する人においてをやである。

【顕益・冥益】

仏法で現証を第一とすべきことは、現証論の項で述べたが、この現証に二つある。目に見えて生活や自身の

うえにはっきり現われる功徳の現証を顕益といい、そのときは目には見えないようではあるが、五年十年とたつうちに言葉では説明できないほどの大利益をうける——それを冥益という。

この二つのうち、末法は冥益が表であり真の大利益は冥益である。たとえば、俗に「桃栗三年、柿八年」といわれるように、樹木でさえ種をまいてから成長し大木になるまでに、それぞれある期間が必要であり、一日一日の成長は目に見えない。しかし三十年、五十年とたてば、堂々とそびえる大木になるのである。人間革命の功徳も、三大秘法の御本尊を信じて仏種を植えてから、一日一日の成長は目に感じなくとも、一年、三年、七年と水の流れるように信心していけば、すばらしい人間革命の大樹に育ち無量の功徳の花を咲かせ、福運の果実が実ることになる。ゆえに御書にいわく、

教行証御書（一二七七ページ）正像に益を得し人人は顕益なるべし在世結縁の熟せる故に、今末法には初めて下種す冥益なるべし。

時代の混乱と民衆の苦悩に乗じて邪宗・邪教が流行し、奇怪な通力を本として世間をたぶらかし、一時的な顕益を求めて邪教を信じた人は、ますます不幸のどん底に落ちていく。これを戒められて御書にいわく、

報恩抄（三一九ページ）古の人人も不可思議の徳ありしかども仏法の邪正は其にはよらず……伝教大師の三日が内に甘露の雨をふらしておはせしも其をもって仏意に叶うとは・をほせられず。

題目弥陀名号勝劣事（一一四ページ）先ず通力ある者を信ぜば外道天魔を信ずべきか。

星名五郎太郎殿御返事（一二〇九ページ）今此の善導・法然等は種種の威を現じて愚癡の道俗をたぶらかし如来の正法を滅す、就中彼の真言等の流れ偏に現在を以て旨とす、所謂畜類を本尊として男女の愛法を祈り荘

園の望をいのる、是くの如き少分のしるしを以て奇特とす。

唱法華題目抄（一六ページ）　実経に入らざらん者は或は魔にたぼらかされて通を現ずるか、但し法門をもて邪正をただすべし利根と通力とにはよるべからず。

以上のように魔の通力を打破された日蓮大聖人は、最高無上の幸福たる成仏を唯一の念願とされ、われわれ末弟に垂範されたのであり、これこそ真実最高の大冥益である。

四条金吾殿御返事（一一六九ページ）　日蓮は少より今生のいのりなし只仏にならんとをもふ計りなり。

しかし、末法の信心に顕益がないわけではない。顕益は次のような条件の時に必ずうけられる。すなわち、

第一に、初信の功徳。これは仏道修行を積まなくとも、入信して御本尊を奉持しただけで、あるいは入信を決意しただけで、御本尊にこのような功徳があるという証拠として、功徳がうけられるのである。

第二に、その問題が解決しなかったら、生命にもおよぶような苦難をうけなければならないというようなときに、御本尊を心から信じて祈れば願いは必ずかなう。

第三に、邪宗・邪義を破折し、正法と邪法との勝負になったときに、厳然と道理のうえにおいても、現証のうえにおいても、正法が必ず勝つことが証明される。

また冥益のうえに顕益があるのである。

【不自惜身命】

日蓮大聖人の御書に、また法華経等に、仏道修行には必ず大小の難があるが、身命を惜しまないほどの強い

信心で乗り越えることによって、絶対的幸福を得られることが説かれている。

また信心において、大御本尊を渇仰しお慕いすること、身命を惜しまないほどの信心であるべきことを説かれている。

法華経如来寿量品第十六　一心に仏を見たてまつらんと欲して、自ら身命を惜しまず。

法華経勧持品第十三　是の経を説かんが為の故に、此の諸の難事を忍ばん、我れ身命を愛せず、但無上道を惜しむ。

聖愚問答抄（四九六ページ）　汝実に後世を恐れば身を軽しめ法を重んぜよ是を以て章安大師云く「寧ろ身命を喪ふとも教を匿さざれとは身は軽く法は重し身を死して法を弘めよ」と、この文の意は身命をば・ほろぼすとも正法をかくさざれ、其の故は身はかろく法はおもし身をばころすとも法をば弘めよとなり。

このように、仏法のためには身命を惜しまないということは、最高の信心の姿である。ゆえに身命を惜しまない強盛な信心があれば、他のどんなことでもでき得るわけである。

七百年昔には熱原三烈士等の死身弘法の信心の鑑があった。また最近では牧口初代会長、戸田前会長のお姿は、不自惜身命の信心の姿であった。

撰時抄（二九一ページ）　法華経の八の巻に云く「若し後の世に於て是の経典を受持し読誦せん者は乃至諸願虚しからず、亦現世に於て其の福報を得ん」又云く「若し之を供養し讃歎すること有らん者は当に今世に於て現の果報を得べし」等云云、此の二つの文の中に亦於現世・得其福報の八字・当於今世・得現果報の八字・已上十六字の文むなしくして日蓮今生に大果報なくば如来の金言は提婆が虚言に同じく多宝の証明は倶伽利が

妄語に異ならじ、謗法の一切衆生も阿鼻地獄に堕つべからず、三世の諸仏もましまさざるか、されば我が弟子等心みに法華経のごとく身命もおしまず修行して此の度仏法を心みよ、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経。佐渡御書（九五七㌻）強敵を伏して始て力士をしる、悪王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮が如し、これおごれるにはあらず正法を惜む心の強盛なるべしおごれる者は必ず強敵に値ておそるる心出来するなり。

しかして、不惜身命に、事と理とがあることを御義口伝に説かれている。

御義口伝上（七四七㌻）第二不惜身命の事。御義口伝に云く身とは色法・命とは心法なり事理の不惜身命之れ有り、法華の行者田畠等を奪わるは理の不惜身命なり命根を断たるを事の不惜身命と云うなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は事理共に値うなり。

すなわち全力をあげて広宣流布・民衆救済を目指し、学会活動に励むことは、事理共に不自惜身命の信心である。

日興遺誡置文（一六一八㌻）未だ広宣流布せざる間は身命を捨て随力弘通を致す可き事。

義浄房御書（八九二㌻）寿量品の自我偈に云く「一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず」云云、日蓮が已心の仏界を此の文に依って顕はすなり、其の故は寿量品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事・此の経文なり秘す可し秘す可し……日蓮云く一とは妙なり心とは法なり欲とは蓮なり見とは華なり仏とは経なり、此の五字を弘通せんには不自惜身命是なり、一心に仏を見る心を一にして仏を見る一心を見れば仏なり、無作の三身の仏果を成就せん事は恐くは天台伝教にも越え竜樹・迦葉にも勝れたり。

【有徳王と覚徳比丘】

立正安国論（二八ページ）涅槃経に云く乃至又云く「善男子・過去の世に此の拘尸那城に於て仏の世に出でたまうこと有りき歓喜増益如来と号したてまつる、仏涅槃の後正法世に住すること無量億歳なり余の四十年仏法の末、爾の時に一の持戒の比丘有り名を覚徳と曰う、爾の時に多く破戒の比丘有り是の説を作すを聞きて皆悪心を生じ刀杖を執持し是の法師を逼む、是の時の国王名けて有徳と曰う是の事を聞き已って護法の為の故に即便ち説法者の所に往至して是の破戒の諸の悪比丘と極めて共に戦闘す、爾の時に説法者厄害を免ることを得たり王・爾の時に於て身に刀剣鉾槊の瘡を被り体に完き処は芥子の如き許りも無し、爾の時に覚徳尋いで王を讃めて言く、善きかな善きかな王今真に是れ正法を護る者なり当来の世に此の身当に無量の法器となるべし、王是の時に於て法を聞くことを得已って心大に歓喜し尋いで即ち命終して阿閦仏の国に生ず而も彼の仏の為に第一の弟子と作る、其の王の将従・人民・眷属・戦闘有りし者・歓喜有りし者・一切菩提の心を退せず命終して悉く阿閦仏の国に生ず、覚徳比丘却って後寿終って亦阿閦仏の国に往生することを得て彼の仏の為に声聞衆中の第二の弟子と作る、若し正法尽きんと欲すること有らん時当に是くの如く受持し擁護すべし、迦葉・爾の時の王とは即ち我が身是なり、説法の比丘は迦葉仏是なり。迦葉正法を護る者は是くの如き等の無量の果報を得ん」

以上、経文に明らかなように有徳王は破戒の悪僧と戦って覚徳比丘を助けた。王はこのとき全身に傷を受

け、命が終わったが、王はこの護法の功徳で阿閦仏の国に生まれてその仏の第一の弟子となり、覚徳比丘は第二の弟子となった。さらにその王とはいまの釈迦仏であるという。これを現在にあてはめれば、有徳王の戦いとは創価学会の折伏であり、覚徳比丘は総本山大石寺である。

そして広宣流布はこの有徳王・創価学会により成就できるのである。

三大秘法稟承事（一〇二二ページ）戒壇とは王法仏法に冥じ仏法王法に合して王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて有徳王・覚徳比丘の其の乃往を末法濁悪の未来に移さん時勅宣並に御教書を申し下して霊山浄土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か。

【異体同心】

異体同心の心は観心の心であり、信心の心である。体は異なっても信心が同じであり、観心が同じであることを意味するのである。

このように信心が同じであるがゆえに、互いにそねむことなく、憎むことなく、団結して御本尊に仕えたてまつる、この精神を和合僧の精神という。

異体同心ということを、あやまって、同じ宗門であるから二人の体が同じであり、仲良くしなければならないなどというのは、まったく浅薄な観察である。また、いたずらに世法のことに用いて「異体同心であるから金をかせ」とか「商売の手伝いをせよ」などというのは、あやまった精神である。異体同心とは、互いの信心

を励ます言葉として用いるべきである。

また御書には、異体同心にして南無妙法蓮華経と唱えるのが信心であり、広宣流布の大願もかなうのであると仰せである。

創価学会は異体同心なればこそ、広宣流布の大願を成し遂げることができるのである。

生死一大事血脈抄（一三三七㌻）総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する処の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か、剰え日蓮が弟子の中に異体異心の者之有れば例せば城者として城を破るが如し。

異体同心事（一四六三㌻）はわき房さど房等の事あつわらの者どもの御心ざし異体同心なれば万事を成し同体異心なれば諸事叶う事なしと申す事は外典三千余巻に定りて候、殷の紂王は七十万騎なれども同体異心なればいくさにまけぬ、周の武王は八百人なれども異体同心なればかちぬ、一人の心なれども二つの心あれば其の心たがいて成ずる事なし、百人・千人なれども一つ心なれば必ず事を成ず、日本国の人人は多人なれども体同異心なれば諸事成ぜん事かたし、日蓮が一類は異体同心なれば人人すくなく候へども大事を成じて・一定法華経ひろまりなんと覚へ候、悪は多けれども一善にかつ事なし、譬へば多くの火あつまれども一水にはきゑぬ、此の一門も又かくのごとし。

諸法実相抄（一三六〇㌻）いかにも今度・信心をいたして法華経の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給うべし、日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか。

【如説修行】

仏の教説のとおりに修行することで、如説修行によってのみ、真の成仏をはかれるのである。如説修行抄には、末法における如説修行の姿を、詳しく教示されている。いま、われわれにとっては、末法の御本仏日蓮大聖人の仰せどおり、三大秘法の大御本尊を信じて折伏を行ずる以外に如説修行はない。

如説修行抄（五〇二㌻）　問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べきや、答えて云く……此等のを約きての明鏡を本として一分もたがえず唯有一乗法と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり。

如説修行抄（五〇三㌻）　凡仏法を修行せん者は摂折二門を知る可きなり一切の経論此の二を出でざるなり……末法の始めの五百年には純円・一実の法華経のみ広宣流布の時なり……末法・今の時・法華経の折伏の修行をば誰か経文の如く行じ給へしぞ、誰人にても坐せ諸経は無得道・堕地獄の根源・法華経独り成仏の法なりと音も惜まずよばはり給いて諸宗の人法共に折伏して御覧ぜよ三類の強敵来らん事疑い無し。

末法における如説修行の者とは、日蓮大聖人の弟子檀那であり、現在は日蓮正宗創価学会員以外にはないことを知るべきである。また如説修行する者は必ず三類の強敵があるのである。三類の強敵を一身に受けられた日蓮大聖人こそ、如説修行の法華経の行者であり、御本仏なることが明らかにわかるのである。

しかして、現在においては、創価学会こそ、この原理にかなう如説修行のものといえるのである。

如説修行抄（五〇四ページ）　如説修行の法華経の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ、されば釈尊御入滅の後二千余年が間に如説修行の行者は釈尊・天台・伝教の三人は・さてをき候ぬ、末法に入っては日蓮並びに弟子檀那等是なり。

日寛上人の如説修行抄筆記には、詳しく解釈が述べられているが、その一部をとって述べてみよう。

如説修行は内外大小に通じ、人法相対に約し、師弟相対に約し、自行化他に約せるが、如説修行抄の意は、大小・本迹・観心のなかには、本門観心の如説修行である。また末法今時の如説修行の師弟、人法である。さらに身口意の三業で折伏を行ずる人こそ、真の如説修行の人である。（富要四巻四〇七ページ以下参照）

【自行化他】

自行化他には、修行に約する場合と、法体に約する場合の二つがある。

まず修行に約する場合についていえば、自行とは自分が行法の利益をうけるための修行をいう。すなわち末法今時においては、朝晩の勤行、唱題などが、この自行にあたる。また化他とは他人に仏法の利益をうけさせるための化導をいい、末法今時においては折伏行や信心指導などが、この化他にあたる。

しかして、南無妙法蓮華経の題目についていうならば、正法・像法時代の題目は、天台大師や伝教大師が、ただ自行のために南無妙法蓮華経という理行の題目を唱えた。しかるに末法においては、御本仏日蓮大聖人が自行化他のために、事行の題目を唱えられ、われわれもまた同じく自行化他の題目を唱えているのである。

三大秘法禀承事（一〇二二ページ）　題目とは二の意有り所謂正像と末法となり、正法には天親菩薩・竜樹菩薩・題目を唱えさせ給いしかども自行ばかりにしてさて止ぬ、像法に南岳天台等亦南無妙法蓮華経と唱え給いて自行の為にして広く他の為に説かず是れ理行の題目なり、末法に入て今日蓮が唱る所の題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華経なり名体宗用教の五重玄の五字なり。

次に自行化他を法体に約す場合がある。自行とは、究竟真実の随自意の妙法である。化他とは九界の衆生を導くために方便をおびている随他意の教えである。釈迦仏法においては、自行の法とは法華経であり、化他の法とは爾前の諸経である。また日蓮大聖人の仏法においては、本地自行の法とは、三大秘法の文底下種仏法であり、垂迹化他の法とは五時八教の釈迦仏法である。

三世諸仏総勘文教相廃立（五五八ページ）　夫れ一代聖教とは総べて五十年の説教なり是を一切経とは言うなり、此れを分ちて二と為す・一には化他・二には自行なり、一には化他の経とは法華経より前の四十二年の間説き給える諸の経教なり此れをば権教と云い亦は方便と名く……二に自行の法とは是れ法華経八箇年の説なり。

【聞法下種と発心下種】

発心下種とは、折伏をして、相手が大御本尊を受持したことである。聞法下種とは、折伏をしたが、いまだ大御本尊を受持しないことをいう。しかし、発心下種も聞法下種も、共に末法の折伏行であり、そのうける功

徳は同じである。

聞法下種においては、そのときは御本尊を受持できなくても、その人の心田に仏種を植えたのであるから、仏法上、必ず、その人は、いつかは信心をすることに決定されているのである。

観心本尊抄文段（富要四巻二八〇ページ）　在世の下種とは唯是れ発心下種にして、是れ聞法下種に非るなり、当に知るべし、下種に即ち二義有りいわゆる聞法と発心となり、妙楽云く聞法を種と為し発心を芽と為すと是れなり、此に三重の秘伝有り、又各通局有るなり、謂く一には権実相対、証真玄の私記第一に云く、最初聞法は必ず是れ円教若し発心を論ぜば大小定まらず等云云、文の意は最初の聞法下種は必ず是れ法華の円教なり云云、妙楽云く、余経を以て種と為さずとは是れなり、即ち是れ今家所立の第一の教相なり、二には本迹相対、謂く最初聞法必ず是れ本門なり、若し発心を論ぜば、権迹不定なり云云、即ち是れ今家所立の第二の教相なり、三には種脱相対、謂く最初聞法必ず是れ文底、若し発心を論ぜば迹本不定なり、即ち是れ今家所立の第三の教相なり、問う最初聞法必ず是れ文底の証文如何、答う宗祖の云く、一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底に秘し沈め給へり、一念三千の仏種に非ざれば有名無実なり、三世十方の諸仏は必ず妙法蓮華経の五字を種として仏に成り給へり、あるいは、一乗を演説すれども妙法蓮華経の五字を以て下種と為すべき由来を知らざるか等云云。

かくのごとく文底下種の仏法からみれば、久遠元初において、すべて南無妙法蓮華経の五字七字によって聞法下種をうけているのである。

末法今世に折伏をうけて信心する者は、久遠元初の聞法下種を忘れていない人であり、これすなわち発心下

種となるのである。折伏をうけても、信心できない者は、久遠元初の聞法下種を忘れている人であり、再び聞法下種をうけるわけである。

【以信代慧】

法華経方便品第二で諸法実相、一念三千の説法を聞き、舎利弗はまず開悟した。智慧第一といわれた舎利弗も、仏説を信じてこそ初めて悟ることができたのであり、自分の智慧ではいくら精進し修行に励んでも、ついに悟ることはできなかった。このことを譬喩品第三には次のようにいっている。

「汝舎利弗すら尚此の経に於いては信を以って入ることを得たり……己が智分に非ず」

舎利弗尊者すら、なおこのとおりであり、まして末法のわれわれ衆生が自分の智慧をもって悟りうるわけがない。ゆえに日蓮大聖人は「信を以て慧に代う」と次のように仰せられ、まったく智慧のない迷いの凡夫であっても、信心一途で即身成仏するむねをお示しになっている。

四信五品抄(三三九ページ)　慧又堪ざれば信を以て慧に代え・信の一字を詮と為す、不信は一闡提謗法の因・信は慧の因・名字即の位なり。

法蓮抄(一〇四五ページ)　信なくして此の経を行ぜんは手なくして宝山に入り足なくして千里の道を企つるが如し。

当体義抄(五一八ページ)　日蓮が一門は正直に権教の邪法・邪師の邪義を捨てて正直に正法・正師の正義を信ず

る故に当体蓮華を証得して常寂光の当体の妙理を顕す事は本門寿量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華経と唱うるが故なり。

本因妙抄(八七二ページ)　信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華経と唱え奉れば凡身即仏身なり。

【随方毘尼】

随方とは、その地方の風俗習慣に随うということである。毘尼とは戒と釈す。すなわち大綱、精神において仏教に違わない限り、その形式などは、その国情または地方のしきたりに随ってもよいという意である。

月水御書(一二〇二ページ)　委細に経論を勘へ見るに仏法の中に随方毘尼と申す戒の法門は是に当れり、此の戒の心はいたう事かけざる事をば少少仏教にたがふとも其の国の風俗に違うべからざるよし仏一つの戒を説き給へり。

【善知識・悪知識】

自分の周囲の人々のなかには善知識と悪知識がある。人を仏道修行に導き、仏道を成じさせる者を善知識といい、正法の信仰を妨げ悪道に落とす者を悪知識という。善知識にあえば善根を積んで幸福になり、成仏することができる。悪知識にあえば幸福を取りにがし、不幸に陥り地獄に落ちる。

開目抄上（二〇八ページ）善知識と申すは一向・師にもあらず一向・弟子にもあらずある事なり。

三三蔵祈雨事（一四六八ページ）されば仏になるみちは善知識にすぎず、わが智慧なにかせん、ただあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば善知識たいせちなり。

開目抄下（二三二ページ）久遠大通の者の三五の塵をふる悪知識に値うゆへなり。

すなわち、われわれ末法の衆生にとって第一の善知識は、御本仏日蓮大聖人の仏法を、共に信仰し、共に折伏に励む者である。

開目抄に仰せられる悪知識とは三千塵点劫、あるいは五百塵点劫の昔に法華経を聴聞したが、権大乗や小乗を説く悪知識にあって退転し、成仏することができなかったことを仰せられているのである。

次にまた日蓮大聖人は、正法修行者に迫害を加える者を善知識なりと仰せられている。迫害する者は悪知識であるが、そのような悪人があるために正法修行者は、無量の迫害を受けることによって、過去世の謗法の罪障を消滅し、この世で仏道を成ずることができるとの仰せである。

種種御振舞御書（九一七ページ）釈迦如来の御ためには提婆達多こそ第一の善知識なれ、今の世間を見るに人をよくなすものはかたうどよりも強敵が人をば・よくなしけるなり……日蓮が仏にならん第一のかたうどは景信・法師には良観・道隆・道阿弥陀仏と平左衛門尉・守殿ましまさずんば争か法華経の行者とはなるべきと悦ぶ。

すなわち世間の例をみても、強敵を倒さんがために、自らの実力を養い、敵国の侵略をうけて国内が一致団結して強力となる。それと同じように、日蓮大聖人を迫害した地頭や邪宗の僧侶や鎌倉幕府は善知識であると

仰せられているのである。われわれも迫害されてこそ、初めて正法の信者であり、現世に成仏がかなうと知るべきである。

【世法と仏法】

世法と仏法とは一体である。

ゆえに「開目抄」には世法を深く知れば仏法であるとし、「観心本尊抄」には御本尊を信ずる者は世法をうると明かし、また「諸経と法華経と難易の事」には、仏法は体のごとく世法は影のごとき関係にあるから、生活に罰が続出することは、すなわち自分の信心に狂いがあることを明かし、また「檀越某御返事」にはみやづかへ（仕官）を法華経とおぼしめして励みなさいと仰せられている。

開目抄上（一八七㌻）天台云く「金光明経に云く一切世間所有の善論皆此の経に因る、若し深く世法を識れば即ち是れ仏法なり」等云云。

観心本尊抄（二五四㌻）天晴れぬれば地明かなり法華を識る者は世法を得可きか。

諸経と法華経と難易の事（九九二㌻）仏法やうやく顚倒しければ世間も又濁乱せり、仏法は体のごとし世間はかげのごとし体曲れば影ななめなり。

檀越某御返事（一二九五㌻）御みやづかい（仕官）を法華経とをぼしめせ、「一切世間の治生産業は皆実相と相違背せず」とは此れなり。

【勇猛精進】

法華経方便品第二　尽くして諸仏の無量の道法を行じ、勇猛精進して、名称普く聞こえたまえり。

勇猛精進とは、勇ましく元気に仏道修行を励んでいくことであるが、文上の釈迦仏法では歴劫修行といって、長くいろいろの修行を積んで初めて成仏できる。しかし、日蓮大聖人の文底下種仏法では、ただ、たゆまず御本尊に題目を唱え折伏に励むことに尽きるのである。日寛上人の依義判文抄には、法華経宝塔品の文を引いて、勇猛精進をもって題目となすゆえんが、詳しく説かれている。いま、その一部を述べてみよう。

宝塔品第十一　此の経は持ち難し若し暫くも持つ者は我即ち歓喜す諸仏も亦然なり、是の如きの人は諸仏の歎る所是れ則ち勇猛なり是れ則ち精進なり。

この文において「是れ則ち勇猛なり是れ則ち精進なり」の文は、能持即題目なるを明かしている。勇猛精進をもって題目となすとはいかなるわけか。

本門の題目には信心・唱題の二意を具している。勇猛精進は信心・唱題のゆえに本門の題目となすのである。勇猛とは信心である。釈にいわく「敢で為すを勇と言い智を竭すを猛と言う」すなわち勇敢にして信力を励み竭すのを勇猛と名づけるのである。精進とは唱題の行である。釈にいわく「無雑の故に精・無間の故に進」と。法華文句記にいわく「勇猛精進とは二意有り一には期心在る有り二には身心倶に勤む」と。期心有在は御本尊を信ずるときをいうから信心であり、身心倶に勤むというのは唱題である。

【諸天の加護】

法華経には諸天善神が必ず法華経の行者を守護すると説かれている。

安楽行品　諸天昼夜に、常に法の為の故に、而も之を衛護す。

安楽行品　天の諸の童子以って給使を為さん、刀杖も加えず、毒も害すること能わじ。

そのほか総付属の段においては諸天が法華経の付属を受け、また陀羅尼品には鬼子母神・十羅刹女その他諸天善神が法華経の行者を守護すると誓っている。

ゆえに日蓮大聖人は諸御書に、日蓮の大難を見て諸天善神は何をしているのか、仏前の誓いを忘れたのか、急いで飛んできて日蓮の難を救い、仏前の誓いを果たせよ。もしそうしないならば、仏罰をうけて天界の位を奪われるのみか、無間地獄へ落ちなければならないぞ、と警告されている。このように、われわれも必ず諸天の加護をうけているのである。

しかし、その半面、日蓮大聖人も、ご在世中は数々の大難をうけられた。また、われわれも常に罪障や迫害に苦しみ、熱心に折伏すればするほどこれが増してくる。ここに諸天の加護があるかないかの問題が起こる。眼前の大迫害の嵐のうちにあって、なぜ諸天加護の功力が、すぐ現われないかについて、日蓮大聖人は次のように仰せられている。

富木殿御返事（九六二ページ）　今に天の加護を蒙らざるは一には諸天善神此の悪国を去る故か、二には善神法味

を味わざる故に威光勢力無きか、三には大悪鬼三類の心中に入り梵天帝釈も力及ばざるか。

以上三箇の理由のうち、第一は立正安国論等に詳しく、第二は諫暁八幡抄等に詳しく、第三は開目抄等に詳細に明かされている。

また開目抄下（二三〇ページ）には現罰の有無について、次のように仰せられている。第一に、前世に法華誹謗の罪なき行者を迫害すれば、たちまち現罰をうける。第二に、次の世に無間地獄へ落つべき者は現世に、いかに法華の行者を迫害しても現罰はない。第三に、はなはだしい悪人でなければ現世に謗法してもすぐ後悔して正法に帰依することができる。第四に、諸天善神が謗法の悪国を捨て去ったがゆえに現罰がない。

その結論として、

開目抄下（二三二ページ）詮ずるところは天もすて給え諸難にもあえ身命を期とせん。

との大確信に立つ時には、一切の留難も水泡となり、現身に即身成仏の金剛不壊の境地を感得するのである。

【魔の通力】

魔とは梵語であり、障礙、破壊、奪功徳などと訳す。正法を持つ者の信心を妨害したり、死魔、病魔などは人命を害し、あるいは病を起こす働きをなし、天子魔は権力者や父母の姿をかりて信心を弾圧するなど、すべて仏と反対の働きをする。魔には、三魔、四魔、十魔などがあり、仏身や菩薩身や天界の姿を現じている。魔が人を不幸にしようとする、いちじるしい働きを魔の通力という。

通力とは自在然礙の働きをいい、通または神力ともいう。通力には、爾前教、法華経を修行することによって、いろいろな種類があるが、おもな四種を示せば次のごとくである。

第一に生得通とは、業得通ともいい、鬼畜などの生まれながらにもっている業通である。

第二に報得通とは、諸天の示す通である。

第三に修得通とは、外道や二乗等が修行して得る通で、外道は五通、二乗以上は六通を得るとされている。六通とは、天眼通、天耳通、他心通、宿命通、如意身通、漏尽通である。

第四に法華経迹門の神通妙、本門の本神通妙は、仏の通力である。如来寿量品の如来秘密神通之力とは、文底下種仏法から拝すれば、御本仏の最高の通力である。これは、あらゆる人を御本尊の功徳によって絶対的幸福に導くお力である。

仏と魔は同所にすむといわれるとおり、魔は仏に似た姿をもって人を不幸にする働きを示す。信心強盛に魔を魔と見破って信心に励めば、必ず魔の通力は粉砕され、一段と境涯を開いていけるのである。仏の神通力と魔の通力は厳に区別していかなければならない。

最蓮房御返事（一三四〇ページ）予日本の体を見るに第六天の魔王智者の身に入りて正師を邪師となし善師を悪師となす、経に「悪鬼入其身」とは是なり、日蓮智者に非ずと雖も第六天の魔王・我が身に入らんとするに兼ての用心深ければ身によせつけず、故に天魔力及ばずして・王臣を始として良観等の愚癡の法師原に取り付いて日蓮をあだむなり。

唱法華題目抄（一六ページ）通力をもて智者愚者をばしるべからざるか、唯仏の遺言の如く一向に権経を弘めて

実経をつゐに弘めざる人師は権経に宿習ありて実経に入らざらん者は或は魔にたぼらかされて通を現ずるか、但し法門をもて邪正をただすべし利根と通力とにはよるべからず。

題目弥陀名号勝劣事（一一四ページ）先ず通力ある者を信ぜば外道天魔を信ずべきか或る外道は大海を吸干し或る外道は恒河を十二年まで耳に湛えたり第六天の魔王は三十二相を具足して仏身を現ず、阿難尊者・猶魔と仏とを弁へず善導・法然が通力いみじしというとも天魔外道には勝れず、其の上仏の最後の禁しめに通を本とすべからずと見えたり。

【供養】

供養とは、供給奉養の義である。仏や法に対して報恩のために、真心を尽くして奉ずるのを供養という。

供養の種類は古来、多く説かれている。すなわち二種供養、事理供養、三種供養、三業供養、四事供養、四種供養、五種供養、六種供養、十種供養などがあるが、いま二種供養と事理供養を取り上げてみよう。

二種供養とは、第一に財供養であり、第二に法供養である。財供養とは末法の御本仏日蓮大聖人ご在世中に佐渡や身延等において、身命の危険をおかして阿仏房や南条時光殿などが食物、衣類等を奉ったのがこれにあたる。いまでは広宣流布の根本道場たる正本堂、大客殿、大講堂、奉安殿等の建設のために創価学会員が真心の醵金をした等が、この供養である。しかして、財のなかで最高の物はわが生命であるがゆえに、生命を捧げて供養するのが最高の供養である。

第二に法供養とは、仏の所説のごとく正法を弘め民衆救済の一助をになうのが、これである。いま末法の時にかなった法供養とは、ただ折伏の二字に尽きる。すなわち心なき人々の悪口や誹謗のなかを忍辱の鎧を着て、折伏行にひたすら励んでいる創価学会員こそ、まことの法供養を行なっているといえよう。

財供養と法供養を比べてみれば、もちろん法供養の方がすぐれているのである。

阿仏房御書（一三〇四ページ）抑宝塔の御供養の物・銭一貫文・白米・しなじなをくり物たしかに・うけとり候い了んぬ。

本尊供養御書（一五三六ページ）法華経御本尊御供養の御僧膳料の米一駄・蹲鴟一駄・送り給び候い畢んぬ。

この御文はとりもなおさず財供養の文であり、類文はたくさんある。

「供養する事有らん者は福十号に過ぐ」との文は、法供養の文であり、大御本尊を賛嘆唱題し、折伏を行ずる者は、仏の十号に過ぐる大功徳、大福運ありとの文証である。また「釈迦仏に財宝の限りをつくして供養するよりも末法の法華経の行者に供養する方が、その功徳百千万倍す」との御文が多いが、これこそ末法の法華経の行者たる日蓮大聖人こそ御本仏であられ、釈迦仏は迹仏にすぎないことを表わしているものである。

次に事理の供養とは、

白米一俵御書（一五九六ページ）ただし仏になり候事は凡夫は志ざしと申す文字を心へて仏になり候なり、志ざしと申すは・なに事ぞと委細にかんがへて候へば・観心の法門なり、観心の法門と申すは・なに事ぞとたづね候へば、ただ一つきて候衣を法華経にまいらせ候が・身のかわをわぐにて候ぞ、うへたるよに・これはなしては・けうの命をつぐべき物もなきに・ただひとつ候ごれうを仏にまいらせ候が・身命を仏にまいらせ候

にて候ぞ、これは薬王のひぢ（臂）をやき・雪山童子の身を鬼にたびて候にも・あい（劣）をとらぬ功徳にて候へば・聖人の御ためには事供養やう・凡夫のためには理供養やう・止観の第七の観心の檀ばら（波羅）蜜と申す法門なり。すなわち一往は、昔の聖人たちが生命を投げ出した供養が事供養であり、凡夫の供養は理供養となるが、再往は、御本尊に対する一切の供養こそ事供養となるのである。

【臨終の相】

この世における善業・悪業の総決算が臨終であり、また来世への第一歩ともなる。ゆえに臨終の相は、最も大切であり、仏説のように色白く安らかに題目を唱えて、この世を終わるように念願すべきである。

妙法尼御前御返事（一四〇四ページ）　日蓮幼少の時より仏法を学び候しが……先臨終の事を習うて後に他事を習うべしと思いて……大論に云く「赤白端正なる者は天上を得る」云云、天台大師御臨終の記に云く色白し。千日尼御前御返事（一三一六ページ）　人は臨終の時地獄に堕つる者は黒色となる上其の身重き事千引の石の如し善人は設ひ七尺八尺の女人なれども色黒き者なれども臨終に色変じて白色となる又軽き事鵝毛の如し軟なる事兜羅綿の如し。

教行証御書（一二七九ページ）　一切は現証には如かず善無畏・一行が横難横死・弘法・慈覚が死去の有様・実に正法の行者是くの如くに有るべく候や……それほどに浦山敷もなき死去にて候ぞやと・和らかに又強く両眼を細めに見・顔貌に色を調へて閑に言上すべし。

【女人成仏】

爾前経では女人の不成仏を説き、法華経にいたって初めて女人も成仏を許され、しかも提婆品では竜女の即身成仏を現証で示されている。

女人成仏抄（四七二ページ）には華厳経の「女人は地獄の使なり……外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」等の文を引き、また五障・三従をあげて、外典にも爾前経にも女人のきらわれていることを示されている。しかし竜女の即身成仏を現証として、法華経の功力によれば、一切の女人が即身成仏すべきことをお示しになっている。

このほか法華経題目抄（九四六ページ）をはじめ、数多くのお手紙にも、女人の成仏は法華にかぎることを示されている。ゆえに末法においては女性の幸福になる唯一の道は、大御本尊を絶対に信じたてまつる以外にないことは明らかである。なお女人の不幸の原因となる五障三従は次のとおりである。

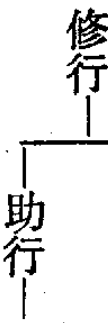
五障……女人は次の五になることができない。一に梵天王・二に帝釈・三に魔王・四に転輪聖王・五に仏身。

三従……少時には父母に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従う。

開目抄下（二二三ページ）竜女が成仏此れ一人にはあらず一切の女人の成仏をあらはす、法華已前の諸の小乗教には女人の成仏をゆるさず、諸の大乗経には成仏・往生をゆるすやうなれども或は改転の成仏にして一念三千の成仏にあらざれば有名無実の成仏往生なり、挙一例諸と申して竜女が成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし。

【方便品・寿量品を読誦する意味】

われわれの信仰する御本尊は三大秘法の大御本尊であらせられ、寿量品文底下種の御本尊である。さて、しからば、どのようにして修行するかとなれば、修行には正助があり、正行は題目を唱えること、助行には方便品、寿量品を読誦することである。また助行においても寿量品を正とし、方便品を傍とする。あたかも正行は米飯にあたり、助行は、ミソ汁や漬け物が米飯の味を助けるのと同様である。



以上の理由を日寛上人は当流行事抄に詳しくお述べになっている。

方便品

方便品を読誦するのは一に所破のため、二には借文のためである。

しかも所破に二意を含んでいる。すなわち、一には体外の迹門であり、これは今日始成正覚の仏の所証の法であり「在々処々に迹門を捨てよ」と仰せられた迹門である。二には体内の迹門であり、これは従本垂迹の仏の所証の法であり、読誦の意は、まさにここにあるのである。

また借文の辺も両意を含んでいる。一には久遠本果の所証の法を顕わすのであり、通得引用多くこの意によるのである。二には遠く久遠名字の所証を顕わすのであり、読誦の意はここにあるのである。

寿量品

寿量品を読誦するのは一に所破のため、二には所用のためである。すなわち、同じ寿量品の一文であっても、その顕本には、文上顕本・文底顕本の両義があり、文上は五百塵点劫成道、文底は久遠元初の本仏をさしている。しかしてその文上の寿量品にも、また体内・体外があり、体外は文底下種御本尊の建立以前、体内は御本尊を修行するために用いる寿量品となる。しかしてただ一度寿量品を読誦しながらも、その文上体内の辺は所破となり、文底の辺は所用となるのである。

なお方便品の両義は「唯仏与仏乃能究尽」をあげて、寿量品の両義は「我実成仏已来」の文をあげて説明されているから、当流行事抄を詳しく拝すべきである。

月水御書（一二〇一ページ）　法華経は何れの品も先に申しつる様に愚かならねども殊に二十八品の中に勝れて・めでたきは方便品と寿量品にて侍り、余品は皆枝葉にて候なり、されば常の御所作には方便品の長行と寿量品の長行とを習い読ませ給い候へ。

四菩薩造立抄（九八九ページ）　日蓮が弟子と云って法華経を修行せん人人は日蓮が如くにし候へ。

第六編　仏教史

【釈尊の一生】

インド生誕の釈尊は、いまをさる三千年前、当時インド一帯に勢力をはっていたバラモンの哲学を打ち破り、永遠の生命哲学を説き、八万法蔵といわれるおびただしい法門を残し、八十歳で寂滅涅槃したのである。

釈尊は迦毘羅衛城に、国王浄飯王を父とし、摩耶夫人を母として誕生した。幼名を悉達多といい、母の死後（太子出生後七日にして逝去したという）叔母の手に育てられた。

釈尊の幼名ゴータマ・シッダルタは釈迦牟尼世尊ともいわれるが、釈迦とは種族の名であり、牟尼とは聖者の意で、釈迦族出身の聖者を意味する。釈迦族は北インドのヒマラヤ山麓に小国をつくり、貴族的共和政治を行なっていたという。まず十人の長を選び、さらにその中から一人の国王を選んで政治を行なっていた。

長ずるにおよんで釈尊は、将来の国王になるための教育を、文武両面にわたってうけ、また耶輸陀羅女を妃として、一子・羅睺羅をもうけたこの羅睺羅はのち釈尊十大弟子の一人となり、密行第一といわれた人である。

釈尊は十九歳の時、王宮の生活を捨て、出離生死の道を求めて出家した。多くのバラモンを歴訪し、修行を積んだが、真の解脱の道でないことを知り、自ら真の道を求めて難行苦行を重ねた。この苦行は十二年（七年との説もある）にわたったともいわれるが、これもまた真の法でないことを知り、苦行を捨てて、尼連禅河に入り、沐浴して牧女の捧げる乳を飲み、心身さわやかとなった。

ついで仏陀伽耶の菩提樹下の金剛宝座に座し、沈思黙想、よく魔を降して大悟を開いたのである。悟りを開

いた釈尊は、正覚を成じたその座で華厳経を説き、波羅奈国、鹿野苑へ行って憍陳如等の五人を済度した。以後約五十年間、八十歳にして拘戸那城外の沙羅林中で寂滅するまで、法輪を転じ、不幸な民衆を化導した。王舎城においては、頻婆沙羅王をはじめ、宮廷の人々を教化し、故郷においては、父王はじめ親類の人々を化導したのである。釈尊の従弟・阿羅や、一子・羅睺羅も帰依し、舎衛城の富豪・須達長者は、有名な祇園精舎を供養した。もちろん釈尊に敵対する者も現われた。九横の大難と呼ばれるなかで、阿難の兄・提婆達多が憍慢の心を起こし、摩竭陀国の阿闍世太子と結託して、釈尊を迫害するという幾多の事件もあった。釈尊はこれらの大難を少しも恐れず説法を続け、華厳、阿含、方等、般若の経々を説き、最後に出世の本懐たる法華経を説いたのである。（五時・八教の項参照）

釈尊入滅の年代については数十種類の説があるが、東洋古来の説は、周の昭王二十四年（前一〇二九年）四月八日生誕、同穆王五十二年二月十五日、すなわち西紀前九四九年入滅と定め、「周書異記」にそれが出ている。天台、伝教もこれを基準とし、日蓮大聖人もお用いになっていたことは、開目抄によって明らかである。

【付法蔵の二十四人】

釈尊に順次嫡々付嘱され、正法時代に出現し、仏法を説いた二十四人の伝灯者である。付法蔵経（付法蔵伝・付法蔵因縁伝）六巻に説かれている。これら付法蔵の導師は正法時代の四依の菩薩として、おのおの、その時代相応の教法を弘めた死身弘法の行者である。法蔵とは仏説の結集されたものをいい、それを次々に付嘱した

ので付法蔵という。

摩訶迦葉・阿難・商那和修・優婆崛多・提多迦・弥遮迦・仏陀難提・仏駄密多・脇比丘・富那奢・馬鳴・毘羅・竜樹・迦那提婆・羅睺羅多・僧伽難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・婆修盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子。これに阿難から旁出した摩田提を入れて二十四人といい（阿育大王経）、また二十五人とは釈迦仏を入れた場合をいう。摩訶迦葉が仏の滅後、付嘱を受け、付法蔵第五の提多迦まで各二十年、以上百年の間は但小乗教だけを弘通した。次の弥遮迦より付法蔵第十の富那奢等の四、五人は正法の先の五百年、解脱堅固の時代に小乗教を面として、ごくわずかの大乗教を弘通した。正法の後の五百年、禅定堅固の時代は付法蔵第十一の馬鳴より第二十三の師子まで十余人の人々であり、みなはじめは外道にはいり、次に小乗教をきわめ、後には諸大乗教を弘めて諸小乗教をさんざんに破した。（撰時抄二六〇ページ参照）

摩訶迦葉　迦葉尊者である。付法蔵の第一。釈尊十大弟子の一人で頭陀第一と称せられ頭陀修行に秀でていた。阿難と共に小乗の釈尊の脇士で、仏滅後二十年間、小乗教を弘通した。

阿難　阿難尊者。詳しくは阿難陀。付法蔵の第二。十大弟子の一人で常随給仕し多聞第一といわれ釈尊所説の経に通達していた。提婆達多の弟で釈尊の従弟。仏滅後、迦葉尊者の後を受け諸国を遊行して衆生を利益した。

摩田提　付法蔵の第三。阿難から法を受けて、師の滅後迦湿弥羅国に行って正法を弘めた。

商那和修　同じく付法蔵の第三。法を阿難から受けて摩突羅国・優留茶山に伽藍を建て、弘法に努めた。過去世に弊悪な商那衣を着た辟支仏を供養し、その聖徳に感じて「願くは、われ来世に聖師に値遇すること、

また是れに過ぎん、われ所有の諸の功徳聚、威儀法式および衣服、いま此の聖のごとくにして異なるなからしめん」と大誓願を起こしたので、母胎より一生商那衣を着たままであったという。ゆえにこの名がある。

優婆崛多　優婆毱多ともいう。付法蔵の第四。商那和修に師事して法蔵を付せられた。阿育王を化導し八万四千の塔を建てて供養せしめた。弘法が盛んであったので、仏滅後の第一人者と尊敬された。

提多迦　付法蔵の第五。優婆崛多を師として、行解おおいに努め阿羅漢果を得、三明六通を備えて教えを弘めたという。

弥遮迦　付法蔵の第六。正法の初めの五百年の間に世に出た中インドの人。初め八千の仙人の導師であって多聞博才で弁舌にすぐれていた。提多迦の教化で仏法に帰依し、その後、付法を受けて大いに仏法の宣揚に努めた。

仏陀難提　付法蔵の第七。北インドの迦摩羅国の人、弥遮迦の教化で出家し、たちまち声聞の四果を得たという。後、付法を受けて内心に大乗を奉じ外に小乗教をもって広く時の人々を導いた。

仏駄密多　または仏陀密多。付法蔵の第八。仏陀難提の弟子となり、智解がすぐれていたため付法を受け正法を弘めた。時の国王は大勢力があり勇猛博才であったが、外道を尊崇して仏法を破ろうとした。密多はその大本を倒そうとして赤旛を持って王城の前で十二年間往来し遂に王に召聞され、バラモン長者と宮殿で法論し大いにこれを破り帰依させた。王も邪心を改め正法に帰依し仏教を保護したという。密多もまた、内心には大乗教をもち、外には小乗教で衆生を化導した。

脇比丘　付法蔵の第九。迦弐志加王にもとめて仏典の第四回結集をさせた。

富那奢　付法蔵の第十。富那夜奢ともいう。インドの華氏国の人で仏滅後五百年ごろに生まれた。脇比丘から法を受け波羅奈国に行化して馬鳴尊者を化導した。

馬鳴　馬鳴菩薩。付法蔵の第十一。仏滅後六百年に出現した大乗論師である。智慧絶倫であったため、はじめは大憍慢を起こし衆生を軽賤していた。後に富那奢と論義し屈伏して弟子となった。馬鳴は深奥の法門を悟り法を付されてから、大いに邪見を破折した。はじめ華氏城に遊化し、兵乱の後、罽賓吒王の保護のもと無量億人の人々に大いに施益し度脱させたという。過去世に白馬を鳴かせて仏法を守ったゆえに馬鳴の名があるという（曾谷殿御返事一〇六一ページ参照）。著書には「大乗起信論」一巻、「大宗地玄文本論」二十巻、「仏所行讃」五巻等がある。

毘羅　毘羅尊者。詳しくは迦毘摩羅という。付法蔵の第十二。摩竭陀国の人で、はじめ外道であり三千の弟子をもっていたとき、神通力を用いて馬鳴を陥れようとして、かえって論破されて弟子となった。馬鳴から滅後の付法を受け南インドさらに西インド一帯を化導し、法を竜樹に付した。著書には「無我論」一百偈があり、その外道を破折している様子は、金剛石が一切のものを破るようであるといわれているが、著書は伝わっていない。

竜樹　竜樹菩薩。竜猛ともいう。付法蔵の第十三。仏滅後七百年ごろ、南インドに出て大いに大乗教義を弘めた大論師である。（別項参照）

迦那提婆　提婆菩薩。付法蔵の第十四。南インドのバラモン族の出である。提婆は梵語で、天と訳す。迦那は片目の義。一眼であったからこのようにいわれた。一眼を天神にほどこしたともいわれ、また一女人に

与えて不浄を悟らせたともいわれる。竜樹菩薩のもとで出家し各国を遊化して広く衆生を救った。あるとき南インドの王が外道に帰依しているのを救おうとして、王の前であらゆる外道を破折した。ときに一外道の無知、凶悪な弟子が、師が屈伏したのを恥じて提婆に危害を加えた。しかるに命尽きる前に、かえってその加害者を救ったという。

羅睺羅多　羅睺尊者。羅睺または羅睺羅ともいう。付法蔵の第十五。インドの迦毘羅国の人で浄徳長者の子、生来聡明であった。提婆菩薩について出家し、大いに正法を弘めた。

僧佉難提　付法蔵の第十六。僧佉難提を訳して衆河という。室羅筏城の宝荘厳王の子で、法を羅睺羅多より受け、化導が終わってから法を僧伽耶奢に伝えた。

僧伽耶奢　訳して衆称という。付法蔵の第十七。摩竭陀国の人。仏法の正統を伝えて教化盛んであった。滅する前に法を鳩摩羅駄に伝えた。

鳩摩羅駄　訳して童受という。付法蔵の第十八。菩薩道を行じて智弁海のように広大であったので美名童子と称された。出家後、若くして、ことごとく解了し、頑愚な一国を化導したが、全部の人が信受しなかったので、自分の前を鉄馬万騎をよぎらせ一見しただけで間違いなく人名、馬色、衣服の姿を説明したので、人々は、ぜんぶ信伏したという。多くの書を著わして各国を遊化した。

闍夜那　付法蔵の第十九。鳩摩羅駄の弟子で、盛んに正法を弘通した。

婆修盤陀　付法蔵第二十。盤陀ともいう。博識で、智慧すぐれ、弁才に富んでいて、広く衆生を救った。

摩奴羅　付法蔵の第二十一。インドの那提国王の子で、南インドで正法を弘めた。

鶴勒夜那　または鶴勒夜奢。略して鶴勒。付法蔵の二十二。インドのバラモンの家に生まれた。出家し、摩奴羅に会って法を受け、中インドで仏法を弘めた。

師子　師子尊者または師子比丘といわれる。付法蔵の第二十三。最後の伝灯者である。釈尊滅後千二百年前後、中インドに生まれて鶴勒那夜から法を受けた。後に罽賓国に遊化して衆生を化導し仏法を大いに宣揚した。

この国の外道二人がこれを嫉んで、相謀って乱を起こし、仏弟子の姿をして王宮に潜入し、わざわいをなして逃げ去った。

檀弥羅王は誤解し、怒って師子尊者の頸を切ったが、血が出ずに白乳が湧くように出て、檀弥羅王の右臂が刀を持ったまま地に落ちて七日の後、命が終わったという。

【経典の結集】

仏教典の結集については、歴史上いろいろと異論はあるが、次のように行なわれたことが記録されている。

1　第一回結集

釈尊は生前、折にふれ機に応じて説法を行なったが、弟子たちはそれを記憶していただけで、筆記されることはなかった。滅後第一回の結集は、阿闍世王の外護の下に、摩竭陀国王舎城の南、畢波羅窟で、大迦葉が中心となって行なわれた。このとき千人の比丘が集まったと大論には述べられている（小乗の多くは五百人の長

老比丘という）。阿難は経蔵を、優波利は律蔵を結集したという。この窟内結集に参加しなかった者は、畢波羅窟より西約六*の地で、経、律、論、雑集、梵咒の五蔵を結集したと伝えられる。すでに教団のなかには、保守的な長老たちに対して、教法や戒律の固定化を避け、釈尊の真の精神に生きようとした進歩的な流れがみられていた。

2　第二回結集

滅後百年ごろ、耶舎陀阿羅漢などの七百人が毘舎離において、三蔵の結集を行なったという。当時、跋闍子比丘は戒律に関する十の新説（十事）を主張したので、上座部の長老たちはこれに対し十事非法を決議した。ここに主として律蔵を中心として結集を行ない教団の統制を図ろうとした。

3　第三回結集

滅後二百年ごろ、阿育王の外護の下に、一千人の比丘が会し、帝須を上座として結集を行なったという。当時は外道の徒が衣食のために仏門にはいる者が多く、如来の聖教が正しく行なわれがたくなったので、この結集が行なわれたという。しかし、馬鳴・竜樹等は、阿育王は仏滅後百年に出たといっている。

4　第四回結集

仏滅後四百年ごろ、迦弐志加王が出て、北方インドに侵入し、この熱心な仏教信者であった王の保護の下に、迦湿弥羅国において、脇尊者の司会によって五百人の僧が大毘婆沙論の結集を行なったという。ただし、これは四百年とする説と、五百年とする説、あるいは七百年とする説等がある。

以上のようにして経典結集の大事業は進められたのであるが、年代については釈尊滅後の年代が定まらない

ように、不確定のものが多い。しかしながら、仏教の興隆と仏典の結集が、多くの聖僧と強大な武力権力を背景として行なわれたことは疑う余地がない。なかでも、阿育王は深く仏教に帰依し、百二十余人の長老たちを各地に派遣して、仏教の流布にあたったことは特記すべきことである。

【中国への仏教伝来】

インドに発生した仏教は釈尊の滅後千十五年を経て中国に伝えられた。すなわち後漢の明帝が金人の夢を見て、使節を大月氏（いまのアフガニスタンから北インド地方）につかわし、迦葉摩騰（摩騰迦）と竺法蘭が永平十年（西紀六七年）に、後漢の都・洛陽にきて、仏像経巻を伝えたのが仏教の初伝とされている。しかし、以上は公式的なもので、仏教がそれ以前から中国の一部に伝わっていたことも事実であろう。すでに阿育大王時代に伝わっていたとする説もある。

この仏教は西域と呼ばれる中央アジアを通って中国に伝えられたのである。この地方は山脈と砂漠ばかりの所であるが、古くから一獲千金を夢みる商人たちの交易路が開けていた。いわゆる有名な絹街道（シルク・ロード）である。西から東へ、東から西へと、南北両道に分かれた絹街道こそ、東西を結ぶ最も重要な公路であった。南道、北道、天山北路と三つに分かれていた細い貿易路を通って、仏教は中国に伝来したのである。東晋の法顕、唐の玄奘、またマルコ・ポーロが往来したのもこの交易路であった。漢帝国がこの地方に対する西域経営を開始したのは、武帝の時代に張騫を派遣したことに始まる。種々の珍しい西方の物産が中国に運ば

れ、東西交易は以後ますます活発化していった。そしてこの辺境には、インドの阿育王の伝道使派遣以来、仏教が伝わっており、これがまず隊商によって東方にまで伝えられた。

漢代は儒教をもって国教とし、政治の基本方針としていたのであるが、その国力の衰退と共に、社会不安による民心の動揺が起こり張角による太平道、張陵の五斗米道のような民間信仰が弘まりつつあった。このように動揺した中国社会に、仏教は漸次根をおろし始めたのである。

【法華経の新訳・旧訳】

後漢以来、徐々に行なわれてきた経典漢訳の事業は、国家の保護の下に行なわれるようになり、鳩摩羅什の出現によって、大いに発達した。羅什三蔵は西域の亀茲国の人であるが、鳩摩羅炎を父とし亀茲国王の妹を母として生まれた。七歳のとき出家し、九歳のとき母に連れられて、カシミールで槃頭達多から小乗教を学び、ついで莎車の須利耶蘇摩について大乗教を学び、帰国後はもっぱら大乗を研究し宣揚した。その名声は西域のみでなく東国にも伝わった。

前秦の符堅は、この名声を聞き、建元十八年（西紀三八二年）に、部下の将軍・呂光に、亀茲国を打ち羅什を連れて帰るように命じた。呂光は軍勢を率いて西域に向かったが、帰国の途中、符堅の滅亡を聞き、姑蔵（甘粛省武威）で自立した。ために羅什も、この地に留まること十数年、後、後秦の姚興王に国師の礼をもって迎えられた。彼は都・長安の西明閣、逍遙園において訳経に従事し、大寺において講説した。経論の漢訳に

おいては、国家の援助の下に天下の人材をもって行なった。

従来の経典漢訳においては、外国語に通じないための誤訳や、訳者による抄訳が多かったが、羅什は多くの外国語に通じていたので、初期の漢訳経典の誤謬を正し、また全訳して経典の完璧な翻訳を行なったのである。羅什は七十四部三百八十四巻にわたる多くの経典を漢訳した。そのなかには、大品般若、小品般若、首楞厳経、維摩経、十住経(十地経)、法華経などの経典や、大智度論、中論、十二門論等の論釈書があり、いずれも珠玉の名訳であった。弘始十五年四月十三日(一説に弘始十一年八月二十日)年七十歳で亡くなったが、「羅什舌焼けず」の現証を残し、翻訳の最も正確であったことを証明している。

なお羅什前後の訳経家として、永嘉四年に西天竺の沙門仏図澄が洛陽へ来て、翻訳の業を行なうと共に、多数の弟子を養成した。仏図澄の弟子・道安も、また訳経に講経に活躍したので有名である。

安帝の隆安三年には、法顕が遠くインドへ旅行して経典を求めている。その他、仏陀跋陀羅、曇無讖等、当時は訳業に従事した高僧が多数あった。次いで陳の代には真諦三蔵が摂大乗論、倶舎釈論等を訳出した。唐代にはいると玄奘が貞観三年より、十六年にわたって求経の大旅行をし、多数の経典を持ち帰って翻訳した。羅什や真諦を旧訳といい、玄奘を新訳という。

【日本への仏教伝来】

釈尊の説いた仏教は、インドから中国、朝鮮、日本へと伝わってきたのである。すでに羅什の師である須

梨耶蘇摩は、羅什に「仏日西に入って遺耀将に東に及ばんとす、この経（法華経のこと）は東北に縁あり、汝つつしんで伝弘せよ」といっており、法華経は中国から朝鮮を経て、西紀五五二年（仏滅後千四百年ごろ・西紀五三八年の説もある）わが国に伝わった。すなわち、朝鮮の一国であった百済の聖明王が、欽明天皇の御代に仏像、僧尼などと共に渡したのがはじめである。

この外来の宗教をめぐって、革新派の蘇我氏（崇仏派）と保守派の物部氏（廃仏派）とが争ったが、結局、蘇我氏が勝利を収めて、仏教はわが国に根をおろすことになった。

その後、聖徳太子は、法華経と勝鬘経と維摩経の三経を、国家鎮護の法と定め、崇重し、また法華経義疏四巻を著わした。

さらに、聖武天皇は、各国分寺において法華経を書写せしめ、崇重した。

また村上天皇は、母の供養として法華経八巻を宮中にて講義させたが、これを法華八講といい、後、法華十講、法華三十講などの儀が、貴族の間で弘まった。

間もなく、平安時代の初期に伝教大師が出現し、桓武天皇の前で当時の邪宗派たる奈良の六宗の僧と法論し、これをことごとく打ち破ったので、ここに法華経迹門の教えが日本に広宣流布し、志を継いだ義真の手によって比叡山に迹門の戒壇が建立されたのである。

その後、叡山は、第三代座主の慈覚のときに、真言の邪義を取り入れて謗法の山と化してしまった。

しかし鎌倉時代にはいってから、日蓮大聖人がご出現になり、四箇の格言によってあらゆる邪宗派を打ち破り、法華本門寿量品文底の法門を弘めて、末法の一切衆生を救われたのである。

【日蓮大聖人のご一生】

日蓮大聖人は、安房国長狭郡東条小湊の漁村に承久四年（西紀一二二二年）二月十六日に誕生した。父は三国の太夫、母は梅菊である。

天福元年（西紀一二三三年）、十二歳の時、ほど近い清澄寺に登り道善房を師とし天台、真言の学を修め、それから出家剃髪して是生房蓮長と改名した。

ついで鎌倉へ出て禅宗、浄土宗の教義を学び、比叡山に登って宗教の奥義をきわめ、数年にわたって京都・奈良・高野山等をも回り研学に努めたのである。

建長五年（西紀一二五三年）四月二十八日、御年三十二歳の時、故郷に帰り、清澄寺の諸仏坊の持仏堂の南面で題目を唱え、諸宗の邪義を破して立宗の第一声を放ったのである。ついで鎌倉へ出て名越の松葉ケ谷に庵室を結び、大法弘通に努めたのである。

当時の世相は天災が相続き、飢饉や疫病と民衆の困苦は日に日に募るばかりであった。日蓮大聖人は人々の不幸に陥る根本の原因が邪宗教にあると見抜かれ、文応元年（西紀一二六〇年）に立正安国論をしたため宿屋入道を仲介に、執権北条時頼を諫暁した。

幕府はこれを用いないのみか、諸宗の悪徒は結束して草庵に放火し、ようやく難をのがれた日蓮大聖人を捕えて伊豆の伊東に流罪、日蓮大聖人は、弘長元年（西紀一二六一年）五月十二日より足かけ三年の間を伊東に

すごしたのである。

赦免になり鎌倉へ帰り、ついで故郷の安房へ帰省の途中、小松原で地頭・東条左衛門尉景信に襲撃され、弟子は殺害され日蓮大聖人もまた額に傷を負わされたのである。

文永五年（西紀一二六八年）には立正安国論の予言が的中して蒙古国より牒状が到来した。日蓮大聖人は、また鎌倉へ上り松葉ケ谷にあってあらゆる迫害のなか、弘法に努め、十一通の書状を認めて政府の役人と、当時有名な高僧に警告を発したのである。幕府は蒙古の襲来におびえながらも日蓮大聖人の警告状には耳もかさず、各宗派は厳然たる日蓮大聖人の御状に接しては、公然と対論することもできなかった。

文永八年、良観の雨乞い等、日蓮大聖人の現証の上の勝利によって、仮面をはがされた邪宗は幕府と結託し、日蓮大聖人を捕えて竜の口に送り、九月十二日の夜、首をはねようとした。その首謀者は、平左衛門であった。

しかし不思議な事件によって、ついに切ることができず、斬罪はとり止めとなり佐渡へ島流しと決定し、これより四か年の間、北海の佐渡島で不自由な生活を送ることとなったのである。

佐渡においては数百人の僧侶が塚原の三昧堂へ押し寄せたり、たえず迫害を加えられ、雪と寒さは、さらに困難を加えた。

しかし一方、竜の口の法難以来、いよいよ日蓮大聖人は久遠元初の御本仏としての確信に立たれ、房総、鎌倉方面の信者に対して開目抄、観心本尊抄の重要な御抄を送られ、末法の本仏・人本尊は日蓮大聖人であり、法本尊は文底下種事行の一念三千であることを明かされた。

鎌倉幕府は日蓮大聖人をいったんは佐渡へ流罪したものの、罪も過失もないことゆえ文永十一年（西紀一二七四年）に日蓮大聖人は赦免され、鎌倉へ帰られたのである。平左衛門尉は早速、日蓮大聖人と対面してなにかと問答があったが、一時的・外面的な幕府の優遇策にすぎず、日蓮大聖人はそれらを一蹴して「三度諫めて用いられなければ」の古賢の例によせ、御弟子・日興上人の誘導で身延山へはいられた。

これより九か年の間、身延山にあって御弟子の養成と折伏戦の総指揮をとられ、各地には強信の弟子檀那が散在して折伏弘通に努めた。なかにも富士方面には日興上人の指導下に折伏の布陣が張られ、弘安二年（西紀一二七九年）には熱原の大法難が勃発し、信者のうち三人が斬罪に処せられ、十七人が追放された。これを機会に日蓮大聖人は、弘安二年十月十二日、本門戒壇の大御本尊を建立せられて、出世の本懐を遂げられたのである。

弘安五年（西紀一二八二年）、日蓮大聖人は三大秘法の大御本尊と共に、一切のご化導を日興上人にお譲りになり、弘安五年十月十三日、武州池上邸にて御年六十一歳をもって、ご入滅あそばされたのである。

三大秘法のうち、本門の題目と本門の本尊は、以上のごとくして建立せられたが、化儀の広宣流布、本門の戒壇の建立は、未来へ遺命せられている。この自覚と確信こそ宗門を知るうえに最も大切な要件である。

【国家諫暁】

文応元年（西紀一二六〇年）七月、日蓮大聖人は立正安国論をお認めになり、宿屋入道に付して時の最高の

国家権力者である北条執権最明寺入道時頼に対して、未曾有の国家諫暁を行なった。

すなわち正嘉の大地震をはじめ、うち続く三災七難の相を、最高唯一の大仏法に照らして、破仏法・破国の因縁、正法治国の大原理を示されたのである。

立正安国論（二四・三〇ページ）にいわく、

「如かず彼の万祈を修せんよりは此の一凶を禁ぜんには」またいわく「早く天下の静謐を思わば須く国中の謗法を断つべし」と。

正法誹謗、邪宗・邪義の悪縁を断ち、実乗の一善すなわち三大秘法の大仏法に帰することこそ、政道の根幹であると厳しく諫められたのである。

以来、身を賭して国諫の実践にあたり、文永五年（西紀一二六八年）十月、再度十一通の御状をもって、時の執権北条時宗をはじめ幕府の要路者、ならびに建長寺道隆をはじめとする邪宗の元凶等に対して、公場対決を迫り、速やかに立正安国の正道に入らしめんとしたのである。

時あたかも日本は大聖人の予言のごとく正法誹謗の仏罰厳然として、西戎大蒙古国による他国侵逼の難に脅かされていた。

しかし、時のいたらざるか、忠言耳に逆らうのたとえどおり、この忠諫に、国賊、悪侶の汚名、数度の大難をもって報いたのである。

文永十一年（西紀一二七四年）五月、ついに政都・鎌倉を去り、身延に入山され、その後も禁廷上奏の諫状をしたためては、弟子・日興上人、日目上人をして献覧に供され、以来、国諫の大精神は脈々として御弟子

に受け継がれて現在にいたったのである。

歴史は移り変わり、現在は主権在民の時代である。

一人一人へ妙法を流布することが最大の国家諫暁であり、また妙法を持った一人一人が、自己の属する社会の建設に活躍することが、立正安国の実践といえよう。

第二代戸田城聖会長の原水爆宣言は、全世界の指導者に対する峻厳なる一大諫暁であり、その恩師のご遺訓を、大精神を、身をもって実践し、世界広布の先駆をきって前進される池田会長こそ、国家諫暁の実践者である。

池田会長は「力強い大折伏の戦い、本尊流布の戦いこそ無言の国家諫暁である」といっている。主権在民の時代、社会にあっては、必ずすべてのことが民衆の世論に反映されねばならない。したがって広宣流布するためには、政治に経済に教育に、また言論にと、社会のあらゆる面に、王仏冥合という国家諫暁の精神が反映されねばならない。

王仏冥合の大思想を身につけた多くの人材が、社会のあらゆる階層に輩出することこそ、民衆の世論の上に偉大な力を発揮し、真に国家諫暁を実践推進しうるものである。

【日興上人】

宗史の正しい流れを知り、日蓮大聖人の御本仏としての化導を正しく知るためには、日興上人の立ち場を正

しく認識していかなければならない。

日興上人は甲斐国中巨摩郡大井の生まれ、父は遠江から移ってきた大井橘六、母は妙福であった。幼少のおり父が亡くなり、母は武蔵の綱島家へ再縁せられたので、母方の富士河合の由比家に養われた。成長して岩本の実相寺に上り、出家して伯耆公と呼ばれた。日蓮大聖人が岩本実相寺にご入蔵のおり、高徳をしたって弟子となり、後に白蓮阿闍梨と法名を賜わった。

ついで日蓮大聖人にお供して鎌倉へはいり、伊東流罪のおりにも、常に随ってご給仕申し上げ、伊豆に佐渡に、折伏の縁を結ばれて後年まで日興上人の法縁に浴する者が数多くできた。またその間に書道に達しておられたため御代筆をされ、御本尊の代筆までされている。

実相寺は天台真言であり、日蓮大聖人の門下となった日興上人等は院主と常に闘争していたが、ついに官権の手によって擯出され、やむなく一時四十九院に退去することになった。しかし、さらに障害が出て信者の家に身を寄せ、そうしたなかで八方に弘法していた。その後、実相寺は腐敗堕落がはなはだしくなり、後には粛清されて、日興上人等は旧寺に戻ることができた。

また熱原法難には日興上人の直弟子の日秀・日弁が活躍し、南条時光も外護の任にあたったが、ついに神四郎等三人が斬罪に処せられた。このとき日蓮大聖人は日興上人の格別なる化導、活躍を嘉せられて、本門戒壇の御本尊をご図顕され、日興上人に付嘱されたのである。

弘安五年（西紀一二八二年）、日蓮大聖人ご入滅のおりには、その記録を記され（御遷化記録という）、御骨を奉持して身延山へはいり、御遺状どおり身延山の別当職に就任した。他の五老僧はおのおの本国へ引き上げ

て行った。墓輪番を制定しておきながら、その後は誰一人、身延へくる者もなく、しぜんに一切を日興上人におまかせの体であった。

三回忌を過ぎて民部日向が身延に登山してきたので、日興上人は喜んで学頭職につけられた。

しかし、当時門下は、すでに硬・軟に分かれ、信心・修行・教義等すべて日蓮大聖人のご在世どおりに実行する謹厳な日興上人に対し、五老僧等は世間に迎合して天台沙門と名乗ってまで幕府の迫害をのがれようとしていた。

身延の地頭・波木井氏は次第に日向の軟風に染まり、数々の謗法をあえてするにいたった。（四箇の謗法といい、三島明神に参詣したり、邪宗の念仏に供養をした）日興上人は何度も波木井氏を諫められたが、いっこうに聞き入れず、このままでは日蓮大聖人の正義を顕揚することができないと、熟慮万考のすえ、ついに正応二年（西紀一二八九年）春、身延山を出発され、河合の由比家にいたり、ついで南条家の持仏堂（いまの下之坊）に移られ、大石が原に本寺を選定された。

御大坊ができあがるや本六の日目坊蓮蔵日華寂日秀理境日禅南之日仙百貫日乗了性等が支院を次々に建立して御大坊を守護せられた。

大石寺の完成後、日興上人はほど近い重須郷に移られて新進の弟子を養成され、後年に日代・日澄・日道・日妙・日亀・日助等の新六が輩出した。

日興上人は富士へ移られてから四十余年の後、一切を第三祖日目上人に付嘱せられて正慶二年（西紀一三三三年）八十八歳の高齢をもって遷化された。

【六老僧】

日蓮大聖人は御入滅にあたって、弘安五年（西紀一二八二年）十月八日、六老僧を定められた。蓮華阿闍梨日持、伊予公日頂、佐土公日向、白蓮阿闍梨日興、大国阿闍梨日朗、弁阿闍梨日昭の六人である。

日興上人が記録された「御遷化記録」によると、その冒頭に「弟子六人事　不次第」とあり、六人の連名の順序は入門の順に記されたもので、上下の差別はないとの意が明記されている。このことは非常に大事な点で、年齢や法臘などにかかわりなく、六人を平等にあつかわれており、この平等であるということを一重立ち入って読んでいくとき、むしろ上を押えて下をあげるというご真意をうかがうことができる。すなわち日興上人が第二祖として付嘱を受けたからである。

法臘の順からいっても、最長老であり、六十二歳の日昭、また法臘では第二の四十歳の日朗、いずれも日興上人にとっては、先輩にあたる人たちである。そのなかで、智徳ならびに秀でたとはいえ、三十七歳の日興上人にご付嘱あそばされるについては、日蓮大聖人のご配慮の深さ、凡慮をもって推することはできないが、その一端を拝する感がある。

日昭　承久三年（西紀一二二一年）、下総国海上郡能手の郷に生まれた。十五歳で出家して比叡山に登り、天台宗を学んだが、その間に日蓮大聖人に会い、立宗の年である建長五年（西紀一二五三年）、鎌倉・松葉ケ谷の草庵をおとずれ、内弟子となった。この時の日昭は、すでに三十三歳であった。それ以来、主として鎌倉

方面の布教にあたり、大聖人入滅の弘安五年には、六十二歳で門下では大長老であり、その後は、鎌倉浜土にあって、めぼしい活動は見られず、最も保守的な存在であったようである。

日朗　寛元元年、下総国平賀に生まれ、母が日昭の姉であった関係から、建長六年、十二歳の時、大聖人門下となった。大聖人が佐渡にご流罪のときには、鎌倉で土牢に入れられたりして戦った。活動の中心は鎌倉、池上方面であったようで、鎌倉の比企谷の妙本寺、および池上本門寺の開基になっている。大聖人ご入滅の時は四十歳。性質は温順といわれており、行動的には勇猛果敢ではなく、妥協的な面は十分うかがわれるようである。

日向　建長五年、房州の男金村に生まれ、文永元年（西紀一二六四年）、十二歳の時に大聖人の門に入る。その活動面は、房総方面を主としていたようであり、建治二年（西紀一二七六年）、清澄寺の道善房が死去したときに、報恩抄を奉持して清澄寺に使いした。一時、富士方面の日興上人の弘教の手伝いもしたことがあるようだが、ごく短期日だったようだ。大聖人ご入滅の時は三十歳であったが、性質は放逸で、世法的に長じていた模様で、いわゆる小才子であり、五老師敵対のなかでは、その元凶的な存在で数々の謗法を波木井に勧めている。また大聖人ご入滅の時も、翌年の百か日法要にも、日頂と共に他行して、いずれも不在であったのも、不思議を感ぜられる。上総の藻原方面に檀徒をもっていた。

日頂　建長四年（西紀一二五二年）、駿州富士郡重須の郷に生まれたといわれているが、はっきりした史料はない。幼くして父を失い、母が下総若宮の富木胤継に再婚したので、日頂もまた、その義子となったといわれている。文永四年（西紀一二六七年）、十五歳の時に大聖人門下となる。ご入滅の時には三十一歳、富木殿

の関係から下総方面の布教にあたっていたようで、下総真間の弘法寺に住んでいた。三回忌のおりに不参加で富木殿に勘当されたという話もあるが、これは伝説に近いようである。ただし、晩年、下総を離れて富士重須の日興上人をたずね、重須に住し、そこで入寂されている。特記すべき功績は、あまり見られない。

日持　建長二年（西紀一二五〇年）、駿河国庵原郡松野の生まれ。松野六郎左衛門の子で、南条家とも親類筋にあたっている。蒲原荘の四十九院に登り、文永七年（西紀一二七〇年）、二十歳の時に日興上人の折伏によって、大聖人門下に加わった。弘安元年（西紀一二七八年）には、日興上人と共に、四十九院を追われる難にあった。ご入滅の時は三十三歳。その後は、松野から海外布教に旅立ったといわれている。

以上のように、房総方面には日頂、日向、武州、鎌倉方面には日昭、日朗、甲州駿河方面は日興上人と日持が、活動の中心となっていたようである。今日のように交通機関が発達していないし、日蓮大聖人の化導は、題目、本尊、戒壇という順であり、当時は題目流布で功徳のあったところから、地方在住の老僧たちが、真の本尊論を理解しえなかったこともありえようし、日興上人が常随給仕をなされていた点からも、真に付嘱を受け、正しく伝持されたのは日興上人ただ一人であることは、厳然たる事実なのである。

【二箇相承】

仏法に相伝の必ず必要なことは、諸御書に明らかである。

顕仏未来記（五〇八ページ）伝持の人無れば猶木石の衣鉢を帯持せるが如し。

一代聖教大意（三九八㌻）　此の経は相伝に有らざれば知り難し。

一代聖教大意（四〇四㌻）　此の法華経は知らずして習い談ずる者は但爾前の経の利益なり。

相伝のない者は、その奥底を知らないのみか、木石にも等しく、功徳のあるはずがないという文である。

しこうして相伝は唯一人に授けられる。釈尊は上行菩薩に、天台は章安に、伝教は義真にそれぞれ付嘱している。

日蓮大聖人のご付嘱は唯授一人の日興上人であらせられることは、二箇相承（一六〇〇㌻）に明らかである。総じていえば、日蓮大聖人直流の門下にすべて相伝があるといえるが、別していえば法体の相承は唯一人に限るのが当然の理である。

身延相承書（一六〇〇㌻）　日蓮一期の弘法、白蓮阿闍梨日興に之を付嘱す、本門弘通の大導師たるべきなり、国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり、時を待つべきのみ、事の戒法と云うは是なり、就中我が門弟等此の状を守るべきなり。（総付嘱書）

池上相承書（一六〇〇㌻）　釈尊五十年の説法、白蓮阿闍梨日興に相承す、身延山久遠寺の別当たるべきなり、背く在家出家どもの輩は非法の衆たるべきなり。（別付嘱書）

【身延離山】

日蓮大聖人は、日興上人へ、戒壇建立の遺命をされ、入滅に先立って「身延山久遠寺の別当たるべきなり」

と、一宗の総貫主としての付嘱をなさり、武州池上で入滅された。弘安五年（西紀一二八二年）十月十三日のことである。その後、日興上人がご遺命どおりに、身延へ入山され、一宗の中心として立たれたことはいうまでもない。

弘安六年正月に門下の主な弟子方十八人が、一か月ずつ、身延の日蓮大聖人のご廟所を守る当番を定めたが、十八人のうち十人までが、日興上人のお弟子、または孫弟子であることから考えても、日興上人が門下の中心であったことがわかるのである。しかし、その輪番も守られることなく、五老僧たちは、身延へ登山もしなかったのである。

弘安八年ごろ、民部日向が、ただ一人、墓参のため身延へ登山した。日興上人は喜んで、特に学頭職にして、ねぎらわれた。しかし、日蓮大聖人の仏法を、あまり知らなかった日向は、鎌倉の五老僧たちの軟風を、地頭・波木井実長入道日円にふきこんだのである。そのため、実長は「神社に参詣する、謗法の福士の塔の供養、九品念仏の道場に供養する、釈迦仏像を造立する」などの四箇の謗法を重ねて、日興上人の訓戒も、聞き入れようとはしなかった。

ここにおいて「地頭不法ならん時は、日蓮が魂はこの山に住まず」とのご遺言のままに、日興上人は、令法久住のため、謗法の山と化した身延を離山される決意を固めたのである。

すでに日興上人の心は謗法の山と化した身延を去り、広大な広宣流布の指揮をとられる場所を求めていたといえよう。

原殿御書（富要八巻一一ページ）身延沢を罷り出で候事、面目なさ本意なさ申し尽し難く候へども、打ち還し案

じ候へばいづくにても聖人の御義を相継ぎ進らせて世に立て候はん事こそ詮にて候へ、さりともと思ひ奉るに御弟子悉く師敵対せられ候ぬ、日興一人本師の正義を存じて本懐を遂げ奉り候べき仁に相当りて覚え候へば本意忘るること無く候。

正応二年（西紀一二八九年）春、身延を離山された日興上人は、まず河合の養家に休まれ、それより上野にいる南条時光の請いに応じて下条にある南条家の持仏堂（現在の下之坊）にはいられた。これより約半里を隔てた大石が原の勝地に、正応三年（日蓮大聖人滅後九年、西紀一二九〇年）十月、日目、日華、時光、新田信綱等が力を合わせて大坊を完成した。ここに、弘安二年（西紀一二七九年）十月十二日ご建立の本門戒壇の大御本尊をはじめ、一切の霊宝が安置されたのである。

【原殿御書】

日興上人が身延を離山されるにあたり、お弟子の原殿に与えられた御書を「原殿御書」という。この御書は、その当時のいきさつ、日興上人のご心境等が述べられている大事な御書である。

原殿御書（富要八巻一一ページ）身延沢を罷り出で候事、面目なさ本意なさ申し尽し難く候へども、打ち還し案じ候へばいづくにても聖人の御義を相継ぎ進らせて世に立て候はん事こそ詮にて候へ。

この御文は、本門弘通の大導師として身延山久遠寺の別当として、令法久住の大使命感に立たれたご心境なのである。

「いづくにても聖人の御義を相継ぎ進らせて世に立て候はん事こそ詮にて候へ」と。〝聖人の御義〟とはすなわち三大秘法の仏法であり、〝世に立て候はん〟とは日蓮大聖人の仏法を令法久住して広宣流布すべきことである。これこそ日蓮大聖人のご遺命であり、付嘱を賜わった日興上人の大使命なのである。

してみれば、すでに日興上人の一門以外は五老僧も地頭もすべて師敵対謗法の者と化したとはいえ、身延を捨て、離山されることは、別当として身延を賜わった御身にとって堪え難いことではあるが、日蓮大聖人の仏法を曲げることはなおさら堪え難いことである。しかしながら、身延に対して日蓮大聖人は絶対的法城とのお考えが毛頭なかったことであり、そのことは三大秘法抄、身延相承書に「最勝の地をたづねて」とあるように、戒壇を建立すべき場所が身延でないことは、はっきりしていることであるから、むしろ離山は当然のことであった。むしろ、広宣流布の総指揮をとるべく、未来に向かっての洋々たる出発であったといえよう。「さりともと思ひ奉るに御弟子悉く師敵対せられ候ぬ、日興一人本師の正義を存じて本懐を遂げ奉り候べき仁に相当りて覚え候へば本意忘るること無く候」と。これこそ日蓮大聖人の正義たる三大秘法を令法久住せんがために、離山される日興上人のご決意である。

【熱原法難】

天台宗（後に天台真言となる）滝泉寺は、現在の富士郡鷹岡町大字厚原にあって、郡内一、名の知れた大寺であった。時の滝泉寺院主代・行智は、富士方面一帯にわたる日興上人の大折伏により、滝泉寺僧日秀・日

弁・日禅等はおろか多くの人々が改宗していくのをみて、大いに驚き、これらの人々に改心を迫り、聞かなければ寺から追い出すとおどかした。

しかし日秀・日弁・日禅の三人はかえって行智の迷妄を開かしめようとしたので、ついに行智の怒りが爆発し、有無をいわさず、その所職と住坊を取り上げて追放を申し渡したのである。

やむを得ず日禅は河合に帰り、日秀・日弁は、よるべき所もないので、ひそかに寺中にとどまり、弘教につとめていた。こうしたなかで熱原郷は、百姓神四郎、弥五郎、弥六郎等の熱烈な信徒が多数活躍するようになったのである。そこで院主代・行智は奸策をめぐらして、神四郎等の長兄である弥藤次入道が、弟たちと合わず、大いに法華誹謗をしているのを甘言を用いて腹心とし、また、代官下司等を語らって太田親昌、長崎時綱等の武士と組み、また大進房、三位房が日興上人にねたみをもっているのを利用して離反せしめて、時をうかがっていたのである。

しかし、日秀等に教化せられた神四郎、弥五郎、弥六郎兄弟をはじめ、法華講衆の信徒は意志強固であって、ますますその信仰を固めるのみであったから、行智の行動はいよいよ兇暴化し、四月には信者・四郎坊を傷害し、八月には弥四郎の首を切ったのである。

しかもこの罪科を日秀・日弁あるいは法華信徒に転嫁するという言語道断の所業にでた。それにも飽きたらず、なお奸策の罠を張ってひそかに待ちかまえていたのである。

弘安二年(西紀一二七九年)九月二十一日、日秀等が稲刈りの真っ最中、彼らは大挙して弓馬をもって百姓に乱暴の限りを尽くし、神四郎、弥五郎の兄弟以下二十人を縛ると、無謀にも政所へと引き立てて行ったのである。

急を聞いた日興上人は、この邪智奸策を憎み、信徒の悲嘆を思いやり、かつは宗門の一大事でもあったので、ただちに身延へ馳せ、日蓮大聖人の旨を受けて滝泉寺申状を認められ、日秀・日弁を従えて鎌倉に馳せ、両師の名をもって問註所へ訴願したのである。

しかし、この取り調べにあたったのは、日蓮大聖人を虐げ生命まで奪おうとした平左衛門尉頼綱であり、裁かれる者は頼綱が蛇蝎のごとく憎む法華の信徒であるがために、理を非に曲げるのは当然であった。

十月十五日、頼綱は、神四郎、弥五郎等の二十人を自邸の広庭に引き出し、事件の取り調べには少しもふれずに「汝等速かに法華の信仰をやめて念仏を唱えるならば、即座に罪科を赦してやろう。もし否と申せば厳罰に処す、よくよく思案を定めて返答いたせ」と厳しく申し渡した。

神四郎は昂然として「私どもに法華経を捨てよと仰せられますが、身を殺しても法を護るのが私どもの本業でございます」ときっぱりいい放ち、しかも法義を説いて逆に改宗を求めるという不敵の態度に、傲慢な頼綱は烈火のごとく怒りたけった。

飯沼判官と呼ばれる頼綱の次男は、蟇目の矢をつがえて神四郎等をめがけて発矢とばかり次から次へと放ち始めた。しかし、少しも改宗の色を見せないので、神四郎以下二十名の者は、再び牢舎の中に幽閉された。

日興上人は、この日この残虐を耳にして深く心を痛められ、かつは神四郎等一同の堅き護法の精神に感激されて、即座に急使を立てて、この趣きを身延へ報告した。これを聞かれた日蓮大聖人もまた深く感嘆され、早速御返書が送られてきた。その内容は、神四郎等は、釈迦多宝十方の諸仏に護られて寂光の宝刹に安住するであろうが、平左衛門尉は先に日蓮を虐げて国難を惹き起こし、その前途未だ危きにもかかわらず、いままた大

罪を重ねるとはその末路はまことにあわれむべきであるとの仰せである。そのとおり、平左衛門尉父子は、その後十四年を経て謀叛を起こし、同じ邸で殺されている。

神四郎等の二十人は、その後獄中に投ぜられること半年、そのあいだ唯一心に題目を唱えて信仰ます強盛であったが、弘安三年（西紀一二八〇年）四月八日、神四郎、弥五郎、弥六郎の三兄弟は刑場に引き出され、発頭人という廉によって斬罪に処せられ、残る十七人は付和雷同の従犯者として追放された。この三人は護法殉教の烈士として後人を導き、その名は長く宗史を飾っている。

【提婆達多】

提婆・調婆達多・調達等ともいう。訳して天熱という。

提婆達多は釈尊の従弟で、初め仏弟子となりながら、ついに釈尊に敵対して、生きながら大地破れて地獄に落ちた大悪人である。

すなわち、提婆は斛飯王の子、阿難尊者の兄であり、釈尊には従弟として生まれた。その出生のとき、諸天が成長の後三逆罪を犯すことを知って心に熱悩を生じたので天熱と名づけたという。また天授とも訳す。釈尊の八万法蔵、外道の六万蔵を誦持し、出家して神通を学び、学道は大いに進んだが、心が憍慢であり虚栄利欲の俗念が強く、深く釈尊をうらみ、ついに三逆罪を犯した。第一に大衆に囲繞されたら仏と同じであると考えて、釈尊の和合僧団を破り、五百の弟子を得た。（破和合僧）第二に山を押して仏を圧死させようと耆闍崛山

の上から釈尊めがけて大石を落としたが、地神がそれを受け止めた。その砕石が飛び散って釈尊の足指を傷つけた。（出仏身血）第三に蓮華色（華色）比丘尼がこれを呵責するや拳をもって尼を打ち、即死させたという。（殺阿羅漢）このような三逆罪をつくり、悪邪師・富蘭那外道と親しく交わり、善根を断じても恥じ悔いることがなかった。また阿闍世太子をそそのかして父・頻婆沙羅王を殺させ釈尊に敵対させた。また、あるとき悪毒を指爪につけ釈尊を礼すと同時に傷をつけ殺害しようとして果たさず、王舎城のなかで大地が自然に破裂して、生きながら地獄にはいったという。

しかも釈尊は法華経提婆達多品において、過去の因縁を説き、過去世に提婆は阿私仙人といい、そのとき国王であった釈尊は、王位を捨てて阿私仙人に千年間仕えて、成仏したとしており、提婆が善知識である功徳を説いて、成仏の記別を与え天王如来と記された。竜女の成仏とならんで法華経へきて初めて悪人成仏が説かれたのである。

観心本尊抄（二四〇ページ）経に云く「提婆達多乃至天王如来」等云云地獄界所具の仏界なり。

【阿育大王】

阿育大王は、インド・マウリヤ朝第三代の王（在位・前二七二～二三二年等諸説あり）である。その年代は仏滅後一〇〇年ごろ、一一六年、二一八年の説がある。釈尊の予言どおり仏滅後百年ごろ出現し、仏教を保護し、立派な政治を行ない、その国威は外国にまでおよんだ。

阿育大王は、摩竭陀国賓頭沙羅王の王子として生まれた。出産のときに母が憂悩なしに生まれたので阿育と名づけたという。幼時より非常に頑健・兇暴であり、父王に愛されなかった。父王の死後多くの兄弟を滅ぼして自ら王位について、反対する諸臣、女人等を焚殺し、そのほか残酷をきわめたので暴悪阿育王と称せられた。しかし軍略にすぐれ、戦争で連戦連勝して四方の国を平定し、全インド統一の大偉業を成し遂げ、いわゆる一閻浮提四分の一の王となった。

その後、残虐な行ないを悔悟し、付法蔵の第四祖・優婆毱多尊者の教えを受けて深く仏法を信じ、性情一変して武力による征服をやめ「法による勝利こそ最上の勝利である」という信念のもとに、仏教流布に努めた。こうして阿育大王は、仏法の慈悲を政治に反映させたので、大いに国が栄えた。

その主な業績は次のとおりである。

一、慈悲のある立派な政治を行なった。

二、一千の長老を集めて第三次の一切経の結集を行なった。

三、仏法流布のため多くの高僧を四方に派遣した。その範囲は、遠くシリア、エジプト、マケドニアにまでおよんだ。

そのほか八万四千の大寺を造り仏舎利を分配し、あるいは教学を振興する等多くの業績があり、現在もその遺跡がみられるが、特に石柱あるいは岩壁等に記された法勅が名高い。

上野殿御返事（一五四四ページ）月氏に阿育大王と申す王をはしき、一閻浮提四分の一を・たなごころににぎり・竜王をしたがへて雨を心にまかせ・鬼神をめしつかひ給いき、始は悪王なりしかども後には仏法に帰し・

六万人の僧を日日に供養し・八万四千の石の塔をたて給う、此の大王の過去をたづぬれば仏の在世に徳勝童子・無勝童子とて二人のをさなき人あり、土の餅を仏に供養し給いて一百年の内に大王と生れたり。高橋殿御返事（一四五七ページ）付法蔵経と申す経にはいさごのもちゐを仏に供養しまいらせしわらは百年と申せしに一閻浮提の四分が一の王となる所謂阿育大王これなり。

【竜樹・天親】

竜樹

竜樹は竜猛菩薩ともいわれる。仏滅後七百年ごろ、南インドに出て、大いに大乗の教義を弘めた大論師である。後に出た天親菩薩と共に正法時代後半の正法護持者として名高い。付法蔵の第十三。

竜樹菩薩は南インドのバラモンの大富豪の家に生まれた。生まれつき聡明で、幼少にして四韋陀聖典を解了し、やや長じて天文・地理・道術等、当時の百科の学術に通じたという。やがて感ずるところあって出家し、たちまち小乗三蔵経を読破したが、なお満足できず、東北におもむいて、ついにヒマラヤ地方で一老比丘より、大乗教典を授けられ、大いに得るところあり家義に通じた。そして、弁論巧みに、よく外道を破折し、外道異学は皆服した。しかし、まだ自分は仏経を究め尽くしていないと感じ、静かなところに閉じ籠って沈潜思索していたところ、これを見て哀れんだ大竜菩薩が、神通力で竜樹を伴って大海に入り、竜王の宮殿で秘密の大乗教典を与えたと伝えられている。

学成ってから南インドに帰ったが、この国の王は外道を信じていたので、竜樹はこれを破折するために赤旛

を持って王宮の前を七年間往来した。ついに王がこれを知ったので、あらゆる外道を破折・調伏して大乗を弘め、大いに国王の敬信をうけた。釈尊滅後、ようやく形骸化した仏教を大乗教をもって生活指導の仏法とする偉業を成し遂げ、その著作もひじょうに多い。法を上首の弟子の迦那提婆に付し、キストナ河の上流の黒峰山上の寺院で入滅した。年齢は不明であるが、ひじょうな長寿であったという。

著作として有名なものは「大智度論」百巻、「十二門論」一巻、「十住毘婆沙論」十七巻、「中観論」四巻等である。

天親

天親菩薩は、世親菩薩ともいう。仏滅後九百年ごろ、インドに出て「千部の論師」といわれ、大いに仏法を興隆し、とりわけ大乗教を弘めた大論師である。

天親は、北インド健陀羅国の富婁沙富羅城に生まれた。父はバラモンの学者で憍尸迦といい、その第二子であり、兄は有名な大乗の論師・無著菩薩である。

博学多才で出家後、小乗を研究し衆人のために説一切有部の教理大系を示す。毘婆沙を講述し、その講義をつづって「阿毘達磨倶舎論」三十巻を著わした。しかし、初め小乗に執著しすぎたので、大乗を信じないで誹謗した。兄の無著論師は早くから大乗に帰したので、天親を誘化し大乗に帰入させた。天親は深く前非を悔い、昔大乗を誹謗した舌根を割って滅罪しようとしたが、無著の忠告を入れて、滅罪のため、無著の跡を受け、大乗教の弘布に努めた。

ときに阿踰陀に都を定めてインドを統治した超日王および、その子・新日王の厚い外護をうけ、大いに教勢を拡張し諸大乗教の論釈をことごとく作った。その文義が精妙であったため、インドおよび辺土にいたるまで

大小乗の学者は、ことごとく天親の論を根本とし、外道もことごとく畏伏したという。そしてこの地で八十歳で没したと伝えられる。

古来、天親は「千部の論師」と称され、小乗のころ五百部、大乗に入りて同じく五百部の著述をなしたといわれる。現在、著書の存するもの前述の「倶舎論」のほか、「十地経論」十二巻、「唯識論頌」一巻、「摂大乗論釈」十五巻、「仏性論」四巻、「金剛般若波羅蜜経論」三巻、「妙法蓮華経優婆提舎」等である。以上の著述は広く仏教各派に影響を与えたが、とりわけ小乗では倶舎宗、大乗では法相宗（十地論・二十唯論）等の所依の論釈とされた。

天親菩薩は竜樹菩薩と共に「内鑑冷然、外適時宜」と称されるように、内心には諸法の実理を知っていたが、化導には権に説いたところがある。

竜樹、天親については御書に次のように仰せである。

開目抄上（一八九ページ）一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知ってしかも・いまだ・ひろいいだ（拾出）さず但我が天台智者のみこれをいだ（懐）けり。

撰時抄（二六〇ページ）竜樹・天親等は内心には存ぜさせ給うといえども言には此の義を宣べ給はず、求めて云くいかなる故にか宣給ざるや、答えて云く多くの故あり一には彼の時には機なし・二には時なし・三には迹化なれば付嘱せられ給はず。

開目抄下（二一五ページ）法華経の種に依って天親菩薩は種子無上を立てたり天台の一念三千これなり。

富木入道殿御返事（九五五ページ）天親・竜樹内鑑冷然外適時宜云云。

【天台大師】（付南岳・章安）

智者大師の別称。諱は智顗。天台山に住んだので天台大師という。中国の天台宗の第三祖であり、理の一念三千の法門を説いた像法時代の正師である。

伝によれば西紀五三八年――五九七年の人で、梁武帝の大同四年荊州に生まれ、梁が滅亡すると一族は離散し、父母もまたなくなったので、十八歳で湘州の果願寺の法緒に投じて出家した。生誕時も奇瑞があって、幼時から聡明で、また仏乗を志していたといわれる。

二十歳で具足戒を受け律を学び、また陳の天嘉元年、二十三歳の時、光州の大蘇山で慧思（南岳大師）に謁し四安楽行を授けられ法華三昧を行じた。その後、大いに法華経の深義を照了した。後、瓦官寺に住して八年、「智度論」等を講説し高名をはせた。

太建七年（西紀五七五年）九月、三十八歳にして天台山にはいり、仏隴に住んで修行したが、詔によって金陵にいたり、大極殿で智度論、仁王経を講ず。禎明元年（西紀五八七年）、年五十で法華経を講じて章安大師が筆録したのが、有名な「法華文句」である。隋の世となるや、晋王広の帰依をうけ智者の号を賜わる。後、荊州当陽県の玉泉山にいたって、「法華玄義」「摩訶止観」を述べて天台三大部を完成す。その間、南三北七の他宗を信伏せしめ、その後、天台山に帰り、翌年、石城寺で入寂した。年六十であった。

その著述ははなはだ多かったが、なかでも有名な「三大部」のほか、普通「五小部」と呼ばれる「観音玄義」

「観音義疏」「金光明玄義」「金光明文句」「観経疏」がある。

日蓮大聖人も顕仏未来記（五〇九ページ）でインドの釈尊と中国の天台大師と日本の伝教大師と日蓮大聖人とは三に一を加えて法華経の行者の三国四師であるといわれているように、天台大師は薬王菩薩の再誕と称され、像法の法華経すなわち理の一念三千の法門によって、像法の教主として衆生を導いたのである。その後、章安大師、妙楽大師によって弘法され、日本の伝教大師が迹門円頓の戒壇を叡山に建立するにおよんで、まったく天台宗義は完成された。ただし、末法にあっては天台・妙楽・伝教等の渇仰する御本仏日蓮大聖人の教えによる以外には功徳がないのである。

なお、天台大師の師匠である南岳大師、および天台大師の弟子である章安大師について解説する。

南岳大師

中国南北朝の法華経の持者で、天台の師にあたる。慧文禅師に法を承け、天台智者大師に伝えた。武津の人で出家後、常に法華経を誦し、あるとき法華三昧を開悟したという。求法の心厚く、天台大師を弟子としたが、陳の光大の初め、南岳に移って太建九年（西紀五七七年）端坐したまま、六十三歳で入寂す。そのとき身は柔らかく、顔色も生けるごとき様だったという。著書には「四十二字門観」「法華安楽行儀」等がある。「立誓願文」は有名である。

章安大師

天台智者大師の弟子であり、師の論釈のことごとくを聴取し結集した。諱は灌頂。臨海章安の人で陳の文帝の天嘉二年（西紀五六一年）に生まれ、七歳で摂静寺にはいり、後、智者大師に謁して観法を稟け常随給仕し、所説の法門をことごとく領解した。その聴受の結集は有名な「三大部」をはじめ大小部合わせて百余巻ある。師が亡くなってから「涅槃玄義」二巻、「同疏」二十巻を著わす。名声天下に響き、

三論の嘉祥は章安の「義記」を借覧して天台に帰したという。唐の貞観六年（西紀六三二年）八月七日、天台山国清寺で年七十二歳にして寂した。弟子・智威に法統を伝えた。

【妙楽大師】（付道邃・行満）

妙楽大師は中国の唐代の天台宗第九祖、天台大師より六世の法孫で、中興の祖としておおいに天台の教義を宣揚し、実践修行に尽くし、仏法を興隆した。

伝によれば、西紀七一一年、中国の常州晋陵県荊渓に生まれ、家は世々儒教をもって立っていた。諱は湛然。荊渓にいたので荊渓大師とも称せらる。

二十歳で左渓玄朗について天台の教観を学び、すでに大器ぶりを発揮した。天宝六年（西紀七四七年）三十八歳で宿願を達して出家し、研さんに努め、理の一念三千の天台宗義の深義を明らかにし当時輩出していた禅・華厳（澄観）・真言・法相（慈恩）等諸宗の学者の間にあって大いにその謬解を打ち破った。そのなかでも天台大師の三大部の註釈は、天台大師の幽旨を明解にしたものである。天宝の末詔書を賜わり、しきりに宮中に参ずるようにすすめられたが、つねに病と称し固辞して参内しなかった。その後の兵乱や飢饉の際にも修行を怠らず衆生を安んじ、つねに少欲知足であったという。はじめ蘭陵（または毘陵）の妙楽寺に住したので妙楽大師という。次に天台山国清寺にはいり、唐の徳宗建中三年（西紀七八二年）二月五日、仏隴道場で入寂した。年七十二歳、法臘三十四年であった。

著書として天台三大部の有名な注釈がある。「法華玄義」を「法華玄義釈籤」に、「法華文句」を「法華文句記」に、「摩訶止観」を「止観輔行伝弘決」にそれぞれ注釈している。そのほか「維摩経略疏」「金剛錍」「止観大意」等の著書がある。勅諡を円通尊者という。

弟子は伝教大師に法門を伝えた有名な道邃、行満をはじめ、元皓、智度、法征、華雲等すこぶる多く、高弟三十九人、門徒千余人という。法を道邃、行満、元皓に付す。

伝教大師は妙楽大師を十徳を頌して称賛しているが、実に中国における像法時代の理の一念三千の釈義はその時代の衆生済度の法門として、光輝に満ちている。しかし、あくまでも末法御本仏日蓮大聖人の事の一念三千（御本尊）の法門ご出現のための法門であり、かつ、そのために妙楽出現の意義がある。

ゆえに天台大師は「後の五百歳遠く妙道に沾わん」といい、妙楽大師は「末法の初冥利無きにあらず且く大教の流行す可き時に拠るが故に云云」といって、末法御本仏の出現および南無妙法蓮華経の広布を予言し渇仰していたのである。

道邃和尚

中国の天台法華の正統を継ぎ、貞元十二年（西紀七九六年）より二十一年にわたり、伝教大師および義真に天台法門を伝えた。二十四歳で具足戒を受け、後、妙楽大師の弟子となり、「止観」「輔行」を授けられ、師の命をうけて楊州・越州等で弘教し天台山国清寺に住した。

行満座主

中国の天台法華の僧で妙楽大師の高弟であり、道邃とともに伝教大師に法を伝えた。中国姑蘇の人で二十歳で出家し、その後、妙楽大師の弟子として十五年随逐し、仏隴寺の座主となる。著書に「六即義」一巻「涅槃疏記」十二巻等がある。

【伝教大師】（付義真）

諱は最澄。わが国の平安朝時代の天台宗の開祖であり、像法時代に法華経を広宣流布して人々を済度した。

西紀七六七年―八二二年の人。父は三津首百枝で、先祖は漢の孝献帝の子孫・登万貴であるが、日本を慕って帰化した。神護景雲元年（西紀七六七年）に生まれ、幼時より聡明で十二歳で出家し、二十歳にして具足戒を受け、仏法の乱れをなげいて決然と立って衆生救済の大願を起こし、比叡山に登り一心に修行し一切経を学んだ。ついに法華経こそ唯一の正法なるを知り、天台大師の三大部等を学び弘法に邁進した。桓武天皇は大師の徳を感じ、三十一歳にして内供奉に列せしめた。その後、一切経論および章疏の写経、法華会の開催等につとめた。また、大師わずかに三十六歳にして、南都六宗の碩徳十四名を高雄山寺において桓武天皇列席の下、天台法華宗によって、ことごとくその邪義を打ち破り、帰伏状を出さしめた。

三十八歳の時、天台法華宗還学生として義真等を連れて入唐し、仏隴道場に登り、天台大師より七代妙楽大師の弟子、行満座主および道邃和尚について、教迹・師資相伝の義・一心三観・一念三千の深旨を伝付された。

帰国後も天台法華宗の奥義をもって諸宗を破折し、また、金光明・仁王・法華の三部の大乗教の長講を行ない、宇佐八幡の神宮寺で法華経を講じて託宣を受け、紫の袈裟を受けたという。その後も嵯峨帝の信任厚く、殿上で多くの高僧と法論し、大いに打ち破って法華最勝の義を高揚した。ついで迹門円頓の大乗戒壇の建立、および一切を義真に相承して弘仁十三年（西紀八二二年）六月四日辰時、比叡山中道院において、右脇にして

入寂す。ときに寿五十六歳であった。六月十一日、大乗戒壇の建立が聴許され、冬十一月、嵯峨帝は「哭澄上人」の六韻詩を賜うた。伝教大師の著述には有名なものも数多いが、なかでも「法華秀句」三巻、「顕戒論」三巻、「註法華経」十二巻、「守護国界章」三巻等はその重なるものである。

伝教大師は薬王菩薩の再誕たる天台大師の後身といわれ、像法の末、日本国に出現され、人皇五十代桓武天皇、五十一代平城天皇、五十二代嵯峨天皇の厚き帰依をうけて、像法時代の法華経の広宣流布によって平安朝時代の輝かしい文化を生み、いちおう平和な時代を現出せしめたのである。

ただし、あくまでも釈迦仏法の範囲であり、末法では日蓮大聖人の教えによる以外はない。ゆえに伝教大師も末法の御本仏のご出現を予言し、渇仰され、また日蓮大聖人は「彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華経と唱うる癩人とはなるべし」（撰時抄二六〇ページ）と仰せられ、御本尊の功徳をお説きになっている。

義真和尚

比叡山延暦寺第一の座主である。相模の人で、幼くして叡山に登り伝教大師の弟子となり、師とともに入唐した。伝教大師滅後、法を受け、天長元年座主となり、同四年勅を奉じて迹門円頓戒壇を建立す。同十年七月四日、寿五十五で寂す。著書に「天台宗義集」一巻、「雑疑問」一巻等数部がある。

【日目上人】

日蓮正宗第三祖日目上人は文応元年、伊豆国仁田郡畠郷の生まれ、御父は新田五郎重綱である。十三歳の時から同国の走湯山に上り修学されていたが、文永十一年（西紀一二七四年）、日興上人弘教の縁にあわれて弟

子となり、建治二年（西紀一二七六年）、身延山に登り剃髪された。

身延山にあってはよく日蓮大聖人にご給仕申し上げ、毎日、谷川の水を汲みに行くので自然に桶を乗せる頭骨がくぼんでいたという。

日蓮大聖人が池上邸でご休息のおり、叡山の二階堂伊勢法印が問答に乗り込んできた。日蓮大聖人は日師にその討論を命じ、目師は大衆の面前で堂々と相手の邪義をつき、屈伏させたといわれている。かくて日蓮大聖人ご入滅のときには墓輪番十八人の一人に加えられるほど昇進されていた。

日興上人身延離山にあたっては直弟子としてお供し、大石寺が創立されるや、蓮蔵坊を建立して守護にあたった。

すでに日目上人は師の御代官として公家・武家の奏聞をいくたびか果たされ、日興上人はその行体堅固、他に傑出されていることを認められて、正応三年（西紀一二九〇年）十月、お座替わり本尊を授けられ、重須へ移られてからは日目上人が実質上大石寺の主となっていた。

新田家の本領は奥州陸前国登米郡であり、日目上人は再三往来して折伏弘通の実をあげた。現在まで多数の寺院が残っているのがこれである。正慶二年（元弘三年にあたる。西紀一三三三年）北条家が滅亡して王政復古した機会に、日目上人は広宣流布の大願を成就せしめんと、七十四歳のご老体をもって日尊、日郷のお供をつれ、京都をさして出発された。しかるに美濃の垂井において十一月十五日、伊吹颪の吹きすさぶなかにご遷化されたのである。

このようにして広宣流布の大願成就こそ、富士門流の唯一無二の確信となり、伝統となっているのである。

【日有上人】

大石寺第九世日有上人は南条家の出身で、中興の師と仰がれている方である。

第四世日道上人の時、郷師が蓮蔵坊一帯の地を目師より相伝したと主張して争いを起こし、それ以来、山内の紛争が七十年にわたって続き、疲弊の果てに出られた方がすなわち日有上人である。

ゆえに日有上人は堂塔の修復、学僧の養成に努められると共に、自ら東は奥州、西は京都、北は佐渡と布教に出られ、永享四年（西紀一四三二年）には天奏を遂げられている。

また諸国から登山する学僧のために、化儀上の諸問題を委細にご指南あそばされ、現在、化儀抄として伝えられている。

化儀抄の終わりには日蓮大聖人を本仏と仰ぐべきことをご教示になっている。

老年にいたり甲斐の杉山に草庵を結ばれて、文明十四年（西紀一四八二年）九月遷化された。この前後に種々の伝説があるのも、皆、有師の高徳を慕う心の現われであろう。

【日寛上人】

大石寺第二十六世日寛上人は、日有上人と共に中興の二師と仰がれる方である。上州館林の酒井家の臣で伊

藤市之進といい、江戸で仕官していたが、十九歳の時に発心して出家し、上野下谷の常在寺で剃髪して覚真日如と号された。

二十六歳の時から細草檀林に学び、平素からの修学の功もあって二十六代の能化に進む。正徳元年（西紀一七一一年）、大石寺の学頭として学頭寮にはいり、御書の講義を始められ、ついで享保三年（西紀一七一八年）、宥師のお譲りを受けて二十六代の貫主に就任せられた。三年にして貫主を退き、学寮にはいって、再び講義に専念せられたが、養師のご遷化後また再任して大坊にはいられている。

当門において宗学が隆盛をきわめたのはこの時代が絶頂であるといわれ、四十数人の青壮年学僧を集めて講義が続けられた。また開目抄、本尊抄等の文段を著わされ、日蓮大聖人の御真意をきわめつくされ、その他、宗学の肝要を六巻抄として後世にのこされた。たんに学問のみならず常唱堂や石之坊を建立され、また五重塔建設資金をご遺言状と共にのこされている。

ご入滅の時期をあらかじめお知りになり、一切のご遺言を終わりお暇ごいにまで歩かれて、享保十一年（西紀一七二六年）八月十九日、六十二歳をもって安らかにご遷化あそばされた。

【六巻抄】

大石寺第二十六世日寛上人のご述作の書である。六巻抄とは、三重秘伝抄第一、文底秘沈抄第二、依義判文抄第三、末法相応抄第四、当流行事抄第五、当家三衣抄第六、この六巻の総称である。当抄は、当時、むらがり起こった邪義・邪見に対して、徹底的に破折をされた折伏の書であり、宗門の肝要を余すことなく明かさ

れた重要なご述作である。

日寛上人伝（富要五巻三五五ページ）に「同じく（享保）十年乙巳仲春より季夏に至り、当家の大事六巻抄を著述し（題号秘して頭わさず）以て学頭詳公に授け示して言はく、此の書六巻の獅子王あるときは国中の諸宗諸門の狐兎一党して当山に襲来すといへども、敢て驚怖するに足らず、もっとも秘蔵すべしもっとも秘蔵すべし」とある。

日寛上人ご存生の時代は、全国各所に檀林（学校）がもうけられ、時運が学問に集中していたかの観があった。そして、それらの流義はたくみに説くといえども、みな天台の亜流であり文上脱益仏に執するものばかりであり、さらに、それからいつ脱して、流々の門祖の邪義謗法をかばい、末法下種の主師親、宗祖日蓮大聖人の正義を曲解するものばかりであった。

当時までに、邪義をかまえて来た主なものは、次のごとくである。

①身延派日講（本迹一致・身延）②八品派日隆（本迹勝劣・京都）③身延派日朝（本迹一致・身延）④要法寺派日教（本迹勝劣・京都）⑤要法寺派日鏡（本迹勝劣・京都）⑥要法寺派日辰（本迹勝劣・京都）⑦妙法寺派日我（本迹勝劣・保田）

これらの流派は、いずれも大聖人滅後二〇〇年から四〇〇年の間にできたもので、この間、宗門における邪義・邪見のほとんどが出つくし、世間を迷わせていたのである。そして、その最後に日寛上人が出現され（大聖人滅後四四五年）、六巻抄等のご述作により、これらの邪義・邪見をことごとく破折されたのである。その後、今日にいたるまで、どんな邪義が出現しても、日寛上人の破折の域を出るようなものはまったくないといってよく、日蓮正宗の教学は、この時代より大きく発展した。

さらに、六巻抄は、宗学の肝要を後世に残された書として、重要な御抄である。

次に各抄の大意を概略説明する。

1　三重秘伝抄第一

享保十年（西紀一七二五年）三月のご述作である。

開目抄の「文底秘沈」の句について、文に三段を分ち義に十門を開いて、文底の大法、文底の仏の何たるかを教えられた。権実、本迹、種脱の三相対の法門を明かされ、この大事を示されたためこの抄号がある。破折の対象は、主として、一致門流、付随して、真言、天台等の権迹も破しておられる。

2　文底秘沈抄第二

享保十年三月のご述作である。

文底秘沈の大法は、三大秘法であることを明かされ、破折は各派にわたる。特に、戒壇論では、要法寺日饒と一致派の身延戒壇説を強く破られている。

抄を三部にわけて、本尊編では脱益仏と相対して本門の本尊を、人・法・人法体一によって明かされ、戒壇編では、道理・文証・遮難（しゃなん）によって、富士戒壇を明かされ、題目編では、われらの正法を示され、信心・唱題の肝要なるを明かされている。

3　依義判文抄第三

享保十年四月のご述作である。

一切の経釈は、義によって判読していくべきであることを示されている。文上の義に執すれば、一切の経釈

は、みな脱益仏をさしているとみえる。この邪見を正確に破られ、末法の信心を正しく導かれている。

三大秘法は、合すれば一大秘法、開けば三秘六秘となる。その義をまず明らかにされ、法華経の要文を法師・寿量・神力品等からひいて、いかに判文すべきかと教えられた。ついで、天台の文意をあげて、その正しい判文を示され、もって大聖人の正義を結せられる。破折は、一致派などである。

4　末法相応抄第四

享保十年五月のご述作である。

要法寺日辰の読誦論義と造仏論義を破して、正しい修行、正しい本尊の何たるかを示された書である。すなわち、抄を上下に分け、上においては一経読誦の許されないゆえんを明かして、末法相応の修行は、ただ題目にあることを明らかにされている。下においては、造仏論義に対して破折を加えられ、あるいは、種脱の違いにより、または三徳と人法勝劣等によって、色相荘厳の仏像を立てることが謗法であることをあらわして、大聖人の正意は、事の一念三千の大曼荼羅にかぎることを明かされた。

5　当流行事抄第五

享保十年五月のご述作である。

当門流の正しい修行は、唱題を正行とし、方便品、寿量品を助行とすることを明かされている。すなわち、抄を三分し、所破借文のために方便品を、所破所用のために寿量品を、共に助行することを示し、最後に唱題編において、文底下種の三宝を教えて、これこそ正行であると示され、最後に、その正信の功徳、即身成仏の大益を教えられている。破折は一致派と要法寺派が中心である。

享保十年六月のご述作である。

当宗における三衣とは、法衣、袈裟、数珠なることを明らかにしている。さらに、法衣は薄墨色を着し、他の色を用うべからざることを、道理、引証、料簡の三門に分けて説き、袈裟は白色のものを着する意、数珠の由来等を示されている。

【四条金吾頼基】

四条中務三郎左衛門尉頼基は、北条の支族・江馬家に仕えた忠臣である。父の跡を受けて江馬光時に仕え、父子二代にわたって忠誠のほまれが高い。

左衛門尉であったことから、唐名で金吾と呼ばれた。金吾は武道にすぐれるばかりではなく、医術にも通達していたといわれ、建長八年（西紀一二五六年）ごろに池上宗仲、工藤吉隆等と前後して、日蓮大聖人に帰依し、以来、鎌倉における、日蓮大聖人門下の在家の中心となり、下総の富木常忍、太田、曾谷殿等と、常に外護の任にあたっていた。

ことに文永八年（西紀一二七一年）九月の竜の口の法難に際しては、その知らせを聞くや、飛んで行き、日蓮大聖人の馬のくつわに取りすがり、殉死の覚悟でお供申し上げたのである。また、佐渡ご流罪中にも自らも行き、またしばしば使いを送り御供養をささげ信心の誠を尽くした。

四条金吾殿御返事（一一九三ページ）既に相模の国・竜の口にて頸切られんとせし時にも殿は馬の口に付いて足歩赤足にて泣き悲み給いし事実にならば腹切らんとの気色なりしをば・いつの世にか思い忘るべき。

日蓮大聖人は、人本尊開顕の「開目抄」二巻を金吾に送られたが、この一事をみても四条金吾の信心と門下における立ち場がわかるであろう。

信心強盛で、また直情径行の性格のため、しばしば同僚と衝突があったり、主君光時を折伏しては、不興をかい、日ごろの金吾の信望に、ざん言が加わって建治二年（西紀一二七六年）には越後へ減俸左遷の問題が起こった。

日蓮大聖人はそれに対して「いかなる事も出来候はば入道殿の御前にして命をすてんと存じ候、若しやの事候ならば越後よりはせ上らんは・はるかなる上不定なるべし、たとひ所領を・めさるるなりとも今年は・きみをはなれまいらせ候べからず」（一一五〇ページ）と教え、金吾はその指導にもとづいて振舞ったのである。

その後にも、桑が谷における竜象房と三位房の法論に連座していたために、主君光時より勘気をこうむった。法華経ならびに日蓮房に絶対帰依しないという起請文を差し出しなさい――ということである。従わない場合は、所領没収という弾圧であった。この時、日蓮大聖人は、四条金吾の一大事のため、おん自ら代筆をされ、江馬光時に与えた諫状が、「頼基陳状」である。その後まもなく主君光時にその至誠が通じ、かえって所領を増す結果となった。

日蓮大聖人が池上でご入滅の際には看病され、ご葬送の時は池上兄弟とともに幡を捧げた。そして大聖人ご入滅の後は、入道して所領の甲州内船に隠居し、正安二年（西紀一三〇〇年）に寂した。

【池上兄弟】

池上宗仲・宗長の兄弟は、日蓮大聖人が鎌倉におられた建長年間、四条金吾たちと前後して日蓮大聖人に帰依した。

父の左衛門大夫康光は、鎌倉幕府の作事奉行の職にあり、兄の宗仲は大夫志、弟の宗長は兵衛志に任ぜられ、ともに幕府に仕える身であった。

父・康光は、律宗・極楽寺良観の熱心な信者であったため、池上家では正法と邪法との戦いが繰り返されたのである。

文永十二年（西紀一二七五年）、兄弟の入信いらい二十年前後にして、それは信心強盛な兄・宗仲の勘当となって爆発した。この時、あくまで兄弟が団結して、魔に負けずに信心をまっとうするようにと、日蓮大聖人から賜わったのが「兄弟抄」である。

その後、兄の勘当は一度は許されたが、再び兄が勘当された。この時、ややもすると動揺しがちな弟に対して賜わったのが「兵衛志殿御返事」である。

日蓮大聖人は、弟・宗長に対し「今度はあなたはきっと退転するにちがいない。退転するのをとやかくいわないが、地獄に落ちて日蓮をうらむな。あとはもう知らぬ」と厳しく戒められている。そして、日蓮大聖人の義につこうと思うならば、断固、父に向かっていいきりなさいと指導され、悉達太子が、一時父の心に背いて

も、最後に親を救った例をひかれて、重ねて真実の孝養の道を教えられている。

そして弘安元年（西紀一二七八年）には、ついに父の康光も日蓮大聖人の信仰に帰依することができたのである。弘安二年、父の死に際しては「孝子御書」を賜わり、たびたびの勘当にもかかわらず、兄弟が一致団結して、ついに父を正法に帰依させたのは、「あに孝子にあらずや」とおほめの言葉をいただいたのである。

いかなる困難をも乗り越え、激しく起こってきた三障四魔を打ち破って宿命を打開し、ついに一家の宗教革命を成し遂げたことは、実に、末法の信心修行の明鏡である。

父の死後、宗仲が家督を継ぎ、弘安五年、日蓮大聖人はこの池上邸でご入滅、そのご葬送の時には、宗仲は四条金吾と共に旗を掲げ、弟の宗長は、太刀を持して、その列に連なったと伝えられている。

【南条時光】

日興上人が謗法の山となった身延を捨てて、河合の由比家へ下られたのを、自家の持仏堂へお招き申し上げ、さらに自分の領地内の大石が原に大石寺の基である大坊を建立ご寄進申し上げた大檀那である。

時光の父、南条兵衛七郎は、駿河国富士郡上野郷の地頭だったので、上野殿とも呼ばれていた。しかし、文永二年（西紀一二六五年）三月、幼い九人の子供を残して亡くなったのである。

日蓮大聖人は、入信まもない南条時光のために、わざわざ鎌倉から富士へおいでになって、墓参をされ、回向あそばされた。この時、次男の七郎次郎時光はわずかに七歳であった。

時光、十六歳の時、初めて身延の日蓮大聖人のもとへ御供養の品々をささげた。また深いご慈愛のこもったお手紙をいただいたのであった。

文永十二年（西紀一二七五年）正月には、日蓮大聖人のご名代として南条殿の墓参にみえた日興上人と初めて会われた。十六歳の時光殿と三十歳の日興上人の間に、若々しい法談がかわされ、時光の信仰は、いっそう堅いものになったのである。そして、富士周辺に大折伏戦を展開され、南条の一族をはじめ、多くの入信者をみて、駿河方面の信者の中心者と日蓮大聖人より認められていたのである。

日興上人を中心に、時光らの手によって折伏が進むにつれて、三障四魔は競い起こり、弘安二年（西紀一二七九年）九月には富士下方の熱原で、神四郎ら信者二十人が平左衛門尉の手で捕えられるという大法難が起こった。

時光は、信者の中心者として、迫害を受けた僧俗を外護したが、南条家へも幕府の圧力がかかり、不当に重い税金をかけられて、自分が乗るべき馬も、妻子が着る満足な着物も整えられない、苦しい生活を送ったのであった。しかも、その苦しいなかから、日蓮大聖人への御供養は怠らず、純真に信心を貫いたのである。

日蓮大聖人は、「上野賢人殿」という、日蓮大聖人ご一代にただ一度しか用いられない名誉な呼び名をもって、二十二歳の時光の信心をめでられているのである。

また、弘安五年二月、時光が大病にかかったときには、日蓮大聖人より「法華証明抄」をいただいて激励され、みごと全快して、七十四歳の長寿をまっとうしたのである。

文永十一年より弘安五年までの九年間に、時光より日蓮大聖人への御供養は、おびただしい数になっている。

時光へあてられた日蓮大聖人の御書は、現在残っているだけで三十数通あり、そこに記されている御供養の品のおもなものをあげると、

鷲目　清酒　河苔　芋ノ頭　餐　柑子　蒟蒻　牛房　帷巾　塩　油　小白麦　串柿　白米　栗　柿　焼米　筍　酢筒　薤　薯　十字　摺豆腐　柚　飴　提子　大根　香

などで、身延の山中の日蓮大聖人のご生活を考えての、真心のこもったものばかりであり、地頭といっても小さな上野の郷であり、苦しい生活のなかから、この多くの御供養をされたことを思えば、その信心がしのばれるのである。

大石寺建立のときにも、時光はその財産をかたむけて心から御供養をされた。

また、重須（いまの北山）にご隠居所を建てられるときにも、尽力されているのである。

若くして信心に励み、護法のために偉大な功績を立てた南条時光こそ、われわれの信者の鏡である。

後には、左衛門尉に任官されて、十数人の子供たちに囲まれた幸せな家庭を築いて、功徳の姿を示しているのである。

【富木常忍】

富木胤継は承久二年（西紀一二二〇年）の生まれで、日蓮大聖人より二歳年上である。下総国（いまの千葉県）の人で、幕府の役人であった。日蓮大聖人の弟子となってからは、同僚の大田乗明、曾谷教信等を折伏し房

総方面の中心となって、たえず日蓮大聖人をはじめ門下一同の外護の任を果たしてきた強信者の一人である。

文応元年（西紀一二六〇年）七月十六日、立正安国論を奉った第一回の国家諫暁後、松葉ケ谷の草庵を焼かれ、所を追われた日蓮大聖人をお助けしたのをはじめとして、伊豆の流罪、小松原の法難、竜の口の法難等においても、たえず日蓮大聖人門下の外護の任にあたられたのである。

人本尊を明かされた「開目抄」が四条金吾に、法本尊を明かされた「観心本尊抄」が富木胤継に与えられたということは、四条、富木の両人が、日蓮大聖人外護の任の双翼たることを如実に示すものである。

富木殿が日蓮大聖人からいただいたお手紙のうち、おもなものは次のとおりである。

富木殿御消息（文永六年・西紀一二六九年）
寺泊御書（文永八年）
佐渡御書（文永九年）
観心本尊抄（文永十年）
法華取要抄（文永十一年）
法華行者逢難事（文永十一年）
富木殿御書（建治元年・西紀一二七五年）
観心本尊得意抄（建治元年）
聖人知三世事（建治元年）
四信五品抄（建治三年）

常忍抄（建治三年）
始聞仏乗義（建治四年）
可延定業書（弘安二年・西紀一二七九年）
四菩薩造立抄（弘安二年）
治病大小権実違目（弘安五年）

このうちの観心本尊抄、法華取要抄、四信五品抄は十大部であり、始聞仏乗義、常忍抄等は宗旨の肝要を述べたお手紙である。このことから、富木殿が房総方面の信者の中心者であるからということのみでなく、教学面においても、力のあった人であることがうかがわれる。

しかし、上行菩薩の再誕である日蓮大聖人を目の前にしながら「上行菩薩はいつ出てくるのですか」と質問したり、大黒をまつったり、釈迦像を造立したりしているところをみると、やはり日蓮大聖人の仏法を真に理解していたとはいえない。

また、富木殿の母親が九十数歳で亡くなり、その遺骨を持って日蓮大聖人のいらっしゃる身延に行った帰りに、お経を忘れてきてしまって、日蓮大聖人から「おまえは日本第一の忘れっぽい人だ」とご注意をいただいた、ユーモラスなお手紙もある。

また、母親に孝行したと同時に、夫人とも円満に暮らしていた様子が、お手紙に拝される。

富木尼御前御返事（九七五ページ）いまときどののこれへ御わたりある事尼ごぜんの御力なり……今ときどのにけさんつかまつれば尼ごぜんをみたてまつるとをぼう。

日蓮大聖人に仕えては、性格の強盛さを反映して、信心も純真であったが、日蓮大聖人滅後、日興上人にお仕えできなかったのは残念なことである。

【阿仏房】

阿仏房日得のこと。阿仏御房とか阿仏上人とも呼ばれている。俗姓は京都の遠藤家で為盛といい、法諱は日得、阿仏房と号した。順徳上皇の北面の武士で、承久三年(西紀一二二一年)上皇が佐渡に流されたとき、供をしてきて、佐渡に定住したと伝えられているが、あるいは、それ以前からの土着の人であったともいわれている。

日蓮大聖人の佐渡流罪中に、塚原三昧堂において、大聖人を論詰しようとして、かえって折伏され、それまで深く信じていた念仏を捨てて妻・千日尼と共に大聖人に帰伏した。以来、文永十一年に大聖人が流罪赦免となって鎌倉へ帰られるまで、風雪をいとわず、危険をおかして、櫃を背負って深夜の道を往復して給仕に努めた。

大聖人が身延へ入られてからも、大聖人を慕って、八、九十歳の老体にもかかわらず、三回も御供養を携えて身延へおたずねしている。大聖人はその純真な信心をほめられて、阿仏房上人、阿仏上人等と呼ばれ、またこの信心から出たお目通りが、現在の「お目通り」の儀式となっている。また阿仏房の純真な信心こそは、現在でも総本山に参詣する根本精神となっているのである。

また生命論の立ち場からも、阿仏房御書(一三〇四ページ)には「然れば阿仏房さながら宝塔・宝塔さながら阿

仏房、此れより外の才覚無益なり」と述べられた重要な御書をいただいている。また豊後房、覚乗房、山伏房等を指導し、子息の藤九郎盛綱もその志を継ぎ、曾孫の如寂日満は年少より富士に上って日興上人に仕えて、北陸における仏法の中心者を命ぜられたのも、まったく阿仏房が大聖人の時代に、この方面において大功労があったからである。阿仏房は弘安二年（西紀一二七九年）三月二十一日、年九十一歳の高齢で亡くなった。

【日蓮宗一致派】

日蓮大聖人ご入滅後、法華経の本門と迹門に勝劣があるかないかで諍論が起こり、本迹一致を主張した系統が、身延山を総本山とした日蓮宗（単称）である。そのおもな寺と系統は、

身延山久遠寺　日向　十一世　日朝
池上本門寺　日朗
中山法華経寺（中山妙宗）　富木日常
京都妙顕寺　日像
京都本国寺　日朗

……

不受不施派　日奥
不受不施講門派　日講

日蓮大聖人の仏法は五重の相対で明らかなごとく、迹門は劣って本門は勝れ、文上は劣って文底が勝れるゆえに、文底下種の南無妙法蓮華経でなければならないことを、この宗派はまったく知らないから、すでに本迹に迷っているのである。

身延離山および当時の情勢

身延山には日蓮大聖人が九か年の間お住まいになり、しかも日蓮大聖人は御弟子・日興上人に対して池上相承で「身延山久遠寺の別当たるべきなり」とご付嘱されているが、現在の身延は日蓮大聖人とも日興上人ともぜんぜん関係のない偽物の日蓮宗になっている。こともあろうに蛇やキツネを祭るような怪山と化した理由については、次のような歴史的事実があるのである。

日蓮大聖人は弘安五年に六十一歳でご入滅になるにあたり、御弟子・日興上人に一切を付嘱された。これが身延・池上の二箇の相承である。

よって日興上人はご付嘱どおり身延山において一宗の総貫主、御法主となられたのであった。このとき地頭の波木井実長は「日興上人が身延山においでになったことは日蓮大聖人のご再来と思い、たいへんにうれしくて、世間のことにつけても、出世間のことにつけても、何事も不足はありません」とのお祝いを申し上げている。

しかるに他の五老僧たちは各自の本国に帰ってしぜんに身延を捨てた形となった。それのみか五人は天台沙門と名のって先師たる日蓮大聖人を捨て、上は本尊問題から下は神社参詣等を許す等世間に迎合し、すべてが軟らかになって、先師日蓮大聖人の末法の御本仏としての教風は廃れるにいたった。

三年忌も過ぎて七年忌を迎えるにあたって、日興上人は他の御弟子方に対し、ゆえなく身延を捨てるのはど

うしたことか、早く登山せよと促がされたが、その経緯は美作房御返事に明らかである。

その間に民部日向がただ一人身延山へきたので、日興上人は学頭職につけられた。

それから二、三年に地頭・波木井実長はすっかり日向の軟風にかぶれ、初発心の師たる日興上人を捨てて左記のような四箇の謗法を犯し、日興上人の諫暁もいっこう聞き入れなくなった。

四箇の謗法

1、釈迦像を造立して本尊とした
2、神社（二所・三島）に参詣
3、福士の塔を供養
4、念仏の道場を造立

かくて身延山は民部日向と波木井氏がグルになったまったくの謗法の山と化したので、日興上人は重大なるご決意のもとに、日目・日華・日仙等の直弟子方を率いて身延をご離山になり、河合に行かれ、ついで南条氏の請いに応じて上野に移られ、さらに現在の富士大石寺をご建立になり、広宣流布のもといを固められたのである。

一方、身延山においては、波木井氏の親族中にも清純に日興上人についた方もいたが、原殿をはじめしだいに亡くなって、身延と富士との往来も絶えた。身延山にいすわった日向も晩年には房州の藻原に立ちのき、身延はたんなる波木井の檀那寺となり、まったくもぬけのからになった。以来数百年の間、身延山は濁りきった謗法の山として現在にいたっている。江戸時代の中山の日親は原殿御書を引用して、この当時の日向の謗法行為を責めたうえで「身延山でも池上でも下馬してはならない上に、参詣は沙汰の限りなり」といっている。

現在の身延の堂塔は、徳川時代の初め日蓮大聖人のお住まいになった草庵とは反対側の山をけずって建てたもので、徳川の権力と結びついてできた寄せ集めの新興宗教であり日蓮大聖人とは何の関係もない。

また池上やその他の各寺では日朗を開祖とするものが多い。日朗は一度は日興上人に背いたものの、元来が温良な人で後には富士に日興上人を訪ね、手をとって泣いたと伝えられている。よく世間の俗説に日朗を「師孝第一」などと祭りあげているが、これは後世になってから一致派がデッチあげたもので、事実は日興上人こそ「常随給仕、師孝第一」であったことは歴史が雄弁に物語っているのである。

六老僧第五の日頂も五老僧について日興上人に反対したが、晩年には富木氏と絶縁して、富士で入滅している。その他にも日澄とか日順とか身延系の学僧で富士に帰伏した方もたくさんあるのである。

この当時の情勢を思うに、身延の墓番帳に六老僧が主体となって十八人を選定しているが、そのうちで過半数の十人までは日興上人およびそのお弟子、孫弟子にあたる方々となっている。

日興上人へのご相伝についても、誰一人、異議をさしはさむ余地もなかったことが明らかである。富士に対する罵詈雑言は当時の文献にはいっこうそれが見当たらないで、すべて何百年か後の中世のものにすぎないのである。

身延の教義と本尊

この宗派の教義は、元来本迹一致を主張し法華経の文上を立ててきた。これは同じ法華経でも迹門と本門と文底の三種類あることを知らないから、末法にはまったく縁のない天台の法華経を生かじりして説いているのである。

日蓮大聖人は治病抄（九九六ページ）に「本迹の相違は水火天地の違目なり」と仰せられている。さらに開目抄

上（一八九ページ）には「一念三千文底秘沈」と仰せられているから、日蓮大聖人出世のご本懐は文底秘沈の三大秘法なのである。

この宗派では法華経文上の妙法を立て、あるいは応身の釈尊を本尊として、脱益の釈迦仏を本仏にして日蓮大聖人を菩薩と呼び僧宝としている。しかるに日蓮大聖人は本尊問答抄（三六五ページ）で「此れは法華経の教主を本尊とす法華経の正意にはあらず」と仰せられ、御義口伝下（七六〇ページ）で「本尊とは法華経の行者の一身の当体なり」と仰せられ、また同じく御義口伝下（七六六ページ）に「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり」とお説きになっている。

要するに不相伝家の身延派は、日蓮大聖人のご真意を知らず、日蓮大聖人ご入滅後数百年を経た今日においても、釈尊を拝むのか、日蓮大聖人の像を拝むのか、曼荼羅を拝むのかさえも知らない。

したがって、本尊の教義も儀式も定まらないで、いたずらに時流にへつらっているのが、身延の実体なのである。

日本社寺大観によれば、身延には七面山、石割稲荷、日朝堂、願満稲荷、摩利支天堂、帝釈堂、瘡守稲荷、鬼子母神堂等々があり、本尊を店頭で売りに出しているのである。

本尊の雑乱は日蓮正宗以外の各宗派に共通であるが、特に身延山を本山とする日蓮宗（単称）ははなはだしくて、末端の小寺ではまったくとんでもないものを祭って拝ませている。

昭和三十年三月、小樽問答において身延派代表は、本尊雑乱、身延派教義の誤り等を創価学会代表に徹底的に撃滅された。これは天下周知の事実であり、「小樽問答誌」には詳しく身延の謗法大敗ぶりが記載されてい

る。その後、身延は本尊雑乱に対する学会の追及にたえかね、しかも何を本尊とするかいまもって一致せず、苦しまぎれに日蓮宗教学審議会によって「釈迦像を中心に背後に十界曼荼羅、宗祖の像を左横に安置する」という本尊統一暫定案を決めたとは笑止千万のいたりである。また最近は大曼荼羅は日蓮大聖人正意の本尊にあらずと否定し、一尊四士などを本尊とするなどといいだすにいたり、ますます大謗法を重ねているのである。

池上と中山

池上本門寺（開山は日朗）・中山法華経寺（開山は富木日常）・京都妙顕寺（開山は日像）等はみな一致派で、明治から大正にかけて、身延山を本山とする日蓮宗（単称）を立てていた。

昔からこれらの寺は、だいたいが身延と同じ系統であったが、時には身延に反対しまた仲良くなったりしてきている。戦時中には統合されて膨脹したが、戦後はまた脱退が多く、中山も身延から脱退して中山妙宗という新宗派を開いている。

これら各寺の開山は日蓮大聖人に深縁の方々であり、日朗は六老僧の一人であり、富木常忍（日常）は観心本尊抄をはじめ多くの御書をいただいた方である。しかるに日蓮大聖人ご入滅後、日興上人がただ一人、正法正義を受け継がれて現在の大石寺に伝承されてきているのに反し、他の弟子達は相伝がなく、また第二祖日興上人に反逆したため、一点の濁りが数百年の間にますます濁乱してしまったのである。

日本社寺大観によれば、池上には清正公堂、長栄稲荷、大黒堂等々、中山には荒行堂、刹堂（鬼子母神堂）などがある。

要するに池上は年一度のお会式を売り物にして寺を経営し、中山は鬼子母神を祭ったり、加持祈禱の気違い

荒行行者を養成する本家のようになってしまったのである。

京都の一致派　日朗の弟子・日像は京都に出て布教し、妙顕寺を中心に勢力を張った。日像は帝都弘教の付嘱を受けたと称しているが、当時十幾歳の少年にそんな付嘱があるとは考えられない。その教義は釈迦本仏、本迹一致の邪義であり、京都の一致派は真っ先に堕落し、軟風にそまり、邪宗と妥協して大謗法を犯したのである。現在の身延派の大部分は京都一致派の流れであり、身延山久遠寺、池上本門寺系統は少ないのである。後に京都の一致派から、日蓮宗勝劣派といわれる日隆等の本門法華宗、日真・日陣等の法華宗がケンカ分かれして飛び出している。

日蓮宗不受不施派、同講門派　岡山県妙覚寺を本山とする日奥の開いた一派が日蓮宗不受不施派であり、さらに分裂して日講の開いた系統が不受不施講門派である。その教義は身延系統と同じく本迹一致の邪義である。

【本門法華宗（旧八品派）および仏立宗等】

観心本尊抄（二四八ページ）に「但八品に限る」と仰せられているところから、日蓮大聖人のご正意は八品（法華経の涌出品から嘱累品にいたる八品）であると立て、八品所顕上行所伝の妙法を法宝とし、脱益の釈尊を仏宝とし、上行日蓮を僧宝と立てるのがこの宗派である。

日蓮大聖人ご入滅直後に、本迹一致の主張もあったが、これと反対に本門張りの硬派もあって天目らはその

ために日興上人に反対して一箇の邪義を立てた。

その後、日蓮大聖人ご入滅百三十年ごろ、京都一致派の妙顕寺の日隆、日存、日道等が本迹勝劣を唱えだして八品正意と立てた。

日隆は初めのころ一致勝劣を議論したときに「本迹一致の門流を捨てたことは後悔千万で今後は一致門流に背かない」旨の詫び状を妙顕寺住職に差し出したほどの憶病軟弱な者であったが、その後、妙蓮寺日忠なども八品派を立てて、だんだんに弘まっていった。八品の流れは尼が崎本興寺・鷲栖鷲山寺・岡宮弘長寺・京都本能寺・京都妙蓮寺等である。

観心本尊抄に「但八品に限る」とあるのは、付嘱流通の段をお示しになったものであって、仏と本尊とは寿量品に限るのである。

ゆえに本尊抄の次下には「寿量の仏」「寿量の本尊」と仰せられて「八品の仏」「八品の本尊」とは仰せられないのである。

新尼御前御返事（九〇五ページ）今此の御本尊は……宝塔品より事をこりて寿量品に説き顕し神力品・嘱累に事極りて候いしが云云。

しかも八品派は観心本尊抄（二四七ページ）の「此の本門の肝心南無妙法蓮華経の五字に於ては……八品を説いて之を付嘱し給う、其の本尊の為体……」の文を無理に曲解して「之を」とは「八品を」と読んでいる。これはとんでもない誤りで、前後の文脈上、「之を」とは「南無妙法蓮華経の御本尊を」という意であって、決して八品でないのは明白である。八品所顕の本尊とはたいへんな誤りである。

しかも文上脱益の寿量品すら末法には有害無益であって、日蓮大聖人のご正意は寿量文底下種の南無妙法蓮華経であるのである。

御義口伝下（七五三ページ）　然りと雖も而も当品（寿量）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云。

ゆえに八品正意とはまったく意味のない邪説であって、日蓮大聖人のご正意に反するのである。

また、彼らは寿量脱益、八品下種（または神力下種）などというが、これも本尊抄の文底下種の一品二半を知らない邪義である。

さてこの本門法華宗は現在いくらも信者がなく勢力もない。いまは法華宗（本門流）と名のって戦争中に本妙法華宗（真門流）や法華宗（陣門流）と合同して法華宗を結成したが、最近はまた三つに分派して細々と露命をたもっている。

本門法華宗から大正・昭和にかけて分かれたものに、本門経王宗（東京方面）や本派日蓮宗（茨木市方面）などがあるが、いずれも弱体である。

徳川時代の末に八品派から分かれたものに日扇の開いた本門仏立宗がある。現在は法華宗（本門流）より新興宗教たる仏立宗のほうが大きな勢力をもっている。

勝劣八品派仏立講の開祖は長松清風で、死後、日扇と呼ばれた。文化十四年（西紀一八一七年）四月、京都蛸薬師室町に生まれた。姓は大路、後に長松家を継ぐ。二十九歳の時、浄土宗より日蓮宗に改宗し、三十二歳

の時に出家。しかし、まもなく還俗して居士となった。清風は東山の西行庵に行って島田弥三郎と協力し、日耀のもと八品講の改革に乗り出した。当時、八品隆門は久遠派と皆成派に分かれて、互いに自派の論を正当化する論議がやかましかった。清風は「御法のしるべ」を著わし、高松講の頼該に贈り、協力して皆成派に反対した。安政四年一月十二日、京都八品堂の谷川浅七宅において華洛八品を興し、仏立講と称して高松八品講より分離独立した。文久二年（西紀一八六二年）大津に法華堂を建てた（後に長松山仏立寺と号す）。こうした清風の活動は、他寺の目の上のこぶとなり、本応寺や大津六十四か寺から新義異流としてにらまれ直訴された。明治元年（西紀一八六八年）七月「清風は切支丹の法を使った」という罪名のもと、入獄した。こうして仏立講は弾圧されたのである。清風は、三途不成の新義を立てないこと、勝手に本尊を書写しないこと、山命師命に背かないこと等の誓約を本応寺に入れ、さらに日熹の弟子になることを条件として釈放された。しかし清風は釈放されると、また新派独立に奔走しはじめた。頼該門下の太田日信が、華洛仏立講と協力して備後に仏立講の一派を興したために、再び皆成派と久遠派が争いはじめ両山対蓮山の不和となった。清風は時期到来と思い、明治十一年（西紀一八七八年）門下の御牧現喜と共に妙蓮寺日耀を扶けて、妙蓮寺の別派独立をはかったのである。しかし明治十五年（西紀一八八二年）八月に寺院側で五山和融が成立した。加えて、妙蓮寺、そして太田日信は両山に妥協、ここで清風の妙蓮寺別派独立は断念せざるを得なくなった。清風は常に別派独立に専念してきたが、この風潮は自らの首をしめる結果となり、自らの仏立講内部にも別派独立が盛んとなった。このため清風自身も、一時身を引き、明治二十三年（西紀一八九〇年）二月、大津において、講内の改革をはからんとしたが、七月十一日、大阪玉江組の招きで赴く途中、急病で没したと伝えられる。時に七十四歳であっ

た。日扇の死相は非業なものであったため、当時の幹部は疑いをもち、仏立講から脱退し、日蓮正宗信徒に折伏をされて改宗し、仏立講は壊滅同様となった。しかし、そのほとぼりのさめた頃に、影響の少ない関東に進出し、京都の宥清寺を本山とし、東京・渋谷の乗泉寺を中心として活動を始めた。

大正二年に仏立講の亀井日慧と乗泉寺の田中清歓の二人が大石寺第五十六世日応上人に法論をいどんだが、徹底的に破折されている(大石寺の自然鳴誌に掲載されている)。昭和にはいり、戦後二十一年ごろから仏立宗と名のるようになったが、日蓮正宗の折伏により徹底的に破折され、衰微の一途をたどっている。そして仏立宗は分裂して在家日蓮宗浄風会(東京方面)、日蓮主義仏立講(名古屋方面)、法華宗獅子吼会(東京方面)等となった。こうしてみると、徳川末期より明治初期にかけては宗教活動は僧侶中心の活動から信徒中心の活動に移った過渡期ということがいえる。この流れは明治、大正、昭和にかけて顕著となり、宗教が広く民衆の手に帰していったことになる。しかしこれが、多くの新興宗教や邪宗教の横行する結果ともなったのは、ひとえに民衆が宗教に無知であり、宗教理念のなんたるかも知らず、宗教批判の原理を知らないためであり、そのために、宗教によって救われるどころか、逆に宗教によって不幸のドン底に落ちていったのである。

【顕本法華宗】

妙満寺派または什門派とも称し、本山は京都の妙満寺で、日蓮大聖人滅後百年のころ、日什が派祖となって開いたものである。

日什はもと比叡山における天台の学者であったが、晩年に日蓮大聖人の御書を拝読して、末法の法華経は日蓮大聖人によらなければならないことを悟り、さて日蓮門下は多くの宗派に分かれてどの宗派が正統であるかがわからず、六老僧もすでに入滅の後であったので尋ねる術もなく、やむなく自ら御書を読んで御書によって悟ったと称し、経巻相承を立てた。

日蓮大聖人も一応は法華経によってわが身が上行菩薩の再誕なりとお立てになったのであるが、法華経には上行菩薩の付嘱が明確に予言されており、日蓮大聖人はまったくその予言どおりのお振舞いの後に、三大秘法抄（一〇二三ページ）に「此の三大秘法は二千余年の当初・地涌千界の上首として日蓮慥かに教主大覚世尊より口決相承せしなり」と仰せられている。ゆえに仏教の真髄は血脈相承・師子相承といって、必ず面授口決のご相伝によらなければならない。たとえ年代が離れていても、経文の証拠によって決定されるのである。

しかるに日什の場合には予言の経証もなく、面授口決ももちろんないままに、経巻相承と立てて自己の正統を主張するのは、仏法を破壊する根本原因となるのである。

日蓮宗ならどんな宗派でも、御書と法華経を手にするのは当然であるが、それでいて多数の邪義を生ずる理由は、こういうところにあるのである。

さてこの宗派では本迹の勝劣を立て、本門の一品二半でなければならないと説くのであるが、法宝には寿量文上・本果の妙法、仏宝には寿量顕本・脱益釈迦、僧宝を上行日蓮と立てることは、やはり天台の文上の一品二半（法華経涌出品の後半、如来寿量品、分別功徳品前半）に執着しており、これは日蓮大聖人のご正意ではない。

法華取要抄（三三四ページ）にお示しのように、一品二半には二意があって、在世の衆生を得脱せしめる一品二

半と、末法下種の衆生のために説きおかれた一品二半とは、その相違が天地雲泥である。それは観心本尊抄においても「又本門十四品の一経に序正流通あり」と仰せられる辺の一品二半と、さらに「又本門に於て序正流通あり」と仰せられる辺の一品二半がある。前者は五重の三段のなかでも第四本門脱益の三段における在世脱益の一品二半であり、後者は第五文底下種三段の法門における正宗分の一品二半であって、両者を混淆することは、まったく日蓮大聖人のご正意に反するのである。

これらの邪義をもとにした顕本法華宗において、明治のころ本多日生が出て雑乱撤廃、本尊統一を叫んだが、いかなる本尊に帰一するかが問題なのである。本多日生は戒壇の大御本尊に怨嫉し、極端な釈迦本仏義を唱えたのである。しかも戦争中は本迹一致で本尊雑乱の本家である身延派と合同したのであるから、まったくデタラメということができよう。最近その一部分は身延から分離して顕本法華宗を名のっているようであるが、大部分は今なお身延派に属して雑乱謗法物と同居しているありさまで、旧来の顕本法華宗になお輪をかけた大謗法を犯しているのである。

【法華宗】

そのほか本迹勝劣を立てる法華宗に法華宗本成寺派（陣門流）と本妙法華宗本隆寺流（真門流）があり、いまはそれぞれ法華宗（陣門流）、法華宗（真門流）と称している。戦争中はこの二派と本門法華宗が合同して法華宗と称したが、戦後はまたそれぞれに分かれた。

法華宗（陣門流）は現在、越後・三条市の本成寺を本山として、日朗の弟子・日印が派祖である。本京都の本国寺と共に日印の教勢下にあったが、日印の弟子・日静は京都本国寺を日伝に、越後本成寺を付して世を去った。その後、日陣は本迹勝劣を唱え、日伝と論争の結果、日陣の本成寺は日伝の本国寺一致派）と絶縁し分立するにいたった。

法華宗（真門流）は日朗・日像の流れをくむ京都妙顕寺（本迹一致派）日具の弟子・日真が、四条大隆寺を開き本迹勝劣を唱えたことに始まる。

これらの宗派はいずれも本迹勝劣を立て、本門寿量品を正意と立てている。本門寿量品を正意と立てるものの、法華経文上教相に執着し、仏宝を脱益の釈尊、法宝を妙法蓮華経、僧宝を上行日蓮と立てていることれは日蓮大聖人の正意とは遠くかけ離れた誤れる邪義である。

すなわち、その一端を示すならば、天台大師の立てた三種の教相いわゆる第一根性の融不融、第二化導の始終不始終、第三師弟の遠近不遠近、このなかの第三の教相をもって、日蓮大聖人が常忍抄（九八一ページ）に法華経と爾前と引き向えて勝劣・浅深を判ずるに当分・跨節の事に三つの様有り日蓮が法門は第三の法門なり」と仰せられている辺の第三法門と同様であると解しているのである。まったくはなはだしい僻見であ

日蓮大聖人の第三法門とは、第一に権実相対、第二に本迹相対、第三に種脱相対して建立した文底下本門のことである。これを天台の三種の教相に相対すれば、天台の第一第二は日蓮大聖人の第一に属し、天の第三は日蓮大聖人の第二に属するのである。そして、さらに種脱相対一種を加えて第三となし、「我が内の寿量品」と仰せられて文底下種の寿量品は事の三大秘法であり、これこそ日蓮の第三法門であると仰せ

るのである。

同じく文上の寿量品にしても、体内・体外の別があって、その相違は天地の開きがある。ゆえにこれらの宗派で執着する文上体外の天台の寿量品では、日蓮大聖人のご本懐とは百千万億倍も劣っているのであり、まったく不相伝のゆえに陥った謬義なのである。

また彼らは偽書日朗譲状をもって日蓮大聖人の直系と主張した時代もあったが、現在は日朗譲状を彼らも偽書と認めており、もはや論ずるにたらない。

他の日蓮宗の例にもれず本尊の雑乱はにぎやかで、本成寺境内には六角堂・番神社・弁財天神・鬼子母神・稲荷神社・諏訪神社等の謗法物を飾って拝ませている。現在いずれも檀家は不幸であり、寺はすたれて昔の姿はぜんぜん見られず壊滅を待つばかりである。

【旧本門宗】

第二祖日興上人、第三祖日目上人のお弟子で、富士大石寺から分立した各派が旧本門宗である。現在は日蓮正宗に帰一しているものが多いが、なかにはいまなお身延派に合同しているものもある。

いわゆる富士門流の八本山とは、年代順でいえば、①富士大石寺を中心として　②北山（重須）本門寺　③京都要法寺　④伊豆実成寺　⑤下条妙蓮寺　⑥小泉久遠寺　⑦保田妙本寺　⑧西山本門寺である。

富士北山本門寺は日興上人が富士大石寺建立後に移られた地であり、日代が第二世となった。開基檀那は石

川孫三郎殿である。

日代が間もなく北山を擯出されて移ったのが西山本門寺である。日目上人が七十四歳のご老体で天奏のため京都へ上られる途中、美濃の垂井でご遷化されたので、お供をしていた日尊がそのまま京都へ行って開いたのが要法寺である。伊豆の実成寺も開山は日尊である。また同じく日目上人のお供をしていた日郷は一度富士大石寺に帰ったが、後に擯出されて房州の保田へ移り、そこで建てたのが妙本寺である。小泉久遠寺は同じく日郷が仮住庵したもので実の開山は日安である。また富士下条妙蓮寺は日興上人の弟子である寂日坊日華上人の開かれたもので、南条時光殿の邸の跡に建てられた。

これらの各寺は、正統相伝家たる富士大石寺に対し、帰一した時代も反逆した時代もあった。明治時代には富士大石寺に帰一し、日蓮宗興門派と称していた。しかし各寺は長年にわたり日蓮大聖人の正義に反することが多かった。

まもなく富士大石寺は謗法の各寺を切りすて、日蓮正宗と称し現在にいたっている。そして他の七本山は邪義を改めぬまま本門宗と称していた。

この旧本門宗は太平洋戦争中に、身延門流に合同してしまった。しかし富士下条妙蓮寺は戦後いち早く日蓮正宗に帰った。

また讃岐本門寺は日華・日仙上人が開かれたのに徳川幕府の宗教行政で北山本門寺の末寺となっていた。そのため敬慎房日精上人は富士大石寺の正義をかざして折伏に励み、領主の迫害で大御本尊に身を捧げられたが、戦後は待望の日蓮正宗帰一をみた。

最近では保田妙本寺および日郷の弟子・日叡の開山になる定善寺等の日向七か寺が、邪宗身延を脱して富士大石寺に帰一する英断に出た。

京都要法寺は真っ先に堕落し、日辰以来、法華経一部読誦・釈迦像造立などの謬義を立てたが、富士大石寺日寛上人の教風によって、宗祖本仏義を主張し本尊雑乱を排して正義に目覚めた時代もあった。しかるに戦争中は率先して身延派に合同した。

最近では大部分が脱退独立して日蓮本宗と称している。西山本門寺も最近は身延と手を切って単立寺院となっている。

【立正佼成会】

「年中下痢をするのは親不幸のザンゲなのですよ、おかあさんを恨んでいるでしょう。その恨んでいる心をザンゲさせて頂ければ人並みの体になれるんですよ」

立正佼成会では〝結んでもらう〟といって、何か悩みがあると幹部にその因縁を説いてもらう。まったくナンセンスなこじつけであるが、結んでもらったらそのとおり実行すれば必ず幸せになれる、実行しなければ〝お悟り(罰)〟があると教えている。〝あなたは色情の因縁が強い〟〝先祖を成仏させていないから、あなたは幸福になれない〟といった類の文句は常に使われている。先祖崇拝と法華経と因縁話を巧みに結びつけて作り上げたのが、立正佼成会の教えなのである。

その成立＝立正佼成会会長庭野鹿蔵（日敬）は新潟の生まれで、十九歳で上京し石原炭店の小僧として働くかたわら、主人について六曜七神や姓名判断を習った。その後独立して漬け物屋や牛乳店をしながら昭和十年ごろ霊友会に入会。その後、天理教信者だった長沼マサ（妙佼）をみちびいた。こうして二人はかなり熱心な霊友会信者になった。ところが当時盛んだった霊友会が内部紛争から崩壊し、妙智会、孝道教団、思親会と分裂を始めた。昭和十三年、庭野・長沼の一派も「大日本立正交成会」として、分派した。

その後の佼成会は霊友会とほとんど大差ない教義を立て、目新しいといえば姓名判断を取り入れた点だけだった。ところが終戦後の混乱に乗じて著しく発展、杉並の和田本町に次々とピンク色の道場を建て、悩みの多い無批判な中年婦人層を相手に蔓延し、今日にいたっている。

作られた教義＝邪宗教はたえず教義を他から盗んでくる。佼成会もその例にもれない。

一、まず題目を唱えさせる。世間では南無妙法蓮華経だから日蓮大聖人の仏法に関係あるのだろうぐらいに考えているが、題目だけを看板に盗み取って、中身は全く何の関係もない邪義で固めた誤った宗教である。

二、入会すると、霊友会と同じく先祖の〝総戒名〟を祭らせる。「先祖の戒名を本尊にせよ」などとは釈尊の一切経にも日蓮大聖人の教えにもぜんぜんない。日本人の先祖崇拝の美風を利用し、勝手に題目と結びつけて作った邪義である。

三、総戒名で始まった佼成会信仰は〝おみちびき〟と〝本部通い〟で明け暮れる。やがて強信者と認められると〝曼荼羅〟が渡される。この〝曼荼羅〟には弘安四年四月五日の日付けがはいっているが、日蓮大聖人とは何の関係もないもので、形よく似せて、勝手に書いたニセ本尊である。さらにその上になると〝守護神〟と

いうのが下付される。中には神札みたいなものが入れてあるが、これらはいずれも魔神の働きをするものばかりである。また入神といって神がかりになり、発音（狐つきと同じ）や、九字を切ったりして完全に魔性を発揮するようになる。

四、佼成会の本尊は、設立当時からクルクル変わってきた。「本尊に迷えば色心に迷う」との御金言のとおり、迷って迷いぬいて、衆生を迷わせてきたものというべきである。

昭和十三年の教団設立当時は、毘沙門天を本尊としていた。外道本尊時代というべきである。昭和十七年に、中野の現在地に移転したさいに、これを大日如来にスリかえた。副会長の妙佼に神示があったからだという。真言同様だから亡国本尊時代とでもいうべきか。

このころには「南無妙法蓮華経　異体同心天壌無窮　日敬」と書いたものを本尊として使用していたが、これは戦時下情勢におもねたものらしく、敗戦で天壌無窮がつごう悪くなるや、このほうはいつのまにか支部旗に格下げしてしまった。もともと、三大秘法は、仏法の三学、戒・定・慧の本体である。くるくる変わったり、支部旗に格下げとなる「定」が仏法にあるものであろうか、初学の者さえこれを知るはずである。日敬をはじめ、佼成会の幹部は、仏法の初学にも達しない外道の者であることが、これでもわかるであろう。

さて、終戦になると、大日のおかしいことに気づいたとみえ、大日を廃して釈迦と取り替えた。この時も、例の妙佼の神がかりによる指示だったことを、彼らは告白している。

ところが、またまた本尊すりかえが行なわれ「偶像主義による呪術的宗教を排して、特定の本尊や偶像によるべきでなく、曼陀羅中心主義によるべきで……」と、説明を加えたが、なんと、三十三年になると、このマ

ンダラ本尊をひっこめて、再び釈迦像に戻ることになった。それが最初に述べた、現在の一尊四士造立本尊というものである。

「本会におきましては、すでに十四年間、あえて真実の御本尊様の発表を差し控えてまいりましたが……」というのが日敬の弁解であったが、今度は絶対だから変えぬといっているものの、またいつなんどき変わるか、わかったものではない。

さて、四諦、十二因縁、六波羅蜜であるが、釈尊が最初の阿含でも、中間でも、最後の法華経の時にも説いていたようにいっている。だいたい、四諦、十二因縁の法は、二乗を求める者のために説いた法、六波羅蜜は菩薩乗を求める者のために説いた法であり、それゆえにこそ、法華経一仏乗を説くにあたって「四十余年には未だ真実を顕わさず、是の故に衆生の得道差別して、疾く無上菩提を成ずることを得ず」と排したのである。

法華経に「諸の菩薩の中に於て正直に方便を捨てて但無上道を説く」「但楽って大乗経典を受持して余経の一偈をも受けざれ」と。「余経の一偈をも受けざれ」とあるが、日敬になると「方便という語は真実への導入であり、われわれ凡夫としては、どうしてもこの入口を潜らなければ真実へ至れないもの、またそれが結局は、最も近道になるわけでありますから、佼成会の教えの中には多分に方便の要素を含んでおります点も、そのような意味におきまして……」ということになる。彼は、法華経のなかに出てくる十二因縁とか、四諦とか、六波羅蜜という単語が、否定のためにいわれていることに気がつかず、法華経のなかでもこれらを説いていると思っている。

また、十二因縁、四諦そのものの解釈が珍妙をきわめている。だいたい十二因縁は、一個の生命が十二因縁

の間を循環していく姿、それによって六道を輪廻する原理として説いた一種の「三世の生命論」である。

それが日敬の手にかかると、無明と行とは両親、親（過去の）、祖父母。識、名色、六入、触、受、取は、子、自分、父母（いずれも現在の）、有、生、老は孫、子、自己（未来の）という。珍妙きわまる「三代の生命観」となる。三世の生命論と三代の生命論、世と代との一字違いかもしれないが、それが即、仏と魔との違いである。

六波羅蜜の説明で、日敬は「布施が六波羅蜜の菩薩行のなかで一番大切であり、これには財施（金銭の布施）云云」と説いている。

いったいどの経文に、六度の中で布施行が一番大切だなどと説いているというのか。また、布施波羅蜜をタネに、佼成会が信者に「布施」を強制してよいという理由はどこにもない。これを禁じて、ただ唱題の一行だけを教えられた大聖人の教えを破り、釈迦の経文にも反して、布施が一番大切だなどと憶面もなく無知な会員に教える日敬は、まさに食法餓鬼そのものである。

佼成会が建て物で人目を奪う一方で、使う手が姓名判断で、これも有名なものである。字画で吉凶を占い、六曜、九星、方位何でもござれで、この点からすればまさに「民間迷信総合大学」というところである。佼成会では「法華経を所依の経典とする本会が、姓名鑑定、六曜九星を用いることは、けっして悪いことではなく、むしろ法華経の本旨に基づいた正説であります」と、懸命にP・Rしているが、本部でこうしてあと味の悪い予言をいただいて、ついに、それをのがれたいばかりに入会させられてしまった会員こそ、気の毒である。

本部の法座で行なわれる因縁とオサトリ（罰論）も有名である。要はなんでもザンゲのしるしは布施に現わせというのである。天理教の行き方をそっくりもってきたものである。だいたい、教団のもとは霊友会からもってき、金の集め方は天理教バリで、そして組織から布教方法、更に新聞、出版物等々にいたるまで学会のマネをしているのが、その実態である。

【孝道教団】

天台宗でもない、邪宗日蓮宗ともいえない奇妙な「熟益正法」なる珍説をふりまわす新興邪宗教が孝道教団である。

孝道教団の教祖を岡野正道という。彼はもと天台宗の坊主であったが、昭和の初め横浜で小さなラジオ屋を開いていたところ妻キミ子と共に霊友会にはいった。熱心に「おみちびき」をやり支部長になった。

しかし彼は、霊友会の幼稚な教えにあきたらず、別に新しい一派を開いたのが孝道教団である。終戦後、横浜六角橋に本部を設け、さらに現在の鳥越山を買収して孝道山と称した。

統理に岡野正道、副統理には岡野キミ子がなっていて支部の組織がある。入信すると総戒名を書いた仮本尊を与え、多くの「おみちびき」をすると、マンダラや守護尊神なるものを売るところは霊友会などと同じである。

彼らの唯一の教義である「熟益正法」なるものは、オトギ話同様で、現在の日本人の宗教的無知を証明する

ものである。

その唯一の教義というのは次のようなものである。

「現在は釈尊滅後二千五百余年である。釈尊滅後二千年から二千五百年までの末法五百年は、南無妙法蓮華経の題目だけを唱える上行所伝の下種益の法華経が弘まった。しかし二千五百年以後は熟益の時代で、無辺行所伝の法華経、すなわち熟益正法、みのる法華経でなければ功徳はない」というのである。

このような一時の思いつきは、少しでも仏教を知るものなら誰でも破折できるであろう。なるほど法華経といっても、在世の法華経、像法時代の法華経、末法の法華経と三種がある。種熟脱という法門も法華経のみに説かれている。

しかし法華経嘱累品の予言のように迹門熟益の法華経は薬王菩薩の再誕たる天台・伝教によって余すところなく弘通された。しかし末法の現在において迹門熟益の天台宗の教えでは、ぜんぜん功徳がないどころか逆に不幸になるのである。

現在は末法の御本仏日蓮大聖人が一往外用の姿で法華経神力品の予言のように、上行菩薩の再誕として三大秘法の南無妙法蓮華経を弘められ、無辺行、安立行、浄行等をはじめとする地涌の菩薩が広宣流布に励むのである。

日蓮大聖人が報恩抄（三二九㌻）に「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」と仰せのように、末法五百年はおろか、末法万年尽未来際までも、三大秘法の大御本尊の功徳は輝くのである。

そのほかに、法華経のどこにも「無辺行」が出現して熟益正法を弘めるなどということは説かれていない。法華経のどこにもないことを勝手な我見でいうのは仏法を壊乱する大仏敵である。日蓮大聖人の下種益とは、下種益、熟益、脱益を一度に生ずる即身成仏の大功徳をいうのである。歴劫修行の熟益は常識で考えても仏が弘めるはずがないではないか。しかも岡野正道が無辺行菩薩の再誕だなどといいだすにいたっては、もってのほかである。

御本仏日蓮大聖人の仏法に反逆し、釈迦仏法まで冒瀆する孝道教団の姿は、仏法の法理に照らしても、無間地獄は疑いのないものである。

【砂村問答】

江戸時代の末期、文化文政年間に、江戸目黒の住人で永瀬清十郎という熱心な日蓮正宗の信者がいた。清十郎の折伏は果敢をきわめ、後、尾張法難で戦った人たちは、この清十郎の折伏によるものであったといわれている。

そのころ、江戸砂村（現在の江東区砂町付近）に篠原常八という一致派の信者がいた。常八は、佐渡に日蓮大聖人の難所をたずね、帰途、会津若松で一致派の教義を弘めていた。しかし、そこへたまたまきていた永瀬清十郎の徹底的な破折にあい、屈伏して「これ以後は一致の邪宗を捨て、富士門流の信者となり、帰国のうえ、正法を弘通します」といって江戸に帰った。

江戸に帰った常八は、再び清十郎に会って法門を聞き、ますます強盛な信心に励むようになり、一致門流を折伏して歩いた。一致派の連中はくやしがって、なんとか常八を食い止めようと、成瀬玄益という学者と問答をさせることにした。

問答の当日は、双方から六、七百名の聴衆が集まって行なわれた。しかし、清十郎のすきのない追及の前に、玄益は前々の大言壮語はどこへやら、問答の初めから、ろくろく返答らしい返答もできずに引きさがってしまったのである。

この結果は、江戸中にしだいに広まったので、砂村周辺の一致派の連中は、汚名をばん回すべく、梶柔之助をかつぎだした。一致派は、清十郎の留守に、常八と問答して、打ち負かそうとしていたのであったが、問答の当日、ひょっこり清十郎が現われ、一同は大いに喜び勇んで当日の問答に臨んだ。柔之助の方は、清十郎の姿を見て驚いた。

梶は常八の敵ではなく「傍には迹門、正には本門」とつぶさに一致の邪義を攻められ、清十郎にとどめをさされ、記録には「梶赤面し閉口した」と、しるされている。

一致派と富士門の勝劣は、実にはっきりしたものであったが、席中も家の外もののしりあい、一致方の聴衆がたまりかねて土のかたまりを清十郎に投げつけた。

この卑劣な行為が一致派の者だ、やれ念仏宗の者だと責任のなすり合いになり、他宗と一致派が、くんずほぐれつの同士打ちの大騒動となった。富士門の人々は、さわぎのなかを悠々と引き揚げたのである。この二つの問答を、砂村問答という。

【霑志問答】

霑志問答の発端は、明治十一年（西紀一八七八年）十二月、北山本門寺住職玉野日志が、時の大石寺第五十五世下山日布上人に対して、書面で疑難を寄せてきたことに始まる。

玉野日志は、大石寺の繁栄に反して、衰微する一方の北山本門寺を復興するために、京都の要法寺から迎えられた人物であり、そのために大石寺に対して、何らかの手を打つ必要に迫られていた。

そこで、大石寺四十八世日量上人の書かれた「富士大石寺明細誌」（俗に宝冊と呼ばれていた）を取り上げて、その内容について五十項目の疑難をあげて返答を求めてきた。

これに対して日布上人はただちに返書を送り、日志の理由のないいいがかりを論破して、戒壇の大御本尊に対する信心なき悪口は、大謗法堕獄の原因であると断言された。この日布上人の返状に続いて、当時の御隠尊猊下として本山におられた日霑上人（五十二世）がさらに、日志の提出した難問について、一つ一つを取り上げて破折した。ここに日霑上人と玉野日志との問答が始まり、数度の往復があった。そこから、後にこの問答を霑志問答と呼ぶようになった。

富士宗学要集には、

日志の第一問　明治十一年十二月

霑師の第一答　明治十二年一月

露師の第二答　明治十二年月日不明
露師の第三答　明治十二年二月七日
日志の第二問　明治十二年三月十五日
日志の第三問　明治十二年五月十五日

の六通が収められているが、この外にも、なお数回の往復があったものとみられる。

日志の議論は大石寺の伝説を集めた宝冊に対して、アラ捜しの邪難をかまえたもので、日露上人からかんで含めるように破折され、しだいに返答に困って閉口し、かえって自山の謗法を証明する形になった。

諸々の創価学会批判（身延派日蓮宗の「創価学会批判」、仏立宗田中日広の「創価学会折伏早わかり十二問答集」、顕本法華宗窪田哲城の「日蓮聖人の本懐」、身延派安永弁哲の「板本尊偽作論」、本化妙宗連盟高橋智遍の「創価学会が真実なら」など）は、すべてがこの玉野日志の邪義の受け売りであり、すでに日露上人によってすべて破折しつくされたものである。

問答開始後わずか四年、明治十五年七月、日志は五十歳で死んだ。

【小樽問答】

昭和三十年三月、学会の大進出による檀家の減少にたまりかねた身延派では、学会員の少なかった北海道小樽で、法論対決を迫ってきた。

学会では、戸田前会長自ら小樽へ飛ばれての陣頭指揮のもと、池田現会長の司会によって、辻武寿、小平芳平の両教授が代表として立ち、身延側の長谷川義一、室住一妙の両僧正と対決することになった。

昭和三十年三月十一日、雪の小樽市公会堂で千余の聴衆を前にして世紀の法論が戦わされたのである。

司会者の挨拶に始まり、十二分間ずつの講演ならびに五分間ずつの補足講演、さらに一般からの質疑応答があり、最後に四講師の対決で終わったのであるが、身延派は、終始学会側に圧倒されたのである。

こうして、創価学会対身延派の法論対決は、学会の大勝利のうちに幕を閉じ、身延滅亡への一大痛撃となったのである。

第七編　古今の思想哲学の説明と批判

【九十五派のバラモン】

紀元前一五〇〇年ごろ、中央アジア方面から現在のインド人の先祖であるアーリア人が、インドに侵入しはじめた。彼らは、先住民族のドラヴィダ人などを征服して奴隷となし、農牧生活を営んだ。彼らの宗教は、すべての自然現象を神とみる多神教で、当時神々に祈った呪文を集めたものが、リグ・ヴェーダである。

その後、祭祀を専門とするバラモン（僧族）が出現し、バラモン教を発展させた。

ヴィシヌ、シヴァ、ブラーフマの三神を信仰し、祈りと難行苦行の修養とによって業と輪廻とから解脱し、涅槃の境地に達しうると説いた。ヴェーダも、リグ・ヴェーダのほかに、サーマ・ヴェーダ、ヤジュール・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダができ、それらを中心に独特な宗教が展開した。その終極のものはウパニシャッド哲学であるといわれる。

これは、ヴェーダの哲学ともいえるもので、多年にわたってでき上がり、いろいろな説が取り入れられているので、かならずしも一貫してはいないが、大ざっぱにみて、その根幹をなすのは梵我一如の説、宇宙創造説、輪廻および解脱説などである。

梵我一如というのは、宇宙の本体を梵（ブラーマン）人間の本質を我（アートマン）とし、両者の関係を追究して梵と我は一如であるとする説である。

この梵や我の本質は、無限大にして無限小であり、空間および運動を超越していると説いて、これを常住・

永遠・不生・不滅・不老・不死などと呼んで、変化を否定している。

また、宇宙創造説では、太初には唯一無二の「有」があって、それが創造繁殖の欲望を起こして、「火」「水」「食」などを生み出し、「有」はそれぞれに「生命なる我」としてはいり、それらを複雑化して、この世界を創造したという説である。

また、人間を中心とした生類は、今世のみで滅することなく、過去より現在、現在より未来へと再生を続けると説くのが輪廻説である。そしてそれからの脱却を解脱といったのである。

また、これらの説の究極を、因果という面からみれば、因中有果（人生の苦しみや幸福は因果が一体である）の説、因中無果（因と果は別個なもので、人生の幸・不幸は自然のものであるからあきらめようとする）の説、この二説を合わせた因中亦有果・亦無果の説に立て分けることができる。

そして、これらの説の実践として、実に非合理な修行をしたのである。それについて日蓮大聖人は次のように示されている。

開目抄上（一八七ページ）　各各・自師の義をうけて堅く執するゆへに或は冬寒に一日に三度・恒河に浴し或は髪をぬき或は巌に身をなげ或は身を火にあぶり或は五処をやく或は裸形或は馬を多く殺せば福をう或は草木をやき或は一切の木を礼す、此等の邪義其の数をしらず。

これらバラモン哲学を体系づけた学派は、ミーマーンサー、ベーダーンタ、サーンキャ、ヨーガ、バイシェーシカ、ニャーヤ等である。

その邪見は、九十五派（九十六派ともいわれる）の支流を生み、常に争い合い、釈尊出世の当時まで盛んだ

ったのである。

釈尊は、これらの因果の理法を説かない低級なバラモン哲学を打ち破り、九十五派に分かれていた思想界を仏法に統一せしめたのである。

しかして、釈尊によって徹底的に破折されたバラモン教は、インドで仏教が衰えると、再び復活してきた。現在のヒンズー教（インド教）がそれである。

その後、インドにイスラム教が侵入し、インド教徒とイスラム教徒とはことごとに相争い、そのため英国に難なく占領される破目となったのである。インド独立に際しても、ついに両教徒は国を分かち、インド（インド教徒）とパキスタン（イスラム教徒）の二国が成立したのである。

開目抄上（一八七ページ）に詳しい。

【儒教】

総じては、中国古来の思想、別しては、孔子・孟子の流れをいう。「修身、斉家、治国、平天下」の言葉もあるように、道徳を重んじ平和な社会を築こうとしたもの。

孔子は紀元前五世紀の人で、仁、義、礼や忠孝の道を説き門弟三千人といわれた。その言行は「論語」として残っている。後に数々の派に分かれ、孟子が性善説を唱え、荀子は性悪説を説いて対立した。

孔子と同じころ、老子は無為自然の道を説き、欲望を去ることが大切であるとした。

日蓮大聖人は、開目抄上（一八六ページ）のなかで、

> 此等の聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり、其の所詮は三玄をいでず三玄とは一には有の玄・周公等此れを立つ、二には無の玄・老子等・三には亦有亦無等・荘子が玄これなり、玄とは黒なり父母・未生・已前をたづぬれば或は元気よりして生じ或は貴賤・苦楽・是非・得失等は皆自然等云云。かくのごとく巧に立つといえども・いまだ過去・未来を一分もしらず玄とは黒なり幽なりかるがゆへに玄という但現在計りしれるににたり、現在にをひて仁義を制して身をまほり国を安んず此に相違すれば族をほろぼし家を亡ぼす等という、此等の賢聖の人人は聖人なりといえども過去を・しらざること凡夫の背を見ず・未来を・かがみざること盲人の前をみざるがごとし……過去未来をしらざれば父母・主君・師匠の後世をもたすけず不知恩の者なり・まことの賢聖にあらず、孔子が此の土に賢聖なし西方に仏図という者あり此聖人なりといゐて外典を仏法の初門となせしこれなり。

と述べられ、三世にわたる生命観を知らず、ただ現在ばかり少し知ったような儒教を低級なりと断定されると共に、実はこの儒教は仏法の初門であったことを示されている。

さて、儒教は宋時代にはいって朱子学や陽明学となって発展したが、これが日本にわたって来てかなりの影響を与えたことは見のがせない、鎌倉幕府を倒した建武の中興、また徳川幕府を倒した明治維新には、思想的背景として朱子学があった。しかし、これらの革命が決して長続きせず、かえって日本を不幸にしたのは周知のとおりである。

徳川時代には、幕府の保護のもとで発展したが、その結果は日本の思想界の低級化をもたらしたのである。

親孝行ということにしても、ただ親のいうことに従うのが親孝行であると単純に決められてしまった。

しかし日蓮大聖人は、こと仏法に関しては、大きい立ち場から孝を説き、また法華経のかたきになる親にはつかないのがかえって真の親孝行であると示されている。

兵衛志殿御返事（一〇九一ページ）法華経のかたきになる親に随いて一乗の行者なる兄をすてば親の孝養となりなんや、せんするところひとすぢにをもひ切って兄と同じく仏道をなり給へ。

一昨日御書（一八三ページ）世を安じ国を安ずるを忠と為し孝と為す。

【ユダヤ教】

旧約聖書を聖典とするユダヤ人の民族宗教。

ユダヤ教の起源は前一三世紀末頃、エジプト王の圧制を受けていたユダヤ人をエジプトから脱出させるのに指導的役割りを果たしたモーゼが、エホバを全世界の創造主として全人類を支配する唯一絶対の神とし、十戒を説いてその信仰を中心にユダヤ人の結束を図ったことに求められる。

ユダヤ教が成立したのは、前六世紀後半、ユダヤ人がバビロン捕囚から解放されてパレスチナに帰国し、エルサレムに神殿を建設し、厳格な律法のもとにエホバへの忠誠を誓ったときである。ユダヤ人には、この律法を有するのはユダヤ民族だけであるから、ユダヤ民族こそエホバから選ばれエホバと特殊な契約を結んだ選民であるという選民思想が生まれた。この思想は、亡国のため流浪の生活を強いられ、絶えず迫害の危機にさら

されていたユダヤ人の、民族的独立を守るための精神的なささえとなった。

ユダヤ教は、はじめエルサレムの神殿を中心とした祭司宗教的な性格をおびていたが、パレスチナを離れて各地に離散したユダヤ人が増加するにしたがって、彼らの間にシナゴーグ（教会堂）が設立され、シナゴーグを中心とした共同体組織がつくられるようになった。紀元二世紀にユダヤ人がローマから徹底的に鎮圧され、エルサレムに出入りすることすら禁じられるにいたってからは、もっぱらシナゴーグを中心とした教団組織で信仰が続けられた。その教団には礼拝儀式をつかさどる律法学者がおかれ、ユダヤ暦によって信仰の行事が行なわれ、週一回の安息日には、一切の労働を休んで一日を祈禱で過ごした。

ユダヤ教の教義の特色の第一は、徹底した一神教である。第二は律法主義である。最も重要とされているのはモーゼの十戒であるが、旧約聖書全体を律法としている。ユダヤ人の日常生活は律法の規定にしたがって行なわれているが、律法に詳細な解釈が加えられて、安息日の規定、祈禱の規定等、数多くの規定が設けられるようになり、ユダヤ人の日常生活はこれらにしばられて固定化していった。イエスはこのような繁雑な律法中心主義に基づく信仰生活を批判して、新しい信仰（キリスト教）を唱えたのであるが、ユダヤ教の遺産を多く受け継いでいるのである。第三は選民思想である。これは他民族との同化を防ぎユダヤ民族の独自性を保持するのに役立った。第四は終末観である。前三世紀頃、ユダヤ人の間に、自分たちの敬虔な信仰にもかかわらず、神よりのむくいがいっこうに現われないという懐疑思想が起こった。これに対する解答として現われたのが終末観である。これは、人間が支配する現世ではユダヤ教徒の希求する恵まれた世界はこないとし、この世の終わりに、ユダヤ人の中からメシア（救世主）が現われ、彼の統率のもとにユダヤが世界を征服し、神の審

判によって諸民族の不義が裁かれ、神の国が実現するという思想である。

キリスト教ではイエスをメシアとするが、ユダヤ教では僭称者として磔刑を求めている。ユダヤ教の終末観はユダヤ人の統一国家実現という政治目的に根拠を与えることになり、一九世紀のシオニズム運動も、そのあらわれであるとされている。

ユダヤ教は唯一絶対神による天地創造説を立てているが、これは因果の理法を無視した観念論的な思想である。また厳格な戒律主義は人間性を抑圧した低級な実践方式である。唯一絶対神を掲げて選民思想を鼓吹したことは、ユダヤ民族の結束と独自性を保持するのには役立ったが、ユダヤ民族が亡国の悲惨を経験して、二千年にわたる流浪と迫害の生活を強いられたことは、このようなユダヤ教の教義や思想があまりにも低級かつ独善的、排他的であったことに、根本的な原因がある。

【キリスト教】

ユダヤ民族には、もともと旧約聖書を中心とするユダヤ教があった。彼らは神がこの天地を創造したと信じ、また人間の先祖であるアダムとイブが原罪をおかして楽園を追放されたと信じていた。そして、彼らの予言者たちは救世主キリストの出現を予言していた。

しかし、エルサレムに出現したイエス・キリストの説くところはユダヤ人の期待に背き、イエスは最初から迫害を受けた。そして最後に、十二人の弟子のなかのユダの裏切りによって、十字架にかけられて死ぬ。

その後、ペテロやパウロらの熱烈な布教によって、キリスト教はしだいに当時のローマ帝国内に弘まり、ローマ帝国の崩壊にともなって、北方のゲルマン民族のなかで信奉され、ついに中世のキリスト教世界をもたらしたのである。

その後、ルネッサンス（文芸復興）のころローマ・カトリック教会の腐敗堕落は目にあまるものとなり、免罪符の発行を攻撃して立ち上がったマルチン・ルターの宗教改革により、旧教と新教とが対立することとなった。

その後アジア方面にも布教の努力がされたが、現在では、その教義は近代の科学的批判に耐えることができず、唯物論などにも押され、欧米においても急速に衰えつつある。

その教義は「旧約聖書」と、弟子たちによるキリストの言行録である「新約聖書」に基づき、ギリシャの哲学者プラトンやアリストテレスの思想を取り入れて形成したものである。

まず第一にキリスト教は、唯一絶対神がすべてを造ったと説く。そして神とは、全智全能、完全であり、愛であり、善である等といっているが、その神の実体、存在の因果などはまったく明かされていない。もし本当に、完全な神が人間を造ったとすると、生まれながらの不平等や、一生不幸の宿命に泣く人々の存在など、説明できないことになる。

また、不幸の原因は、アダムとイブがおかした原罪によるとして、人はみな生まれながらに罪人だと決定している。それを消すために告白という形の懺悔をさせるのである。

また、キリスト教で説く愛にしても「汝の敵を愛せよ」という言葉は、理解はできるが、実践不可能な無理

な注文である。そのように叫ぶキリスト教徒自身、絶えず争いを繰り返してきた現実をどう説明するのであろうか。さらにその説くところの生命論は、処女懐胎、キリストの復活、昇天、さらに天国の問題等、どれをとってみても矛盾だらけであり、非科学的なものである。

キリスト教が、西欧の世界におよぼした影響は測り知れないものがある。あらゆる歴史のかげに絶えずキリスト教があったといっても決して過言ではない。宗教的な戦争だけをみても、十字軍、フランスのユグノー戦争、アメリカの独立戦争等々、さらに文学、美術、音楽、建築、学問をはじめ、一般社会生活に与えた影響は多大である。しかしそれが、科学の進歩を遅らせた原因ともなっているのである。

わが国においては、四百年も前に伝えられながら、少しも弘まっていない。これは、宗教の五綱の原理からいっても当然なことであろう。

現在では、社会事業等を盛んに行ない、宗教本来の姿を忘れ去っている。

【イスラム教】

アラビアの予言者マホメット（西紀五七〇年頃～六三二年）を開祖とする宗教で、その開祖の名をとってマホメット教といわれ、また、回教、フイフイ教などとも呼ばれる。仏教、キリスト教とならんで世界三大宗教の一つ。仏教が東洋に、キリスト教が西洋に、特殊な文化の花を開かせたのに対し、回教は、両者の中間地域にアラビア文化と結合して、特殊な色彩の文化をみせた。

イスラム教の教理は、大きく信仰と儀礼に分けられる。

信仰は六信よりなる。六信とは神、天使、経典、予言者、来世、天命に対する信仰をいい、このうち中心になるものは神・アラーに対する信仰である。イスラム教は顕著な一神教で、全智全能にして無始無終の神であり、天地の創造主であるアラーのほかには、一切の神を認めず、マホメットはその使徒と認められるにすぎない。人間はこの神を画像、木像などに表現できないとしているので、イスラム寺院（モスク）の中心となるものは、聖地メッカに向かう壁につくられた切り込み（壁龕）があるだけで、神像というものはない。六信の中の天使は神と人間の媒介者としての立ち場を占め、信仰にとっては付属的な意味しかない。経典には、モーゼの五書、ダビデの詩論などがあるが、最も完全なものはコーランである。予言者についてもいろいろあるが、真のアラーの使徒である予言者はマホメットとされる。来世については、死の天使に生前の信仰の有無をとわれ、生前の行ないによって極楽か地獄の応報をうけるが、ただし、アラーの神に祈りを続けていけば、その慈悲に浴して、善人も悪人も共に一切の人間は救済されるとしている。また、この世の一切の出来事は、神意によるものとし、人間の意思というものは、神意のゆるす範囲内で自由であるという信仰である。

イスラム教徒が実行すべき宗教上の儀礼のなかでも特に重要なものを五つあげ「イスラムの五柱」と呼んでいる。この五柱についてはやや異説があるが、礼拝、施物、斎戒、朝勤の四つと、他の一つを念真とするものと聖戦とするものとがある。礼拝は毎日五回、夜明け、正午すぎ、日没前、日没直後および夜に行ない、これが宗教生活の根本となっている。信徒はだれでもどこにいても、そこが清浄でさえあれば礼拝を行なえるが、必ずメッカのカバ神殿の方向に向かって行なわなければならない。特に金曜日（安息日）の正午の礼拝に

は全身を清め、晴れ着をつけて、所在のモスクに集まって集団礼拝を行なうのが本義になっている。

斎戒とは断食のことで、マホメットが天啓に接した回教暦九月に一か月間、日の出から日没まで飲食を断って身を慎み、アラーの大慈に包まれる行である。

施物は税金のようなもので、全信者がだいたい年収の四十分の一ぐらいにあたる物か金を教団に義務的に納める。本来の意味はアラーに預けたことになっているわけであるが、実際は、教団において貧しい人々、奴隷の解放、聖戦への軍備、有益な施設、公共の事業その他の慈善事業などに使用されていた。

朝勤、いわゆる巡礼は、メッカ（マホメットの生地）への巡礼で、イスラム教徒は、世界のどこにいてもメッカ参りを一生の願いとしている。毎年一回の大祭に参加すれば、「ハッジー」と自称し、世間から尊重される。聖戦は異教徒、不信の徒との戦いで、コーランのなかにも繰り返し「アラーの道において戦う」と鼓舞している。そのために命をささげたものは、最後の審判の日には、必ず天国に迎えられるとされている。そして、アラーの前では、身分や階級の差も民族や国境の区別もなく、まったく平等の「教友」として結合さるべきであるとするのがこの教えの本義である。

イスラム教は、〝コーランか剣か〟をスローガンとする不信徒征服の布教活動、アラーの前では身分や階級の無差別を説く平等主義の教理などが背景となり、これに教徒の人口の増加も加わって、世界三大宗教の一つにまで発展した。

現在では中近東地域ばかりでなく、中国やインドシナ、インドネシアにも多数の教徒がおり、またアフリカでは、北から中部に向かって、原住民のあいだにも弘まりつつあり、教徒数は世界中に約三億ないし、四億と

称せられている。

しかし、これは、人道的な理想を唱えるだけで、真に宗教本来の使命である、人間の幸福をつかむ方法を説いていない。

生命における因果の道理を無視した教理とそれに基づく人間性を無視した形式化した儀礼とが、イスラム教徒を近代文明の進歩から、大きく取り残させる要因となったことは否定できない。また布教のためには、流血をも辞さない戦争を聖戦と称していることなど、生命の尊厳を無視した低い宗教の証拠である。

【ヒンズー教】

インド教のこと。インドにおいてバラモン教に原住民の民間信仰を取り入れ、そのうえに、仏教やジャイナ教の影響をうけながらしだいに形成されたのが、この宗教である。現在、インド国民の大部分はヒンズー教徒で、インド連邦を中心にアジア各地に約三億の信徒がいる。インドの独立以来、パキスタンに分離したイスラム教徒との確執が続いている。

ヒンズー教には開祖がない。長い歴史のなかで、教義、儀式などが形成されてきた。したがって教義も確定しておらず、宗派によって教義の説き方もことなっている。ヒンズー教が確立したのは紀元前四世紀のマウリヤ王朝のころとされているが、盛んになったのは紀元四世紀のグプタ王朝になって、バラモン教が国教として採用されるにおよんで、はじめ下層階級のあいだに信奉されていたヒンズー教も、しだいに上層階級の支持を

うけて、社会的にも大きな力をもつようになってからである。次いで紀元八・九世紀の諸王朝分立時代には新聖典の編纂が行なわれたりして、ヒンズー教は一段と興隆した。一二世紀後半にはイスラムのインド侵入があって、ヒンズー教はイスラムの影響をうけるようになり、さらに一九世紀以後にはキリスト教の影響もうけるようになった。

ヒンズー教では多数の神を認めているが、そのなかで主要な神とされているのがシヴァとヴィシュヌである。シヴァは狂暴でおそろしい神性をもつ山の住人である。必殺の強弓を手にし、虎皮をまとい、山野を荒らしまわり、熱病、咳毒をもって人畜を襲う。しかし彼は幸福吉祥の神ともなる。人々は彼を恐れ、ただなだめることによって、恵みにあずかろうとした。ヴィシュヌはもと太陽の光明作用を神格化したもので、広大な慈悲神とされ救世を目的としている。巨大な若人として表わされ、三歩をもって天・空・地の三界を濶歩し、初めの二歩は人間の視野のうちにあるが、第三歩は最高天にあり、そこでは諸神および祖霊が住して福楽を享受し、甘露の泉が湧くと説かれている。なお神話のなかに出てくるクリシュナはヴィシュヌの化身といわれている。ヒンズー教ではこのように破壊神としてのシヴァ、存続神としてのヴィシュヌ、さらに創造神としてのブラフマンの三神が崇拝の対象となっている。そしてこの創造、存続、破壊の過程をこの世が繰り返し、それぞれの時代にこれらの神々が姿を変えて出現するという輪廻の思想が説かれている。そしてこの輪廻の状態からの解脱が究極の理想とされ、ヨーガといわれる精神修練を実践することによって、解脱が得られるとされている。またヒンズー教には霊魂不滅の思想がある。ヒンズー教の聖典としては、ベーダのほかに、マハーバーラタとラーマーヤナの二大叙事詩があり、さらにプラーナやバガバッド・ギーターなどがある。

ヒンズー教は現在、ヴィシュヌを主神とあおぐヴィシュヌ派、シヴァを主神とあおぐシヴァ派、ドゥルガー女神を崇拝するシャクティ派に大別されるが、その他にも多くの諸派がある。これは主として僧職者に関する区別からきているが、これらの宗派が互いに対立したりすることはなく、またヒンズー教は他の宗教とも反目したりすることはない。一般の民衆も、これらの区別をさほど意識していない。同一の寺院に神々の像が雑然として祭られている。参詣する者も、これらの像を片端から拝む姿が見られる。

ヒンズー教は原始宗教の自然崇拝に見られるような自然力を擬人化した多神論を基本にしており、輪廻思想や霊魂不滅思想も因果の道理を無視した観念的なものであり、またその実践方法も人間性を抑圧するような、低いものである。とくに輪廻思想によって根拠づけられたカースト制度の固定化は、インド人を無気力にし、動きのとれない低迷した社会をつくりだして、インド社会の近代化をはばみ、インドを現代文明から大きく取り残させることになった決定的な要因となっている。

【演繹法と帰納法】

演繹法とは、あらかじめ知られている普遍的法則から特殊的法則を導き出す方法のことである。数学、論理学、哲学などの論証的学問がこの方法を使用する。これに対して帰納法は自然科学、社会科学のような実証的学問で主として使われる。

演繹法は演繹的推理ともいい、二つの意味がある。第一は形式的推理と同じ意味で使われるもので、与えら

れた判断または幾つかの判断を経験にたよらず、もっぱら論理の法則に基づいて結合することによって、その中に直接間接に含まれる判断を抽出する推理方法である。すなわち判断の事実内容を抽象して判断の形式または判断結合の形式に目をつけ、そこから必然的に結論を導く場合の推理方法のことである。三段論法がその代表的なものである。第二は冒頭のように、普遍的法則から特殊的法則を導き出す推理方法であるが、これは形式的推理の一部と考えられる。一般に演繹法という場合は、この第二の意味に使われることが多い。

帰納法とは、特殊なあるいは具体的な事実から出発して、普遍的法則を導き出す推理方法のことである。そのうち、すべての事例をあげて結論を導く完全帰納法と、いくつかの例をあげて全体を類推し、結果を導く不完全帰納法の二つがあるが、前者は既知の知識を一括する点で意味があるが、帰納の本来の意義は、既知の比較的少数な特殊の事例から一般的法則を導くところにある。したがって後者には推理の上で飛躍があり、蓋然的であり、誤謬に落ち込む危険が多い。しかし前者の方法が困難もしくは不可能であることから、後者のほうが実際的方法であるといえる。ジョン・スチュアート・ミル（西紀一八〇六年～一八七三年）はこの飛躍を許すための根拠として自然の斉一性（自然は同じ事情のもとでは同じ現象をおこすような統一された秩序を保っているという公理）を提唱した。たとえば個々の人間が死ぬことを観察して、人は必ず死ぬものであるという法則を導いたとき、これはすべての人を観察するわけにはいかないから不完全帰納法であるが、この場合も自然の斉一性という公理によってそれに根拠が与えられるのである。そのほか帰納法の一つに幾何学的帰納法、数学的帰納法がある。

演繹法と帰納法とを結合することによって、真理の把握がより正確になるとの考え方が、十九世紀ジョン・

スチュアート・ミルによって行なわれた。これは仮説が直接に検証できず、ただ間接的にしか検証できない場合や、知られている種々の法則を、それより包括的な法則の下に統一し組織づけようとする場合に用いられる。そのため、観察した事実によって仮定されるものを仮設として立て、その仮設から論理的に結果を演繹し、その結果が現実と合致するかどうかをみて法則を確立するのである。これは演繹的帰納法と呼ばれる。

古代ギリシャ哲学では、アリストテレスが帰納法的であるのに対して、プラトンは演繹法的である。中世ヨーロッパでは演繹法的なキリスト教神学が支配的であった。近世では帰納法が主流を占めて自然科学の発展に寄与してきた。その影響をうけて哲学界も英米哲学は帰納的である。半面、ドイツにおいてはヘーゲルなどの演繹哲学が栄えた。

このようにヨーロッパでは演繹、帰納の両派が分けられるが、東洋においても演繹哲学・帰納哲学の二つの流れがある。東洋と西洋とを比較した場合、東洋の方が、より多く演繹的であるといえる。

【性善説と性悪説】

性善説は中国の孟子（前三七二年～前二八九年）が唱えた説で、人間の本性は善であるという孔子（前五五一年～前四七九年）の説を発展させたものである。孟子の公孫丑上によれば、人間の心には徳に向かう四種類の心があると論じている。すなわち、一に惻隠（あわれみ）の心、二に羞悪（不義を恥じ憎む）の心、三に辞譲（へりくだる）の心、四に是非（正を正とし不正を不正とする）の心である。この四つの心が仁・義・礼・

智の徳の根本であるといい、これが誰人にもそなわっているとしたのである。しかし、悪い環境の中に入れば物欲の心が生じ、このような徳に向かう正しい心の判断が欠けて、善性が失われると説いたのである。このように孟子は人間の本性が善そのものであるとしたのではなく、心に善への端（芽ばえ）があり、絶対善に向かってこれを拡充させるために修養を積まなくてはならない、と論じたのである。しかし、唐代宋代の学者になると、人間の本性そのものが絶対善であるとする説が多くなった。孟子以後の儒家思想家においては、性悪説を主張した荀子（前三七二年～前二三〇年頃）だけが例外で、あとは性善説の流れをくんでいる。この性善説は国家権力の強制なしでも、道徳だけで天下が治まるという儒家の政治理念の根拠となった。

性悪説は、荀子が唱えた説で、人間の本性を悪としている。荀子は紀元前三世紀、戦国時代末期に活躍した儒家。「荀子」性悪篇に「人の性は悪、その善なるは偽なり」と述べている。偽は人為、作為の意。荀子は人間の性を悪と断定する根拠を、人間には利己的欲望があるという事実の上に置いた。すなわち人を欲望のままに放置するならば、世の中は争いを生じ、やがて滅びる。ゆえに人は自己を律することにより、性を善に転化しなければならない。その価値判断の基準となるのが礼儀である。礼儀を守り、実践することによって聖人にいたると説く。荀子の考え方は、戦国時代の乱れた世相と彼が無神論者であったことに大きな原因があるといわれている。

荀子は性悪説を孟子の性善説に対抗して説いた。しかし性悪説では、性が悪であるはずの人間がどうして善の行為をするのかについては十分な説明がない。

このように孟子にあっては、人間の欲望を少なくして人間の本性にそなわっている善性を拡充するという道

徳の形成を主張し、荀子にあっては、欲望の大小を問題とせずに、人間の本性は本来欲望をもつものであって、これをよりよく分別するための基準として礼の必要性を説き、善は偽であり、作為であると論じたのである。しかし人間の本性は元来悪とか善とか断定できるものではない。人間の一念には善念も悪念もともにそなわり、この善念・悪念が縁（対境）に応じて顕現し、善行をなしたり、悪行をなしたりするのである。ゆえに対境となるものが大切になるのである。根本の対境とは宗教であり、正法に縁するか、邪法に縁するかによって、人間の本性は善ともなり悪ともなるのである。ゆえに性善・性悪と断定する考え方は道徳律の域を出ない低い哲学にすぎないのである。

【唯物論と唯心論】

身と心、物質と精神のどちらが根本的であるかということが、古来より相容れない哲学上の形態をとってきているのである。すなわち、物質が本質的根源の実体であるという唯物論と、精神が本質的根源の実体であるという唯心論とである。

㈠唯物論――ギリシャのデモクリスト（前四六〇年～前三七〇年）が原子論（アトム論）によって、唯物論を体系づけたのを初めとして、近世の自然科学と共に一切の事象を物質に還元するとか、また、物質的物理的過程として説明できないものはないという人間機械論、または人間の精神作用も、宗教・芸術・倫理・道徳・文化的所産もすべて必然的に物質的、物理的、生理的な過程にしたがって派生する現象であるとして、機械的唯物

論が風靡したのであるが、やがて、カール・マルクス（西紀一八一八年～一八八三年）、フリードリッヒ・エンゲルス（西紀一八二〇年～一八九五年）によって単純な機械論的唯物論を越えた、新しい立ち場が見いだされ、打ち立てられたのが弁証法的唯物論である。

機械的唯物論の誤りは、事物をその生成消滅の過程のうちにおいてとらえることをしないで、ただ事物を静止的にとらえたところにあり、いいかえればそれがまったく、非発展的、非歴史的な見方をとったという点にあったのである。この欠陥を補い発展させた弁証法は、さらに存在の二つの領域、自然および歴史に適用することによって二つの部分に分かれた。すなわち自然弁証法と唯物史観（史的唯物論）となって、広く発展し、ついには共産主義という一大陣営を生むにいたったのである。

要するに唯物論は、単純なものから理論的に高度なものまで、物質の他に何ものも存在しないときめ、認容しない考え方、主義であるが、原因結果の連鎖はすべて物質的であるとするからには、最初の物質はどのようにして生じたのであろうかということが問題になる。またすべてを物質に還元して考える唯物論者自体が、絶対に対象になりえない自己の思考作用そのものをどう処理していくのであろうか。

物質的現象に還元されえないのが意識現象なのであるから、意識現象を物に還元して説明すること自体、対象化された意識現象がすでに意識現象そのものでないことを自証していることになるのである。

(二)唯心論――唯物論に対して理想主義といわれる立ち場におかれるのが唯心論である。

心の働き、精神作用はあくまでも物質に還元されない独自の様相をもったものであるとし、物質的存在が存在として容認されるのは意識がこれを容認するからであり、したがって意識が存在を決定するのであるとする

とき唯心論となるのである。

精神的なもの（霊魂、精神、理性、意志等）こそが本質存在であり根源であって、物質的なものをその現象あるいは仮象とみなす学説。唯心論的立ち場をとる学者は多くにのぼるが、古代のソクラテス、プラトンを初めとして中世のアウグスティヌス、近世においてはロック、ライプニッツ、カント、ヘーゲル、バークレーなどがあげられる。これらの哲学思想はキリスト教とともに西欧をささえてきた理想の灯火であったが、結局、唯心論は観念論であり、理想主義にほかならないのである。「最後の最も若くして最も新しき哲学は、最も発展した、最も豊かにして最も深き哲学である」ことを自ら是認したヘーゲルの哲学であったが、一方に唯物弁証法、また一方に実存哲学を、自らの否定反抗として自らの中より生ぜしめた現実の事態が物語るように、生活、現実から遊離した思弁の哲学は、人間の現実をいかんともしがたく、打開する力もありえず、かえって思弁的理性が現実に屈したということは、唯心論もやはり観念にすぎなかったということにほかならない。

総じて唯物論も唯心論も、共に片寄った一面からの見方であり、考察にとどまったものであるから、根本的問題はその背後に残されたままなのである。

【実存哲学】

いわゆる実存哲学とは、ハイデッガー、ヤスパース、サルトル等によって代表される現代哲学の支配的思潮のが唯心論なのである。

実存哲学の源は、パスカル、キェルケゴール、ニーチェにさかのぼることができるが、十九世紀後半以降、特に第一次世界大戦が与えた深刻な影響を契機として、西欧全土をおおった不安と危機意識は、あらためて、喪失した本来の自由を取り戻そうと、これら先駆者たちの教えを成長させた。

このように、いわば十九世紀来、運命的に西欧精神が体験せざるをえなかった歴史的・社会的苦悩から誕生したのが実存哲学なのである。

もともと実存哲学は、人間主体性の回復を掲げて出発したものである。二千年にわたりヨーロッパ精神史を支配してきたものは、キリスト教であり、またそれまでの主流をなしてきたものは、デカルト、カント、ヘーゲル等の観念論哲学または実証哲学であったが、実存哲学はそれらと対決し、その価値観を逆倒させるものであった。

その主張するところは、「実存」が本質に先立ち、哲学は主体性から出発しなければならないとする主体性中心の哲学である。本質存在や、キリスト教的造物主から人間が規定されるのではなく、人間自身の主体性が真理であり出発点であるとして、思考以前に、まず生存する人間存在を、哲学的関心の中心においたものである。

ハイデッガーは、人間の存在を分析することから過去・現在・未来の時間性を問題としつつ、人間各自が負う歴史的運命の根源に目覚めることを説く。今ここに現にあるように「投げられた」自分は、たんに物のようにではなく、どこまでも世界内に交渉をもつ具体的生存者として、常に同時に、未来に向かって脱自的に己を「投げ企てる」存在である。「投げられた」ということは過去につながり、「投げ企てる」とは未来に関係することであるから、現在は過去的にして同時に未来的である。このような時間性を歴史性として、これを運命

に関係づけて「歴史的運命性の根源」へと、良心の呼び声に聞きしたがって、おのれを脱自的に覚醒せしめるところに実存としての自由がある、というのである。

またヤスパースは「超越者」（神）なる概念を設け、その実在的認知は「哲学的信仰」によって体験されると説き、一方サルトルは、神の存在を否定し、人間は、現にある自己から外に脱出する存在であると説く。

実存哲学は、実証主義に対しては人間存在が物質的なものに還元できないと主張し、観念論に対しては、存在が思惟に優先することを力説することにより、実証主義、観念論をしのいでいるといわれるが、従来の唯物または唯心から脱却したあらたな思索を実在に対して展開した学問上の功績は認められるとしても、直面する人間の危機の現実的な解決ということにおいては、従来の哲学と結局かわりがないといえよう。

結論していうならば、ハイデッガーの「歴史的運命性の根源」も、ヤスパースの「超越者」も、サルトルの「無神論的実存哲学」も、結局は三大秘法の大御本尊即南無妙法蓮華経の大法則を指向しているにほかならないのである。

【プラグマティズム（実用主義）】

実存哲学と並んで、アメリカ、イギリスを中心とした現代の支配的な哲学はプラグマティズムである。これはイギリスの経験主義的な性格を本質にもって、アメリカの土に生まれた独自な哲学である。

行動を思考の上位におき、観念の意味と真理性を行動上の帰結、成果として理解する立ち場である。

これは、南北戦争後のアメリカ資本主義の急速な発展を背景として、従来の絶対的観念論にかわったアメリカ・ブルジョアジーの哲学であるといわれている。

一八七八年、パースが「いかにしてわれわれの思想を明確にしうるか」という論文を発表したのが始まりで、これを受けついで友人のジェームズが一九〇七年に「プラグマティズム」と題する著述をおおやけにして、一躍、世人の注目を集めるようになった。さらにデューイによって、インストルメンタリズム（器具主義）として展開された。そしてシラーの人本主義があらわれ、現在ではシドニー・フックによって大成されようとしている。

実用主義（プラグマティズム）の根本的な立ち場は、われわれの認識が、実際の経験生活のうえで、有用性（利益）を事実証明されたときに、初めてその概念は真である、というところに見られる。つまり、思想・思考・概念など、すべて実際の行為によって実行してみて、初めて価値を有するのであり、真なりと信じることの正否如何は、行動の結果がこれを検証し、判定するのである、とする。いうなれば「論より証拠」という相対主義的・経験主義的・実証主義的な、科学実験至上主義にほかならない。

ところで科学・実験の方法は、常に仮定から出発して、その仮定が真なりと断定されるまでに、できるだけの実験操作を繰り返して帰納的に結論を得、その得た結論をもう一度仮定として演繹を試み、普遍妥当性を確めて真偽を断定する——ちょうどそのように、社会・政治・経済などすべてにわたって、機械論的な独断や決定論をあくまで否定し、社会科学の法則にも誤謬のひそむ可能性を肯定して、一度誤りが発見されれば、ただちに仮定に帰って再吟味をしなおす用意をもっていなくてはならない、というのである。かくして、個人の意

見は絶対ではなく、常に仮定として公論により採択が決せられねばならないとして、民主的個人主義の倫理が基調になる。

デューイは、これを社会的教育的関心に結びつけ、思考のもたらす概念は、われわれの行動経験を一定の実践目的を満足せしめ成功させるための「道具」にほかならないとして、知性の社会変革的意義にゆきつこうと試みた。

プラグマティズムはたしかに結果を重んじ実生活に直接に結びついているという点で、いままでにない新しい哲学であるといえる。いかにもアメカ的合理主義ともいうべきものである。しかし、所詮、資本主義社会の実際上の必要が生んだ哲学である以上、全人類に幸福をもたらすとはいい得ないし、ましてや永久不変の指導原理であるとはいえまい。

【唯物弁証法】

唯物論を土台として立てられたマルクス主義の弁証法をいうのであり、ヘーゲル流の観念論的弁証法に対するものである。弁証法、弁証法的唯物論ともいわれる。

弁証法は、ギリシャ語からでた語義であり、本来は対話・問答の技術を意味するものであったが、これを事物の発展に、論理として、体系的に確立したのがヘーゲルであった。ヘーゲルは自然、歴史、精神の全世界が、不断の運動、変化、発展のうちにあることを示し、それら運動、発展の内的な連関を明らかにすることを

試みたが、それは概念またはイデーの自己発展（弁証法）であり、現実の世界の過程は、この世界創造以前の絶対者（イデー）の模写とされるのである。こうしたヘーゲルの観念論的弁証法に、弁証法的唯物論は根本的に相対立するのである。

「ヘーゲルにとっては、彼がイデーの名のもとに独立の主体にまでも変えている思考過程が、現実的なものの造物主である……。私（マルクス）にとっては、その反対に、観念的なものは、人間の頭脳に置き換えられ翻訳された物質的なものにほかならない」（マルクス）

すなわち、観念的立ち場に立って、真に存在するものは物質ではなく、抽象的な概念またはイデーであるとするヘーゲルに対して、マルクス、エンゲルスは、フォイエルバッハ（ドイツの唯物論者）の唯物論の非弁証法的な性格と、ヘーゲルの観念的な弁証法の形態を批判して、弁証法的唯物論を樹立したのである。

それによれば、世界の本質は自ら運動し、発展する物質であるとし、意識（思考）はその一つの発展段階としての特定としての有機的物質（脳髄）の所産であり、認識とは、人間の実践を介しての物質の忠実な模写の過程以外のなにものでもない。世界は、この認識活動をも含めて相互に連関する種々の過程の統一であり、矛盾をはらみ質的な飛躍を考えてのうえから、低次のものから高次なものへ進む無限な発展過程であるとされる。

このようにして、弁証法的唯物論は、唯物論的立ち場に立っていっさいの存在を考察し、そこに弁証法的構造、すなわち矛盾とその統一という基本的な構造を見つけだそうとするものであるが、さらに、それは人間社会の歴史に適用されて、史的唯物論または唯物史観として展開されるのである。上部・下部構造、生産力と生

産関係の矛盾による社会の変化という思想がそこで論じられ、社会革命が行われるといわれている。この社会革命はつねに被支配階級に対する闘争という形で行われるというところから、ここに歴史は「階級闘争の歴史」（「共産党宣言」）であるという。

すでに第四節「唯物論と唯心論」の項で述べたように、唯物弁証法は、ひじょうに論理的であり、一面の真理を述べたものであるが、唯物論を根底におくかぎり、偏した哲学であるといわざるを得ないのである。

【科学と宗教】

はじめに科学について、次に宗教について考察し、最後に両者の関係を示そう。

さて一般に「科学」というと、広い意味で「学問」（社会科学、人文科学、自然科学）と同義に用いられる場合と、狭い意味で「自然科学」をさす場合とがあるが、いまは、後者の意味に限定して用いることとする。

科学は物質を対象とした学問であり、外界のさまざまな現象・事物を観察・調査・研究することにより、そこに相互の因果関係を追究し、一つの法則を見いだそうとする。さらにその法則から推論し、新しい分野の研究が進められているのである。

あらゆる学問は、人類に貢献し、幸福をもたらすことを究極の目的としている。それを逸脱したものは、およそ無意味である。そうである以上、科学もまた、物質面から、人類に幸福をもたらすものである。事実、科学の進歩は、めざましいものがあり、人類に多大の利益をもたらしている。交通通信機関の発達、医学の進

歩、原子力の応用等、目を見はるものがある。

しかし他方では、戦争を大規模にし、核兵器等を生み出して、為政者に利用されて現代の危機のもとにもなっているのである。

かように、自然科学の発達は、一方においては文化の向上に寄与し、生活に便宜を与えているが、他面では大きな不幸の原因にもなっているのである。

一部に科学万能主義をいうものがいるが、それは科学を知らない浅はかな考えであり、科学の世界を知れば知るほど、そこにはおのずからなる限界があるのを知るのである。

次に、宗教はどうであろうか。

科学が物質を対象としているのに対し、宗教は生命を対象としているといえる。あらゆる宗教は、死を論じ、死後の生命を述べて、生命の問題にふれているのである。生命こそ最も本源的なものであり、あらゆる文化、あらゆる生活の根底をなすものである。ゆえに生命をあつかっている宗教こそ、あらゆる文化、あらゆる生活の根本となるべきものなのである。

さて次に科学と宗教の関係であるが、以上でわかるように、この両者の本質を見きわめた時、この両者は決して対立するものでもなければ相争うものでもなく、またたがいに矛盾してはならないのである。逆にいえば、科学と矛盾する宗教は、誤った、低級な宗教であるといえる。西欧における科学と宗教の論争、マルクスの「宗教はアヘンなり」の言葉、これはいずれもその宗教がキリスト教という低級な宗教であったことから起こった当然な結果であった。

高度の科学研究者のなかには、宗教を肯定する人が少なくない。たとえば、今はなき二十世紀の偉大なる科学者アインシュタインも、キリスト教を否定しつつも、真の宗教という表現のもとに、偉大なる宗教の出現を渇望している。日本の湯川博士も、人間の知能、科学の限界を述べ「叡知の源泉となる宗教」という表現のもとに、新しい宗教の出現を望んでいるのである。

真の宗教は科学と矛盾しないだけでなく、科学を指導するものである。その点を述べれば、科学は実験を重んずるが、それは無方向、無秩序にするのではなく、一定の方向と秩序をもって実験するのである。また、実験のデータから一つの結論を導き出すにも、推論の段階において、実験者の思想が無意識のうちにもはいりこむのである。たとえば、オパーリンの生命観にしても、弁証法的唯物論がその根底になっており、実験する場合の方向と秩序を与えているのも、また実験のデータから推論する場合も、弁証法的唯物論が大きく左右しているのである。このように、科学に方向と力を与えているのが思想であり、哲学である。アリストテレスが「哲学を科学一般を成立せしめる土台」として、形而上学と呼んだのも、このことを示しているといえよう。真の宗教は、生命を対象とした偉大なる哲学である以上、科学に偉大なる力と方向とを与えるものである。

また、科学は、宗教の一分野である。物そのものの探究、また変化現象は、宇宙のすがたの一断面である。したがって、科学の世界は部分観である。宗教は経文に「如来は如実に三界の相を知見す」とあるように、全体観に立っている以上、科学は宗教の一分野である。

しかして、科学と宗教の真実の関係性について、池田会長の論文の一節を左に引用する。

「科学をリードする宗教は、とうぜん科学性を、その内に包含していなければならない。さらに、科学をはる

かに凌駕し、科学を支えるべき人間生命自体に光明をさしこむ高次の宗教でなくてはならない。この条件に適合するものこそ、三千年来、東洋人の生命の底流となって流れ来たった大乗仏法の真髄であると、私どもは、日夜主張しつづけているのである。

もともと、西洋の科学は、自然を人間生命と分離、隔絶して、そこに貫かれている因果の理法を追究してきた。そして、その分野で、多大の成果をもたらしてきたことは事実である。しかし、それは宇宙、自然のある側面の因果の追究であって、けっして全体ではない。ある科学者が指摘しているように『真理を生み出す何億という鼓動のうちの、まったく小さな一つの脈搏』にすぎないのである。

それに対し、仏法は初めから人間と自然を密接不可分なものと論じ、人間生命に内在する因果の理性を説き顕わし、さらに、人間と自然を貫く因果の理法を体系づけているのである。

すなわち、科学は自然現象を対象とし、因果律を追究する学問であるのに対し、仏法は生命を対象とし、その内面的な因果律を把握した哲学である。その方法論において、一方は分析的、帰納的であり、他方は、総合的、演繹的であるが、その究極において、両者は絶対に矛盾するものではない。

生命の問題は、東洋では遠く三千年前に、インドの釈尊が説き明かし、近くは日本に出現した日蓮大聖人が、より本源的に究明しきっている。戸田前会長は『科学が進歩すればするほど日蓮大聖人の仏法の正しさが証明されるであろう』と述べたが、このことばは、もっとも優れた宗教と科学の関係を示すものとして、時とともに輝きを増していくことであろう」（科学と宗教より）

その真の宗教とは何か。それはいうまでもなく日蓮正宗である。

【価値論】

1　真理と価値

真理とは千差万別の対象の中から一様平等の共通相・普遍相を見いだすものであり、価値とは対象の内部に潜んでいるそれ自体の個別相・特殊性が社会および吾人の生命にいかなる関係を持つかの判断である。

真理の概念は如実に表現した実在の概念で〝あるがまま〟を如実に説明したものが真理である。人生との関係がどうあろうとも真理である。

価値とは対象と人間との間における力的関係性であり、吸引するか反発するかの情的関係性である。

このように真理と価値とはまったくその性質が異なる。さらに両者の本質的な相違をあげれば、次のようになる。

一、真理は創造することはできない。ただ自然にあるがままをわれわれが見いだすだけである。これに反し価値は創造しうる。また見いだされる価値もある。われわれが日常生活に使っている物質の多くは、初め人生との関係がない物であっても、しだいにその有用性が発見され改良・進歩を加えて生活必需物資となったものである。

二、真偽と好悪とは関係がない。人はある時に真を好みある時に偽を好む。真偽は個人の感情とは関係なく、ある判断が普遍妥当性をもつか否かで判定されるものである。これに反し人間は誰でも美利善を好

み、反対の醜害悪を嫌う。これが人間の本性である。

三、真理は不変であり、価値は変化する。真理とは対象の偶然的な要素を捨て、不変の本質を抽象して如実に表現したものである。しかるに価値は対象と評価主体との間に生ずる関係力であるから、一方かあるいは双方の事情が変化するにつれて吸引か反発かの力の量も質も変化するのは当然である。

四、認識作用にあっては真か偽かそれ以外にない。評価作用は量的判断であるから不幸と幸福のように無数の段階がある。

2 認識と評価

対象が主観を感動させた量——すなわち対象と我との力的関係性を意識することが評価であり、対象が主観に映じた印象を補足するのが認識作用である。すなわち認識は客観的であり、評価は主観的である。

「これは馬である」という表現があり、眼前のその動物が牛でも羊でもなくて、世間一般に承認されている「馬」という概念と一致するならばその表現は真であり、しからざる時を偽という。認識とはこのような客観的な標準があり、それに当てはめて有か無か同か異かを確めて判定する。ゆえに何人が見ても真偽・正邪の異なった判定はないはずで、真理はただ一つである。

実際にその馬を見て美か醜かを感じ、あるいは自分の生活に利か害かを生ずるその関係性の判断が評価作用である。すなわち評価は主観的な気分や個人個人の生活状態に支配されて、客観的な標準は成り立たない。もしその関係性について客観的な標準や、普遍妥当な法則が判定されるならば、それは評価ではなくて認識であり、真か偽かと判断されるべきである。

認識の対象は主観の生命に対して直接の関係がないか、または軽微な関係しかもっていない。したがって認識主体はこれに対して冷静にそのなり行きを眺めて客観するにとどまる。これに反し評価の対象は主観の生命に何らかの反応をもつ現象である。したがって評価主体は知的な冷静な態度でいることなく、より強い感情的主観的反応をもつものである。

このように両作用はまったく異質の精神作用である。われわれの日常生活にあっては、認識して評価する場合と、評価してから認識する場合がある。認識のない評価は付和雷同的なものであり、また食わず嫌いや盲信などもこれである。また評価のない認識は対岸の火事であり、生活に直接実証されない学問などもこれである。

認識と評価が混乱する弊害は日常生活に多くある。

一、けんか両成敗という素朴な裁き方がこれである。

一、間違ってまったく他人に仇討ちすること。

「これは何ですか」と質問する時に、「そんなことが判らないのか、バカなやつだ」というように答えたとする。質問者は何であるかの認識を求めているのに、答える者は質問者の人格を評価しているので、これでは答えにならない。このような例は学校にあっても、社会にあっても、家庭にあっても実によくあることで、社会の混乱は実にこの認識と評価の混乱から起こっている。

3　真善美の矛盾

従来の哲学では人間の理想として真善美を立ててきた。しかしよく思索するならば真理は価値でない。また真偽は人間の好き嫌いとは別個に判定されるべき概念であることは前述のとおりである。

なるほどうそをいう人間は嫌われる。しかし、その場合に嫌うものは、相手の人格を嫌うのであって、いわれているうその事実を嫌うのではない。

また真善美を理想とすることは、われわれの生活に最も必要な最も切実な利の価値を除外していることに重大な欠陥がある。哲学や学問が観念の遊戯となり空論となって生活から遊離する原因がここにあるのである。

4　利善美の意味

価値という語が最も早く用いられていたのは経済的な意味においてであろう。価値があるということは、すなわち欲望充足の対象とするにたるということである。しからばその価値の内容となるものは何か。美醜・利害・善悪の三要素である。

美の価値とは目・鼻・耳・口・皮膚のいわゆる五官によって獲得する感覚的・一時的価値である。すなわちわれわれの感情を一時的にもせよ楽しませるのが美の価値であり、これに反するを醜という。

利の価値とは吾人の生命を維持発展するにたる対象との関係状態であり、これに反するを害という。美醜が感覚的一時的なるのに比して利害は全身的永久的の価値である。

善の価値とは各個人が要素となって統一されている社会の、生成発展に寄与する人間の有意的行為をいう。すなわち人間の働きのうち、公益を善といい、公害を悪という。

善悪は社会を評価主体として、利害は個人を評価主体とする。ゆえに社会に対して害を加える個人の行為は、個人には利であっても善ではありえない。また一つの社会に善の行為も、これと対立する他の社会では善として通用せずかえって悪と判定される場合もある。この場合に国家と国家との対立のごときは、あたかも個

人と個人の対立のように利害で判定されるのである。

以上を図示すれば、

一、個人的価値
　　感覚的一時的価値――美醜
　　全身的永久的価値――利害
二、社会的価値――――善悪

5　宗教の価値判定

日常生活の中で価値を問題にする時には、「何でもよい」ということは全然ありえない。必ずAよりもB、BよりもCというように価値のより高いものを求めるのが当然である。学問として知識として知っておく程度のものなら、「何でもよい」のである。

八百屋の店頭にたくさんの果物がならんでいる。それをただ眺めているなら何でもよいのである。しかし実際に自分が買うとすれば、安くて良い物で、しかも自分が今いちばん食べたいと思う物を買うにきまっている。このように生活は価値を求めている。

宗教といえども生活と無関係であるわけがない。実際に自分が信仰すればその教えの是非・善悪がただちに生活の上に現われてくるのである。

ゆえに宗教にも価値の大小・浅深があるのは当然である。イワシの頭でもキツネでも孔子の教えでも釈尊の教えでも、同じだと考えるのは、よほど頭の狂っている証拠ではないか。

6　目的観の確立

何事をなすにも目的を確立してかからなければ盲動となり、闇中模索となる。現代の世間ではことごとく目的観がない。もし目的があるとしても、それは眼前の小目的であって大目的がないからすぐ行き詰まってしまう。学生は学校を卒業すれば何とかなるだろうと思っている。貧乏人は金さえ持てたらよいと思っている。そのような目的はすべて小目的であり、人生最大の目的に対すれば手段となるのである。

目的観の確立にはまず幸福の内容をはっきりつかまなければならない。人間は誰でも幸福を求めている。しかして幸福の内容は価値であり、美と利と善であってそれ以外にはない。ゆえに最高最上の美と利と善を獲得するのが人生最高の目的である。名誉・地位・財産等はその一部分であり一要素である。

このように最大の価値を獲得するために自己の生命の実体を知り、生命の力を知る必要がある。このために正しい宗教がなくて真の幸福は考えられないのである。

語句の解釈

あ

愛染明王　真言密教の明王部の本尊の一つであって、不動明王（生死即涅槃をあらわす）とともにこの部の最重要の本尊とされた。愛染は梵語では羅誐羅闍という。愛貪染著の義。日蓮大聖人の仏法にあっては、御本尊の左端にしたためられ、煩悩即菩提の法門をあらわしている。上野殿母御前御返事（一五六九㌻）等に出ている。経王殿御返事（一一二四㌻）に「さいはいは愛染の如く福は毘沙門の如くなるべし」とある。

阿逸多　弥勒菩薩の名。これよりすぐれた人はいないという意味。無勝、無能勝（人の能く勝るるものなし）、無三毒と訳す。

愛別離苦　八苦の一つで、死、またはその他のさまざまなことによって、愛する者と離別しなければならない苦しみをいう。（聖愚問答抄四七四㌻参照）

阿漚　阿優とも書く。阿は無、漚は有の意。外道の経には必ず阿漚の二字を置く。万法は有無の二を出ないとする。仏経典の初めに如是の二字を置くのは、外道が阿漚と置いて、有無の二道により、ものを判ずるのを破しているのである。（曾谷入道殿御返事一〇五七㌻参照）

会加の小大夫　東条の御厨の御厨人の名と思われる。（新尼御前御返事九〇六㌻参照）

青麦　あうざしともいう。一種の食品の名。青麦を炒り、これを臼でひいて糸のようによって作った菓子のこと。（松野殿御返事一三九〇㌻参照）

閼伽　(1)功徳、功徳水、水等と訳す。転じて、特に仏前（墓前）に供える水を意味する。（善無畏三蔵抄八八六㌻）(2)船底にたまった水を、水というのをきらって、淦ということがある。（阿仏房尼御前御返事一三〇八㌻）

不開門　日蓮正宗総本山大石寺の境内、大客殿と大化城との間にある小さな門のこと。広宣流布の時がきて、本門戒壇建立の時に開かれる特別の門である。ふだんは誰も通さないので「あかずの門」という。創建は不明、第二十四世日永上人のとき再建。

阿伽陀仙人　古代インドで通力をもっていたといわれる外道。大通力をもって十二年の間、耳の中に恒河の水をとどめたという。

阿迦尼咤天　色界十八天の最上天をいう。十八天を初、二、三、四の四禅天に分け、第四禅天を最上品とし、その最後の

辺を阿迦尼吒と名づける。阿迦は色、尼吒は究竟の意。色界の有情は欲界をきらい静慮を修行して生じたものであるから、清浄無垢の色質をもち苦患憂苦におかされることがない。特に最上品の四禅を修した者の住む阿迦尼吒天の果報は、有色界中第一であるといわれる。旧訳に無下天というのも、これ以上の色界の天がないからである。

阿耆多王　阿耆多は梵語、无（無）勝と訳す。随羅然国のバラモンの豪族の小王。釈迦および五百の比丘を請じておきながら、自ら快楽にふけって、供養することを忘れて、釈迦の一行を餓死させようとした。そのため釈迦は、馬が食べる麦を九十日間も食べて飢えをしのいだ。釈尊の九横の大難の一つ。

安芸の僧正　承久三年、後鳥羽上皇を主とする朝廷が、北条氏の鎌倉幕府討伐のために承久の乱を起こしたが、それに先立って、朝廷側では十五壇の法といわれる密教の調伏を行じ、北条打倒を祈願した。そのなかの「威徳王」「金剛竜子法」の調伏を行じたのが、この安芸の僧正である。詳伝不明。一説によれば、天台宗寺門派園城寺の別当・覚朝ともいわれる。（祈禱抄一三五三ページ参照）

秋元太郎兵衛尉　下総（千葉県）印旛郡白井の荘の人。文応元年（一二六〇年）、日蓮大聖人が松葉ケ谷の法難を避けて下総中山に行かれたとき折伏されたという。正応四年（一二九一年）九月十七日没。その家は秋本寺となった。曾谷氏や太田氏と親しく、富木氏とは親類であったともいわれている。日蓮大聖人より秋元御書等をいただいている。（慈覚大師事一〇一九ページ参照）

悪縁　悪知識と同じ意。悪道に落ちる助縁となるもの。兄弟抄（一〇七九ページ）に「悪縁にすかされて法華経を捨つる心つきにけり」と述べられている。仏道修行を妨げるもろもろの縁。

悪鬼神　人の功徳や智慧を失わせ、また人の寿命を奪い害する悪鬼、悪神のこと。修羅、夜叉、鬼子母神、十羅刹女、魔王のたぐい。この悪鬼神が権力者などの身に入り代わり正法護持者に災難を起こし魔の働きをする。ただし法華経の会座においては、法華経の行者を擁護し、これにあだをなすものを破し、正法を守護することを誓った。（富士一跡門徒存知の事一六〇二ページ参照）

悪左府　平安時代の政治家・藤原頼長のこと。保元の乱を起こし、源義朝、平清盛らに打たれて滅びた。（新池殿御消息一四三七ページ参照）

悪趣　悪道のこと。趣は境界のことで、十悪五逆謗法等の悪業を行じた衆生が落ちる苦悩の状態をいう。四悪趣（界）とは地獄、餓鬼、畜生、修羅をいう。

悪瘡　悪性のできもの、はれものをいう。阿闍世王は謗法の罪により大悪瘡を身に生じた。

悪象　性質狂暴で、人畜を傷害する兇悪な象。涅槃経に悪知識の恐るべき対比として悪象をあげてあるが、その御文は御書のいたるところに見えている。提婆達多が阿闍世王の大悪象を酒に酔わせて、仏を害そうとした話は有名である。

悪知識　善知識に対する語。仏道修行を妨げて不幸におとしいれる者をいう。しかし、たとえ悪知識でも、それを縁としてかえって信心が強盛になるならば善知識といえる。

悪人の成仏　悪人が成仏すること。悪人とは五逆、十悪等の悪業を重ねる者、仏に敵対する者のことで、そのような悪人でも三大秘法の南無妙法蓮華経によって即身成仏することができるということである。爾前経で説く悪人の成仏は悪人が善人に変わって成仏するという改転の成仏で、悪人そのままで成仏することではない。法華経にいたり対悪顕善が終わって善悪不二、邪正一如、逆即是順の原理が示されて、悪の全体がそのまま善と顕われ、提婆達多は法華経提婆達多品第十二で、天王如来の授記を受けるのである。

阿含経　釈迦一代の教説を天台が五時に判じたなかで、最初の華厳時の次に説かれた経。増一阿含経五十一巻、中阿含経六十巻、雑阿含経五十巻、長阿含経二十二巻からなり、四阿含経ともいう。阿含経は小乗経で、十二年間に、波羅奈国の鹿野苑で説かれた。法門は四諦の法輪である。衆生の機根が幼稚で先に説いた華厳経を了解できなかったので、三乗が満足できるように誘引の法を説いた。阿含経を依経とする宗に、律宗、倶舎宗、成実宗があり、劣応身を本尊とし小乗の戒律を重んずる。（一代聖教大意三九〇ページ）

阿含経の小釈迦　阿含経で説き明かされる釈迦のこと。初地以前の凡夫二乗に対して応現する一丈六尺の仏身であり老比丘の相をしている。八相成道の仏身で、三身中の応身仏、たんに小乗蔵教の教理を説くだけの劣応身。四土のなかには凡聖同居土に住む。

阿含三蔵教　阿含時に説かれた小乗教のこと。阿含経の教法。三蔵は経蔵（定蔵）律蔵（戒蔵）論蔵（慧蔵）の三つをいうが、その本体は戒である。（諸宗問答抄三七六ページ）

阿私陀仙人　阿私陀は梵語で、端正、端厳と訳す。バラモンの長老で、中インド迦毘羅衛国の仙人。悉達太子（後の釈

迦仏）が降誕のとき、太子の相を見て「もしも出家すれば仏になる人であり、自分はこれを見ないで死なねばならぬのをうらむ」といい、そのとおり太子の成道に先立って死んだ。

阿闍世　阿闍世は梵語、未生怨と訳す。釈尊在世から滅後にかけてのインド摩竭陀国の王。父は頻婆沙羅王、母は韋提希夫人。太子であったとき、提婆達多にそそのかされて、仏弟子である父王を殺して王位につき、さらに釈尊を害して、提婆達多を新仏にしようとして、酔象を放って仏を踏み殺させようとした等のことがある。後に、提婆達多は謗法罪によって阿鼻獄に落ち、阿闍世王は大悪瘡を生ずるなどの法罰をうけて、ついに釈尊に帰伏した。後に法華経等の結集をして大いに仏法に尽くした。未生怨のいわれは、阿闍世王は生まれる前、山中に住む仙人であったが、頻婆沙羅王は、早く子供がほしいと思い、仙人を殺した。そこで生まれる前から、怨みをもっているところから、未生怨の名がある。

阿闍梨　梵語。聖者・出苦者・尊者・正行・軌範師・教授等と訳す。これを称するのは条件があるが、日本では師よりゆるされるのと官職として与えられるものとの二種があった。日蓮大聖人が門下にお用いになったのは、大指導者たるべき信行学をつまれた方にのみ与えられたものである。

阿閦仏　東方妙喜世界の教主で、種々の経に出てくる。法華経化城喩品第七によれば、大通仏十六王子の第一智積王子の後身とある。有徳王、覚徳比丘は後に阿閦仏の第一、第二の弟子となった。

阿輸舎国　阿踰闍とも書く。不可戦国と訳す。中インドの一大国である。玄奘三蔵の大唐西域記に詳しく勝鬘経にも出ている。大唐西域記によれば、この国の周囲は五千余里、大都府は周囲二十余里（当時の一里は現在の六分の一）、農業盛んで穀類・果樹は繁茂し、人心、気候ともに温和、風俗善順で勤勉、学芸に励む。仏寺百余か所、大都府に古き大伽藍がある。天親菩薩がこの国で数十年にわたり大小乗の諸論を造り、国王、沙門婆羅門のために大講義した堂がある。無著菩薩の遺跡もある。（開目抄上一九八ページ参照）

阿修羅　阿修羅は梵語で、帝釈に敵対する神。十界の一つであり、怒りの生命をいう。

阿鼻　不楽欲、無欲、随意作と訳す。唯識論の五種性のなかの第五。無性有情の一種で、成仏を欲しないところから、こ

の訳名がある。成唯識論には無性に一闡底迦、阿闡底迦、阿顚底迦の三種があると説く。無涅槃性の阿顚底迦に対し、一闡提と阿闡提は長い時を経て後に成仏するといわれている。しかし、これらの論は権大乗経の説で、日蓮大聖人の仏法からみれば一切衆生ことごとく成仏できる。すなわち当体義抄（五一八ページ）に「内道・外道・阿闡・阿顚・皆悉く一切智地に到る」とある。

阿僧祇劫　阿僧祇は梵語で無数、劫は長時の義で、合わせて数えることのできない長い間の意。

阿育大王　阿育は梵語で、無憂と訳す。釈尊滅後一〇〇年頃にインドに出て、インドを統一した最初の王。性来、凶暴で戦を好んだが、後、仏教を信じ仁慈博愛主義に立ち、正法による治国を行なった。広大な領土に八万四千の大寺を造り、八万四千の仏舎利宝塔を建て、あるいは第三次の仏典結集をなし、高僧を四方に派して布教させる等の事跡があった。阿育王の生まれた因縁、すなわち砂の餅を釈迦に供養した子供が、後、阿育王と生まれたことについては、付法蔵経、大智度論等に説かれている。

悪鬼神　悪鬼、魔と同じ。生命力を衰えさせ、思考の乱れを引き起こして、正法を行ずる者の妨げとなる働きをする。

悪鬼入其身　法華経勧持品第十三の偈文にあり「悪鬼其の身に入りて」と読む。悪鬼とは六道の一つの餓鬼道を鬼といい、天竜等の八部を神という。鬼神、天神、夜叉神等のたぐい。人の身に入っては病気を起こし思考の乱れを起こす。国家社会の身に入っては天変地夭や思想の乱れを起こす。御義口伝上（七四九ページ）には「悪鬼とは法然弘法等是なり入其身とは国王・大臣・万民等の事なり」とある。

悪口罵詈　法華経勧持品第十三の文に「もろもろの無智の人の悪口罵詈等し、および刀杖を加うる者有らん」と説かれている。悪口をいい、ののしること。罵は面と向かってそしり、しりぞけること。詈はそれとなくあてこすり、悪口をいう意味。

悪国・善国　悪国とは国主をはじめ万民が正法をきらって正法弘通の妨げをする国であり、善国は逆に万民が正法に帰依し国土を安穏たらしめる国をいう。開目抄下（二三五ページ）には、さらに悪国を、無智・悪人の充満する国と、邪智・謗法の多い国に分け正法流布のあり方を示されている。すなわち無智・悪人の国土に充満の時は摂受を前とし、邪智・謗法の者の多き時は折伏を前とする。現在の日本国は邪智・謗法の者多き国である。

熱原法難　弘安元年から約三年間、富士郡熱原の郷方面の日蓮正宗信者の受けた法難をいう。日蓮大聖人は、この難を機として本門戒壇の大御本尊を建立された。（要語解説三六一ページ参照）

阿那含・阿羅漢　小乗経に説かれた声聞の悟りで、第一須陀洹果、第二斯陀含果、第三阿那含果、第四阿羅漢果である。この位にある尊者は、欲界九品の惑を断じて、再び欲界に還って来なかったことをあらわしている。

阿那律　釈尊十大弟子の一人で天眼第一といわれた。過去弗沙仏の末法に飢饉のあったとき、飢えた辟支仏に稗の飯を施したことにより、現身に宝を得、さらに九十一劫、人天に生まれて果報を得、貧しさを味わうことなく、みな意のごとくなったという。また仏の説法中坐睡して叱責をうけ、それに発憤して眠りを断ったので眼病をわずらい失明した。しかしこの縁によって天眼通を得たという。釈尊の従兄にあたる。

阿難　釈尊十大弟子の一人で、多聞第一といわれた。提婆達多の弟で、釈尊の従弟にあたる。法華経で、山海慧自在通王仏の記別を受けている。

阿若憍陳如　中インドの迦毘羅衛国の人。釈尊から最初に化導された五比丘のうちの一人。阿若倶鄰ともいう。

阿若倶鄰　梵語。釈尊より最初に化導された五比丘の一人で中インド迦毘羅衛国の人。仏の四諦の説法を最初に聞いて無の本際を解了した。阿若憍陳如ともいう。

阿毘曇楼駄　阿那律尊者のこと。無貧、無滅と訳す。釈尊十大弟子の一人、天眼第一。

阿耨多羅三藐三菩提　梵語で、無上正偏知、無上正等覚と訳す。阿耨多羅は無上または無答といい、三藐は正等または正偏、三菩提は正覚または正知と訳す。無上にして清浄、一切法に遍満する仏の智慧をいう。

阿耨池　無熱悩池、無熱池または清涼池と訳す。この池には竜王がすむという。また閻浮提の四大河の発源池であるという。

頻婆　釈尊が太子の位を捨て仏道を求めて旅立ったとき、父王の命令によって、そのあとを追った五人の近親者、拘鄰（阿若憍陳如）、頻婆、跋提、十力迦葉、拘利太子の五比丘の一人。初め釈尊と共に修行したが、途中疑って去り、釈尊が成道したとき、最初に弟子になったのがこの五比丘である。

阿鼻地獄　阿鼻は梵語で、無間と訳す。無間地獄のこと。欲

界の最低、大焦熱地獄の下にある。五逆罪をつくる人が、この地獄に落ちる。（顕謗法抄四四七ページ参照）

阿鼻大城　阿鼻は無間と訳す。無間地獄の意。涅槃経十九に「阿とは無といい、鼻とは間と名づく、しばらくも楽しみなきゆえに間といい、無間と名づく」とある。大城は無間地獄が広漠であって凡力では抜け出ることができないほど堅固な所であるので城に譬えた。無間地獄については顕謗法抄（四四七ページ）に詳しい。

阿鼻の依正　阿鼻地獄の依報、正報ということ。無間地獄の依報である地獄の国土も、正報である地獄の衆生も、共に含めて地獄界の一切という意。妙楽の金錍論に「阿鼻の依正は全く極聖の自心に処し」すなわち無間地獄の依報の国土も正報の衆生も、共に最極の聖人である仏の生命の中にあって瞬時も離れることはない、とある。（諸法実相抄一三五八ページ参照）

阿毘跋致　梵語、不退転の意。すなわち、仏道修行において、どんな誘惑や迫害があっても、退転しない境涯になることである。天台は菩薩の五十二位のうち、初住の位をもって不退としている。

阿仏房　阿仏房日得。京都の遠藤家で為盛と称し、順徳上皇の北面の武士で、承久三年、上皇が佐渡に流されたとき供をして佐渡に定住したという。日蓮大聖人の佐渡流罪中に塚原三昧堂で大聖人を論詰しようとしてかえって折伏され念仏を捨て妻の千日尼と共に帰伏した。以来、二年余り、大聖人に身命をかけてご給仕申し上げ、大聖人が身延に入られてからも、八、九十歳の老体にかかわらず三回も御供養をたずさえおたずねした。阿仏房の信心から出たお目通りが現在の総本山の「お目通り」の儀式である。曾孫の日満は年少より富士に上り日興上人に仕え、北陸における仏法の中心者を命ぜられた。（要語解説三九〇ページ参照）

唖法　バラモンの修行で人に向かってものをいわず、ついに唖のごとく黙りこんでしまうのを至道とした。立正安国論（二一ページ）に出ている。

阿防羅刹　地獄の獄卒を意味する。頭は牛、手は人という姿で、剣を持ち罪人を罰するといわれる。なお羅刹とは鬼、特に悪鬼の意。

阿弥陀　阿弥陀仏の略。無量光仏、無量寿仏ともいい西方極楽世界の教主であり三種ある。①権教である観経に説かれる阿弥陀である。今の浄土宗や浄土真宗は、この最も低級な阿弥陀を本尊として立てているのである。法蔵比丘なる

僧が四十八の願いをおこして修行し十劫前に成仏したという。衆生が自分の名をいえば、ただちに極楽世界に往生せしむという。ただし五逆罪をおかした者と誹謗正法の者を除くと誓言している。②迹門の阿弥陀で、大通智勝仏の十六王子の一人で法華経大願の主の仏である。③本門の阿弥陀で釈尊分身の阿弥陀である。これは天台宗で立てる阿弥陀である。しかし、これらの阿弥陀は、久遠元初の自受用身からみれば、すべて迹仏であり、権仏にすぎないのである。

阿弥陀経　浄土宗の依経、弥陀の三部経の一つ。方等部の経典。この世の中は穢土であり、そのためには阿弥陀仏の名号を唱えて、死後、極楽浄土へ往生することを理想の教えとしている。

阿鼻闍　阿鼻闍は梵語、不可戦国と訳す。中インドの一大国である。阿輸舎国を参照。

阿羅漢　（要語解説三六ページ参照）

阿練若　無事閑静処という意味で人里を離れた山寺などのこと。法華経の勧持品第十三には、三類の強敵のなかの第三、僭聖増上慢の住所をあげ「或は阿練若に納衣にして空閑に在って云云」とある。すなわち僭聖増上慢の者が、静かな山寺などにこもって、人々に邪法を説く姿をあらわしている。

安足国王　安足国の王。馬を好んで、人を馬にし、馬を人にしたという。千日尼御返事（一三二一ページ）に、この王に馬にされた父を救った子供の話がある。

安徳天皇　八十一代の天皇（在位一一七八年―一一八五年）。高倉天皇の第一皇子で母は平清盛の息女・徳子（建礼門院）である。治承四年、三歳で即位し、源平の争いに壇の浦に身を投げて没した。（神国王御書一五一八ページ参照）

安慧　延暦寺第四の座主。伝教、慈覚について学び、慈覚の没後、その跡を継いで延暦寺の座主となった。顕法華義抄十巻、即身成仏義一巻等の著書がある。（妙一女御返事一二五七ページ参照）

安然和尚　天台宗の学僧で、伝教大師の俗縁ともいわれているが、詳細には明らかでない。幼少から比叡山に上り、安慧に師事し、また慈覚大師円仁の弟子となり、顕密の教義を学び、後、胎蔵界の法を受けた。天台宗の密教化を図り叡山汚濁の源を作った。真言教時義、教時諍論、菩提心義、広釈、悉曇蔵等を著わす。（撰時抄二八六ページ参照）

天母山　静岡県富士宮市山宮にある小高い丘をいう。日蓮正

宗総本山富士大石寺の東方約四粁の地点に位している。この地域は、日興上人の時代から宗内にいろいろのいい伝えがある由緒ふかいところである。ふもとに広がる平地は万坊が原と呼ばれている。

安養　西方極楽浄土の異訳の名。阿弥陀経によると西方十万億の国土を過ぎた所にあるという。阿弥陀の浄土をいう。または安楽世界とも極楽世界ともいう。

菴羅果　菴羅とは清浄無垢と訳す。玄応音義には「その果は小棗の如く花は白くして少なく果は胡桃の如く、その味は酸くかつ甘し、薬品に加味すべし、経中に掌中の者を観るが如しというものなり」とある。毘那耶雑事には「此には余甘子という。菴没羅とは全く別なり、声相みだるが為に惑う。是れ掌中に観るものなり」とあり、観賞用植物でもあった。十法界抄（四二〇㌻）に「法華本門の観心の意を以て一代聖教を按ずるに菴羅果を取って掌中に捧ぐるが如し」とある。菴羅果を掌中において眺めるように、一代五十年の聖教の浅深が明らかになることに譬えたのである。

安楽行品　法華経第五、安楽行品第十四がこれである。仏滅後法華経を修行するもの、身・口・意・誓願の四安楽行に住して弘通すれば、法難来ることなく、安楽に行じ得べし、と仏が文殊師利を対告衆として説かれた経で、法華経における摂受の修行が説かれている。御義口伝上（七五〇㌻）には「妙法蓮華経を安楽に行ぜむ事末法に於て今日蓮等の類いの修行は妙法蓮華経を修行するに難来るを以て安楽と意得可きなり」とあり、末法今時は、難こそ安楽であると心得て修行すべきことを説いてある。（要語解説六七㌻参照）

安立行菩薩　地涌の四大菩薩、上行、無辺行、浄行、安立行のなかの一人。地涌の菩薩は涌出品第十五で大地より涌出した。御義口伝上（七五一㌻）に「疏の九を受けて輔正記の九に云く『経に四導師有りとは今四徳を表す上行は我を表し無辺行は常を表し浄行は浄を表し安立行は楽を表す、有る時には一人に此の四義を具す二死の表に出づるを上行と名け断常の際を踰ゆるを無辺行と称し五住の垢累を超ゆる故に浄行と名け道樹にして徳円かなり故に安立行と曰うなり』」とある。日蓮大聖人の仏法は常楽我浄である。生命の中に四徳あり、安立行は楽をあらわす。また、安立行とは道樹にして、ものごとに対して、すぐ道をとおし、あくまで正論は正論としていいきっていける、みていける生活、または世の中を如実知見していける人生である。

安禄山　胡人。玄宗皇帝に愛されて平盧・范陽・河東の三節度使を兼任。また楊貴妃と結んでその養子となる。天宝の末、叛乱を起こし、洛陽を攻落、長安に迫り、大燕皇帝と自称したが、子の慶緒に殺された。

い

威音王仏　法華経常不軽品第二十に説かれている仏で、同号の仏が二万億いたという。常不軽菩薩は、この最初の、威音王仏の像法時代の末に出て但行礼拝を立て折伏を行じたが、時の上慢の四衆が迫害した。

威儀　威容儀礼の義であり、威厳とおごそかさのある容姿をいう。厳しい規律にしたがった起居動作である。仏法では、これを行住坐臥の四つに分けて四威儀というが、末法においては無用である。

威儀具足　威儀とは、厳しい規律にしたがって起居動作をすることで、これを行住坐臥の四つに分けて四威儀という。また三千威儀、八万細行等といい、戒律を保護する細規をいうこともある。この威儀を具足して欠けることのない姿を威儀具足という。

遺教経　仏遺教経、仏垂般涅槃略説教誡経ともいう。阿含小乗部の最後の結経で、主に戒を説いている一巻五紙。姚秦の鳩摩羅什三蔵の訳で有名な大蔵二大名文といわれる。

易行道　難行道に対する語。浄土宗とくに法然が立てた邪義である。末法は機根が悪くなっているから、法華経等の難行道では往生できず、易行道である称名念仏こそ末法の機にかなっているという。易行道、難行道という言葉の起源は竜樹の十住毘婆沙論であり、菩薩が阿毘跋致（不退地）にはいるのに二種の道があると難易の二行道を示した。しかるに中国の曇鸞は難行道は聖道門、易行道は浄土門とし、法然はさらに曲解して難行道に法華経も入れてしまった。

池上右衛門大夫宗仲　鎌倉幕府の作事奉行であった池上左衛門大夫康光の子、兵衛志宗長の兄。宗仲、宗長の池上兄弟は日昭の甥であった関係で建長八年ごろから大聖人に帰依していた。しかるに父の康光は極楽寺良観の熱心な信奉者で、特に文永十二年と建治三年の二回にわたり兄の宗仲は勘当された。初めの勘当に際し大聖人から励まされたのが兄弟抄である。（要語解説三八四㌻参照）

池上相承書　身延相承書と共に、大聖人が御入滅の直前、日興上人に血脈付法の証拠として与えられた御付嘱状であ

る。この二個の相承こそ、日興上人への唯授一人の御相伝書であるだけでなく、末弟一同に与えられた広布達成の御命令書である。池上相承書は弘安五年十月十三日、御入滅の当日、池上で書かれた。「釈尊五十年の説法、白蓮阿闍梨日興に相承す、身延山久遠寺の別当たるべきなり、背く在家出家どもの輩は非法の衆たるべきなり。弘安五年壬午十月十三日、武州池上、日蓮在御判」と。この二個相承は北山本門寺と西山本門寺の争いが原因で、武田の兵乱により紛失したいきさつが多くの史料で明らかである。

池上と中山　（要語解説三九六ページ参照）

池上兵衛志宗長　（要語解説三八四ページ参照）

已顕真実　無量義経の「四十余年未顕真実」に対する語。未顕真実とは「未だ真実を顕わさず」と読み、釈迦が四十余年間に説いた爾前権経をいう。已顕真実とは「已に真実を顕わせり」ということで、すなわち釈迦の出世の本懐として四十余年後、最後の八年間に説いた法華経をさす。

懿公　周の王。鶴を愛して奢侈にふけり、臣下に見放された。北狄に捕われて、肉を食べられ、肝と骨を捨てられた。（公胤の項参照）

謂己均仏　「己れ仏に均しと謂う」と読む。「止観」および「弘決」の一に出てくる言葉である。禅宗の人々が自己の凡夫心を、ただちに仏心なりとし、自己すなわち仏に等しいと考える大慢を破した語。

已今当説最為第一　妙楽の疏に「たとい経ありて諸経の王というとも已今当説最為第一といわざれば兼但対帯その義知んぬべし」とある。すなわち法華経こそ最後の極説であり已今当の中に、法華経が最も勝れているのである。

已今当説最為難信難解　法華経法師品第十の文。「我が所説の経典、無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説かん。而も其の中に於いて、此の法華経、最も為れ難信難解なり」とある。すなわち、法華経が最高の法であるとの文である。已説とは四十余年の諸経、今説とは無量義経、当説とは涅槃経のことである。法華経は、序分である無量義経に四十余年の年限をあげて、華厳・阿含・方等・般若等の諸経を未顕真実と定め、正宗分の法華経にいたって、一代諸経の勝劣を決定するときに、「我が所説の経典・無量千万億・已説・今説・当説」の金言を述べ、しかもその中において、この法華経が最も難信難解であると説いた。

已今当の三説　法華経法師品第十の「我が所説の経典、無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説かん。而も其の

中に於いて、此の法華経、最も為れ難信難解なり」の文から、法華経以外の前後の諸経、すなわち〝已〟は法華経以前の経、〝今〟は無量義経、〝当〟は涅槃経をさして已今当の三説といった。

沙の餅　砂の餅。泥で作った餅。釈尊の在世に徳勝童子、無勝童子の二人の子供が、真心こめて仏に砂で作った餅を供養した。その功徳によって阿育大王という一閻浮提の四分の一を掌中に握る大王に生まれることができた。（上野殿御返事一五〇八ページ参照）

為実施権　施開廃の三釈のうちの一つ。「実のために権をほどこす」と読む。天台大師が妙法蓮華経の題号を釈するのに、蓮華の二字を当体蓮華、譬喩蓮華の二つに解し、その譬喩蓮華を、本門迹門におのおの三義を設けて六重の蓮華を釈する。そのなかの迹門譬喩の第一の譬えを為実施権という。

易信易解　難信難解に対していう言葉。「信じやすく解しやすし」と読む。難信難解は法華経をいい、易信易解はその他の経をいう。法華経は仏の御意をそのままに説かれた経であるから、仏とはるかにかけはなれた凡夫には、その意はなかなか知りがたい。しかし、その他の経は、仏が衆生の意に同じて、すなわち随他意といって、他の意にしたがって説いた経であるから、凡夫の心に信じやすく、また悟りやすいというのである。

以信代慧　（要語解説三二一ページ参照）

以心伝心　「心をもって心に伝える」と読む。人間対人間の心のふれあい、心のつながりをいう。ただし禅宗の教外別伝、不立文字などは邪義である。

以信得入　「信を以て入ることを得」と読む。法華経譬喩品第三の偈の文に「汝舎利弗すら尚此の経に於いては、信を以って入ることを得たり、況や余の声聞をや、其の余の声聞も、仏語を信ずるが故に、此の経に随順す、己が智分に非ず」とある。信ずるということが根本であり、その信によって仏の境涯にいたることができるのである。

韋提希夫人　釈尊在世のインドの王・頻婆沙羅の后、阿闍世王の母である。阿闍世王が、提婆達多の甘言にのり、父・頻婆沙羅王を幽閉し餓死させようとしたとき、体に蜜を塗って王を養った。（阿闍世王の項参照）

異体同心　異体同心事（一四六三ページ）にいわく「異体同心なれば万事を成し……日蓮が一類は異体同心なれば人人すくなく候へども大事を成じて・一定法華経ひろまりなんと

覚へ候」と。異体同心の「心」は、観心の心であり、信心の心である。観心とは、受持即観心といって、弘安二年十月十二日の一閻浮提総与の大曼荼羅を、余行をまじえず、ひたぶるに信心し奉ることである。（要語解説三一五ページ参照）

一雨所潤　法華経薬草喩品第五に「一地の所生、一雨の所潤なりと雖も、而も諸の草木、各差別有るが如し」とあり、雨も一様に降り、大地も同じでありながら、そこに生ずる草木は千差万別であることを例に、実相一味の法が、三乗五乗と分かれることを譬えた。いわゆる三草二木の譬えである。御義口伝上（七二九ページ）には、一地所生一雨所潤は南無妙法蓮華経で、爾前の諸経はもちろん法華経二十八品といえども、その南無妙法蓮華経の一雨一地から生じた千草万木の一つにすぎないと明かされている。また一雨所潤とは御本尊の無差別の平等を説いているのである。

一会　会とは会座の意味で、仏の説法の会座をいう。一会には、一回の法会という意とその会座全体という意と両意がある。

一閻浮提　閻浮提は梵語で、閻浮とは樹の名、提は州と訳す。古代インドの世界観では、われわれの世界の中央に須弥山があり、その南方を南閻浮提といって仏法が行なわれる場所と考えた。今日で考えれば、一往、地球上すべてが南閻浮提であり、これを一閻浮提ともいう。

一閻浮提の座主　一閻浮提とは全世界の意で座主とは会座の主、一山の寺務を総理する首座の僧職をいう。すなわち全世界の主であり、仏の教えを説く立ち場の最高の位置の人である。日蓮正宗においては、日蓮大聖人より第二祖日興上人、第三祖日目上人へと嫡々の相承があり、代々の猊下は大聖人の遺使還告のお姿である。特に日興上人より日目上人への譲状・日興跡条条の事には「本門寺建立の時は新田卿阿闍梨日目を座主として日本国……一閻浮提の内に於いて山寺等の半分は日目嫡子分として管領せしむべし、残る所の半分は自余の大衆等之を領掌すべし」とある。すなわち一閻浮提の座主とは総じては代々の御法主上人であり、別していえば日目上人である。

一往・再往　一往とは、ひととおりの意味とか、そのままの意味。再往とは、一重立ちいたったという意味。たとえば、法華経の十神力を現在と滅後に分けるのは天台の一往の解釈であり、再往、日蓮大聖人の定義は一向に滅後末法のためとなる。

一往名通・再往義別　法華経二十八品のいずれも通じて題号に妙法蓮華経とあることを一往名通という。しかし一往はすべて妙法の五字ではあるが、再往は義（内容）が異なる。すなわち迹門本門ともに妙法の名はあるが内容は天地雲泥の相違があるのを再往義別という。

一行阿闍梨・一行禅師　中国唐代の天台宗の学僧で、二十一歳で荊州景禅師について出家し、その後、嵩山の普寂禅師について禅門をきわめたという。常に一行三昧を研精したところから一行といわれた。晩年、大日経疏を著わし、天台の一念三千を盗みとって、仏法を乱した。

撰時抄（二七五ページ）に「天台宗の中に一行禅師という僻人一人ありこれをかたらひて漢土の法門をかたらせけり」とある。

一行筆受の相承　唐の玄宗皇帝のとき、インドの善無畏が中国にわたり真言宗を伝えた。このとき善無畏の勧めで一行阿闍梨が大日経翻訳の筆受にあたり、また大日経疏を執筆した。一行は善無畏に誑惑され、大日経と法華経を一味とし、真言宗こそ三密相応の秘法であって、大日経は印と真言があるから法華経に勝れているという邪義をかまえた。しかし無量義経に「四十余年未顕真実」とあるごとく、法華経こそ諸経の王である。この一行の誑惑は撰時抄（二七五ページ）に詳しい。これ以降の真言宗は理同事勝という邪義を立てたのである。

一偈　偈とは偈他の略。一偈とは①経の字数が八字で四句つづけて三十二字をいい、これを通偈という。②八字と限らず四字、五字、六字、七字が四句連なったのをいい、これを別偈という。また一偈は四句の経文からできあがっているから一四句偈ともいわれる。その場合二句のものを半偈という。

一眼の亀　一眼の亀の浮木の譬え。優曇華の譬えと同じく、衆生が正法に巡り会い、さらにそれを受持することがいかにむずかしいかを譬えたもの。（松野殿後家尼御前御返事一三九〇ページ参照）

一業所感　善悪の業因によってそれぞれ善悪の果をうけるのは因果の理法である。一業所感とは一つの業因によって感ずる果をいい、また多くの人が同一の業因によって同一の果を感ずることもいう。

一毫未断見思の者　一毫は一本の毛すじという意味で、きわめて少ないことをいう。すなわち、とるにたらぬ煩悩や思想の惑を断じていない者の意。

一極・一極の玄宗　一極とは一仏乗の極地、宇宙本源の実相をいう。すなわち、釈迦五十年の説法では法華経、末法にはいっては南無妙法蓮華経をいう。玄宗の玄とは幽玄ということで奥深い、あるいは深遠なということ。宗とは根本。これは妙法をいいかえて表現したもの。妙法こそ一仏乗の極地であり、宇宙本源の実相であり、究極の教えであり、深遠にして三世十方の諸仏がこれを根本として仏になったところの一極の玄宗なのである。（顕仏未来記五〇六ページ参照）

一塵十小劫　法華経化城喩品第七の文。過去において大通智勝仏が、魔を降してから正覚を成ずるまで、十小劫の長い間、黙然として座していたことをいう。

一時　①衆生の機縁が熟して仏がこれに感応した時。②わずか、すこしの時。③釈迦一代五時説教中の一つをさす。④末法。

一字五種の妙行　一字とは妙の一字で、妙の一字に五種の修行がすべてそなわっているとの意。五種の妙行とは、受持、読、誦、解説、書写をいい、法華経を修行する行。伝教の修禅寺相伝日記にある。しかし末法では三大秘法の御本尊に五種の妙行が具足していること。（要語解説一二四ページ参照）

一字三礼　経文を書写するとき、一字書写するごとに三度礼をすることで、写経の最も敬虔な態度をいう。しかし書写の行は正像の行であり、末法は受持の一行によってのみ成仏できる。（種種御振舞御書九二三ページ参照）

一子地　一子地とは初地であり、法界の衆生をことごとく慈念するという意。

一四天下　全世界ということ。太夫志殿御返事（一一〇四ページ）に「三千大千世界と申すは東西南北・一須弥山・六欲梵天を一四天下となづく」とある。一つの四天下をいう。四天下とは古代インドの世界観で須弥山のまわりに東西南北の四洲があり、一洲を一天下として四天下というのである。

一乗妙典　典はふみと訓じ書冊のこと。妙典は一乗の理を明らかにする妙経。すなわち法華経または南無妙法蓮華経のこと。

一代応仏　釈尊一代五十年に説くところの三身（仏身）は、いずれも応身仏の分域を出ないので、これを一代応仏という。すなわち法華経本門の釈迦仏も応仏昇進の自受用身にすぎない。

一代五時　釈尊が、中インド迦毘羅衛国の太子に生まれ、十

九歳で出家し、三十歳で成道してから、八十歳で涅槃するまでに、華厳・阿含・方等・般若・法華の経々を説いた。それを、天台が判釈して、説法の順序にしたがって一代を五時に分けて論じた。

一代五時の妙典　釈尊一代の説法を五時に分けた経典で、特に妙典は法華経。

一代五十余年　釈尊一代の説法をいい、三十成道、八十入滅の五十年のこと。

一大事因縁　法華経方便品第二の文。「諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもう。舎利弗、云何なるをか諸仏世尊は、唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと名づくる。諸仏世尊は、衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なるを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生に仏知見を示さんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。衆生をして、仏知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したもう。舎利弗、是れを諸仏は唯一大事の因縁を以っての故に、世に出現したもうと為づく」これは、諸仏が世に出現した理由を説いたものであり、一大事因縁とは南無妙法蓮華経である。（御義口伝上七一六ページ・要語解説九一ページ参照）

一代聖教　釈尊が三十歳で得道してから八十歳で入涅槃するまで、一代五十年間に説かれた経教をいう。中国の天台は、これを五時八教に立て分けている。

一代超過　釈尊一代説法中、他の一切諸経に超越してすぐれていること。すなわち一代超過の経とは法華経をさす。法華経は已今当の三説に超過する教えである。

一大秘法　一大秘法とは本門の本尊のことである。すなわち三大秘法総在の大御本尊をいう。開けば三大秘法となり、六大秘法となるのである。合すれば一大秘法となる。（依義判文抄参照）

一日経　書写の行の一つ。一部の経を一日に写し終えること。頓写。諸経に通じていうが、主に法華経の頓写をいう。末法の修行ではない。

一入　入とは相互に関係し合うことを意味する。六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）と六境（色・声・香・味・触・法）を十二入といい、その一つ。

一念三千　仏教の極理。釈尊は出世の本懐として、法華経迹門方便品第二で諸法実相に約して理の一念三千を説き、本門寿量品第十六にいたって、因果国の三妙に約して仏身の

振舞いのうえから事の一念三千を説いた。さらに、末法にはいって、日蓮大聖人がご出現になり、法華経の文底に秘沈した三大秘法の南無妙法蓮華経を説かれた。（要語解説一七九ページ参照）

一念三千即自受用身　伝教の秘密荘厳論にある言葉。一念三千と自受用身とは一体不二であるということ。大聖人の仏法では、一念三千とは事行の一念三千の大曼荼羅であり、自受用身とは久遠元初の自受用身である。すなわち人法一箇の御本尊をあらわす。

一念寂照　一念とは生命の究極であり、寂照とはそのままにして成仏の境涯をいう。御本尊に照らされた一念の働きが寂照であり、生命の本質、本体である。

一念信解　法華経修行の位。法華経分別功徳品第十七に説ける四信五品のなかの現在の四信の第一。すなわち「八十万億那由佗劫の間、仏道のために布施、持戒、忍辱、精進、禅定の五波羅蜜を修行する功徳を、この一念信解の功徳に比するのに、百千万億分の一にもおよばない。一念信解には勝れたる功徳がある」と説かれており、この一念信解を生ずる人は、退転することがないといわれている。

一念随喜　法華経信仰の最初の信心の位である。随喜とは随順慶喜であり、信順して歓喜すること。一念とは瞬間の生命であり、法華経の一句一偈をきいて、少しでも信ずる心のある状態をさす。普通には四信五品の初随喜と同じ意味に用いられる。

一谷　佐渡の国（新潟県）雑太郡、石田郷にある村の名。いまは新潟県佐渡郡佐和田町大字市野沢。大聖人が佐渡に流罪された時、塚原三昧堂から、ここへ移され、鎌倉にお帰りになるまでこの地の一谷入道の屋敷におられた。

一谷の入道　前述の一谷の住人で、身分のある土豪。大聖人に帰伏しながら、内心では大聖人の弟子檀那であったが、外面は周囲の圧迫、思惑を恐れはばかり、念仏者であったため、大聖人はこの人が成仏できるかどうか心配であるといわれている。

市の中の虎　市虎ともいう。中国の故事で「市虎、三人になる」という言葉がある。その意味は、市に虎がいる道理がなくとも、これをいう者が三人になれば、ついには信ずるようになるということ。無根の言も多くの者がいえば、ついには人を惑わすにいたる譬えである。

一由旬　長さの単位。帝王一日の行軍里程。地形の険易の度で大中小に分け、中国の里程で四十里、三十里、十六里あ

るいは八十里、六十里、四十里などの諸説がある。

一機一縁　特定の対告衆に与えられたものを一機一縁という。法華経は万機に通ずる根本の教えであるから一機一縁ではない。しかし、爾前教は種々の機類に対して説法されたものだから一機一縁という。御本尊でいうならば、日蓮大聖人のご在世中、特定の信者に与えられた御本尊を一機一縁の本尊と申し上げる。本門戒壇の大御本尊は一閻浮提総与といって、全体に通ずるので、一機一縁ではない。日蓮大聖人門下御所持の仏像について日寛上人は、一機一縁のために許されたものであり「継子一旦の寵愛の如し」と仰せられている。

一凶　表面では法然選択の謗法をさす。邪宗のこと。立正安国論（二四ページ）にある。

一劫　一つの劫のこと。劫とは時または分別の義。仏法上は極めて長い時間を示す単位。劫は経論により多説がある。大別して小劫、中劫、大劫あるいは成住壊空の四劫がある。小劫とは住劫のはじめ、人寿無量歳より百年に一歳を減じつつ、ついに人寿十歳にいたる。これを第一減劫とす。次に人寿十歳より百年に一歳を増して人寿八万歳にいたる。また八万歳より百年に一歳を減じ人寿十歳にいたる。これを第二の増減劫とする。以下、第十九にいたるまで、このように増減すること十八回、最後に人寿十歳より百年に一歳を増して無量歳にいたる。これを第二十の増劫とする。第一はただ一減、第二十はただ一増であるけれども、その時節の長さは各中間の一増減に等しい。この一増減の時節を一小劫と名づける。したがって一小劫は千六百万年より二千年を減じた数にあたる。中劫とは、以上のように住劫の一減より中間十八の増減、第二十の一増にいたる。この二十増減の時節を合して中劫とする。すなわち一中劫は二十小劫にあたる。大劫とは四中劫をいい、四中劫とは成住壊空をいう。

一切義成就菩薩　釈尊の成道以前の名。薩婆多悉達は梵語で、一切義成就と訳す。仏祖統記第二に「王、婆羅門を召して云く当に太子為り何等の名と作すべし、答えて云く太子生死一切の宝蔵皆悉く発出す所有の諸瑞吉祥に非ざること莫し、当に薩婆多悉達と名づくべし、此れ一切義成就と云う」とある。

一切経　仏教聖典のすべてをいう。大蔵経ともいう。

一切衆生喜見如来　釈尊が釈尊の乳母の摩訶波闍波提比丘尼に勧持品第十三で記別を授けた名前。

一切種智　三智の一つ。透徹した仏の智で、すべてを見とおすもの。

一切乗　一切衆生を仏と成す道を説く教え、すなわち法華経のこと。

一切世間多怨難信　法華経安楽行品第十四の文。「一切世間に怨多くして信じ難し」と読む。仏が法華経を説こうとする時は、仏法を知らない世間のあらゆる人が仏を怨み迫害して、なかなか信じようとしないこと。

一切智地　一切智を証得する位、すなわち仏の境涯・智慧をいう。釈迦仏法でいえば、衆生を種々の方便によって化導するが、最後には皆に法華経を説いて成仏させる。このときの説法は、皆法華経を中心とし法華経に源を発するものである。つまり法華経は、よく衆生に一切の智を生い茂らす大地なるゆえに一切智地という。日蓮大聖人の仏法では当然、南無妙法蓮華経の御本尊である。

一色一香無非中道　天台大師の止観・玄義・文句等のなかにある言葉。「一色一香中道に非ざること無し」と読む。一色とは青・黄・赤・白・黒の五色をいう。すなわち、あらゆる物質をさしているのである。一とは法性であり、すべてに仏性があるということ。中道法性をさして一というのである。あらゆるものに十界三千の生命がそなわっているということである。そしてこの色香とは草木成仏である。口決に「草にも木にも成る仏なり」とある。

一四句偈　経文等において四句を一偈とせるものを称する語。たとえば有名な涅槃経の「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽」等がそうである。

一種の禅人　天台の摩訶止観第五、第七等に偏観の者を破した文中、謗法の徒をさした言葉で、止観では、特に北斉の慧文禅師（南岳の師）以前の一群の禅人（禅を修行した者）をさしているが、これは達磨の禅宗にも通じてあてはまることから、禅宗の破折の引文とされている。

一生成仏　現在のこの身が一生の間に成仏すること。直達正観とも、即身成仏ともいう。すなわち生まれかわらないで仏になる意である。

一生補処　一生の後に仏の跡を継いで、やがて仏位に上り仏処を補う意。また略して補処ともいう。菩薩の五十二位のなかの等覚の菩薩のこと。釈尊の一生補処は弥勒菩薩で、阿弥陀仏の一生補処は観世音菩薩という。補処には又跡を継ぐ立ち場という簡単な意味に用いる場合もある。

一心三観　天台宗の奥義、観心修行の法門。一心とは、われ

われ凡夫の無明の一心である。三観の三とは空・仮・中の三諦、相・性・体の三如是、法・報・応の三身で、観とは詳しく見る、明らかに見る等の意味である。すなわち、森羅万象のことごとく三如是、三諦、三身を明らかに見ていくことが三観である。したがって、一心三観とは、わが己心の生命は、三如是・三身・三諦等であり、それぞれ三つが別にあるものではなく、即一身にそなわっているものとして明らかに見ていくことをいう。

一心三諦　一心とは一念三千の一念と同じ意味であり、観念的な心という意味とは違う。三諦とは空諦・仮諦・中諦である。結局、一心三諦とは一心に三諦が相即してそなわっていることであり、別教の隔歴の三諦に対し円融の三諦をいう。

一心三智　三智を一心のなかに同時に具していること。三智とは、仏のそなえている智慧で一切智、道種智、一切種智の三つをいう。

一身即三身　如来寿量品第十六の「如来秘密神通之力」の八字を釈せる文中の語。文句の九に「一身即三身なるを名けて秘となし三身即一身なるを名けて密となす又昔より説かざる所を名けて秘と為し唯仏のみ自ら知るを名けて密と為す」とある。三身とは法身・報身・応身であり、これが即一身に具するという法華経の教え。

一闡提　梵語で不信の意。すなわち、どうしても仏法を信ずることのできない者。

一念一妙　念は念法、妙は妙法。円実の妙法に対して偏権の法を念法という。法華迹門の諸法実相の円妙の義によって、華厳経を判釈すれば、華厳経は一念一妙となる。般若部が二念一妙、方等部が三念一妙、阿含部が但念一妙となるのに対す。すなわち法華迹門の義によって華厳経の文を判ずれば、華厳経にも一念三千の義が少分説かれている。

一致門流　日蓮宗一致派をいう。大聖人ご入滅後、法華経の本門と迹門に勝劣があるかないかで論争が起こり、本迹一致を主張した系統が、身延山を本山とする日蓮宗（単称）である。そのおもな寺と系統は、身延山久遠寺（日向、日朝）池上本門寺（日朗）中山法華経寺（富木日常）京都妙顕寺（日像）京都本国寺（日朗）不受不施派（日奥）不受不施講門派（日講）などである。大聖人ご入滅後、日興上人以外の五老僧は大聖人が御本仏なることや種脱相対を知らず、また官権の圧迫に退転した結果、現在の一致門流のごとき姿となってしまったのである。

一天四海　古代インドの世界観で、世界の中央に須弥山があり、これを輪状に囲んで八つの山があり、おのおのの山と山とに囲まれた部分に海がある。そのいちばん外側の山に囲まれた海のなかに四州があるといわれていた。この世界観からみて、四州を四天下といい、総括して一天といった。また四海とは四方の海のことである。したがって、一天四海とは世界全体をさす。

一刀三礼　仏像などを彫刻するとき、一刀を下すごとに三度礼拝して信をいたすこと。叡岳記下巻最澄大師一生記に「一削に三たび礼を成し仏像を造立し奉る」とある。

一品二半　一品二半とは、法華経如来寿量品第十六の一品と涌出品第十五の後半品および分別功徳品第十七の前半品をいう。これに二意があり、いわゆる天台所立の一品二半と日蓮大聖人の一品二半とである。（要語解説一五七ページ参照）

伊東の流罪　弘長元年五月十二日より弘長三年二月二十二日までの約二年間、日蓮大聖人が第一回の法難で伊豆の伊東へ流罪された。立正安国論を執権北条時頼に奉って国家諫暁したがこれを用いないのみか諸宗の悪徒が結束し、ご草庵に放火し、そのうえ日蓮大聖人を捕えて流罪したのである。

犬神人　「つるめそう」とも読む。神人とは祭儀をつとめたもの。神人のなかに境内のそうじや不浄の物の取り捨てをした賤民もあった。平素は弓矢を作り行商して生活していたので「つるめそう」ともいわれた。

意念往生　念仏宗で使う言葉で、臨終のとき声を出さず意で阿弥陀の名号を念じて往生する者をいう。（当世念仏者無間地獄事一〇五ページ）

異の苦　人々が因縁果報によって各自異なった苦をうけることをいう。

伊予房　六老僧の一人である伊予阿闍梨日頂のこと。母が下総国若宮の領主で大聖人の俗弟子の富木常忍に再縁したので、伊予房も義理の子となった。大聖人ご入滅後、第二祖日興上人に反逆したが、後に日興上人を慕って富士の重須にきて日興上人に心身ともに帰伏した。

伊蘭　梵語。臭気ある悪木で、蓖麻の一種。その形状は茎の高さ六尺――八尺、葉の直径一、二尺にして色は緑色、時には赤色をおび、楓のごとく七裂片がある。葉柄八、九寸にして互生し、花は総状をなし、雄花は上部、雌花は下部にある。種子に毒分があって、これの油をしぼり、下剤として有効である。

遺竜　中国唐の国にひじょうに字のじょうずな親子がいた。父の名を烏竜、子の名を遺竜といった。父烏竜は道教を信じ、法華経をきらい、そのため、身は八つに裂けて地獄に落ちた。子の遺竜は父の遺言にしたがって法華経だけは書かなかったが、王に責められ、法華経八巻の題号六十四文字を書いたところ、このことによって親子とも成仏することができた。（上野尼御前御返事一五八一ページ等参照）

印　手の形や手まねをいう。仏・菩薩の手や指の造像上の特定の姿で、仏像の種類を特徴づける第一の条件である。真言では大事そうにいうが、われわれの合掌も印である。

因位　果位に対する九界の位。仏に対して菩薩の位。

印可　印は信用し認める。可は許可する意。仏が菩薩の成仏を許すこと。転じて一般に技芸などで師が弟子の修学成就を認めることをいう。真言宗（密家）では印法灌頂（秘印を授ける儀式）を印可と称している。

因果　因とは原因、果とは結果である。因果には、十界各具の因果、九界を因として仏界を果とする因果、三世にわたる因果等がある。

因果倶時　因果の二法は宇宙、万物を貫く法則であり、因果倶時と因果異時の二つの見方がある。信心は因で唱題は果であり、一念の刹那にこの因果を具す。これを妙法蓮華経といい、「因果倶時不思議の一法」というのである。春種をまき、秋実がなるのは原因と結果が時間を異にするから因果異時というが、生命の本質では因果倶時になる。（要語解説一九五ページ参照）

因果国　本因妙、本果妙、本国土妙の三妙を略していった言葉。天台は玄義に本門の十妙を立て、そのなかの三妙をさす。法華経寿量品第十六に因果国に約して一念三千が説かれている。我本行菩薩道が本因妙、我実成仏已来が本果妙、娑婆世界説法教化が本国土妙の依文である。大聖人の文底仏法では本因妙は日興上人、本果妙は日蓮大聖人、本国土妙は別しては日本国そのなかでも富士大石寺となる。総じていえば、妙法広布の世界、地域全体が本国土妙となる。（要語解説一六六ページ参照）

因果互具　因果が互いにそなわっていること。十界に因果のあることは前経でも説いている。法華経になって十界互具が説かれるゆえに十界の因果もまた互具するのである。

因行果徳の二法　因行は仏が九界の因位で修行した万行をいい、果徳とは成仏して見えているところの万徳をいう。

印契　印相とも密印ともいい、略して印ともいう。仏や修行

者がつくる特定の手や指の形をいい、本尊に向かって合掌するのも印契である。密教では諸仏の悟りや誓いをあらわすものと解釈している。（法華真言勝劣事一二三ページ）

印真言　印相と真言。印とは決定不改または印可決定の義であり、手指を種々に組み合わせて諸仏諸尊のおのおのその内証の徳を表示する形式。真言は真実の言葉という意味で一種の呪文のようなもの。

院宣　院政を行なった上皇または法皇が出した文書の一種である。

白河天皇が政を院中に開いた後、院政時代には、勅宣よりも重い勢力があった。院宣の形式は、院中に奉仕する有司が、院宣を承って、これを執達下知する文書である。帝釈天のこと。須弥山の頂上にある忉利天喜見城に住し、他の三十二天を統領する天主。（富木殿御書九六九ページ）

因陀羅　最勝または無上の義。主あるいは帝と訳す。

因中有果　「因の中に果有り」とする迦毘羅外道の教え。人生の苦しみや幸福は因果が一体なものだという。

因中無果　「因の中に果無し」とする漚楼僧佉外道の説で、人生の幸・不幸は自然のものであるから、あきらめる以外ないとする。

陰徳　人に知られない間に行なう善業。

因縁　果を生ずべき直接の原因を因といい、因を助け果にいたらしめるものを縁という。たとえば植物の種子は因で、日光や雨や土などは縁である。この因と縁が和合して芽を生ずる。一切衆生の心中の仏性は因で、それが諸法を縁として成仏の果をあらわす。

因縁約教 本迹 観心　天台が法華文句で用いた四種の釈。因縁釈・約教釈・本迹釈・観心釈。因縁釈は四悉をもって釈し、約教釈は蔵通別円の四教をもって釈し、本迹釈は本地と垂迹、観心釈は観心をもって釈する。

殷の紂・殷の紂王　紀元前十二世紀ごろの、中国殷代の最後の王名は辛。殷は湯王に始まり三十代六四四年で紂の代に滅んだ。智能や腕力がすぐれていたが妲己を溺愛して逸楽にふけり暴政の限りを尽くしたため、民心離れ、後に周の武王に攻められ焼け死んだという。夏の桀王と共に桀紂と呼ばれ悪王の典型とされる。

印板　印刷のための版木のこと。

因謗堕悪必因得益　謗法の因によって悪道に堕す者は正法に縁を結んだという因によって必ず後に大利益を得る。妙楽が法華経不軽品第二十によって逆縁の功徳を説いた文。

う

有為の郷　娑婆世界、人間世界のこと。

有為無常　有為は無為に対する語で為作があること。因縁によって生ずる種々の法を有為という。有為の法には生住異滅の四有為相があり、常住でないから有為無常という。

上野賢人　南条七郎次郎時光のこと。大聖人は熱原の法難で示された時光の強信ぶりを称嘆されて、弘安二年十一月六日付けのお手紙（竜門御書）のなかで、特に上野賢人と記された。初め上野聖人と筆をおろされたが、青年（時光この時は二十三歳）に対して穏当をかくと思われたのであろうか賢人と書き改められた。

有縁の仏　釈迦仏は娑婆世界の教主であるのに対して、阿弥陀は西方安養世界の教主であるから、釈迦仏法上の有縁の仏は釈尊である。しかるに末法有縁の仏は日蓮大聖人であって釈尊ではない。

有戒無戒　戒とは非を防ぎ悪を止めるの義。釈迦仏法では大乗戒や小乗戒として多くの戒律を説く。

これらの戒を受けた者を有戒といい、いまだ戒を受けない者を無戒という。ひとたび戒を受けた後、これを破る者は破戒、毀戒という。

有教無人　教えのみあって実際に成仏するものがないことをいう。蔵教、別教などは、その仏果にはいる前に、ことごとく転じて円教の人となってしまうのをいい、法華経と爾前経を相対すれば爾前経にとどまるものなく、ことごとく過去の下種による法華にはいるゆえに、爾前経はことごとく有教無人である。文上と文底を相対すれば文上法華経は有教無人である。

有解無信　学問があっても信心のない者をいう。新池御書（一四四三ページ）には「有解無信とて法門をば解りて信心なき者は更に成仏すべからず」とある。さらに「有信無解とて解はなくとも信心あるものは成仏すべし」とあり、末法では信心第一が大切である。

氏神　ある氏族がその祖先を神と名づけたもの。また、一定の地縁的あるいは血縁的集団が信仰する神のこと。

烏瑟　梵語で烏瑟膩沙といい、略して烏瑟。仏頂、無見頂相、肉髻相などと訳す。仏の三十二相の一つ。頂骨隆起して髻のようなさまをなす。

丑寅の時　開目抄下（二二三ページ）に「日蓮といゐし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国

にいたりて云云」とあり、また上野殿御返事（一五五八ページ）に「御臨終のきざみ生死の中間に日蓮かならず・むかいにまいり候べし、三世の諸仏の成道はねうしのをわり・とらのきざみの成道なり」とある。丑寅の時は陰の終わりであり死の終わりをいう。そして陽の始め生の始め、陰陽生死の中間である。日蓮大聖人は子丑の時に頸をはねらるといわれるように、垂迹凡身の死の終わりをいい、寅の刻は久遠元初の御本仏としての生の始めである。ゆえに魂魄というのである。現在の時間でいうと午前二時から六時の間をいう。仏法上で重要な意義をもち、日蓮正宗総本山富士大石寺においては、丑寅勤行といわれて、広布達成の祈願が猊下によって七百年間、一日も欠かさず行なわれている。

有道の僧　悟りを得た僧を真実の僧というのに対し、いまだ悟りを得ていない僧をいう。いまだ悟りを得ていない者は、悟りの体たる第一義天と悟りを得た聖人とに対して慚愧の念をいだくゆえに有羞（恥を知る）の僧という。しかし、いまだ悟りを得なくとも、自らそのあやまちをみとめれば、これ真実の僧となる。すなわち、自らのいたらないことを深く反省し、勇猛精進、仏道に励む者を有羞の僧という。

有上有容　有上とは、これより以上のものがまだあるということ。有容とは「容受する所有る」の意、すなわち、まだ説くべきことが残されているとの意で有上と同じ。

右将軍　源頼朝。

烏仗那国　烏仗那は梵語で、園の意。北インド健駄羅の北方にあった国。大唐西域記によれば、周囲五千余里、気候は温和、ブドウなどの果物よくとれ、人の性格よく、文字、礼儀を重んじ、仏法を崇重し、特に大乗仏法を敬信した。昔は一千四百の伽藍と僧徒一万八千の多きを数えた。北インドの釈迦の布教地で多くの遺跡がある。昔の雪山童子、楽法梵師などにちなんだ山や伽藍もある。善無畏はここの国王であった。

有情非情　有情は生物で非情は無心の草木国土等をいう。

誑頭羅弗　釈迦の外道の師匠であった仙人の名。

有待　(1)凡身のこと。凡身は食衣住を待って生存するから、有待の身という。(2)他にたよって存在する相対・差別・無常の世界。(3)初心の行者をいう。初心の行者は供養を待って仏道を成就する。（庵室修復書一五四二ページ参照）

優陀延王　優陀延は梵語。釈迦在世における憍賞弥国の王。その国が伐蹉地方にあるので、鄔陀演那伐蹉王ともいう。

優塡大王と同じ。もと臣下であり出家して羅漢の悟りを得た賓頭盧尊者が、王の睡眠中に説法したことを怒って黒蟻の巣を尊者の身にまとわせて苦しめた。また賓頭盧尊者を蔑如して国王の位を失った。

有智無智　智慧ある者と智慧のない者。一代聖教大意（三九八ページ）に「有智は舎利弗・無智は須利槃特」とある。ただし仏教でいう智慧の意味は世間でいう賢愚より一重深い。

有頂天　三界のなかの色界の十八天の最上に位せる天、色究竟天という。これは有色界の最頂という義。これに対し非想非非想天は、三界のなかの無色界の四天の最高に位せる天である。

内房　地名。駿河国（静岡県）庵原郡の北東、富士川の岸にある小さな村。ここに大聖人の俗弟子で内房尼御前が住んでいたが、姓その他は明らかでない。

優塡大王　憍賞弥国の王である。皇后の力で釈尊に帰依し熱心な外護者となった。釈尊滅後、群臣に勅して牛頭栴檀をもって五尺大尊像を刻ましめたという。インドにおける仏像造立のはじめといわれている。優陀延王ともいう。

有徳王と覚徳比丘　（要語解説三一四ページ参照）

優曇華　ヒマラヤ山麓、セイロン地方に産する闊葉樹。仏典に出てくる優曇華は、三千年に一度咲き、そのとき金輪王、仏世尊が出現するという。この華にあいがたきことに、仏のあいがたきを譬える。

優婆夷　仏教を信ずる在家の信女。

優婆毱多　優婆崛多ともいう。付法蔵の第四。第三に末田地が入って第五とする説もある。釈迦滅後、その予言どおりインド摩突羅国に生まれ、長じて商那和修に師事して法蔵を付せられた。阿育大王を化導した。

優婆塞・優婆夷　仏教を信ずる在家の男子と女子、すなわち、俗男俗女のこと。

優婆離　優婆利とも書く。悉達太子の執事であった。後に釈迦の十大弟子の一人となる。持戒第一といわれ、戒律をたもつことに秀でていた。釈迦滅後、第一回経典結集に際し阿難が経を誦出し、優婆離は律を誦出した。

有名無実　名ばかりで、その事実がないこと。本迹相対の上で述べると、迹門の一念三千を有名無実という。真の一念三千があらわれないからである。迹門はただ名のみあって実義がないから有名無実である。また迹門の二乗作仏も有名無実である。

有門・空門　有門とは小乗教のことであり、空門とは権大乗

教のことである。化法の四教に配すれば有門は蔵教、空門は通教、亦有亦空門は別教、非有非空門は円教となる。御義口伝上（七一五ページ）には「有門は生なり空門は死なり……有門は題目の文字なり空門は此の五字に万法を具足して一方にとどこうらざる義なり」とある。

盂蘭盆　梵漢の合成語。盂蘭は梵語で倒懸と訳す。倒懸とはさかさづりの苦しみの意で、餓鬼道の苦痛をあらわしている。盆は漢語で物を盛る器のこと。すなわち、餓鬼道倒懸の苦を扱うために、盆に百味の飲食を盛り、十方の聖衆に供養するゆえに盂蘭盆という。一種の供会であって、仏教における行事の一つである。その起こりは、目連尊者が神通を得て、母の餓鬼道に落ちたのを救おうとしたができず、仏がそのために盂蘭盆会の法を授けたことに始まる。

漏楼僧法　インドの婆羅門、三仙の一つ。因中無果説を立てた拘留外道のこと。

有漏　漏は煩悩を有するの義、無漏に対する語。煩悩をいう。煩悩によってあらわれた苦果と迷いの世間をさして有漏ということもある。

有漏の依身　凡夫の肉体をいう。有漏とは煩悩のこと、依身とはこの煩悩所依の身をいう。すなわち六道の凡夫は前世の煩悩の業果によって三界に生まれ、またその肉体によって有漏の業をつくり、来世に再びその苦を招くところから凡夫の肉体を有漏の依身という。（曾谷二郎入道殿御返事 一〇六九ページ参照）

有漏の禅定　有漏禅、有漏の坐禅と同じ。無漏禅に対する言葉。三界を九地に分け六行観（外道の修行法）によって上地を喜び下地をきらって、しだいに上地に進む坐禅観法のこと。三界を離れるには無漏禅を修する以外にない。

雲閣月卿　雲閣とは雲上の人、雲客ともいわれ殿上人のことで四位・五位および六位の蔵人のなかで昇殿を許された者をさしていう。月卿とは公卿のことで太政大臣、左大臣、右大臣を三公または公といい、大・中納言、参議および三位以上を卿といい、これを合わせて公卿といった。（観心本尊抄二四七ページ参照）

雲自在灯王　法華経化城喩品第七、常不軽菩薩品第二十に説かれた仏の名。雲自在来ともいう。不軽菩薩が威音王仏の像法の時に出現して、ただ礼拝を行じ、命が終わって後、二千億の日月灯明仏のところで法華経を説いた。この因縁をもって、また二千億の雲自在灯王を号する仏の法のなかにおいて、受持、読誦して法華経を説き、成仏することを

得た。

雲雷音王仏　法華経妙荘厳王本事品第二十七に説かれている雲雷音宿王華智仏の略称。妙荘厳王を教化した仏。その夫人、浄徳夫人はこの仏に八万四千の鉢を供養して、その功徳により妙音菩薩となった。

え

永遠の生命　生命は永遠に続く。キリスト教の「霊魂の永遠」は非科学的である。仏教では、生命は色心不二であり、法身（生命）報身（智慧・心）応身（振舞い・肉体）の三身が即一の姿で、過去、現在、未来の三世にわたって続くものであり、しかも永遠の存在であることを説いている。

翳眼　翳とは、おおいかくすという意。すなわち、曇ってかすんだ目のことで、正しい仏法を見ようとしない者。

栄啓期　中国周代の人で、生年、没年不明。三楽を歌ったことで有名。すなわち、自分は人と生まれることができたことが一の楽しみである。なかでも男として生まれることができた、これ二の楽しみである。いろいろの人生があり、死をまぬかれない者もあるのに、自分はもう九十にもなった、これ三の楽しみであると。

叡山　比叡山延暦寺の略。桓武天皇の御代、延暦七年、伝教大師が開いた。法華経迹門の戒壇がある。

叡山の円頓戒　比叡山延暦寺の法華迹門の戒壇で授ける、大乗円頓戒のことをいう。伝教が桓武天皇の時、入唐して、天台山国清寺の道邃和尚から伝えられ、帰朝の後、叡山一乗止観院で円澄以下百余人に授けた。しかし正式に迹門戒壇で円頓戒によって授戒したのは、伝教の没後、迹門戒壇の勅許を得て、弘仁十四年（八二三年）からである。円頓戒とは円教の菩薩戒で、普通の菩薩戒すなわち梵網経、瓔珞経等の十重禁戒、十無尽戒等とは異なるのである。

叡山の真言宗　伝教は桓武天皇の前で南都六宗と法論を行ない法華一乗の義を宣揚した。入唐後、比叡山に一乗止観院を建立し、ついで義真は勅を奉じて迹門の円頓戒壇を叡山に建立した。しかるに、義真の後に円澄までは清浄な法灯を守ったが、第三の座主・慈覚にいたって、真言の邪義を取り入れ、理同事勝の邪義を説き台密といわれるようになった。

衛の元嵩　中国唐代の僧。幼くして出家し仏道に入ったが、悪心を起こして還俗し、政治的手腕にすぐれ、北周の武帝に上表して、廃仏毀釈し、仏道を破った。

慧苑法師　唐代、華厳宗の学僧。法蔵の弟子でありながら、法蔵の立てる五教判を用いないで別に四種教を立てた。そのため法蔵の後は澄観が継ぎ中国華厳宗の第四祖となった。

易　易は陰陽道といって、中国の古聖はこれによって天地の変易を見、大業を決め、徳を修め、世を救い、時をはかった。現代伝わる周易は八卦、六十四卦、三百八十六爻を重ね乾坤相次ぎ天地の位を正とする。これに繋辞を作ったのが周の文王であり、十翼は孔子が作ったと一説に伝えられている。

依義判文　「義に依って文を判ず」と読む。依文判義に対する語。十章抄（一二七四ページ）に「爾前は迹門の依義判文・迹門は本門の依義判文なり、但真実の依文判義は本門に限るべし」とある。（要語解説二一〇ページ参照）

依義不依語　「義に依って語に依らざれ」と読む。涅槃経に説かれている法の四依の一つ。仏説の実義によって、人師、論師の語によってはならぬとの意。（守護国家論四五ページ）

依経　各宗派がよりどころとする経説を依経という。すなわち倶舎宗、成実宗、律宗は阿含経を依経とし、法相宗は上生経、下生経、成仏経、解深密経、瑜伽論、唯識論等の経論を依経とし、三論宗は般若経を、その他、真言宗は大日経、金剛頂経、蘇悉地経の三部経を、念仏宗は阿弥陀経、観経、双観経の三部経を、天台宗は法華経を、禅宗は楞伽経等を依経としている。

疫癘　流行病、伝染病。

慧解脱　小乗三蔵教の位である七聖の一つ。慧解脱と倶解脱の二つは、共に阿羅漢の位であり、いずれも見思の惑を断じ尽くして煩悩がないゆえに、再び三界六道には生まれてこないという。鈍根の者は慧解脱になり、利根の者は倶解脱になる。

慧眼　五眼（肉眼、天眼、慧眼、法眼、仏眼）の一つ。二乗が空理を遠見する智慧の眼。凡夫の立ち場からいえば、深い知識体験にもとづく物事の判断力。

依怙　よりかかり、たのみとすること。依怙依託と、一つの熟語として用いる場合もある。

回向　回転趣向という意。すなわち、自らが仏道修行をして得たところの功徳を、回し転じて、衆生に向けてほどこし与えること。

壊劫　四劫の一つ。四劫とは成劫、住劫、壊劫、空劫の四つ。一つの世界が成立するまでの期間を成劫、成立以後、継続する期間を住劫、火災・水災・風災の三災で破壊する

期間を壊劫、消滅して空になる期間を空劫という。

依語不依義　「語に依って義に依らざれ」と読む。涅槃経に説かれている法の四依の一つの依義不依語の反対語。これは誤った考えである。

衣座室　法師品第十に、法華経弘経の三軌としてあげられている。信心・折伏の心構え。衣とは柔和忍辱の衣、座とは不惜身命の修行、室とは慈悲の心に任す等の意。

会三帰一　三乗を会して一乗に帰すること。三乗とは声聞、縁覚、菩薩で、一乗とは法華一仏乗のことである。

穢食　きたない、不潔な食物のこと。教えの勝劣をたとえるとき、すぐれた方を宝器、劣れる方を穢食とした。

壊色の糞掃衣　仏教僧侶の如法（法にかなった）衣の一つ。釈尊時代の僧侶は衣に執着をもってはならぬとして、普通の反物を用いず、墓場等で拾い集めた布切れを、さらに一般人の好まぬきたない色に染めた。薄墨はその一。この理をもって日蓮正宗は、薄墨の衣以外着ないのである。

依識不依智　「識に依って智に依らざれ」と読む。涅槃経に説かれている法の四依の一つの依智不依識の反対の語。これは誤った考えである。

会者定離　会える者は必ず離れるとの意。遺教経に「会う者は必ず離るることあり、憂悩をいだくことなかれ、世相斯の如し」と説かれている。この世の相の遷滅無常をまぬかれざるを「生者必滅、会者定離」と成語するのである。

会衆　仏の説法の座に集まった衆生。四衆あるいは説会の四衆ともいう。発起衆、影響衆、当機衆、結縁衆の四種の衆生。

衣珠　法華経に説かれた七つの譬えの一つ。衣裏宝珠、衣内明珠、貧人繋珠ともいう。五百弟子受記品第八に、貧人が内衣の裏に無価の宝珠あるを知らず放浪したが、後にこれを知り歓喜したとある。この受記品で因縁周の富楼那や阿若憍陳如らに記別が与えられた。文底の意は、御本尊を信ずれば、われもともと仏なりと知りうるが、謗法のために知ることができないとの意。

依正　依報と正報。正報とは果報の主体で衆生の身であり、依報とは正報の所依となる非情の草木・国土。依正は二にして不二である。

依正不二　妙楽が玄義の十妙を解釈するため、釈籤に「十不二門」を立てているが、その第六が依正不二門である。依報と正報の不二なるをいう。正報とはわが身、主観的立ち場であり、依報とは一切の対境をいい客観的立ち場であるが、その二つが一体であるということ。瑞相御書（一一

四〇ページ）に「夫れ十方は依報なり・衆生は正報なり譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし・身なくば影なし正報なくば依報なし・又正報をば依報をもって此れをつくる」作とある。

慧心僧都　慧心僧都源信のこと。比叡山の僧で永観二年、往生要集を著わして念仏を立てたが、後に悔い改めて、一乗要決を著わして法華経に復帰した。

慧心流　比叡山天台宗の主流であり、慧心僧都源信がその祖始である。他の一派を檀那流という。天台宗の相伝には教門に重きをおくものと、観門に重きをおくものとがあるが源信は慈慧大師より観門の相承を受け、これを発展せしめた。（四条金吾殿御返事一一一六ページ参照）

浮囚の島　蝦夷の住んでいた北海道のこと。

依託　よりどころとする、たよりとすること。依怙依託として用いることもある。

依智　依知とも書く。現在の神奈川県厚木市の北部に依知の地名が残っている。鎌倉時代には本間六郎左衛門重連の邸宅があったところ。大聖人は竜口法難後、十月十二日に佐渡流罪と決まるまでの一か月、ここに滞在された。

越後の守殿　極楽寺殿とは、北条義時の子の重時であるが、この重時の五男・業時をいう。重時の子は長男・為時が若死に、次男の長時は三十五歳で、三男・時茂は三十歳で死に、四男の義政は出家し、五男・業時だけが建治三年に越後守に任ぜられて生き残っていた。

越後の国府　越後の国の首府。現在の新潟県直江津市の西南で、五智には国分寺の跡がのこっている。このあたりに国府が置かれた。

越後房　大聖人の門下で、日興上人の直弟子、越後房日弁のこと。下野房日秀と共に熱原滝泉寺の僧であったが、日興上人の折伏で改宗し、真剣に弘教に励み、熱原法難にもよく戦った。日秀は最後まで日興上人に随順したが、越後房日弁は後に日興上人に背いた。

依智六郎左衛門尉　本間重連の呼び名。重連は北条武蔵守宣時の家人で、佐渡国新穂の地頭だったが、本領が相模国の依智にあったので、こう呼ばれた。

依智不依識　「智に依って識に依らざれ」と読む。涅槃経に説かれている法の四依の一つ。智とは仏の智であり、識とは凡夫の浅い知識である。仏の智によって、凡夫の浅識によってはならない、との意。

会通　よく理解して、疑いや、とどこおりのないこと。

期間を壊劫、消滅して空になる期間を空劫という。

依語不依義　「語に依って義に依らざれ」と読む。涅槃経に説かれている法の四依の一つの依義不依語の反対語。これは誤った考えである。

衣座室　法師品第十に、法華経弘経の三軌としてあげられている。信心・折伏の心構え。衣とは柔和忍辱の衣・座とは不惜身命の修行、室とは慈悲の心に任す等の意。

会三帰一　三乗を会して一乗に帰すること。三乗とは声聞、縁覚、菩薩で、一乗とは法華一仏乗のことである。

穢食　きたない、不潔な食物のこと。教えの勝劣をたとえるとき、すぐれた方を宝器、劣れる方を穢食とした。

壊色の糞掃衣　仏教僧侶の如法（法にかなった）衣の一つ。釈尊時代の僧侶は衣に執着をもってはならぬとして、普通の反物を用いず、墓場等で拾い集めた布切れを、さらに一般人の好まぬきたない色に染めた。薄墨はその一。この理をもって日蓮正宗は、薄墨の衣以外着ないのである。

依識不依智　「識に依って智に依らざれ」と読む。涅槃経に説かれている法の四依の一つの依智不依識の反対の語。これは誤った考えである。

会者定離　会える者は必ず離れるとの意。遺教経に「会う者は必ず離るることあり、憂悩をいだくことなかれ、世相斯の如し」と説かれている。この世の相の遷滅無常をまぬかれざるを「生者必滅、会者定離」と成語するのである。

会衆　仏の説法の座に集まった衆生。四衆あるいは説会の四衆ともいう。発起衆、影響衆、当機衆、結縁衆の四種の衆生。

衣珠　法華経に説かれた七つの譬えの一つ。衣裏宝珠、衣内明珠、貧人繋珠ともいう。五百弟子受記品第八に、貧人が内衣の裏に無価の宝珠あるを知らず放浪したが、後にこれを知り歓喜したとある。この受記品で因縁周の富楼那や阿若憍陳如らに記別が与えられた。文底の意は、御本尊を信ずれば、われもともと仏なりと知りうるが、謗法のために知ることができないとの意。

依正　依報と正報。正報とは果報の主体で衆生の身であり、依報とは正報の所依となる非情の草木・国土。依正は二にして不二である。

依正不二　妙楽が玄義の十妙を解釈するため、釈籤に「十不二門」を立てているが、その第六が依正不二門である。依報と正報の不二なるをいう。正報とはわが身、主観的立ち場であり、依報とは一切の対境をいい客観的立ち場であるが、その二つが一体であるということ。瑞相御書（一一

四〇ページ）に「夫れ十方は依報なり・衆生は正報なり譬へば依報は影のごとし正報は体のごとし・身なくば影なし正報なくば依報なし・又正報をば依報をもって此れをつくる（作）」とある。

慧心僧都　慧心僧都源信のこと。比叡山の僧で永観二年、往生要集を著わして念仏を立てたが、後に悔い改めて、一乗要決を著わして法華経に復帰した。

慧心流　比叡山天台宗の主流であり、慧心僧都源信がその祖始である。他の一派を檀那流という。天台宗の相伝には教門に重きをおくものと、観門に重きをおくものとがあるが源信は慈慧大師より観門の相承を受け、これを発展せしめた。（四条金吾殿御返事一一一六ページ参照）

浮囚の島　蝦夷の住んでいた北海道のこと。

依託　よりどころとする、たよりとすること。依怙依託として用いることもある。

依智　依知とも書く。現在の神奈川県厚木市の北部に依知の地名が残っている。鎌倉時代には本間六郎左衛門重連の邸宅があったところ。大聖人は竜口法難後、十月十二日に佐渡流罪と決まるまでの一か月、ここに滞在された。

越後の守殿　極楽寺殿とは、北条義時の子の重時であるが、この重時の五男・業時をいう。重時の子は長男・為時が若死に、次男の長時は三十五歳で、三男・時茂は三十歳で死に、四男の義政は出家し、五男・業時だけが建治三年に越後守に任ぜられて生き残っていた。

越後の国府　越後の国の首府。現在の新潟県直江津市の西南で、五智には国分寺の跡がのこっている。このあたりに国府が置かれた。

越後房　大聖人の門下で、日興上人の直弟子、越後房日弁のこと。下野房日秀と共に熱原滝泉寺の僧であったが、日興上人の折伏で改宗し、真剣に弘教に励み、熱原法難にもよく戦った。日秀は最後まで日興上人に随順したが、越後房日弁は後に日興上人に背いた。

依智六郎左衛門尉　本間重連の呼び名。重連は北条武蔵守宣時の家人で、佐渡国新穂の地頭だったが、本領が相模国の依智にあったので、こう呼ばれた。

依智不依識　「智に依って識に依らざれ」と読む。涅槃経に説かれている法の四依の一つ。智とは仏の智であり、識とは凡夫の浅い知識である。仏の智によって、凡夫の浅識によってはならない、との意。

会通　よく理解して、疑いや、とどこおりのないこと。

越王勾践　中国春秋戦国時代の越の王。

慧日大聖尊　釈尊を尊称せる語である。方便品第二にある。

会二破二　三論宗や法相宗で立てる邪義。会二とは、二乗を会して一乗となし、破二とは、二乗を破して一乗をあらわすことである。しかし、この場合、一乗は菩薩乗のことで法華経で説くところの一仏乗ではない。

会入　会は合わせる、理解するなどの意で、入は入れる、おさめるの意がある。すなわち、会入は、表面上相違する二つの論議の元意を、よく理解したうえで、同一のものに帰入することをいう。

依人不依法　「人に依って法に依らざれ」と読む。涅槃経に説かれている法の四依の「依法不依人」の反対語。これは人師の邪義である。

衣鉢　三衣一鉢のことで、袈裟と鉢のこと。三衣は僧の着る三種の法衣、一鉢とは托鉢して歩くときに使う飯鉢、顕仏未来記（五〇八ページ）に「伝持の人無ければ猶木石の衣鉢を帯持せるが如し」とある。衣鉢は法門の代名詞としても使われる。

衣鉢伝授　禅宗において代々付法相伝の師として法衣と鉢とを伝える儀式である。これはもと迦葉尊者が鶏足山にはいって釈尊より授けられた法衣と鉢とをもって釈尊より仏法を相伝したしるしとして、五十六億七千万歳後の弥勒仏の出世の時にこれを捧げるとした経説にもとづく。

依憑集　伝教大師の著一巻。依憑とは依りたのむこと、もっぱらそれによりかかること。各宗各派の名僧大徳が、みな天台宗に帰伏した事実を集めたもの。

依不了義経不依了義経　「不了義経に依って了義経に依らざれ」と読む。涅槃経の法の四依の一つの「依了義経不依不了義経」の反対語。これは邪義である。

依法不依人　涅槃経の文で、法の四依の一つ。「法に依って人に依らざれ」と読む。この文の意味は菩薩や人師の言にはよらず、仏の説いた法門によっていきなさいということ。

江馬入道　光時のこと。四条金吾頼基の主君。光時は北条義時の孫で、名越遠江守朝時の嫡子。謀叛の罪で入道して伊豆の江馬に身を引いていた。四条金吾は父と共に無二の忠臣として江馬入道父子に仕えた。

江馬の四郎　四条金吾頼基の主人である江馬入道光時の子供・親時という。建治四年ごろ許されて江馬の四郎親時も幕府に出仕していた。

依名判義　「名に依って義を判ずる」と読む。名体宗用教

の五重玄義で、南無妙法蓮華経の深義を判ずること。

右衛門大夫志 池上右衛門大夫宗仲のこと。弟の宗長と共に池上兄弟は謗法の父を折伏し、強信に励んだ。

依文判義 「文に依りて義を判ず」と読む。経典に説かれた文によって、仏の説いた真実の義を判断するということ。依義判文という語に対する。

衣裏 法華経の七譬のうちの衣裏珠の譬えのこと。五百弟子受記品第八に説かれている。

依了義経不依不了義経 「了義経に依って不了義経に依らざれ」と読む。涅槃経に説かれている法の四依の一つ。仏の真実の教えを説く了義経によって、不了義経によってはならぬという意。

衣領樹 三途河の畔にあるといわれる樹木。奪衣婆・懸衣翁が、その木の下にいて亡者の衣を脱がせ木に掛けるという。罪の軽重によって枝の高さが違うという。十王経にある。

恵亮和尚 叡山の学僧。文徳天皇の二皇子に惟仁、惟喬があり、天皇はいずれに皇位を譲るかに迷って、相撲の勝敗によってこれを決しようとした。このとき恵亮は惟仁のために祈念し、この法力によって惟仁の側が勝ち、皇位を譲られた。これが清和天皇であると伝えられている。

縁因仏性 縁因性ともいう。正・了・縁の三因仏性の一つ。一切衆生の仏性を開発助顕して成仏する仏性。

円戒 伝教が比叡山に建立した迹門の戒壇のこと。

縁覚 十界の一つ。二乗の一つ。一つには仏の十二因縁の理を観じて修行覚道するゆえに名づけ、一つは飛花落葉の外縁によって悟るゆえにいう。

炎火洞然 熱せられた空気が炎の燃え上がるように大地より昇るさまをいう。

円教 化法の四教のうちの一つ。三諦、十界、十如、三千の諸法が円融・円満な教えをいう。この円教に爾前の円と法華の円がある。末法の円教とは三大秘法である。

円極 一念三千の極理のこと。

円宗 天台宗の別称であり、円教のこと。円教たる法華経を依経として立てた宗であるから、かく呼ばれた。

円智房 円智ともいう。安房国（千葉県）の清澄山の住僧。詳しい伝はわからないが、大聖人に敵対した僧。学問的にはすぐれていたらしいが、謗法を犯し現罰をうけて悲惨な死に方をしたことは、御書によって明白である。（種種御振舞御書九二三ページ参照）

円澄 比叡山天台宗第二の座主。伝教を師とした。伝教の教

現在のビハール州南部のパトナ県ラージギルにあたる。付近に法華経を説いた霊鷲山その他、竹林精舎、祇園精舎などの遺跡が多い。頻婆沙羅王や阿闍世王の居城であった。

王舎城の丑寅　王舎城は中インド摩竭陀国の首都で、その丑寅（東北）の方向に、釈迦が法華経を説いた霊鷲山がある。仏法の中心道場は王城の丑寅に建つのが仏法の習いである。（上野殿御返事一五五八ページ参照）

往生　この世を去って他の浄土に生まれることをいう。この世を穢土とする念仏宗などの教えである。

王昭君　中国漢朝の元帝の宮女。当時、匈奴の侵入に苦しんだ漢は、それとの友好関係を講じる一手段として、王昭君を匈奴に嫁して、その地におもむかせた。

往生極楽　浄土三部経によって代表される往生思想をいう。この劣悪の世を去って彼の浄妙の境界にゆき、勝れた果報の生を得るという。弥陀の名号を唱えれば西方の極楽世界阿弥陀仏の浄土へ往生すると、念仏宗で主張している。

王城の鬼門　王城とは国王の住する都城で、釈迦時代は王舎城。鬼門とは丑寅（東北）の方角。仏法の根本道場は王城の鬼門に建立されるのが仏法の習いである。

往生要集　天台宗の首楞厳院源信僧都の著。極楽往生に関する経論の要文を集めたもの。三巻で本末を分ければ六巻となる。

応真　梵語で阿羅漢の意。

応身　応身如来という。如来の三身の一つ。慈悲のあらわれをいう。また、生命論では色形に現われた相をいう。

往代　過ぎ去った時代。

王難　国法によって受ける難。

横難横死　横難とは不慮の災難または予期しない難をいう。横死とは非業の死で、殺害またはその他の災害、事故等によって死ぬことをいう。この横難横死には、謗法のための現罰と、正法護持による転重軽受によるものとの二つがある。

黄檗宗　曹洞宗、臨済宗と共にわが国禅宗三派の一つ。中国の黄檗宗万福寺の僧・隠元が、承応三年に来日し、四代将軍・徳川家綱に会い、万治二年に山城国宇治郡に中国の故山にならって同名の黄檗宗万福寺を創立して弘めた宗派。

応仏昇進の自受用身　寿量品で顕本した五百塵点劫・本果第一番成道の釈尊、文上脱益の色相荘厳の仏身のこと。久遠元初の自受用身よりも劣る。日寛上人は末法相応抄に、久遠元初の自受用身と応仏昇進の自受用身の相違について「一

には本地と垂迹、二には自行と化他、三には名字凡身と色相荘厳、四には人法体一と人法勝劣、五には下種の教主と脱益の化主」と天地の開きがあることを示されている。

王仏冥合　「戒壇とは王法仏法に冥じ仏法王法に合して王臣一同に本門の三秘密の法を持ちて……」（三大秘法抄一〇二二ページ）とある日蓮大聖人の御金言が、そのまま世界平和実現の大原理である。王法とは、全民衆、全社会を包含する内容を意味する。個人にとっては日常の生活であり、社会的にみれば政治、教育等社会全般の文化、それに連なる一切の現象活動である。仏とは仏法の略称で、宗教の意。もちろん、その時にかなった最高の宗教をいう。末法今日は日蓮大聖人の三大秘法の仏法がそれである。この王法と仏法が冥々のうちに合することをいう。政治、教育、芸術が自然のうちに仏法の真髄にかない、仏の大慈悲が文化の上に具現されていくところに、真の平和楽土の建設が実現されるのである。

王莽　前漢を滅し国号を新と改めた。

王陵が母　漢の王陵は沛の人、その母は敵にとらわれたが、死んで子に忠道をまっとうさせた。

お会式　日蓮正宗の二大法要の一つ。大聖人の現有滅不滅常住此説法のお姿を慶祝する儀式である。毎年、旧暦の十月十二、十三日の両日にわたって総本山富士大石寺および全国の末寺で行なわれる。「お練り」「御説法」ならびに「三三九度の古式盃」の儀式等は、日蓮正宗独特の行事で深遠な意義を有する。

大石が原　日蓮正宗総本山富士大石寺を中心とする景勝の地を、その昔は、大石が原と呼んでいた。現在の静岡県富士宮市上条で、身延線富士宮駅より東北約八キロの地点にある。この素晴らしい景勝の地に大聖人の御遺命どおり本門寺（大石寺）の建立をみた。

大井荘司入道　甲斐源氏の大井の荘司で、甲斐の国中巨摩郡鰍沢方面の大邑であって、日興上人の大井とはまったく関係がない。小室日伝の祖父であり日興上人の弟子である。

大田五郎左衛門尉乗明　大田金吾ともいう。鎌倉幕府の問注所の役人。同僚の富木常忍に折伏され、以後、天台真言を捨て、富木常忍、曾谷教信、金原法橋等と共に下総（千葉県）中山を中心に大聖人の外護にあたった強信者。三大秘法抄、転重軽受法門など多数の御書をたまわった。

大山の王子　大山守皇子という。応神天皇の皇子。母は高城入姫、菟道稚郎子皇子の庶兄であった。大山の王子は稚郎

子皇子を快く思わず常にうらんでいた。応神天皇が崩じた時に、兵をあげておそおうとしたが大鷦鷯尊がこれを皇子に告げて備えたので、大山の王子は船をくつがえされておぼれ死んだ。

憶持不忘　身にも持ち、心にも銘記して忘れず、いかなる場合にも決してこれに違背しないで、よくそれを実現すること。法華経を行ずるには、もろもろの難ありと仏が説いている。これを聞いて信受し、いかなる迫害・法難がきても退転しないで、経のままに信じ行ずることが憶持不忘である。四条金吾殿御返事（一一三六ページ）には「まことに聞き受くる如くに大難来れども憶持不忘の人は希なるなり」とある。

御座替わりの御本尊　日興上人が四十五歳の時、大石寺建立の年、正応三年十月十三日に顕わされた御本尊で、第三祖日目上人に授与された。現在の日蓮正宗総本山大石寺の大客殿の御本尊は、宝永三年、第二十四代日永上人がこの御本尊を模写彫刻したものである。

小樽法論　昭和三十年三月十一日、白雪におおわれた北海道小樽市の公会堂で行なわれた日蓮正宗創価学会と日蓮宗身延派との法論対決で「小樽問答」ともいわれる。その結果は本尊論などで創価学会の大勝利、身延派の大惨敗に終わり、創価学会は宗教界の王者であることを広く天下に宣言し、一方、身延派はその後衰微の一途をたどることになった。（要語解説四一七ページ参照）

乙御前　大聖人の帰依者である日妙尼（鎌倉に住した寡婦）の子供。乙御前は母にともなわれて佐渡の大聖人をたずねている。その強信をたたえて、母・日妙は大聖人から日妙聖人の名をいただいている。

御室　第五十九代の宇多法皇が仁和寺を京都西山双岡の地に建立し、御室を構えて住み始めてから御室の呼び名が起こった。御書のなかの御室は後鳥羽天皇の第二子である道助法親王をさす。

重須　日興上人が身延離山の後、正応三年に大石寺の開創がなり、本六老僧も定まった。そして隣村重須の地頭・石河孫三郎能忠の願いにより、永仁六年、その地に移り学僧を指導し門弟の養成をはかられた。いわば日興上人の談所（学問所）と隠居所であり、将来は大石寺を中心に重須を含めた大本門寺の建立を考えられていた。今は重須（北山）本門寺の名を詐称している。

鳥竜　中国の書道の名人。子の遺竜が法華の経題を書いた功

徳によって救われた。遠竜の項参照のこと。

御義口伝　御相伝書たる本因妙抄、百六箇抄等とならんで大聖人の奥義を教示されたものとして重要な御相伝書である。大聖人の内証の立ち場から法華経の講義を、日興上人が筆記されて大聖人の御允可を得たもの。大聖人の文底下種の法門が明かされている。（要語解説二八〇ページ参照）

慇懃　ねんごろ、親切でいねい。

飲食諂疎　般泥洹経に説かれている八種の大難の一つ。食物に不自由し、また粗末なものしか得られないこと。

飲食不節　天台の止観第八の上に説かれている病気になる原因の一つ「二に飲食節せずんばまたよく病をなす」と、食物等に節制を欠き、食べたり食べなかったり、あるいは暴飲暴食をすることをいう。

御式目　貞永式目のこと。

怨嫉　法華経を説き行ずる者、すなわち正法を守る者をあだみねたむこと。

園城寺　滋賀県大津市園城寺町にある天台宗寺門派の総本山。山門（延暦寺）に対して寺門といい、三井寺ともいう。教待和尚の建立。天智、天武、持統の三天皇が誕生の時、ここの井水を汲んで浴場としたので御井寺と称した。後、智証がこれを三井と改めた。

遠沾妙道　天台の文句の一に「後五百歳遠く妙道に沾わん」とある。三大秘法が末法に広宣流布することの依文。日寛上人の依義判文抄および撰時抄文段にこれを釈して、遠沾とは流布の義、妙とは能歎の辞、道とは所歎の三大秘法であるといわれている。道の字の三義は、一に虚通の義即本門の本尊、二に所践の義即本門の戒壇、三に能通の義即本門の題目である。すなわち末法万年尽未来際に三大秘法の南無妙法蓮華経が広宣流布すること。

宛然　さながら、そのまま等の意。

陰陽五行説　中国古来の思想。陰陽の二元に木火土金水の五元素を配し、これを自然、人事のすべてに適用して考え、吉凶、物忌、相性などを解釈する。日本においては律令制度のもとに中務省内に陰陽寮がおかれていた。陰陽道は俗信として深く民衆の生活にはいった。葬式の時の友引、結婚式の大安、家の方向の鬼門などの類いは陰陽道のなごりである。

陰陽師　中国から伝えられた陰陽および五行の思想にもとづいて、卜筮、天文、暦あるいは疾病治療などのための技術的知識をもった人のこと。

か

果　因に対する言葉。原因によって報いられる結果をいう。また、過去、現在、未来の三世にわたる善悪の報いをいう。

戒　非を防ぎ悪を止めるの義。戒定慧の三学の一つ。小乗の戒に①五戒②八斎戒③十戒④具足戒⑤二百五十戒⑥五百戒⑦十善戒などがあり、大乗の戒に①十重禁戒②四十八軽戒③菩薩五種戒④八律儀戒⑤三聚浄戒などがあり、法華経の戒には①一乗戒②三如来室衣座の戒③普賢四種の戒などがある。末法の戒は釈迦仏法の戒は用いず無戒であるが、三大秘法の御本尊を厳然と受持すべき虚空不動戒、金剛宝器戒がある。（要語解説三七ページ参照）

海印三昧　大集経に説かれてある三昧であって、菩薩がこの三昧を得れば、一切の事物の像が海中に映るように、一切衆生の心行を、己心にはっきり映し出して知ることができる、と説かれている。

開会　開顕会融または開顕会帰の義で、真実を開き顕わして一つに合わせること。諸仏の心は南無妙法蓮華経の御本尊の立ち場から、すなわち絶待妙の立ち場から見るときに初めて顕われ、会通し、了解することができるという意味である。

開経　一つの経説の序説となる経。結経に対する語。法華経では無量義経一巻が開経、普賢経一巻が結経となっている。

戒賢　法相宗の第五祖。護法難陀から法を受け、さらに玄奘に法を伝えた人。

開顕　閉じたのを開き、隠れたものを顕わし、真実の相を示すことを意味する。

開眼　開眼は開光、または開明、開光明等ともいう。新しく彫刻し、鋳像し、塗像し、絵像し、書写した仏菩薩等の像を、法をもって供養して、本尊の心を入れ生身の仏菩薩と同じにすること。これを開眼供養ともいう。「今の木絵二像を真言師を以て之を供養すれば実仏に非ずして権仏なり権仏にも非ず形は仏に似たれども意は本の非情の草木なり、又本の非情の草木にも非ず魔なり鬼なり……法華を心得たる人・木絵二像を開眼供養せざれば家に主のなきに盗人が入り人の死するに其の身に鬼神入るが如し」（木絵二像開眼之事四六九ページ）と、日蓮大聖人は三大秘法の御本尊をもって開眼供養する以外にないと述べられている。

回鶻国　中国の北西に位置した国で、現在の中国新疆ウイグル自治国の主要部分をいう。

開権顕実　「権を開いて実を顕わす」と読む。権教方便を開して真実相を顕わす。すなわち法華経迹門の開顕をいう。事に約して二乗作仏のこと、教に約して三乗を開して一乗を顕すこと、理に約して十界互具・百界千如の実相を顕わすことをいうのである。

開近顕遠　法華経の本門に説かれ、近（始成正覚）を開いて遠（久遠実成）を顕わすこと。略開近顕遠と広開近顕遠の二種がある。

開三顕一　三乗（声聞・縁覚・菩薩）の権を開して一仏乗の実を顕わす。法華経方便品第二に「一仏乗に於いて分別して三と説きたもう」「一乗の法のみ有り、二無くまた三無し云云」というのがこれである。（要語解説八八ページ参照）

開山上人　日蓮正宗第二祖白蓮阿闍梨日興上人のこと。日蓮大聖人の滅後、地頭・波木井実長や日向など五老僧の謗法により、汚濁した身延山を離山し「富士山に本門寺の戒壇を建立せよ」との大聖人の御遺命を奉じ、大石が原の勝地に富士大石寺を開いたので開山上人と呼ばれる。

開示悟入　法華経方便品第二の広開三顕一の文。「諸仏世尊は衆生をして仏知見を開かしめ……仏知見を示さん……仏知見を悟らしめん……仏知見の道に入らしめんと欲するが故に世に出現したもう」と。御義口伝上（七一六ページ）には、開とは信心の異名、示とは南無妙法蓮華経を示し、悟とは即身成仏と悟り、入とは悟る当体直至道場となることであり、そして信心の開仏知見が正意であるといわれている。（要語解説八九ページ参照）

開迹顕本　迹門を開して本門を顕わす。発迹顕本と同じ。

戒定慧　三学という。蔵教にも通教にも別教にも円教にも、それぞれの三学がある。阿含小乗教においても三学を論ずるけれども戒律が主体となっており、また経教によっては、あるいは定が、あるいは慧が主体となっている。戒とは非を防ぎ悪を止めるの義で、仏道修行の過程でやってはならないことを守ること。定とは静慮であって心を散乱させないで悟りを開くこと。慧とは照明の義で煩悩や惑障を断破して真理の本性を証得すること。日蓮大聖人の仏法では、定を御本尊としてご建立になり、戒は戒壇、慧は題目の三大秘法である。（要語解説三七ページ参照）

皆成仏道　法華経方便品第二にあり「諸の衆生、皆已に仏道を成じき」と読む。三世を通じて法華経を信受する者は皆ことごとく成仏するという意。

皆是吾子　法華経譬喩品第三にあり「一切衆生は皆是れ吾が

子なり」と読む。末法では御本仏日蓮大聖人が父であり、一切衆生はことごとく日蓮大聖人の子となる。仏には主師親の三徳がある。

皆是真実　法華経見宝塔品第十一で多宝如来が、法華経を証明した言葉である。「釈迦牟尼世尊、所説の如きは、皆是れ真実なり」とある。

戒体　戒の四別たる戒法、戒体、戒行、戒相の一つ。戒法を受けた人の生命に収まって防非止悪の働きをする状態になった時をいい、大乗、小乗を通じていわれる。末法では大聖人の仏法の戒は受持即持戒であり、御本尊を受持するわが身そのままが戒体である。

戒壇　戒とは非を防ぎ悪を止めるの義で、戒を授ける壇場を戒壇という。その戒には、時と所によって、小乗戒、大乗戒、法華迹門の戒、本門寿量の円戒などがあり、壇の戒式もさまざまである。（要語解説二三八ページ参照）

我一切本初　「我は一切の本初なり」と大日経にある文。大日経転字輪曼荼羅行品第八の文で法華経と大日経とを同様にみなして、本初を寿量の義であるとしている。すなわち理同の釈を作ったわけである。一切の本初とは法身本有の理に約していった言葉で本有の仏性をさしたものであり、法報応の三身を明かした文ではない。これを真言宗では無理に一念三千の出処であるとして、法華経より大日経が勝れているという彼等の邪義の根拠の一つとした。

改転の成仏　諸大乗経で女人は女身を改め男に転じて成仏し、悪人は悪心を改め善人に転じて成仏する等の意である。すなわち、女人も悪人も、その身そのままで即身成仏すると説く法華経の一念三千の成仏と違う。

開塔　法華経宝塔品第十一で、虚空に涌現した多宝塔が開かれることで、これより霊山会から虚空会に移る。天台の文句に「開塔は即ち是れ開権なり」阿仏房御書（一三〇八ページ）に「閉塔は迹門・開塔は本門」とある。

界内界外　三界六道の内と外。

戒日大王　四世紀のはじめに、北インドを統一したグプタ王朝末期の王で、玄奘の入竺した時代の国王。この王の治世には三十年間、戦争が起こらず大いに善政を施した。また仏教の興隆にも力を尽くした。

界如　十界と十如是とを合わせ、略して界如という。

開廃倶時　施開廃の三釈のうち開と廃が同時であること。開廃同時ともいう。施とは開の準備、廃とは開の結果をいい、開会することを開という。

開仏知見　法華経方便品第二の四仏知見の一つ。仏知見とは衆生にもともとそなわった仏の生命で、この生命を法華経によって開き、顕わすことをいう。

戒法　戒の四科（戒法、戒体、戒行、戒相）の一つ。釈尊の制定した戒律の法であり、大小乗教を通じて、それぞれの戒法がある。

戒名　①受戒によって授かる名。初めて沙弥戒を受けるとき、師より法名を授かって俗名を捨てる。②後世になって生前戒を受けることはなくなり、死後、僧侶からつけられた法名をいう。

開目抄　大聖人が佐渡ご配流中、文永九年二月、聖寿五十一歳の時のご著作で、四条中務三郎左衛門尉頼基に与えられた。末法下種の人本尊開顕の書であり、日蓮正宗では一代諸経の勝劣・浅深を判じ五段の教相を説くゆえ教の重といわれる。（要語解説二一四ページ参照）

誡文　教え戒められた文。

戒律　戒とは非を防ぎ悪を止むることで、律とは律法禁制の義である。

可延定業　定業といえども三大秘法の御本尊によれば、必ず転ずることができ、延ばすことができるのである。可延定業書（九八五ページ）に「業に二あり一には定業二には不定業、定業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す何に況や不定業をや」とあり、また阿闍世王が定業を延べ、天台大師の兄にあたる陳臣、そして不軽菩薩等が法華経によって定業を延べたことが述べられている。

花押　日蓮大聖人のご消息文および御著述その他に多く出ている。また「押写」「花書」ともいう。印判に対する後世の名。

鵝王　仏の相好、仏の三十二相の一つである手足指縵網相のこと。これが転じて仏の異称となった。

果海円満　十八円満の一つ。諸法の自性を尋ねれば、まったく無作の三身で、仏所証の果海にはいらないものはない。すなわち一切諸法はことごとく無作の三身の仏果の大海にはいるということ。

餓鬼　十界、六道、四悪趣の一つ。欲に支配された貪りの状態で、時間に追われたり、物質の不足を常に感じ満足できない生命の状態。

瓦器戒　金器戒、銀器戒に対する語。瓦器とは、すやきの土器、かわらけの意である。瓦器戒とは、こわれた瓦器が修理できないようなもので、小乗阿含経の二乗の戒をいう。

瓦器金器　清浄毘尼方広経にある。声聞戒を瓦器に、菩薩戒を金器に譬えている。

火坑三昧　心を統一して他念に煩わされない境涯のこと。また苦悩にあえぐ衆生を救うため、そのなかに自己を投ずる菩薩の境涯。さらに末法今時の修行からみれば、三大秘法の南無妙法蓮華経を一心に唱えること。

瑕瑾　瑕は玉の疵、瑾は美玉。瑕瑾で、傷、欠点、短所の意味に用いる。

覚意三昧　修行して得る三昧の一つ。仏の力の加護により、仏の意を悟り、経々を覚え持って忘れないようになることである。

各謂自師　倶舎論疏に「もろもろの外道は各自師をこれ一切智なりといえり」とある文により出た言葉。すなわち自分の派の師が、仏の一切智を得て仏の真意を伝えるのであると思い込んでいる者のこと。

学生　学問を修める者。日本では、もと大学寮に在籍する生徒をいい、後に大寺において仏典を学ぶ者をいうようになった。たとえば伝教が定めた比叡山の学生式では毎年学生二人が年分度者として選ばれ、十二年間、山門を出ないで止観・遮那の両業を修めた。

学生式　伝教大師の作「山家学生式」をいう。この書は「天台法華宗年分学生式」「勧奨天台宗年分学生式」「天台法華宗年分度者回小大式」の三編よりなる一巻の書。

覚乗房　大聖人の弟子。詳細不明。佐渡の学乗房と同一人であるという説や、佐渡から身延に参り、帰途、富士方面の折伏に協力したという説がある

学乗房　大聖人の弟子。佐渡一の谷の人。（千日尼御前御返事一三一四ページ参照）

覚前の実仏　円教に説かれている無作三身如来のことで「夢中の権果」に対する言葉。

覚知　種子を覚知することを成仏という。したがって迹門、本門、文底のそれぞれ種子の異なるところから、迹門は大通下種であるから当分の覚知で、本門は五百塵点劫の下種を覚知すること。文底は久遠元初の下種となり、究極の種子は文底にある。

覚徳比丘　涅槃経に説かれる。過去世に歓喜増益如来の入滅後、仏法まさに滅せんとき、正法を堅くたもっている覚徳比丘を、正法誹謗の比丘たちが刀杖で迫害した。このときの国王の有徳王は護法のため謗法者と戦い覚徳比丘を守り命終した。この功徳で阿閦仏の国に生まれ、有徳王は第一

の弟子となり、覚徳比丘は第二の弟子となった。また未来世では覚徳比丘は迦葉仏、有徳王は釈迦仏となった。現在にあてはめれば、覚徳比丘とは総本山大石寺であり代々の猊下である。（要語解説三一四㌻参照）

赫燃　高温に熱せられたさまをいう。

学仏法成　本来は外道でありながら仏法の義を盗んで、自義に混入し、小乗教のあるいは大乗教の義を立てる者を附仏法成、学仏法成という。そのなかで学仏法成は大乗の義を立てる外道をいう。すなわち一代聖教大意（四〇三㌻）に「外道に三人あり、一には仏法外の外道（九十五種の外道）・二には附仏法成の外道（小乗）・三には学仏法の外道（妙法を知らざる大乗の外道なり）」とある。

学無学　学とはこれから勉学すべき無智の者をいい、無学とは学問の修行が終了した有智の者をいう。釈迦仏法では法華経授学無学人記品で学無学二千人が宝相如来と授記せられている。

鶴林　釈尊が死んだ所で拘尸那城阿夷羅跋提河の畔にある。釈尊が死んだとき、林の色が変じて白きこと白鶴のようになったためにこの名がある。また、ここで涅槃経が説かれたので、涅槃経の別名にもなっている。

学林　仏教講学の寮舎のこと。日蓮正宗には富士学林がある。

鶴勒　付法蔵の第二十三祖。（要語解説三三七㌻参照）

我見　見惑に十使があり、二分して五利使、五鈍使となるが、この五利使のなかの身見をいう。自己に執着して起こす謬見。

加護　一般には神仏が力を加えて守ることだが、法華経には諸天善神が法華経の行者を守ると説かれている。

過去常　仏が過去において常住であったということ。

過去荘厳劫の千仏　三世の仏を釈せるなかの一つ。「過去荘厳劫千仏名経」に出ている。

過去の七仏　毘婆尸仏・尸棄仏・毘舎浮仏の三仏は過去の荘厳劫に出世し、拘留孫仏・倶那含仏・迦葉仏・釈迦牟尼仏は現世賢劫に出世した仏であるが、いずれも入滅した仏であるから過去の七仏という。

過去の宿習　過去世に植えた種々の因によって、現世に結果となって現われてくること。宿縁、宿業、宿命などと同じ。

過去の種子　過去における下種のことで、下種とは仏に会って仏になる種をうることである。

華山　中国の五岳の一つで、西岳ともいう。

我実成仏已来　法華経寿量品第十六の文。本門十妙の本果妙

の依文。文上顕本では久遠五百塵点劫本果の成道をいい、文底顕本では久遠元初の成道を説く。

我此土安穏　法華経寿量品第十六「自我偈」の文で「我が此の土は安穏にして」と読む。世間がどんなときでも三大秘法の南無妙法蓮華経を受持しきれば我此土安穏の仏国土となる。

火持如来　大日天子（日天）の成仏の宝号。

過時不雨の難　薬師経に説かれている七難の一つで、雨の少ない季節を過ぎて雨期にはいってもなお雨が降らない天の異変。

賀島の荘　現在は静岡県富士市に属しているが、当時は駿河の国賀島の荘といい、熱原の法難の起こる原因となった滝泉寺は、この賀島の荘にあった。

呵責・駈遣・挙処　呵責は口で弾劾する、駈遣はそのところを追いはらう、挙処はその罪過を検挙処分し世をあげ国をあげて謗法者を処分することをいう。

呵責謗法滅罪抄　大聖人ご執筆の御書（一一二五ページ）。文永十年、五十二歳御作。流罪中の佐渡から鎌倉の四条金吾頼基に与えられた。内容はわが身の謗法滅罪の法は、どんなに悪口されても少しも退転なく正法を信じ折伏を行ずることにあるということ。

迦葉　釈尊の声聞の十大弟子の一人。頭陀第一といわれる。

嘉祥　中国・梁代の三論宗の祖、吉蔵法師の異称。

迦葉仏　過去の七仏のなかの第六で、現在賢劫の住劫第九の減・人寿二万歳の時出世した仏。

迦葉菩薩　①涅槃経の迦葉菩薩品の対告衆で迦葉童子、迦葉童子菩薩ともいう。摩訶迦葉とはまったくの別人。仏に三十六の問いを発し、仏より刀杖をもって正法を護持すべきことを説かれた。

我深敬等の二十四字　法華経不軽品第二十に不軽菩薩が四衆を礼拝して説いた文をあげて、「我深敬汝等　不敢軽慢所以者何汝等皆行菩薩道当得作仏」とあるのをさす。「我深く汝等を敬う、敢えて軽慢せず、所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし」と読む。二十四文字の法華経ともいわれる。

跨節　当分に対する語。当分・跨節は一往・再往と同意。当分はそのまま、そこでの意で、跨節はその一関一節にまたがり一重立ち入った意。

迦旃延　梵語、摩訶迦旃延の略。釈尊十大弟子の一人、論議第一。

画像木像　画像は絵に書いた仏菩薩の像で、木像は木に彫った仏菩薩の像。一念三千の法門によってのみ意義がある。

華陀　中国後漢末の名医。字は元化。沛漢譙に生まれ徐上に遊学し、経史に通じ養生の術をさとり、百歳になってもなおかつ若々しかったという。著書に「中蔵経」がある。

撾打　なぐる、打つ。

火大　五大の一つ。五大は宇宙に遍満し万物を構成している要素で、そのうち火大は物や生物を温暖成熟、火熱燃尽する性、力または状態。御義口伝上（七五一ページ）では火大を上行菩薩の徳に配されている。

価値論　（要語解説四四九ページ参照）

羯　羯磨の略。満州北東の松花江、黒竜江等の沿岸に住した民族の名で、転じて国名に用いた。唐代に起こった渤海国もこの種族の一つであった。

月愛三昧　阿闍世王を救わんがために釈尊がはいった三昧。涅槃経梵行品に「世尊この三昧に入りて大光明を放つ、その光り清涼にして往いて王の身を照して身瘡をいやし、邪熱を除き、耆婆大臣王の為に月愛三昧の名義を説く」とある。

月光菩薩　薬師如来の脇士たる菩薩。右辺にあって、左辺の日光菩薩に対す。

月氏震旦　月氏はインド、震旦は中国。

合掌　左右の掌を胸の前で合わせること。インドで古くから行なわれた敬礼法の一種で、仏を礼拝し恭敬するときに用いる作法。御義口伝上（七二二ページ）には「合掌とは法華経の異名なり……合とは仏界なり掌とは九界なり……」とある。

月蔵経　大方等大集月蔵経十巻のこと。月蔵経は大集経の一部に含まれているが、独立の経としても扱われている。釈尊が、佉羅帝山で比丘菩薩をはじめ多くの魔王、阿修羅、天、竜、鬼神等を化して帰仏させたことを記した経である。

月蔵菩薩　大方等大集月蔵経に説かれている菩薩。仏が月蔵経を説法したときの発起衆、影響衆の役目をし、その化導を助けた菩薩。

月天　月天子ともいう。月を神格化したもので阿含経には月宮殿に住し帝釈天王の内臣とする。月天の本地は勢至菩薩。法華経序品第一には釈提桓因（帝釈天）の眷属として名月天子の名が出ている。

羯磨　①諸尊および衆生等の所作の行為。②僧などの受戒の儀式。懺悔等の作法。

果徳　因行によって得た果上の徳。仏が九界の因位にあって

修行した万行によって成仏してそなえているところの万徳をいう。

迦弐志迦王　仏滅後四百年ごろ、インドに出現して健駄羅国を建てた。広い土地と多くの国をもち、初めは仏法を軽毀していたが、後に仏教に帰し、大いに力を尽くし、ガンダーラ芸術で有名な、ガンダーラ文化を築いている。阿育王とならび称せられる、仏教を保護した大王。

夏の桀王　夏は中国古代の国、禹王より始まり十七代四百三十九年で滅ぶ。桀はこの最後の王であって本名は履癸、奸臣を用い悪政を施し暴虐を極めたので桀と呼ばれた。殷の湯王のために打たれて滅んだ。

我波羅蜜　我は常楽我浄の四徳の一つ。波羅蜜とは「彼岸に到る」との意で、仏果にいたる修行をいう。

迦毘羅衛国　釈尊が誕生した国で、ヒマラヤ山麓、現在のネパール国タライ地方にあった。

迦毘羅外道　インドの数論学派の祖、全七十論を作る。止観輔行に迦毘羅は石となり、陳那菩薩石上に全七十論破折の偈を書くに石化して水となったと伝えられる。

我不愛身命　法華経勧持品第十三で大菩薩が仏滅後の弘法を誓い「我身命を愛せず、但無上道を惜しむ」と説いている。

果分　仏果。九界を因となし仏界を果となす。

果分不可説　果分とは因分に対する語で仏界の内証をいう。不可説とは「説くべからず」といって成仏を説かなかったことをいう。すなわち果分不可説とは成仏を説かない爾前経をさす。同じく因分可説果分不可説は、因分の菩薩の修行のみを説いて仏果の内証を説かない方便の経をさす。

果報　果は必然の結果、報は必然の報酬。果は心にうける結果で、報は色にあらわれる報いで、善悪に通じて用いられる。

下方の発誓　大地の下より涌出した地涌の大菩薩のみが滅後の弘法を誓ったことをいう。

我本行菩薩道　法華経寿量品第十六の文で「我れ本、菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命」云々とある。本門の十妙の本因妙を明かす文。この本因初住の文底に南無妙法蓮華経が秘沈されている。

果満　因円に対する言葉で、一切の功徳を円満に具足する仏果。法華経の因円を行じて成ずる真実最高の境涯。

我慢　七慢の一つで、自分をたのみたかぶって、我意を張り他を軽んじて従わぬこと。

我慢偏執　我見が強く、慢心があり、片寄った邪見に執著していること。

神　一般に神について多神教、唯一神教、汎神論などがある。特に天地創造の絶対唯一神や八百万の神などがその典型である。これに反して仏法上の神は一に法性神、二に有覚神たる諸天善神、三に邪横神に分けられる。

神天上法門　大聖人が立正安国論に、謗法の国土では正直の神が守護の本土を捨て天界の本地へ去り、そのあと悪鬼魔神が入れ替わり種々の災難が起こると仰せである。

鷲毛　鷲鳥の毛。白色柔軟で軽く、暖かく、臘を防ぐ。（千日尼御前御返事一三一六㌻参照）

伽耶始成　久遠実成に対する言葉。伽耶とは仏陀伽耶で釈尊が正覚を成じたところ。始成とは始成正覚のこと。すなわち伽耶始成とは、釈尊が爾前経や法華経の迹門で、三十歳の時、伽耶城の近くの菩提樹の下で初めて正覚を成じたと説いたこと。しかし法華経本門で伽耶始成説は否定せられ、久遠実成が説かれた。

伽耶城　釈尊成道の地に近いところにある中インド摩竭陀国の都城である。現在のインド、ベンガル州ペトナ市の西南方百㌔にあるガヤ市はこの地にあたる。この南方十余㌔に成道の地である仏陀伽耶がある。

華洛　都のこと。華洛は王城の意。

伽羅陀山　地蔵菩薩の住処とされている。

瓦礫　かわらとこいし。また、黄金や珠玉等の価値大なるものに対して、価値の低劣な、つまらぬものの譬えとして用いられる。

迦留陀夷　梵語、その身は黒く、よく輝くゆえに黒曜、黒光、黒上、大鹿黒などと訳す。仏弟子であり、もとは六群比丘の一人であったが、後に道果を得て阿羅漢となった。

迦楼羅　梵語、八部衆の一。インド伝説の怪鳥のこと。

元意　根本、本意ということで、細科や付文に対する語。

隔宇　伽藍のこと。

勧誡二門　勧門と誡門のこと。勧門はすすめて仏法に導く門であり、誡門はいましめて仏法に導く門である。

歓喜増益如来　涅槃経金剛身品に説かれている仏。この品には歓喜増益如来の滅後、覚徳比丘と有徳王のことが説かれている。

諫暁　総じていえば、いさめさとすこと。別していえば、国家などの安危について、その責任者に進言すること。

観経　観無量寿経の略称、浄土宗の依経とする三部経の一つ。

観行五品　天台の教法では六即位のなかの観行即を五位に立

汲み取って、その頂に灌ぐ儀式を行なうゆえに、この名がある。

感応　声のひびきに応ずるように、天月の池水に映ずるように、衆生の機感と仏の応用とが、互いに通じ融合すること。

感応道交　衆生の機感と仏の応赴と相通じて一道に交わること。衆生に機あって仏の出世を感じ、仏はこれに応じて出現し法を説くこと。

観音　観世音菩薩をさす場合と法華経の観世音菩薩普門品第二十五をさす場合とがある。

観音経　妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五のこと。

観音玄　天台の著作中五小部と呼ばれるなかの観音玄義をいう。法華経観世音菩薩普門品の大綱と題目を釈したもので二巻。

観音品　法華経観世音菩薩普門品第二十五のこと。寿量品の仏が不思議の化用をたれ、観世音菩薩が三十三身の普門示現の用をたれて衆生済度することを説く。しかし寿量品に比すれば「薬王品已下の六品得道のもの自我偈の余残なり」（法蓮抄一〇四九ページ）とあり、御義口伝下（七七六ページ）にも「今末法に入って日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る事は観音の利益より天地雲泥せり」とある。（要語解説七五ページ参照）

観普賢菩薩行法経　（要語解説八〇ページ参照）

観仏三昧　観仏とは仏の相好、功徳、理体等を観想観念することで、これを観仏三昧とも念仏ともいう。しかし所詮は爾前権教の修行にすぎない。

観仏三昧経　観仏三昧海経の略で観仏経ともいう。方等部に属し十巻十二品の経。釈迦が父王の浄飯王らのため、観仏三昧に住することによって解脱をえられると教えている。

観法　法を観ずることで、観念、観門などと同じ。法を観ずるとは、定心に住して智慧によって対境を思察、分見、照見すること。大聖人の仏法では、信心によって御本尊の功力を証得すること。

勧発品　普賢品とも略す。法華経普賢菩薩勧発品第二十八。神力品以下の付属流通中の自行流通を勧めている。普賢菩薩が東方宝威徳上王仏の国にいて、この娑婆世界で、釈尊が法華経を説くのを聞いて来至し、仏の滅後いかにしてこの法華経を持つかとの問いに対して、釈尊は、四法成就を説いて法華経を再演したことをあらわしている。

元品の法性　元品とは生命の本質という意味で、これを法性真如の一理ともいう。法性はこの場合悟りをいう。すなわ

ち根本の悟りを元品の法性という。末法今時では三大秘法の御本尊を信じて人間革命することである。

元品の無明　生命に本来そなわった根本の迷いをいう。一切の煩悩、悪業等は、みなこれから起こる。元品とは生命ということで、迷えば無明となり、悟れば法性である。この元品の無明を対治する利剣は南無妙法蓮華経である。御義口伝上（七五一㌻）に「元品の無明を対治する利剣は信の一字なり」とある。

桓武天皇　人皇第五十代の天皇。光仁天皇第一の皇子である。桓武天皇は平安遷都で有名。伝教大師を親任され天台宗を信じた。

勧門　戒門に対する語。戒門がいましめる意であるのに対し、勧門はすすめるという意。信仰生活にあてはめれば、功徳は勧門で罰は戒門である。

勧文　朝廷または幕府の役人や、または無位、無官の者などから上へたてまつる書をいう。

願文　神や仏に願いをかけ、願い事を書いた文である。また寺塔や経蔵などをつくるとき願主の趣意を述べた敬白文をいう場合もある。

甘露　忉利天の甘味の霊液で、よく苦悩をいやし、長寿にし、死者を復活させるという。転じて煎茶の上等のものや物の美味のものをいう場合もある。これが変じて美味なもの、衆生を喜ばせるものの意に転じた。

鹹鹵　鹹は、塩からい、鹵は、塩気を含んだ土地、不毛の地等の意があり、鹹鹵とは、塩分が強く作物ができないこと。

き

記　①記別の略。未来世の成仏に対する印可。②妙楽が天台の法華文句をさらに解釈した法華文句記の略称。③経論の注釈、講説の筆受の文などをいう。

鬼　仏法上、鬼とは鬼神をいう。鬼神とは、六道の一つたる餓鬼道を鬼といい、天竜等の八部を神という。人の功徳や生命を奪い害する働きをし、病を引き起こす原因となる。また鬼神は人の思考の乱れをも引き起こす。しかし鬼神は究極では妙法に照らされて、諸天善神と同じく法華経の行者を守護する働きをする。

機　一般には事が起こるきっかけ、万物自然の変化などの意であるが、仏法では仏の教化をうける衆生の生命の可能性またその状態をいう。在世の八機、滅後の三機などがある。

（要語解説一三六㌻参照）

義　①文に対する義。経文の所詮の実理、道理、立義、教義、意味などをいう。②仏の実義をさして義という。③儒教においては五常の一つ。

機縁　衆生に善の機根があって、仏の教法を受ける縁となること。

祇園精舎　インドの室羅伐悉底国、舎衛城の逝多林にあった精舎。精とは無雑といい、正法の修行者が住むところをいう。釈尊が多年にわたって化導を行なった所。

毀戒　戒律を破ること。

祈願　一般には神仏に利益を祈り願うこと。日蓮正宗では三大秘法の大御本尊を信じ奉り題目を唱え利益を願うこと。祈りは仏道修行の根幹である。

儀軌　化儀の軌範、儀式の軌則のこと。

機教相応　衆生の機根と衆生を化導する教えが相応していること。

喜見菩薩　一切衆生喜見菩薩のことで、法華経薬王品第二十三に「一切衆生喜見菩薩は、豈異人ならんや。今の薬王菩薩是れなり」とある。喜見菩薩は薬王菩薩の前身で法華経のため我が身を焼いて日月浄明徳仏を供養したという。

起後の宝塔　天台は、文句に、法華経宝塔品第十一の多宝の塔を釈して、証前の宝塔、起後の宝塔の二つの意味があるとした。すなわち宝塔品で多宝の塔が涌現して多宝如来が「善哉善哉……妙法蓮華経皆是真実なり」と証明したのであり、これを証前（迹門を証するの意）の宝塔という。次に多宝の塔を開かんがために十方分身の諸仏を集め二仏並座して、滅後の弘通を付嘱すべき地涌の菩薩を召して寿量品（本門）を説く起となる。これを起後（本門を起こすの意）の宝塔という。

機根　教えを受くべき衆生の性根をいう。

喜根菩薩　過去無量無辺不可思議阿僧祇劫に師子吼鼓音王如来の末法に出現した僧で、強い折伏によって正法を弘めた。反逆した勝意比丘は現身のまま大地獄に落ち、多くの苦を受けたのち文殊師利菩薩となった。

季札　中国春秋時代の呉王・寿夢の第四子。

毀呰　そしりとがめること。

亀玆国　中国の甘粛省の西、新疆省の北部にある国の名であって、今の庫車である。羅什はこの国で大乗を修した。

鬼子母神　三千世界の人々の寿命を奪う悪鬼であるが、法華経陀羅尼品において法華経守護の誓いを立てている。また、この鬼子母神は、人の母の性質、つまり人の子を殺し

ても自分の子をかわいがる本能的性質をよくあらわしたものといえる。十人の娘があり十羅刹女という。

耆闍崛山　霊鷲山のこと。法華経等を説法した所である。

起請　神仏に背いたならば罰をうけてもかまわないと誓いを立てて、神仏に願い事の成就を請いたてまつること。

疑請　疑を晴らしてくださいとお願いすること。

記小久成　記小は迹門諸品の二乗作仏の授記で、久成は本門寿量品の久遠実成の顕本である。（要語解説九四ページ参照）

義浄房　浄顕房と共に、清澄寺道善房の弟子で大聖人の法兄である。大聖人立宗後、いずれも熱心な弟子となった。

鬼神　六道の一つたる餓鬼道を鬼といい、天竜等の八部を神という。鬼神・竜神・天神・夜叉神等がある。人に対しては病気を起こし、また思考の乱れを引き起こす。また国家社会に対しては天災地変や思想の混乱等を起こす働きをなす。

起信論　大乗起信論といい、インドの馬鳴菩薩の著。漢訳に二ある。

慈真和尚　比叡山延暦寺第一の座主。相模の人。幼少にして叡山にのぼり伝教大師に師事し、付嘱を受く。（要語解説三七五ページ参照）

鬼星　二十八宿のうち、南方に属しており、この鬼星の光りが衰えるのは不作の兆という。

徽宗皇帝　中国北宋の第八の皇帝、性は趙、名は佶、神宗の第十一子。仏教を弾圧し、道教を庇護した。

鬼魅　夜叉、羅刹のように最も恐るべきもの。

吉祥草　草の名。茅薄に似た草で湿地に生じ、または水田に栽培される。釈尊は成道の時に、この草を座に敷いたという。

吉祥天女　功徳天女ともいう。インド古来の神とされ、人々に福徳を与える神として知られているが、仏教に種々にこれを説く。

吉蔵大師　中国梁代の三論宗の祖で、嘉祥寺に住んでいたので、嘉祥大師ともいう。七歳で出家、はじめ中論、百論、十二門論等の疏を作り、般若第一の義を立て三論宗の祖とされた。しかし、後に天台大師に心身ともに帰伏した。

吉蔵の疏　吉蔵が著わした経論の注疏。

祈禱　神仏にいのること。祈とはいのる、もとめる等の意があり、禱とはいのる、まつる等の意がある。

祈念　心をこめて祈り念ずること。経王殿御返事（一一二四ページ）に「あひかまへて御信心を出し此の御本尊に祈念せしめ給へ、何事か成就せざるべき」とある。

義農の世　伏義と神農の世という意味で、共に中国古代の理

想的平和時代である。

義の戒壇　事の戒壇に対していう。本門の戒壇に事と義がある。義の戒壇とは三大秘法の御本尊を安置し奉る一切の所をいう。事の戒壇とは、化儀の広宣流布の時に立つべき民衆立の戒壇である。

耆婆大臣　釈尊に帰依した有名な医師。阿闍世王を折伏して、ついに釈尊に帰依させた。

駿尾　伝説上の、一日千里を行くという駿馬の尾。

記別　「汝は成仏する」という仏の印可の割り符のようなもので、これを授けるのを「授記」という。

鬼弁婆羅門　インドのバラモンの一種。釈迦時代の外道であって、一種の逆説的理論をもてあそんだ。

帰命　梵語の南無の訳。自己の生命を御本尊に帰入させること。身命をかけて御本尊を信ずること。信ずる対象を本尊といい、これに人と法とがある。人とは日蓮大聖人に帰命することで、法とは南無妙法蓮華経に帰命するのである。帰とは色法すなわち肉体のことで、命とは心のことである。すなわち肉体と心は一致し、そこに生命の極致がある。

亀毛兎角　亀のこうらの毛、ウサギの角。同じように、ありようもないデタラメな法門をいう。

鬼門　丑寅の隅、すなわち東北の方角をいう。二つの意味があり、仏法の住所と邪鬼の住所。

逆縁　一般に、教えを聞いてすなおに信ずる人を順縁といい、反対しつづける者を逆縁という。正法に反対し、三年も七年も反対を続け、ついに地獄の相で死んでいく者等は逆縁である。また毒鼓の縁ともいう。謗法の罪によって、地獄に落ちるけれども、御本尊に縁をもった功徳によって、必ずその罪を滅し終えて、また御本尊に巡り会って成仏する。この衆生のことを逆縁の衆生という。（要語解説二九四㌻参照）

逆罪　悪逆を犯した罪で、五逆罪、七逆罪、八逆罪、二十悪罪などがある。

客殿　①一般には来客に対面するために設けた殿舎。②日蓮正宗の大客殿は独自の意義と使命をもち、総本山富士大石寺に威容を誇っている。御法主上人が広布の祈願、丑寅の勤行をされ、また満山供養等、総本山での大法要の場所として使用する。現在の大客殿は第三代池田会長が世界の名産を集めて建立供養された近代建築である。

隔別の三諦　隔歴の三諦ともいい、円融の三諦に対する語。空仮中の三諦が別々に説かれ円融していないこと。隔

別の三諦は無得道、円融の三諦は得道の教えである。

逆路伽耶陀　逆は漢語、路伽耶陀は梵語。訳して順世外道といい、弟子として、師の説に敵対することをいう。

九界　九界の項を参照。

丘澗　丘とは高い土地、澗は低い土地、すなわち土地に高低のあるさまをいう。

給仕第一　給仕とは、いつもそば近くにいて仕えることをいい、仏法上では仏に心服して随侍することが、仏法を学ぶための肝要である。末法の御本仏日蓮大聖人に常随給仕した日興上人は給仕第一というべきである。

九十五派のバラモン　（要語解説四二〇ページ参照）

九包淵　中国春秋戦国時代の人。秦の穆公のために天下の馬を鑑定したが、その鑑定は、馬の外見や毛色などに少しもとらわれないで、よくそのすぐれた性質をとらえて狂いがなかったといわれている。

旧本門宗　（要語解説四〇五ページ参照）

教　梵語の設婆怛羅の訳。「おしえ」と訓む。玄義第一上に「教とは聖人下に被らしむるの言なり」とあるように、聖人が人に対して説いた訓をいう。教には八教、宗教の五綱のなかの教、教行証の教がある。（要語解説一三五ページ参照）

経　梵語、修多羅の訳。仏の説いた教法を経といい、経典、経文ともいう。一切経、大蔵経は経、律、論を含めた呼称であり、経はそのなかでも根本となるものである。

境　境界の略で、主観的智慧の対象となるべき客観世界のことをいう。この境には六境、十境などがある。

軽易　軽蔑しあなどる。

行位全同　行位とは四妙のなかの行と位。修行と位とがまったく同じであるとの意で、久遠元初の自受用身の修行（南無妙法蓮華経を唱える）と位（名字凡夫位）が、末法の御本仏日蓮大聖人の行位とまったく同じであることをさす。

境淵無辺　境の淵がほとりなく、仏の智慧が限りなく広大であることをいう。

堯王　中国古代の帝王。帝堯、堯陶唐氏、また唐堯という。父は黄帝のひ孫たる帝嚳高辛氏、母は陳鋒氏の女。古来、善政を施いた名君として名高い。

経王御前　四条金吾とその妻・日眼女との間に生まれた娘。大聖人より四条金吾に与えられた御書に経王御前御書（一一二三ページ）や経王殿御返事（一一二四ページ）がある。

巧於難問答　法華経涌出品第十五の地涌の菩薩をほめたたえる文で「難問答に巧みし」と読む。日興上人の二十六箇条遺

誡置文（一六一九ページ）にも「一、巧於難問答の行者に於ては先師の如く賞翫す可き事」と述べられている。現在では折伏、法論等に巧みなこと。

教学　大聖人の教えを学ぶこと。信行学の一つ。創価学会には教学部があり大聖人の色心不二の大生命哲学の研鑽に励んでいる。

行学　修行と教学のこと。信行学のうちの二つ。諸法実相抄（一三六一ページ）に「行学の二道をはげみ候べし、行学たへなば仏法はあるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行学は信心よりをこるべく候」とある。

叫喚地獄　八大地獄の第四。顕謗法抄（四四四ページ）に詳しい。

経巻相承　相承とは相対授承の義で、血脈相承、師資相承等がある。ここでいう経巻相承とは、後世の者が経巻を読んで師の真意を悟り付嘱を受けたと自称することで、顕本法華宗の日什などがいっている。仏法における真実の相承は血脈相承、師資相承であり、このような経巻相承は仏法を乱す邪義である。

教観二門　教相門と観心門のこと。天台では、教相とは仏の教法の同異を分別することで五時八教等を明かし、観心とは教法によって己心を観じ十法界をみる実践の行で一念三千、一心三観等を説く。大聖人の仏法よりみれば、天台の教観二門とも教相となり観心とは御本尊を信じて題目を唱えることである。

行基菩薩　法相宗の僧。天智天皇の九年、和泉国大鳥郡蜷田郷家原村に生まる。史首と名づく。父は高志史洋、母は蜂田薬師古、百済王の子である。幼少より仏道に志し、十五歳で薬師寺に投じて出家し、二十四歳で徳光禅師にしたがって具足戒を受け、瑜伽、唯識の奥秘をきわめた。橋、道路等を作った。

教行証　教とは仏説の教法、行とは教によって立てた行法・修行、証とは教行によって得た果徳のこと。（教行証御書一二七六ページ参照）

教行人理　天台が文句に説いた「教一、行一、人一、理一」の四一の説を合わせてよんだもの。教は仏の説いた教法、行は教法に示された修行道、人は教を受け行を修する者、理は証道すべき法理をいう。

行解　行はおこない、修行であり、解は理解すること。すなわち仏法を修行し教えを理解し悟ること。止観に「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず」とある。

教外別伝　釈尊一代の経のほかに釈尊から迦葉に、文字によらずひそかに伝えられ、その法を伝えているという説で、禅宗の邪義である。

脇士　仏の脇に侍立する菩薩。仏徳を表わし、化導を助け、また用務をはたす侍聖のことをいう。観心本尊抄（二四八ページ）に「正像二千年の間は小乗の釈尊は迦葉・阿難を脇士と為し権大乗並に涅槃・法華経の迹門等の釈尊は文殊普賢等を以て脇士と為す」と、法華経本門の釈尊の脇士は上行等の四菩薩であり、文底独一本門の教主すなわち南無妙法蓮華経の脇士は、まず釈迦・多宝の二仏がならび、さらに上行等の四菩薩がならぶ。これを両重の脇士という。

憍尸迦　梵語、帝釈天の別称で、帝釈天が、前世において人であった時の姓である。

行者　仏道を修行する人をいう。異様な風体で滝にうたれたり呪術などを行なうのは誤りである。

教主　教法の主尊。教法能説の主尊。教主とは、仏の異名。

行住坐臥　行とは歩行、住とは一所に止まり立つ、坐はすわる、臥は横に寝ること。仏教では常にその行状を戒め行住坐臥で威儀を失わないことから四威儀という。末法では三大秘法の御本尊を信じ唱題することが最高の四威儀。

教主釈尊　教主とは教法の主尊で、教主釈尊に①蔵教の釈尊②通教の釈尊③別教の釈尊④法華経迹門の釈尊⑤法華経本門の釈尊⑥法華経本門文底の釈尊即久遠元初自受用身の六種類の教主釈尊がある。

堯舜　堯王と舜王のこと。共に中国古代の帝王で、善政を行なった名君として名高い。

形状醜陋　顔かたちの醜く卑しいこと。

教禅　禅宗を分類した三種の禅の一つ。釈尊の教によって立てた禅をいう。

軽賤憎嫉　法華経譬喩品第三に、法華経の行者を軽んじ賤しみ憎み嫉む者は必ず阿鼻地獄に落ちるとある。

教相・観心　（要語解説二六二ページ参照）

更増寿命　法華経常不軽品第二十の文。可延定業書（九八五ページ）に「不軽菩薩は更増寿命ととかれて法華経を行じて定業をのべ給いき」とあり、死ぬべく定まった寿命も、法華経修行の功徳によって死なないのみならず、さらに寿命を増すことをいう。寿量品には「更賜寿命」とある。

鏡霜法師　唐の武帝の命により国中に弥陀念仏を興行して歩き、唐の国に自界叛逆難と他国侵逼難を巻き起こした僧侶。

行体　修行する法体、また修行をしている姿をいう。

兄弟抄　大聖人が文永十二年四月、五十四歳の時、池上兄弟に与えられた御書。兄の宗仲が勘当されたとき、兄弟の信心指導のためお認めになり、止観第五の「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る」の文を示され、門家の明鏡とせよと申されている。

境智行位　天台の迹門の十妙のうち、初めの四つをいう。境妙とは対境で客観世界、智妙とは境に冥合する妙智すなわち主観世界、行妙とは智に基づいて起こる行動、位妙はその場合の位、位置をいう。

境智冥合　境は客観世界、智は主観的智慧。智とは信心ということで、御本尊を境として題目を唱えることが境智冥合である。（要語解説二五九ページ参照）

経典の結集　（要語解説三四二ページ参照）

教道証道　教道とは教相の法門であり、証道とは内証の悟りの法門である。天台によれば、

法華経―┬―迹門会三帰一――教道
　　└―本門開近顕遠――証道

となる。

京都の一致派　（要語解説三九七ページ参照）

憍曇弥　インド刹帝利種族中の一つ。普通、釈尊のおばである摩訶波闍波提比丘尼のことをいう。

脇比丘　付法蔵の第九。（要語解説三三九ページ参照）

行敏　念仏の僧。日蓮大聖人を迫害した。

行布　差別の意。本来、行布とは菩薩の位を五十二位に分けて、しだいに行列布置して差別を設ける意味であるが、転じて爾前経において二乗不作仏として、二乗を差別していることを示すのにも使われている。

教法流布の先後　宗教の五綱の一つ。教法の弘まる順序次第を判定すること。教は低い教えから高い教えへと弘まっていくもので、逆に高い教えの弘まった後から低い教えを弘めるわけにはいかない。（要語解説一四〇ページ参照）

楽法梵志　釈尊の因位のときの名。菩薩行を修しているとき、仏の一偈を聞くために、皮をはいで紙とし、骨を抜いて筆とし、血を墨として書写した。

行満座主　行満は中国蘇州の人で、天台法華の僧・妙楽の高弟である。道邃と共に伝教に法を伝えた。二十歳にして出家し、二十五歳にして具足戒を受け、律を学ぶこと五年、さらに天台の三大部を学んだ。（要語解説三七三ページ参照）

教弥実位弥下　「教えいよいよ実なれば、位いよいよ下し」と弘決の六にある。すぐれた教えほど、功徳・威力が強くて、ますます下劣の者を救うから、これを修行する者の位

は低いということ。これに反対の語は「教えいよいよ権なれば位いよいよ高し」である。

況滅度後　法華経法師品第十の文。「いわんや滅度の後をや」と読む。法華経を弘める者は、釈尊在世においてすら難をうけたのに、いわんや釈尊の滅後に法華経を弘める者には数々の大難があるということ。この滅度の後は、正・像・末の三時にわたるが、正意は末法である。

教門・観門　教相と観心であり、門は能入の門の意。

鄴洛の禅師　禅宗の祖師・達磨のこと。鄴は春秋時代の斉の都、洛は洛陽で、後漢、西晋、後魏などはみなここを都とした。共に達磨の法が弘められた土地の名。

経律論　経蔵、律蔵、論蔵のことで総称して三蔵という。仏法の教典はこの三つに分類される。経とは経本・経典、律とは戒律、論とは経典を解説したものをいう。

教令　教え示して、命令すること。

清澄寺　安房国清澄山中字妙見山にあり、天津より登ると一里半、境内一万八千坪。日蓮大聖人は十二歳の時この山に登り、道善房を師とし、天台、真言の学を修め、出家した。鎌倉時代は天台宗であったが、その後、真言宗に変わり、さらに、昭和二十四年、日蓮宗に移って大本山となった。

訖利多王　北インド迦湿弥羅国の王。僧侶・信徒を追い、仏法を破ったが、雪山下王に滅ぼされた。

熙連恒沙　①熙連と恒（恒河）は、共にインド拘尸那城のそばを流れる川の名。沙は砂である。全体としてこれらの河の砂の数のように多いという譬えに用いる。②釈迦仏法における仏法修行の段階の名。涅槃経および疏によれば、これを四依に配当して次のように示している。

- 初依
  - 熙連河沙―聞法不謗
  - 一恒河沙―信楽受持
  - 二恒河沙―読誦
  - 三恒河沙―浅説
- 二依
  - 四恒河沙―一分広説
  - 五恒河沙―八分広説
- 三依
  - 六恒河沙―十二分広説
  - 七恒河沙―十四分広説
- 四依―八恒河沙―具足尽義

日蓮大聖人の仏法において一口に南無妙法蓮華経と唱える者は、名字即の凡夫であるから法を聞いて謗らず、信楽して受持するという位すなわち熙連河沙・一恒河沙の者といえる。（四信五品抄参照）

禽獣に同ず　父母を知らない者は、禽獣と同類であるところから、末法の主師親を知らぬ者を禽獣と断じた。

金星　太陽系に属する惑星の一つで、太陽側から数えて二番目に位置する。太白星、明星ともいい、この星に異変があるのは飢饉の前兆であるという。

緊那羅　八部衆の一。梵語で疑人、疑神、人非人等と訳す。

く

空　三諦の一つである。瞬間の生命活動をとらえ、如是性とみれば空諦である。各経にいろいろの空が説かれる。蔵教では但空の理、通教では不但空の理、円教では三諦円融のうえから空を論じている。

空観　総じて空観とは、一切の森羅万象をことごとく空と観ずることである。空とは、三観（空・仮・中）の一つで、万法の一切の性分のことである。すなわち、方便品に如是性と説き、一切の法を空なり、如なりと観ずるのである。また、生命観の一つ。ドイツ哲学は「有る」ということと「無い」ということと、この二つを根源にしている。仏法には「有る」と「無い」とのほか「空観」という、一つの生命問題を考える根幹がある。たとえば、眠っている間は心はどこにもない。しかし目をさますやいなや心は活動する。眠っている時は心が無くて、起きている時には心が有る。起きている時には「有る」けれども、夜床につくと無くなるのである。夜眠っている時には心は「無い」が、起きればまた活動して「有る」ことになる。いったい有るのが本当なのか、無いのが本当か、有るといえば無くなるし、無いといえば現われてくる。このように有無で論ずることができないとする考え方を「空観」とも「妙」ともいうのである。一生成仏抄（三八四ページ）に「抑妙とは何と云う心ぞや只我が一念の心・不思議なる処を妙とは云うなり不思議とは心も及ばず語も及ばずと云う事なり、然れば・すなはち起るところの一念の心を尋ね見れば有りと云はんとすれば色も質もなし又無しと云はんとすれば様様に心起る有と思ふべきに非ず無と思ふべきにも非ず、有無の二の語も及ばず有無の二の心も及ばず有無に非ずして而も有無に偏して中道一実の妙体にして不思議なるを妙とは名くるなり、此の妙なる心を名けて法とも云うなり」とある。

空仮中の三諦　諦とは「つまびらか」「あきらか」という意。空仮中とはあらゆる法の本来的にそなわっている性徳。仮諦とは現実にいまあるものは仮の姿とする見方を仮諦とい

う。空諦とは、一切のものが仮和合の存在であるゆえに空といい、中諦とはこの空であり仮でありながら本質的には一貫している、これを中諦という。（要語解説二〇ページ参照）

空閑　人里離れた静かなところ。

九横の大難　釈尊が受けた九つの大難をいう。すなわち孫陀梨の謗、金鏘またはパラモン城の糠、阿耆多王の馬麦、瑠璃の殺釈すなわち無量の釈子が波瑠璃王に殺されたこと、乞食空鉢、旃遮女の謗または旃遮婆羅門女が鉢を腹にふせたこと、調達が山を推す、または提婆が大石をとばしたこと、寒風に衣を索む、阿闍世王の酔象を放ったこと。（要語解説五二ページ参照）

久遠　一般に久しく遠い昔という意であるが、釈迦仏法では五百塵点劫をさし、大聖人の仏法では久遠元初をさす。なお御義口伝下（七五九ページ）には「久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘と云う義なり」とある。

久遠元初　一般には久遠とは久しく遠い昔、元初とはもともとの始まり。文底仏法では大聖人の明かされた無作・本有常住の生命、無始無終の生命をいう。久遠元初いらい宇宙と共に実在する本有常住の仏を久遠元初の自受用身という。

久遠下種　衆生が初めて仏の説法を聞くのを下種という。釈迦仏法においては五百塵点劫に下種をうけ、大通仏、爾前、法華迹門の長い調熟を経て寿量品で得脱したという。大聖人の仏法では久遠元初の下種を明かし直達正観を説く。

久遠下種の一類　釈迦仏法で久遠下種をうけ大通覆講のとき発心し退転せず成仏した者を第一類、発心したが退大取小の者が第二類、発心しなかった者を第三類という。

久遠実成　法華経寿量品にいたって五百塵点劫の成道を説き仏の本地を明かした。爾前経および法華経迹門では釈尊がインドに出世して、三十歳の時、菩提樹下で始めて成仏したことが説かれているが（これを始成正覚という）、本門寿量品では五百塵点劫という久遠の昔にすでに仏であったと説かれた。これを久遠実成という。すなわち、長遠の生命を説き明かしたのである。

久遠大通の者　久遠とは五百塵点劫において、久遠実成本果の釈尊に結縁して下種をうけた者。また、大通とは三千塵点劫の昔に出現した大通智勝仏の第十六の王子に結縁し下種をうけた者。

久遠名字即　ここで久遠とは久遠元初のことで、名字即とは天台の六即の一つで初めて仏法を信じた位をさし、大聖人の仏法では名字即の凡夫が即身成仏する。久遠名字即とは

大聖人のこと。（要語解説二五七ページ参照）

九界　生命活動の範疇を十種に分け十界と称するが、そのなかから仏界を除く他の各界の総称である。迷悟からみれば迷は衆生即九界であるが、大聖人の仏法では即身成仏を説くゆえに九界即仏界である。

苦岸等の四人　過去の大荘厳仏の末法に出家した弟子は、分かれて普事・苦岸・薩和多・将去・跋難陀の五部となる。普事のみ真法を知ったが、その他いっさいの人は苦岸等の四比丘の邪説を信じ、師弟ともに阿鼻地獄に落ち、八大地獄を巡って極苦を一大劫の間うけたという。

苦岸比丘　大荘厳仏の末法における謗法の悪僧で、他の三比丘六百四万億の弟子と共に大苦をうけ、後に一切明王仏にあって修行し、さらに九十九億の仏にあって修行するも、前々の悪因によってなお仏果をうることができなかった。日蓮大聖人に敵対する者は苦岸比丘と同じである。

瞿伽利　悪時者、守牛と訳す。釈迦族の出で、浄飯王の命により出家して仏弟子となるが、後に提婆達多を師匠として舎利弗、目連を誹謗して、生きながら地獄に落ちた。

究竟即　天台が法華経の円意で立てた修行の位である六即位（理即、名字即、観行即、相似即、分真即、究竟即）の最高の位。無作三身の仏であることを悟る状態。

究竟等　法華経方便品の十如実相の一つが本末究竟等であり、究竟して等しいの意。如是相を初め如是報を終わりとして本末の体が究まって中道一実の実相であるのを本末究竟して等しいという。また三如是と七如是も同じ三諦ゆえに究竟等といい、九界即仏界の義も本末究竟等である。

苦・空・無常・無我　小乗経の四念処の法門をいう。大乗仏教の「常・楽・我・浄」に対比される。

弘決　妙楽が天台の摩訶止観を註釈した書。「摩訶止観輔行伝弘決」のこと。

口決相承　師資あいついで法を伝承するのを相承といい、師資親しく面授して相承するのを口決相承という。仏法の奥義は口決相承によらなければならない。ゆえに神力品の付嘱も、大聖人いらい日蓮正宗の相承も、口決相承である。

駈遣　追い出すこと。

口業読誦　身口意の三業のなかで口で読むことをいう。読は経文を見て読み、誦は見ないで誦する。大事な仏法の実践は身業読誦である。

求財不利　般泥洹経にあり「財を求むるに利あらず」と読む。過去の悪業の結果として、いろいろの罪報をうけるが、そ

のなかの一つで財宝をいくら求めても利益がなく幸福になれないこと。（佐渡御書九五九ページ参照）

苦治　厳しく対治する。

九思一言　一言でもおろそかにしないこと。論語に「孔子曰く、君子に九思あり、視は明を思い、聴は聰を思い、色は温を思い、貌は恭を思い、言は忠を思い、事は敬を思い、疑は問を思い、忿は難を思い、得を見ては、義を思う」と考察の方法のあることを示している。この考察を加えての言でなければ出してはいけないことを、九思一言という。

九識　心識を分別するに、小乗では六識を立て、法相宗では八識を、天台では九識または十識を立てる。真言宗では、その上にさらに十、十一識、無量識を立てる。これは唯識論で、九識が妙法の境涯をいうのである。

九識心王真如の都　天台宗、華厳宗等では識を九つ立て、第九識をもって如来蔵識・清浄識といい、これを心王という。今これを説明すると、眼、耳、鼻、舌、身、意の六におのおの識ありと立てる。識とは心が内外の対境に対して、あれは何、これは何と、その異同を知る作用をいう。すなわち、眼識とは色を縁として物の区別異同を知る識、いいかえれば眼で物を見て、これはコップだ、あれは茶わんだと区別することができるのは眼識によるのだと説く。以下同じ。倶舎宗等の小乗にはこの六識しか立てておらず、第六識をもって心王としている。第七識は未還識、思量識ともいわれる。すなわち、思量によって物事を判断していく識である。第八識を阿頼耶識という。執持負とも養識ともいう。この第八識は染浄の二法を含む。浄法は菩提染法は煩悩となる。ゆえに法相宗においては、これを含蔵識といい、この八識を色心縁起の根本として、心王といっている。天台・華厳宗ではさらに、染浄含蔵の第八識に対して、真浄識、根本浄識を立て、これを第九識として、染と浄を含蔵するという第八識と区別している。ゆえに天台・華厳においては、第九識をもって清浄無染の根本識、すなわち心王というのである。心王とは心の主作用をいい、心王に対する語は心数といって、心の伴作用をいう。真如とは真実にして虚妄をはなれ、不変不改であるのを真如という。すなわち、心王の住所なるゆえに都といい、九識は真如の本識なるがゆえに真如の都といわれる。日向記（八〇八ページ）にいわく「究竟即とは九識本覚の異名なり、九識本法の都とは法華の行者の住所なり」また同じく（八二六ページ）「此の九識法性とは、いかなる所の法界を指すや、法

界とは十界なり、十界即諸法なり、此の諸法の当体・本有の妙法蓮華経なり、此の重に迷う衆生の為に、一仏現じて分別説三するは、九識本法の都を立出ずるなり、さて終に本の九識に引入する、夫れを法華経とは云うなり」日女御前御返事（一二四四ページ）にいわく「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華経を持ちて南無妙法蓮華経と唱うる胸中の肉団におはしますなり、是を九識心王真如の都とは申すなり」九識とは識を分ければ六識は二乗、八識は菩薩、九識は仏である。また御本尊第一の純真な信心の姿、清らかな心で不幸な人を救おうというその心を九識という。

拘尸那城　中インド憍薩羅国にあり釈尊滅度の地である。

倶舎宗　天親菩薩の倶舎論を所依とする宗派。南都六宗の一つ。八宗の一つ。小乗の三宗の一つ。

倶舎論　阿毘達磨倶舎論といい、天親が著わし玄奘が訳したもので三十巻。わが国では一般に諸宗から仏教の入門書として兼学されていた。

九十五究竟道　仏道を一究竟道というのに対して、外道は九十五種の流派があり、おのおの究竟道であるという外道の言。究竟道とは、その道とするところの最極無上であることをいうのである。

倶生神　人が生まれたときから、常に人の両肩にあって、その善悪を記して天に報告するという同名、同生の二神。

九山八海　仏教における一世界、すなわち三千大千世界の単位たる世界が地輪の表面に現われたものを九山八海とする。その中心は須弥山として九山を数え、中央の須弥山から第八の持地山にいたる山と山との中間に各香水海があり、この七を内海といい、持地山と小鉄囲山との間に大鹹水海があり、これを外海といい、合して八海となる。この大鹹水海中に人の住する四洲があると説く。

具足戒　具足とは満足の意、戒とは防非止悪である。小乗の比丘は二百五十戒をもって具足戒とし、比丘尼は五百戒をもって具足戒とする。

具足の道　すべてを満足している一念三千の教え。完全円満なる教え、すなわち、妙法蓮華経のこと。

倶体倶用　体とは本体、用とは働きのこと。この体用を共にそなえていることを倶体倶用という。爾前迹門の場合は、法身を体として報身、応身を用としている。また色相荘厳の仏であるから無作三身ではない。本門では、三身倶体、三身倶用であるから倶体倶用である。そして名字凡身のもとのままであるから無作三身である。ゆえに倶体倶用の無

作三身とは、日蓮大聖人の御事である。われわれが妙法信受の力用によって即日蓮大聖人と顕われるのである。すなわち人法一箇の御本尊を信ずることによって、われわれもまた当体蓮華仏となる。また一応、倶体倶用の義は迹門に通ずる。法身に即するときは、報応二身は共に体となる。報応に即するときは、法身は用となる。

異騰本種　妙楽大師の文句記の「脱は現に在りと雖も具さに本種を騰ぐ」という文で、寿量品文上の儀式は、脱仏が脱益の法門を説き、衆生は皆得脱するというのであるが、その文底には、久遠元初の種が蔵されているということ。その本種を悟った者は等覚が一転して名字妙覚に入るのである。

功徳　梵語の求那の訳で功能福徳の意。利益と同意で、御本尊を信じてえられる。

苦得外道　釈迦在世の六師外道の一つで、釈尊の弟子であった善星比丘を退転せしめた悪知識、悪僧の名。

功徳聚　曼荼羅の訳。もろもろの功徳の本源をいう。輪円具足ともいう。すなわち、三大秘法の御本尊のこと。

功徳林菩薩　華厳会上の四菩薩の一人。

曇曼沙門　梵語。多くは外道等が釈尊を呼ぶのにいう。涅槃経に「諸の外道の輩、阿闍世王の所にいたり、釈尊をさして、一大悪人あり曇曼沙門という」とある。提婆が釈尊を怨んで用いた語。

拘那含仏　過去七仏の第五、現在賢劫千仏の第二。

国を知る　（要語解説一三八ページ参照）

九の意　摩訶止観第七に釈尊一代の聖教を正しく解釈し、行ずるための条件を、十意をもって釈してある。そのうち、第九は梵語より漢語への訳経、第十は観を成ずとなっている。今、第九とは初めての九意をさすとの説と第九意の訳経をさすとの両説がある。

鳩槃荼　梵語、人の精気をくらう鬼。

九部の法　仏経の内容を分類して九種とする。小乗の九部、大乗の九部がある。法華経方便品に「われこの九部の法は衆生に随順して説く」とあるのは小乗の九部をさし、涅槃経の「かくのごとき等の九部の経典をもって他のために広説す」とあるのは大乗の九部である。

九品往生　念仏宗、浄土宗における教義で、観無量寿経に説かれた方便の説。九品の人がおのおのその行を修行して、それぞれの九品の弥陀の浄土に往生すると称している。

鳩摩羅炎　妙法蓮華経の訳者として有名な鳩摩羅什の父。

鳩摩羅什　梵語、童寿と訳す。父は鳩摩羅炎といってインド

の国相、出家し亀玆国に行って国師となった。国王の妹の耆婆をめとって、羅什を生んだので父母の名をとって鳩摩羅耆婆ともいう。容姿端麗、聡明英俊であった。多くの大乗経を翻訳し、その数は三百八十四巻におよぶということである。そのなかでも法華経の訳出について最も心血を注いだ。自分が死んで、舌が焼けたら、わが訳経を捨てよといったが、その予言どおりに、舌のみ焼けなかったという。

鳩摩羅駄　仏滅後付法蔵の第十八。功徳深淵にして菩薩道を行じ、知弁海のごとくであった。美名童子の称がある。

求名　弥勒菩薩の過去世の名で、求名菩薩のこと。法華経序品第一に求名菩薩について「利養に貪著し衆経を忘失する者だが、善根をうえた因縁で諸仏にあい供養恭敬、尊重讃歎した」とある。

旧訳・新訳　漢訳された経典のうち、唐の玄奘三蔵以前に訳されたものを旧訳といい、玄奘が訳したものより以後を新訳という。鳩摩羅什三蔵や真諦三蔵の訳が旧訳にはいり、主として玄奘の訳が新訳である。

供養　仏法僧の三宝や、または死者などに諸物をそなえ、回向すること。法華経における十種供養や、死者に対する塔婆供養、追善供養等がある。仏法だけにかぎらず、一切の社会に供養はある。税金は国への供養であり、食物はわれわれを供養していることになり、勤労は会社に対する供養である。折伏は法の供養であるともいわれ、御本尊に対する第一の供養になる。（要語解説三二九ページ参照）

求羅　虫の名、迦羅求羅虫といい、その身は微細であるが、風を得れば大となり、繁殖するという伝説がある。

拘留外道　インドの勝論学派の祖。報恩抄（三一一ページ）に「拘留外道は石となって八百年・陳那菩薩にせめられて水となりぬ」とある。

拘留孫　小乗経に説かれている過去七仏の第四の仏である。過去七仏とは過去荘厳劫の三仏と現在賢劫の四仏とをいう。すなわち拘留孫は現在賢劫千仏の第一仏である。

紅蓮・大紅蓮　紅蓮地獄と大紅蓮地獄のこと。共に八寒地獄の一つ。鉄囲山の外側の暗黒界にある地獄。この地獄に落ちた者は酷寒のため皮膚が裂け真っ赤になり、ちょうど紅色の紅蓮華の花に似ているところから名づけられた。大紅蓮地獄はさらに苦痛が激しく最も恐ろしい所である。

薫習　しみとおること、移り沁むこと。物に香りが移り沁みこむように善悪などの行為、思想がその余勢を心に残し留めること。染浄迷悟の諸法は薫習の力によって生起される

ものであるとする。

掬拾遺嘱　掬拾とは拾い取る意で、法華経で総別の付嘱が終わってなお漏れた衆生のために重ねて説いた付嘱をいう。

薫発　薫とは薫習の意。発とは縁にふれて起こること。あるいは、縁によって外面に現われること。

け

偈　頌と訳す。仏徳や教理を賛嘆する詩。一偈を一四句偈ともいう。①通偈は経の字数を八字で四句つづきの三十二字で一偈とする。②別偈は長行でない偈頌をいう。四言、五言、六言、七言等あって、いずれも四句を一偈とする。

慧果　中国唐代の僧。真言宗東寺派では大日如来から法を受け継いだ第七祖とする。不空に仕え、後に弘法にその教えを伝えた。

計我　十四誹謗の一つ。自分のひとりよがりな考えで仏法をおしはかり解釈することで、厳に戒めなければならない。松野殿御返事（一三八二ページ）に出ている。

契経調伏対法　契経は経蔵のこと。調伏は律蔵のこと。律は人々の煩悩を伏するを主とするところから調伏という。対法は論蔵。智慧をもって理境を対弁するということから対法という。三蔵のこと。

荊谿大師　唐の妙楽大師湛然のことである。天台宗第九祖で、天台宗中興祖といわれている。著書に、天台三大部の注釈書たる法華玄義釈籤二十巻、法華文句記十巻、止観輔行伝弘決十巻等がある。（要語解説三七二ページ参照）

髻中明珠の譬　法華経の七譬の一つ。頂珠の譬ともいう。安楽行品の第十四に転輪聖王が戦いにおいて最も勇健な者に無上の宝珠である髻の中にある明珠を与えた。この明珠は法華経であると説く。文底の意は御本尊こそすべての宝に超過した最高唯一の明珠である。

繋縛殺害瞋諍　繋縛とは身をしばる意味で、罪人を逮捕すること。殺害とは殺人。瞋諍はケンカ争い。

罽賓国　北インド地方の古い時代の国名。普通は迦湿弥羅国をさすが、中国の六朝までは健駄羅をさし、唐の中期以後は今のカブール地方をさすなど、一定していない。

啓蒙　書名。不受不施講門派の日講が著わした録内啓蒙三十六巻の略称。

華界　仏堂をいい、通じて仏菩薩の住所をいう。蓮宮と対称し、蓮華世界の略ではないかといわれている。立正安国論（二三ページ）にある。

化儀　化法に対する語。仏が衆生を化導する儀式をいい、その説教の形式、仕方をいう。釈迦仏法では頓・漸・秘密・不定を化儀の四教という。一般に化儀というと、勤行の仕方、御本尊の取り扱いに関すること、仏壇・仏具等に関することをいう。日蓮正宗の化儀は日有上人の「化儀抄」等に定められている。

化儀抄　大石寺第九世日有上人が、日蓮正宗における化儀上の種々の問題について指南されたものを、弟子の南条日住が書き留めておいたもの。

化儀の四教　化法の四教に対する語。頓・漸・秘密・不定の四教。化法の四教をもって衆生の機根を調熟してゆく教化の方法をいう。（要語解説九ジ参照）

華香　仏に供養する華と香のこと。日蓮正宗では香木の樒を御本尊に供養する。

華光如来　釈尊の十大弟子たる舎利弗尊者の未来成仏する時の名号である。舎利弗は、法華経譬喩品で、この記別を受けた。

下剋上　「下、上を剋す」と読む。臣下でありながら、君主を軽んじ、実権をにぎって主君を倒し、自分もまた臣下から機をうかがわれるというような風潮で、鎌倉時代から室町時代にかけて盛んであった。自界叛逆の姿をもたらすものである。

下根　上根、中根に対する語。仏道を実践していく力がとぼしく、機根の劣っていること。低級な能力者等の意味。しかし文底仏法では、下根の者でも御本尊を信じ折伏に励むなら一生成仏は疑いない。

華厳経　大方広仏雑華厳飾経または大方広仏華厳経という。釈尊が寂滅道場菩提樹下で正覚を成じた時、三七日の間、大菩薩のために説いた教え。旧訳は六十巻で七処八会三十四品。新訳は八十巻で七処九会三十九品。教主盧遮那仏の化身たる釈尊が利根の菩薩のために説いて事事無碍円融の妙理。唯心法界の法門を説く。

華厳宗　華厳経を依経とする宗派。杜順・智儼が開き、澄観の時、天台の一念三千を盗んだ。（要語解説一六ページ参照）

華厳宗の五教　華厳宗で立てる教判（一代仏教批判の基準）で一小乗教、二大乗始教、三大乗終教、四頓教、五円教の五教を立てる。

華厳心造　華厳経の「心が一切法を造る」という偈文を指す。華厳の唯心法界ともいう。心をたくみな画師にたとえて説くため「心如工画師」の呼び名で広く依用される。

華厳の唯心法界　新華厳経の覚林菩薩の偈に「心はたくみなる画師のごとし、よく諸の世間を画く、五蘊ことごとくよりて生じ、法として、造らざるはなし、心のごとく仏もまた爾なり、仏のごとく衆生も然なり、まさに知るべし仏と心と体性皆無尽、若し人心行、普く諸の世間を造ると知らば、是の人は即ち仏を見、仏の真実性を悟るなり、心は身に住せず、身も亦た心に住せず、而も能く仏事に作すこと、自在にして未曾有なり、若し人三世一切の仏を了知せんと欲せば応に法界の性を観ずべし、一切唯心の造なり」とある。華厳宗の澄観は、この結末の三句によって、まさしく唯心法界観を立てて成仏の真道としている。

袈裟　梵語、迦羅沙曳、袈裟野ともいう。僧の身に着する法衣。インドでは袈裟を身にまとうので袈裟を法衣法服ともいう。また中国、日本等においては、袈裟の下にさらにいわゆる衣なるものを着して区別している。日蓮正宗の法衣は薄墨の素絹を五条用いる。

華色比丘尼　蓮華色比丘尼ともいう。阿羅漢を得た仏在世の比丘尼。初め婬女であったが、目連の化導を受けて仏の所にきて、摩訶波闍波提（釈尊の養母）について出家し、ついに阿羅漢果を得た。

下種　仏の種を衆生の心田におろすことをいう。下種益、熟益、脱益を三益といい、この三益のなかでは、下種益が最も大事なものである。日蓮大聖人の仏法を下種仏法、釈迦仏法を脱益仏法というのは、日蓮大聖人の時代の衆生は本未有善であり、釈尊の時代は本已有善の衆生だからである。すでに善根を積んだ者には熟脱仏法でよいが、末法のわれわれのように善根のない者には、日蓮大聖人の下種の南無妙法蓮華経でなければならないのである。

下種の教主　下種益の仏法の教主。末法の御本仏たる日蓮大聖人をさす。（百六箇抄八六三㌻参照）

下種本因妙の教主　下種益の仏法すなわち本因妙の南無妙法蓮華経を説く教主。末法の御本仏たる日蓮大聖人をさす。釈迦は脱益本果妙の教主である。（要語解説二五一㌻参照）

化城即宝処　かりのものである化城が、実は、そのまま宝処であるということ。法華経化城喩品にあり、生命は永遠であり常住不滅であり、無常を即常住と開いていくこと。御義口伝上（七三二㌻）に「化城即宝処とは即の一字は南無妙法蓮華経なり」とある。

化城喩品　法華経の第三巻化城喩品第七がこれである。三周の声聞のなかの第三因縁周の正説を説いたものである。法

説・譬説の二周では、まだ領解しない下根の声聞のために、久遠以来の師弟の宿世の因縁を説いて、ついに得道させるのである。宝処にいたるための化城の譬喩が説かれているが、日蓮大聖人は、御義口伝に法華経の意は化城即宝処であるとされ、「南無妙法蓮華経と唱え奉る者は色心妙法と開くを化城即宝処と云うなり」（七三二ページ）と仰せである。（要語解説六三ページ参照）

灰身滅智　灰断ともいう。色身を灰焚し心智を滅失するという小乗教の二乗の理想とする義。

華蔵世界　蓮華蔵世界とも華王界ともいう。華厳の教主毘盧遮那如来がその昔荘厳した世界であると説く。天台はこれを実報土の姿であると判じた。

解脱　戒めをとき、障りを脱するの意。三徳の一つ。この世の中を楽しんでいける境地。

解脱堅固　大集経に説かれている五箇五百歳の最初の五百歳をいう。仏道修行する者が盛んに解脱し悟りを開くことができる時代。

灰断　身を灰にして、なにものもなくすという二乗の修行法。灰身滅智のこと。

結縁　①法に縁をむすぶこと。未来に得道の縁をつくること。②南無妙法蓮華経の仏種を心田に植えること。③四衆の一つ。結縁衆のこと。

血脈抄　日蓮正宗に伝わる相伝書のことで①百六箇抄②本因妙抄のこと。

血脈相承　師資相承ともいう。一人の大導師から唯一人の弟子に秘伝されるのが血脈相承である。仏法はすべて唯授一人の血脈相承である。

血脈相承書　血脈相承の次第を示す書。日蓮大聖人から日興上人に対する血脈相承書は、身延相承書（一六〇〇ページ）と池上相承書（一六〇〇ページ）のいわゆる二箇相承である。

結跏趺座　仏法の座法の一つに左足を曲げて右ももの上にのせ、右足をその下側より曲げて左ももの上にのせる座法で正座のうち最も安定したものである。項脊端直、不動、不揺、不萎（こごまぬこと）、不倚（よりかからぬこと）を満足する姿勢が得られる。

結経　本経を説いたあとで、さらにその流通を結する経をいう。開経に対する語。法華経の結経は観普賢菩薩行法経。

決権実論　伝教大師の著述で一巻、法相宗の一乗方便三乗真実五性各別の迷いを破るために著わした書。

結集　仏の死後、諸の弟子が集まって仏の遺教を収集する

ことをいう。釈迦仏法の結集は三回もしくは四回行なわれたという。釈尊入滅の直後は迦葉等が阿闍世王の外護により、滅後百年ごろには第二回、滅後二百年、五百年にも、それぞれ結集があった。

決定作仏　決定成仏と同じ意。成仏することが少しも疑いない、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華経によって必ず成仏することをいう。

決定性　法相宗で人間の性質は本来五種の決定的差別があるとして五性をたて、その中で声聞、縁覚等になることが決定していて仏になれない種性を決定性としている。

決定性の二乗　法相宗で説く、五種の種性のうち声聞定性、縁覚定性のこと。法相宗では声聞と縁覚を二乗に決定して永久に成仏できない決定性の者であると説く。

結要　要を結ぶと読む。法の主要点をくくって肝要を選ぶこと。法華経神力品第二十一で釈尊が法華経一部をくくって上行菩薩に付嘱した。これを結要付嘱という。

結要付嘱　法華経神力品第二十一において、釈尊が本化の上首たる上行菩薩に妙法蓮華経を付嘱したことをいう。その文は「要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の経に於いて宣示顕説す」というものである。天台は、これを五重玄の依文とし、日蓮大聖人は三大秘法の依文とされている。

外道　仏法以外の教えを外道という。それに対して仏教のことを内道という。仏教は、因果の道理をわきまえ、宇宙の根本を説き明かした科学的な教えであるのに反して、外道は因果の道理を無視した低級なものである。釈尊の時代には九十五派のバラモンがあり、中国にはいってからは、儒教・道教があり、現在では、キリスト教・回教等すべて含まれる。

化導の始終不始終の相　天台が爾前経と法華経を相対して玄義に説いた三種の教相すなわち第一根性の融不融（迹門方便品）―権迹相対、第二化導の始終不始終（迹門化城喩品）―権迹相対、第三師弟の遠近不遠近（本門寿量品）―本迹相対の第二。仏が衆生を教化示導して成仏の境涯を得させる段階には下種、成熟、得脱の三つがある。法華経にはこの種熟脱の過程が説かれているゆえに始終であり、爾前経には説かれていないゆえに不始終である。

介爾　ほんのわずかばかり。

化法　化儀に対する語。衆生を教化するために用いる種々の

教法をいう。天台は釈尊一代の説法を蔵通別円の四に分けた。これを化法の四教という。日蓮大聖人の仏法では、三大秘法の大御本尊ならびに御書に説かれた法門が化法にあたる。

化法の広宣流布　法体の広布ともいう。日蓮大聖人の御在世における広布で、弘安二年十月十二日に本門戒壇の大御本尊を建立されたこと。この御本尊の流布が化儀の広布といわれる。

化法の四教　蔵・通・別・円の四教。蔵教とは三蔵教ともいい阿含経の意。通教とは大乗の初めの権大乗で、蔵教にも後の別教にも通ずる。別教とは五十二位の菩薩を説き蔵通二教とも後の円教とも別である。円教とは三諦、十界、十如、三千の諸法が円融円満なのでこのようにいい、爾前の円と法華の円がある。（要語解説五ページ参照）

下品　ものの等級を三種類に分けて、その最下級を下品という。上品、中品に対する語である。普通には衆生の機根の最低に用いる。

外凡・内凡　仏道修行の位であって、いまだ聖位にはいらない者を凡位、または賢という。凡位のなかである程度理のわかった者を内凡といい、いまだまったくわからない者を外凡という。化法の四教の別によってその次位を分けると、三蔵教の外凡は三賢・内凡は四善根、通教の外凡は乾慧地・内凡は性地、別教の外凡は十信・内凡は十住十行十回向、円教の外凡は五品弟子・内凡は十信となる。（要語解説八ページ参照）

外用　内証に対する語。①仏が衆生教化に出るを外用という。②一つの本体があって、それから外に現われる作用をいう。③内証をかくして外部にみせられた相貌をいう。すべてのものに内証と外用がある。日蓮大聖人は、外用の浅近にのぞめば上行の再誕日蓮であり、内証の深秘にのぞめば、久遠元初の自受用報身の再誕日蓮となるのである。（要語解説二〇八ページ参照）

外用浅近　内証深秘に対する語。外面の浅く近い面。大聖人は外用浅近は上行菩薩の再誕であるが、内証深秘は久遠元初の自受用身の再誕である。

外用内証　仏が衆生教化のため内証をかくして外部にみせた姿を外用という。内証とは内心の悟り、自己の心証によって仏法の哲理を体得すること。（要語解説二〇八ページ参照）

顕戒論　伝教大師の著書。弘仁十年、伝教大師が大乗戒壇を建立し、仏教の統一を請うたのに対し、南都六宗の激しい

反対にあったので、その迷妄を破折するために本論をつくり天奏したものである。

玄義　法華玄義十巻の略称。天台三大部の一つ。天台教学の中心書である。

顕教密教　真言宗で重視する教判。顕教とは仏の真意をあらわに説いた教え。密教とは秘密にして説いた教え。真言の邪義では、大日経は仏の真意を秘密にして説いた密教だから勝れ、法華経はあらわに説いた顕教だから劣ると説く。だが真実の密教は法華経である。

賢劫　三劫の一つで、現在の住劫をいう。これは釈迦仏出世の時代をさす。また、賢劫経の略。釈迦仏法の滅尽を予言した経典である。

減劫　増劫に対する語。百年ごとに人寿一歳を減じて人寿八万歳より人寿十歳にいたる時節をいう。

現在の四信　法華経分別功徳品第十七は流通分にはいって現在の四信、滅後の五品を説く。現在の四信とは一念信解、略解言趣、広為他説、深信観成。滅後の五品とは初随喜品、読誦品、説法品、兼行六度品、正行六度品である。

見思　三惑の一つ。三界六道の苦果を招く惑で見惑と思惑である。見惑とは無常・無我等の真諦の道理に迷って起こす常見・我見の邪想である。思惑とは欲界に貪瞋癡慢、色界に貪癡慢、無色界に貪癡慢とあて八十一品とする。思惑とは世間の諸事に迷うこと。（要語解説一九ページ参照）

玄旨　おくふかい趣旨のこと。

遣使還告　法華経寿量品第十六の良医の譬えに「使を遣わして還って告ぐ」というのをさす。文底から読むと、使をつかわされたということは、別しては、代々のお山の御法主上人である。また、総じては、日蓮大聖人のご精神を奉じて折伏を行ずるわれわれである。

見思の惑　三惑の一つ。三界六道の苦果を招く惑で見惑・思惑である。見惑にまた十使あり、五利使、五鈍使とし、さらに三界の四諦にあてて八十八使となる。思惑は欲界に貪瞋癡慢、色界に貪癡慢、無色界に貪癡慢とあてて八十一品とする。かんたんにいうと、見惑とは道理に迷うことであり、思惑とは物事に迷うことである。これは釈迦仏法においてであるが、末法においては根本の惑はただ一つ、三大秘法の御本尊を信じない者が元品の無明惑で、信じた時は煩悩即菩提、生死即涅槃と開覚するのである。（要語解説一九ページ参照）

見思未断　見思の惑を未だ断ぜずということ。

現証（要語解説一四九ページ参照）

玄奘三蔵　中国法相宗の開祖。十七年間インド各地を歴遊し唐の太宗の時、中国に法相宗を伝えた。多数の経論を翻訳した。

現世安穏後生善処　法華経薬草喩品第五の文。法華経を信ずる者の功徳を明かしている。すなわち、妙法を信ずる人は現世では安穏な生活をし、来世でも善処に生まれるという。

阮籍　竹林の七賢人の一人。道徳を無視して虚無の思想にふけっていた。

玄義　法華玄義釈籤の略称。全二十巻。唐の妙楽大師湛然の書。天台の法華玄義全十巻を解釈したもの。

眷属　したしく随従付属するもの。妻子、奴僕、または仏の脇士。また仏の説法を聞き、それを信じ行ずる者は、すべてその仏の眷属である。われわれは、日蓮大聖人の眷属である。眷属妙という場合には、迹門十妙の一つで仏の所に集まる諸大菩薩の不思議力あるのをいう。

眷属妙　天台の玄義、迹門十妙の一つ。天台は生命の不思議を妙と名づけ、実相の理を本門の十妙、迹門の十妙に分別している。第九眷属妙とは、仏が出世すれば十方の諸大菩薩が皆出生してきて仏の化導をたすけ信受する。ある者は神通力をもち、宿願をもち、また応現をもって生まれてくる。これらはみな眷属といい、共に妙不可思議であることをいう。

兼帯　円教を主として権教を兼ねおびているとの意。阿弥陀経も般若経も兼帯とは与えた判釈であって本来は爾前権教である。

乾闥婆　八部衆の一つ。食香、尋香等と訳す。天界の楽神であり、帝釈天の前で音楽を奏する。帝釈の后の祖父であるといわれている。

兼但対帯　仏の爾前経の化儀（教え方）をいう。仏の四時の化導を兼但対帯の四字をもってあらわし、華厳の化儀は円に別を兼ねるゆえ兼といい、阿含の化儀は但三蔵教のみなるゆえ但といい、方等の化儀は蔵・通・別・円の四教並対するゆえ対といい、般若の化儀は円に通別の二をおびるゆえ帯という。

還著於本人　法華経観世音菩薩普門品第二十五にある句「還って本人に著きなん」と読む。法華経の行者をそしり、害せんとする者は、かえって自らの身に、それをうけるようになるという意味。（要語解説三〇一ページ参照）

建長寺道隆　建長寺は鎌倉七大寺の一つであり、臨済宗建長

寺派の本山。道隆はそこの住職であり、日蓮大聖人ご在世当時、極楽寺良観とならび称せられた邪宗の元凶。鎌倉中の人をたぶらかしていた。「建長寺道隆への御状」（一七三ページ）がある。

現当二世　現在世と当来世、すなわち、現在と未来をいう。また過去世に対する言葉でもある。われわれの信心は、現当二世のためにするのである。

身毒国　インドのことで天竺ともいう。月氏と訳す。

慳貪　慳悋貪著のこと。人に与えることを惜しむ。餓鬼界の生因とする。末法今日では、化他行をしないことは、この罪にあたる。

建仁寺、寿福寺、建長寺　いずれも臨済宗（禅宗）の寺、建仁寺は京都五山の一つであり、寿福寺と建長寺は鎌倉五山の中に数えられる。

懸衣翁　奪衣婆と共に、三途の川の端にいて衣装をはぎとる鬼のこと。亡者の衣類をはぎとって衣領樹にかけるものとされるが、その高下によって罪を判ずるという。

堅慧菩薩の宝性論　西暦五世紀ごろの人といわれる。インド摩竭提国那爛陀寺の学者。いわゆる那爛陀の八大学者の一人。宝性論は大乗の義を説き小乗教徒を破した書。

賢王　愚王に対する語。政教に通じ賢良を任じ、善言を聞き、正法をもって国を治める王をいう。化儀の広布への道をまっしぐらに進む創価学会の姿は、日蓮大聖人が観心本尊抄（二五四ページ）に御予言なさっている仏法上の賢王の姿といえる。

見宝塔品　（要語解説六五ページ参照）

顕本遠寿　久遠の本地を開顕して、仏の寿命の長遠なることを示すをいう。発迹顕本、開近顕遠と同義。法華経寿量品第十六に説かれている。

還滅　流転に対する語であり、寂滅涅槃の本源にかえることをいう。煩悩を滅して生死の憂悲苦悩を脱し、生命の本源の実相である涅槃の境涯に還帰すること。

顕益・冥益　（要語解説三〇九ページ参照）

顕了の相　説法形式の一つ。はっきりと悟りのままに説き示す相。

見惑　三惑の見思惑の一つ。事物の道理に迷う惑。

こ

胡　中国から見て、インドを胡という。

五悪趣　五趣、五道ともいう。地獄・餓鬼・畜生・人・天の

五界のこと。

五緯　五行すなわち五大星をいう。木星、火星、土星、金星、水星である。

挙一例諸　一つの事実をあげて他の多くの例とする意味。

劫　きわめて長い時間の単位。（要語解説四九ページ参照）

業　①善悪を問わず、身口意の種々の所作のすべてをいう。善業と悪業がある。②寿命のことをいう。定業と不定業の二つがあり、定業とはあらかじめ定まっている寿命で不定業とは定まっていない寿命のこと。

公胤　中国春秋の世、衛の懿公の忠臣。他国に使いに行っている間に主人が敵に殺されて肝を捨てられた。それを知った公胤は、自分の腹をさいて主人の肝を入れて死んだという故事。日蓮大聖人は、主人に身を捨てた忠臣としてお引きになっている。弘演と同じ。（開目抄一八六ページ等参照）

業因感果　業因あれば必ず果を感ずるという生命の法則をいう。悪因あれば悪果を感じ、善因あれば善果を感ずる。

弘演　公胤の項参照。

広開近顕遠　（要語解説九六ページ参照）

広開三顕一　広く三乗を開いて一乗を顕わすことで、法華経以前に声聞・縁覚・菩薩の人を分けて説き、これを三乗の法といったが、法華経にいたり真実の仏の教えはただ一つであるとして一仏乗の法を説かれたのである。法華経方便品第二より人記品第九までの間に三乗の法を開会して一乗の法を説かれたものである。

亢旱　日照りでひからびること。干ばつのこと。

劫国名号　仏が記別を与える場合に、仏になる時と所と名前を授ける。これを劫国名号という。劫は仏の寿命を三十二小劫等というがごとく、国は「国を離垢と名づけん」等のごとく、名号は「当に作仏することを得べし号を華光如来等」というがごとく（以上いずれも舎利弗の例）皆このように劫国名号を賜わっている。

後昆　後世、子孫の意。

後災　未来に来たるべき災い。諸経に説かれる難のなかで未だ起こっていない難。すなわち薬師経の七難のうち他国侵逼、自界叛逆の難、大集経中の兵革の災い、金光明経中の他方の怨賊国内を侵掠する難、仁王経の四方の賊来たって国を侵すの難をいう。

兢持　つつしみ深い態度をいう。

公処　公の場所。

劫焼　大の三災の一つたる火劫をいう。一大劫は成住壊空

の四中劫よりなるが、この壊劫の時は火風水の三災が起こって一切を破壊し尽くす。これが大の三災である。この三災は大劫の順序により一災ずつ現われるので、火災のみ起こる大劫を火劫といい、その時の火災をさして劫焼という。

業障　三障の一つ。悪業のために正道を障礙されるのをいう。兄弟抄（一〇八八ページ）に「妻子等によりて」とある。

広宣流布　仏法を広く宣べ流布すること。法華経薬王菩薩本事品第二十三に「我滅度の後、後の五百歳の中に広宣流布し閻浮提に於て断絶せしむること無けん」とある。大聖人は三大秘法が必ず広宣流布することを予言されている。

高祖　高祖には、前漢の劉邦、唐の李淵、北斉の高歓、後秦の姚興、五代後漢の劉知遠の五人いるが、一体に漢・唐の二代の創業の帝をさしていう。御書に引用されるのは前漢の劉邦のこと。

皐諦女　十羅刹女の一人。本地は文殊菩薩である。山海いかなる所にいても法華経の行者を守護するといわれ、九悪一善として皐諦女を一善と定められ、十悪の煩悩の時は偸盗にあたる。

光宅の法雲　中国南北朝時代における高僧。南三北七の十流の邪義のうち最強のもの。一代仏教を五時に分け華厳第一、涅槃第二、法華第三との邪義を立てた。光宅寺に勅住するので光宅という。俗姓は周氏、義興陽羨の人、晋の平西将軍周処の七世の裔であり、母は呉氏である。

広長舌　仏の三十二相の一つ。すなわち、仏の舌は軟かで薄く、広く長いことをさす。舌を出すのは、いうことが真実であるとの証明であるというのがインドの習慣であり、神力品では十神力の第一に天界までとどく長い舌を出して真実なりと証明している。

興福寺　奈良にある法相宗の本山。和銅三年、藤原不比等の建てた寺で南都四大寺、七大寺、十大寺の一つに数えられる。

弘法　日本真言宗の開祖で空海という。

広目天　四天王の一つ。帝釈の外将である。須弥山の中腹の由犍陀羅山の四峰におのおの居し、広目天は西の一天下を守っている。

高野山　真言宗の開祖・空海の創建した金剛峰寺の山号で地名によって名づく。紀伊国伊都郡の山中高野地にある。

亢陽　大気や土地が熱しきるありさま。

広略要　たとえば、法華経一部八巻二十八品を受持読誦するのを広といい、方便品・寿量品等を受持し、乃至護持するのを略といい、題目ばかりを唱え護持するのを要という。

日蓮大聖人は広略を捨てて要をとられた。

呉王夫差　中国の周の世の呉国の王をいう。夫差はその子供である。呉王は伍子胥を用いて国勢大いにふるったが、越王に破られた。子の夫差は越王を破って父の仇を報いたが、伍子胥の諫めを用いなかったので、越王の子の勾践に殺された。日蓮大聖人は、忠臣の諫めを用いない国王の滅びる例として用いられている。種種御振舞御書（九〇九ページ）にある。

五陰　新訳には五蘊といい旧訳には五陰という。三世間の一つで色・受・想・行・識、すなわち人間の五体をいう。色は色形で衆生の肉体および草木・国土等である。受は衆生が外界にあるものをわが身に受け入れること。想はひとたび受け入れたものを常に想って忘れないこと。行はこの想いによって起こすところの行。識は以上のことを内より起こさせる意識・心である。（要語解説・一一〇ページ参照）

五陰三毒　五陰は色受想行識をいい、三毒は貪瞋癡である。

五戒　在家男女のたもつべき戒で不殺生戒・不妄語戒・不飲酒戒・不偸盗戒・不邪淫戒の五つ。

五官　①筆五官の時は五本の意。②五佐ともいう。陰陽五行家の説で、五帝をもって木・火・土・金・水の五行の神とし、これを東・南・中・西・北の五方に配し、五官をもって司る官とする。

後漢の光武帝　前漢の景帝の子・長沙王のことで新に滅ぼされた漢を再興し、後漢と称した。

後漢の明帝　後漢第二代の皇帝、第一代光武帝の第四子で顕宗孝明皇帝という。

孤疑　疑いためらうこと。

五義　宗教批判の原理の一つ。宗教の五綱ともいう。仏法を弘めるにあたっての必要義で、教・機・時・国・教法流布の先後のことをいう。

五畿七道　古代における日本の地方区分。山城・大和・河内・和泉・摂津の五か国と、東海・東山・北陸・山陽・山陰・南海・西海の七道。

五逆罪　（要語解説四三ページ参照）

五経　詩経・書経・春秋・易経・礼記の五部の経書をいう。四書と共に儒学の宗典である。

五行　中国五行家の説。水・火・木・金・土をいう。天地の間を運行してやまぬ元素であって、万物はこれによって組成されているという。

虚空会　二処三会といって、法華経説法の儀式は、初めに霊

鷲山、それから虚空会、最後にまた霊鷲山というように霊山と虚空の二所で三回の説法の儀式が行なわれた。その一つが虚空会である。法華経の見宝塔品第十一の終わりから嘱累品第二十二の半までは、仏も大衆もすべて虚空の中に在住する、これを虚空会と名づける。

虚空蔵菩薩　智慧、功徳が虚空のごとく、あたえることも虚空のごときゆえの名である。大集経によれば、一宝荘厳如来の弟子という。日蓮大聖人は修行中、清澄山でこの菩薩に「日本一の智者になさしめ給え」と祈願されたことが善無畏三蔵抄（八八八ページ）にある。

虚空不動慧　大聖人の三大秘法の仏法の一つ、本門の題目をさす。虚空のごとく無量無辺であり、永遠にして不滅、不動なる智慧の意。

曲会私情　自分の見解に執着して、仏意を曲げて経文を解釈すること。

極円明純浄の本識　天親菩薩の唯識論を玄奘が解釈した成唯識論の文。きわめて円満で欠けるところなく、明らかでまじりけなく、浄らかな本識。第八識の浄分は、第七識以下が染・缺・迷であるのに異なるの意で、この根本第八識を大円鏡智とも名づける。

黒縄地獄　八熱地獄の第二。熱鉄の黒なわですみうたれ、そのなわに随ってきり、さき、けずられる。その苦しみは等活地獄の苦の十倍、その寿命は忉利天の一千歳を一日一夜として一千歳である。

獄卒　五逆罪、誹謗正法などの罪により地獄に落ちた罪人を呵責する獄吏のこと。

国土世間　三世間の一つ。国土とは、十界の衆生が住する依報・非情の国土をいい、世間とは差別のことをいう。五陰世間と衆生世間は迹門までにおいても説いてきたが、法華経寿量品第十六にいたって正しくこの娑婆世界が本国土であると明かす。これは仏の行動、生活のうえから一念三千が説かれたのである。（要語解説一一〇ページ参照）

黒白二虹　金光明最勝王経第六巻四天王護国品に説かれている。不祥の相をあらわすといわれている。われわれの見る七色の虹ではなくて、急激な気候の異変によって生ずる悪気流のようなものであろう。楞厳経釈要には「虹蜺」として出ている。

斛飯王　釈尊の叔父。提婆達多および阿難尊者の父であり、浄飯王の弟にあたる。

極楽寺良観　真言律宗の忍性房良観をいう。良観房とは法

字で、諱は忍性。建保五年七月十六日、大和国磯城島に生まれた。十一歳で出家した。鎌倉時代の仏教界の重鎮であり、生き仏のようにあがめられていた。文永八年六月、幕府より命を受けて雨ごいをしたが、日蓮大聖人にその法力のないのを知らされ、徹底的に破折された。

五眼　肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼の総称。肉眼は普通の人間の目、天眼は天界所具の目で近くでも遠くでも昼でも夜でも物事を見ることができる。人間界にもときどきこれを有する者がある。慧眼は二乗の人空無相の理を遠見する智慧の目で、われわれ凡夫においては深い知識体験にもとづく物事の判断力。法眼は菩薩が諸の仮名の法に達して誤らず、一切衆生を度するために法門を照了する智慧の目で、われわれにすれば仏法の法則のうえから、一切の事物を判断する力。仏眼は三世十方にわたり、一切の事物を見通す仏の目。

五箇の鳳詔　鳳詔とは天子のみことのりをいう。仏法上では、仏の金言をいう。鳳は鳳凰のことで鳥のなかの王をいい、天子をあらわす言葉に用いられる。五箇とは法華経の宝塔品の「三箇の勅宣」と提婆品の「二箇の諫暁」とをいう。（要語解説一〇一ページ参照）

五五百歳　釈尊滅度の後第五番目の五百年、すなわち末法の初めのこと。釈尊は大集経に未来の時を予言して第一の五百年は解脱堅固、第二の五百年は禅定堅固、第三の五百年は読誦多聞堅固、第四の五百年は多造塔寺堅固、第五の五百年は闘諍言訟・白法隠没と定めている。（要語解説一七五ページ参照）

五根　六根のなかの意根を除く他の五根をさす。仏道修行について、功徳を成就すべき五種の根。一に信根不疑。二に進根不退。三に念根不忘。四に定根不動。五に慧根不昧。

其罪畢已　「その罪おえおわって」の意で、法華経不軽品第二十にある語。自分の過去世の罪障が消滅して、初めて大利益を得ること。

五時　（要語解説二ページ参照）

伍子胥　中国春秋戦国時代の人。呉王夫差に仕えた重臣であった。越王勾践は夫差に敗れて降伏し、夫差は、これを許さぬとしたのに対し、伍子胥は理を尽くして諫めたが聞き入れられず死刑にされた。彼は三年にして呉が滅亡せんと予言していたが、まさにその通りになった。日蓮大聖人が立正安国の大義をもって国家諫暁せられたため、幕府は刀杖、流罪、死罪をもってこれにむくいたのは、伍子胥に対

する夫差のごときものである。

五重玄　天台大師が法華経を解釈するにあたって説いた名・体・宗・用・教をいう。（要語解説一九九ページ参照）

五重三段　一切の教法を序分・正宗分・流通分の三段によって五重に立てて批判し、文底下種本門こそ仏の正意であると立てられた法門である。（要語解説一五一ページ参照）

五十展転　法華経随喜功徳品第十八に出ている。釈迦仏の滅後、法華経（御本尊）の功徳を随喜して他に伝え、伝えられた人が順次にこの功徳を伝え、かくして五十番目の人がその功徳をたたえる功徳は、絶大である。いわんや、最初に聞法して随喜した人の功徳は測り知れない。折伏の功徳を示す。（要語解説三〇七ページ参照）

五十二位　釈迦仏法の別教において立てる。菩薩の修行する位。（要語解説一一九ページ参照）

十信（信心・念心・精進心・慧心・定心・不退心・回向心・護法心・戒心・願心）

十住（発心住・治地住・修行住・生貴住・具足方便住・正心住・不退住・童真住・法王子住・灌頂住）

十行（歓喜行・饒益行・無違逆行・無屈撓行・無癡乱行・善現行・無著行・難得行・善法行・真実行）

十回向（救護衆生離衆生相回向・不壊一切回向・等一切諸仏回向・至一切処回向・無尽功徳蔵回向・入一切平等善根回向・等随順一切衆生回向・真如相回向・無縛無著解脱回向・入法界無量回向）

十地（歓喜地・離垢地・発光地・焔慧地・極難勝地・現前地・遠前地・不動地・善慧地・法雲地）

等覚

妙覚

五重の相対　内外相対、大小相対、権実相対、本迹相対、種脱相対をいう。宗教批判の原理の一つ。（要語解説一四〇ページ参照）

五住の煩悩　われわれの生命に本然にそなわっている煩悩。一に三界の見惑（一切処住地の煩悩）二に欲界の思惑（欲愛住地の煩悩）三に色界の思惑（色愛住地の煩悩）四に無色界の思惑（無色愛住地の煩悩）五に根本無明惑（根本無明住地の煩悩）である。

五種頓修の妙行　五種の妙行のこと。五種法師ともいう。五種とは受持・読・誦・解説・書写をいい、この五つを一時に修得するという意で、末法では南無妙法蓮華経と唱えること。（要語解説一二四ページ参照）

五種の蔵　六波羅蜜経といわれている仏典の五種の分類をい

う。一索咀纜…経蔵、仏の説をそのまま書きとどめたもの。二毘奈耶…律蔵、戒律を説かれたもの。三阿毘達磨…論蔵、経の意義を哲学的に解明したもの。四般若波羅蜜…慧蔵、諸法に通達し断惑証理する仏の智慧を説いたもの。五陀羅尼門…秘密蔵、総持とも名づけ禅定も修行せず戒律もたもたず煩悩におおわれた者を、そのままただちに解脱せしめ、涅槃の境界にいたらしめるために説かれた教え。

五種法師　天台宗で妙経を信行弘布する人を五種に分かち、受持法師、読経法師、誦経法師、解説法師、書写法師と五種妙行を修行する人をいう。

五種妙行　法華経法師品第十に、法華経を修行する五つの行が説かれている。五種の一般的仏法修行方法である。受持・読・誦・解説・書写をいう。読とは経文を見ながら読むことで、誦とは暗誦することである。現在の仏法では、日蓮大聖人の仰せのごとく受持をもって正行とし、他はそれに隷属せしめている。すなわち唱題・受持は正行であり、方便・寿量の二品読誦は助行となり、他は勤行に用いず、解説は化他だけに用いるものであり、書写は在家としてほとんど用いていない。（要語解説一二四ページ参照）

挙処　その罪を挙げて処断すること。

五処　五体と同じ。頭と手足の五か所。

五障　女人の五つのさわりをいう。法華経提婆品の竜女成仏の段に、舎利弗尊者が女人は法器に非ず等と難じ、さらに女人の五障を数えて成仏を難ずる文に「又女人の身には猶五つの障あり。一には梵天王となるを得ず、二は帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり、云何ぞ女身、速かに成仏するを得ん」というのがこれである。

五乗　人を乗せて、おのおのの果地にいたらしめる五つの教法。すなわち菩薩乗、二乗、人天乗をいう。

五常　儒教の道徳で、仁・義・礼・智・信の五つ。常とは永世に変わりないの意。

五性各別　法相宗の依経、深密経に出る。人の性質は本来五種の決定的差別があり、したがって仏法はただ一法でないという説である。五性とは一声聞種性、二独覚種性、三如来種性、四不定種性、五無有出世功徳性。

五乗の異執　妙楽の弟子・東春の智度法師が著わした天台法華疏義纘第五のなかの語。人・天・声聞・縁覚・菩薩の五乗に対する執着をいう。

五濁　五濁とは、劫濁・衆生濁・煩悩濁・見濁・命濁であって生命の濁りの姿を五つに分類したものである。劫濁とは

時代の濁り、衆生濁とは衆生社会の濁り、煩悩濁とは貪瞋癡慢等の煩悩からくる濁り、見濁とは思想からくる濁り、命濁とは生命自体の濁りである。（要語解説四六ページ参照）

五濁悪世　法華経方便品第二にあり、劫濁・衆生濁・煩悩濁・見濁・命濁の五つが特に盛んな悪い世の中のことで、末法の時代をさす。

五塵の境　五境ともいい、眼・耳・鼻・舌・身の五識の働きが対象とする五つのもの、すなわち色・声・香・味・触をいう。涅槃経には、一には衣裳垢つき汚れ、二には頭上の花萎（頭がだんだん衰えていくこと、またハゲてくるという意味もある）、三には身体臭く穢れ、四には腋下に汗出ず（心配したり、苦しんだり、恐しいことなどで、冷や汗をかく）、五には本座を楽しまず（自分のいる所に応じて天上界でなくなること、どこにいても安心立命の境涯でない。何かあるとすぐに崩れてしまう）とある。倶舎論には大小の五衰を説いており、大の五衰とは死にあたり、この五相が現ずると、必ず死ぬという。

五衰　天人の果報が衰えたときに現ずる五つの相をいう。

牛頭・馬頭　衆合地獄の獄卒をいう。身体は人間の形をしていながら頭は牛や馬の形をしている。

五節供　宇多天皇の時、初めて五つの賀節を定め、時の膳物を供して賀事を行なわした。年中の奇月五個について五つの節を立てる。すなわち元旦（または七日または十五日）、三月三日（上巳）、五月五日（端午）、七月七日（七夕）、九月九日（重陽）。後世にいたって、一月七日を七草の節供、三月三日を桃の節供、五月五日を菖蒲の節供、七月七日を七夕の祭り、九月九日を菊の節供という。（秋元殿御返事一〇七〇ページ参照）

五千席を去り　法華経方便品第二の広開三顕一にはいるとき「此の語を説きたもう時、会中に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、五千人等有り。即ち座より起って仏を礼して退きぬ。所以は何ん。此の輩は罪根深重に、及び増上慢にして、未だ得ざるを得たりと謂い、未だ証せざるを証せりと謂えり。此の如き失あり。是を以って住せず。世尊黙然として制止したまわず」とあるのをいう。

五千の上慢　法華経方便品第二の説法のとき、五千人の増上慢の比丘がおり、釈尊の説法を聞くことができなくて席を立ったことをさす。

五蔵　仏典の五種の分類をいう。経蔵、律蔵、論蔵の三蔵に、菩薩の慧蔵と真言陀羅尼蔵を加える。弘法は真言陀羅

尼を密教とし、前の四つを顕教とする。

五大 地水火風空の五大をいう。宇宙のもとをあらわした言葉である。妙法蓮華経の異名でもある。われわれの体にたとえれば、地とは骨、水は血液、火とは熱、風は呼吸、空は生命全体である。宇宙も同じように、大地があり、水があり、火があり、空気があって、それ自体が全体といえる。

五台山 中国山西省の山で、一名清涼山という。華厳経に「東北に菩薩の住処あり、清涼山と名づく、現に菩薩あり、文殊師利と名づく」とあるゆえ、文殊の住処とされた。

五大部 日蓮大聖人の御書のなかで、最も重要な五編。①立正安国論②開目抄③観心本尊抄④報恩抄⑤撰時抄。

五大力 仁王経受持品にある。一金剛吼菩薩、二竜王吼菩薩、三無畏十力菩薩、四雷電吼菩薩、五無量力菩薩をいい、国王が真の仏法を信奉すれば、この五大力菩薩が、国王および国民を守護するという。

誇談 大言壮語すること。

五智 真言密教に説くもので、法界体性智（大日如来智）大円鏡智（阿閦仏智）平等性智（宝生仏智）妙観察智（無量寿仏智）成所作智（釈迦牟尼仏智）をいい、一切の仏はこの五智を具する。ゆえに開会すれば妙法蓮華経の五字となる。

五鎮の大星 五星のこと。鎮は土星を中心にして木火金水の四星がこれを助けているような配置をしているので、総称して五鎮という。

国家諫暁 （要語解説三五〇ページ参照）

穀貴 五穀の価が高いこと。すなわち物価の暴騰であって、インフレのごとき経済状態をいう。大集経に説かれている。三災の一つ。

乞眼の婆羅門 昔、舎利弗（身子）が、禅多羅仏の末法において菩薩の修行をしていた時、片眼の婆羅門に目をくれといわれ、与えたところ、地になげつけたのでうらめしくなって菩薩道を退転し、無量劫の間地獄に落ちた。日蓮大聖人は「南無妙法蓮華経の目をいただくわれらが、謗法の人に信心を妨げられるのが、目をとられるということである、妙法の信心を捨てるな」という意味のことを教えられている。乞眼の婆羅門とは謗法の人である。

乞食空鉢 釈尊の九横の大難の一つ。釈尊が阿難をつれ乞食のためバラモン城に入ろうとしたとき、王は民衆が釈尊に帰依するのを恐れ、布施させなかった。

劫初 住劫の初めをいう。

五帝 古来多くの説があるが、和漢王代記（六〇二ページ）では

少昊・顓頊・帝嚳・堯・舜をあげている。中国古代の伝説的帝王。

五天竺　インドの全体を称する語、東天竺・西天竺・南天竺・北天竺・中天竺をいう。

五天四州　五天は五天竺、東西南北中である。四州の対であり、ともに人界を示す。四州は四方にある四つの州をいう。すなわち東方の弗婆提、南方の閻浮提、西方の瞿耶尼、北方の鬱単越をいう。

御伝土代　三師御伝土代の略。三師とは日蓮大聖人、日興上人、日目上人で、その歴史を日道上人が記録されたもの。

五道　五趣ともいう。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人の五。

五鈍使　見惑に五鈍使と五利使の十使がある。五鈍使は、貪、瞋、癡、慢、疑をいう。

五乳　乳に五味あることをいう。第一は乳牛よりしぼったままの乳。第二は酪、乳を精製したもの。第三は生蘇、酪を精製したもの、第四は熟蘇、生蘇を精製したもの、第五は醍醐、熟蘇を精製したもの、これを乳の極味とする。涅槃経には、仏の五時の説法をこの五味に譬える。

五百七百等　法華経において法説・譬喩説の後、化城喩品第七、五百弟子受記品第八にいたって宿世の因縁を説かれて得道した千二百人の阿羅漢をいう。すなわち五百弟子受記品に「爾の時に、千二百の阿羅漢の心自在なる者、乃至、仏此等の心の所念を知しめして、摩訶迦葉に告げたまわく、是の千二百の阿羅漢に、我今当に、現前に次第に、阿耨多羅三藐三菩提の記を与え授くべし。乃至号を普明如来云云」とあるをいう。

五百塵点劫　法華経如来寿量品第十六に釈尊の成道久しきを明かした。五百千万億那由佗阿僧祇の三千大千世界を粉末としてことごとく微塵とし、その数だけ五百千万億那由佗阿僧祇の世界を集め、さらにこの無量の世界を再びことごとく粉末として微塵とし、その一微塵を一劫としたものにすぎること百千万億那由佗阿僧祇劫より成仏しているのだと説いた。釈尊はインドで仏になったのではなく、このような昔に仏になったのだと宣言したのである。この長い時間を五百塵点劫という。この時の仏を久遠実成の釈迦如来といい、文底の立ち場から、これを迹中化他の第一番成道といっている。日蓮大聖人の仏法では五百塵点劫の当初、すなわち久遠元初に出現した仏を南無妙法蓮華経という。

（要語解説九三ページ参照）

五百塵点劫の当初　久遠元初と同じ意。五百塵点を久遠とい

い、元初を当初ともいう。

五百弟子　法華経五百弟子受記品にいたり成仏の記を与えられた五百人の釈尊の弟子をいう。因縁説周である。文底の立ち場からみれば、十界三千の衆生ことごとく五百弟子であり、南無妙法蓮華経の弟子である。ゆえにみな成仏するのである。●

五百弟子受記品　（要語解説六三ページ参照）

五仏章　法華経方便品第二の広開三顕一の正説段の長行および偈の総称。「仏舎利弗に告ぐ、是くの如き妙法は、諸仏如来時に乃之を説きたもう、乃至余乗あることなく唯一仏乗のみなり」をさす。五仏とは総諸仏・過去仏・未来仏・現在仏・釈迦仏をいい、これら五仏は皆同じく分別して法を説き、教・行・人・理ともすべて同じであると説く。

五仏章の仏　「五仏章」とは法華経方便品第二の広開三顕一の正説段の長行および偈頌の称で、五仏とは、総諸仏・過去仏・未来仏・現在仏・釈迦仏をいう。この五仏の説法は必ず前権後実の儀式によって最後に法華経を説くことに一定する。これを五仏道同開権顕実という。

五仏道同　三世のあらゆる仏が同じく法華経を説くことを出世の本懐としていることを述べたもの。五仏とは総諸仏・過去仏・未来仏・現在仏・釈迦仏をさす。

五分法身　仏法によって浄化された生命のこと。凡夫の色受想行識が、戒・定・慧・解脱・解脱知見の五分法身を成ずると説く。

五瓶　真言の修法中の一種。五箇の瓶で修法壇上を荘厳し、灌頂の時はこの瓶水を受者の頂にそそぐ。

護法　中インド那爛陀寺の学匠。唯識十大論師の一人。世親の唯識論の解釈である「成唯識論」を著わした。

御宝蔵　①一般的に、宝を収めてある蔵の敬称。②日蓮正宗総本山大石寺にある。大客殿の裏、杉木立の中にある土蔵造りの建て物。本門戒壇の大御本尊も奉安殿の建立以前にはこの御宝蔵で内拝を許されていた。

五味　①飲食物の五つの味、甘・酸・苦・辛・鹹をいう②釈尊の華厳、阿含、方等、般若、法華涅槃の五時を、牛の乳・酪・生蘇・熟蘇・醍醐の五味に譬える。③六波羅蜜経には五蔵を五味という。

護命　法相宗の僧。天平勝宝二年、美濃に生まれ元興寺に学ぶ。南都六宗の第一といわれた。弘仁九年、伝教大師と祈雨の争いをして敗れたことがある。

五無間　無間地獄へ落つべき五種の罪業で、五逆罪のこと。

五欲　色欲・声欲・香欲・味欲・触欲の五つ。すなわち五根（眼・耳・鼻・舌・身）が五塵の境に対しておこす欲望。

五楽　六根のうち意根を除く五根をいう。仏道修行について、功徳を成就すべき五種の根、眼根は色境に対して眼識を生ずる、耳根は声境に対して耳識を生じ、鼻根は香境に対して鼻識を生じ、舌根は味境に対して舌識を生じ、身根は触境に対して身識を生ずる。凡夫は五根の対境である五塵（色・声・香・味・触）において楽欲執着するからこのようにいう。

五利使　五濁のなかの見濁をおこすところの、身見、辺見、見取見、戒取見、邪見の五煩悩、偏見をいう。

五輪観　真言宗では万物の構成要素を地・水・火・風・空の五大であるとなし、また五大を五輪と名づけ、阿・縛・羅・訶・佉の五をその種子とする。此の五大・五輪を五智（法界体性智・大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智）とも五仏（大日・阿閦・宝生・弥陀・釈迦）ともなす。

孤露　孤はみなし子、露は慈愛でおおわれていないもの、すなわち久遠の本仏を知らない者。

五老僧　大聖人の弟子の日昭、日朗、日向、日頂、日持の五人の高僧。六老僧のうち日興上人を除くこの五人は、大聖人の仏法および第二祖日興上人に背いた。

牛驢の二乳　大論および顕揚大戒論に出ず、牛乳と驢乳はその色は同じであるが、牛乳は精すれば生蘇となり醍醐味までなるが驢乳は精すればふんとなる。これを外道と内道に譬え、また小乗戒と大乗戒とに譬える。

勤加精進　勤勉に努力精進する等の意。文底の意は勤加精進とは南無妙法蓮華経を受持することである。

権教・実教　権は「かり」の意で方便である。すなわち、四十余年の経々はぜんぶ衆生の機根に応じて説かれた方便である。実とは真実、すなわち八年の説法、法華経をさしている。宇宙の根本哲理、生命の真実観を説いているのである。

金剛身　金剛石は堅くて壊れないところから、三十二相八十種好をそなえた仏身を金剛身という。

金剛智三蔵　中国真言宗三三蔵の一人。中インド刹利王伊舎那縛摩の第三子である。十歳の時、那爛陀寺に出家し、寂静智に師事した。三十一歳の時、竜智三蔵のもとにゆき七年間つかえて密教を学んだ。後、唐土に向かい開元七年、広州に達し、翌年、洛陽にはいった。弟子に不空がいる。

金剛頂経　真言三部秘経の一つ。金剛頂宗の法門を説く。胎蔵界の大日経と共に密教の根本聖典。

金剛不壊　金剛のように極めて堅固で、他の何ものによっても破壊されないこと。

金剛宝器戒　戒を金剛に譬えていった語で、梵網経に説く大乗戒をいう。われわれの立ち場からは御本尊を持つ者の戒で、何ものも破ることができない戒である。（教行証御書一二八二ページ参照）

金光明経　日蓮大聖人のご引用に二種類ある。一には金光明経四巻、北涼の曇無讖の訳。二には金光明最勝王経十巻、唐の義浄訳。

金色王　金色王経に出てくる過去世の王。飢饉のとき、蔵の五穀を人々に施し、さらに王自身に残された最後の一食分の飯を辟支仏に供養した。その功徳で、天からさまざまな品物が降り、人民は長い間貧窮からまぬかれた。この金色王は釈迦仏自身であるという。

今此三界　法華経譬喩品の文で釈尊がこの娑婆世界において主師親の三徳を兼ねそなえること、すなわち仏なることを明かしたもの。「今此の三界は、皆是れ我が有なり（主）、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり（親）、而も今此の処は、諸の患難多し、唯我れ一人のみ、能く救護を為す（師）」いまは、日蓮大聖人が今此三界の主師親である。（要語解説一一一ページ参照）

金翅鳥　八部の一つたる迦楼羅の訳名。インド古代の伝説上の鳥。鳥類の王であるという。その翅や頭が金色なのでこのように呼ばれる。両翅が三百三十六万里あり、常に竜を食うという。

権実相対　（要語解説一四二ページ参照）

権実の法　化他のために説く方便の教えが権であり、仏の智慧をそのまま説く教が実である。また九界を権となし仏界を実となす。このように権と実は相対されるが、権といえども必ず実があり、実といえども必ず権がある。九界即仏界仏界即九界のごとく権実の法は互いに欠けないのである。

金人　明帝が永平二年（あるいは三年、四年ともいう）ある夜、金色の身長一丈六尺の貴人を夢に見た。翌朝、太史傅毅が皇帝にいうには、西域（インド）に仏図という悟りを開いた者がある。陛下の夢に見たのはその人であろうと奏上したので、王遵等十八人が西域に使して同八年、インドの僧・摩騰迦、竺法蘭の二名と白馬に乗せた仏経と共に後漢の都・洛陽に帰った。

粥　米の汁、おもゆ、米を煮た汁。釈迦の九横の大難の一つにバラモン城の粥がある。

混同無二　般若経に説かれている法門で「一切諸法混同無二」の略。九法界の修する法と仏界の法とは、その性においては差別はなく、みな同一法性であると説かれている。

権の大夫義時　北条義時のこと。北条幕府第二代の執権。

根敗　根は五根の意、すなわち五官の作用を破壊したものが五欲の楽しみをうけることができないと同様に、二乗は煩悩を断尽して成仏を求めようとしないから成仏の功徳をうけることができないという意味。

金錍論　金剛錍論という妙楽の著。華厳の澄観が非情に仏性なしとする説を破折し仏性は情・非情にわたることを顕わした。

根本有漏定　有漏定とは煩悩を断尽することのできない禅定のことで、外道の修行は根本的にこの有漏定を出ない低い禅定であるから根本有漏定という。

根本大師　伝教大師のこと。天台宗の日本の開祖、比叡山を開いた根本の大師であるとの意。

昆明池の大魚　漢の武帝の故事を引いたもの。昆明池は武帝が水戦の演習のために造った池。ある夜武帝は釣針をのんで苦しんでいる魚が針をはずすように頼んでいる夢をみ、そのとおり魚がいたので針を除いて放してやった。帝は後に明珠を手に入れた。これは魚が帝の恩に報いたもの。

金竜陀仏　舎利弗の過去の名。法華文句に「若し身子の化を見るときは、則ち竜陀の本を見る」とある。

金輪聖王　四輪王の一人。転輪王のうち、金の輪宝を感得し、四天下を領する聖王をいう。

崑崙山　中国古代より神聖な山として伝説多し。中国西部、新疆の南、チベットの北に位置す。昔から名玉の産地。

さ

西域　中国の西方地域のこと。したがって中央アジア地方にあたる。仏法が弘まった地域でシルク・ロードの通商路にもあたった。

最為難信難解　法華経法師品第十の文。「最も為れ難信難解なり」と読む。法華経が一代諸経のなかで最も信じ難く解し難く、最も勝れているということ。

再往　一往に対する言葉で、一重立ち入ってみれば、一重立ち入った観察等の意。一たび往いて義を求めるのを一往といい、再び往いて義を求めるのを再往ということから転じたもの。一往・再往と当分・跨節とは同じ意である。

斎戒　心の不浄を清めることを斎、身のあやまちをいさめる

ことを戒という。

西海侵逼　文永十一年十月および弘安四年五月に西方の元がわが国に襲来したことをさす。

災怪首尾　災害凶事が絶え間なく続いて起こること。

在在諸仏土常与師俱生　法華経化城喩品第七に「大通智勝仏の時、第十六王子たる釈尊によって化度せられた人々は、智勝仏の滅後、ありとあらゆる十方の仏土に、常にその師と倶に生まれる」と説かれている。過去の大通智勝仏に十六王子があって、出家して沙弥となり、一々の沙弥が六百万億恒河沙等のもろもろの衆生を化導した。大通智勝仏の滅後、このもろもろの聞法者は、ありとあらゆる十方の仏土に、常にその師（十六王子の菩薩）と共に出生するとの因縁を明かされた。師弟不二の原理を示したものである。

細視徐行　猟師が獲物を細目ににらみながらしだいに近づいて行くありさまをいい、涅槃経の文にある。末法における邪宗の僧侶の姿を述べられたもの。

罪障　過去の罪業が現在の信心を妨げること。

再生敗種　再生ともいう。焦種に対する語。法華経に説く二乗作仏を譬える法門。敗種とは、仏種のなくなった二乗をいい、諸経ではいずれも再び生ぜぬものと棄てられているが、法華経で二乗さえも再生して成仏できたことをいう。

在世結縁　大通結縁の第三類は、大通智勝仏のときに法華経を聞いたのであるが信じなかったので聞かないのと同じであり、初めて三千年前に釈尊の法華経を聞いたとしている。これを釈尊の在世に結縁したという。そして釈尊の在世、正法時代、像法時代に成仏していく。

在世の本門　五重三段のうち第四の三段・文上脱益三段で論ぜられる法門で、釈尊の法華経本門十四品をさす。

摧尊入卑　「尊きを摧いて卑しきに入れる」と読む。尊い仏法を摧いて卑しい外道の教えに入れること。

再誕　ある前世があって再びこの世に生まれてくること。末法においては、大聖人は、外用は上行菩薩の再誕であるが、内証深秘の辺は久遠元初自受用身如来の再誕である。

（要語解説二八八ページ参照）

最澄　伝教大師をさす。

相模殿　北条時宗をさす。

坐禅入定　静かなところに端坐して、心が一所に定まって動じない境地に入るという禅宗の修行。

薩埵王子　釈迦仏が因位のとき、摩訶羅陀大王の第三王子として生まれ菩薩行を修したときの名。飢えのため子を養育

できないトラのためにその身をトラに与えた。金光明経、賢愚経に出ている。

左伝　「春秋左氏伝」で春秋は周代のこと。魯国の史記である。

佐渡公　大聖人の六老僧の第四、日向のこと。房総方面の出身で交名を佐渡公といい後に民部阿闍梨日向と称した。大聖人滅後、日興上人に身延で学頭に任ぜられたが、後に退転し地頭波木井日円を誘惑し身延汚濁の原因をつくった。

作礼而去　「礼を作して去りにき」と読む。法華経普賢菩薩勧発品第二十八にある文で、法華経の最後の文であるから序品第一の初めにある如是我聞に対する文である。

沙羅双樹　インドに咲く沙羅樹のことで、学をリュウナウカウカといい沙羅木科に属する。釈尊は拘尸那城外の沙羅双樹に四方を囲まれて入滅した。

三悪趣　三悪とも三悪道ともいう。他に三途、三趣ともいう。十界の中の最下である地獄、餓鬼、畜生の三悪道をいう。過去世および現世における正法誹謗、五逆罪等の報いとして衆生がうける苦悩の世界および状態をいう。

三悪道　前述の三悪趣のこと。

三因仏性　成仏する因となる三つの性分で、天台が立てた法門。あらゆる森羅万象にはことごとく仏性がある。その仏性を正・了・縁の三因仏性という。御本尊の功徳によって仏身を成ずるときには法・報・応の三身如来と現われるのである。（要語解説二〇〇ページ参照）

三衣　仏教の戒めによってきめられた袈裟のことで、僧の身につける法衣。三衣は僧服で僧伽梨、欝多羅僧、安陀会をいう。僧伽梨は重衣、大衣、雑砕衣、高勝衣、五条より二十五条にわたる。欝多羅僧は上衣、中価衣、入衆衣と釈し七条からなる。安陀会は内衣、中宿衣、雑作衣で五条である。この条とは、得る所の布帛を割裁して条とし、これをぬいつづって五、七、九等の数を得る、その数の最も少ないものを五条といい、最も多いのを二十五条という。

三界　仏教の世界観で、欲界（欲望の世界）色界（物質の世界）無色界（精神の世界）をいう。（要語解説三一ページ参照）

三階　中国隋朝の信行禅師が開宗した。全仏教を時と所と人について三階すなわち三段に分類し、末法思想にもとづいて普真普正の仏法を唱導した。

三誡四請　法華経寿量品第十六で、釈尊が五百塵点劫の顕本を説くときの儀式。すなわち釈尊が弥勒等に初めから「汝等当信解。如来誠諦之語」と誡め再び「復告大衆。……」と誡め、三度目に「又復告。……」と誡められる。そこで

弥勒等は「世尊。唯願説之。我等当信受仏語」と三度請じてさらに四度目に釈尊に説法を請うて初めて「汝等諦聴。如来秘密。神通之力」と説法が始まる。この汝等諦聴を四度目の誡めとすると四誡四請となる。普通の経でも大事を問うときには三誡三請の儀式をふむが三誡四請、四誡四請はそれ以上に重大な儀式というべきである。

三界の火宅　法華経譬喩品第三に説かれている譬え。三車火宅の譬ともいう。三界とは欲界、色界、無色界のことで、悪思想のため迷いの煩悩にわざわいされていつまでも六道輪廻を繰り返している悩みの娑婆世界である。この悩みの世界を猛火に焼ける宅に譬える。長者が火宅に遊ぶ諸子を救うため、大白牛車を与えようとしたが信じないため、羊の車（声聞）鹿の車（縁覚）牛の車（菩薩）の三乗を示して火宅の外に誘い出し、後に一仏乗の大白牛車を与える。方便と真実との関係を明かしたもの。文底の意は、人生の目的は一生成仏にあり、大白牛車とは三大秘法である。

三界六道　三界とは欲界、色界、無色界で、六道とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天である。どちらも悪思想や煩悩にわざわいされた、迷いと苦悩の世界である。

三学　戒定慧の三学。戒定慧は仏家の軌則であり、蔵教、通教、別教、円教ともに戒定慧の三学がある。すなわち仏教はいかなる経教でも必ず戒定慧を論ずるから仏家の軌則という。戒とは非を防ぎ悪を止めるの義で、仏道修行の過程でやってはならないこと。定とは静慮であって、心を散乱せしめずして悟りを開くこと。慧とは照明の義で、煩悩や惑障を断破して真理の本性を証得すること。

三観　空観、仮観、中観をいう。仏法における三種の観法。観心修行の法門で、三つの立ち場よりの物の見方、考え方を三観という。これに別教の次第三観と円教の円融三観とがある。

三観三諦　三観とは天台の一心三観で、三諦とは空仮中の三諦である。境智の二法をあらわす。三観は能観の智、三諦は所観の境である。当体義抄（五一二ページ）に「三観・三諦・即一心に顕われ」とあり、日寛上人は「三諦はこれ境、三観はこれ智、すなわち境智の二法をわれらが一心に悟り顕わし、本門寿量の当体蓮華仏と顕わるるなり」といわれている。すなわち三観三諦とは南無妙法蓮華経である。

三軌　天台の法華玄義にあり、真性軌・観照軌・資成軌の三つをいう。また衣・座・室の三法を名づけて三軌ともいい、これは法華経法師品第十にあり、弘教の三軌と名づける。

滅後弘教の者は柔和忍辱をもって衣となし、一切法空をもって座となし、大慈悲心をもって室となすべきをいう。

三帰　三帰は仏・法・僧の三宝に帰依すること。

山規　一山を統制するための法規。日蓮正宗では、日興遺誡置文、有師化儀抄など、これにあたる。しかし、これらは法規としてより信条としての意味が強い。

三祇・百劫　三大阿僧祇・百大劫のこと。三蔵経の菩薩は初阿僧祇に七万五千の仏を供養し、二阿僧祇に七万六千の仏を供養し、三阿僧祇に七万七千の仏を供養し、この間は六度を行じて化他を専らにする。次に百大劫の間に百福を修して、自行を専らに修するをいう。

三教　三教にもいろいろな種類のものがあるが、通常、天台所立の五時八教の教判における三教のことである。すなわち、蔵・通・別の三教で、爾前教のこと。

懺悔　一般には、過去の罪悪を悔いて謝るということ。仏教では五悔の一つ、二十五法の一つで、懺は梵語、詳しくは懺摩といい、悔過と訳す。

三玄　有・無・亦有亦無等の玄をいう。有の玄は周公の立てたもので、天地陰陽等を有に約して立てた教えである。無の玄は老子によって説かれ、虚無を本として教えを立て、虚無の道は天地も分かたず万物も生じないところに立てた道理としている。亦有亦無の玄は荘子によるもので、自然を本となし、自然には有の辺もあり無の辺もあると立てた。

三鈷　三鈷杵のこと。真言密教の祈禱に用いる道具。インドの武器に由来している。日本の真言の開祖、弘法空海が中国からの帰途、海外で投げた三鈷が高野山から出たという珍説があるが、もちろん曲説であり、大聖人は報恩抄（三一八㌻）に徹底的に破折されている。

三業　身口意の三業をいう。身体と言語と心意においてなすところの業。

三皇五帝　中国の伝説の有徳帝王八人の総称。和漢王代記（六〇二㌻）では伏羲、神農、黄帝を三皇とし、少昊、顓頊、帝嚳、唐堯、虞舜を五帝としている。

三公星　周の三公にかたどって名づけられた東南に現われる三つの星。三公とは中国の場合、周の太師・太傅・太保。前漢の大司徒・大司馬・大司空。後漢の大尉・司徒・司空のこと。わが国では太政大臣と左右の大臣の官名をいう。

三国　インド・中国・日本。

三国四師　インドの釈尊、中国の天台大師、日本の伝教大師、日蓮大聖人をいう。（顕仏未来記五〇九㌻参照）

三五下種　三とは三千塵点劫、五とは五百塵点劫をいう。下種とは仏種を衆生の心田に植えることである。法華経迹門化城喩品第七には、仏の弟子に対する化導の始まりを三千塵点劫の昔であると説いている。また法華経本門寿量品第十六には、仏の久遠の本地を開顕し、釈尊は実は五百塵点劫の昔に成仏し、それ以来この娑婆世界に出現して衆生を教化してきたと説いている。

三五の遠化　迹門では化導の最初を三千塵点劫の昔とし、本門では五百塵点劫と説く。このように久遠の下種、久遠の本地は法華経にきて、はじめて説かれるのである。

三五の塵点　三千塵点劫と五百塵点劫のこと。

三箇の勅宣　法華経の説会の中、虚空会（宝塔品）において釈尊が遠化と他方来の菩薩とになした三つの教勅をいう。三箇の鳳詔とも諫勅ともいう。（要語解説一〇一ページ参照）

三災　劫末に起こる三種の災害をいう。これに大の三災と小の三災とがある。住劫の時の小の三災は穀貴、兵革、疫病。穀貴とは五穀の価が高いこと、すなわち物価の暴騰であって、インフレのごとき経済状態をいう。兵革とは兵は剣等の武器、革は甲冑の意であって、戦争のこと。疫病とは伝染病、流行病、また思想の混乱のこと。壊劫の時の三災は火災・風災・水災であり、これを大の三災という。

三災七難　（要語解説四四ページ参照）

三三蔵　真言宗の開祖である三人の三蔵をいう。すなわち善無畏三蔵、金剛智三蔵、不空三蔵のこと。

三史　「史記」司馬遷の作、「前漢書」班固の作、「後漢書」范曄の作を三史という。これに対し異説もある。

三師御伝土代　三師とは日蓮大聖人、日興上人、日目上人。この御三方の歴史を第四代日道上人が記録されたのをいう。最も古い大聖人の正確な伝記といえる。

三止四請　三止三請重請許説のこと。法華経方便品第二で略開三顕一から広開三顕一に移るときの説法の儀式をいう。三たび請いたので三たび止め、さらに請うたので仏は初めて広開三顕一を説き始めるのである。

三時の弘教　（要語解説一六八ページ参照）

三車火宅の譬　法華経譬喩品第三に説かれている譬えで、法華経の七譬の第一にあたる。（三界の火宅の項参照）

三趣　地獄・餓鬼・畜生の三悪道のこと。

三十三身　法華経観世音菩薩普門品第二十五に説かれている観世音菩薩の示すべき三十三の身のこと。

三十三天　忉利天のこと。欲界の第二天で、須弥山の頂上に

あり、中央を帝釈天として四方に各八天あるので合わせて三十三天となる。

三十四心 煩悩を断ずる位。八忍八智の十六心と九無礙九解脱の十八心とをいう。十六心は見惑を断じ、十八心は思惑を断ず。この三十四心で見思惑を断じて成道するのを三十四心断結成道と名づける。

三十四身 法華経妙音菩薩品に出ており、妙音菩薩の示現するところの三十四身をいい、その機により時により、便宜の身を現じて法を説き、衆生を利益するということ。

三十二相 応化の仏が具有すべき三十二の相をいう。この相を現じて人中の天尊、衆聖の主なることを知らしめるためのもので、八十種好と一具して仏の相好をいう。その名称および順序は、経論の記載にいくらかの異同があるが、竜樹の著「大智度論」巻四によって示すと次のようになる。一・足下安平立相、二・足下千輻輪相、三・手足長指相、四・足跟広平相、五・手足指縵網相、六・手足柔軟相、七・足趺高満相、八・伊泥延腨相、九・正立手摩膝相、十・陰蔵相、十一・身広長等相、十二・毛上向相、十三・一孔一毛相、十四・真妙金色相、十五・面各丈光相、十六・細薄皮相、十七・七処隆満相、十八・両腋下隆満相、十九・上身如師子相、二十・大直身相、二十一・肩円好相、二十二・四十歯相、二十三・歯斉相、二十四・四牙鮮白相、二十五・師子王頬相、二十六・常得上味相、二十七・広長舌相、二十八・梵音深遠相、二十九・真青眼相、三十・牛眼睫相、三十一・頂上肉髻相、三十二・眉間白毫相。（要語解説三五ページ参照）

三周の声聞 三周は三説ともいう。法華経の迹門正宗八品にある法説周、譬喩説周、因縁説周の三説法をいう。声聞の弟子が次々と成仏を許されて授記を受ける。まず、舎利弗等は方便品の法説を聞いて得道する。これを法説周という。次に譬喩品等の譬え話を聞いて須菩提、迦旃延、迦葉、目連等が得道する。これを譬説周という。第三に大通智勝仏以来の因縁を聞いて富楼那等が得道するのを因縁周という。このように三種類に分かれていても、いずれも大通（三千塵点劫）の下種を覚知して成仏した。（要語解説九〇ページ参照）

三周の説法 法華経迹門正宗分の方便品第二から人記品第九までの八品にある、法説周、譬喩説周、因説周の三つの説法の形式をいう。この三説法を、上・中・下の機根に応じて説法し、声聞の弟子に成仏を許し、授記を受けさせている。

（要語解説九〇ページ参照）

三重の相伝　三重秘伝のこと。日蓮正宗のみに伝わる相伝の一つ。

三重の劣　真言の弘法の立てた邪義で、大日経第一、華厳経第二、法華経第三という判釈。弘法の十住心論のなかにある。事実は法華経に比すれば真言は七重の劣である。

三重秘伝　三重とは権実相対、本迹相対、種脱相対の三相対をいう。第三の種脱相対は日蓮正宗のみに伝えられた法門で他門は知らないゆえに秘伝という。開目抄上（一八九ページ）の「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり」の文のなかで、但法華経は権実相対、但寿量品は本迹相対、但文底秘沈は種脱相対となる。（要語解説一四九ページ参照）

三種禅　禅を分け、一に世間禅、二に出世間禅、三に出世間上上禅をいう。世間禅を、また根本味禅・根本浄禅とし、出世間禅を、また無漏禅といい、観、練、熏、習の四がある。出世間上上禅は、自性禅、一切禅、難禅、一切門禅、善人禅、一切行禅、除悩禅、此世他世楽禅、清浄浄禅の九の大禅をいう。

三種の教相　天台の法門で、一に根性の融不融の相、二に化導の始終不始終の相、三に師弟の遠近不遠近の相。日蓮大聖人の法門ではこの一、二が第一法門になり権実相対を示し、三が第二法門で本迹相対を示し、第三の法門は種脱相対で、日蓮大聖人の寿量文底の南無妙法蓮華経すなわち文底下種の法門である。（要語解説一二一ページ参照）

三種の世間　三世間ともいう。五陰世間、衆生世間、国土世間の三つをいう。世間とは差別の義。大智度論にもあるが、天台は一念三千の成立で三世間を説いた。五陰世間とは、色、受、想、行、識である。衆生世間に十界の差別あり、国土世間とは衆生が住んでいる国土、自然界の差別をいう。（要語解説一一〇ページ参照）

三種の方便　三方便ともいう。一に法用方便、二に能通方便、三に秘妙方便をいう。天台が法華文句に説いている。法用方便とは、衆生の機根に応じて衆生の好むところに従って説法し、真実の門に誘引しようという教えの説き方。能通方便とは、衆生が低い経によって悟ったと思っていることを、だめだと弾呵して真実の門に入らしめる方便である。秘妙方便とは、長者窮子の譬えや衣裏珠の譬えのごとく、末法の衆生は種々の悩みや愚かな境涯に住んでいるが、その身そのままが仏だと悟ることである。（要語解説二〇五

ジー参照）

三種の法華経（要語解説八六ジー参照）

三種の身　法身、報身、応身の三身のこと。現代語でいえば、法身とは生命であり、報身は智慧・心であり、応身は肉体・姿をいう。この三身は即一身である。

三証　宗教の優劣・浅深を定める基準の一つで、文証・理証・現証の三つをいう。文証とは文献的証拠、理証とは道理、現証とは現実の証拠。三三蔵祈雨事（一四六八ジー）には、「日蓮仏法をこころみるに道理と証文とにはすぎず、又道理証文よりも現証にはすぎず」とある。（要語解説一四七ジー参照）

三障四魔　仏道修行の途中で、それを妨げようとする障害。三障とは煩悩障（貪・瞋・癡等から）業障（妻子等から）報障（国主・父母等から）をいう。四魔は陰魔（五体から）煩悩魔・死魔（修行中の者の若死に等から）天子魔（第六天の魔王）をいう。陰魔を病魔ともいう。（要語解説二九七ジー参照）

三乗方便　三乗とは声聞、縁覚、菩薩。法華経は一仏乗を目指すが、三乗の法たる爾前経は法華経のための方便である。

三心　一に至誠心、二に深心、三に回向発願をいう。浄土に往生することのできる者の具する三種の心。これを観無量寿経の三心という。他にも三心を説く。

三身　法身、報身、応身のこと。爾前経にも三身は説かれているが、法華経では三身即一身、一身即三身、三身常住が明かされている。（要語解説一九二ジー参照）

三身如来　三身とは法身、報身、応身をいう。この三身が即一身にあらわれた久遠元初の自受用無作三身の仏のこと。

三途の河　極悪でも極善でもない罪人が、死んでから中有の旅路に渡るべき河のこと。三途とは地獄、餓鬼、畜生の三悪道のこと。岸には奪衣婆、懸衣翁という二人の獄卒がいて罪人の着物を奪い三悪道の方へ追いやるという。

三聖　三聖には、中国でいう三聖、世界でいう三聖といろいろあるが、法華経の三聖とは、釈迦・多宝・十方分身の諸仏をいう。

三精気　地精気・法精気・衆生精気をいう。地精気とは大地の生命力、たとえば五穀、草木等を繁茂させる力で、衆生精気とは人間社会の生命力、たとえば一民族が興隆したり、また、衰えたりするそのもとになる民族自体の力、法精気とは仏法の力をいう。

三世間　一に五陰世間、十界の五陰におのおの差別があるのをいう。二に衆生世間、上は仏界より下は地獄までの衆生

におのおの差別があるのをいう。三に国土世間、衆生所依の境界は十界おのおのに差別があるのをいう。世間とは差別のことである。（要語解説一一〇ページ参照）

三世常住　過去、現在、未来の三世がばらばらでなく続いているということで、生命の永遠を示す。

三説　法華経法師品第十の已・今・当の三説。すなわち過去・現在・未来に説かれた、また説かれる一切の経をいう。法華経法師品第十には「我が所説の経典、無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説かん。而も其の中に於いて、此の法華経、最も為れ難信難解なり」と説かれている。已は爾前経、今は無量義経、当は涅槃経である。すなわち、法華経が最高であることを示す時に用いられる。

三仙　インドのバラモン外道の開祖といわれる迦毘羅・溫楼僧佉・勒娑婆をいう。開目抄（一八七ページ）の最初に出ている。

散善　定善に対する語。微徳小善のこと。

三千塵点劫　法華経迹門において、釈尊が結縁の衆生との化導の始まりを明かしたもの。法華経化城喩品第七にあり、その時の仏を大通智勝仏という。（要語解説九三ページ参照）

三千大千世界　三千年前のインドの宇宙観。仏教では須弥山を中心に太陽、月、四洲（地球）六欲梵天（他の惑星、衛星）を含むものを一世界とし、それを百億倍（一千万倍）したものを小千世界、さらに千倍したものを中千世界、さらに千倍したものを大千世界または三千世界または三千大千世界という。宇宙にはこのような三千大千世界が数限りなく存在するとする。現在の宇宙観とも一致する。

三蔵　経・律・論の三つをいい、経とは仏所説の経をいう。律とは戒律、論とは仏みずから法相を問答決釈したもの。

三蔵教　三蔵経ともいう。天台の立てた五時八教判において、化法の四教の最初の蔵教をいう。三蔵教とは小乗教の別名で、阿含経等にその教理が説かれている。

三草二木　法華経薬草喩品第五に説かれている譬喩。法華経の七譬の一つ。三草とは、下の薬草が人天、中の薬草が二乗、上の薬草が蔵教の菩薩の譬えであり、二木とは、小樹が通教、大樹が別教の菩薩の譬えである。そしてすべてが一地一雨すなわち一仏乗から生まれたことを説いている。

三大秘法　日蓮大聖人の出世の本懐で、弘安二年十月十二日御図顕の大御本尊が三大秘法総在の本尊である。三大秘法とは、すなわち本門の本尊、本門の題目、本門の戒壇のことである。（要語解説二二二ページ参照）

三大部　天台大師の法華玄義、法華文句、摩訶止観の三大部

で、各十巻合して三十巻ある。玄義は法華経の幽玄なる義旨を概説し、この経の一代仏教における最尊無上の教義たることをあらわした書。文句は法華経八巻の文々句々について科段を分割し、字句を解釈し、旧解を批正して法華独尊の旨義を明かしたもの。止観は法華経方便寿量二品本迹二門に建立せる一念三千の法門に諸大乗の円義を総摂し、己心修証の方法として、十境十乗の行門を明かし、もって法華円頓の行法とした。三大部は第一の弟子たる章安大師が筆録したものである。

讒諂 讒は讒言、諂はへつらうこと。すなわち他人を落とし入れるために、権力者にへつらって他人を中傷讒言すること。

三徳 仏の徳をいい、主の徳・師の徳・親の徳と、法身・般若・解脱の三徳がある。

三毒 貪（むさぼり）瞋（いかり）癡（おろか）の三煩悩。

三土・四土 三土は三変の国土で同居・方便・実報・寂光土のこと。四土は四見の国土で同居・方便・実報・寂光土である。同居土は凡夫と聖者が同居する土。方便土は二乗、実報土は菩薩、寂光土は仏の住する国土である。

三度の高名 高名とは名高きこと、功名すること等の意。大聖人の三度の予言、国家諫暁、大功績をいう。第一回は文応元年七月十六日、立正安国論を宿屋入道をとおし北条時頼に奉り幕府を諫めた。第二回は文永八年九月十二日、松葉ケ谷の草庵で召し捕りにきた平左衛門尉を諫めた。第三回は文永十一年四月八日、佐渡の国から鎌倉へ帰られ平左衛門尉と対面したとき諫められた。そしてことごとく大聖人の予言は的中したのである。（撰時抄二八七ページ参照）

三衣一鉢 僧の行儀をいい、三衣は僧の法服であり、一鉢とは鉄鉢一箇をいう。衣鉢ともいう。

三王 中国古代の五帝に次ぐ聖王で、夏の禹王、殷の湯王、周の文王。あるいは周王について子の武王をとる説があるが、父の文王が即位前に死し、子の武王が父の功を推して諡与したといわれるからである。

山王七社 天台宗比叡山延暦寺の守護神、大三輪神をまた大比叡神と称し、比叡山に延暦寺の建立されるときに比叡山の地主であるというので、山王として祭られ、上七社、中七社、下七社ができた。いまの日吉神社がこれである。

三平等 法華経見宝塔品で多宝如来の証明した「平等大慧」の義について、天親菩薩が法華論に釈している乗平等・法身平等・世間涅槃平等のことである。

三部経 浄土の三部経という場合は、観経・双観経・阿弥陀

経をいう。真言宗で三部の秘経という場合は大日経・金剛頂経・蘇悉地経をいう。

三仏 法華経に顕われている釈迦仏・多宝仏・分身仏をいう。

三仏の証誠 釈迦、多宝、十方分身の三仏が法華経の真実なることを証明したことをいう。方便品に「要当説真実」とあるのは釈尊の証明であり、宝塔品に「妙法華経……皆是真実」とあるのは多宝如来の証明、神力品に「舌相至梵天」とあるのは十方分身の証明である。

三墳 伏羲・神農・黄帝等、三皇の著書にして外典の書。

三墳五典 中国古代の伝説上の天子である三皇五帝の著わした書で、尚書の序に、三皇の書を三墳といい、五帝の書を五典というとある。

三変 法華経宝塔品で三度国土を変じて、浄土となしたことをいう。すなわち同品で多宝如来の宝塔が涌現し、釈尊はその塔を開かんと欲して、まず白毫の光りを放って娑婆世界を変じて清浄ならしめ、さらに八方おのおの二百万億那由佗の世界を変じて清浄ならしめ、さらに八方おのおの二百万億那由佗の世界を変じて清浄ならしめ、十方分身の諸仏を集めて多宝の塔を開き十方世界通一仏土の相を現じた。これを三変土田という。釈籤第七には三変土田をもって同居の浄土に約し、かねて、実報・方便土となしているから、三変は同居土の浄土、方便、実報の浄土である。

三変土田 三変土田とは、法華経宝塔品において多宝如来が十方の諸仏を結集すれば釈尊の説法の証明をするというので、釈尊が十方の諸仏を結集して、三度国土を清浄にする儀式が説かれている。すなわち、はじめに、白毫相を現じて娑婆世界を清浄ならしめ、次に二百万億那由佗の国土を変じて清浄ならしめ、次に三たび二百万億那由佗の国土を変じて清浄ならしめた。すなわち凡聖同居土・方便土・実報土の三土を、三たび清浄に、すなわち仏国土と変じたことをいうのである。（要語解説九二ページ参照）

三宝 仏宝・法宝・僧宝のこと。（要語解説一九六ページ参照）

三方便 天台の文句三に、方便品の題を釈し、法華経で説かれた方便の意と、他経で説かれた方便の意を区別するために三つの方便を明かしている。一に法用方便、二に能通方便、三に秘妙方便をいう。法用方便、能通方便は小乗教、権大乗教で用いる方便で、一つは導き、一つは否定して、この二つの方便を用いて、衆生の機根を法華経に導こうとするもの。秘妙方便は仏だけが知っていて、われわれ凡夫には考えることができない方便である。凡夫が仏であると

いうのがそれである。また罰と功徳は秘妙方便である。（要語解説二〇五ページ参照）

三昧　心を一処に定めて動かさず、正しく所観の法を受け、心の暴を調え、曲がれるを直し、心の散れるを定めることである。法華三昧は、われわれの立ち場では御本尊に唱題するとき、自分の種々な思い起こさず、御本尊、広宣流布のことだけを考えて唱題すること。

三摩耶　一には「時」という意味である。また真言家でいう三摩耶は「本誓」の意であり、諸仏菩薩の本誓願をあらわす。三摩耶曼荼羅とは密部四種曼荼羅の一つ。

三位日順　重順談所の二代学頭。甲斐の国巨摩郡下山郷に生まれ、八歳で寂仙房日澄の弟子となり出家した。日澄が身延の日向の邪義を捨て日興上人に帰伏したとき同じく富士にきて大聖人の正義を学んだ。日澄に続き二代の学頭に任ぜられ、大いに興学に努めたが過労のためか前世の宿業か、一眼を失明した。日興上人の指導で多くの著書をあらわす。主なものだけでも、表白、五人所破抄、用心抄、本門心底抄、摧邪立正抄、念真所破抄、本因妙口決などがある。日興上人の指導で、本仏論、本尊論、戒壇論を説き、また五老僧の邪義を破折している。

三明　小乗の仏。阿羅漢果の聖者がもつ三つの明智である。一に宿住智証明で過去のことに通達する。二に死生智証明で未来のことに通達する。三に漏尽智証明で現在のことに通達する。

三妙合論　仏自らの因果と、所住の国土とに約して、時間、空間にわたって生命の真実の姿を明かしたのが三妙合論である。三妙とは、本因妙、本果妙、本国土妙をいい、法華経寿量品にこの三妙が整足して説かれる。すなわち我本行菩薩道が本因妙、我実成仏已来が本果妙、娑婆世界説法教化が本国土妙である。末法の文底仏法では、本因妙は血脈付法の日興上人、本果妙は日蓮大聖人、本国土妙はご本尊の居ます所すべて本国土妙である。（要語解説一六六ページ参照）

山門　①三井の園城寺を寺門というのに対し、比叡山延暦寺を山門という。②寺院の正面に存する楼門をいう。

三類の強敵　末法に法華経を弘通するとき、正法の行者を迫害する強敵をいう。一に俗衆増上慢、二に道門増上慢、三に僭聖増上慢である。（要語解説二九五ページ参照）

三論宗　嘉祥寺の吉蔵が立てた宗で、提婆菩薩の百論、竜樹菩薩の中論、十二門論の三論によって立てるゆえに三論宗と名づけた。

三惑 見思・塵沙・無明の三惑。見思は見惑と思惑であり、見惑は道理に迷うこと、思惑は事物に迷うこと。見思は、共に三界六道の界内を対象とする煩悩で、二乗はこれを断じて空理を悟る。塵沙惑は広く十界にわたる煩悩で、菩薩はこれを断じて諸法を了知する。無明惑は根本の惑で元品の無明等という。（要語解説一九ページ参照）

し

四悪趣 悪業の因によって趣くべき四つの悪処、すなわち地獄、餓鬼、畜生、修羅のこと。四悪道ともいう。

四悪道 四悪趣と同じ。

四阿含経 天台の教判によれば、最初の二十一日間に華厳経を説き、次の十二年間に説かれたのが阿含経である。この阿含経は増一阿含、長阿含、中阿含、雑阿含の四部からなっているので四阿含または四阿含経という。

四安楽行 法華経安楽行品第十四に説かれた摂受の修行法の意。身安楽行、口安楽行、意安楽行、誓願安楽行の四つ。

四威儀 行・住・坐・臥の四をいう。道を修めるものの態度・動作が法にかない威儀を失わないのをいう。

四韋陀 インドのバラモンの経典で一には讃誦、二には祭祀、三には歌詠、四には穰災で、韋陀とは分という意。

四一開会 この四とは、教・行・人・理の四法をいう。天台が法華経方便品第二の開三顕一・開示悟入の文を教・行・人・理の四義に立て分け、法華経では、教・行・人・理ともに、唯有一仏乗であることを明かしたもの。

四依 仏法を修行する者の四種の依止所をいう、大別して行の四依、説の四依、人の四依、法の四依となる。この四依のうち行・説の四依は在世のための四依で、このうち行の四依は在世の比丘の修行であり、説の四依はインド応誕の釈尊の四依である。人、法の四依は滅後の者のための四依で、このうち人の四依は正法を護持し、弘通して衆生の依怙依託となるべき導師をいい、法の四依は、衆生を利益する導師が必ず遵守する四依を法の四依という。したがって末法今日においては人・法の四依をもちいるのである。

四衆の親疎 四方の親しい者も疎縁の者もの意で、あらゆる人々ということ。

四依の菩薩 人の四依と同意。依は依止所の意である。仏の滅後、正法を護持し、正法を弘通し衆生済度の中心人格となる菩薩。位を四段階に分け、初依、二依、三依、四依とする。四依の菩薩に四類あり、蔵・通・別・円のそれぞれ

であり、これらの菩薩の位の配立は諸説がある。

四恩　心地観経には、一に父母の恩、二に衆生の恩、三に国王の恩、四に三宝の恩を説いている。（四恩抄九三七ページに詳しい）

慈恩大師　唐代法相宗の第二祖、十七歳で玄奘三蔵の弟子となる。「成唯識論述記」「法華玄賛」等多くの疏釈がある。

持戒　戒律をたもつこと。または戒律をたもつ者のこと。

慈誨　相手を救うための厳格な教訓。

四海一州　日本国中の意。

四誡三請　法華経寿量品の初めに釈尊は三誡し、菩薩大衆の三請の後に、さらに四誡して説法に入ったこと。（三請四誡の項を参照）

持戒の比丘　正法をかたくたもつ僧。

自界叛逆　同士打ち、内乱をいう。七難のうちの一つ。

四角四堺の祭記　四角は四隅、四堺は四方の意で、都の四隅に疫神を祭り、国の四境で祭るという陰陽道の儀式の一つ。

慈覚大師　日本の天台宗第三の座主。入唐八家の一人。諱は円仁、十五歳で叡山で伝教大師の弟子となる。伝教の弟子でありながら、真言の悪法を取り入れた。「金剛頂経疏」「蘇悉地経疏」を著わす。

自我偈　法華経寿量品第十六に説かれた偈のこと。自我得仏来から速成就仏身までの偈をいう。法蓮抄（一〇四九ページ）に「自我偈の功徳は唯仏与仏・乃能究尽なるべし、夫れ法華経は一代聖教の骨髄なり自我偈は二十八品のたましひなり」とある。（要語解説一〇九九ページ参照）

止暇断眠　「暇を止め眠を断つ」と読む。寸暇を惜しんで精進することをいう。富木殿御書（九七〇ページ）に「我が門家は夜は眠りを断ち昼は暇を止めて之を案ぜよ一生空しく過して万歳悔ゆること勿れ」と仰せである。

止観円頓の大戒　伝教が入唐して道邃和尚、行満等から伝授された大戒で止観の理の一念三千のことをいう。

色界　三界の一つ。色は物質の義あるいは変礙の義である。この色界の諸天は世間の禅定ならびに上品の十善を修してこの報を感ずるのである。色界には通じて十八天がある。

色香美味　法華経寿量品第十六にある経文。天台では、色とは戒、香とは定、味とは慧、すなわち色香味を三学なりと説く。また色は般若、香は解脱、味は法身すなわち三徳なりとも説く。文底の仏法では、色とは虚空不動戒・本門寿量の大戒、香とは虚空不動定・本門寿量の本尊、味とは虚空不動慧・本門寿量の題目、すなわち三大秘法なりと説

く。これを図示すれば次のようになる。

色…戒―本門の戒壇　色…般若―報身
香…定―本門の本尊　香…解脱―応身
味…慧―本門の題目　味…法身―法身

色心不二　色とは肉体、心とは心で、この二つは別々のものではなく一体のものである。一体のところに生命の極致がある。御義口伝上（七〇八㌻）に「色心不二なるを一極と云うなり」とある。（要語解説二五〇㌻参照）

直達正観　歴劫修行に対する語。直ちに正観に達する意。爾前経では歴劫修行を立て菩薩が六度万行を永遠に修していくのが成仏の道であると説いたが、法華経では即身成仏を説いている。しかし釈迦仏法は熟脱の機根の衆生が対象である。真実の直達正観は御本尊を受持して即身成仏することである。（要語解説二八三㌻参照）

食法餓鬼　十界、六道、四悪趣の一つである餓鬼界三十六種の一種である。自分の名聞名利のために仏法をもてあそぶ餓鬼である。

事行　理行に対する言葉で、一般的には実践すること、生活のなかに具体化して実現することをいう。仏法では、天台の一念三千が理であり、学問のうえで論じ、その理を通じて得道するのに対し、三大秘法の南無妙法蓮華経は日蓮大聖人のご生活、お振舞い等それ自体で、それが久遠元初の自受用身のお振舞いと少しも変わりなく本有常住の一念三千の当体であらせられる。ゆえに事行の一念三千というのである。

自行化他　修行の立ち場でいえば自行とは、自分が利益を受けるため修行することをいい、また自利とも名づく。化他とは、他をして法の利益をうけられるよう化導するをいう。自行化他は、また自利利他とも名づく。われわれの仏道修行においては、自行とは朝夕御本尊に勤行することをいい、化他とは折伏行をいう。また法体の立ち場でいえば、衆生の機根に応じて説かれた経を化他の法門といい、法華経のように仏の悟りそのままを説いたのを自行の法門という。（要語解説三一八㌻参照）

四教の果・四教の因　四教とは、化法の四教と化儀の四教とあって八教という。ここでは蔵・通・別・円の化法の四教である。釈尊は寿量品以前の蔵教にも通教にも別教にも円教にも「仏」を説き、成仏の因たる修行を説いている。しかし寿量品にいたって、これら四教の「仏」が始成正覚の迹の仏であると、その仏果を打ち破っているゆえに、成仏修行の因もすべて打ち破られたのである。（開目抄一九七㌻）

四教の色身　蔵・通・別・円の四教を説く仏の身形は、それぞれの教えに応ずる色身を現じて衆生を利益せしめた。これを四教の色身という。

持経の人　正しい仏法を信じ持つ人。

私曲の思　自分自身でかってに立てた妄想。

四弘誓願　一切の菩薩が初発心のとき、必ず起こす四つの願い。すなわち衆生無辺誓願度・煩悩無数誓願断・法門無尽誓願知・仏道無上誓願成をいう。

竺の道生　中国東晋の世の高僧。沙門竺法汰について出家、のち羅什三蔵の弟子として修行した。青園寺に住し、頓悟成仏の説を立て「二諦論」「仏性当有論」「法身無色論」等の著があり、また闡提成仏の義を立てた。これにより衆僧の怨嫉するところとなり大衆のために追放せられた。そのとき、道生は「わが所説、もし経義に反せば現身に厲疾を表わさん。もし、実相と違背せずんば、願わくは寿終の時、師子の座に上らん」と誓って蘇州の虎丘に去った。のち道生の説の正しいことが明らかとなり、その誓いのごとく宋の元嘉十一年、廬山において法座に登り、説法が終わると共に眠るがごとく入滅したといわれる。

竺の法蘭　中国後漢の時代、初めて中国に仏教を公伝したといわれる、中インドの僧。後漢の永平十年、明帝のとき迦葉摩騰と共に漢土に来たり「仏本生経」などの五部を訳出した。

四句の要法　法華経神力品第二十一の結要付嘱の文。「要を以って之を言わば、如来の一切の所有の法（名）、如来の一切の自在の神力（用）、如来の一切の秘要の蔵（体）、如来の一切の甚深の事（宗）、皆此の経に於いて宣示顕説す」これが三大秘法を表わすことは、三大秘法抄（一〇二一ページ）に明らかである。（要語解説一二九ページ参照）

四苦八苦　四苦は生・老・病・死であり、八苦はさらに愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五盛陰苦が加わる。

自解仏乗　天台大師を賛嘆する十徳中の一つ。大師が師伝を待たずに、自ら法華の教理を悟ったことをいう。法華は成仏の法なので仏乗という。天台のみならず、日蓮大聖人も当然自解仏乗であらせられる。

四見　涅槃経で、衆生がそれぞれの機根にしたがって、同じ沙羅林を同居・方便・実報・寂光の四土と見たことをいう。

示現　仏菩薩が衆生を救うために種々に身を変じてこの世に現われることをいう。

示現生　「菩薩の示現生の者」とは、菩薩が衆生を救済する

ために縁に応じて畜生等の六道の形を現ずること。

恃怙　たより、よりどころ。

四劫　成劫・住劫・壊劫・空劫をいう。この四劫は仏教の宇宙観であって、一つの世界が成り立つまでの時代を成劫、成立以後、継続する時代を住劫、壊滅する時代を壊劫、形体のない空の時代を空劫という。この各劫は平均して二十小劫といわれる。この二十小劫というのは、住劫の初め人寿無量歳から百年に一歳減じて人寿十歳にいたるまでを第一減劫といい、次にこの十歳から百年に一歳を増して八万歳になり、再び百年に一歳減じて十歳になるまでを第二の増劫および減劫という。このようにして二十の増減があり、最後第二十の小劫は十歳から無量歳までにいたる間の増劫のみをいう。

四皓　商山の四皓といい恵帝の老臣である。東園公・綺里季・夏黄公・甪里先生の四人をいう。

地獄　地は最底の義、獄は不自在拘制の義であり、国土世間からみれば地球の中心、重力作用によって赤熱の集まる状態であるとされているところ、また火山のほのお等。衆生世間からすれば不具者、病者、邪宗教の僧侶等。五陰世間においては日常生活において子に死なれる、借金に悩む等の煩悶懊悩する状態をいう。その種類は八大地獄から、一百三十六地獄にわたり、別に八寒地獄がある。

持国天　四天王の一つで東北の守護神である。民を安んずる働きをもつ。

四箇の格言　（要語解説一〇ページ参照）

持斎　斎とは戒法の一つで、戒法を持つことを持斎という。また斎法を持った法師を持斎法師という。八斎戒とは、一に不殺、二に不盗、三に不婬、四に不妄語、五に不飲酒、六に不坐高大牀、七に不作倡妓楽、八に不過中食である。

師子座　仏を師子王として、その座を師子の座という、猊座とも同じ。

師子尊者　釈尊滅後千二百年前後、中インドに生まれ、鶴勒夜那につき法を受け、後、罽賓国において仏法を流布した。その国王・檀弥羅は邪見が強盛で多くの寺塔を破壊し、多くの僧を殺害し、ついに師子尊者の首をも斬った。そのとき、一滴の血も流れず、ただ白い乳のみが涌き出た。ここにおいて死身弘法の行者、付法蔵二十四人の最後の伝灯者として、その名をとどめている。なお、国王・檀弥羅は、仏法に帰依していたのだが、外道にだまされて師子の首を斬ったとする説もある。

四悉檀　世界悉檀・為人悉檀・対治悉檀・第一義悉檀の四つをいう。悉檀とは偏く施すということ。世界悉檀は楽欲悉檀ともいい、世間一般の欲するところにしたがって説法すること。為人悉檀は、各各為人悉檀といい、人々のさまざまな機根に応じてよろしきにしたがって法を説くこと。対治悉檀は断悪悉檀とも称して、破悪の益を与えるもの。第一義悉檀とは真実義悉檀ともいい、入理の益があるとされている。世界、為人悉檀は摂受的なものであり、対治、第一義悉檀は折伏型のものである。（要語解説二〇四ページ参照）

四時の経　釈尊一代五十年の説法を五つの時期に区分して、第一華厳の時、第二阿含の時、第三方等の時、第四般若の時、第五法華涅槃の時と天台大師は判じた。四時の経とは第四般若の時までをさす。「四十余年未顕真実」の文により法華経が説かれたら廃せらるべき経々である。前四味、爾前の経のこと。

四衆　（要語解説一一四ページ参照）

四州　須弥山を中心とした古代インドの世界観であり、東に弗婆提、西に瞿耶尼、南に閻浮提、北に鬱単越の四州。

四重　四重禁戒をいい、一に不殺生戒、二に不偸盗戒、三に不邪婬戒、四に不妄語戒で、これを犯せば教団を放逐されるという、出家としての最重罪であるとされていた。

四重興廃　（要語解説一五〇ページ参照）

四十八願　阿弥陀如来が法蔵比丘だったとき、世自在王仏の所にあって立てた誓願であり、無量寿経で説く阿弥陀の四十八種の誓願をいう。二百十億の諸仏国土より選択摂取した大願なので選択本願という。

四十余年未顕真実　「四十余年には未だ真実を顕さず」と読む。法華経の開経たる無量義経にあり、釈尊が四十二年間説いた教えは方便権教で真実の教えではなく、法華経こそ、いまだかつて聞かざる大法であるという意。

四種三昧　略して四種ともいわれる。天台の止観巻二に説かれている。一、常坐三昧、また一行三昧。九十日間、坐禅入定して余事を行ぜざるをいう。二、常行三昧、また仏立三昧。九十日間もっぱら阿弥陀仏を唱念するをいう。三、半行半坐三昧。七日の方等三昧と三七日の法華三昧をいう。共に懺悔滅罪を主としたもので、行と坐とを兼ね修するもの。四、非行非坐三昧、方法、期間を定めず、六塵六識によって起こす念に対して、四句をもってこれを観じ、一心三観に達するのをいう。

四種の身　仏が四十余年の間、種々の姿を現じ、衆生を教化

するが、涅槃経の文において、四種の仏身を現ずることと、四種の仏身を衆生の機根により四種とみること。

自受法楽　自ら受ける法楽、法の楽しみである。大御本尊を拝むことによって、自身の胸中に仏の生命が湧現する、すなわち幸福をつかむのは、自らの信心によってつかむということである。

自受用身　仏自身の働きによって、一切の衆生を救うために、自ら出現した仏。他受用身に対する語。正確には自受用報身如来である。「ほしいままにうけもちいる身」と読み、自由自在の成仏の境涯である。自受用身に、久遠元初の自受用身（日蓮大聖人）と応仏昇進の自受用身（本果第一番成道の釈尊）がある。（要語解説二七四ページ参照）

自受用身即一念三千　自受用身と一念三千が一体不二であること。自受用身とは久遠元初の自受用身すなわち末法にご出現の日蓮大聖人である。一念三千とは事行の一念三千の南無妙法蓮華経である。ゆえに自受用身即一念三千とは人法一箇の御本尊である。

自受用土　自受用報身如来の住処である。すなわち南無妙法蓮華経と唱える者の住処は、三界のいかなる所も寂光土であり、自受用土である。

自受用報身如来　自受用身と同義。

四処　生処、得道、転法輪、入涅槃の四種の住処。この四処を仏の生身の四処という。

四生　衆生の四種の産生の意と、四たび生を受けるの意の二つがある。四種の産生とは、一に胎生は人間等のごとく母の胎内で育って生まれるもの、二に卵生は鳥のごとく卵から生まれるもの、三に湿生は虫等のごとく湿気の中より生まれるもの、四に化生は業報によってうける天上界のごときもの。

四聖　声聞・縁覚・菩薩・仏を、それ以外の六道に対して四聖という。また儒家では尹寿・務成・太公望・老子の四人を四聖という。

四請三誡　三誡四請と同義。

始成正覚　「始めて正覚を成ず」と読む。法華経本門の久遠実成に対する。爾前・迹門で、十九出家三十成道と説く。すなわち、この世で修行して仏に成ったと説くのをいう。

自性涅槃　一切法のもっている、そのもの自体の性分そのままが、涅槃の相であるとの意。

四身　仏の四身をいう。①楞伽経の四身は、化仏、功徳仏、智慧仏、如如仏。化仏は応身、功徳仏と智慧仏とは報身、

如如仏は法身にあたる。②唯識論で説く四身は、自性身、他受用身、自受用身、変化身。自性身は法身に、他受用身と自受用身は報身に、変化身は応身にあたる。③涅槃経で説く四身は、丈六（劣応身）小身大身（勝応身）盧舎那（報身）身は虚空に同じ（法身）である。④天台家においては法報応の三身に化身を加えて四身を説いている。

四信　四信五品の四信。法華経分別功徳品第十七に法華経を修行するものの初心の功徳をはかるときに四つの階位を説く。一念信解、略解言趣、広為他説、深信観成の四つ。

死身弘法　章安の涅槃経疏にある文。「身を死して法を弘めよ」と読む。命がけで正法を弘めること。不惜身命・不自惜身命・我不愛身命と同じ。

地神五代　「ちしん」とも読む。天神七代のあと、人皇である神武天皇に先立って日本を治め、皇統の祖神となったとされる五柱の神の時代。すなわち天照大神・天忍穂耳命・瓊瓊杵尊・彦火火出見尊・鸕鷀草不合尊。

四条金吾頼基　（要語解説三八二ページ参照）

四信五品　法華経本門の流通分である分別功徳品に、法華経を修行するものの初心の功徳を量る時、その初心者の階位を四信と五種の品類に分けて説いたものである。四信とは、第一に一念信解、法華経の顕本の理を聞いて、即座にありがたいと思う心、この心をいう。第二に略解言趣、一念の信心が進んでいくと、その経の趣旨が、ほぼ了解される。一字一句から始まって、仏が教えを解いた意は、その趣旨は、目的はなんであるのかをほぼ理解していくことができる状態。第三に広為他説、広く他人のために法を説く状態、心に歓喜を生じて、他の人にも説きたくなること。第四に深信観成、自分では理解したが人に話してみるとわからないことが多い、しかし、ますます信心を強めて、より以上にわかっていく、内鑑していくこと。五品とは、一に初随喜品で法を聞いて随喜の心を起こすこと。二に読誦品。三に説法品で他人に向かって勧めること。四は兼行六度品で、自他ともに救う六度の行をも心がけること。五に正行六度品、正しく六度すなわち六波羅蜜の修行を行ずること。

持水（治水）　金光明経巻三に説かれている過去世の名医のこと。

四禅定　欲界の惑を離れて色界に生ずる四種類の禅定。初禅、二禅、三禅、四禅をいう。四禅定を修して色界に生じても、色界は物質だけが存在している天上界の一部であっ

て、真実の涅槃の境涯を獲得することはできない。よって四禅定を四有漏禅ともいう。

四禅比丘　一説には善星比丘ともいう。出家して仏道修行に励み、欲界の煩悩を断じて四禅をえ、それが真の涅槃と思い増上慢を起こし、仏に敵対して阿鼻地獄に落ちた。

地蔵菩薩　釈尊より、忉利天の、一切諸仏天竜八部の大会の中で付嘱を受け、釈尊滅後、弥勒出世以前の無仏世界の人天の諸の衆生が苦しんでいるのを教化する菩薩とされている。地蔵とは、安忍不動は大地のごとく、静慮深密は秘蔵のごとくなるゆえであるという。

四諦　諦は真実不虚の義、仏智をもってあきらかにした誤りなきものの意。四諦とは苦諦、集諦、滅諦、道諦の四つ。苦諦は三界六道の苦報。集諦は貪瞋癡の煩悩から六根より起こる愛着が苦の因となること。滅諦は前の苦集を滅し惑を伏した真空寂滅の境涯。道諦は滅諦にはいるべき修行法。

（要語解説二九ページ参照）

四大　四大種の略称で、四界ともいい、地水火風をいう。

四大海　須弥山をめぐる四方の大海をいう。古代インドの世界観では世界の中央に須弥山があり、その四方に東弗波提、西瞿耶尼、南閻浮提、北鬱単越の四大州があり、それをめぐる海を四大海という。

自体顕照　自身を明らかに照らし出して自覚すること。三大秘法の御本尊を信じて湧現した姿が自体顕照である。

四大士　上行、無辺行、浄行、安立行の四菩薩をいう。本化地涌の菩薩の統領たる四菩薩である。

四大声聞　釈尊の弟子のうちで、特にすぐれた四人の声聞をいう。小乗経、権大乗経、法華経の各々に四大声聞がある。そのうちで法華経では、信解品第四において、一代五時の領解を述べた一会の上足、すなわち譬喩品を聞いて領解する中根の声聞であり、摩訶迦葉・摩訶迦旃延・摩訶目犍連・慧命須菩提の四人をいう。

四大声聞の領解　須菩提・迦旃延・迦葉・目犍連の四大声聞が領解の旨を述べた信解品第四の文をさす。

次第禅門　天台の撰。十巻あるいは十二巻。釈禅波羅蜜次第法門、または禅波羅蜜ともいう。単に禅門ともいう。三種止観のなかの漸次止観を明かしている。

四諦の相　苦諦・集諦・滅諦・道諦の四諦の法によって生命の実相を説いた小乗教の教え。

四諦の法輪　四諦の法門をいう。（四諦の項参照）

四大不順　摩訶止観に病の六因を明かしているが、その第一

の因で、身の病を起こす。四大とは地水火風をいう。

四大菩薩　法華経涌出品第十五において、とつぜん大地より涌出した菩薩の代表であり、本化の上行・無辺行・浄行・安立行の四菩薩をいう。また生命観の上から、四菩薩は常楽我浄の四徳をあらわす。御義口伝上(七五一ページ)には「又云く千草万木・地涌の菩薩に非ずと云う事なし、されば地涌の菩薩を本化と云えり本とは過去久遠五百塵点よりの利益として無始無終の利益なり、此の菩薩は本法所持の人なり本法とは南無妙法蓮華経なり」とある。

四智　仏の具備する四つの智慧。真言密教に大円鏡智・平等性智・妙観察智・成所作智の四智を説く。諸説あり。

七鬼神　却温神呪経に説く七つの善鬼。一無多難鬼、二阿伽尼鬼、三尼迦尸鬼、四阿迦那鬼、五波羅尼鬼、六阿毘羅鬼七波提利鬼で、この名を書いて千門にはっておけば鬼魔が近寄らないと説いている。

七逆　梵網経に述べられている。重き罪を犯す七つの大罪。すなわち出仏身血・殺父・殺母・殺和尚・殺阿闍梨・破羯磨転法輪僧・殺聖人の七つで、特に重罪は師匠に背く大罪である。主に背く八逆、親に背く五逆、そして師に背く七逆を合わせて二十逆罪という。

七子　涅槃経梵行品の七子の譬え。蔵・通の声聞・縁覚と、蔵・通・別の菩薩、すなわち七方便に擬す。観心本尊抄、法華取要抄等に涅槃経の七子の譬えをひかれている。大涅槃経にいわく「譬えば一人にして而も七子有るもの、是の七子の中に一子病に遇う。父母の心は平等ならざるにあらずといえども、然も病子に於いて心則ち偏に重きが如し」と。すなわち不幸な衆生に対する仏の慈悲をあらわしている。

七宗　奈良時代の奈良の六宗に、平安時代の初期に弘法の弘めた真言宗を加えて七宗という。倶舎・成実・律の小乗の三宗と、法相・三論・華厳・真言の権大乗の四宗。南都六宗に天台宗を加えて七宗と称する説もある。

七重勝劣　法華経と大日経と比較して法華経は七重にすぐれ、大日経は七重に劣るという意味。すなわち第一に法華経、第二に涅槃経、第三に無量義経、第四に華厳経、第五に般若経、第六に蘇悉地経、第七に大日経となる。

七宗の守護神　奈良の六宗に真言宗を加えた七宗の守護神。

七難即滅七福即生　仁王般若波羅蜜経受持品に「般若波羅蜜経を講読せば七難即ち滅し、七福即ち生じ、万姓安楽にして帝王歓喜せん」とあるのをいう。七難とは仁王経では一

に日月失度難、二に衆星変改難、三に諸火焚焼難、四に時節返逆難、五に大風暴起難、六に天地亢陽難、七に四方賊来難。薬師経では、一に人衆疾疫難、二に他国侵逼難、三に自界叛逆難、四に星宿変怪難、五に日月薄蝕難、六に非時風雨難、七に過時不雨難。その他諸説ある。

七譬 七喩と同じ。法華経には数多くの譬喩が説かれているが、そのうちの七つの大きな譬喩をいう。

一、三車火宅の譬え（譬喩品）
二、長者窮子の譬え（信解品）
三、三草二木の譬え（薬草喩品）
四、化城宝所の譬え（化城喩品）
五、貧人繋珠の譬え（五百弟子品）
六、髻中明珠の譬え（安楽行品）
七、良医病子の譬え（寿量品）

略して、火宅・窮子・薬草・化城・衣裏珠・頂珠（または髻珠）・医子の七喩ともいう。いわゆる法華の七大喩である。

（要語解説八七ページ参照）

七方便 ①蔵教の声聞・縁覚・菩薩と、通教の声聞・縁覚・菩薩と、別教の菩薩とをいう。これを両教（蔵通）の二乗と三教（蔵通別）の菩薩ともいう。この七種の行者は円教の位でないから七方便と名づける。②蔵教の声聞の位に七方便がある。三賢四善根の七位の声聞をいう場合である。

七慢 自分を恃んで、他人に対して高挙するのを慢という。七慢・八慢・九慢等があるが、次に七慢をあげる。

(1) 慢＝他に劣っているのに自分がまさるということ。おのれを高挙する。
(2) 過慢＝自分と等しいものにまさるといい、自分が劣っているのに等しいということ。
(3) 慢過慢＝他人がすぐれているのに、自分が、さらにまさるということ。
(4) 我慢＝自分が自分がと、自分を恃んで他人を凌いで心を高挙すること。
(5) 増上慢＝まだ上聖の法を得ないのに、自分では、すでに証得したと思っていること。
(6) 卑慢＝他人が多分にすぐれているのに、自分は少しだけ劣るということ。あるいは自分の少能が他人の多能にかえってまさるということ。
(7) 邪慢＝自分が徳がないのに、あるといい、邪見に執着するもの。

七味 甘・辛・酢・苦・鹹・渋・淡の七種の味。

七面七重の口決　中国天台宗の開祖、天台の説いた法華玄義・法華文句・摩訶止観の各十巻を、伝教がさらに七面七重の立ち場からこれを釈して口決治定したことをいう。（本因妙抄八七〇ページ参照）

自調自度　自分のみが煩悩を調え、自分だけが悟りを得るという意味で、二乗は菩薩のごとく衆生を救わんとする弘願がないことから自調自度という。

十界久遠　十界が久遠常住であるということ。迹門では本無今有の生命を説き諸法実相を明かしたが、本門にいたって十界の久遠常住を説き明かすのである。

十界互具　生命が地獄界より仏界にいたる十界のおのおのに十界の働きを具足していること。（要語解説一八二ページ参照）

十界の因果　十界の因果とは地獄界、仏界等の十界におのおのの因果を具しているという場合と、九界を因となして仏界を果となすという場合とがある。

十境　天台が「摩訶止観」で述べたもの。一に陰界入境、二に煩悩境、三に病患境、四に業相境、五に魔事境、六に禅定境七に諸見境、八に増上慢境、九に二乗境、十に菩薩境。

執権　①政治の実権を掌握すること。②院の庁の別当の称。③鎌倉幕府の政所の長官。将軍を補佐して内外の政務を総轄した、将軍に次ぐ要職。北条氏はこの職を世襲して鎌倉幕府の実権を握っていた。④室町時代における管領の異称。

実性　真実の性。

実乗の一善　実乗は権乗に対する語で実大乗教のこと。一善とは最高善の意。すなわち、最高の教えである法華経、末法今日においては日蓮大聖人ご建立の文底三大秘法の南無妙法蓮華経である。

十信・十住・十行・十回向・十地　別教に説く菩薩の位で、等覚・妙覚を加えて五十二位に説いている。菩薩はこの段階を歴劫修行していくのである。

十地華厳等　十地は十地経、華厳部に属す。華厳経十地品の別出の経とされている。

十方　四方八方に上下を加えた十方。あらゆる世界の意味に使われる。

実報華王の儀式　実報とは実報土のこと、すなわち別教の十地以上の位・円教の十住以上の位の菩薩の住所。華王とは蓮華蔵世界のことで、実報華王の儀式とは華厳経に説かれた儀式をいう。華厳経は高位の菩薩、利根の機に対して説かれたものであるから、菩薩所居の実報土を説きあらわし、これを説いた仏も蓮華蔵世界の仏の立派な相を示され

たので、このように呼ばれるのである。

十方台上の盧舎那　華厳の結経たる梵網経に説かれる報身仏すなわち華厳の教主は華蔵世界、蓮華中台に坐し、蓮華の千葉上に千釈迦、その葉中に百億の小釈迦がありとする。

十方台葉・毘盧遮那仏　十方台上の盧舎那というに同じ、華厳宗では盧舎那は毘盧遮那の略であるとするが、天台では毘盧遮那は法身、盧舎那は報身であると説く。

実報土　菩薩のうちで中道を証し、無明を断破したものが所居する土、四土の一つ。

十方の諸仏　十方とは、四方四維上下の総称。すなわち東・西・南・北の四方と、東北・西南・東南・西北の四維と、上下の二方を加えて十方となる。この十方におのおの諸仏が住するので、これを十方の諸仏という。

十方唯有一仏　十方に唯一仏ありといい、万物ことごとく仏性があるとか、あるいは仏が十方の国土にいる等と説かない小乗の教え。一代聖教大意（三九〇ページ）に「此の経（三蔵教）の意は六道より外を明さず但し六道（地餓畜修人天）の内の因果の道理を明す、但し正報は十界を明すなり、乃至此の教の意は六道より外を明さざれば三界より外に浄土と申す生処ありと言わず又三世に仏は次等・次等に出世すとは云へども横に十方に並べて仏有りとも云わず」とある。すなわち、蔵教で説く法門である。

四天　四天王のこと、帝釈の外将である。須弥山の中腹の由旬の山の四峰におのおの居し、各一天下を守っている。東は持国天、南は増長天、西は広目天、北は多聞天（毘沙門天）である。この四天王も法華経の会座に万眷属の天子と共に連なり、陀羅尼品においては法華経の行者の擁護を誓言している。

四天下　須弥山のまわりの四州をいう。

四顚倒　四倒ともいう。迷いの衆生が、常に正理を顚倒して見解すること。これに四種がある。凡夫の四顚倒は世間の実相の非常を常、非楽を楽、非我を我、非浄を浄となす。二乗、菩薩の四顚倒は涅槃の実相の常を非常、楽を非楽、我を非我、浄を非浄となすをいう。

四天王　須弥山四面の中腹由旬の山の四峰に住し、正法を護持する天王。一に持国天王、二に広目天王、三に毘沙門天王（多聞天王）、四に増長天王をさす。帝釈天王の外将であり、法華経の序品において万眷属の天子と共に連なり、陀羅尼品においては法華経の行者の擁護を誓っている。①持国天王は東方を守り、一般には安民の働きをする

役目をもつ。②広目天王は西方を守り、悪を呵責する働きをもつ。③毘沙門天王は多聞天王ともいい北方を守り、一般には法を多聞して法座を守る働きをもつ。④増長天王は南方を守り、一般には不幸を免離する働きをもつ。

四天王寺　大阪市天王寺区にある和宗の寺。聖徳太子が用明天皇の二年に守屋を誅し、その冬に四天王寺を建てた。元興寺と共に日本最古の寺である。

四道の聖人　四道とは一義には須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢の四果をいい、一義には初依、二依、三依、四依の聖人ともいう。いずれにしても付法蔵の二十四人のように仏の遺命により正しく仏法を弘めた聖人たちをいう。

示同凡夫　仏が衆生を化導するため、凡夫と同じ姿を示し、自ら凡夫即極の現証をあらわすこと。（要語解説二七二ページ参照）

四土色身　四種の国土に応現する仏身をいう。法華経見宝塔品で十方分身の諸仏が来集するにあたり、三度土田を変ずる。第一に同居の土を方便土に、第二は実報土に、第三は寂光土と変じた。これに従って仏身もまた同居土では劣応、方便土では勝応、実報土では報身、寂光土では法身とそれぞれ姿を現じた。

事と理　（要語解説一八一ページ参照）

斯人行世間　法華経如来神力品第二十一の文。「斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅す」とある。別付嘱の文にあたり、御義口伝下（七七一ページ）には「斯人とは上行菩薩なり世間とは大日本国なり衆生闇とは謗法の大重病なり、能滅の体は南無妙法蓮華経なり今日蓮等の類い是なり」とある。

四念処　天台の説を章安が記したもので四巻。また、小乗を修するものが五停心観の次に修するところの観であり、四念処によって智慧を練磨する。

事の戒壇　義の戒壇や理の戒壇に対する語。本門の戒壇に義と事がある。事の戒壇とは、広宣流布のときに本門戒壇の大御本尊を安置し奉る所である。（三大秘法抄一〇二二ページ）

事の戒法　①末法今日において衆生が持つべき唯一絶対の戒法は、大聖人の顕わされた三大秘法の御本尊を受持することであり、これを金剛宝器の大戒といい、また事の戒法とも呼ぶ。②本門の戒壇を建立すること。これ大聖人が末法の衆生に遺命された肝要である。（身延相承書一六〇〇ページ）

慈悲　慈は与楽の義で、悲は抜苦の義。すなわち仏法修行の根本となるべき義である。キリスト教の愛と違い、一切のものを幸せにさせようという仏の働きをいう。

尸毘王　釈迦仏が因位のとき、布施波羅蜜を行じたときの名。鷹に追われた鳩が殺されようとしたとき、わが身を施して鳩を救ったという。

四表　東西南北の四方。世界あるいは国家の意。

四部衆　比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷をいう。比丘は男の僧、比丘尼は女の出家すなわち尼、優婆塞は男の信者、優婆夷は女の信者である。

四仏知見　開示悟入と同じ意。法華経方便品第二、開三顕一の文で、仏の出世の一大事因縁を説いて、一切衆生にことごとく仏の知見を開かしめ、これを示し、これを悟らしめ、これに入れしめるために仏は世に出現する意。

四分律　小乗律のなかの一つ。仏滅後百年、曇無徳羅漢が上座部律中から肝要な所を抜集した律本である。四度にわたって監修したので四分律の名がある。

四弁八音　四弁は、仏の有する四無礙弁。一に法無礙弁、二に義無礙弁、三に辞無礙弁、四に楽説無礙弁。八音は諸機をして聞法し解悟させる仏の音声、言辞をいう。一に極好音、二に柔輭音、三に和適音、四に尊慧音、五に不女音、六に不誤音、七に深遠音、八に不竭音。

自法愛染　自己の信ずる法に執着して他人の信ずる法を排斥すること。末法の折伏行は決して自法愛染ではない。（教行証御書一二八一㌻参照）

四菩薩　①華厳経の四菩薩は、法慧、功徳林、金剛幢、金剛蔵をいう。②金胎両部の胎蔵界では、文殊、普賢、弥勒、観音をいう。③法華経の迹門では、文殊、普賢、薬王、観音をいう。④本門では法華経涌出品第十五で突然、大地より涌出した地涌の菩薩の代表であり、上行、無辺行、浄行、安立行の本化の四菩薩をいう。

四無礙　一に法無礙・二に義無礙・三に辞無礙・四に楽説無礙。仏の備えている徳の一つで、何らさわりのないことをいう。

四無所畏　仏菩薩が説法するにあたって、四種の無所畏をうるゆえに怖畏するところがなく、勇猛にして安穏であることの徳をいう。仏の四無所畏と菩薩の四無所畏がある。

四無量心　慈・悲・喜・捨の四心。慈は衆生を愛念し、常に安穏の楽事を求めて饒益する。悲は衆生が六道のうちに、種々の心身の苦を受けるのを愍念し、喜は衆生をして楽いにしたがって、歓喜を得せしめんとし、捨は三種（慈悲喜）の心を捨て、ただ衆生を念じて憎まず愛せざるをいう。

四門観別・見真諦同　四門とは小乗の有門、空門、亦有亦空

門、非有非空門をいう。すなわち小乗の悟りを得る修行の方法は四門に分かれているが、真諦を見る、すなわち悟りを得るという点についてはいずれも同じであるということ。

遮会　遮はさえぎり、会は会通するの意。

舎衛国　室羅伐悉底、または室羅伐国、舎婆提城、尸羅跋提等という。舎衛はその訛略。意訳して聞物、聞者、無物不有等という。憍薩羅国の都城であり、その都城の名をもって国名となすともいう。

舎衛の三億　釈尊在世に仏法の広宣流布した舎衛国の九億（九十万）家のうち、三分の一の三億は釈尊の教えを眼のあたりに聞き、三分の一の三億は仏のいることを耳にしたが見たことはなく、また三分の一の三億は見たことはおろか聞いたこともなかったという。したがって全体の三分の一が入信すれば広宣流布といえる。（要語解説一七八ページ参照）

釈迦仏像を本尊としない理由　（要語解説二四四ページ参照）

娑竭羅竜王　八大竜王の一つ。雨を供給する神で、その宮殿は七宝をもって飾られ、天と異なることがないという。

釈子　一往は釈尊の弟子をいう。再往は文底の釈尊たる久遠元初自受用身の弟子。

寂場　寂滅道場に同じ、華厳経の説処である。

釈尊の一生　（要語解説三三六ページ参照）

釈尊の九横の大難　（要語解説五三ページ参照）

釈提桓因王　帝釈天のこと。

迹中化他　本地自行に対する語。釈迦仏法において色相荘厳の仏が世情に随順して法を説くこと。これに対し本地自行とは久遠元初の自受用身が南無妙法蓮華経を説くこと。

折伏　法を弘める方法で破折屈伏の義。（要語解説二九二ページ参照）

迹仏　本仏に対する語。一、教に約すれば迹門の仏をいう。すなわち本門久成の釈尊が垂迹して本無今有の一念三千、十界の理常住を説く仏。二、体用本迹に約すれば、凡夫は体の三身だから本仏であるというに対し、用の三身たる仏を迹仏という。三、諸経諸宗に通じて本地仏に対する垂迹化現の仏。御本仏日蓮大聖人以外はすべて迹仏となる。

寂滅道場　釈尊が華厳経を説いたところ。華厳経巻一に「是くの如く我れ聞きき一時仏摩竭提国寂滅道場に在りて始めて正覚を成ず」とある。釈尊がはじめて煩悩を寂滅して、無上等正覚を得た場所の意味である。

迹面本裏　天台は法華経迹門を面とし、法華経本門を裏として、理の一念三千を説いた。これを迹面本裏という。

迹門　本門に対する語。法華経二十八品のうち序品第一より安楽行品第十四までをいう。迹門の肝心は方便品第二にあり、諸法実相に約して理の一念三千を説き、また二乗作仏を説いている。（要語解説八四ページ参照）

釈門　仏教界。

迹化の菩薩　本化の菩薩に対する語。法華経の迹門までに来至した迹門の菩薩をいう。すなわち弥勒菩薩、文殊菩薩、などがこれにあたる。

寂光土　真の円仏、本仏の住処をいい、本土という。これに対して実報・方便・同居の三土を迹土という。

寂光の本土　娑婆世界が即仏国土であるとのこと。三大秘法の御本尊を受持する者の住処をいう。

遮那　毘盧遮那仏のことで、遮那とは梵語で、遍一切処という義。法身仏をいう。

娑婆世界　釈尊の教化し主領する仏国土の名。娑婆は梵語。勘忍の義。この世界の衆生は十悪に安忍して出離を肯んじないゆえに名づける。

謝表　謝罪状。

捨閉閣抛　法然の選択集にある。念仏一宗を建立せんがために、観経等の浄土三部の経典以外の一切の諸経を廃捨するのに用いた言葉。浄土・易行・正行を用いて、聖道・難行・雑行を捨てよ、閉じよ、閣けよ、抛てと説いて、この四字をもって一切を迷わした。（立正安国論二三ページ参照）

沙弥　沙弥は梵語。旧訳には息慈、息悪、行慈などという。共に悪を止めて慈を行ずるの意である。新訳には勤策男という。男子の出家で、十戒を受けた者の通称をいう。

沙門　僧侶。善を勧め悪を息むるの意。

沙羅林　中インドの跋提河の畔にあり、釈尊は最後にここで涅槃経を説いて入滅した。

舎利　舎利は梵語で身骨、骨分と訳す。このように遺骨等を舎利というときは生身の舎利とか砕身の舎利といい、法体をさすときは法身の舎利等という。

舎利弗　釈尊の声聞の弟子で、釈尊の初成道より数十年にわたって修行してきた十大弟子の一人である。舎利弗は身子と訳し、智慧第一と称された。

十悪　十種の悪業のこと。十善に対する言葉。殺生、偸盗、邪婬、妄語、綺語、悪口、両舌、貪欲、瞋恚、愚癡、以上を十悪という。初めの三は身に行なう三悪、次の四は口の四悪、次の三は心の三悪である。

従因至果・従果向因　従因至果は従因向果ともいい、因より

果に至ること。真実究竟せる成仏の理を顕わせるなかで、特に迹門における説法としては、迷いの衆生も修行の妙因により成仏の妙果を得ることを明かす。百六箇抄（八五五ページ）にいわく「従因至果・中間今日の本迹、像法の修行は天台・伝教・弘通の本迹は中間・今日の迹門を因と為し本門修行を果と為るなり」と。従果向因とは果より因に向かうこと。御義口伝上（七二九ページ）に「末法に至って従果向因の一雨を弘通するなり一雨とは題目に余行を交えざるなり」と。因に向かうとは久遠にたちもどるということであり、百六箇抄（八六三ページ）には「本果妙は釈迦仏・本因妙は上行菩薩・久遠の妙法は果・今日の寿量品は花なるが故に従果向因の本迹と云うなり」またいわく「今日（在世）の本果は従因至果なれば本の本果には劣るなり」（八五五ページ）従果向因は下種独一本門の法門である。信心の立ち場からいえば、御本尊を根本とした場合には従因至果である。釈迦仏法は、八万法蔵から御本尊を見ているから、従果向因である。（要語解説一二八ページ参照）

宗教の五綱　（要語解説一三四ページ参照）

十玄　華厳宗で説く十種の根本原理。智儼の釈による十玄と法蔵の釈による十玄で多少の相違があるが、法蔵の釈によってその名目を示せば、①同時具足相応門　②一多相容不同門　③諸法相即自在門　④因陀羅網法界門　⑤微細相容安立門　⑥秘密隠見倶成門　⑦諸蔵純雑具徳門　⑧十世隔法異成門　⑨唯心廻転善成門　⑩託事顕法生解門である。

十号　仏の十号をいう。天竺の俗法に十名あり、天上は利根なので百名を立てるが、釈尊は人界示現なるがゆえに十号を具す。一に如来、二に応供、三に正徧知、四に明行足、五に善逝、六に世間解、七に調御丈夫、八に天人師、九に仏、十に世尊。以上の十号について世間解を無上士と世間解に開して二となし、仏までで十号を成じ、以上十号の徳を具するがゆえに世尊という、とする説もある。

周公旦　周の文王の子で武王の弟、姓は姫、名は旦という。文王の死後、武王を助けて紂王を討ち、天下を統一し、また武王の早逝した後は、幼い成王をよく助けて周の天下が安泰する基を成した。

鷲子　舎利弗のこと。鷲子とは鷲の子で、舎利弗の眼がこの鳥に似ているところからこの名がある。

十四誹謗　法華経譬喩品の文から十四種の謗法を立てる。一に憍慢、二に懈怠、三に計我、四に浅識、五に著欲、六に不解、七に不信、八に顰蹙、九に疑惑、十に誹謗、十一に

軽善、十二に憎善、十三に嫉善、十四に恨善。（要語解説二九九ページ参照）

十重禁戒　十重の罪を禁じ戒めること。殺生戒、偸盗戒、邪淫戒、妄語戒。酤酒戒、談他過失戒、自讃毀他戒、慳生毀辱戒、瞋不受謝戒、毀謗三宝戒の十戒をいう。

十住心　弘法所立の真言宗の教判。大日経の住心品に基づいて、衆生の心の安住するところに十個の品等を分けて、その思想の高下・優劣を判じたものである。

従地涌出品　（要語解説六八ページ参照）

十誦律　小乗律のなかの一つ。小乗の薩婆多部には八十誦あったが、後に略して十誦とした。

十乗　十乗観法のこと。天台が「摩訶止観」で述べたもの。一に観不思議境、二に起慈悲心、三に巧安止観、四に破法遍、五に識通塞、六に修道品、七に対治助開、八に知次位、九に能安忍、十に無法愛。十境に対してこの十乗観法を修するのである。

十神力　法華経神力品において釈尊は十種の神力を現じて上行菩薩に法を付属している。その十種とは、出広長舌、毛孔放光、一時普教、倶共弾指、地六種動、普見大会、空中唱声、咸皆帰命、遙散諸仏、十方通同。

十善戒　殺生、偸盗、邪淫、妄語、綺語、悪口、両舌、貪欲、瞋恚、愚癡の十事をかたく行じないことを十善戒という。

十大弟子　釈尊の十人の高弟をいう。すなわち大迦葉、阿難、舎利弗、須菩提、富楼那、目犍連、迦旃延、阿那律、優婆離、羅喉羅。（要語解説五二ページ参照）

十大部　日蓮大聖人の重要御書十編をいう。第二祖日興上人の選定されたもので、唱法華題目抄、立正安国論、開目抄、観心本尊抄、撰時抄、報恩抄、法華取要抄、四信五品抄、下山御消息、本尊問答抄の十書。（要語解説二一六ページ参照）

十二因縁　三界における迷いの因果を十二に分けたものである。（要語解説二九ページ参照）

十二入　六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）と六境（色・声・香・味・触・法）であり、入とはその関係を意味する。十二処ともいう。

十二部経　仏教の経文の、形式上の類別を十二に分ける。一に修多羅は長行で長短の字数にかかわらず義理にしたがって法相を説く。二に祇夜は重頌といって前の長行の文に応じて重ねてその義を述べる。三に伽陀は長行を頌せず偈句を説く。四に尼陀那は因縁として一切の根本縁起を説く。五に伊帝目多は諸菩薩弟子過去世の因縁を説く。六に闍多

伽は仏・菩薩の往昔の受生のことを説く。七に阿浮達摩は仏の神力不思議等の事実。八に婆陀は機根の劣れる者のために譬喩をかりて説く。九に優婆提舎は問答論難して隠れたる義をあらわす。十に優陀那は無問自説。十一に毘仏略は大乗方等経典のその義広大にして虚空のごとくなるをいう。十二に和迦羅は弟子等に対して成仏の記別を授けることをいう。

十如是　法華経方便品の略開三顕一の文であり、一念三千の法門の出処である。諸法実相を相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等の十如是として、宇宙のあらゆる森羅万象や依正をあらわした。一瞬の生命を分析して、この十に分けることができるのである。御本尊のことを一念三千というが、十如是というのは、御本尊のお姿を略して説いたものである。（要語解説一八四ページ参照）

十八空　般若経の十八空と、法華経安楽行品の十八空がある。一内空（般若）＝不顚倒（法華）、二外空＝不動、三内外空＝不退、四空空＝不転、五大空＝如虚空、六第一義空＝如実相、七有為空＝不生、八無為空＝不出、九畢竟空＝無所有性、十無始空＝不起、十一散空＝無障、十二性空＝無名、十三自相空＝無相、十四一切法空＝一切語言道断、十五不可得空＝実無所有、十六無法空＝無辺、十七有法空＝無量、十八無法有法空＝無礙。（順不同）以上十八空を一切法空の下に統帰する。日蓮大聖人は一代聖教大意（四〇四ページ）に「般若経・開会の文は安楽行品の十八空の文」と述べておられる。

周武　周の武王で西伯の子。殷を滅ぼして天下を統一し、周と号した。すでに父の西伯は死んでいたが父を推して文王とした。

十不善業　十種類の業因をいうのであって、殺生・偸盗・邪淫は身に行なう三悪、妄語（うそをつく）・綺語（おせじをいう）・両舌（二枚舌を使う）・悪口は口の四悪、貪欲（欲張り）・瞋恚（いかり）・愚癡（ばか）は意の三悪、以上十悪である。

十仏刹・十仏刹塵　仏刹は仏土のこと。十仏刹は十の仏土すなわち十の三千大千世界をいう。十仏刹塵は、すなわちこの十の三千大千世界を微塵にした、その測り知れない数をいう。

従本垂迹　「本より迹を垂る」と読む。本とは本地、迹とは垂迹の意。仏・菩薩が本身は本住の地にあって衆生利益のためにさまざまな境涯に応化身を示して化導すること。

従本垂迹如月現水とは「本より迹を垂れ月の水に現るが如し」と読み、従本垂迹はあたかも月が水に映っているようなものだということ。

十妙　天台が「法華玄義」で述べたもの。迹門に、境・智行・位・三法・感応・神通・説法・眷属・利益の十妙。本門に、本因・本果・本国土・本感応・本神通・本説法・本眷属・本利益・本涅槃・本寿命の十妙がある。

十無上　天親菩薩の法華論に、法華経の七譬・三平等について釈しているのが十無上である。十種無上の義を顕わすといわれ、種子無上、修行無上、増上力無上、令解種無上、清浄国土無上、説無上、教化衆生無上、成大菩提無上、涅槃無上、勝妙力無上のこと。

十喩　法華経は諸経中第一であることを薬王品に十喩をあげて述べている。一山喩・二水喩・三衆星喩・四日光喩・五輪王喩・六四果辟支仏喩・七帝釈喩・八大梵王喩・九菩薩喩・十仏喩で、仏喩の例をあげるならば「仏はこれ諸法の王なるが如くこの経も亦復是くの如し。諸経の中の王なり」と。

十羅刹　法華経陀羅尼品に出ている。日蓮大聖人は「十羅刹女仏道を成ず」また「十羅刹女と申すは十人の大鬼神女・四天下の一切の鬼神の母なり・また十羅刹女の母あり・鬼子母神是なり乃至善鬼は法華経の怨を食す」（日女御前御返事一二四六㌻）と仰せられている。十羅刹女は法華以前にあっては悪鬼であったが、法華経においては善鬼として成仏した。法華経を護持するもの、すなわち御本尊を受持するものを守護する働きを持つ。（要語解説五一㌻参照）

従藍而青　天台の止観にある言葉で「青は藍よりいでて藍より青し」と読む。一般的には青色は藍よりつくられるが、その色を重ねればもとの藍色よりも濃くなる。このことから師匠以上に弟子が立派に成長していかねばならぬとの譬えである。末法今時に約せば、大御本尊の偉大さ、信心の偉大なることをいった言葉である。

十六王子　大通智勝仏が出家した時の十六人の王子をいう。この十六王子は父が出家し成道するのを見て、共に仏所に行って大法を聞くことを請うた。その後仏は、妙法蓮華経を説いて禅定にはいり、八万四千劫を過ぎて三昧よりたって、十六王子を賛嘆して、まさに作仏すべしと告げた。この十六王子のうち、第九が西方の阿弥陀であり、第十六が娑婆世界の釈尊である。御義口伝上（七三四㌻）には「十とは十界なり六とは六根なり王とは心王なり子とは心数なり此れ即ち実相の一理の大通の子なり、今日蓮等の類い南無妙

法蓮華経と唱え奉る者は十六王子なり八方作仏とは我等が八苦の煩悩即菩提と開くなり云云」とある。

授学無学人記品　（要語解説六四ページ参照）

授記　十二部経の一つである。経中において、仏が発心の衆生に対し、当来作仏の記別を授与する部分をいう。また、仏が記別を授けたもうことをいう。

受記品　（要語解説六二ページ参照）

儒教　（要語解説四二二ページ参照）

宿縁深厚　（要語解説二八五ページ参照）

宿業　宿習、宿縁とほぼ同じ意。過去世の身口意の業因により、今世に苦楽の果報をうけることをいう。良い宿業と悪い宿業とがあるが、一般に悪い方の意味に使われる。

宿種　過去世に植えられた仏種。末法の衆生は久遠元初に大聖人の仏法にあって下種をうけた。

宿習　現世に福運をもって生まれたり、苦悩の生活をしなければならないという苦楽の果報は、過去世における善悪の行為が原因となっている。これを宿習という。

受決作仏　仏より記別を受けて仏としての劫・国・名号が決定すること。成仏の印可を与えられること。

授決集　天台宗寺門派の開祖・智証の著二巻。彼が入唐（留学）して学びえた手記を一本として、文を上下に分けて授決集と名づけたもの。

儒家・道家　儒家は孔孟の流れ、道家は老荘の流れをいう。

儒外内　儒教と外道と内道。中国古代の聖人たる三皇が説いた教を三墳といい、五帝の書を五典といって、儒教はこれを源とし、各種流派を生じたが、今日は老荘の道教をも含めて儒教と称せられている。孔子が集大成した。同じく古代インドでバラモンの哲学が隆盛し、その流派が九十五派にも分かれて論争している時に釈尊が出世して仏教を説いた。仏教を内道といいバラモン等を外道と呼ぶ。

守護付嘱　仏の付嘱の三義（弘宣、伝持、守護）の一つ。仏法を護る付嘱なので守護といい、その付嘱の人は帝王であるから帝王付嘱ともいう。仁王経や涅槃経に、この原理が説かれている。すなわち覚徳比丘を護った有徳王はこれにあたる。王仏冥合の実現をめざし総本山富士大石寺を守護し、この原理を実践しているのは創価学会といえる。

主師親　一切衆生は皆、親に育てられ、師匠によって智をみがかれ、主人に養われるゆえに、これを尊敬すべきであると開目抄にある。また、主師親の三徳を備えられた方を仏と申し上げる。「日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり」

（開目抄二三七ページ）と。（要語解説二五四ページ参照）

受持即観心　（要語解説二六三ページ参照）

種子無上　天親菩薩の法華論に説かれている十無上のなかの一つである。法華経の種子の無上であることを説いたもの。

種熟脱　種熟脱の法門は仏法を論ずるにあたって肝要なことである。すなわち、下種し熟し脱するの過程が明らかにされたのは、法華経の迹門化城喩品において、大通下種三千塵点劫の法門が最初であり、次いで、本門寿量品においては、五百塵点劫以来の種熟脱が明らかにされて、師弟の遠近が説き示されている。釈迦仏法においては五百塵点劫の下種より、大通仏および爾前四十余年・法華経の迹門までを熟益として、本門寿量品にいたって脱せしめるのが文上至極の義である。末法においては寿量文上の脱益の仏法は利益がなく、文底下種仏法のみが、末法の衆生を救う利益がある。（要語解説一九七ページ参照）

種姓高貴　生まれながら貴い家柄であるということ。

衆生所遊楽　寿量品第十六の自我偈の一句で「衆生の遊楽する所なり」と読む。御本尊を持つ衆生が、その功徳により遊楽している姿をいう。日蓮大聖人は四条金吾殿御返事（一一四三ページ）に次のように仰せられている。「一切衆生・南無妙法蓮華経と唱うるより外の遊楽なきなり経に云く『衆生所遊楽』云云、此の文・あに自受法楽にあらずや、衆生のうちに貴殿もれ給うべきや、所とは一閻浮提（世界）なり日本国は閻浮提の内なり、遊楽とは我等が色心依正ともに一念三千・自受用身の仏にあらずや、法華経（御本尊）を持ち奉るより外に遊楽はなし」と。

衆生無辺誓願度　「衆生の無辺なるを度せんと誓願す」と読む。四弘誓願の一つ。菩薩が無量の衆生を生死の苦より救い尽くさんと誓うことをいう。四弘誓願とは、衆生無辺誓願度、煩悩無数誓願断、法門無尽誓願知、仏道無上誓願成であって一切諸菩薩に共通の誓願である。

地涌千界　地涌は涌出品第十五において大地より涌出した本化地涌の菩薩。千界とは神力品第二十一で「千世界微塵等の菩薩摩訶薩、地より涌出せる者」等とあり、地涌千界は六万恒河沙の地涌の菩薩をいう。

修禅寺相伝日記　伝教大師の記。二巻。第一巻は止観大旨、第二巻は法華深義を説く。「修禅寺相伝私注」と合して「修禅寺決」という。

須扇多仏　大品若般経に説かれている仏。須扇頭、須延頭ともいう。甚浄または極浄と訳す。菩薩を化導するために仏と

なり、半劫の間菩薩のために法を説き、記別を与えおわって滅度したといわれる。

須陀洹 小乗の聖者の位、四果の一つ。須陀洹は梵語。または須陀般那・窣路多阿半那・窣路多阿鉢嚢という。古くは入流・至流・逆流などと訳し、新しくは預流と訳す。

種脱相対 （要語解説一四三ページ参照）

須達長者 須達は梵語。訳して善与・善給などという。仏在世の舎衛国の長者である。あつく仏法を信じ、祇園精舎を造って仏に奉った。

修多羅 修多羅は梵語。漢語には経と訳す。その説くところ、よく理にかない、機根に合する意。

修多羅黒論、修多羅白論 修多羅とは経のことで、それぞれ不了義経、了義経と同じ意味。

出世間 世間に対する語。世間を出ること。総じて仏法をいう。仏教には、小乗・大乗・権教、実教、種々あるが、要するに世間六道を出ることを説く。声聞乗、縁覚乗等も同様である。まして菩薩乗、仏乗はみな世間を超出する。

出尊形の仏 尊形を出でたる仏という意で、色相荘厳の仏に対して、凡夫そのままのお姿の仏をいう。すなわち、末法の御本仏日蓮大聖人のことである。

出離生死 釈迦仏法では三界六道の生死の迷いを出で離れることであるが、日蓮大聖人の仏法では、生死即涅槃・即身成仏と、あきらかに悟ること。生死は生死の本質の姿、生命の実相をいう。

鷲頭・鶏足 鷲頭は王舎城の東北の霊鷲山のこと。鶏足は王舎城の西で迦葉の入定した所。

儒童菩薩 釈迦仏因位の時の名。瑞応本起経等に説かれる。昔、五茎の蓮華を五百の金銭で買い取り、定光菩薩を七日七夜供養したという。

地涌の菩薩 宝塔品より仏が滅後の弘経を勧進し、大菩薩衆は勧持品で滅後弘経の誓願を立てたが、涌出品にいたって「止みね善男子」とて、諸大菩薩の弘経を制止したとき、突然、大地より涌出した菩薩のこと。釈尊の久遠以来の弟子であり、本化の菩薩といわれる。末法においては、別しては日蓮大聖人が地涌の大導師・上行菩薩の再誕であり、総じてはわれわれをいう。（要語解説一六三ページ参照）

鷲峯・雙林の日月 鷲峯は霊鷲山、雙林は沙羅林で、それぞれ法華経および涅槃経の説所であり、鷲峯・雙林の日月とは、法華経および涅槃経をあらわす。

須菩提尊者 須菩提とは梵語、また蘇部底、須扶提とも書

く。空生・善吉・善業・善現等と訳す。釈尊十大弟子の一人で、舎衛国の長者・鳩留の子。よく空理に通じていたので解空第一と称せられる。

須弥 須弥山のこと。古代インドの世界観であって、世界の中央に須弥山、その高さは水面より八万四千由旬、水底また八万四千由旬、全体の高さは十六万八千由旬という高山があり、これを輪状に囲んで八つの山があり、おのおのの山と山とに囲まれた部分に海があり、そのいちばん外側の山に囲まれた海の中に四州（四つの大陸）がある。東方を弗婆提、南方を閻浮提、西方を瞿耶尼、北方を鬱単越という。月日もこの須弥山を中心として運行するとしている。

須弥山 妙高または安明と訳す。インド古代の世界観で、世界の中央にある山。その周囲に九山八海があり、須弥山の四方に四州がある。南方にある州を閻浮提という。

樹木火 仁王経の七難のうちの第三難・諸火焚焼難の一つ。日照りが続き大気が乾燥して、樹木から火が出る。いわゆる山火事のこと。

修羅と帝釈 観仏三昧経によれば、毘摩質多羅阿修羅王が乾闥婆大王の女を娶って一子舎脂を生み、帝釈はこれを妻としたが、後に舎脂は帝釈を嫉んで父の毘摩質多羅に讒言したので、修羅は帝釈の喜見城を攻めたために虚空から大刀輪が落ち下って修羅の四肢を切り落としたので、修羅はついに遁走し、小身となって阿耨池の蓮の糸孔の中に隠れたという。

寿量品の三妙合論 （要語解説一六六ページ参照）

就類種・相対種 始聞仏乗義（九八二ページ）に「夫れ末代の凡夫法華経を修行する意に二有り一には就類種の開会二には相対種の開会なり」とあり、法華経を修行する根本的意義を明かしたものである。「就類種の開会」とは、すべての衆生が共通かつ本然的にもっている正・了・縁の三因仏性が、三大秘法の南無妙法蓮華経を唱えることによって開発され、仏になれるということである。

始聞仏乗義（九八三ページ）には「其の就類種とは釈に云く『凡そ心有る者は是れ正因の種なり随って一句を聞くは是れ了因の種なり低頭挙手は是れ縁因の種なり』等云云」と。また「相対種の開会」とは、衆生が本来具足している煩悩・業・苦の三道を、三大秘法の御本尊を受持し、題目を唱えることによって、そのまま法身・般若・解脱の三徳と転じて即身成仏する義である。

始聞仏乗義（九八三ページ）には「其の相対種とは煩悩と業と

苦との三道・其の当体を押えて法身と般若と解脱と称する是なり」とある。

霊鷲 王舎城の東北にある霊鷲山のこと。

純円 純は二乗、三乗等の方便をおびないで一仏乗即身成仏の意。円は偏することなく円融円満で欠けるところがないという意。すなわち絶対に成仏できる高い教えをいう。

順縁 折伏をうけてすなおに入信し、この世で功徳をうけ幸福になる者。反対に正法に反対し、罰をうけて、後に帰依する者は逆縁の衆生といわれる。法華取要抄（三三六ページ）に「逆縁の為には但妙法蓮華経の五字に限る、例せば不軽品の如し我が門弟は順縁なり日本国は逆縁なり」とある。（要語解説二九四ページ参照）

順縁広布 逆縁広布に対する言葉。正法をすなおに聞いて信心修行に励む衆生が多い広宣流布の姿をいう。法華経不軽品第二十に説かれるように、不軽菩薩を迫害した者とは逆縁広布を意味し、千劫阿鼻地獄に落ち大苦悩をうけ、その罪を畢え已ってとは逆縁の功徳を示し、後に不軽菩薩の教化をうけ成道したとは順縁広布を示す。大聖人のご在世や第二次世界大戦までは逆縁広布であり、現在は順縁広布といえる。なお大聖人ご在世中においても、法華取要抄（三三六ページ）に「我が門弟は順縁なり日本国は逆縁なり」とある。

順現業・順次生業 この二つに順後業を加えて三時業という。順現業とは現在の世につくった業因が、現在の世に業果となって報いくる業。順次生業とは順次生ともいう。今生の次の未来の世、次の生のこと。今生より来世、来世よりまた次の世へと生まれていくこと。順次に次第し無始無終に連続する生命活動に厳然と因果の理法が存する。順次生に向上と向下の二義がある。向上は正法を受持したための成仏への直道であり、向下は正法誹謗のため無間地獄へ落ちる者の未来世である。順後業とは現在世になした業因が、再来世以後に、果となって現われる宿業。

純陀 釈尊の弟子。大工の子といわれる。釈尊は、純陀の家で入滅し、そのとき、最後の供養を捧げた人といわれる。

章安大師 （要語解説三七一ページ参照）

勝意比丘 過去、師子音王仏の末法の時代に出現した謗法の僧。よく禁戒を護持し四禅四無色定を得て十二頭陀を行じていたが、喜根比丘が師子音王仏の末法に諸法実相の義を説いて世法を捨てなかったとき、その説を喜ばず、衆僧のなかで毀り、生きながら地獄に落ちた。

摂引門 一切の機をおさめて引導し、高きに誘うの門。すな

わち真実の教えに摂引すべき方便の門。

盛焔　阿鼻地獄の火焔の盛んなこと、転じて阿鼻地獄のこと。

勝応身　応身とは衆生を救うために衆生の機根にしたがって応現する仏身をいう。応身には勝応身と劣応身がある。勝応身は、七宝菩提樹下に座して天衣をもって座となし、すぐれた応身を現じ、小身または大身の姿を示す。大乗の初門たる通教の仏身である。（要語解説四八ページ参照）

正観　邪観に対していう。中正真実なる観念・観法・観行・観慧等をいう。また止観の第六章までを方便とし、第七章（第五巻）が正観章となっている。われわれから見るならば成仏ということになる。

貞観政要　唐の史臣・呉競のまとめた書。四十編に分類され、九巻にまとめられている。太宗が賢臣・魏徴等と政事を論じた語を四十門に分けて編録したもの。貞観は、当時の年号。

正勧付嘱　勧め励まして付嘱すること。題目の勧奨である。法華経神力品第二十一で、釈尊は上行菩薩に妙法蓮華経を付嘱し、滅後においての受持を勧め励ましており、天台は文句で、この神力品の結要付嘱の依文を四つに分け「称嘆付嘱、結要付嘱、正勧付嘱、釈勧付嘱」としている。

調機調養　衆生の機根を調え、養い、熟せしむること。低い教えから高い教えへ導くことを調機といい、調機された衆生の機根をよくするため教化し養うことを調養という。すなわち釈迦仏法で法華経を説く以前の四十二年間、はじめ小乗教で誘い入れ、次に方等・般若の教で教導し養成したが、この期間が調機調養である。その後、法華経で成仏の記別を与えた。しかし、末法は直達正観の南無妙法蓮華経のみ功徳がある。（如説修行抄五〇一ページ参照）

承久の合戦　鎌倉幕府が成立してから、武家に政権が移り天皇側に力がなくなったため、後鳥羽天皇を中心として土御門、順徳天皇等が側近とかたらい、近畿東国等の将兵を集めてその機を待ったが、その大事が幕府にもれてむなしく敗れてしまう。三皇はそれぞれ、隠岐・佐渡・土佐の三島に流された。このことについては、日蓮大聖人が、種種御振舞御書（九二一ページ）に「弘法大師の邪義・慈覚大師・智証大師の僻見をまことと思いて……あだみ給いしかば還著於本人とて其の失還って公家はまけ給いぬ、武家は其の事知らずして調伏も行はざればかちぬ」とご教示のように、真言の邪法をもって、倒幕の祈りをしたために、その事がわが身にかえって、敗れたのである。

上宮太子　三十一代用明天皇の第二皇子、聖徳太子のこと。敏

達元年正月一日、手に仏舎利を握り、身より光明を放って厩の中で誕生されたので厩戸太子ともいう。八人の奏事を一時に聞かれたので八耳の王子、または耳聡王子ともいう。南宮上殿におられたので、上宮太子と名づけられ、また日本の聖人であるから聖徳太子というのである。

定共道共　定共戒と道共戒。定共戒は静慮律義とも訳し、三種戒の一つで禅定を修するなかに、自ら防非止悪の徳ある戒。よく色・無色界に生まる、道共戒は無漏律義とも訳し、同じく三種戒の一つで、見惑断の無漏見道の智慧を、自ら備える防非止悪の徳。

昭君　王昭君のこと。斉国王穣の女、漢の元帝の宮女。帝は後宮が多いので絵に書かせ、その絵を見て寵愛した。宮女はみな画工に賄賂を贈ったが、昭君は美貌を恃んで賂しなかった。画工はこれを憎んで醜図にして帝に渡した。後に匈奴が攻めてきて美人を求めたとき、帝は醜図の昭君を行かせたが、辞する折に昭君を見て帝は大いに悔恨したがおよばず、昭君は怨思をいだいて匈奴に行ったという。

貞元入蔵録　唐の徳宗の貞元年中に、僧円照が勅命によって選んだ経巻の種目。

成劫　仏教では世界が成・住・壊・空の四劫を順環すると説く。成劫とは一つの世界が成立する期間。一つの生命が誕生して成長する期間をいう。

定業　生死の苦果を受けるのに定まった業因をいう。これは善悪の二ある。善の定業は必ず楽果を受け、悪の定業は必ず苦果を受ける。また善悪の定業におのおの三種があり、善悪の業を造って、その世に直ちに苦楽の果を感ずるのを順現受業といい、一世を隔ててその果を感ずるのを順次生受業という、そして二世以上を隔て、その果を感ずるを順後受業という。以上ともに定業中の差別である。

可延定業書（九八五ページ）　に「業に二あり一には定業二には不定業、定業すら能く能く懺悔すれば必ず消滅す何に況や不定業をや、法華経第七に云く『此の経は則為閻浮提の人の病の良薬なり』等云云」とある。

定光菩薩　錠光仏すなわち燃燈仏のことで、釈尊が過去に儒童菩薩のとき、五茎の蓮華をこの仏に供養した功徳で釈迦仏となったという。

浄居天　色界の十八天の最上の五天をさす、すなわち無煩天・無熱天・善見天・善現天・色究竟天の五種の天界をいい、阿那含、阿羅漢という悟りを得た声聞の住所とされている。これを五那含天ともいう。

定散 浄土宗で立てる行法で、定善と散善の略。十六観を説き初めの十三観を定善と称し、余の三観を散善という。

商山の四皓 綺里季、東園公、夏黄公、甪里先生の四人をいう。秦の暴政を避けて商山に隠遁した隠君子である。漢の高祖のとき、高祖が如意太子を廃して戚夫人の子・趙を太子に立てようと欲した。如意太子の母はこれを憂慮して張良に謀り、この四人の隠君子を招請して如意太子の補佐役とした。如意太子が高祖に謁見のとき此の四人を従えてはいる。高祖は四人の年齢八十余り威風堂々たる人物を見てこれがかねて崇めている商山の四君子であることを知り、この四人が補佐する太子の廃嫡の不可能なることを悟り、その決意を翻したという。この如意太子が即位して恵帝となった。

生死一大事血脈 生死一大事血脈とは妙法蓮華経の略名である。「夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華経是なり」と。「生死」とは生老病死といって苦しみと訳す場合がある。また生生死死として、旋火輪のように永遠に伝わっていく生命の実体と説く場合もある。この場合の生死とは生命ということである。「一大事」とは妙法蓮華経のこと。「然れば久遠実成の釈尊（御本仏日蓮大聖人）と皆成仏道の法華経（三大秘法の御本尊）と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり」と。御本尊に題目をあげて、永遠の生命を会得することが生死一大事血脈である。また「三世の生死に法華経を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり乃至異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり」と。永遠に御本尊を離れず、和合僧のなかにはいって広宣流布に向かって仏道修行することをいうのである。（要語解説二六九ページ参照）

小止観 天台大師の作。修習止観坐禅法要の異称で童蒙止観ともいう。大師の俗兄・陳鍼のために説いた。具縁・訶欲・棄蓋・調和・方便・正修・善発・覚魔・治病・証果の十章として、止観を修するを明かしている。

正直捨方便 法華経方便品第二の文。法華以外の諸経を廃捨することをいう。釈尊が説く真実の教えは一つであるということを述べているのである。

生死即涅槃 生死とは迷いであり、涅槃とは悟りをいう。生死がそのまま涅槃になって生死の体も涅槃の体も一体不二であることをいう。また、煩悩即菩提ともいう。

生死の河 煩悩に支配された迷いの生活、地獄から天界までの六道を輪廻する生活をいう。

摂折二門　摂受と折伏との二門。摂受は摂引容受の義で、相手の違法を容認しつつ次第に誘引していく化導であり、折伏とは破折屈伏の義で、あくまで相手の謗法を破折し正法に帰伏せしめる化導方法である。このように摂受と折伏は水火のごとく相容れない法門である。しかし、正像年間、熟脱の機根のためには摂受が必要であり、末法には折伏を肝要とする。（要語解説二九二ページ参照）

小邪未覆　小乗教・邪教・未得道教・覆相教の略称。観心本尊抄（二四九ページ）の文底下種三段を明かす文中にあり、一品二半（御本尊）よりの外は小乗教・邪教・未得道教であり、真実を覆いかくす覆相教であるとの意。

生住異滅　四有為相とも名づける。この四相に大小の別がある。大の四相とは①生の相。生命が母の胎内より生ずる。②住の相。世間に長じて住する。③異の相。美少年が白髪の老人になる。④滅の相。命が終わって死ぬ。次に、小の四相とは、刹那の生滅をいう。①生の相。生命は一つの縁にあうと一念が生ず。②住の相。その一念が念々住する。③異の相。次の瞬間一念が変化してとどまらない。④滅の相。対境の縁が変化すると先の一念が滅する。小の四相は色心両面に通ずる。

成住壊空　四劫のこと。宇宙、生命その他一切のものの流転の方軌。たとえば地球の成立は成劫、衆生が住むのは住劫、三災で破壊されるのは壊劫、消滅して空となるのは空劫である。

正宗分　仏経を講ずるについて、総じて、序分と正宗分と流通分とに分けるのを三段分文という。序分とは、まさに説かんとする教義を開明する準備的部分。正宗分とは、その主たる教義開説の部分。流通分とは、その主たる教義の宣伝についての用意を明かした部分である。

小乗・大乗　教法を乗り物に譬え、小乗は小さい乗り物で少数の人、わずかの人を救う教え、大乗は大勢の人全体の人を救う教えである。

清浄法行経　菩薩が応現することを説いた経。儒教と仏教との関係が説かれている。後世の儒学者はこれを偽経という者があるけれども、孔子自身が儒教を仏教の初門となしている。また天台大師、妙楽大師の釈等これを見るべきである。

生身得忍　母より生じた肉体のままで、中道の無性法忍という境涯になったものをいう。無性法忍は無生忍ともいい、不生不滅の実相を忍和して決定安住する位。（総勘文抄

生身の仏　法身の仏に対する言葉。五体をもって実在する仏。

常随給仕　弟子が常に師に随い給仕することで、仏道修行の根本であり弟子の真実の信心の姿である。法華経提婆達多品第十二には、過去の釈尊が阿私仙人に千歳給仕したことが説かれる。また末法では第二祖日興上人が大聖人に佐渡や伊豆でも常随給仕された。

証前起後　天台の文句に、法華経見宝塔品第十一の多宝の塔を釈した言葉である。すなわち見宝塔品で多宝塔が涌現して、多宝如来が「善哉善哉……妙法華経皆是真実なり」と証明したのは前十品の迹門の真実なることを証明したのであり、これを証前（迹門を証するの意）の宝塔といい、次に多宝塔を開かんがために十方分身の諸仏を集め二仏並座して、滅後の弘通を付嘱すべき地涌の菩薩を召して寿量品（本門）を説く起となる。これを起後（本門を起こすの意）の宝塔という。以上のように、多宝の塔は二つの意があり、一はすでに説いてきた迹門を真実なりと証明するため、二には後に本門を説き起こすためである。そして、この証前起後に傍正があり、証前は傍、起後は正である。また本迹二門の証明をいわば迹門は傍、本門は正である。釈尊在世と滅後末法を比較するならば在世は傍、滅後は正である。すなわち証前起後の宝塔というも、まったく末法弘通の三大秘法の本尊を説き起こすためであり、かつこれを証明するために説かれているのである。

浄蔵・浄眼　法華経の妙荘厳王本事品第二十七に説かれている。過去の世に雲雷音宿王華智仏という仏が出現していた。そのときの王が妙荘厳王で夫人を浄徳夫人、二人の子を浄蔵・浄眼といった。浄蔵・浄眼は母とともに仏の教えを信じ父にも信仰するように勧めたが、父の王はこれに反対した。よって二人の兄弟は母とともに大いに仏道修行を励み、ついに父を入信させて仏道を成就することができた。釈尊は、いま法華経の会座にいる薬王・薬上の菩薩が、すなわちその浄蔵・浄眼であると説いている。（要語解説一一三ページ参照）

誠諦　悟り。

青提女　生提女とも書き、目連の母。慳貪のゆえに餓鬼道に落ちた。目連が神通を得て初めてこれを知り、仏に請いようやく救うことができたという。

称歎付嘱　称歎して付嘱すること。付嘱の法体である本門の本尊の功徳を歎ずること。天台は文句に法華経神力品第二

十一の結要付嘱の文を釈して、一に称歎付嘱、二に結要付嘱、三に正勧付嘱、四に釈勧付嘱の四つに分けている。日寛上人は依義判文抄に「初めに称歎付属とは将に之を付属せんとするに先ず所属の法体・本門の本尊の功徳を歎ず故に称歎付属と云うなり」といわれている。

聖徳太子　厩戸皇子、上宮太子ともいう。第三十一代用明天皇の第二皇子。人王三十四代推古天皇のとき、四天王寺を建立し、法華経、浄名経、勝鬘経を置き、大いに仏法の興隆をはかった。

浄徳夫人　法華経の妙荘厳王本事品第二十七にある。妙荘厳王の夫人。二人の子供を浄蔵・浄眼という。（要語解説一一三ページ参照）

浄土三部経　浄土宗、真宗の依経としている無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経の三部経をいう。方等部に属す。

浄土宗の教義　（要語解説一一ページ参照）

浄土の三師　中国浄土宗の祖。曇鸞、道綽、善導の三人をいう。

浄土門　中国浄土宗の祖・道綽の安楽集の文で、聖道門に対する語。道綽は釈迦一切経のうち法華経を除く大小乗教を聖道、浄土の二門に分け、聖道を捨て浄土に帰すべきであると邪義を説いている。

商那和修　商那は衣の名。付法蔵の第三祖で、過去に商那和修が商主として諸の賈客五十人と共に、大海にはいって珍宝を採取せんとした。そのとき、辟支仏の身が重病にかかって苦しんでいるのを見てこれを療治し、心を尽くして看病したところ、ついに病が治って体力充足した。そして辟支仏に衣を供養した。後にそのことが因となって、商那和修は生まれながらにして商那衣を着ており、生々世々に衣は身を離れずにいたのでかくいわれている。（要語解説三三七ページ参照）

聖人　世間、出世間ともに通ずる語で、賢人より優れた場合に用いる。仏法上では仏を意味し、聖人知三世事（九七四ページ）に「委細に三世を知るを聖人と云う」とある。また正しい仏法を弘める僧の意。

小の三災　穀貴、疫病、兵革のこと。大の三災とは火災、水災、風災。

少病少悩　仏の境涯では病気をしても少なく病み、煩悩も少ないという意。

常不軽菩薩品　（要語解説七二ページ参照）

生仏一如　衆生と仏とが一体になること。すなわち妙法によ

って即身成仏するをいう。

正法一千年間の弘教　（要語解説一六九ページ参照）

正法眼蔵　禅宗で引用する「大梵天王問仏決疑経」（これは偽経）に出てくる語。正とは正邪相対の正ではなく絶対中正の心体、法とは心体より顕現する万法、眼とは心体をもって事々物々を照知する能力、蔵とは心体は一切万法を含蔵するのをいうといっている。道元に同じ名の書がある。

浄飯王　釈尊の父で、インドの迦毘羅衛国の城主。提婆達多は従兄弟同士になる。撰時抄（二五七ページ）には浄飯王は釈尊に法を聞き歓喜したことが説かれている。

上慢の四衆　法華経不軽品第二十に出てくる増上慢の四衆のこと、上慢とは七慢の一つ増上慢のこと。四衆とは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷のこと。上慢の四衆は不軽菩薩を迫害し千劫阿鼻地獄に落ち大苦悩をうけたが、逆縁により後にまた不軽に救われた。

証明と舌相　法華経宝塔品に多宝如来が出て釈迦牟尼仏の所説は「皆是真実」と証明し、また神力品では十方分身の諸仏が舌相梵天にいたって釈尊の所説が真実であることを証明している。爾前の諸経でも証明はあるが、法華経とはぜんぜん比較にならない。

正妙二本　正法華経と妙法華経のこと。

杖木瓦石　杖木とは杖あるいは棒などの類、瓦石および瓦礫は、瓦のかけらあるいは石ころなど。法華経の行者が、折伏するときにうける迫害である。

声聞　声聞界、声聞道ともいう。十界、二乗、三乗、七方便の一つ。仏の教える声を聞いて悟る人の意。弟子とも訳す。声聞を生命論の立ち場からいえば、書物を読んである理論をつかみ、理解できたり、先哲の業績を学びとることによって知識を豊富にしたとき感ずる喜び、力の充足を感ずる生命の状態をいう。

少欲知足　少欲は欲望の少ないこと、知足は少を得て満足することを。欲を少なくして足ることをいう。真実の僧のあり方を示すもの。

常楽我浄　釈尊は当時のインドの社会が、現世主義、享楽主義であるのを見て、この世は苦であり、空であり、無常であり、無我であると説いた。そして、このような苦・空・無常・無我の世を捨て、道を求めよ、と説いたのが爾前経である。しかしてこの世は、われも人も国土も、本有常住の実在であって、この世は、われも人も国土も、本有常住の実在であり、常楽我浄と説いたのが法華経には

り清く楽しいものであると開顕したのである。日蓮大聖人は地涌の四菩薩の徳をこの四徳に配せられている。御義口伝上（七五一ページ）に「経に四導師有りとは今四徳を表す上行は我を表し無辺行は常を表し浄行は浄を表し安立行は楽を表す」とある。（要語解説二六七ページ参照）

浄瑠璃 娑婆世界の東方にあるという薬師如来の浄土。

獐鹿 鹿の一種。この種の鹿は他のものに追われて危険が迫るとき、自分だけ助かることを望んで仲間や父母のことは少しも顧みないという。不孝者の譬えに引かれている。

摂論 無著菩薩の摂大乗論を依経とした宗派。後、玄奘の法相宗に属した。

疏記 妙楽の妙法蓮華経文句疏記の略。一般には法華文句記、文句記などともいう。天台の法華文句の注釈書で三十巻。

助行 正行に対する語。正行の功徳を助け顕わす修行をいう。日蓮正宗では唱題を正行とし、方便品と寿量品の読誦を助行としている。方便読誦は所破・借文のためであり、寿量読誦は所破・所用のためである。また助行のなかにも方便を傍とし寿量を正とす。

贖命重宝 大涅槃経十八に説かれた譬えで、人が種々の宝を蔵していれば、もし賊がきて国を侵し、または悪王等にあうときは、その蔵する宝を出してその贖いとして命を助ける。それと同じように、涅槃の法門は命であり、この涅槃常住の法門が没するとき、諸仏の秘蔵たる前三教の法門をもって衆生の外道見を破り、仏性円常の命を保護するということ。

徐君 呉の季札はかつて魯に使して、その途中、徐を通過したが、そのとき、徐の君は、季札が持っているところの宝剣を好んだが、あえてそのことをいわなかった。しかし、季札は心にこれを知り、剣を贈ろうとしたが、上国に使する途中なので贈ることができなかった、帰途ふたたび徐を通過したが、徐の君はすでに死んでいた。季札は心約を重んじて、剣をその冢樹にかけて去ったという。このことによって、剣を愛する人なりと想像されるが詳伝はない。

所化 能化に対する言葉。化導されるもの。人に約せば所化の弟子、所化の衆などといい、所に約せば所居の土、所居の国などという。

疏釈 疏とは、経の文義を注釈することをいう。釈とは、論師、人師の釈した釈義をいう。したがって疏釈とは、経論の文義に注釈を加えた釈義をいう。

初住位の本因と久遠元初の本因　（要語解説二七六ページ参照）

序正流通　教法を論述するときに、序分、正宗分、流通分の三段に分けてその内容を展開してゆく方法。序分は準備段階、正宗分は説法の中心で本懐を述べる。流通分は正宗の法水を流れ通わすの意。

初随喜　法華経修行の最初心の位。分別功徳品に仏滅後の法華経修行の位に五品あるを明かすなかの初めの位。

諸天の加護　（要語解説三二六ページ参照）

諸法実相　「実相は必ず諸法・諸法は必ず十如・十如は必ず十界・十界は必ず身土」といわれるように、すべての現象は一念三千よりでたものであり、一念三千は必ず十如の働きを伴なう。十如はまた十界を離れてはなく、十界あれば必ず依報がある。すなわち妙法蓮華経の当体をいう。

初発心時　華厳経に「初発心の時便ち正覚を成ず」の文を引き、円教の菩薩が初発心の時より正覚を成ずるまでの長遠の修行をさす。

序品　（要語解説五七ページ参照）

尸羅波羅蜜　尸羅とは戒律のこと。六度、六波羅蜜の一つ。持戒の行。

四輪王　金、銀、銅、鉄の四輪王で須弥山の四方にある東西南北の四州を統治する王、すなわち人間世界を統治し善政を布く王等の意。

四論　竜樹の中観論、十二門論、大智度論および提婆菩薩、世親菩薩共著の百論、以上の四つを四論という。

地論　天親の十地経論によって立てた宗派で開祖は慧光、後に華厳宗に包含された。

身口意の三業　身と口と意と三所における所作である。身のなす所、口の語る所、意の思う所、この三に悪を止めて善を修すべきことを教えるのであり、仏道修行においては最も大事なことである。

神功皇后　第十四代仲哀天皇が九州で戦陣に病没せられたので、自ら男装し兵を率いて三韓を征した。凱旋の途中で生まれた方が応神天皇である。

借解品　法華経二十八品の第四で、譬説周のなかの領解段であって、釈尊が前品で三車火宅の譬えをもって、開三顕一の旨を説かれたので、須菩提、迦旃延、迦葉、目連の四大声聞が、初めてその旨を領解し、長者窮子の譬えを説いて領解の旨を述べたのである。（要語解説六一ページ参照）

秦項　秦は秦の始皇帝、項は楚の項羽のこと。

身業読誦　法華経の経文を身で読むこと。すなわち折伏の実

践をいう。大聖人は法華経勧持品の二十行の偈を身業読誦された。

真言三部経　真言宗の依経である大日経、金剛頂経、蘇悉地経をいう。

真言宗　中国密教が空海によってわが国に伝えられ、一宗として独立したもの。つぶさには真言陀羅尼宗といい、また秘密宗、曼荼羅宗、瑜伽宗、陀羅尼宗、三摩地宗ともいう。大日如来、金剛薩埵、竜猛菩薩等と相承して善無畏、金剛智、不空等にいたったと説いている。低級な権大乗の教え。（要語解説一三ページ参照）

真言宗の千二百　真言宗でいう胎蔵、金剛両部の千二百余尊。

身子　舎利弗のこと。

真俗二諦　真諦と俗諦。真諦はまた勝義諦、第一義諦といい、俗諦はまた世諦、世俗諦という。諦はあきらかと読み、諦理、動かすべからざる理性、すなわち真理をさす。理について二諦を分ければ、俗諦は世俗の浅い思想で真諦は真実の深い道理である。

震旦　インドが中国を呼ぶ名。文明国の義であるという。一説には、中国の秦朝の威勢が外国まで響いたので、その名をインドに伝えたのだといい、また玄奘の西域記には「日は東隅に出ず、その色は丹のごとし、ゆえに震旦という」とある。

身土　身は正報で五陰世間・衆生世間、土は依報で国土世間の意。

陳那菩薩　大域竜と訳す。仏滅後一千百年のころ、南インド・案達羅国の人。世親菩薩系統の人で、因明正理門論を著わして新因明を樹立した。すなわち九句によって因の三相を確立し、論式の五支作法を改めて三支作法として、古因明の比論法なのを演繹法として、もって因明の論理的意義に一大革新を与えた。

真如　常住不変かつ平等なる万有いっさいの本体、すなわち南無妙法蓮華経である。法性真如、あるいは随縁真如、不変真如ということばがあるが、すべて、その体は妙法を示すのである。

侵嬈　侵略、他の国にはいり込み占領してこれを思うままにする。嬈はもて遊ぶ意。

心如工画師　華厳経に「心は工なる画師の種々の五陰を描くが如く、一切世間の中に法として造らざることなし」とあり、文意はわれわれの一心があらゆる諸法を形造ることは、あたかも巧みなる画師が種々の画を書いてあらゆる場合

を表現するごときものであると。華厳宗の澄観はこの文を依拠として、天台の一念三千を自宗の義となした。

秦王験偽の鏡　秦の始皇帝が所有していたという鏡で、これに照らされるとその心の中がそのまま明らかにされるといわれる。照心鏡ともいう。

心破作七分　頭破作七分ともいう。精神錯乱の意。

心仏及衆生是三無差別　旧華厳第十巻夜摩天宮菩薩説偈品第十六の如来林菩薩が説いた偈の文であって、すなわち心、仏、衆生とは三法に説かれているが、事実は差別がないという意味である。

新訳の訳者　インドから仏教典が渡来して漢訳されたが、唐の玄奘以前の訳を旧訳といい玄奘から以後を新訳という。

新発意の菩薩　新たに菩提心を起こしたところの菩薩のこと。仏道修行を始めて日浅く、いまだ不退位を得ることができない始行の菩薩のことをいう。

神力品　法華経第二十一の品で、地涌の菩薩が、釈尊の勅命を受けて弘経することを説いたものである。神力品と名づける所以は、深法を付嘱するために十種の神力を現ずるからである。（要語解説七三ページ参照）

神力品の付嘱　釈尊が上行菩薩に対し説いた結要、勧持などの四付嘱のこと。すなわち称歎付嘱、結要付嘱、正勧付嘱、釈勧付嘱をいう。神力品の付嘱は別付嘱ともいい、嘱累品の摩頂付嘱を総付嘱ともいう。

塵労の疇　貪瞋癡をさして塵労という。塵は六塵で労は労倦で塵によって労を成すゆえに塵労という。疇は人の集団。苦しみ悩んでいる衆生のこと。

す

随縁真如　不変真如に対する語。真如とは、中道、法性、仏性、生命等といい、真とは真実のことであり、如とは、そのままありのままの意。随縁真如の智とは縁にしたがって刻一刻と変化してゆく事象に対応した幸福への生命活動のことであり、所詮、仏界を湧現することをいう。また随縁真如は本門で、実践面、応用面である。水にたとえれば水そのものは不変真如の理、波は随縁真如の智である。立正観抄（五三一ページ）に「両眼を開いて五塵の境を見る時は随縁真如なるべし両眼を閉じて無念に住する時は不変真如なるべし」とある。妙法という法則があるということそれ自体は不変真如の理で、それを具現した御本尊は随縁真如の智になる。（要語解説二七七ページ参照）

随縁不変一念寂照　随縁とは随縁真如の智であり、妙法の哲理が生命活動、生活活動として種々の作用を起こすこと。不変とは不変真如の理であり、永遠に変わらぬ絶対的真理、すなわち妙法の哲理である。一念とは生命の究極であり、寂照とは妙法の異名である。（一念寂照の項参照）

随喜功徳品　（要語解説七一ページ参照）

雖讃法華経還死法華心　伝教大師の秀句下、仏説諸経校量勝五の中の文。「法華経を讃すと雖も還って法華の心を死す」と読む。伝教が慈恩の邪義を破折した言葉。法華経を読み法華経を讃嘆していながら、かえって法華の精神を殺し害毒を流している者がある。その誤謬の原因は、法華経も成仏得道ができるし華厳経や大日経等の諸経も成仏得道するという考えである。

随自意　随他意に対する語。すなわち仏の内証の悟りそのままを説き示すこと。環境、機根、状況などに関係なく、仏道の本心のままに自由自在に振舞う境涯。権実相対のときは権教は随他意、法華経は随自意、本迹相対のときは迹門は随他意、本門は随自意、種脱相対のときは文上脱益の法華経は随他意、文底下種の南無妙法蓮華経が随自意となる。諸経と法華経と難易の事（九九一ページ）に「仏九界の衆生の意楽に随って説く所の経経を随他意という譬えば賢父が愚子に随うが如し、仏・仏界に随って説く所の経を随自意という、譬へば聖父が愚子を随えたるが如きなり」と。

垂迹　本地に対する語で「迹を垂れる」と読む。仏が衆生利益のため、種々のところに応化身を示す。初発得道の最初を本地といい、化他面に現われるときに垂迹となる。垂迹は本地の影であり働きとなる。諫暁八幡抄（五八八ページ）に「諸の権化の人々の本地は法華経の一実相なれども垂迹の門は無量なり、所謂跋倶羅尊者は三世に不殺生戒を示し鳶嘴摩羅は生生に殺生を示す、舎利弗は外道となり是くの如く門門不同なる事は本凡夫にて有りし時の初発得道の始を成仏の後・化他門に出で給う時我が得道の門を示すなり」とある。諸仏・菩薩の場合は、釈尊を本地とする垂迹になり、釈尊の場合は、五百塵点劫が本地となり、それ以後にあらわれる仏・菩薩が垂迹となる。しかし、五百塵点劫の当初すなわち久遠元初が顕われると、釈尊の本地が垂迹となり化他のための応身仏となる。日蓮大聖人の場合は、本地は久遠元初の自受用身であり、それ以後の仏、菩薩は五百塵点劫の仏をはじめとして垂迹化他となる。われわれの場合には、その本地は仏の本眷属たる地涌の菩薩であり願っ

て現在のような世の中に出てきたのである。そして、さまざまな姿で信仰活動に励んでいる垂迹の姿である。（要語解説二八八ページ参照）

垂迹化他　「迹を垂れ他を化す」と読む。仏が本地から迹を垂れて他の衆生を化導すること。垂迹とは本地に対する言葉で、仏が衆生利益のため応化身を示すこと。化他は自行に対する言葉で随他意の教えの意。垂迹化他は迹中化他と同意で、本地自行に対する言葉。垂迹化他は歴劫修行の釈迦仏法で、本地自行は大聖人の文底仏法である。

水上輪　水車のこと。

随他意　随自意に対する語。仏が衆生の機根に随ってまた衆生の好むところに随って説法し、真実の門に誘引する教え。ゆえに真実の教えでなく、方便の低い教えである。爾前経や釈迦仏法は随他意の教え、法華経や大聖人の仏法は随自意の教えである。

随方毘尼　毘尼とは戒と釈し、随方とは地方に随うこと。ゆえに大綱において仏教に違わざる限りその形式等は、その国情または地方のしきたりに随ってよいとの戒律。（要語解説三一二ページ参照）

随力弘通　各人の力に応じて全力を尽くして衆生を化導するために仏法を説くこと。（日興遺誡置文一六一八ページ参照）

枢機　扉の金具、かんぬき等のことで、肝要の意。

須頭檀王　略して檀王ともいう。釈尊の過去における因位の修行中における一事跡で、法華経提婆品第十二に説かれた正法を求めるために、王位を捨てて、阿私仙人に従い道を求め、果をとり水を汲み、薪を拾い、食を設けて、身をもって師の牀座となして千歳の間給侍し、その功徳により成仏したという。

数息観　五停心の一つ。出入の息を数えて心想の散乱を停止する観法。

頭陀行　身心を修治し食衣住に関する貪欲等を払い除く修行をいう。釈尊の弟子のなかで摩訶迦葉は難行苦行して頭陀第一となった。

砂村問答　（要語解説四一四ページ参照）

頭破七分　文句記巻四の十双歎の一つ。法華経陀羅尼品第二十四の偈文で、鬼子母神・十羅刹女が法華経の行者を悩乱する者の頭を、阿梨樹の枝のように破るとの誓いを立てた。「心破作七分」ともいい、大御本尊および大御本尊を信ずる人を誹謗する者は、頭がわれ、心（精神）が錯乱し、支離滅裂になるとの意である。大御本尊の右肩の「若

悩乱者頭破七分」の仰せを拝すべきである。

修利槃特　兄弟二人の名。釈尊の弟子でバラモンの子。兄を修利、弟を槃特といい、共に愚鈍で、どちらを呼んでも二人返事をするくらいであったが、釈尊に至心に信敬したため成仏し、法華経五百弟子受記品第八で兄弟とも普明如来の記別を与えられた。

須利耶蘇摩三蔵　須利耶蘇摩は、西域インドの莎車国の王子として誕生した。英才の誉れが高く、大乗を流布した。法華経の訳者・羅什に、大乗経を教えた人として知られている。すなわち羅什三蔵は、須利耶蘇摩三蔵に会って、大乗の化を受けたとき、須利耶蘇摩は「仏日西山に隠れ遺耀東北を照らす、この典（すなわち法華経）東北の諸国に有縁なり、汝慎んで伝弘せよ」と述べたという。そして、須利耶蘇摩三蔵の言葉どおりに、羅什はインドの東北にあたる中国に法華経を渡し、さらにその法華経が、インド・中国より東北にあたる日本の国に伝わってきた。このことは、守護国家論に述べられているが法華経が特に一閻浮提の中でも、日本に弘まり、日本に縁の深いことによせて引用されている。そして、日蓮大聖人は同じく守護国家論（七一ページ）に「東北とは日本なり西南の天竺より東北の日本を指すなり」と決定されている。

せ

西域　さいいきとも読む。中国より西方の諸国の総称。広くはインドをも含み、玄奘の西域記には百三十八国をあげている。別していえばインドを除き、今のトルキスタン、あるいは中央アジアと呼ばれる一帯の地域をさす。（付録地図参照）

聖一　禅宗の僧、臨済宗京都東福寺の開山で名を弁円という。聖一は花園天皇より賜わった国師号、北条時頼に禅戒を授けたといわれる。

西王母　中国における伝説の神女であり、女子で仙人となった者は皆この西王母に従ったという。崑崙の圃閬風の苑にいるといわれ、この苑にある桃の木は三千年に一回実るという。遇い難いものの譬えとして引かれた言葉。

西夏　現在のインドの西北。パミール高原を中心とする一帯の地方をさすものと考えられる。

西施　周代の越の美女。家が貧しく、近くの山で薪を拾い、若菜を摘んだりして老母に孝養を尽くした。また越王勾践に引き取られたが、越王勾践が呉に敗れて後、夫差の許に

送られた。後、夫差は西施に溺れて国を傾けるにいたった。

勢至菩薩　詳しくは大勢至菩薩、または得大勢菩薩という。梵語では摩訶娑他摩鉢羅鉢多という。権経の時は観世音菩薩と対し阿弥陀如来の右の脇士で智をあらわす。法華経では序品の時すでにその名を列し、見宝塔品の時、阿弥陀仏と共に霊山会に参し、常不軽品では、勢至をもって対告衆となした。

星宿変怪の難　星等の天体の運行に異変があったり、彗星が現われたりすること。薬師経の七難の一つ。（要語解説・三災七難の項参照）

性善説と性悪説　（要語解説四三五ページ参照）

斉朝の光統　中国における南北朝の斉・魏の時代の人で南北十師のうち、北地の第三師である。仏陀禅師の弟子となって恵光と名づけられ、国統の任にあったところから光統と呼ばれた。四宗（一、因縁宗、二、仮名宗、三、誑相宗、四、常宗）を立て教判とし、菩提達磨と法論を行ないこれを誹謗したと伝えられる。

静謐　平和、太平、平穏ということ。

清涼国師　澄観をいう。唐代の僧で五台山清涼寺に住し、華厳宗第六祖と称せられ天台の教義を華厳に盗み入れた。

施戒慧　布施・持戒・智慧のことで、六波羅蜜の修行のなかの三つをいう。

世界の益　四悉檀の利益であって、世界の差別に応じてことごとく施し、大歓喜する利益を得せしめるということ。

施開廃の三釈　一切経について、それを法華経の立ち場から、開顕会入するにあたり、施開廃の三重の深義があるのを、施開廃の三重という。また、これを解釈することを施開廃の三釈という。施とは開の準備をいい、廃とは開の結果をいい、開会することを開という。これに迹門と本門との両重がある。迹門は法のうえで、本門は仏のうえで釈し、本迹の六義、また本迹の六釈という。迹門の三義は、為実施権、開権顕実、廃権立実である。本門の三義とは、従本垂迹、開迹顕本、廃迹立本になる。これを蓮華に見るときは、蓮の実を守るために華が覆うのと、華が開いて蓮の実が顕われるのと、華が落ちて蓮のみのるのとの以上の三義に譬えられる。すなわち譬喩蓮華というのである。

施餓鬼　餓鬼に施すという意で、仏力、法力により餓鬼に食を廻施することをいう。南無妙法蓮華経と唱題することが最高の施餓鬼供養になる。

碩徳　高僧、徳望のある人。

是好良薬　法華経寿量品第十六の文。天台では法華経、文底の仏法では三大秘法の大御本尊をいう。「是好良薬とは或は経教或は舎利なりさて末法にては南無妙法蓮華経なり、好とは三世諸仏の好み物は題目の五字なり」（御義口伝七五六ページ）とある。

世親　天親ともいう。釈尊滅後九百年ごろ、北インド健陀羅国に生まれ、バラモンの学者・憍尸迦の第二子。無著菩薩の弟で初め小乗の論師であったが、後、無著に論破され大乗に転じて千部の大論師となった。（要語解説三六七ページ参照）

世世番番の成道　久遠元初において名字凡夫位のまま当体蓮華を証得した釈尊が垂迹化他のために五百塵点劫の昔に本果第一番の成道を唱え、色相荘厳の仏身を現じて衆生を化導してより、その後、世世番番に、すなわち時代時代に順次仏として出現し、八相作仏の姿を現わしたことをいう。（総勘文抄五六八ページ参照）

世尊　仏と同じ。仏の十号の一つ。仏は世界で最も尊い人であるから、世尊と名づける。文上（釈迦仏法）より読めば法華経本門の釈尊、文底より読めば末法の御本仏日蓮大聖人のこと。

雪山童子　雪山大士ともいう。釈尊が過去世に菩薩道を修行したとき、雪山において苦行したので、この名がある。雪山童子が「諸行無常、是生滅法」の偈を聞き、あとの「生滅滅已、寂滅為楽」の半偈のために身を鬼神に与えた物語りは涅槃経にある。

絶待妙　相待妙に対する言葉。彼と此を相対して取捨を定めるものでなく、最も高いところからすべてのものを包含して用いていく立ち場をいう。釈迦仏法では法華経が最高であり、法華経のうえに立ち一切経を開会して用いること。末法では三大秘法の立ち場から一切を開会すること。

刹帝利　古代インドの四姓（四つの階級）の一つである。四姓とはバラモン（祖先の祭礼等を司る宗教族）、刹帝利（王族）、毘舎（平民すなわち農業、商業に従事する階級）、首陀（賤民）である。国王・大臣・武人等の支配階級は、必ず、この刹帝利から出るとされている。

世法と仏法　（要語解説三二四ページ参照）

施鹿林　中インド波羅奈国にある園の名。一般に鹿野苑といわれている。釈尊が寂滅道場菩提樹下で始めて正覚を成じ二十一日間華厳経を説いた後、この施鹿林で憍陳如などの五比丘に四諦を教え阿含経を説法したゆえに小乗仏教の初転法輪の所といわれている。

善財童子　華厳経入法界品第三十九に出る。福城の長者に五百の童子があり、善財は、その一人である。福運あって生まれるとき種々の珍宝が自然に降ってきたので、この名がある。発心して、法を求めて、文殊の所をおとずれたのをはじめとして、善知識を求めて南に行き、百十の城をたずねて、五十三人の善知識に会って、ついに悟りを得たといわれる。また勝熱バラモンの教えを受けたとき身を火聚に投じ菩薩安住三昧を得たという。

前三後三　（要語解説二一一ページ参照）

宣示顕説　はっきり説き示し説き顕わす意。

前四味　爾前経のこと。天台は一代仏教を判じて五時八教を立てたが、そのうち五時とは説法の時によって縦に区分したもの、すなわち華厳、阿含、方等、般若、法華である。これを説明するに涅槃経の五味の譬えを引き、乳味、酪味、生蘇味、熟蘇味、醍醐味としている。前四味とは乳味より熟蘇味までの四味すなわち華厳より般若までをさす。

旃遮女の謗　釈尊九横の大難の一つ。バラモンの旃遮女が腹に鉢を入れて釈尊のところにきて、釈尊の子であると誹謗した。そのとき帝釈がネズミに化けて、衣の裏の鉢をつないでいるヒモを噛み切ったため、鉢が地に落ちて衆人皆歓喜したという。また旃遮女はこのため地裂けて無間地獄にはいったという。

禅宗　中国の梁代のインドの僧・達磨に始まる。中国十三宗、日本十宗の一つ。西天の二十八祖が相伝して達磨にいたり中国の第一祖となり、以来、法脈断絶せずという。「禅天魔の所為」とは、日蓮大聖人の四箇の格言の一つ・その理由は一に教外別伝と称して仏説違背のゆえに、二に不説に執して可説の大化を廃するゆえに、三に凡心を仏なりと誣いて教相を越却するゆえに、四に空見に偏して妙法実相の妙観を没するゆえに、五に久遠長寿の本仏釈尊を遵奉せざるゆえに、その他種々の謗法邪見等がある。（要語解説一二ページ参照）

専修念仏　日本の浄土宗の開祖・法然が唱えた邪義。選択集のなかで「専ら念仏の一行を修する」義にして、他の諸行を修しないのをいう。また五種の正行中、特に称名の一行を正業として専ら修する義とする。

禅定堅固の時　釈尊滅後第二番目の五百年間をさす。すなわち正法時代の後半をいう。禅定とは慮を静めて思惟の行をするということ。

僭聖増上慢　法華経勧持品第十三に説かれる三類の強敵の

第三。末法には法華経の行者を迫害する三類の敵人が競い起こるが、そのうちの最も手ごわい敵。僭とは悪がしこい意。したがって僭聖増上慢とは、世間からあつく尊敬され聖者のように思われているが、内実は狡猾で名聞名利を求め、高慢心をいだき、仏に怨嫉を起こし敵対する者をいう。大聖人ご在世は極楽寺良観、現代では権力者など。

染浄の二法　染法と浄法をいい、染法（邪宗の害毒に染まること）は迷いとなり、浄法（宇宙のリズムに合った生活、妙法を信受した生活のこと）は悟りとなる。悟りはすなわち仏界であり迷いは衆生のことで、この迷悟の二法は二なりといえども法性真如の一理であり、生命の本質である。当体義抄（五一〇㌻）に「法性の妙理に染浄の二法有り染法は熏じて迷と成り浄法は熏じて悟と成る悟は即ち仏界なり迷は即ち衆生なり、此の迷悟の二法二なりと雖も然も法性真如の一理なり」とある。（要語解説二七一㌻参照）

善星比丘　釈尊が出家する以前の子である。出家して仏道を修行し、第四禅定を得、これが真の涅槃の境涯であると思い、後、苦得外道に近づいて退転し、かえって仏法を否定する邪見を起こし、仏に対しても悪心を懐いたため現身に地獄の大苦をうけた。このことから闡提比丘、四禅比丘の名がある。

善神　民族と国土および法華経を守護する神、天照大神、八幡大菩薩等がこれである。

全身の舎利　舎利とは、仏の体、身骨、遺骨、遺身をいう。生身の舎利に全身と砕身の二種があり、埋葬の遺体を全身の舎利、火葬の遺体を砕身の舎利ともいう。また法身の舎利にも全・砕の二身があり、法華経は全身の舎利で余経は砕身の舎利である。

千世界微塵　大地微塵というように無量無数の意を表わす。

旃陀羅　旃陀羅は梵語で主殺人と訳す。獄卒の輩、屠殺者の種類の総名をいう。四姓の外にあって屠殺を業とする者であり、旃陀利ともいう。転じて身分が卑しいということ。

旃檀　インド原産の香木。仏教典にみえる旃檀は白檀科の白檀のこと。

旃檀林　旃檀は法華経に譬え、旃檀林は法華経流布の国土に譬える。旃檀を与楽と訳し、よく病苦を除いて安楽を与えるという意味であるが、これは南インドの摩利山に産する香木である。

善知識　悪知識に対する語。仏道を成ぜしめる同志、先輩等をいう。（要語解説三一二㌻参照）

選択集　法然の著書で「選択本願念仏集」といい、上下二巻で念仏の功徳を説き、法華経を捨閉閣抛せよと書いている。日蓮大聖人は、立正安国論（一四ページ）のなかで、仏法が乱れ、善神が去ることを嘆かれ「是れ偏に法然の選択に依るなり」と厳しく破折なさっている。

千中無一　善導の往生礼賛第四の法華経を誹謗した文である。法華経により成仏する者は千人のうちで一人もないという邪義。

禅天魔　大聖人の四箇の格言の一つ。禅宗は仏法を破壊する天魔の所為たる邪法であるということ。

善導　中国唐代の浄土宗の第三祖・道綽の弟子である。徹底した念仏者となり、ついに気が狂い、柳の枝で首をくくり自殺をはかったが、地面に落ち、十四日の間苦悶して死んだと伝えられている。

善悪無記　三世諸仏総勘文抄（五六三ページ）に「心の外に善無く悪無し此の善と悪とを離るるを無記と云うなり」と述べられている。われわれの生命は善悪無記であり、南無妙法蓮華経も善悪無記である。善とか悪とかいうようにどちらか一方に限定することのできないのが生命である。生命は縁にふれて善悪両様に働く中道一実の当体である。

善男子　普通は仏法を信ずる在家の男をいう。しかし法華経では女人成仏も説くから、男女の別なく仏法を信ずる在家の人を呼ぶ言葉である。

千日尼　阿仏房日得の妻。大聖人の佐渡流罪中、夫の阿仏房と共に大聖人に帰伏し、強盛な信心で塚原三昧堂に命がけで御供養を続けた。大聖人が身延にはいられてから阿仏房を三度も大聖人のところへ送った。千日尼御前御返事（一三一三ページ）

先判・後判　釈尊一代の経教のなかで爾前経のなかで、おのおのの経々の勝劣を判じたものを先判とし、法華経において勝劣を判じたものを後判という。

阡陌　大勢の人々のこと。

千部の論師　一般には、竜樹・天親のこと。論師とはインドの菩薩で論をつくって、仏の教義を解釈し弘めた人。「守護国家論」に「竜樹・天親亦倶に千部の論師なり」といい、摩訶止観に「竜樹の如きは千部の論を作る」といい、また百論疏の序に「天親菩薩は本と小乗の学者として、小乗論五百部を作り、乃至のちまた五百部の論を造る。時人呼びて千部の論主と為す」というのによる。

懺法　懺悔滅罪の法ということ。わが国には、種々の懺法が

行なわれたが、観普賢経に、この懺法の必要と、その方法を明かして「若し懺悔せんと欲せば、端坐して実相を思え、衆罪は霜露の如し、慧日能く消除す」とある。大御本尊に対する懺悔は、大荘厳懺悔といって、最高の懺悔である。

宣明　天皇の言葉。

善無畏三蔵　中インドの僧。唐の玄宗の時中国にはいり、玄宗皇帝の尊信をうけ、大日経を訳し、真言宗の祖となった。

善友　善知識のことで正法を教え、共に修行し、また、正法をたもつように守ってくれる者をいう。

仙予国王　釈尊が昔、閻浮提において大国の王と生まれ、名を仙予といった。そのときにバラモンが正法を誹謗するのを聞いて即座に殺してしまったが、この因縁によってそれより地獄へ落ちなかったという。

そ

麁悪嫉慳　麁は粗（あらい）の義、嫉はねたみ、慳はけち。

雙観経相　無量寿経のこと。方等部に属する浄土三部経の一つ。二巻よりなっているので雙巻経、雙観経という。浄土真宗では大無量寿経ともいう。上巻には阿弥陀の四十八願、下巻には安楽浄土への往生を説く。

荘厳己義　自己の議論を理屈をつけて立派な議論のように飾りたてること。

相似即　天台大師が法華経の円意で立てた修行の位で六即の一つである。三障四魔を粉砕していく人。

相承　相伝、付嘱と同じ。相は相対、承は授承のことで、師弟相対して師より弟子へ、ただ一人の大導師を定めて民衆救済の大法を伝授すること。血脈相承、師資相承ともいう。

増上慢　四慢・七慢の一つ。最高の法および証を得ないのにこれを得たと思いたかぶること。

相待妙・絶待妙　天台の立てた教判。小乗経と大乗経とを比較すれば大乗が勝れ、小乗は劣り、また大乗経のなかで権大乗経は劣り実大乗経である法華経が勝れているというように、各経典を比較して、その勝劣を判ずるのを相待妙といい、最高の法華経、究極は文底下種の南無妙法蓮華経があらわれれば、一切の経教はすべてこの一法に含まれ、一切が南無妙法蓮華経の一法に帰するとするのを絶待妙という。

（要語解説二〇六ページ参照）

相伝　師より弟子に法門を伝えること。相続、伝授、直授などの意味。仏法上、最も大事なことがらである。付嘱、相承と同じ意で、仏法においては師資相承（師匠から弟子へ

の相承）、血脈相承であり、ただ一人の大導師を定めて民衆救済の大法を伝授する。「此の経は相伝に有らざれば知り難し」（一代聖教大意三九八ページ）「伝持の人無れば猶木石の衣鉢を帯持せるが如し」（顕仏未来記五〇八ページ）とある。したがって、日蓮大聖人より血脈付法の相承を受けたものでなければ正しく知ることはできない。それは日蓮正宗のみである。釈尊は上行に、天台は章安に、伝教は義真に、大聖人は日興上人にその所持の法を相伝している。

増長天王　四天王の一人。帝釈天王の外将。法華経陀羅尼品では他の三天と共に法華経の行者の守護を誓っている。南方を守護して、不幸を免離する働きをもつ。

僧統　僧の官職名。日本では、僧都の位にあたる。開目抄にお用いの意は、伝教大師当時の奈良六宗の碩学たる元興寺の護命等をさしたもの。

増道損生　法華文句に「道を高に増し生を尽に損す」とある。法華本門の利益をいったもの。すなわち初住以上妙覚にいたる四十二位において、しだいに中道の智を増し、智によって四十二品の無明を断じ、しだいに変易の生が損減することをいう。

惣の三段　観心本尊抄に説く五重三段のうち一代一経三段と法華十巻三段をいう。三段とは序分、正宗分、流通分のこと。序分とは一経の序論で、正宗分は一経の本論、流通分はすでに説かれた経の趣旨を後代に伝える意である。

総罰　別罰に対する言葉。すべての人がうける罰。総罰の原因は一国謗法にある。（聖人御難事一一九〇ページ参照）国の大疫病と大けかちとどしうちと他国よりせめらるるは

総付嘱　①法華経神力品第二十一における地涌の菩薩への別付嘱に対して、嘱累品第二十二における一切の菩薩等への付嘱をいう。②二箇相承についても総別の付嘱がある。身延相承書を総付嘱書と呼び池上相承書を別付嘱書と呼ぶ。

総別の二義　総とは全体に対する意であり、別とは個々に対する意義で仏法上重要な原理である。御義口伝下（七五二ページ）に「如来とは釈尊・惣じては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身なり、今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり」とあるが、これは一例であって総別の意は種々に使用される。（要語解説二六八ページ参照）

像法一千年間の弘教　（要語解説一六九ページ参照）

草木成仏　草木や土砂等の非情の物質が成仏することをいう。塔婆供養も草木成仏の原理によるのである。（要語解

説二八六参照）

草木世間　三世間のうちの国土世間のことで非情界をさす。

桑門　沙門ともいう。出家して外道、仏道を修行する者を呼ぶ。多くの悪法を破折するとの意。

蒼蠅・碧羅　青ばえと緑色のつたかずら。転じてつまらない平凡の人物をいう。（立正安国論二六ページ参照）

雑乱　大綱を失し中心を失い、本に背き、上下の秩序を乱すことをいう。

雙林最後　仏が涅槃された時と所をいう。雙林は拘尸那城跋提河のほとりの沙羅林のこと。沙羅とは梵語で樹の名。釈尊がこの地において八十歳の二月十五日に涅槃されたのでこの涅槃の時をさして雙林最後というのである。

速疾頓成　即身成仏のこと。

俗衆増上慢　法華経勧持品第三に説かれた三類の強敵の第一。末法に法華経を弘通する者に反対し迫害を加える大衆。

即身成仏　（要語解説二五三ページ参照）

嗢累品　（要語解説七三ページ参照）

麤語　麤は妙に対して「あらい」の意。粗語、意を尽くしていない語のこと。

祖師禅　禅宗を分類した三種の禅の一つ。教外別伝、不立文字の句を立てる禅で、天魔の所為である。

率兜婆　藪偸簸、私偸簸、数斗波、輪婆、塔婆等と書く。もとは身骨を安んずる所に建てられた建造物であったが、わが国では追善供養のために用いる板の塔婆をいう。

蘇武　武帝の天漢元年、平和使節として匈奴へ派遣され、そのまま拘留されて艱難辛苦をなめたが降らず、武帝が亡くなって昭帝の始元六年、十九年目に漢に帰った。後、関内侯の爵を賜わる。

麁法　粗雑な欠漏のある法のこと。妙法に対する言葉。化法の四教中、蔵通別の三教は円教に対すれば全て麁法である。

尊極の衆生　仏のこと。一切の有情のなかで最もすぐれて尊い衆生の意。

撙節　互いに礼儀をもって敬い合うこと。

孫陀梨の謗　釈尊の九横の大難の一つ。釈尊が過去世に浄眼といった時、いまの孫陀梨である姪女鹿相を殺し、辟支仏にその罪を転嫁した因縁で謗ぜられるのであるという。

た

第一義悉檀　四悉檀の一つ。世界、為人、対治の三つが仮の化導であるのに対し、第一義悉檀は真実の教えにはいらし

むるをいう。また第一義・対治悉檀は折伏型、世界・為人悉檀は摂受型といえる。

第一番成道　本果妙の仏である釈尊が五百塵点劫において仏道を成じたことをいい、久遠実成の釈迦如来という。このとき、五時八教を修行し五時八教を説く。

大怨　大怨敵の意。

大覚世尊　釈迦牟尼仏の別称。教主大覚世尊ともいう。

大経　大涅槃経の略名である。法華玄義の文中の語。

体空　通教の当体即空の理をいう。人も物もたえず変化していくもので実体ではない。仮にあるだけという見方である。

体空・但中・不但中の法門　体空とは通教の当体即空の理をいう。人でも物でも絶えず変化していくのだから実体ではない。仮にあるだけだという見方である。但中とは別教所詮の理である。空仮中の三諦のなかで、空仮の二諦を除いてただ中道を論ずるから但中という。不但中とは円教所詮の理である。別教のごとく空・仮を除かねば中道は立たずとはいわず、即空・即中・即仮と中道の理を空仮の二諦に即して説くゆえに不但中というのである。

第九の滅・人寿百歳　二十小劫すなわち二十の増劫減劫のなかで第九番目の減劫中、人寿百歳の時をいう。

体外の権　仏の内証の実相実体の内を体内といい、その外に取り出すのを体外という。華厳経、阿含経等と独立して考えるときは体外の権経である。法華経が説かれた後に会入のうえで用いる権経は体内の権である。

醍醐　醍醐味のこと。五味の一つ。牛乳より精製するもので、濃厚甘美な最上の味をいう。転じて経文の最第一に譬える。天台は五時八教の教判で一代聖教を華厳、阿含、方等、般若、法華涅槃の五時に分け、それぞれに乳味、酪味、生蘇味、熟蘇味、醍醐味に配し、法華経を醍醐に譬え最上の経としている。

太公　太公望のこと。渭陽で釣をしていた時、周の西伯(後の文王)に会い西伯および武王に仕えて大いに勲功があった。

大綱　網目に対する語。一切を支えもつ肝要、大もとの意。成仏得道の教えを説く法華経は大綱であり、得道の文はあっても実義のない爾前経は網目である。(要語解説二一九ページ参照)

対告衆　仏が説法する時の聴衆の代表者で、仏はその人を中心に説法する。釈迦仏法の対告衆は舎利弗や文殊、弥勒などである。

大御本尊への疑難を破す　(要語解説二三一ページ参照)

醍醐味　醍醐の項参照。

帯権隔歴　法華経の円融三諦に対する言葉。帯権とは権を帯する円の意で爾前の円教のこと。隔歴とは離れ隔たっている意で三諦隔歴という。すなわち爾前経は空仮中の三諦は別々に説かれ、しかも権を帯しているとの意。

第三結要付嘱　神力品のなかで、本化の四菩薩に付嘱すること。初めから分段すると、第一に菩薩が命を受く、第二に仏が神力を現ず、第三に要を結んで付嘱するところから第三結要付嘱という。

第三時の教　法相宗では釈尊一代の経々を三時に分ける。すなわち有教・空教・中道教の三つである。有教は差別観を中心に立てた教え、空教は空観を立てた教え、中道教は唯識中道を立てた教えという。

第三の教相　天台が法華経と爾前経との勝劣を判じた三種の教相の一つ。本迹相対たる師弟の遠近不遠近の相をいう。大聖人の第三の法門は種脱相対であり天台の法門の比ではない。

第三類　下種を覚知しない者、未発心の者をいう。過去に大通智勝仏が法華経を説いたとき聞いて信じて得道した者が第一類（不退）、中途で退転し権小の教えに落ちた者が第二類（退大）で、第三類（未発心）はぜんぜん信仰しなかった者をいう。

大士　大菩薩。

大師講　伝教大師の報恩講。叡山で六月四日、大師の命日にこれを行なう。法華八講等を執行して供養す。天台の忌日である十一月二十四日にも報恩謝徳の大師講を営む。

対治悉檀　四悉檀の一つ。敵対治術の義。病に対して治術を施すごとく、教をもって一切衆生の煩悩の重病を除き、本有の菩提心を開き、すなわち仏知見に住ぜしめるのをいう。邪心・悪心を対治すること。

大史蘇由　周の昭王に仕えた人。瑞兆によって仏教の興隆を予言したという。大史は官名、仏祖統記に出ている。

大集経　方等部の経典で、大集部所属の諸経を集成したもの。大集経には、穀貴・兵革・疫病の三災、あるいは解脱・禅定・読誦多聞・多造塔寺・闘諍堅固の五箇の五百歳などが説かれている。

大事の難四度　日蓮大聖人が立宗の三十二歳より五十歳までの十九年間にうけられた四つの難。一、松葉ケ谷草庵の焼き打ち、二、伊豆流罪、三、小松原の法難、四、竜の口の法難および佐渡流罪の四つの大難をさす。「王難すでに二

度に及ぶ」とは第二、第四をさしている。

帝釈 釈提桓因のこと。忉利天の主として須弥山の頂の喜見城に住し他の三十二天を統領す。この天も、また、法華経の会座に眷属二万の天子と共に連なり、梵天と共に法華経の守護を誓っている。

第十八願 阿弥陀仏四十八願中の第十八願、念仏往生願のこと。しかし「唯五逆と誹謗正法の者を除く」とある。

大樹と神通 大樹とは大樹緊那羅所同経四巻、神通とは菩薩行方便境界神通変化経をさす。

大乗起信論 起信論とも略称す。馬鳴菩薩の著。大乗に対する正しい信仰を起こさせるために説かれた仏教書で、唯心論的傾向をおびている。新旧両訳がある。注釈書に法蔵の大乗起信論義記などがある。

大小相対 （要語解説一四一ページ参照）

大進房 下総国出身の門下の長老で、早くから大聖人の門下となる。熱原の法難のときに俗気の強い大進房は名聞名利にとらわれ、日興上人に怨嫉して退転した。滝泉寺院主代行智の奸計にたぶらかされ、長崎次郎兵衛等と共に乗馬で暴徒を指導し大聖人の門下を迫害したが、誤って落馬し死去した。これは法華経の現罰である。

大石寺 日蓮正宗総本山。多宝富士大日蓮華山大石寺という。静岡県富士宮市上条二〇五七にある。開山は第二祖日興上人。本門戒壇建立の地であり、世界最高の聖域である。

胎蔵界の曼荼羅 真言密教の根本両界曼荼羅の一つで、金剛界曼荼羅の智性に対して、理平等、実相法性をあらわしたもの。しかし法華経に比すれば七重の劣である。

退大取小 大乗の信仰を退けて小乗の信仰に落ちることをいう。大通結縁の第二類または舎利弗が修行の途中で退転したことをさす。

大智度論 インドの竜樹が著わした書。鳩摩羅什が漢訳した。大智度論、中論、十二門論、百論を四論という。摩訶般若波羅蜜経を詳しく注釈したもので全百巻。正には小乗教、傍には外道を破折している。

大通結縁 三千塵点劫の昔に大通智勝仏という仏がおり、十六人の王子に法華経を説き、王子は多くの衆生にさらに法華経を説いた。これを大通覆講といい、その説法を聞いたことを大通結縁という。

大通結縁の第三類 大通とは大通智勝仏のことで、法華経化城喩品第七に説かれてある。三千塵点劫という遠い昔に出世された仏である。結縁とは、この大通智勝仏には十六人

の王子があり、この王子が菩薩となって、大通仏の説かれた法華経を弘通した。この第十六番目の王子が釈尊であって、この時にこの釈尊から法華経を聞いた者のことを結縁というのである。第三類とは、この時の結縁の衆生のなかで発心した者と未発心の者とがあり、発心のなかで不退の位にはいった者を第一類といい、退大取小すなわち法華経を退転して小乗経に落ちインドにおいて再び釈尊とあい法華経を聞いて成仏する者、これを第二類という。舎利弗、迦葉、阿難等の三周の声聞がこれである。最後の未発心の者が、第三類であって釈尊在世では得脱できず、正法・像法の間においてほとんど得脱するのである。

大通智勝仏　法華経化城喩品第七で説かれた仏。釈尊以前の三千塵点劫の昔の仏で、第十六番目の王子は釈尊の因位である。大通仏が十六王子の請いに応じて説かれた法華経を、十六王子が、おのおのの国土で覆講し多くの衆生を化導した。これを大通の種子といい、その説法を聞いたことを大通結縁という。（要語解説一〇一ページ参照）

大通覆講　（大通結縁の項参照）

大天　仏滅後百年にインドへ生まれた。自分の母と交って父を殺し、母が、また他の男と交るを見て母を殺し、さらに阿羅漢を殺し、三逆罪を犯して出家し、我見で仏法を乱した。後に仏教界分裂の源となった。

体内体外　仏の内証の実相・実体の内を体内といい、その外に取り出すのを体外という。法華経が説かれた後で、会入のうえで用いる権経は体内の権であり、末法で、三大秘法が建立された後に大御本尊を信ずる立ち場で用いる権経は体内の権である。方便品・寿量品を読誦するのも、体内の方便品・寿量品を読誦するのである。しかし、同じ体内でも、権は実に劣り、迹は本に劣る。体外の権経は邪教であり無得道である。（要語解説二〇七ページ参照）

大日　大日房能忍のこと。禅宗の僧。大日経、大日如来を略していうこともある。

大日如来　真言密教の本尊。梵語で摩訶毘盧遮那仏という。本地法身と加持受用身との二種の身があるとするが究極においては無二無別と説く。胎蔵界と金剛界の大日如来がある。東密では釈尊は大日如来の化身とし、台密では釈尊の異称を大日如来とするが、事実は大日如来は本門の釈尊より七重劣る仏である。

大日の三部経　真言宗の依経で、大日経・金剛頂経・蘇悉地経。

大の三災　小の三災に対する言葉。火災、風災、水災をい

う。小の三災が成住壊空の住劫に起こるのに対し、大の三災は壊劫の終わりに起こる。

提婆達多　釈尊在世に、釈尊をはじめ多くの弟子たちを迫害した大悪虐の人。提婆達多は釈尊に背き、阿闍世太子をだまして父の王を殺させて王位につかせ、また釈尊をも害しようとしたが、後、阿闍世王は仏罰をうけ先非を悔い釈尊に従った。時に提婆達多は王舎城にいたって王に会おうとしたが、王は怒って提婆達多を追放した。提婆達多が憤って門外に立っているとき、蓮華比丘尼が王宮から出てきて提婆達多の謗法を責めた。提婆大いに怒って拳を振って比丘尼を打ち殺した。このとき大地がにわかに裂けて、そのまま地獄の炎の中に落ちたという。後に天王如来という記別を受けている。（要語解説九九ページ・三六四ページ参照）

提婆達多品　（要語解説六六ページ参照）

提婆菩薩　付法蔵第十四の迦那提婆のこと。迦那は片目の意。一眼を天神に供養したため、片目となったと付法蔵経に伝えられる。南天竺の王の前で、諸の外道と法論を行ない、ことごとく屈伏せしめたが、なかに凶悪な外道の一人が恨みをいだき、隙をうかがって提婆を刺したが、提婆はかえってその狂愚をあわれみ、外道を救った。悲嘆にくれる弟子たちに対しては、自分の殺されるのは先業の罪を消すためであるといい終わって死んだと伝えられている。

大悲経　高斉の那連提耶舎の訳で五巻ある。

大白牛車　法華経譬喩品第三に説かれている三車譬喩の一つ。羊車を声聞、鹿車を縁覚、牛車を菩薩に譬えたのに対し、大白牛車は唯一仏乗の法華経に譬えた。縦広五百由旬の車で金の輪、棟は銀、金の縄で八方へつり、八万四千の宝の鈴をつけ、くれないの錦の旛を玉のさおにかけ、欄干には四天王の番をつけ、車内には、あらゆる体の仏菩薩が坐して、帝釈は音楽を奏でている。日蓮大聖人は「直至道場の大白牛車にして其の疾きこと風の如し、所詮南無妙法蓮華経を等一大車と云うなり」（御講聞書八二〇ページ）と。大宇宙を、自由自在に飛びゆく車であり、しっかり信心して、この車に乗り霊山へくるように、と述べられている。

大法印　印は偽りない証として世間で用いているもの。法印とは印のように誤りのない仏法という意で用いる。大法印は真実絶対の仏法の意。観普賢経では法華経を大法印としている。現在は三大秘法の大御本尊が大法印である。

大宝坊・白鷺池　大宝坊は大集経の説所、白鷺池は大般若経の四所十六会の中第十六の説所、これらの会座に種々の仏

土から、無量無数の大菩薩が来集した。

大梵天王　色界十八天の一つ。初禅天の第三の王。初禅天に住して娑婆世界を領す。この天のうちで初禅天の王を大梵天王という。帝釈と共に常に仏の左右にあって仏を助ける。仏の出世の時には最初にきて説法を請う。

大摩訶衍　大乗と訳す。また声聞、縁覚の二乗に対して菩薩をさす。

大慢婆羅門　釈尊滅後正法時代に生存していたバラモンの僧。慢心を起こして外道の三神および釈尊の像を高座の四足として、わが徳四聖にすぐれたりと称していたが、国王に処刑されるにあたり、賢愛論師に請うて罪を減じ、論師はこれを慰問したが、大慢なお論師をののしり仏法僧を毀辱したので、言葉が終わらないうちに大地たちまち裂けて現身に地獄に落ちたという。

平頼綱　平左衛門尉頼綱のこと。終始、大聖人に敵対した鎌倉幕府の実力者。熱原の法難より満十四年目、謀叛の罪で一族郎党すべて滅びた。これ法華の現罰である。

第六天の魔王　魔の主領である。欲界の六欲天（四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・化楽天・他化自在天）の頂上に住む他化自在天王のこと。正法に反対し、われわれの成仏を妨げる働きをなす。

大論　大智度論のことで、竜樹菩薩が大品般若経を釈したもの。百巻あり、四論の一つに数えられる。羅什の訳もある。

他国侵逼難　謗法の国に外国が攻め入る災難、侵略しようと襲ってくる災難。仁王経、薬師経などの三災七難の一つ。

堕在泥梨　泥梨とは、梵語で地獄の意。地獄へ落ちること。

他受用身　仏が衆生を導かれる姿に他受用身と自受用身がある。他受用身とは、菩薩なら菩薩、声聞なら声聞と、相手のために出現して法を説いた仏である。劣応身、勝応身など、世間の人情に順じて現ずる仏は、すべて他受用身である。

多造塔寺堅固　釈尊は、滅後の衆生が、どのような教えによって救われていくか、大集経に五百年ずつ区切って予言しているが、その第四の五百年、すなわち釈尊滅後千五百一年から二千年までをいう。寺や塔が多く建てられ、法華経の迹門の教えによって救われる時代である。

竜の口　神奈川県鎌倉市腰越にある。文永八年九月十二日、幕府は、日蓮大聖人をここで切ろうとしたが、諸天の加護が厳然としてあり、大聖人を切ることはできなかった。これを竜の口の法難という。日蓮大聖人発迹顕本の場所。

多宝如来　東方宝浄に住む仏。多宝如来は菩薩行のとき、誓

願して「我成仏して滅度の後十方の国土に於て法華経を説く所あらば我が塔廟是の経を聴かんが為の故にその前に涌現して、為に証明となって讃めて善哉といわん」といった。この誓願のように、釈迦仏の法華経を説くにあたり善哉善哉と証明している。

他方の国土　娑婆世界以外の国土であって、たとえば東方の金色世界、西方の極楽浄土というのがこれである。

多宝の塔　（要語解説一〇六ページ参照）

多宝仏　法華経宝塔品第十一のとき、多宝の塔に乗って法華経の会座に出現し「皆是真実」と証明する。多宝仏は自ら法を説くことなく法華経説法のとき、十方の国土に必ず出現して真実なりと証明する。

多宝仏証明　見宝塔品において多宝如来が出現し「善き哉善き哉、釈迦牟尼世尊　能く平等大慧、教菩薩法、仏所護念の妙法華経を以って、大衆の為に説きたもう。是の如し、是の如し。釈迦牟尼世尊、所説の如きは。皆是れ真実なり」と証明したのをさす。

多宝涌現　多宝如来が釈尊所説の法が皆是真実であることを証明するために、法華経宝塔品第十一で、多宝仏塔に乗って出現したこと。

多聞天王　四大天王の一つで、毘沙門天王ともいう。北方を護り、一般に人を悩まさしめず、護世と称す。

陀羅尼　総持・能持または呪・密語等と訳す。異説が多いが「法華経」には旋陀羅尼・百千万億旋陀羅尼・法音方便陀羅尼の三種が説かれ、「瑜伽略纂」には法・義・呪・能得忍の四種の陀羅尼が説いてある。要するに、一には一字一語のなかに諸種無量の徳を総持して、治病・滅罪・護法の功徳の力があることをいう。二には無辺の事理や無数の法門を統摂するのをいう。御義口伝下（七七七ページ）に「陀羅尼とは南無妙法蓮華経なり」とある。

陀羅尼品　（要語解説七六八ページ参照）

他力本願　他力とは、神や仏など、自分の力以外の力を認めることで、念仏宗では阿弥陀の本願力をさしていう。阿弥陀仏の願力に依頼するのを他力本願という。御本尊を拝む私たちは、自己の生命を逞しく湧現して生活するのであって、他力本願とは根本的に違う。

達磨大師　中国禅宗の初祖。菩薩達磨道法と訳す。南インドの刹帝利種香至王の第三子である。普通元年中国にはいって武帝に謁したが用いられず、嵩山少林寺にはいり、壁に向かって坐禅した。

弾呵　弾は弾劾、呵は呵責の義。釈尊一代五時の仏経に対する天台の判釈の一つ。方等部の教意であり、方等経（権大乗教）で二乗の性をあばいて責めているのをいう。

但空の理　小乗経で説くところの宇宙観。森羅万象、一切の現象はただ空のみとする考え方。

断常二見　外道の生命観である。断見と常見のこと。断見とは心身ともにこの一生を限りとして断絶し、再び生まれることがないという思想。常見とは心身とも常住不滅であると説くが、鳥は、いつも鳥、人は必ず人に生まれると説いて因果を説かぬ思想。いずれも偏見である。このような見解に六十二種ある。ゆえに六十二断常の見という。

断諸法中悪　法華経方便品第二に「若し人仏に信帰すれば、如来欺誑したまわず、亦貪嫉の意無し、諸法の中の悪を断じたまえり」との文を引いて十界互具を否定する。すなわち仏界の悪を断ずれば仏界に余の九界を具するはずがないことになってしまう。

但中　別教で説くところの究極の理をいう。次第の三諦とも但中の観ともいう。別教では、空仮中の三諦を各別にあらわし、空仮の二諦を破って中諦を説くので隔歴の三諦ともいわれ、十界互具を説かない。ゆえに玄義巻第一に「隔歴の三諦は麤法なり。円融三諦は妙法なり」とあるように、別教の但中の理は法華経の円融の三諦（不但中）に劣る。

断惑証果の二乗　惑を断じて聖果を証得した声聞、縁覚をいう。（観心本尊抄二四三ページ参照）

断惑証理　真智をもって妄惑を施せば真理が現われてそれを証明すること。（当体義抄五一七ページ参照）

歎異抄　浄土真宗の教義の肝要といわれる他力信仰の勧信が八章にわたって和文で書かれている。親鸞の弟子が師の没後に異説や誤解の生じたのを歎き、耳に残る親鸞の言葉や法語をつづったものといわれる。

湛然　妙楽大師のこと。

檀越　檀とは梵語で、旋主と訳す。越とは檀の功徳によって、貧窮の海を越えることを意味している。

檀波羅蜜　六波羅蜜の一つ、布施波羅蜜のこと。

檀弥羅王　北インドの罽賓国の王。邪見にして国中の寺塔を壊し、付法蔵の第二十四の師子尊者を殺した。

ち

竹林精舎　インド五精舎の一つで、摩伽陀国の王舎城の北に

あった寺で、迦蘭陀竹園ともいう。迦蘭陀長者が大竹林の中に精舎を起こし、仏に奉ったもの。

竹林の七賢　後漢末期の不安定な世情を反映して、無為自然の老荘思想があこがれをもたれ、山林に閉じ込もり、大酒にふけり、奔放な談話を交す清談が流行した。竹林の七賢は、この清談の代表者七人、すなわち、阮籍、嵇康、山濤、阮咸、向秀、劉伶、王戎をいう。

智儼　中国華厳宗の第二祖。杜順の弟子、南山の至相寺に住して華厳を弘めた。至相大師と称する。

智者　諱を智顗といい智者大師と尊称し、また天台山に住まれたから天台大師ともいう。中国の天台宗の祖であり、理の一念三千の法門を説いた像法時代の正師である。（要語解説三七〇ページ参照）

地神五代　日本における神代の神、天神七代の後の神である。すなわち天照大神、天忍穂耳尊、天津彦彦火瓊瓊杵尊、彦火火出見尊、鸕鷀草葺不合尊の五代。

中有　四有の一つ。四有とは生有・死有・中有・本有である。すなわち中有とは現在の生を終わり死んでから、来世に再び生をうけるまでの中間をいう。中有の時間は一定しない。

紂王　（殷の紂王の項参照）

中国への仏教伝来　（要語解説三四四ページ参照）

仲尼、顔回　仲尼は孔子で、顔回は孔子の第一の弟子である。

中道実相　あらゆる現象の本質、真実の相のこと。一念三千の妙法のこと。中道とは、法華経で説く三諦円融の原理によって、仮諦も空諦も共にそなえる中諦をいい、あらゆる現象を包含する生命の本質である。実相とは諸法の現象の真実の相をいう。中道実相とは、宇宙と共に永遠に存続する十界互具・一念三千の当体であり、大聖人の顕わされた三大秘法の大御本尊である。

中道主義　最高唯一の思想である大聖人の色心不二の生命哲学を根底とし、生命の尊厳を基調として唯心主義、唯物主義、実存主義等のあらゆる思想を指導し統一し包含し、人類を救済する大哲理。中道主義はまた人間主義ともいえる。

中論　竜樹の作。三論の一つ。

重華　中国大古の舜王のこと。至孝の人であったが、父は頑愚で後婦の意を用い、たびたび重華を殺害しようとしたが果たさず、ついに父は盲になったが、重華は依然孝養を続けたという。良く天下を治めた。古来孝行の手本とされている。（開目抄上一八六ページ参照）

澄観　中国唐代の華厳宗の僧。五台山清涼寺に住し華厳を弘

めた。九朝七帝の師となり清涼国師と号す。

超高　趙高に同じ。秦の始皇帝および二世皇帝の時の奸臣である。皇帝の詔を曲げて、太子・扶蘇を殺して末子・胡亥を立て二世皇帝とし、また多くの忠臣を殺して権力を専らにした。

長舌　仏の御舌をいう。広長舌の略で、舌が広く長く柔らかで、顔をおおって髪のはえぎわまでとどくこと。舌を出すのは、いうことの真実である証拠としたのがインドの習慣であり、神力品第二十一において「広長舌を出して、上梵世に至らしめ云云」また「衆の宝樹下の師子座上の諸仏も、亦復是の如く、広長舌を出し云云」とある。

調達　提婆達多のこと。斛飯王の子で、釈尊の十大弟子の一人である阿難尊者の兄にあたる。また釈尊のいとこにもあたる。学問にも武術にもすぐれていたが、耶輸多羅女を妃にすることができなかったことから釈尊を深くうらんで、三逆罪を犯した。大地が裂けて、生きながらにして地獄へはいったが、法華経で悪人成仏を説かれ、天王如来の記別をうけた。

張良　漢の人。前漢創業の功臣。蕭何、韓信と共に漢創業の三傑と称される。韓を滅した秦の始皇帝を博浪沙（河南）で襲ったが失敗。後、江蘇省下邳の橋上で黄石老人から兵法を授けられ、劉邦が挙兵するや、帷幄に参画し功を立て、漢の統一後、留侯（江蘇）に封ぜられた。

鎮護国家の道場　天子本命の道場とも、王城鎮護の道場ともいわれ、国家安泰のために祈禱し経を読誦するための寺院をいう。この道場は仏法の習いとして王城の丑寅（東北）の方向に建立される。

つ

通教　天台の教判のなかの化法の四教の第二。大乗の初門では、蔵教にも通じ後の別教にも通ずるゆえに通教という。

通力　自由自在に通達する力をいう。神通力ともいう。人間にまねのできないことを通力だとすれば、畜生にも通力があるが、これを拝んでも幸せにはなれない。法華経の寿量品に「如来秘密神通之力」と説かれており、日蓮大聖人は、御義口伝に衆生の一切の振舞いは、ことごとく神通力であり、また、凡夫が即身成仏し、絶対の幸福を獲得するそれ以外の通力はないと述べられている。また唱法華題目抄には「利根と通力とにはよるべからず」（一六ページ）と述べられている。

塚原三昧堂　大聖人が文永八年に佐渡にご流罪、十一月一日に塚原三昧堂につかれ、翌文永九年四月二日まで五か月間住まわれた。その後、四月三日に一の谷に移られた。塚原は佐渡の新穂村にあり、三昧堂は当時、一間四方のあばらやで風雪雨の入り込むひどい所であった。

筒御器　竹筒の形をした器で、水や酒等の液体を入れる食器。秋元御書（筒御器抄ともいう。一〇七一ページ）に出てくる。

犬神人　祇園の奴僕で、平素は沓や弓弦を作って業とし、祭礼のときには、神輿の前に行って道路を清めたり、神輿を警衛したりした。

て

剃頭の師　受戒の師と同じ意。

丁蘭　孝行の人、中国の孝子伝等にある。幼いときに母を失い、十五のとき母を木像に刻み、人々の軽蔑にも屈せず、生母のようにこれに仕えた。

弟子分帳　日興上人の「白蓮が弟子に分与申す御筆御本尊目録の事」のこと。正本は北山本門寺にある。形式は個条書きで内容は弟子分、俗弟子分、女子弟子分、在家弟子分に区別され、御本尊の下付を受けた人の住所、氏名、下付後の信心状態等が記されている。

天界　十法界の一つである。細別して三界二十八天がある。三界とは欲界・色界・無色界である。欲界に、四王天・忉利天（三十三天）・夜摩天・兜率天・化楽天・他化自在天の六欲天がある。色界に、初禅の三天・二禅の三天・三禅の三天・四禅の九天の十八天がある。無色界に、空処・識処・無所有処・非想非非想処の四無色天がある。

伝教大師　平安朝時代の天台宗の開祖。諱は最澄といい、像法時代に法華経を流布し、叡山延暦寺に迹門の大乗戒壇を建立した。（要語解説三七四ページ参照）

天月・池月　天月とは天にある月の実体で、池月とは天月が池に映った影をいい、天台大師が、法華経の本門を天月に譬え、迹門を池月に譬えて、迹門は本門の影であって、本門に劣ることを指摘した言葉である。

諂曲　心がひねくれてへつらうこと。

天竺　インドのこと。月支国ともいい、釈迦仏法が流布した中心地。

伝持付嘱　仏が説いた法を仏の弟子が令法久住のために相伝していくこと。日寛上人は撰時抄文段に、弘宣、伝持、守護の三付嘱を立てている。弘宣付嘱は僧俗一致で、守護付

嘱が在家の者が弘法のために戦うことで、この伝持付嘱は僧が法を正しく伝えることである。

天子魔　三障四魔のなかで、第六天の魔王の所作によるものをいう。三沢抄（一四八七㌻）に「仏にならむとする時には・かならず影の身にそうがごとく・雨に雲のあるがごとく・三障四魔と申して七の大事出現す、殷ひ・からくして六は・すぐれども第七にやぶられぬれば仏になる事かたし、其の六は且くをく第七の大難は天子魔と申す物なり」と三障四魔のなかで、天子魔を、最も恐るべきものであると説かれている。天子魔は、社会生活のなかで権力者の身にはいって、仏道修行の邪魔をするのが特徴。釈尊在世の提婆達多、阿闍世王、日蓮大聖人ご在世の良観、平左衛門等がこれにあたる。（要語解説二九七㌻参照）

顛志問答　（要語解説四一六㌻参照）

転重軽受　涅槃経の文。「重きを転じて軽く受く」と読む。御本尊の偉大な功徳によって重い罪を転じて軽く受け、謗法の罪をことごとく消滅して即身成仏すること。転重軽受法門（一〇〇〇㌻）に「涅槃経に転重軽受と申す法門あり、先業の重き今生につきずして未来に地獄の苦を受くべきが今生にかかる重苦に値い候へば地獄の苦みぱっときへて死に候へば人天・三乗・一乗の益をうる事の候」とある。長い期間で消滅すべき過去からの無量の謗法の罪を、現世に成仏するために軽く消している。（要語解説三〇六㌻参照）

天照大神　「あまてらすおおみかみ」という。高天原の主神で、国土の安全を守る神という。

天親　（要語解説三六七㌻参照）

天神七代　日本神代の最初に天上にあった七代の神で、その名は種々の説がある。一説によれば国常立尊、国狭槌尊、豊斟渟尊（以上三代陽神）、泥土煮尊（陽）、沙土煮尊（陰）、大戸之道尊（陽）、大苫辺尊（陰）、面足尊（陽）、惶根尊（陰）、伊弉諾尊（陽）、伊弉冊尊（陰）（陽陰で一代）の七代。

天台過時の迹　天台が像法時代に弘めた法華経を迹といい、すでに過ぎ去った過去の法で功徳がぜんぜんなくなったことをさす。

天台座主　日本天台宗の管主すなわち延暦寺の管主のこと。第一代座主は義真、第二代座主円澄まではおおむね正しく法を伝えたが、第三代座主慈覚、第四代座主智証から真言の邪義を入れ謗法となった。

天台沙門　天台の弟子であるということ。大聖人は立宗の始めに天台沙門といわれたことがある。しかし佐渡以後は本

朝沙門、釈子日蓮と申されている。大聖人滅後、五老僧は大聖人の御真意を知らず天台沙門と称し幕府からの難を逃がれたのである。

天台宗の教義　（要語解説一七ページ参照）

天台真言宗　台密ともいう。これに三流あり、すなわち伝教を祖とするもの、第四祖慈覚を祖とするもの、第五祖智証を祖とするものである。教義は法華宗と大日経は理同事勝であるとの義を根本と立てた邪義である。

天台大師　智者大師ともいう。中国天台宗の事実上の開祖。中国の南三北七の十師を破り、迹門の法華経を中国に広め、出世の本懐として摩訶止観を説きあかした。三千人の弟子があったが章安に付法した。（要語解説三七〇ページ参照）

天台大師講　大師のご入滅会で、毎年十一月二十四日に行なった。

天台法華宗年分学生式　伝教作の山家学生式の一つ。伝教は叡山に大乗円頓戒の戒壇建立を志し、学生式三篇を上表して許可を請うた。弘仁九年五月十三日、天台法華宗年分学生式を、同年八月二十七日、勧奨天台宗年分学生式を、同十年三月十五日、天台法華宗年分度者回小大式を上表した。この学制によれば毎年二人の学生を選び年分度者として十二年間、止観・遮那の両業を修学させるという制度であった。そして学業成就のあかつきには、各自の能力・適性により、官符をもって登用された。

天王如来　法華経で、罪悪の提婆達多が授けられた、来世の如来号。提婆が天王如来の記別を授けられたことは竜女の成仏と共に即身成仏をあらわしている。

天変地夭　台風、旱魃、落雷、洪水、地震等の自然界の変動によって起こる災害。

転法輪　仏の教を法輪といい、教を演説するのを法輪を転ずるという。

添品法華　法華経六訳三存の一つで、中国隋の闍那崛多と達磨の共訳した添品妙法蓮華経のこと。七巻二十七品よりなる。三存のなかでは羅什三蔵訳の妙法蓮華経が最高で、正法華経も添品法華経も誤りが多く、大聖人も羅什訳を用いられている。

天魔波旬　波旬とは訳して殺者または悪者ともいう。悪魔のことをいう。

天竜　天神と竜神。八部衆（天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽）の非人類のなかに含まれる。天神とは天神地祇、梵天四天等の諸神王衆をいう。竜神と

は、竜王やその部衆をいい、人・国・法などを守るのを職としている。これに反するのを毒竜、悪竜という。

転輪聖王　輪王、また転輪王ともいう。この王身に三十二相を具し、位につくとき天より輪宝を感得し、その輪宝を転じて四方を降伏するので転輪王という。その輪宝に金銀銅鉄の四種あって金輪王は四州、銀輪王は東西南の三州、銅輪王は東南の二州、鉄輪王は南閻浮提の一洲である。現在は立派な指導者はみな転輪聖王といえる。

と

当位即妙　そのままの位が、即仏の位であること。当位とはそのままの位。妙とは妙覚のことをいう。

堂宇　①一般に殿堂、堂ののき。②仏教では、堂は仏像を安んずるところ、宇は経論を置くという意。転じて寺院をいう。

等覚一転名字妙覚　天台宗の口決である宗大事口伝抄（等海集）に「等覚一転、理即に入る」とある。観心本尊抄（二四九㌻）に「本門に至って等妙に登らしむ」とある。日蓮正宗の相伝には「等覚一転名字妙覚」と。すなわち法華経本門文上で等覚位にはいり、一転して本門文底の名字妙覚の位にはいること、すなわち南無妙法蓮華経を悟ったことである。

道鏡　弓削の道鏡。奈良時代の法相宗大和葛木山の僧で、孝謙天皇（女帝）に重く用いられて太政大臣となり法王の位を授与され権勢をほしいままにし、八幡の神託を偽って帝位を奪わんと企て和気清麿に妨げられた奸臣。光仁天皇が即位のとき、その地位を追われた。

当詣道場　「まさに道場に詣る」と読む。法華経普賢菩薩勧発品第二十八に「此の人は久しからずして、当に道場に詣して、諸の魔衆を破し、阿耨多羅三藐三菩提を得」とある。末法においては三大秘法の御本尊を受持するところが道場となる。したがって当詣道場とは即身成仏の義である。

唐虞の国　唐虞とは唐堯、虞舜の二世をさす。羲農の世と同じく繁栄した幸福の世であったという。

同居土　四土（四種の国土）のなかの一つ。凡聖同居土という。凡夫も聖者も同じく住するゆえにいう。同居の穢土（娑婆世界のごとし）と同居の浄土（極楽世界のごとし）とがある。しかしこれは爾前経の説である。

東寺　京都市南区にある真言宗東寺派の総本山。弘仁十四年嵯峨天皇が空海に賜わって真言宗の本山となる。建てられたのは延暦十五年である。

道士　老子や荘子が説いた道教を弘める者。漢の時代に活躍したが、仏教に敗れた。

導師　衆生を正しく仏道に導引する師。大御本尊を絶対に信じ折伏戦に勇敢に邁進していく者が導師である。大聖人は全人類を救う大導師である。

道慈　大和大安寺の三論宗の第三祖。

道綽禅師　念仏の第二祖で中国の陳・唐の時代の人。第一祖は曇鸞、第三祖は善導である。

動執生疑　執着している心を動揺させて、疑いを生ぜしめて会得させる化導の一方法。法華経では涌出品第十五、方便品第二および序品第一で、この化導が行なわれている。折伏等も動執生疑である。（要語解説一五九ページ参照）

東春　妙楽大師の弟子・智度法師の著書「天台法華疏義纘」の異名である。東春とは本来は地名であって智度法師の居所であるところから、その名を取って著書の名としたのである。この書は天台大師の文句および妙楽大師の記の註釈書である。

道昭　日本の法相宗の開祖。欽明天皇の元年に生まれ、後出家し、孝徳天皇の白雉四年に入唐、玄奘から法相宗を学びこれを日本に伝えた。

刀杖瓦礫　刀や杖や瓦や礫をいい、威音王仏の像法において増上慢の四衆が不軽菩薩を迫害したことをいう。末法においては法華経勧持品の予言どおり第一類の俗衆増上慢が法華経の行者を迫害することをいう。

闘諍堅固　大集経の五箇の五百歳のうち、第五の五百歳（五五百歳ともいう、末法のこと）にあたり、釈迦仏法が隠没して争いの絶えない時代をいう。

東条左衛門尉景信　大聖人の折伏弘法に激しく敵対した安房国長狭郡東条郷の地頭。特に文永元年十一月十一日、東条の郷にはいられた大聖人が華房蓮華寺より工藤吉隆の邸宅に移られる途中、小松原で多数の部下を率いた景信に襲撃された。鏡忍房と工藤吉隆は討ち死にし、大聖人も頭に傷をうけられ左の手を折られた。景信はその後まもなく狂死したと伝えられる。

同生同名　人が生まれたときから常に人の両肩にあり、その行動の善悪を記して天に報告し、その人を守護するという同生天、同名天の二神。倶生神ともいう。（同生同名御書一一一四ページ参照）

刀杖の難　法華経勧持品第十三の予言どおりに、末法の法華経の行者が謗法の者に刀や杖で迫害される法難。大聖人の

小松原の法難、あるいは竜の口の法難のこと。

刀杖不加　法華経安楽行品第十四の文。刀や杖で迫害をうけないこと、あるいは諸天善神に守護されることをいう。

刀尋段段壊　法華経観世音菩薩普門品第二十五の文で「刀尋いで段段に壊れなん」とある。七難をまぬかれる功徳をあらわすなかの一つである。

道邃和尚　天台より七代の法孫で、中国の天台の正統を継ぎ、貞元二十年から二十一年にわたって、日本の伝教大師や義真師に、天台法門の奥底を伝えた。二十四歳で具足戒を受け、後に妙楽大師の弟子となり、「止観」と「弘決」を付嘱され、各地で正法を弘修に伝えて死んだ。（要語解説三七三ページ参照）

刀量　刀は刀斗すなわち柄のついた鍋をいう。この星座の形が柄のついた鍋に似ているのでこの名がある。

道宣　中国の南山律宗の祖。南山律師ともいう。隋の開皇十六年乾封二年、七十二歳まで生存す。十五歳で出家し、智頴律師によって法を受け、後、智首に従って律学を学んだ。行事抄を著わし、また玄奘の翻経を助けた。

道善房　安房の国清澄寺の住僧。大聖人の幼小の剃髪の師匠である。兄弟弟子の浄顕房と義浄房の二人は入信したが、道善房は憶病で晩年に心をひかれるものがあったが、保身のため念仏を離れることができず、建治二年六月、一生を終わった。大聖人は弟子の民部日向をつかわし報恩抄をもって清澄寺に向かわせ故道善房の御墓の前で拝読させた。

同体異心　異体同心に対する言葉。体は同じで心が異なること。（異体同心事一四六三ページ参照）

東大寺　奈良市にある華厳宗の総本山。聖武天皇が天平十五年に造立した。

当体蓮華　総じては宇宙の森羅万象、一切の現象が当体蓮華であり、妙法蓮華である。別していえば、日蓮大聖人の仏法を修行する私たちのみが当体蓮華であるが、さらに別しては、日蓮大聖人が当体蓮華である。当体義抄（五一〇ページ）に「問う妙法蓮華経とは其の体何物ぞや、答う十界の依正即ち妙法蓮華の当体なり……而も権教方便の念仏等を信ずる人は妙法蓮華の当体と云わる可からず実教の法華経を信ずる人は即ち当体の蓮華・真如の妙体是なり」云云とある。十界三千の妙法の当体をただちに蓮華と名づけるゆえに、当体蓮華という。すなわち、これは宇宙の森羅万象の当体は、ことごとく妙法であるを蓮華といい、その当体蓮華とは森羅万象をいうのである。一切衆生の胸間の八葉を

蓮華と名づけ、これを当体蓮華という。この八葉の蓮華には二つの意味がある。その一つは、われわれの生命それ自体が妙法蓮華であるということである。二つには、われわれの生命自体が妙法蓮華即当体蓮華であるということを、われわれの肉体の中から見いだしたことである。（要語解説二四七ページ参照）

唐の東・羯の西　唐は中国・羯は沿海州の一帯をさすと考えられる。すなわち唐の東・羯の西とは日本国をさす。

塔婆　死んだ人の身骨を安んじて、祭祠する建て物。日本では、塔形の木標の呼び名となっている。起塔供養の儀を模して、死者の冥福を回向する標としている。

刀兵劫起　兵乱が起こること。

当分跨節　当分は、そのままそこでの意。跨節は、その一関一節にまたがって一重立ち入りたるところの意である。同じく第一というも当分の第一か跨節の第一かを見きわめなければならない。

東方如来　薬師如来のこと。その国土が東方浄瑠璃世界であるので、このように呼ぶ。日本では薬師如来への信仰は奈良時代の後期に一般に弘まっていた。この薬師如来は法華経本門の釈尊の分身であり、三大秘法の御本尊に対しては垂迹化他の仏となる。

東方の鷲王　鷲王は仏の異名、すなわち薬師如来である。

東密　弘法が立てた真言宗のこと。台密に対するもの。

等妙　別教で立てる五十二位のうち、五十一位が等覚で第五十二位が妙覚で仏果の位となる。

同名同生の天　倶生神ともいう。同生同名御書（一一一五ページ）に「人の身には同生同名と申す二のつかひ（使）を天生るる時よりつけさせ給いて影の身に・したがふがごとく須臾も・はなれず、大罪・小罪・大功徳・小功徳すこしも・おとさず・かはる・かはる天にのぼて（上）申し候と仏説き給う」とある。

道門増上慢　法華経勧持品第十三に説かれた三類の強敵の第二。邪宗の僧が爾前権経に執着して法華経の行者を誹謗し敵対して迫害すること。

動踰塵劫　通教の菩薩の修行の時間をいう。この教の菩薩は五十二位のうちの第七地に見思を断ずるが、断じ尽くせば三界に生ずることができないから、第八地、第九地のときに誓って断じた残りの煩悩の習慣性（習気という）をたもって三界に生じ、衆生を化導する。その間に「動もすれば塵劫（長い期間）を踰ゆる」をいう。

当来の世　未来世。

忉利天　欲界六天の第二天で、帝釈天は、この天の主である。この天は須弥山の頂にあり分かれて三十三天となる。

時　（要語解説一三七ページ参照）

富木常忍　（要語解説三八七ページ参照）

得一　徳一とも書く。平安時代初期の法相宗の僧。初め興福寺の修円について法相を学び、常陸の筑波山等を開いた。伝教大師との間にしばしば法論をたたかわし、「中辺義鏡」「恵日羽足」等の著書をつくり、法華経を誹謗し、伝教大師を難じてついに舌が八つに裂けて死んだと伝えられる。「得一云く」等の文は中辺義鏡にあるといわれている。

犢子　付仏法の外道の人名。小乗経を学び小乗の理に迷って破仏法の説を立てた。

読誦雑行　浄土宗の邪義で、五種の雑行の一つ。往生浄土の経以外を読誦すること。（立正安国論二二ページ参照）

読誦多聞堅固　釈尊滅後の衆生が、いかなる教えによって救われていくかを予言された大集経の五箇の五百歳のうち、第三の五百歳（釈尊滅後千一年～千五百年）にあたり、経文を読んだり、講説を聞くことが盛んな時代をいう。

徳勝童子　釈尊が王舎城に乞食をしたとき、土の餅を供養した。その功徳によって、釈尊滅後百年に阿育大王と生まれたという。付法蔵経、阿育王経等に説かれている。

徳政　君主・宰官等が自らの財を貧民に施し、あるいは富豪として慈善を行なわしむるをいう。

禿人　禿とは髪毛のない人、食うために出家した偽坊主をいう。涅槃経金剛身品にある言葉。

徳薄垢重　寿量品第十六に「薄徳の人は善根を種えず」と説き、また「小法を楽える徳薄垢重の者」というのがこれである。すなわち、善根のない、罪業の深い者の形容。

毒発等の一分　毒が体内にあればいつ発して死ぬかもしれないところから、爾前経を聞いて過去世の法華の下種を覚った者を毒発の一分と譬えた。

得無生忍　無生忍の悟りを得ること。無生忍とは無生無滅の理を認知して決定安住する位。初地、初住あるいは七、八、九地の位にはいった菩薩をいう。

杜順　隋の文帝、唐の太宗より崇敬をうけ、華厳法界観門一巻、忘尽還原観一巻を著わして華厳宗を弘めた。

都率天　六欲天の一つ。天界二十八天のうち、欲界第四天のこと。弥勒は補処の菩薩として、この天にありとされている。

都率の内院　天界二十八天のうち、欲界第四天の名。都率、都率陀、都率哆、都術、都史多、覩史多、闘瑟哆、珊都史多等と称する。これが天処、内処の二処に分かれ、その内院を弥勒菩薩の浄土とし、外院を天界の衆生の欲楽する所としている。この弥勒菩薩の浄土を都率の内院という。これをまた都史多天宮とも呼ぶ。

独覚　縁覚に同じ。仏法の滅亡した世に出て先世の因縁により自ら無常を観じて空理を悟る者をいう。これに二種類あって、一は単独にして伴侶のないのを麟喩独覚といい、二に伴侶があって同一の独覚を得るものを部行独覚という。

毒鼓の縁　毒鼓とは毒薬を塗った太鼓のこと。折伏をうけてすなおに入信し、功徳をうける者は順縁であり、反対して、ついに地獄の相で死んでいく者は逆縁である。謗法の罪によって、いったんは地獄へ落ちても、御本尊に縁をもった功徳によって、将来、必ず、その罪を滅し終えて、再び御本尊に巡り会い、成仏する。これが逆縁の衆生であり、毒鼓の縁という。教機時国抄（四三八㌻）に「謗法の者に向っては一向に法華経を説くべし毒鼓の縁と成さんが為なり、例せば不軽菩薩の如し」とある。

兜羅綿　綿花のこと。柔軟な繊毛より成る綿のこと。非常に柔らかい譬えに用いられている。

頓教　化儀の四教のうちの一つ。頓とは、速やか、ただちにの意。すなわち誘引の手段をとらず率直に大乗を説くのを頓教という。

貪瞋癡の酒　貪瞋癡の三毒が衆生の心を惑わすのは、あたかも酒が、人を酔わせ、本心を奪ってしまうようなものであると、三毒を酒に酔うのに譬えた。兄弟抄（一〇八一㌻）に出ている。

曇無懺　中インドの人で法豊という。曇無懺とは梵語。十六歳で出家し、達磨耶舎にしたがって学んだが、聡敏で群を抜いていた。初め小乗を学び、後に大乗に帰依した。大般涅槃四十巻を訳したほか、金光明経、大集経などの諸経を訳したが、梵本を求めて行く途中、四十九歳にして害せられた。

曇鸞　中国南北朝時代の浄土宗の開祖である。北魏孝文帝の承明元年、雁門で生まれ、五台山で出家した。「観無量寿経」を菩提留支から受け、その修行に励み、魏主より神鸞という号を授けられた。大いに浄土教の弘布に努めたが、後、汾州の玄中寺に住し、興和四年、六十七歳で死んだ。真宗では、七祖中第三祖と立てている。「往生論註」を

著わす。

な

泥洹の夕　最後の説法の時ということ。泥洹とは涅槃寂滅と同じ。

内外の賊起り　自界叛逆難を示す。すなわち内とは内戚（父方の親戚）外とは外戚（母方の親戚）であるから、父子・兄弟・夫婦の間で互いに争うことをいう。仁王経にある。

内鑑冷然　心の中ではじゅうぶん知っているが外にいい出さないこと、すなわち竜樹・天親は一念三千の法門を自ら知っていたが、他人に対して説法することはなかった。「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知ってしかも・いまだ・ひろいいだ拾出さず云云」（開目抄上一八九㌻）

内薫外護　一切衆生の生命に内在する仏性が自己の内から動き出し薫発して、仏性をおおい隠すもろもろの妄念を払いのけて顕現することを内薫といい、この内薫は自己を護り助けて成仏の境涯を悟らせるから、これを外護という。

内外相対　（要語解説一四一㌻参照）

内証の寿量品　三大秘法の事行の一念三千の南無妙法蓮華経をいう。文底の寿量品のこと。

名越家　北条朝時一家のこと。執権・北条義時の次子、名越に住していたので、名越殿といい、その家を名越家と称する。長狭郡東条の郷の領主である。朝時の妻を大尼御前、名越の尼ともいい、その孫、公時の嫁を新尼という。大尼より新尼の方が信心が強かった。

七つの畏るべき難　仁王経の七難をさす。すなわち、日月失度難、衆星変改難、諸火焚焼難、時節反逆難、大風数起難、天地亢陽難、四方賊来難。

那由佗劫　インドにおける大数の名目で極大で数えることのできない数をいう。那由佗は阿由多の百倍の数といわれ、万億とも千億とも数千万ともいう。劫は長時の意。

那羅延　那羅延は梵語で、那羅延那ともいう。慧琳音義第六に「那羅延は欲界中の天の名なり、一に毘紐天と名く、多力を求めんと欲する者、承事供養し、もし、精誠祈禱せば、多く神力を獲るなり」とある。弘法は雑問答に「大日経こそ、余教で救うことができない者も救う。それは、大那羅延力があるからだ」と邪義を述べている。

南閻浮提　須弥山の四州のなかで南に位置するから南閻浮提という。この地球上、全世界をさす。

南岳大師　中国南北朝時代の法華経の持者で、天台の師にあたる。慧文禅師に法を承け、天台智者大師に伝えた。武津の人で、出家後は常に法華経を誦し、あるとき法華三昧を開悟した。陳の光大の初、南嶽に移り、大建九年に、端座したまま六十三歳で入寂した。そのときの相は、身は柔らかく、顔色は生きているような成仏の相であったといわれている。著書には「四十二字門観」「法華安楽行儀」「立誓願文」などがある。（要語解説三七一ページ参照）

軟語　やわらかい語。

南三北七　中国南北朝時代に江南地方には三派、江北に七派合わせて十派に仏教が分かれていた。玄義巻第十上には天台大師がこれらを打ち破っている。

難信難解　法華経法師品第十に「我が所説の経典、無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説かん。而も其の中に於いて、此の法華経、最も為れ難信難解なり」との文をさす。易信易解に対する語で、一応の信解ではおよびもつかないほどの甚深の義をいいあらわしている。

難陀　①孫陀羅難陀。父は浄飯王で母は摩訶波闍波提比丘尼であり、釈尊の異母弟である。②唯識十大論師の一人。

南斗　二十八宿中、北方の斗宿に属する。南と呼ばれるのは夏秋の間は南方に見えるゆえである。この星に異変があると天子に憂事が起こるといわれる。

南都　京都を北都というのに対して、南都は奈良。

南都北嶺　南都は京都に対して奈良をいう。東大寺・興福寺・法隆寺・薬師寺・大安寺・元興寺・西大寺を南都七大寺という。京都の北にある比叡山を北嶺という。

南都六宗　奈良を中心として行なわれた華厳・法相・三論・倶舎・成実・律の六宗。伝教大師がこれ等を論破して天台宗に統一した。

に

二界八番　法華経の説法の座に連なった三衆（声聞衆・菩薩衆・雑衆）の第三の二界八番の雑衆。二界とは欲界と色界。八番とは①欲界天衆、②色界天衆、③竜王衆、④乾闥婆衆、⑤阿修羅衆、⑥緊那羅衆、⑦迦楼羅衆、⑧人王民衆。詳しくは法華経序品に名が連ねてある。

二経一法　法華経と般若経はその名は異なっているが、同じ一法であるという。中国三論宗の開祖・吉蔵のいった邪義。

二教論　弘法の著で邪義を説いている。顕密二教論という。

釈尊の説く顕教は劣り、大日法身の説く金剛・胎蔵両部の密教はまさると論ずる書。

肉眼　五眼のなかの一つ。肉眼・天眼・慧眼・法眼・仏眼を五眼という。肉眼は普通の人間の眼、天眼は天界所具の眼で、近くでも遠くでも昼でも夜でも、物事を見ることのできる目で、人間界にも時々これを有する者がある。慧眼は二乗の人空無相の理を達見する智慧の眼で、われわれ凡夫においては深い知識体験にもとづく物事の判断力、法眼は菩薩が諸の仮名の法に達してあやまらず、一切衆生を度するために法門を照了する智慧の目で、われわれにすれば仏教の法則のうえから一切の事物を判断する力、仏眼は三世十方にわたり一切の事物を見とおす仏の眼。

日向記　御講聞書ともいう。大聖人が身延で法華経の講義をされたのを六老の一人、日向が筆録したもの。日興上人の御義口伝よりも格段に劣る。

而強毒之　「而も強いて之を毒す」と読む。天台大師の法華文句にある。妙法を聞くのを好まない者に対しても、強いてこれを説いて毒心を起こさせること。毒心というのは貪瞋癡の三毒で、なかでも地獄の因である瞋恚をいう。文句には釈尊の教え方と、常不軽菩薩の教え方とを比べて、而強毒之のゆえんが説かれているが、反対する者も、毒鼓の縁をむすんで、必ず御本尊にあえるという原理である。

二箇相承　（要語解説三五七ページ参照）

二箇の諫暁　提婆品第十二における二大法門をいう。一には釈尊の弘経・提婆達多の成道、二には文殊の通経・竜女の作仏である。悪逆の限りを尽くして現身に地獄に落ちた提婆達多が、釈尊の仏法によって成仏したことは、煩悩即菩提の現証であり、竜王の女が即身成仏したとは、竜女成仏（女人成仏）を説いたものである。いずれも、衆生に対し、法華経の救済力の偉大さを示し、感奮興起させる大諫暁である。

二箇の大事　開目抄にある法華経の二箇の大事とは、一には迹門理の一念三千、二には本門事の一念三千をさす。

二十逆罪　主師親に背く二十の大罪。すなわち背主の八逆罪（謀反・謀大逆・謀逆・悪逆・不道・大不敬・不孝・不義）と背師の七逆罪（出仏身血・殺父・殺母・殺和上・殺阿闍梨・破羯磨転法輪僧・殺聖人）と背親の五逆罪（殺父・殺母・殺阿羅漢・出仏身血・破和合僧）の合わせて二十の逆罪。

二十行の偈　法華経勧持品第十三の偈文。法華経の虚空会で八十万億那由佗の菩薩が、仏滅後に三類の強敵の大難に耐

えて法華経の弘通を誓言した文。

二十五有　三界六道を二十五種に分けたもの。欲界の四趣（地獄・餓鬼・畜生・修羅）、四洲（東弗婆提・西瞿耶尼・南閻浮提・北鬱単越）、六欲天（四天王・三十三天・夜摩天・兜率天・化楽天・他化自在天）と、大梵天と色界の四禅（初禅天・二禅天・三禅天・四禅天）と無色界の四天（空処・識処・無所有処・悲想非非想処）と無想天と、那含天とを合して二十五である。これを有とする。法華経の薬草喩品第五に「破有法王、出現世間」とあるように、この有を破したのが、仏法である。

二十五法　摩訶止観の第六方便章に説く二十五の方便である。すなわち第七正観章にはいる前に観心の完全を期するため、心身を調え定慧を磨く等の方便である。一、具五縁（持戒清浄・衣食具足・閑居静処・息諸縁勝・近善知識）二、呵五欲（色・声・香・味・触）三、棄五蓋（貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑）四、調五事（調心・調身・調息・調眠・調食）五、行五法（欲・精進・念・巧慧・一心）

二十八宿　二十八の星座の名。東西南北に七つずつある。東方は角・亢・氐・房・心・尾・箕、北方は斗・牛・女・虚・危・室・壁、西方は奎・婁・胃・昴・畢・觜・参、南方は井・鬼・柳・星・張・翼・軫である。

二十四字　不軽菩薩の説いた二十四字の法華経。常不軽菩薩品第二十に「我深敬汝等、不敢軽慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、当得作仏」とある二十四字を指す。

二十四番勝劣　日蓮大聖人の仏法が天台の仏法より勝れていることを、二十四の点から述べたもの。（本因妙抄八七五ページ参照）

二種の生死　二死ともいう。分段の生死と変易の生死を合わせていう。生死とは苦しみの意と生命流転の実相をあらわす意とのこと。分段の生死とは、前者で三界・六道の苦しみ悩む状態。変易の生死とは、後者で分段の生死を変え改めた声聞・縁覚・菩薩等、聖者の生死である。

二聖　法華経陀羅尼品の会座で、法華経守護を誓った薬王・勇施の二菩薩をいう場合と天台・伝教をさす場合とがある。

二乗　声聞、縁覚の階級の人。釈迦仏法では舎利弗・迦葉・目連等が二乗といわれている。声聞とは、ある理論をつかみ、喜びを感じその思想によって人生観とする人たち。またわれわれが本を読んだりするとき、心を支配する生命状態で、インテリ階級がそれである。縁覚とは、縁によって覚る境涯で、畑を耕したり、花を活けたり、大工仕事、針

仕事をしたり、体を動かすことによって、そこに何ともいえない苦しみを忘れた三昧境ともいうべき状態を心に感ずるもので、芸術家、音楽家等である。

二乗作仏　二乗（声聞・縁覚）が仏になること。二乗作仏を説かないことが、始成正覚を説くこととならんで爾前二種の失の一つである。

二乗闡提　二乗は声聞と縁覚で、舎利弗、迦葉、目連等であり、闡提は一闡提の略で不信の者。爾前経で二乗闡提の不成仏を説き法華経で即身成仏を説くことは開目抄に詳しい。

二処三会　法華経の説処と説会。二処とは霊鷲山と虚空。三会とは前霊山会、虚空会、後霊山会である。すなわち法華経は宝塔品から嘱累品までの十二品は虚空会で、前後の十六品は霊山会で説かれたのである。

爾前二種の失　法華経以前の経には二つの重大な根本的欠陥がある。一には爾前経には十界互具を説かず二乗不作仏であり一念三千も説かれていない。二には始成正覚を根底としており未発迹であるから久遠実成は説かれていない。

日有上人　（要語解説三七七ページ参照）

日我　富士門流の保田妙本寺、小泉久遠寺両寺の第十四代。日我の立てた教義は大聖人を本仏と立て富士の正流に近いが、不相伝家であるから奥義については理解できなかった。

日月　日天子・月天子をいう。明星天子を含めて三光天子といい、共に四天下を普照する。

日月燈明仏　文殊師利菩薩が過去世に妙光菩薩と称したときに出現した古仏。法華経序品で、釈尊が法華経を説こうとしたときに六瑞が起きたので弥勒菩薩がその因縁を文殊師利に質問した。過去世に日月燈明仏が法華経を説こうとしたときも同じく六瑞が起きたことを述べている。

日寛上人　（要語解説三七七ページ参照）

日目上人　（要語解説三七五ページ参照）

日蓮宗一致派　（要語解説三九一ページ参照）

日蓮宗不受不施派　（要語解説三九七ページ参照）

日蓮大聖人のご一生　（要語解説三四八ページ参照）

肉髻　迹仏（釈尊）が化導のために具する色相荘厳の三十二相の一つ。肉髻相とは仏の頭の頂上の肉が高く隆起して髻のごときゆえにこの名がある。無見頂相ともいう。一切の人々がその頂辺を見ることができないゆえである。

日興上人　（要語解説三五二ページ参照）

二天三仙　外道の説。二天とは摩醯首羅天と毘紐天で外道の信仰の対象。三仙とは迦毘羅・嘔楼僧佉・勒娑婆で仏出現

前八百年前後の外道の師で四韋陀教典を著わした。

二度の流難　大聖人がこうむった二度の流罪、伊東流罪と佐渡流罪。法華経勧持品第十三の数々見擯出にあたる。

二而不二　「二にして二ならず」と読む。一往は二つのものであるが、再往これをみれば、一体のものであること。

二百五十戒　戒の意義は非を防ぎ悪を止めさせるものである。戒に小乗戒と大乗戒とがあり、小乗戒の、僧が持つ具足戒のなかで、比丘が持つのはこの二百五十戒である。年齢二十歳以上、七十歳以下の比丘で諸根具足し、身体清浄、過失なく、沙弥戒をうけた者のみ持つことを許される。

二仏並座　法華経の会座で、迹門の三周の説法が終わってから、宝塔品第十一から神力品第二十一に至るまで、虚空に涌出した多宝塔中に、釈迦（右）多宝（左）の二仏が並び坐したのをいう。境智冥合の義をあらわす。

日本への仏教伝来　（要語解説三四六ページ参照）

入仏知見　法華経方便品第二の四仏知見の一つ。

柔和忍辱　柔和は性質がやさしくおとなしいこと。忍辱は、もろもろの侮辱を忍受し、逆境にあっても心が動揺しないこと。御本尊に信順することが柔和であり、世間にあって中傷を忍受し逆境を切り開く信心が、柔和忍辱である。

如意宝珠　意のままに、種々無量の宝を出すことができる珠。仏舎利変じて如意宝珠となるとか、あるいは竜王の脳の中から出るとも、摩竭魚の脳中から出るともいわれる。

汝可取服　寿量品第十六の文。「汝取って服すべし」と読む。御義口伝下（七五六ページ）に「汝とは末法の一切衆生なり取は法華経を受持する時の儀式なり、服するとは唱え奉ることなり」とある。信行に分けると、依義判文抄に「取は是れ信心・服は是れ題目なり」とある。

如我等無異　法華経方便品第二の文で「我が如く等しくして異なること無からしむ」と読む。一切衆生を仏と同じ境涯に入らしむるということ。

如去の二字　法華経（羅什訳）の冒頭に置かれた「如是我聞」の「如」の字と、終わりに置かれた「作礼而去」の「去」の字。法華経二十八品に説かれ文々句々を凝縮してあらわし、生死の二法、理事の一念三千等、重要な法門をあらわす。

如是我聞　（要語解説八三ページ参照）

如説修行　仏の説のごとく修行して違わないことであり、如説修行の行者には、必ず三類の強敵がある。すなわち、釈尊の予言どおり、三類の強敵にあって法を弘めたのは、日蓮大聖人である。末法は折伏の時であり、総じていえば折

伏をする学会員も、如説修行の者といえる。在世滅後を通じて三つの意味がある。一つは人法に約して、如説は法に約し修行は人に約すのである。釈尊の在世においていうならば、釈尊所説の一代の諸経は法であり、その所説のごとく自らこれを行ずるのは修行である。二つには師弟相対に約して、如説は師説であり、修行とは弟子に約するのである。師の所説のごとくに弟子がこれを修行するのは如説修行である。三つには、自行化他に約す、如説とは化他であり、修行は自行である。（要語解説三一七ページ参照）

如如　真如ともいう。三世常住にして、また一瞬一瞬の縁にしたがって種々の相を現ずる。生命の真実の姿をいう。

女人成仏　凡夫の女人が仏に成ること。法華経にいたって初めて説かれる法門で、提婆品第十二では、八歳の竜女の即身成仏をもって現証を示している。爾前経では「女人は地獄の使なり能く仏の種子を断ず」等と不成仏を説いている。（要語解説三三二ページ参照）

如法一日の両経　如法経と一日経のこと。法華経書写の行を如法経といい、大勢集まって一部の経を一日に写しおえることを一日経という。これは共に末法の修行ではない。

如法経　法華経を書写する行で慈覚大師より始まる。

如来一切自在の神力　法華経神力品第二十一の結要付嘱の文。如来が一切の諸法に対する自在の神力であり、五重玄の妙用にあたる。三大秘法に配すと、本門の戒壇にあたる。

如来一切所有の法　法華経神力品第二十一の結要付嘱の文。如来が持ち有する所の一切の法ということである。天台大師は五重玄の依文とし、日蓮大聖人は三大秘法の依文とせられたのである。三大秘法総在の御本尊にあたる。

如来一切甚深の事　法華経神力品第二十一の結要付嘱の文。如来の修得する一切の因果で甚深の事であり、五重玄に配すと妙宗にあたる。三大秘法に配して本門の題目にあたる。

如来一切秘要の蔵　法華経神力品第二十一の結要付嘱の文。如来の証得する一切の実相で、秘密にたもち通達している蔵ということであり、五重玄に配して、妙体にあたる。三大秘法に配すと本門の本尊にあたる。

如来寿量品　（要語解説六九ページ参照）

如来神力品　（要語解説七三ページ参照）

如来禅　禅の三種の一つ。如来所伝の禅法。如来所得の禅定に悟入し、化他の行を行なう。祖師禅の対。

如来秘密神通之力　法華経寿量品第十六の文。無作三身および本門の本尊の依文である。三大秘法の御本尊のみが、一

切衆生を即身成仏させる如来秘密神通之力をもっている。如来とは仏、秘密とは仏の甚深の働きをいい、神通之力とは仏の至妙なる力をいう。（要語解説二七三ページ参照）

如来滅後五五百歳　如来滅後とは釈尊入滅後の正像末の三時をいう。正像二千年、四箇の五百歳を過ぎた末法の始めの第五の五百歳をもって如来滅後五五百歳という。釈尊は大集経に滅後第五の五百歳を予言して「次の五百年は我が法中において、闘諍言訟して白法隠没して堅固なり」と述べている。この予言は現実の世相とよく一致しており、この動乱の世相の中に、末法の御本仏日蓮大聖人が御出現になって、三大秘法の御本尊を広宣流布されるのである。如来滅後五五百歳に始む観心の本尊抄に詳しい。

如蓮華在水　涌出品第十五で、本化の地涌の菩薩の姿が、あまりにも立派なのに驚いて、弥勒が「不染世間法、如蓮華在水」といった。本化の菩薩が、よごれきった世間にあっても、汚れず清らかなことは、あたかも蓮華が泥水の中から出てきて、しかもその泥水に汚されないようなものだとの譬え。現在では、五濁悪世に民衆の苦悩を救い、大衆のなかに前進している創価学会こそ、如蓮華在水に譬えられる。

人衆疾疫の難　伝染病・流行病等がはやって多くの人が死ぬ難をいう。薬師経の七難のなかの一つ。

人天大会　仏の説法の会座に大衆が集合したことを大会といい、別して仏出世の対告衆である人界天界の衆生の名をあげて人天大会という。

仁徳王子　人皇第十六代で応神天皇の第四子である。即位後、都を摂津の難波に定め大いに徳政を施いたという。

忍辱の鎧　勧持品第十三に「当に忍辱の鎧を著るべし」また法師品第十には「柔和忍辱を衣とす」とあるが、仏が本化の菩薩に付属をされた理由の一つは、末法の難を忍ぶことができるからである。鎧は刀杖箭槍の傷害をふせぐ武具であるが、忍は大慈悲から出る。慈悲なくして、大難を忍び仏法流布することはできない。

仁王経　羅什が訳した仁王般若波羅蜜経と、不空が訳した仁王護国般若波羅蜜経があるが、御書に引用されているのは羅什訳の方で、法が滅尽せんとする時、悪業のゆえに種々の災いが起こることが説かれている。法華・金光明両経と共に、護国の三経とも数えられている。

忍波羅蜜　六波羅蜜の第三、忍辱波羅蜜のこと。

人法一箇　（要語解説二四六ページ参照）

ね

涅槃　滅・滅度・寂滅・解脱・円寂等と訳す。生死の境を出離するのを涅槃という。また自由・安楽・清浄・平和・永遠等をそなえた幸福境で、慈悲・智慧・福徳・寿命の万徳を具備している理想的境界。小乗では、たんに煩悩を断じ灰身滅智した境界を涅槃とし、有余・無余の二種の涅槃を説く。しかし、日蓮大聖人の下種仏法では生死即涅槃と説き明かされている。

涅槃経　大般涅槃経の略。釈尊の入涅槃、ならびにその際説かれた説法を記録した経典。小乗経では、東晋の法顕が訳した大般涅槃経三巻がある。（釈尊入涅槃の際、仏弟子に対して懇切に、四念所、四正勤等を説いたのを記し、さらに、入滅前後の状況が詳述されている大乗の涅槃経は二ある）①北涼の曇無讖三蔵の訳で四十巻あり「北本涅槃」と呼ばれている。（釈尊涅槃に入らんとするとき、無量の大衆に対して説かれた大乗の教義で、法身常住、涅槃の因縁など十三品ある）②劉宋の慧厳、慧観、謝霊運等が前記の法顕訳を対照し、北本を修訂した三十六巻で、南本と呼ぶ。涅槃経は「此の法華経に説く所の仏性常住を重ねて之を説いて帰本せしめ涅槃経の円常を以て法華経に摂す、涅槃経の得分は但・前三教に限る、天台の玄義の三に云く『涅槃は贖命の重宝なり重ねて掌を抵つのみ』」（寺泊御書九五二ページ）と述べられているように、法華経の流通文となる。

拈華　華を拈ること。禅宗で依用している大梵天王問仏決疑経に「涅槃の時、世尊座に登り拈華して衆に示す」と説いているが、この経は偽経と断定されており、日蓮大聖人も聖愚問答抄（四八七ページ）などで破しておられる。ゆえに拈華の説も信ずべきものは何もない。

燃燈仏　法華経序品第一に説かれる。過去の日月燈明仏の八王子のなかの末子である。他の七王子と共に、父の高弟である妙光に従って法華経を修行し、八王子がしだいに成仏し、その最後に成仏した仏である。生まれた時に身の光りが燈のようであったために、成仏後も燃燈仏と称した。釈尊が因位の時に、儒童菩薩として蓮華を供養したのは、この仏である。燃燈仏は釈尊の師であり、文殊の弟子（文殊は当時の妙光）であるところから、文殊を、釈尊の九代の師という。寿量品の文上では、燃燈仏は久遠実成の釈尊が中間に出現した仏ともなる。文底の仏法では、この燃燈仏も、久遠実成の釈迦仏も、共に久遠元初の自受用身が中間

に、分身仏として出現した仏なのである。

の

納衣　粗衣のこと。

能化　弟子を所化というのに対し師を能化という。菩薩に対すれば仏は能化であり、菩薩は衆生に対すれば能化となる。

能所　「能」は自動的・能動的で、相対して関係をあらわすときに働きかける立ち場をいう。これに対し、働きかけられるほうが「所」で、他動的・受動的になる。一例をあげれば、法を説いた仏が、能説の教主、説かれた法は所説の教法。化導するほうの師匠は能化、化導されるほうの弟子は所化、よく説き明かすほうの文や教は能詮、説き明かされる義や理は所詮にあたる。そのほか、能弘の教主、所弘の法、能持の人、所持の法などがある。本門戒壇の大御本尊は、あらゆる諸仏を生み出した「能生」の根源であり、十方三世のすべての諸仏や功徳は、大御本尊から生み出された「所生」である。

能通方便　三方便の一つ。小乗教や権大乗経で用いる方便で、衆生が低い経によって悟ったと思っているのを弾呵して、真実の門に引いてくる方便。方便品の真意は秘妙方便。

能忍　釈迦の意、能仁ともいう。能く忍んで娑婆世界に出現した人の義。仏のこと。

は

沛公・項羽　沛公は漢の高祖劉邦、項羽は同時代の武将で、共に協力して秦を滅したが、後、沛公は項羽と八年にわたる戦いの後、項羽を破り、天下を統一して漢王となった。

廃講散衆　講義をやめて弟子たちを解散すること。

廃権立実　爾前権教を廃して一実乗の法華経を立てること。天台が説いた蓮華三喩の一つ、華洛蓮成の譬えが示すもの。

廃事存理　法華文句の文語。「事を廃して理を存せば」と読む。事とは布施・持戒・忍辱・精進・禅定の五波羅蜜のこと。天台流では、このような爾前経における五波羅蜜の修行（事）を廃して、理観（理の一念三千）を立てる。この場合の天台でいう事は、日蓮大聖人の事（事行の題目の一念三千）とは、根本的に異なることはもちろんである。日蓮大聖人の仏法では事の一念三千（文底下種仏法の場合の事は久遠元初の御本仏の御振舞い）を立て、天台の理観を破折するのである。

敗種　敗根と同じ。二乗を弾呵する語で、二乗の永不成仏に

譬えている。すなわち草木の種子が腐敗しているように、二乗は煩悩を断尽して成仏を求めようとしないから、成仏の功徳をうけることができない、という意。

排仏毀釈　仏教を排撃し釈教を破毀すること。初めわが国における運動は仏教伝来をめぐって飛鳥時代に起こり、二度目は明治時代に「神仏分離令」に端を発して起こった。

破戒　戒に対する語。犯戒ともいい、一度受持した戒律を破ること。なお無戒とは戒律を持たぬこと。

墓輪番　墓所輪番制度のこと。日蓮大聖人の墓所を守るべく六老僧が中心となり、さらに高弟十二人を加えた十八人が一か月交代で当たる制度が定められていたが、五老僧はこれを守らず、師敵対の謗法を犯した。

波木井六郎実長　波木井六郎実長入道法寂房日円（西紀一二二二年―一二九七年）のこと。甲州（山梨県）波木井郷に地頭として住した。日興上人の法縁で大聖人に帰伏し身延山に草庵をつくり大聖人をお招きしたが、滅後、日興上人に違背し、大謗法を犯した。

伯夷・叔斉　中国周代初期、河北にあった小国・胡竹の二太子。兄を伯夷、弟を叔斉といい、忠孝の手本として後世に伝えられた。父王の死後、互いに王位を譲り合い共に国を去る。周の武王を諫め山中にはいるが、天は白鹿となり乳で二人を養うが、肉を求めたため白鹿は去り飢え死にする。

白馬の教　後漢の明帝が瑞夢によって、使を西天に遣わし、仏法を求めた。その使が天竺（インド）に行って、摩騰迦、竺法蘭の二師に会い請願する。二師は、仏像経巻などを白馬に乗せて漢土におもむくのである。したがって仏教を白馬の教という。

白楽天　白居易のこと。（西紀七七二年―八四二年）中国唐代中期の代表的詩人。政治をうたい社会の混乱を厳しく指摘した。代表作に「新楽府」などがある。

波斯匿王　釈尊在世の大檀那。

婆沙論　迦旃延子の阿毘達磨発智論を五百の羅漢が広く釈したもの。旧訳は、阿毘曇毘婆沙論、迦旃延子の造、五百羅漢の釈。北涼の天竺沙門浮陀跋摩、道泰と共に訳す、六十巻。もとは百十巻に分けられていたが、兵乱にあって一部亡失したという。新訳は、阿毘達磨大毘婆沙論、五百大阿羅漢の造、唐の玄奘三蔵の訳、二百巻。

波旬　悪魔の梵名。正法を妨げようとする魔王の名、またはその働きのこと。

婆藪仙人　バラモンの仙人である。変現を示して自在天とな

って三日を通じたという。

罰　利益に対する語。個人または一社会が法に背く結果うける損、不幸の報い。総罰、別罰、冥罰、顕罰の四種類ある。

婆稚阿修羅王　婆稚とは被縛ということで、修羅軍の先鋒となって戦うが、帝釈に縛られてしまったゆえに、こういわれた。

八逆　一に国を危うくする謀をする謀叛、二に山陵宮闕をあばくをはかる謀大逆、三に国に背くをはかる謀逆、四に尊長に害を加えるをはかる悪逆、五に過ちなき人に害を加える不道、六に神や国王に不敬を加える大不敬、七に不孝、八に不義で、主として主に対する逆罪である。

八自在　涅槃経徳王品に説かれている。すなわち一多・小大・軽重・色心・五根・得法・説法・令見の八つの自在神通をいう。

八邪　邪見・邪思惟・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定で、八正道の反対。

八十万億那由佗の菩薩　法華経勧持品第十三で、末法に法華経弘通を誓った大菩薩は、八十万億那由佗の数であり、みな不退の位に住していた。

八十種好　迹仏応化のために、三十二相・八十種好を具し、色相荘厳して仏身をあらわす。ただし三十二相は総であり、八十種好は別である。三十二相も八十種好がないと円満でない。すなわち輪王・帝釈・梵王も三十二相をそなえているが、八十種好がないために微妙でない。好とは色相荘厳にするゆえに一切世間の天人が好むからいう。一、二の例をあげれば、鼻高好にして孔現れず、身一時に廻ること象王の如し等々。

八大地獄　最も業障の深い者が堕する地獄。八熱と八寒があるが、普通には八大熱地獄をいう。八大地獄とは等活・黒縄・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・大阿鼻（無間）をいう。顕謗法抄（四四三ページ）にある。八大寒地獄とは阿波波・阿吒吒・阿羅羅・阿婆婆・優鉢羅・波頭摩・拘物頭・芬陀利をいう。

八難　八処の障難をいう。それぞれ異なるが、仏を見奉ることと、正法を聞くことができないのはおのおの同じである。一に在地獄難（八寒・八熱・無間地獄等）、二に在畜生難、三に在餓鬼難、四に在長寿天難（色界四禅天上の無想天）、五に在北蔚単越難、六に盲聾瘖瘂難、七に世智弁聡難（邪智利根のために外道の書を読み正法を信ずることができぬ難）八に生在仏前仏後難（縁が薄く仏の出世の時

に会わぬ難）。維摩詰所説経に出ている。

八部衆　天・竜・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・摩睺羅伽をいう。いずれも非人類である。天とは天神等の諸神王衆をいう。竜とは竜神で竜王やその部衆をいう。夜叉とは梵語であり、勇健・暴悪等と訳し、地夜叉・虚空夜叉・天夜叉の三種がある。乾闥婆とは訳して食香、嗅香といい、帝釈の楽神であり、須弥山の南、金剛窟中におり、常に香のみを食して、虚空を飛行するという。阿修羅とは非類、非天等と訳し、海岸・海底・山窟等に住み、嫉妬の心強く争いを好む。迦楼羅はインド神話に存する怪鳥の名、訳して金翅鳥という。一切鳥類の王と伝えられる。緊那羅とは疑人・疑神・人非人等と訳し、または歌神・歌楽神という。歌舞をもって帝釈天に仕える。摩睺羅伽とは大蟒神・大腹行と訳す。大蛇のことである。

八万威儀　八万の細行をいう。二百五十戒を行住坐臥の四威儀のおのおのにわたして、一千の威儀になり、これをさらに過去・現在・未来の三世に約して三千の威儀となり、この三千を、また殺・盗・淫・妄・綺・悪・両の七支に分配すれば二万一千となり、この二万一千を、またさらに貪・瞋・癡・等分の四にわたせば八万四千の細行となる。

八万十二　八万は八万法蔵で、十二は十二分経すなわち共に仏教のこと。

八幡大菩薩　諫暁八幡抄（五七九・五八七ページ）に、八幡大菩薩は、人王第十六代応神天皇が、人王第三十代欽明天皇の三十二年に神となってあらわれたこと、また、平城天皇の代に八幡が「我は是れ日本の鎮守八幡大菩薩なり百王を守護せん誓願あり」と託宣していること、またその本地は釈迦仏であること等が示されているが、立正安国論にお示しのように、邪宗・邪義がはびこっているときは、南無妙法蓮華経の法味を失って国を去り、八幡大菩薩などの守護はない。日蓮大聖人が、鎌倉鶴岡八幡宮の前で八幡を責めたのは、己心の八幡をそこに呼ばれて叱咤されたのである。

八万法蔵　釈尊一代の聖教全部をいう。八万は実数でなく多数の意。八万四千の法門ともいい、八万蔵と略称し八万宝蔵とも書く。

八葉九尊・三十七尊　八葉九尊等とは、真言密家には、胎蔵界の中台院すなわち胎蔵界曼荼羅の中央の一院は八葉の蓮華であって、その中台に大日如来、周囲の八葉には四仏四菩薩の八尊がすわっているのをいう。三十七尊とは金剛界頂経に説かれる金剛界曼荼羅中の羯磨会、すなわち金剛界

根本会の中心である三十七の仏菩薩をいう。中央の大日如来、四方の四仏、十六菩薩、それに四波羅蜜、内四供養、外四供養、四摂の十六菩薩である。

八葉の蓮華　一般には、八枚の花弁の蓮華のことをいう。また、われわれの胸間の心臓と肺臓の形が蓮華に似ているので、八葉の蓮華という。この身の胸間の八葉の蓮華に二つの意義がある。一つは、われわれの生命それ自体が妙法蓮華の当体である。二つには、具体的に、心臓と肺臓の形が八葉の蓮華によく似ているので、それをもって、われわれの生命の中に当体蓮華を見いだすことができる。

八戒　八斎戒ともいう。小乗教の在家の俗男・俗女に対する戒律で、不殺、不盗、不婬、不妄語、不飲酒、不坐高大牀、不作倡妓楽、不過中食の八戒。

八寒地獄　八種の極寒の地獄界のこと。涅槃経では、阿波波地獄、阿吒吒地獄、阿羅羅地獄、阿婆婆地獄、優鉢羅地獄、波頭摩地獄、拘物頭地獄、芬陀利地獄をあげている。

白居易　白楽天のこと。中国、唐時代の大詩人で、翻林学士に任ぜられたが、後讒言のため江州の司馬に左遷された。

八教　（要語解説五ページ参照）

抜苦与楽　苦を除き楽を与えること。一切衆生を苦から救い幸福を与える仏の崇高で絶対的な慈悲の行為をいう。

八斎戒　小乗律で在家の男女が一日一夜修行する戒で、八罪を禁閉して犯さぬ戒律をいう。八罪とは殺生・偸盗・邪淫・妄語・飲酒・身を装飾し歌舞を見聞すること・高広厳麗な牀に坐臥すること・昼を過ぎて後に物を食べることである。

八識　法相宗等の大乗唯識家において、有情の心識について立てた八種の区別のこと。眼・耳・鼻・舌・身・意の六識に第七末那識、第八阿頼耶識の二つを加えた八種をいう。

八宗　倶舎・成実・律・法相・三論・華厳・天台・真言の八宗をいう。いずれも日蓮大聖人ご出現前に日本で盛んであったが、すべて破折され尽くした。

八正道　正見・正思惟・正語・正業・正命・正方便・正念・正定で、八邪の反対。

八相作仏　仏が応身または化身を現じて作仏（または成道）を中心とする八種の相を示現して説法教化することをいう。八相とは下天・託胎・出胎・出家・降魔・成道・転法輪・入涅槃をいう。（要語解説三四ページ参照）

跋提河　中インド拘尸那掲羅国を流れる河の名。熙連河とも呼ばれる。釈迦はこの河の西岸にある拘尸那沙で涅槃した。

抜陀婆羅　不軽菩薩を軽毀して、地獄に落ちた大衆中の代表

者で、後、不軽菩薩に教化されて菩提を証した。

般泥洹経　釈尊入滅前後の模様を記したもの。泥洹経、大般泥洹経、方等泥洹経ともいう。

般涅槃　槃泥洹とも書き、寂滅・円寂・入滅などと訳すが略して涅槃という。

八風　利・衰・毀・誉・称・譏・苦・楽の八。四条金吾殿御返事（一一五一ページ）に「賢人は八風と申して八のかぜにをかされぬを賢人と申すなり、利・衰・毀・誉・称・譏・苦・楽なり、をを心は利あるに・よろこばず・をとろうるになげかず等の事なり、此の八風にをかされぬ人をば必ず天はまほらせ給うなり」とある。

八品　迹門の八品は、方便品第二から人記品第九にいたるまでで、迹門熟益三段の正宗分となる。本門の八品とは、涌出品より嘱累品にいたる八品であり、この八品の間に、地涌の菩薩が来現していた。本門の八品は、付嘱の儀式がなされていた期間で、肝要である本尊は、寿量品に開顕されている。八品派は、八品正意などと邪義を立てているが、大きな誤りである。

八品派　日蓮宗勝劣派の一つである本門法華宗およびその門流の別称。大聖人滅後百三十年ごろ日隆が立てたもので、観心本尊抄（二四八ページ）の「但八品に限る」の文により八品正意、八品所顕の本尊等の邪義を立てた。本門仏立宗や在家日蓮宗浄風会などはこの亜流である。「但八品に限る」とは、付嘱流通の段を示されたもので、本尊は寿量品文底に限るのである。

破法の国　正法を破る国のこと。無智・悪人の充満する悪国に対して、邪智・謗法の者が充満する国をいう。正法を破るがゆえに邪法が横行し三災七難が相ついで起こる。日寛上人の開目抄文段下（富要四巻三二九ページ）には「日本国の当世は破法の国なること分明なり。ゆえに折伏をさきとなすべきなり」とある。

波羅夷罪　訳して堕負処、極悪深重、断頭、絶命等の意。すなわち極重悪罪のこと。小乗では、出家戒として殺・盗・淫・妄の四本を根本重悪とし、権大乗では梵網の十戒を十波羅夷罪とする。

波羅提木叉　別解脱とも、正順解脱とも訳す。波羅提木叉の戒を受持すれば、成仏できるといわれている。末法においては、御本尊を受持することがただ一つの戒。

原殿御書　正応二年十二月十六日、日興上人四十三歳の時の御述作で、原殿に与えられた。学頭・民部日向と波木井実

長の数々の謗法、それに対する再三再四の訓誡制止、そして身延離山を決意された心境等について述べられている。（要語解説三六〇ページ参照）

波羅奈　中インドの地名。いまのベナーレス。その王城を波羅奈城といい、訳名は幾河城という。すなわち河水が、この国城を繞るゆえである。

波羅疱斯・仙人堕処・施鹿林　波羅疱斯は波羅奈とも呼び、インドの恒河の流域にある国の名。鹿野苑はこの国にある。仙人堕処、施鹿林はいずれも鹿野苑の別名で釈尊成道後はじめての四諦の法が説かれた場所である。むかし五百の仙人が空から王宮の采子を見て欲心を起こし、ために通力を失って空より林中に堕ちたという故事。また菩薩の七身たる鹿主が妊胎の鹿を助けたのに感じて、梵達多王が大林を群鹿に施し与えたという故事等によって、これらの名がある。

婆羅門　古代インドの四姓の一つ。訳して浄行という。悪法を捨てて大梵天に奉事し浄事を修する一族。その種族の人は、自ら梵天の口から生じた四姓中の最勝最貴であると称している。博学多聞で四韋陀論を伝えている。

波瑠璃王　毘盧釈迦王のこと。釈尊在世の舎衛国の王であり、生まれたとき、琉璃宝と一緒であったために毘琉璃という。この王の父は、波斯匿王で、釈迦族の卑賤な婢と結婚した。ある日、釈尊がくるまでは昇ってはならないとされていた大講堂に波瑠璃王が昇ったため「卑賤な婢の生んだ子が、堂を穢した」といわれた。波瑠璃は釈迦族をうらみ、即位してから、釈迦族を全滅させた。しかし、釈尊の予言どおり、七日目にして無間地獄へ落ちた。

破和合僧　五逆罪の一つ。和合して仏道修行をする僧の団結を破る謗法行為をいう。正法のすなわち広宣流布に前進する創価学会の団結を破るのも、破和合僧の罪になる。

半偈成道　①即身成仏、直達正観をいう。②雪山童子が仏道修行のときに鬼神の残り半偈を聞くため自分の身を鬼神に与えたことによって、悟りを開き成仏したこと。

般若経　釈尊が、方等部の後、法華経以前に説いた経文であり、説法の地は、鷲峯山・白鷺池。大般若会、摩訶般若経などの略。また、般若部に含まれている諸経のことをいう場合もある。仁王般若経を除く他の大部分は、玄奘訳の六百巻の中に含められる。

般若の千仏　大品般若経無作実相品に千仏が現じて同じく般若波羅蜜を説くこと。

ひ

僻目　①ひがんだ見方、または見あやまり。②ひがめのこと。僻とはさける、かくれる、かたよる、あやまる、よこしま、などの意がある。

飛花落葉　飛華落葉ともかく。花が散り、木の葉が落ちること。縁覚はこれらを外縁とし、世の無常の相を感ずる。

比干　中国の人。殷の紂王の無道を諫めて殺されたが、間もなく殷の世も滅亡した。

彼岸　①生死・煩悩の世界を此岸とし、涅槃・成仏の境涯を彼岸という。三大秘法の御本尊に縁することにより、此岸である娑婆世界がそのまま仏国土・彼岸となるのである。②彼岸会の略。春分、秋分をはさむ七日間に行なわれる法会、観無量寿経の日想観にもとづいて、太陽が真東から出て、真西に没する春分・秋分に彼岸を観ずるという浄土宗の思想にその源を発する。日本特有のものである。

微管　細い管、すなわち狭い見解という意。細い管の中から広い所をのぞくという譬えからきた語で。

比企谷　現在の神奈川県鎌倉市大町一丁目付近の古名。比企能員の住居があった。能員の子・比企能本は大聖人の信者で、妙本寺の開基となった。

比企大学三郎能本　比企谷に住み、比企能員の子で、学者であったが、大聖人の信者となり、妙本寺の開基となった。

比丘・比丘尼　比丘は男の出家、比丘尼は女の出家。

非時風雨の難　季節はずれの暴風があったり、梅雨期でないのに長雨が続いたりする天候の異変で、風も雨も適度でないこと。薬師経の七難の一つ。

毘沙門天　帝釈天に所属する四天王の一つである。東は持国天、南は増長天、西は広目天、北は多聞天である。多聞天を毘沙門天という。

非情の成仏　草木や石などの非情の生命も成仏すること。草木成仏と同じ。

譬説周　法華経迹門の三周の説法の一つ。喩説周ともいう。釈尊が中根の声聞（須菩提・迦旃延・迦葉・目連など）に対し、譬喩品第三から薬草喩品第五まで譬喩をもって、三乗即一乗の法を説き、領解させて、授記品第六で成仏得道の記別を授けたことをいう。（要語解説九〇ページ参照）

微善根　微少の善根。

非想天　非有想非無想天の略で、非想非非想天のこと。無色界の第四天で三界の最頂にある天である。色界の最頂を有

頂天というが、非想天を有頂天というときもある。

毘湛東春の明鏡　毘湛は妙楽大師の住する所、毘陵ともいう。東春は智度法師の住処。妙楽大師の「疏記」智度法師の「義纘」を、開目抄に明鏡と述べられている。

毘紐天　遍浄といい、色界の第三禅の第三天。色界十八天の第九天にあたる。

非長非短不二の義　法華経如来寿量品第十六の久遠円仏の寿命は長短の二義を超越したもので量ることができない。しかし、時により機により、あるいは長く、あるいは短くも示すことができ、自由自在であるということ。

筆受の相承を泯じ　依憑集で伝教大師が弘法の真言を破した文。筆受の相承とは、中国の真言宗の一行阿闍梨が、善無畏三蔵より筆受した真言の相承をいい、善無畏は、天台宗の意によって釈したものであるのに、弘法の真言では、法華経を大日経に対し、三重の劣と下したのは善無畏一行の真言の相承（もとより法華経より盗んだものであるが）を破ったものであるという意味。

畢定の菩薩　菩薩を分けて二とし、畢定・不畢定とする。畢定とは、ただちに修行を積み不退の位にはいって必ず作仏する菩薩をいう。

譬如良医　法華経如来寿量品第十六の文。七譬のなかの良医病子の譬え。良医とは久遠元初自受用身如来、また再誕たる御本仏日蓮大聖人である。

非人　人にあらざる衆生のこと。①仏法上は天竜八部のこと。すなわち天、竜、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦楼羅、緊那羅、摩睺羅迦の八部衆をいう。②世間的には、身分の低い人。人権を無視され、人並みの扱いをうけない人々。日本においては、近世になるまで乞食、物もらいなどの賤民をいった。インドにおいては、ヒンズー教のカースト制度のわく外の階層、すなわち不可触賤民をさす。

秘密教　秘は秘奥の義、その法門の深奥なるをいう。密は隠密の義で、容易に人に示さないこと。すなわち、最もすぐれた経教のこと。これには三種がある。①天台が釈尊五十年の説法を五時八教に配立したうちの化儀の四教の一つ。②真言宗で立てる顕密の教判の秘密教。③久遠元初の自受用身が久遠元初いらい秘伝してきた法、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華経。

秘密主　金剛薩埵のこと。金剛手秘密主とも訳す。

秘妙方便　爾前経に説く方便は法用方便・能通方便であり、法華経方便品第二の方便は秘妙方便という。法用・能通は

衆生の機根に応じてそれぞれの法を用い、よく通達せしめるのを主眼とするに対し、秘妙方便は、方便がそのまま真実に直通する。すなわち、われわれの場合は御本尊に罰と功徳のあることが秘妙方便となって、強盛に信行を励むならば、ついに即身成仏の大利益を得ることができるのである。（要語解説二〇五ページ参照）

白衣　在家の信者のこと。釈尊在世のインドでは俗人が皆、白衣を着ていたので、このように呼ぶ。

百王　平城天皇の御代に八幡大菩薩の託宣があって、必ず百王を護ると誓言された。すなわち八幡大菩薩が必ず守護すべき百代の天皇のこと。

白毫相　白毛相、眉間白毫などともいう。仏身に具足する三十二相の一つ。仏の眉間には清浄で柔軟な白い繊毛が、右回りにはえていて、眉間からたえず光りを放っているとされ、その光りを白毫光という。仏が仏智をもってあまねく一切を見通していくことをあらわしている。（要語解説三五ページ参照）

百座百講　仁王経護国品に、国難鎮圧の法を説いて「大王、昔日釈提桓因有り、頂生王天上にして其の国を滅さんと欲す、時に帝釈天王七仏の法用の如く百高座を敷き百法師を講じて般若を講説するに頂生王即ち退く」とあるので、天台大師が隋の文帝の勅を奉じて仁王講を開いたのがはじめの例で、日本では斉明天皇の六年に仁王会を修し、以後国を祈るのに用いた儀式であり、百の法師が百か所において仁王経を講ずる儀式をいう。

辟支仏　縁覚をいう。縁覚は独覚ともいい、仏のない世界に出て飛華落葉等の現象を見、これを縁として空理を悟る境涯をいう。

百即百生　中国の善導が往生礼讃に「十即十生、百即百生」といっている。念仏をやると百人が百人とも、必ず極楽浄土へ往生できるという意であるが、仏説を無視した邪義である。

百八煩悩　一切の衆生がもっているといわれる百八種の煩悩をいう。

白法隠没　大集経の文。白法とは、釈尊の仏法であり、隠没とは、功徳が消えてなくなること。大集経には「釈尊滅後、二千年すぎると、白法隠没する。そのときに大白法が起こる」と釈尊が予言している。この大白法は日蓮大聖人の仏法であることは明々白々である。（要語解説一七五ページ参照）

白蓮華　睡蓮科の一種。梵語では分陀梨華という。池や沼に

生ずる多年生の水草。泥中より出てなお清浄無垢であり、因果倶時をあらわすので妙法蓮華に譬えられる。また胸間の八葉の蓮華は白蓮華であるとされる。（要語解説一七五ページ参照）

白鷺池　大般若経を説いた四処十六会のなかの第十六会の説法場所である。摩竭陀国の王舎城の竹林精舎の付近らしいが、いまはその遺跡が見当たらない。この会には種々の仏土より、無量無数の菩薩摩訶薩の等覚補処の位にあるものが来集して、釈尊を囲繞したという。

百論　三論の一つ。提婆菩薩の著。師の竜樹菩薩の空観により外道の数論、勝論、正理派等の世界観、人生論、解脱論を破して仏法の正見をあらわしたもの。

百界千如　天台が生命の本質を解明した哲理で、一念三千の法門の骨子である。百界とは百法界で十界互具の意、千如とは百界にそれぞれ十如を具すること。

譬喩　たとえ。難解の法を、わかりやすいものに譬えて喩すこと。譬喩に二あり、一は現在の事実をあげて説き示し、二は事実を仮定して説き示す。その他、順喩・逆喩等諸種の別がある。

譬喩即法体　法体即譬喩または法譬一体と同意。法の本体とその法を説明する譬えが一体であること。当体義抄（五一六ページ）に「伝教大師釈して云く『故に譬喩の外に法体無く法体の外に譬喩無し、但し法体とは法性の理体なり譬喩とは即ち妙法の事相の体なり』」と。

譬喩の蓮華　天台大師が、法華玄義において説いたもので、華草の蓮華が因果倶時であって、妙法蓮華に似ているので、この蓮華をかりて、難解の当体蓮華を説明したもの。

譬喩品　法華経の第三。迹門の正宗分のうち、広開三顕一（方便品から人記品）は三周の説法で始終するが、法説周の舎利弗が、方便品第二で領解し、釈尊から授記を与えられる。そこで舎利弗は、他の未領解の声聞のために、釈尊に詳説を請うと、釈尊は、三車火宅の譬えを説く。三車火宅の譬えによって三乗の権を開し、一乗を顕わしているのがこの品の中心である。また「若し人信ぜずして、此の経を毀謗せば、乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」と、十四謗法が説かれている。（要語解説六〇ページ参照）

兵革　兵は剣等の武器、革は甲冑の意で、戦争のこと。

病気の原因　（要語解説三〇三ページ参照）

標釈結　文章、言語の表現形式や文体の構成法をいう。標とは標示・標出の義で、総体に共通した大意・主旨を示す

こと。釈とは解釈であり、標示された題号や要旨を、客観的な見解により具体化すること。結とは結論であり、経論においては本義を明かし、自説・主張を解明すること。

病即消滅不老不死　法華経薬王品第二十三の文に「此の経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり。若し人病有らんに、是の経を聞く事を得ば、病即ち消滅して不老不死ならん」とあり、御義口伝下（七七四ページ）に「然らば病とは謗法なり、此の経を受持し奉る者は病即消滅疑無きなり」とある。

平等意趣　四意趣（仏の方便の説における四種の意向で、平等意趣、別時意趣、別義意趣、衆生意楽意趣）の一つ。無著菩薩の摂大乗論に出ている。仏の説かれた法は平等であるということ。これに通平等と別平等とがある。

平等大慧　法華経見宝塔品第十一のなかで多宝如来が法華経を証明した説。「平等大慧・教菩薩法・仏所護念の妙法華経」と法華経を説明している。すなわち、一切法の根底に一貫している平等性を覚知する、広大な御本仏の智慧、すなわち御本尊の智慧をいう。

兵奴の果報　兵隊となって戦争をし、あるいは奴隷のように人に使われ常に屈従して楽しみのない報い。

毘羅尊者　付法蔵の第十二祖。摩竭陀国の人で、初め外道で三千の弟子をもっていたとき、神通力をもって馬鳴（付法蔵第十一）を落とし入れようとして、かえって論破されて弟子となり、馬鳴滅後、付法を受けて南インド・西インド一帯を化導し、竜樹に付した。著書には「無我論」があり、その外道を破折しているようすは、金剛石が、一切のものを破るごときであるといわれている。

毘盧遮那　梵語である。遍一切処の義であり、法身仏の名としている。

貧窮下賤　まずしく、いやしい者。大聖人が自ら貧窮下賤と申されたのは、民衆を化導するため示同凡夫として出現されたことをあらわす。

頻婆娑羅王　天竺摩竭陀国の王であり、阿闍世王の父にあたる。釈尊に深く帰依し、多くの供養をしていたが、提婆達多はこれを嫉み、阿闍世王をそそのかした。王は阿闍世に幽閉されるが、釈尊を深く信じていたので恐れもせず、かえって阿闍世の大不幸を悲しみ、諫めるが、阿闍世は獄吏に命じて食を絶ってしまう。頻婆娑羅王の夫人である韋提希夫人が、身に蜜を塗り、王のもとへいって、それで命をながらえていたが、これを知った阿闍世にとどめられ、ついに王は命終した。王は、釈尊の光明に照らされ、阿那

含果を得たといわれている。後に阿闍世は釈尊に信伏し大いに仏法を護持した。

ふ

符 ①わりふ。昔、中国で、木や竹に文字を書き、両分して一半をとどめおき、他の半分を与えて、他日の証拠としたもの。②官府の公文書の名称。③神社、寺院などで頒布する守り札。④日蓮正宗では護秘符のこと。

懴悔滅罪 恐れ謹みて懺悔する。

風星 二十八宿のうち、昴あるいは箕に属する星、または木星のこともいう。

武王 周の武王。名は発という。殷の紂王が暴虐の君主で人民がみな苦しむのを見て、父の文王と共にこれを討った。

不改本位の成仏 本位を改めず、すなわち九界の衆生が各自の位を改めることなく、そのまま即身成仏することをいう。当位即妙と同義。爾前経の歴劫修行に対して法華経で説かれた即身成仏。また草木成仏の一つ。

不可見無対色 可見有対色に対する語。体（色）がなく、見ることができないことをいう。不可見とは、可見、有見に対する色（体）がないこと。無対色とは、相

不可思議境 不可思議とは「思議すべからざる」の意で、あると思えばなく、ないと思えばある、われわれの生命が正しく不可思議である。境とは客観のことで、生命を客観的に見れば不可思議境である。われわれは十界・十如・三千世間を整えられた本仏日蓮大聖人のご生命――大御本尊を不可思議境とし妙境としている。

不軽菩薩 法華経不軽品第二十に説かれている。過去世に威音王仏という仏がいた。この仏の滅後像法年間に常不軽菩薩という菩薩がいて「我深く汝等を敬う、敢て軽慢せず、所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし」といって、一切の人々をことごとく礼拝していた。時に国中に謗法者が充満しており、不軽菩薩を見てこれを迫害した。しかし、いかなる迫害にも屈することなく不軽菩薩はもっぱらただ礼拝し仏身を成就することを得たが、不軽を軽賤した者はその罪によって千劫阿鼻地獄に落ちて大苦悩をうけ、この罪を畢え已って、また不軽菩薩の教化をうけることができた。日蓮大聖人は毒鼓の縁というお立ち場から、御書の各所に御自身と対比されながらお引きになっている。

不軽品の意義（要語解説一一二ページ参照）

不空三蔵　中国唐代の人で、真言宗三三蔵の一人。梵名は阿目佉跋折羅、訳して不空金剛といい、不空はその略。もとは北インドのバラモン族で、幼いときから孤独で、十四歳で闍婆国で金剛智三蔵に師事した。師と共に中国の洛陽にいたり、五部三密の法を授けられたが、開元二十年、金剛智が滅したので、二十九年帰国の途につき、師子国に達し竜智菩薩にあって、密教や、諸経論五百余部をえて、再び唐都へ帰った。後、尊崇はますます厚く、密教を弘めて、七十歳で死んだ。（西紀七〇五―七七四年）

福運（要語解説三〇八ページ参照）

福過十号　妙楽大師が、文句記に「供養する有らん者は福十号に過ぐ」と、法華経、すなわち末法に日蓮大聖人の仏法を信ずる者の功徳を賛嘆している。十号とは仏の十種の尊称で「如来・応供・正偏知・明行足・善逝・世間解（無上士）・調御丈夫・天人師・仏・世尊」であり、舎利弗や迦葉等の声聞は、法華経の迹門に未来の成仏を許されてこの十号を授けられた。このような十号を具足した仏を供養するよりも、末代の法華経の行者を供養する功徳は勝れているのである。（要語解説二八三ページ参照）

伏羲　中国古代の伝説である三皇の一人。名君とされている。

福田　①仏または僧の徳称。②福利を生ずる田の義。③幸福を受ける下地のこと。

覆漏汙雑　妙楽の記に「覆とは、聞慧なきがゆえに、器の現に覆するがごとく、思慧を闕くがゆえに器の漏るがごとく、修慧なきがゆえに器の汙雑せるがごとし」と過去の結縁が浅いために、現世で仏法にあっても成仏できないと、器にたとえて謗法の失を述べている。

普賢経　正しくは、観普賢菩薩行法経という。法華経を説き終わって涅槃経の前に説かれた。阿難の質問に答えて普賢菩薩の功徳を説いているが、その功徳は、すなわち妙法蓮華経の功徳である。この経の説処は毘舎離国の大林精舎であり、釈尊入滅の三月前の説法である。御義口伝下（七八五ページ）に「依正の二法悉く法華経なりと結し納めたる経なれば此の普賢経を結経とは云うなり」とあるように法華経の結経とされている。特に懺悔ということについて述べられている。懺悔とは、キリスト教でやるようなものではなく、仏法でいう懺悔とは御本尊の前にすわって題目を唱え、今後の精進を誓っていくことである。普賢経には「若し懺悔せんと欲せば、端坐して実相（御本尊）を思え、衆

罪は霜露の如し、慧日（末法当今、日蓮大聖人所弘の南無妙法蓮華経）能く消除す」と、三大秘法の御本尊を信受する功徳を述べている。

普現色身　釈迦仏法で、観音の三十三身のごとく機に随って、普く種々の身相を現ずるのをいう。仏や菩薩が衆生教化のためにする行化の一つである。

普賢菩薩　宝威仏の弟子、東方宝威徳上王仏の国にいたといわれ、釈尊の法華経の説法がまさに終わろうとしたときに、娑婆世界に来至して、釈尊に、仏滅後いかにしてこの経を持つべきかを問う。そして、後五百歳の濁悪世に法華経を受持する行者を守護し、法を守ることを誓った。文殊が智徳をあらわすのに対し、普賢は理徳をあらわす。

普賢菩薩勧発品　（要語解説七六ページ参照）

普光天子　諸天善神の一つ。法華経序品第一に出ず。法華経の行者を守護することを約束している。

不思議解脱　小乗の悟りでは思議すべからざる大乗法身の菩薩の悟りをいう。この悟りを究竟するのを仏とし、分々にこれを得たるを登住登地の菩薩としている。

不識天月但観池月　「天月を識らずして但池月を観ず」と読む。天台の玄義巻第七上の文。日寛上人は、久遠の本地を覚知しないことを不識天月に譬え、今日の垂迹のみ知っていることを但観池月に譬えている。

不自惜身命　（要語解説三一一ページ参照）

不縦不横　縦横並列に対する語。縦にいえば時間的に、横にいえば空間的に、隔たりや次第がなく相即であって、混然一体となっているさまをいう。天台家の奥義で、円融、不次第と同義。

不受余経一偈　法華経譬喩品第三に「余経の一偈をも受けざれ」と説かれている。釈迦仏法では法華経第一のゆえ、その他の経々の一偈をも受けてはならないことを示し、末法では大御本尊が唯一無二の成仏の教えであることを示す。

補処　仏の跡を継いで、やがて仏位に上り仏処を補う位。すなわち等覚の菩薩をいう。しかも一生を隔てて成仏するので一生補処という。釈尊の仏位の補処は弥勒菩薩である。

輔正記　法華経文句輔正記全十巻のこと。唐・道暹の著。法華天台文句輔正記、文句輔正記、また略して輔ともいう。天台の法華文句および妙楽の法華文句記の注釈書である。

不定業　定業に対する語。果報をうけると決まっていない業、または果報を招く時が定まっていない業のこと。不定業は因がいまだ果としての結実を所作のうえにあらわさな

いことといえる。

不生不滅　生滅に対する語。常住の異名。大涅槃の意。不生とは一般的には、生じない、生存しない等の意。仏法上では①如来の異名。②涅槃の意。涅槃経巻第二十一に「不生は名づけて涅槃となす」とある。

覆相教　真実を覆い隠している低い教えをいう。すなわち観心本尊抄には、文底下種の一品二半（大御本尊）のほかのあらゆる教えはぜんぶ覆相教であると説かれている。

扶桑国　日本国のこと。中国の古書にある語で、中国の東方の国を指した。東方架空国という説もあるが、大聖人は日本国の意に用いられた。

扶桑沙門　扶桑とは日本をいい、沙門とは通じて出家の僧をいう。一宗一派に偏せず仏道を修し、日本国の一切衆生を救う日本国の僧という意で、大聖人が法華取要抄（三三一ページ）等に用いられた。

付嘱　相承、相伝と同義。師弟相対の原理により、仏が弟子に法を伝授し、広宣流布ならびに令法久住を託すこと。

武宗皇帝　唐の第十五代の王で、初め念仏を擁護したが、しだいに国が乱れるにおよんで、仏法を破り、寺僧を圧迫した。

傅大士　**啊責謗法滅罪抄**（一一二八ページ）に「弥勒菩薩は傅大士となれり」とある。東陽大士ともいい、中国南北時代、南斉の人で、姓を傅といった。輪蔵の創始者として有名であり、蔵経内に必ず大士の像を安置するという。秀句十勝抄に「梵僧呉にきたりて弥勒を東陽に拝す」とある。七十三歳で寂した。

仏陀伽耶　釈尊初成道の地。インド・ビハール州ガヤ市の南方十一キロにあり、現在はボドガヤーという。摩訶菩提、菩薩道場ともいう。

補陀落山　補陀落迦山の略。インドの南海岸にある山。光明、海島、小花樹の三訳名があり、形は八角といわれている。華厳経には、この山を観世音菩薩の住処と説かれている。

不但空　但空に対する語。通教で説く空観。たんなる空ではなく、仮（現象）に即した空のこと。通教においては宇宙の生滅の現象の当体をそのまま空とし、因果の事相もそのままあるものではなく、無生無滅のものであるとして四諦の理（苦楽の因果）を教える。

不但中　但中に対する語。円教で明かす中道の妙理をいう。円融三諦の中道、空諦・仮諦を包含した中諦をいう。

富単那　陀羅尼品にあげられている餓鬼の梵名。餓鬼のなかでも福が最もすぐれた者。

仏海の白浪　仏海は、仏法を総称したもの、白浪はもとは白波と書き、賊の住所で、賊の意に通じて使われている。すなわち仏法の賊という意味で、念仏の僧などをさす。

仏経　仏像と経巻。

仏禁の違　仏の戒めに違反する人々、すなわち謗法の人々。

仏家の棟梁　仏教のなかでの主人、すなわち最高の教えを弘める人のこと。

仏性　性とは不改の義。本然的にそなわって、無始無終に存続している仏になる性分を仏性という。

仏乗　乗とは梵語の衍（那）の訳。運載、運出、運用の義。仏乗とは仏法を乗り物に譬えて、煩悩業苦に苦しんでいる一切衆生に仏界の生命を与え、一生成仏させる仏法をいう。

仏所護念　法華経序品第一に「諸の菩薩の為に、大乗経の無量義、教菩薩法、仏所護念と名づくるを説きたもう」とある。三世の諸仏が一同に護念してきたところのものとの意。その本体は三大秘法の南無妙法蓮華経である。

仏心　仏の心。また仏心宗という場合は禅宗の異名。

仏祖不伝　禅宗が立てる邪義。仏の真意は禅によって自己が直接悟るものであって、仏祖によって伝えられるものではないとする。しかるに禅宗では、伝法王宗記等において、西天の二十八祖として摩訶迦葉、阿難、商那和修等と東土の六祖として達磨、慧可等を立てている。これは自語相違である。

仏智　事理に通じて日月のように明るい仏の智慧。智の最高を仏智という。仏を信ずることによってのみ得ることができる。

仏意　仏の意。二意に分かれる。①機情に対する語。教え授ける側・能化の意。②仏の観心をいう。末法今時においては、三大秘法の御本尊、すなわち南無妙法蓮華経のこと。

仏知見　仏の悟り。仏の知識、見識。（四仏知見の項参照）

仏法中怨　涅槃経の文で、法を破る者を見て置いて呵責し駈遣し挙処しなければ、この人は「仏法の中の怨」であると説いている。

仏法東漸　正法・像法時代に、仏教がインドから中国、日本へと漸次東方に伝わったこと。（要語解説・仏教史参照）

仏隴寺　天台山中の寺。初め修禅寺といい、後、禅林寺と名づくが、仏隴峰にあったので、仏隴寺（仏隴寺とも書く）ともいった。天台大師が修行した道場の遺跡で、国清寺から二十里上にある。

武帝　中国の武帝。武帝の名をもつ王は七人いるが、仏典や御書等に出てくる武帝の多くは、南朝仏教文化の黄金時代

を現出せしめた梁の武帝をさす。

不動明王　①真言宗の本尊で、五大明王の一つ。大日如来の化身とも、大日如来の命をうけて真言の行者を守る使者であるともいう。②法華経においては、法華経の行者を守る諸天善神の一つ。文底よりみれば、生死即涅槃をあらわす。

富那奢　富那夜奢ともいう。付法蔵の第十で、インドの華氏国の人で仏滅後五百年ごろ生まれ、脇比丘から法を受け、波羅奈国に行化して、馬鳴尊者を化導したといわれる。

船守弥三郎　伊豆伊東の川奈の住人で、大聖人が弘長元年五月十二日、伊東にご流罪になった時、夫婦そろって大聖人を守護し、入信して門下の一人となった。

付仏教　本来は外道でありながら仏法の教えを盗んで自義に混入して小乗教の義を立てるものをいう。付仏法成の外道ともいう。天理教等はこれにあたる。（学仏法成参照）

不変真如　永遠に変わらない真理。迹門の十界互具一念三千の理法は不変真如である。天台は御本尊の出現に先立ち、仏法の極理である一念三千を説いたが、寿量品の文底に秘沈されている三大秘法の南無妙法蓮華経の法体を説いた理であるゆえに、不変である。不変真如の理に対し、それを実践する随縁真如の智は、本門である。御義口伝上（七〇八ページ）に「帰と云うは迹門不変真如の理に帰するなり命とは本門随縁真如の智に命くなり」とあるが、随縁の智も不変の理も、全部この生命の中に含まれている。

付法蔵　釈尊の付嘱を受けて、仏滅後の正法千年の間に出現して仏法を弘めたといわれる二十四人、摩訶迦葉・阿難・末田地・商那和修・優婆毱多・提多迦・弥遮迦・仏陀難提・仏陀密多・脇比丘・富那奢・馬鳴・毘羅・竜樹・迦那提婆・羅睺羅多・僧佉難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜多・婆修槃陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子。二十三人という場合は、末田地を除き、二十五人というときは釈迦仏を入れて数える。付法蔵経にこれらの予言がある。（要語解説三三七ページ参照）

付法蔵経　付法蔵因縁伝。付法蔵二十四人が記されている。

浮木の穴　一眼の亀にとって、最も願っているのは、穴のあいている赤栴檀にあうことである。しかし、これにあうために大変な苦労をする。法華経妙荘厳王品にこの譬えがある。すなわち、末法の衆生が三大秘法の大御本尊にあうことがひじょうに困難であることに譬えている。（松野殿後家尼御前御返事一三九一ページ参照）

覆面舌　迹仏（釈尊等）は色相荘厳すなわち三十二相・八十

種好を具備して法を説くが、覆面舌とは三十二相のなかの広長舌相のことである。すなわち舌が大きくて薄く面をおおって髪際にいたるという舌相である。

不妄語　妄語または綺語に対する語。真実の言葉、実語。

不妄語戒　虚妄不実の語をもって人をあざむくことを禁ずる戒律。小乗教における戒、および大乗戒の十重禁戒などの一つになっている。

附文　元意に対する語。経文の再往深秘の究極の読み方を元意の辺とし、一往浅近の読み方を附文の辺という。

芙蓉　①アオジ科の落葉かん木。②蓮の異名。

不立文字　「教外別伝不立文字」と禅宗が立てている邪義。

不了義経　了義経に対する語で、大般涅槃経如来性品第四に「了義経に依りて不了義経に依らざれ」とある。了義経とは最高の極理を説いた経の意で法華経をいい、不了義経とは義を対了せざる経で爾前経をいう。

富楼那　富楼那は梵語。釈尊十大弟子の一人で説法第一であった。浄飯王の国師バラモンの家に生まれ、釈尊と同時に出生し、釈尊に先立って出家した。友三十名と雪山にはいって外道の法を学んだが、後、釈尊に帰依し、法華経の五百弟子受記品第八で法明如来の記別を授けられた。

不老不死　薬王品第二十三に「此の経は則ち為れ閻浮提の人の病の良薬なり。若し人病有らんに是の経を聞くことを得ば、病即消滅して不老不死ならん」と、法華経の功徳が大であることが説かれている。また、御義口伝下（七七四ページ）に「不老は釈尊不死は地涌の類たり、是は滅後当今の衆生の為に説かれたり、然らば病とは謗法なり、此の経を受持し奉る者は病即消滅疑無きなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者是なり云云」とある。不老不死とは、永遠の生命ということである。

分身散体　中心となる本仏の身体を分けて他の世界に出現し、本仏と同じ仏法と力をもって衆生を利益する働きをいう。日蓮正宗の各寺院・家庭に安置されている御本尊は、弘安二年十月十二日御建立の本門戒壇の大御本尊が分身散体されたものといえよう。

分真即　六即位（理即、名字即、観行即、相似即、分真即、究竟即）の一つ。天台が立てた法華経の修行の六段階の第五。御義口伝下（七五二ページ）には「化他に出づるを分真即と云うなり」とある。

分段同居の古栖　迷いの衆生の住所のこと。分段は分段生死の身をいい、同居は四土のなかの凡聖同居土をいう。すな

わち、われら凡夫の住んでいるこの娑婆世界をさす。

分段の生死　三界六道の生死。いわゆる迷いの生死であり、不善業・煩悩・業の因縁で、六道の間に、それぞれの果報の身を現ずる。分限段落の差があるので分段という。

分別功徳品　法華経の第十七。略広開近顕遠して、菩薩をはじめ大衆は種々の功徳を得たが、その功徳の浅深不同を分別することを説いたので分別功徳品という。前半（一品二半の一半）は、本門の正宗分で、寿量品を聞いて得道した者に法身の記を授け、大衆の供養、領解、分別供養がある。後半は、流通分。寿量品を聞いて一念信解する者は、八十万億那由佗劫の五波羅蜜の行にも過ぎると、現在の四信、滅後の五品の位が説かれている。（要語解説七〇ページ参照）

分別説三　妙法蓮華経の一仏乗から立ち返って、分別して三乗を説くとの意。

へ

平王　周朝第十三代の王で、犬戎の侵略のため都を東方の洛邑に遷した。

炳誡　炳は明らか。誡はいましめ。明らかないましめ。転じて強い処罰のこと。

平左衛門尉頼綱　鎌倉幕府の侍所の権力者。大聖人を迫害し、門下を弾圧した張本人。竜の口の法難や佐渡流罪で法によらない弾圧を加え、熱原法難でも三烈士を断罪にしたが、その後十四年にして謀叛の罪で一家ことごとく滅ぼされた。これ法華の現罰というべきである。

平左近入道行智　天台宗滝泉寺の院主代・行智のこと。弘安元年から約三年間にわたる熱原法難の元凶として邪智奸策のかぎりを尽くした。

璧　珠玉。「二離璧を合わせ」とは、日と月が昼と夜、東と西に相対するをいう。

別円四蔵　別は別教、円は円教である。四蔵は玄義に声聞蔵、菩薩蔵、雑蔵、仏蔵と説き、上からしだいに蔵・通・別・円に配している。観心本尊抄（二四六ページ）に「華厳経・大日経等は一往之を見るに別円四蔵等に似たれども再往之を勘うれば蔵通二教に同じて未だ別円にも及ばず本有の三因之れ無し何を以てか仏の種子を定めん」とある。

別円二教　天台大師は、釈尊一代の経教を五時と八教に分類し、八教はまた化儀の四教と化法の四教に分ける。化法の四経とは蔵・通・別・円である。これは教の内容から分類したもので、別円二教とは別教と円教で、蔵通に比較すれ

ば、さらに高い教えである。別教は華厳経等、円教は法華経である。

別教　天台の教判である化法の四教（蔵・通・別・円）の一つ。別教と名づける理由は、二乗の人をまじえずに説くがゆえに、また前の二教（蔵教・通教）に別し後の円教に別するがゆえである。

別時意趣　別時意・別時・時節意趣ともいい、四意趣の一つである。四意趣とは平等意趣・別時意趣・別義意趣・衆生意楽意趣である。意趣とは仏の説法における言外の意趣のことである。別時意趣とは、たとえば阿弥陀の名を唱えると、極楽に往生するというふうに、方便によって道に入れ、漸次に別時において達せしめるということであり、ただちに得道はしない。事は別時（他日）にあるのに、ただちに得るように説く方法である。

別受戒　通受戒に対する語。別受戒とは、小乗は小乗だけ、大乗は大乗だけの受戒をいう。小乗の別受戒は小乗律部に明かす二百五十戒等の律儀戒（具足戒）をいい、別して出家だけが受ける戒。大乗の別受戒とは一般の大乗戒が三聚浄戒を通じて受ける通受戒に対して別に法華と梵網の戒を受けるのをいう。

別体　①総体に対する語。総体のなかの各別をいう。②または本体に対して別体という。別体の地涌、別体の受持、別体の本尊等がある。

別体の地涌　総体の地涌に対する語。在世における上行、無辺行、浄行、安立行の四大菩薩のそれぞれを別体の地涌という。これに対して四菩薩の働きを一人の身に現ずるのが総体の地涌である。

別体の受持　別体とは総体に対する語。総体の中のそれぞれをいう。受持の一行に五種の妙行を収めるときは総体の受持であり、五種の妙行の一つとして受持を論ずるときは別体の受持である。

別体の本尊　日蓮聖人年譜（富要五巻一一八ページ）に「本尊に二あり先ずは総体の本尊、謂く一幅の大曼荼羅なり、次には別体の本尊なり、別体に付いて又二つあり人の本尊と法の本尊となり」とある。

別付嘱　寿量品第十六の文底に秘沈された三大秘法は、法華経神力品第二十一で、上行菩薩、すなわち日蓮大聖人御一人に付嘱された。これを嘱累品第二十二の総付嘱に対して、別付嘱という。また、二箇の相承についてみれば、池上相承は別付嘱である。

弁阿闍梨　六老の一人、日昭のこと。

卞和　中国の楚の人で、荊山で玉璞を得て、楚の厲王に献じた。王は玉人に鑑定させると玉ではないというので、怒って和の左足を切った。厲王の死後、武王に献じたが、また石と鑑定され右足を切られた。その後、文王の時、和は璞を抱いて荊山の下で三日泣き暮らし、文王に知られ鑑定の結果、はたして宝玉であったので和氏の璧（連城の璧）と名づけ天下の宝玉となった。日蓮大聖人が宝玉たる大白法を弘められるのに大迫害をうけられたことを、卞和が宝玉を献上して両足を切られたことに譬えられた。

辺見　片寄った意見、公正でない見方のこと。仏法では真実の因果を説かない片寄った生命観。見惑の一つで、断見と常見に大別される。断見とは生命を現在だけでとらえ、生で始まり死で終わるとする考え方。常見とは死んでも常に霊魂だけは存生しているという説。どちらも三世の生命、因果の理法を無視した偏頗な見方であるから辺見という。

弁財天　略して弁天。インドの女神で弁才、音楽、財福、智慧をつかさどる神。金光明経には「智慧を益し、言説弁を具足し荘厳せしむ」とある。

扁鵲　中国古代の名医。春秋時代の人で、長桑君より医術を学び、斉や趙で活躍した。

辺執家　片寄った教えに執着して仏の真実の教えに従わない宗派の人々のこと。

変成男子　提婆達多品第十二の文。「変じて男子と成る」と読む。竜女が男子に変じて即身成仏を証明したこと。

偏真の理　円真の理に対する言葉。蔵・通二教の説く空理のこと。これに対して別・円二教の中道の理を円真の理という。ただし別教の中道の理は隔歴の三諦であり、法華経の円理も三大秘法の説明にすぎない。

変毒為薬　（要語解説三〇四ページ参照）

変易の生死　三界六道を出た生死。見思の惑を断じた声聞・縁覚・菩薩等の聖者の生死である。すなわち修行の過程で分段の身を変易して煩悩をたち智慧をひらいていくゆえに変易という。分段・変易の生死を合わせて二種生死という。三世諸仏総勘文教相廃立（五七一ページ）には「菩薩の道を修行して仏に成らんと欲するの間・因は移り果は易りて次第に進み昇り劫数を経て成仏の遠きを待つを変易の生死と云うなり、下位を捨つるを死と云い上位に進むをば生と云う是くの如く変易する生死は浄土の苦悩にて有るなり」とある。

ほ

法位　諸法の住すべき当然の位置、森羅万象の本来あるべき位置をいう。また無明（衆生）と法性（仏界）とが一如の位、すなわち妙法蓮華経をいう。また事物の個性、性質、本性等を法位ということもできる。

傍依経　正依経に対する語。一切経のなかで、本論であり中心的存在である正依経を、側面から助証する立ち場の経をいう。開会の立ち場からいえば、正依経は三大秘法の南無妙法蓮華経であり、他の一切経は傍依経である。

法苑林　法相宗・慈恩の著「大乗法苑義林章」という。七巻からなり、各巻は上下があり、十四巻に分かれる。この著のなかに、一乗（仏乗）方便三乗真実という妄説が述べられている。

法界　御義口伝下（七六九ページ）には「法界とは広きに非ず狭きに非ず惣じて法とは諸法なり界とは境界なり云云」とある。すなわち法とは諸法すなわち宇宙万有をいい、また界とは差別して混乱のない境界をいう。ゆえに法界というのは宇宙万有のすべてである。おのおのは相性体等が異なり、また十界に差別される。

法界一如　森羅万象が、無差別、平等であること。法界とは、十界三千の森羅万象の境界であり、一如とは、無差別、平等、不二の義である。

法界円融・頓極微妙　華厳経の十玄六相の哲学と華厳経の功徳を賛嘆した言葉。

伯耆房　第二祖日興上人のこと。出家したとき、伯耆公と呼ばれた。

方広　附仏法の外道の一人。大乗を学び大乗の理に迷って外道の見解に堕した。

亡国の音　念仏の哀音のこと。

法山之緑林　緑林とは、中国の故事から出た、盗賊の異称。昔、荊州に緑林山という山があったが、前漢の末に、亡命した多くの人々が、この山に集まっていたところから、緑林といえば、賊をいった。法山とは仏法のことだから「法山之緑林」とは、仏法の賊、一念三千の法門を盗みとった真言や、南無妙法蓮華経を唱える邪宗日蓮宗などはこれにあたる。

忘持経事　富木殿が、母親の遺骨を日蓮大聖人のおられる身延へ納め、仏事をすませて帰るとき、持経を忘れた。日蓮大聖人はすぐ修行者に持たせると共に、親子ともに成仏で

きることを述べたお手紙をそえてくださった。この御書を忘持経事（九七六ページ）という。日蓮大聖人は、在世には真言宗、念仏宗、禅宗など、釈尊の本意を知らない者は忘持経のものであり、また、それ以上に経を忘れている者は、末法において日蓮大聖人を誹謗している邪宗教の輩であると申されている。

鳳詔　天子のみことのりをいう。鳳は鳳凰で、鳥のなかの王をいい、天子をあらわす言葉に用いられる。

肪尚光基　神肪・嘉尚・普光・窺基の略で、いずれも玄奘の弟子である。

宝浄世界　法華経見宝塔品第十一の時に来至して、法華経は「皆是れ真実なり」と証明した多宝如来の本土。

法勝人劣　人法一箇に対する語。「法は勝れ人は劣る」と読み、人法勝劣と同意。釈迦仏法は迹中化他の教えであり、仏も世情に随順する色相荘厳の虚仏であるから、法勝人劣である。しかし、大聖人の仏法は本地自行の教えであり、仏は久遠元初の自受用身という御本仏であるから、人法一箇である。

報身如来　法報応の三身の一つ。仏の智慧、働き、精神、性分、性質をいう。末法今時では久遠元初の自受用身の智慧をいう。

宝刹　仏国土の尊称。また仏寺をさすこともある。刹は梵語で土田と訳す。

法蔵　華厳宗の祖師、賢首大師とも、また香象大師とも称す。玄奘三蔵、あるいは義浄三蔵と共に、経典の翻訳に力を尽くした。金獅子章一巻を著わして華厳経の十玄六相の釈を説いている。

報中論三　「報中、三を論ず」と読む。報身を主体として法報応の三身を論ずること。すなわち法華経に三身を説くといっても、正しく自受用報身をもって正意とするのである。ゆえに一身即三身、三身即一身である。われらの生活も法報応の三身のうち報身すなわち智慧が大事である。

宝土　金、銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、真珠、玫瑰の七宝で立派に飾られた仏の国土をいう。仏国土。

宝塔　法華経宝塔品第十一の時、虚空に七宝の塔が現われ、多宝如来が塔の中から釈尊の法華経を「皆是真実」と証明し（証前の宝塔）、ついで本門を説き明かす（起後の宝塔）前段となる。この宝塔は本尊の儀式を顕わす。すなわち久遠元初の自受用身が宝塔であり、妙法の大御本尊を信ずるわれら衆生の肉身が、またそのまま宝塔である。釈尊は宝

塔の儀式をもって、己心の十界互具一念三千をあらわしているのであり、日蓮大聖人は同じく宝塔の儀式をかりて、寿量文底下種の法門を一幅の御本尊として建立されたのである。阿仏房御書（一三〇四㌻）に「若し然れば貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華経と・となうるものは我が身宝塔にして我が身又多宝如来なり、妙法蓮華経より外に宝塔なきなり、法華経の題目・宝塔なり宝塔又南無妙法蓮華経なり……然れば阿仏房さながら宝塔・宝塔さながら阿仏房」とある。

方等経　一には大乗経の意である。また五時のなかには、釈尊が三十歳で成道し、華厳経三七日間、阿含経十二年間説かれた後に、十六年にわたって説かれた大集経・深密経・楞伽経・浄土三部経・真言三部経等の権大乗経をいう。

方等経典　方広平等な大乗経典という意。釈迦一代のもろもろの大乗方等経典をいう。

永道三蔵　もと永道と称し、宋の徽宗皇帝の高僧。宣和元年、帝が詔して仏僧の称号を改めようとしたときに、法道上書して、これを諫め、これにより帝怒って法道の面に火印をおし、江南の道州に放逐した。しかし同七年に許されて帰り、名を法道と改めた。僧史という著がある。

方等十二部経　仏経の経本の、形式上の類別を十二に分かつゆえに十二部経という。方等とは諸々の大乗経は、いずれも三諦（空・仮・中）の法門を述べることが広博なので大乗方等経典というのであり、すなわち大乗経のことをいう。方とは広であり、等とは平等である。すなわち方等十二部経とは大乗の一切経のことをいう。五時に配立した方等部だけでないことに注意。

方等部　釈尊一代の説法を天台が判じて五時（華厳、阿含、方等、般若、法華涅槃）に分けた説法の第三方等時の経文を総括して方等部という。教の高低では釈尊一代教説中では阿含部につぐ低い教えで、権大乗経である。華厳、阿含に次いで十六年間に説かれ、勝鬘経、解深密経、楞伽経、首楞厳経、観経、双観経、阿弥陀経、大日経、金光明経、蘇悉地経、維摩経などが、これに含まれる。

宝塔品　見宝塔品第十一。弘経の功徳が深重であることを説いて、流通を勧めるうちに七宝の塔が大地から涌出して、虚空に立った。その塔を人々が見るので、見宝塔品という。三変土田があり、二仏並座し、三箇の鳳詔をなし、六難九易を示して流通を勧めている。（要語解説六五㌻参照）

法爾の道理　法爾とは自然、天然のこと。宇宙に本来存在す

る自然の道理のこと。

然　わが国念仏宗の開祖で諱は源空という。崇徳天皇長承二年四月七日に生まれ、十五歳で出家し、比叡山で天台学を学んだが、四十三歳の時、慧心の「往生要集」を読み念仏者となった。承元の初め著書のことから土佐に流罪され、建暦元年、順徳帝のときに大赦に浴して帰されたが、翌年死去した。

便現涅槃　法華経如来寿量品第十六の文で「方便して涅槃を現ず」と読む。仏は衆生を救わんがために、方便のために涅槃すなわち死を現ずるということ。生命は永遠であり本有常住であるが、仏は生死の理を示すために死を現ずるのであり、次の新しい生の生命のための方便である。

便土　四土（四種の仏土）のなかの一つ。方便有余土ともいう。方便道を修行して見思の惑を断じて、まだ塵沙・無明の惑を残している二乗・菩薩の住所。

便品　妙法蓮華経方便品第二のこと。十如実相を説いて、理の一念三千を明かしている。（要語解説五七ページ参照）

便品・寿量品を読誦する意味　（要語解説三三三ページ参照）

謗法　誹謗正法の略。正法を謗じて信受しないこと。正法に背くこと。正法不信のこと。また謗法行為の人をさして単に謗法ということもある。（要語解説三〇〇ページ参照）

謗法厳戒　（要語解説三〇〇ページ参照）

鳳文・亀鏡　鳳文とは「賢聖の文章」という意で、亀鏡とは、亀は未来を見通すことを意味し、古い鏡は形をよく写すの意に用いられる。

法用方便　天台が方便を三義に解釈した、その第一が法用方便である。衆生の機根に応じた説法をして、真実の門に誘引する教えの説き方で、小乗経、権大乗経で用いられる。たとえば、声聞には四諦の法を説き、縁覚には十二因縁、菩薩には六度の法を説いたのは、法用方便である。

蓬来山　中国の伝説にある神仙の山。すなわち伝説によれば、渤海のなかにあり、山の高さ三万里、頂上の平処が九千里、金山であり、不老不死の薬があるという。

法楽　①法の楽しみ。妙法により福運を積み自ら法味を楽しむこと。②法会の終わりに伎楽を奏したり詩歌・連歌などをもって本尊に供養すること。③なぐさみ。④素焼きの土鍋。

墨子　中国春秋時代の思想家。魯の人。姓は墨、名は翟。一説には、顔が黒かったので墨と呼ばれたという。著書「墨子」は、兼愛説と非戦論とを唱えたものといわれる。

北狄　中国北方塞外の民族。匈奴、鮮卑、ウィグル、だった

んなどの遊牧民族の称。古来しばしば漢土を脅かした。

北峯　南都に対する言葉で、比叡山延暦寺のことをいう。

法華経の行者　法華経を身口意の三業によって説くごとく修行する者のことである。別しては末法の御本仏日蓮大聖人であり、総じてはその門下の弟子檀那。

法華経の新訳・旧訳　（要語解説三四五ページ参照）

法華経の明鏡　法華経を三世を照らす明鏡に譬えていう。末法今時においては三大秘法の南無妙法蓮華経である。

法華経八巻二十八品　（要語解説五六ページ参照）

鉾　諸刃の剣に長い柄をつけた武器。槍と用途は同じ。

菩薩　梵語を音訳した菩提薩埵の略。覚有情、大心衆生、大士、高士、開士などと訳す。菩提とは悟りのこと。薩埵は有情、生命あるものをいう。生命論からいえば自己の徳性を発揮して他に尽くそうとする生命状態をいう。初発心の時に四弘誓願を立てる。爾前経の菩薩、迹化の菩薩、本化の菩薩等がある。

菩薩の示現生　菩薩が誓願して畜生等の六道の姿をもってこの世に生まれているものをいう。

檀林　寛永十九年（一六四二年）六月三日、日蓮正宗（当時は富士派）と八品派の合同で創立された檀林。旧地名は上総国山辺郡細草村、いまは千葉県山武郡大網白里町にある。

菩提　梵語である。旧訳では道といい、新訳では覚という。成仏の境涯をいう。大論には五種菩提を説いており、煩悩を断尽したときを菩提であるといっている。日蓮大聖人は煩悩即菩提と仰せられ、煩悩は断尽できるものではないと説かれる。

菩提樹　道場樹ともいう。釈尊が、この樹下の金剛宝座に座して仏道を得たために、菩提樹という。釈尊在世には、高さ数百尺で、伐っても高さ四十五丈であり、茎は黄色く枝葉は青翠で、四季を通じてしぼまず、光り鮮やかに色を変えなかった。ところが、釈尊が涅槃する日に、葉がみんな落ちてしまった。しかし、またすぐもとにもどったといわれている。菩提樹の付近に史跡が多い。

菩提心論　竜猛（顕教では竜樹）造、不空訳といわれたり、不空の集となったり一定していない。

発起・影響・当機・結縁　法華文句に説かれている説会の四衆である。発起衆とは、仏に対し説法を請い、あるいは特に疑問を出し、また問答などを起こして、仏の説法を発起し、その化導を助けるのをいう。影響衆とは仏に随侍する

衆生である。当機衆とは、過去の宿善があって時が熟し、縁が合して、仏の説法の当処で得益する機を有する衆生である。すなわち法華経の説法の座において舎利弗等の声聞が受記作仏したのは、この当機衆にあたる。結縁衆とは、未来に得益すべき縁を、その場所で結ぶ衆生である。

法華玄義　天台の三大部の一つ、妙法蓮華経玄義十巻のこと。法華経二十八品の総題である。妙法蓮華経の玄義（幽玄の義）を釈したものである。五重玄義などを説いている。

法華三昧　①法華経の悟り、または悟りを得ようとして一心に修行している境地。三昧とは心を一所に定めて動かないことをいう。末法今時では三大秘法の御本尊を信じ一心に唱題すること。②般若部の法華三昧経一巻をさす。③天台の法華三昧懺儀一巻をいう。

法華折伏破権門理　法華玄義に、法華経と爾前経との教理の相違を述べた言葉で「法華は折伏にして、権門の理を破す」と読む。法華経の開顕は爾前の低い権理を破して、法華経の高い実理をあらわす。法華経は折伏の教法である。

法華宗　（要語解説四〇三ページ参照）

法華秀句　伝教が弘仁十二年（八二一年）に著わした書。全三巻。内容は法華の秀れた句を十種集め諸経より法華経の勝れていることを説示している。

法華文句　天台の三大部の一つで、妙法蓮華経文句十巻の略称。法華経二十八品の文々句々について、科段を分割し、字句を解釈し、旧解を批評訂正して法華独尊の旨義を明かしている。

法華文句記　妙楽の三大部の一つで、妙法蓮華経文句記の略称。天台の法華文句の注釈書。

法華論　法華経を解釈した最古のもので、天台宗、法相宗等はこれを用いる。ただし、法相宗は曲解して五性各別等の論議を立て、天台学とはまったく相反する。

法師功徳品　法華経の法師功徳品第十九。流通分のなかの、弘経の功徳が深いことを明らかにしたなかで、この品は初随喜品の果の功徳を明かして流通を勧めている。総じては六根の功徳を明かし、別してはおのおの清浄を得ることが説かれている。（要語解説七二ページ参照）

法師品　法華経の第十番目の品で、この品から安楽行品第十四までの五品が、迹門の流通分で、在世の人々だけでなく、来世の人々をも利益する説法である。弘経の功徳が深重であることを説き、特に、末法の弘経の人法と、弘経の方程式を示されている。衣座室の三軌もこの品にある。（要

語解説六四ページ参照）

発迹顕本　インドに出現して始めて成仏した釈尊は、衆生を化導するための垂迹であり、その本地は、五百塵点劫以来三世常住の仏である。この始成正覚の迹の姿をひらいて、寿量品において、本地の久遠実成をあらわすのをいう。（要語解説九七ページ参照）

弗沙弥多羅王　阿育大王の末孫にあたる天竺の国王である。王は名徳をあげようとし、群臣にはかったが悪臣の言を入れ、阿育大王と逆のことをやった。すなわち兵をあげ、全インドを回らせて、僧侶を殺し、塔寺を焼き尽くした。しかし多くの神変が起こって、王はついに滅んだという。

法性　諸法の天性。本来みずからそなわっており、他によって改まらないものである。換言すると諸法の実体すなわち悟りというものである。無明に対する言葉である。

法性の淵底　天台の法華文句巻第九上の文。生命の奥底、宇宙の本源、万有の法理である南無妙法蓮華経のこと。（総勘文抄五七一ページ参照）

発心下種　仏の下種をうけて発心すること。聞法下種に対する語。聞法下種は下種をうけてただ法を聞いても信受しない未発心であるが、発心下種とは法を聞き実践修行を心に発願することである。（要語解説三一九ページ参照）

法身の舎利　生身の舎利に対する語。文句巻第八上に「砕骨は是れ生身の舎利、経巻は是れ法身の舎利なり」とある。末法今時では三大秘法の御本尊が法身の舎利である。

法身・報身・応身　仏の三身で、一身即三身、三身即一身である。法身は万物の境、報身は智慧、応身は慈悲である。

法水　仏の教法を水に譬えた。法の水をそそいで、枯れた衆生を救う。また、衆生の心の垢を洗う。水に浅深があるように、教にも、大小があるなどと譬えられる。

法相宗の三時　法相宗では、有教・空教・中道教の名で一代仏教を判別する、これを三時教という。

法相の唯識　法相宗では一切の諸法がことごとく阿頼耶識（第八識）の影像であり唯識の所変であるとする。

法体　法の本体。妙法の法体は、三大秘法の御本尊。

法譬　法説と譬説とをならべていう。譬とは法に対する譬え。

本已有善　「本已に善あり」と読む。本未有善に対する語。本已有善とは釈迦仏法に機縁のあること。

本因　一般的には、ある現象面の根本原因。仏法では成仏するための本源の因のこと。本果に対する語。種熟脱の三益からみれば下種益が本因となる。釈迦仏法では本因初住の

文底に三大秘法が秘沈されている。が、大聖人の仏法における本因こそ真実の本因である。（要語解説二七六ページ参照）

本因下種　本因とは成仏・得道の根本原因のこと。下種とは仏が衆生に成仏・得道の種子をおろすこと。三大秘法の南無妙法蓮華経の種子をおろすことをいう。

本因初住の文底　初住とは、菩薩の五十二位のなかの十住の初めの発心住のことをいい、釈迦仏法で不退の位としている。天台は法華経寿量品第十六の「我れ本菩薩の道を行じ」の文を本因の初住位とした。本因初住に登るには妙法五字の前前の修行があった。三重秘伝抄には「本因初住の文底に久遠名字・事の一念三千を秘沈し給えり云云、応に知るべし後後の位に登るは前前の行に由るなり云云」とある。

本因の境智行位　（要語解説二七五ページ参照）

本因本果　本門の十界の因果のことで、十界の因果とは地獄界・仏界等の十界にまたおのおの十界を具足しているという場合もあり、九界を因となし、仏界を果となすという場合もあるが、これは後者の意である。すなわち仏界を打ち破ればその九界も破られ、寿量品においては仏界の常住と共に九界の常住を説き顕わすゆえに、本有常住の十界が説き顕わされ、これを本因本果の法門というのである。

本因名字　成仏の根源となる最初の修行の位、すなわち南無妙法蓮華経を初めて受持した位。本因とは仏になる根本の原因で、名字とは名字即の凡夫である。

本果　成仏したという結果。本因に対する語。釈迦仏法では五百塵点劫の第一番成道をいう。

梵漢　梵と漢、インドと中国をさす。

本化の四菩薩　涌出品第十五のときに、地から涌出した本化の菩薩の上首である上行、無辺行、浄行、安立行の四人の菩薩、神力品第二十一で、三大秘法を付嘱された。

本化付嘱と迹化付嘱　（要語解説一一五ページ参照）

本眷属妙　本門が、他の経より勝れている妙義を十種に天台が分別した、本門の十妙の一つ。久遠本仏の説法をうけた本眷属であるという妙。

本国土妙　本門の十妙の一つ。寿量品第十六の「娑婆世界、説法教化」の文。仏は浄土のみにいて、娑婆世界にはいないというのが、法華経以前の学説である。しかし寿量品には「娑婆世界」という本国土妙が説かれている。それは仏が娑婆世界に、凡夫と共に、菩薩と共に、また声聞・縁覚と共に、あるいは畜生・餓鬼などと共に、みな一緒に十界おのおの同居している。この不思議さを本国土の妙という。

本極法身　究極の真身、生命という意で、寿量品の仏を法身からみたならば、縦横に比べることのできない唯一の法身であるという。玄義に「本極法身微妙深遠」とある。

本時　寿量品第十六に、本因・本果・本国土が説かれ、久遠常住が説かれたときをいう。しかし、その文底の意は、末法に三大秘法の大御本尊が建立されるときを本時という。

本迹相対　（要語解説一四二ページ参照）

凡聖同居土　四土の一つ。天台宗所立の四土の第一にある。同居土、染浄同居土、染浄国ともいう。凡夫も聖人も共に住む国土という意。

本尊　本尊とは外道内道・大乗小乗・権教実教・迹門本門・脱迹種本に通じて、皆それぞれの本尊がある。すなわち本尊とは「根本となして、尊崇する」の義である。

本地自行　大聖人の仏法たる三大秘法の南無妙法蓮華経のこと。釈迦仏法の迹中化他に対する語。この場合の自行化他は修行ではなく法門に約し、自行とは仏の随自意の教え、化他とは随他意の教えをさす。

本朝の六統　本朝は日本国のこと。六統は統とは僧統で僧侶のこと。また六統とは六人の僧統、すなわち伝教大師の法華経大乗戒に反対した南都（奈良）の大僧都・護命、興福寺の少僧都・長慧、唐招提寺の律師・豊安、興福寺の律師・修円、西大寺の律師・泰演、元興寺の律師・施平の六人をさす。

梵天　色界の初禅天にいて娑婆世界を統領する色界諸天王の通号である。

本土　迹土に対していう。真実の本仏、円仏の住所のことで常寂光土ともいう。開目抄下（二一四ページ）に「此の土は本土なり」とある。

本因妙　天台が玄義巻第七に本門の十妙を説いたが、その第一が本因妙であり境智行位を説く。天台家の本因妙とは寿量品の我本行菩薩道の文であり、大聖人の仏法の本因妙とは久遠元初の大昔に一迷先達の時をいう。本因妙、本果妙、本国土妙を三妙という。

本因妙の教主　久遠元初の自受用身、末法の御本仏日蓮大聖人をいう。大聖人の仏法は本因妙を主体とするゆえである。釈尊は本果妙の教主である。

本有常住　法華経寿量品で説く生命観。本有とは、生命が、もともと、大宇宙と共に、有ったものということ。常住とは、その生命は、大宇宙と共に、永遠に続いているということであり、無始無終であり、常にこの大宇宙にあるとい

うことである。

本有の三因　三因は正因・了因・縁因の三因仏性であり、本有は久遠より常住しているの意。

煩悩障　天台の摩訶止観第五にあり、兄弟抄などの御書に出ている三障の一つ。貪（むさぼり）瞋（いかり）癡（おろか）などによって起こるわざわい。

煩悩即菩提　煩悩がなければ悟りはない。着物がほしいと思う心は煩悩で、買って満足することが菩提である。人生には悩みがあるが、その悩みが悩みでなくなったところが菩提である。悩みがあるので信仰し、信仰するから願いがかなって幸福になる。これが煩悩即菩提である。御義口伝上（七一〇ページ）に「今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉るは……煩悩の薪を焼いて菩提の慧火現前するなり煩悩即菩提と開覚するを焼則物不生とは云うなり」とある。（要語解説二六六ページ参照）

梵音声　仏の優れた音声をいう。仏の三十二相の一つ。

凡夫　梵語で波羅といい、旧訳では凡夫といい新語では異生という。聖者に対する言葉。法華経譬喩品第三に「凡夫浅識の深く五欲に著せるは、聞くとも解すること能わず」と説かれている。

凡夫僧　末法の御本仏日蓮大聖人は凡夫僧として出生された。御義口伝下（七六六ページ）には「末法の仏とは凡夫なり凡夫僧なり」とある。色相荘厳の仏は迹仏である。

凡夫即極　三大秘法の仏法は、凡夫が即身成仏できる仏法である。三大秘法を信じて凡夫が即仏になることをいう。

本仏・迹仏　①本仏とは、本門久成の釈尊のこと。迹仏とは、本門久成の釈尊が垂迹して本無今有の一念三千十界の理常住を説く仏。②凡夫は体の三身だから本仏であるに対して、用の三身たる仏を迹仏という。③本地仏、乗迹化現の迹仏。御本仏日蓮大聖人以外はすべて迹仏である。

本仏論の遮難　（要語解説二七八ページ参照）

本間六郎左衛門尉　本間重連。佐渡の国の新穂の地頭で、その管内に塚原の三昧堂がある。相模の依智に本館があった。塚原問答の席におり、大聖人より内乱を知らされ、的中に驚き、心では信心の気持ちを起こす。

本未有善　釈迦仏法に機縁のない衆生。すなわち末法の衆生は本未有善である。末法の衆生は大聖人の仏法に有縁なのである。

本無今有　迹門で成仏を許された者は、本が無くて今仏になるといわれ、また仏も久遠を説いてないから本が無く今有

る。したがって、説く法門も本が無くて今有る法を説いているにすぎない。本門の本有常住に対していう。

本面迹裏　迹面本裏に対する語。文底独一本門事の一念三千から立ちかえってみれば、本迹二門も迹門理の一念三千となる。天台は、法華経迹門を面とし、法華経本門を裏として、一念三千の法門を説いた。これを、迹面本裏といい、これに対して、末法の御本仏日蓮大聖人は、文底独一本門を面とし、迹門理の一念三千を裏として、事の一念三千を説かれた。これを、本面迹裏という。

梵網　梵網経に説かれている戒律で、十重禁戒・四十八軽戒をさす。いずれも大乗戒である。

梵網経　二巻あり、鳩摩羅什の訳。上巻には菩薩の三十心・十地の法門を説き、下巻には釈尊の成道を示して、十重禁戒・四十八軽戒を明かす。下巻は、もっぱら戒について説かれているので「菩薩戒経」といわれる。

本門戒壇の大御本尊　（要語解説二二五㌻参照）

本門の戒壇　三大秘法の一つ。本門の本尊の御安置されたところが、すなわち本門の戒壇である。

本門の肝心　本門の言は迹門を簡び、肝心の言は文上脱迹を簡び、文底種本を顕わす。肝心、肝要というのは、文底をさす。本門の肝心とは南無妙法蓮華経のことである。

本門八品の意味　（要語解説一〇二㌻参照）

本門法華宗および仏立宗等　（要語解説三九七㌻参照）

ま

魔　梵語。能奪命・障礙・奪功徳者などと訳す。人命を害し、人の善事を妨げる性質をもち、三魔・四魔・十魔等に分け、主領は欲界に住む第六天の魔王である。末法今時においては、三大秘法の御本尊を信受し成仏を目指すものを妨げる働きをいう。兄弟抄（一〇八七㌻）に「此の法門を申すには必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず」とある。

摩訶衍　梵語、詳しくは摩訶衍那。大乗と訳す。

摩訶迦葉　摩訶は大の義、迦葉は梵語。釈尊十大弟子のなかで、頭陀第一といわれ、難行苦行の徳がある。迦葉尊者ともいい、生まれたときは、身に一由旬を照らす光明を放っていたという。法華経の授記品第六で光明如来の記別を受け、釈尊涅槃の座に連なり、正法の付嘱を受けて付法蔵の第一として、仏滅後二十年間、小乗教を弘通した。

摩訶迦旃延　釈尊十大弟子の一人で、論議第一であった。法

華経にきて、授記品第六で、閻浮那提金光如来の記別を受けた。

摩訶止観　（要語解説一一七ページ参照）

摩竭提国　インドの摩竭提地方の、仏教に最も縁のある王国である。西紀前六百年より最初の王朝が始まり何回も王朝が変わった。釈尊在世には有名な頻婆沙羅ならびに阿闍世が国王であった。孔雀王朝には阿育大王、賓頭沙羅王が諸国を併呑して君臨し、玄奘三蔵の代には戒日王が統治した。この国には仏教の事跡が多い。すなわち伽耶城・王舎城・竹林精舎・菩提樹・提婆と馬鳴の史跡・鶏園寺・鶏足山・目連の故郷等々である。

摩訶波闍波提比丘尼　釈尊のおばで、憍曇弥という。

摩醯首羅天　大自在天といい、色界の頂にいる。目が三つ臂が八本あり大白牛に乗る。欲界の頂にも大自在天がおり同名異体である。

摩睺羅伽　八部衆の一つ。大蟒神・大腹行と訳す。

摩頂付嘱　法華経嘱累品第二十二において説かれる付嘱で、総付嘱とも三摩の付嘱ともいう。すなわち、仏は法座から立って、右の手で無量の菩薩の頂を三度摩で弘経を付嘱する儀式をいう。

末法　釈尊滅後二千年以後、第五の五百歳闘諍堅固・白法隠没以後を末法といい、釈迦仏法の功徳がなくなり、日蓮大聖人の文底秘沈の大白法が流布するときである。

末法の観心　（要語解説二六〇ページ参照）

末法の弘通　（要語解説一七三ページ参照）

末法の御本仏　（要語解説二四一ページ参照）

末法の四故　天台の四故に対する語。釈迦滅後、三大秘法を日蓮大聖人のみが、よく弘通された四つの理由（①自身能堪のゆえ。②所被の機縁に由るがゆえ。③仏より譲り与うるゆえ。④時すでに来たるゆえ）をいう。

末法無戒　釈迦仏法の細かい戒律は末法に必要ないことをいう。末法においては、受持即持戒といって、三大秘法の大御本尊を受持し、唱題・折伏に励むことが、そのまま戒を持つことになる。

末田地　付法蔵第三祖阿難の弟子といわれ罽賓国に布教し、また竜王教化のことも、西域記に伝えられている。

摩騰　摩騰迦の略称。中インドの人で大小乗経を解し、あるとき、西インドで一小国のために金光明経を講じて敵国の侵害を防いで、大いに名をあらわしたという。後に竺法蘭と共に、漢の明帝の請いをうけて中国にはいり、道士の褚

善信等と法論して破り、中国仏教開宣の端を開いた。

摩沓　教論派の学者で広学多聞であったが、徳恵菩薩のために折伏され六日目に血を吐いて死んだと、西域記にある。

摩騰迦　略して摩騰という。

魔の通力　（要語解説三二七ページ参照）

麻畝の性　麻のようにまっすぐには生じない草でも、麻畠の中に生ずれば、周囲の麻と共に自然にまっすぐに成長することをいう。すなわち、邪法を信じ、誤った思想に陥った者も、正法を持つ正しい思想をもった者に感化されて、正しい思想をもつようになること。

摩耶経　上下二巻からなり、粛斉の曇景の訳。「仏昇忉利天為母説法経」ともいう。この経には仏が忉利天にのぼり母である摩耶夫人のために説法して初果の益を得させ、後に、仏涅槃の時、摩耶が棺所におもむくと、仏棺が開いて千の化仏が現われて母子相見えたということが説かれてある。

摩耶夫人　釈尊の生母。善覚者の長娘であり、浄飯王の后となった。悉達太子、後の釈迦牟尼仏を生んでほどなく亡くなり、忉利天に生まれたので、釈尊は摩訶摩耶経を、母のために説いている。

摩黎山　南天竺の秣羅矩叱国にあり、栴檀の木が茂っているといわれている。大智度論などに、栴檀は、摩黎山以外にないと説かれている。

曼荼羅　梵語。功徳聚ともいう。御本尊のこと。

み

未有一人得者　法華経では、未だ一人も得道した者がない、という念仏宗の邪義。中国における浄土宗の僧・道綽が安楽集のなかで、法華以前の経を聖道門と浄土門に分け、歴劫修行の聖道門を捨てよと説いた。これを法然が法華経をも歴劫修行の聖道門に含め、これらでは、いまだ一人も得道した者はないと説いた。

御教書　鎌倉時代の幕府の命令書であり、現在の国家の姿からみれば、国会の議決によって公布される文書にあたる。

未顕真実　法華経の開経たる無量義経説法品第二において「四十余年には未だ真実を顕わさず」と説かれている。

未顕と已顕　法華経の開経である無量義経に「四十余年未顕真実」とあるので、法華経以前はまだ真実でなく、法華経にいたって真実が説かれるから、法華経を已顕とするのである。

未生怨　阿闍世王のこと。未だ生まれないときから怨みをも

っているというので末生怨と名づけられた。大成して後、父・頻婆沙羅王の怨となった。（阿闍世王の項参照）

味・浄・無漏　三種の禅定である。禅には世間禅、出世間禅、上上禅があるが、味・浄・無漏とはこのうちの世間禅、出世間禅のことである。すなわち世間禅に根本味禅、根本浄禅の二つがあり、無漏禅とは、出世間の禅で二乗・菩薩もこれを修するという。

未曾暫廃　法華経寿量品第十六の文。「未だ曾て暫くも廃せず」と読む。仏は衆生を救うことを少しもやめないこと。

弥陀三尊　阿弥陀仏とその脇士である観音菩薩、勢至菩薩。

密教　真言宗の判釈で真言宗以外の教を顕教、真言宗の教を密教と立てている。東寺真言（東密）と天台真言（台密）とがある。しかし真実に文底下種の法門こそ密教である。

未得道教　得道教に対する語。成仏できない教え。法華経は得道教であり、爾前は未得道教である。

身延の教義と本尊　（要語解説三九四㌻参照）

身延離山　（要語解説三五八、三九二㌻参照）

未萌　未萌とは、草木のいまだ萌芽を生じないことをいい、これより転じて、将来必ず起こるべくして、いまだ起こらない状態をいう。外典では「聖人は未萌を知る」と説いている。聖人知三世事（九七四㌻）に「委細に三世を知るを聖人と云う」とある。

未発迹　未だ迹を発わず、ということ。顕本以前・始成正覚の迹仏の説く爾前経および法華経迹門をいう。

名異体同　名は異なるが、その説く法体は同じであるとの意。

妙音菩薩品　（要語解説七四㌻参照）

妙覚　天台の立てた五十二位の菩薩道の究竟の位で、一切の煩悩を断じ尽くした仏果の位をいう。

名号　一般には、名前、名称尊号、徳号のこと。仏教では東方の善徳仏、東南方の無憂徳仏、南方の栴檀徳仏、華光如来等々それぞれの仏の名称をいう。しかし、念仏宗で名号というとは阿弥陀の名号を意味し、南無阿弥陀仏の口唱を名号という。

名字即　天台大師が法華経を修行する人を六段階に分けたうちの第二で、初めて仏法の信仰にはいった位を名字即という。三世諸仏総勘文抄（五六六㌻）に「一切の法は皆是れ仏法なりと通達し解了する是を名字即と為す名字即の位より即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し」とあり、日蓮大聖人の仏法には、修行の段階はないが、御義口伝下（七五二㌻）に「頭に南無妙法蓮華経を頂戴し奉る時名字

即なり」と仰せられているように、御本尊を拝んで題目を唱える者が名字即である。しかも日蓮大聖人の仏法では、「ただ信心唱題するだけで、名字即がそのまま究竟即という最高の成仏の境涯になるのである。

名字の凡夫　名字即の凡夫をいう。

名字妙覚　名字とは名字即の凡夫、妙覚とは五十二位の最高位で成仏の境涯。すなわち名字妙覚とは、名字即の凡夫が三大秘法を信じて、そのまま即身成仏することをいう。

明珠淤泥　涅槃経のなかに、一闡提の成仏できないことを譬えた十譬のなかの第三の譬えの言葉、すなわち明珠を濁水の中に入れるときは、その威徳によって水を澄ませることができるが、もし泥の中に投げ込めば清水にすることができないとして、五無間罪四重禁を犯した衆生を濁水に譬え、一闡提を泥に譬えてある。

妙荘厳王　法華経妙荘厳王品に説かれる王。初め外道を信じていたが、浄徳夫人と浄蔵・浄眼の二人の子供の導きで雲雷音宿王華智仏の化導で正法にはいり、国を弟に譲って出家し、法華経を信じ娑羅樹王仏と記別された。そして釈尊の法華経説法の会座で華徳菩薩として釈尊の説法を助けた。その過去の因縁をたずねれば、仏道を修行しようと志した四人のうち、食事などの給仕をして三人の仏道修行を助けた功徳によって国王に生まれたのである。

妙荘厳王本事品　（要語解説七六ページ参照）

明星天子　三光天子の一つ。法華経を行ずる者を守護する。

名体宗用教の五重玄　名は名称、体はその本体、宗は他と区別される特質、用は働き・作用、教はその活動の影響。天台は法華玄義において、この五重玄の範疇で、法華経の深い義を明かした。万法は、すべてこの五重玄をそなえている。妙法蓮華経の題目も、仏の法体(体)、因行果徳(宗)、力用(用)、化導(教)等いっさいをそなえている。

冥伏　本質的に実在しているが、現実には顕現せず、空の状態にあることをいう。たとえば、いま笑っている人にも怒りの心がある。しかし、笑いと同時に怒りは出てこない。このようなとき、怒りがないとはいわず、冥伏しているという。私たちの生活には常に十界が冥伏しており、縁にふれて瞬間瞬間に一界を現ずるのである。

弥勒菩薩　慈氏と訳す。名は阿逸多、無能勝とも訳す。天竺波羅奈国のバラモンの家の生まれ、釈尊の仏位を継ぐべき補処の菩薩となり、釈尊に先立って入滅し兜率の内院に生じた。法華経では重要な菩薩で序品第一では文殊に、涌出

品第十四では釈尊に問いを発し、寿量品第十六・分別功徳品第十七・随喜功徳品第十八では対告衆である。また弥勒のために菩薩の行法を説いた弥勒問経がある。観心にて拝すれば御義口伝下(七六〇ページ)には「彼の為に悪を除くは即ち是れ彼が親なり」のゆえに、弥勒(慈氏)とは末法の法華経の行者(御本仏日蓮大聖人)であると仰せられている。

む

無為涅槃　有為涅槃に対する言葉。無為とは、造作遷流のない意味で、因縁和合によってつくられた仮の法でないこと。無為の境涯に達するのを涅槃といい、このゆえに無為涅槃という。この無為の境涯にも、小乗、大乗、権実等の別があり、真の無為涅槃は、大御本尊なしには論じられない。成仏こそ〝無為〟の境涯である。日蓮大聖人は聖愚問答抄(四九四ページ)に「無為の宮に優遊せん事疑なかるべし」と、正法に帰依すれば、永遠の幸福に、悠々と遊び楽しむことができると仰せられている。

無依無得大乗四論玄義記　略して大乗四論玄義ともいう。唐の均正(恵均僧正)の著で十巻からなる。

無戒　持戒に対して、戒を受けず、また、無用なり、ということ。①無戒・邪見の者という場合は、戒も受けず、勝手な邪義をかまえるものの意。②末法無戒という場合は、末法に釈迦仏法の戒律は無用であるという意である。

無眼の者・一眼の者・邪見の者　それぞれ仏法にまったく無知の者、仏教の一部しか知らない生かじりの者、仏法を自己流に曲げて解釈し邪説を立てる者をいう。

無垢世界　法華経の提婆達多品に説かれた八歳の竜女が作仏した国土の号で、離垢世界ともいう。

無垢論師　小乗の見をもって大乗を誹謗し、天親菩薩に反対して舌が五つにやぶれ地獄へ落ちた。

無解有信　解とは智慧の異名であり、実際生活にあって具体的に働く智慧の意味。信とは大御本尊を信ずること。すなわち、智慧・学問はなくとも信心のあること。

無間地獄　八大地獄の一つ。第八の阿鼻地獄のことで、顕謗法抄(四四七ページ)に「前の七大地獄並びに別処の一切の諸苦を以て一分として大阿鼻地獄の苦一千倍勝れたり」また「若し仏・此の地獄の苦を具に説かせ給はば人聴いて血をはいて死すべき故にくわしく仏説き給はず」等と仰せである。五逆罪をつくる者、正法誹謗の者はこの地獄に落ちる。

無作の三身　無作とは、つくろわず、はたらかさず、ありの

ままということ。生命にはすべて法身（生命）、応身（肉体）、報身（智慧）の三身を具している。法身が永遠であることは、すでに諸経に説き明かされているが、寿量品で初めて三身がそのまま本有常住であると、三身の常住を説いた。三身の常住は、仏法の核心であり、一身即三身の無作三身如来は、別しては日蓮大聖人である。御義口伝下（七五九ページ）に「一念三千即自受用身・自受用身とは尊形を出でたる仏と・出尊形仏とは無作の三身と云う事なり」また同じく「無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働かざるなり」とある。

無色界　仏教の世界観である三界の一つ。精神の世界であり、物質のない世界で最上の天上界。

無師智　仏の智慧をいう。仏は師無くして悟りを得るのであるからこのようにいう。

無常　二乗は世間の無常を観じて空寂の涅槃に帰するのを極地となした。常住に対する言葉である。

無性有情　法相宗で立てている五性各別のなかの一つ。五性各別とは一切衆生に本来五種の性があって、仏の経教はその五種に対して別々に説かれたと説く。成仏できない有情を無性有情という。

無上道　この上もない道、仏法の最高峰すなわち三大秘法の大法のこと。御義口伝下（七五九ページ）に「無上道とは寿量品の無作の三身なり此の外に成就仏身之れ無し、今日蓮等の類い南無妙法蓮華経と唱え奉る者は成就仏身疑無きなり」とある。

無勝童子　釈尊に、土の餅を供養した童子。釈尊が、弟子を連れ、王舎城に乞食をしたとき、無勝、徳勝という二童子があって、砂で遊んでいたが、釈尊のすばらしい姿に歓喜し、何もなかったので、土でつくった餅を釈尊に奉った。この無勝童子は、釈尊滅後百年に土の餅を供養したその功徳によって阿育大王として生まれた。阿育王は、正法をもって世を治め、八万四千の塔を造り仏法を興隆した。

無生忍　法華経で、阿闍世王が得たといわれる悟り。円教の初地あるいは七八九地。

無上宝聚不求自得　法華経信解品第四で四大声聞が領解したときの語。声聞が、阿羅漢の法に満足していたところ、法華経の会座にきて、舎利弗が成仏したのを見、自分たちも仏になれるのだと喜んで「無上の宝聚、求めずして自ら得たり」と述べた。無上宝聚とは、爾前有上・迹門無上、迹門有上・本門無上、脱益有上・下種無上と読むべきで、文

底下種の大御本尊に釈尊の因位の万行、果位の万徳の宝を集めているゆえに無上宝聚である。何の辛労も、行も積まずに、ただ信心、題目を唱えることによって、功徳を得ることができるので不求自得という。（御義口伝上七二七ページ参照）

無生法忍　菩薩の悟り。大智度論巻第五十に「無生法忍とは、生滅無き諸法実相の中に於いて、信受し通達して、無礙不退なり」とあり、大智度論巻第八十六には「是の無生忍を得るが故に、即ち菩薩の位に入る」とある。

無上菩提　無上とは、有上に対する言葉で、この上もない、最もすぐれていること。菩提とは、成就であり、悟り。

無著菩薩　正法時代の末、インドの健駄羅国に生まれた。世親菩薩の兄で、世親は初め小乗の論師であったが、無著の論破にあって、ついに大乗の論師となった。著に「摂大乗論」等がある。

無二亦無三　法華経方便品第二のなかの文で「十方仏土のなかには、唯一乗の法のみ有り、二無く亦三無し、仏の方便の説をば除く」とある。すなわち宇宙には成仏できる最高の法は、法華経（末法では南無妙法蓮華経）のみであって、他には二もなく三もないとの意。

無の玄　老子は虚無を本として教を立て、虚無の道は天地を分かたず万物を生じないところに立てた道理としている。

無問自説果分勝　法華秀句に、法華経がことに勝れていると、十の特色が述べられていて、これを十勝というが、これはそのうちの一つ。法華経は、釈尊が、二乗や菩薩の問いを待たずに自ら説き出すが、この説法の方式を「無問自説」という。内証の果分の妙法、果分の神力、果分の秘蔵、果分の深事がいずれもすぐれていることが説かれている。

無余涅槃　小乗教で説く二乗の最高の悟り。有余涅槃に対する言葉であり、一切の煩悩を断じ尽くした境涯。この境涯をつかむためには煩悩を断じ尽くして、灰身滅智する、身体も心も焼き尽くしてしまい、再び生まれてこないようにすると説く低い教えである。

無量阿僧祇劫　別教の菩薩は、歴劫修行を重ね、無量阿僧祇劫を過ぎるという。

無量義　無量の義。爾前の四十余年の経教に、教・行・人・理ともに無量の義が説いてある。無量義経に「無量義とは一法より生ず」とあり、真実は無量の義は南無妙法蓮華経の一法より生ずるのである。

無量義経　（要語解説七七ページ参照）

無量義処三昧　三昧とは、梵語であり、訳せば、定、正受、正心行処などといい、心を一つのことに定めて動かさず、仏法の哲理を思索すること。序品第一で、釈尊がこの三昧にはいっていた。すなわち、無量義経に説かれている「無量の義とは一法より生ず」という仏法の哲理を深く思索した。一法とは三大秘法の南無妙法蓮華経のことで、宇宙のあらゆる現象は、南無妙法蓮華経の一法より生ずるということ。文底では、一心に御本尊を拝んでいる境涯をいう。

無量寿仏　阿弥陀仏のこと。また無量光仏ともいう。すなわち、浄土三部経に説かれた浄土宗の本尊であるが、権仏である。

無漏智　漏とは煩悩の異名。無漏とは煩悩のなくなったことで、声聞縁覚の悟りである。煩悩がなくなれば、物事を正しく分別し判断することができるというので、無漏智という。大御本尊の智慧とは比較できないほど低い智慧である。

め

冥途　亡者が迷って行く道、死後の世界。

馬鳴菩薩　付法蔵の第十一祖、仏滅後六百年ごろに出現して、大いに大乗教を弘通した正法時代の正師である。

面授口決　深秘の法門を直授すること。面授は、まのあたり授ける。口決は口伝と同じ。日蓮大聖人は三大秘法を、地涌の菩薩の上首として、教主大覚世尊から口決相承したといわれているが、文底は御本仏である。三大秘法抄（一〇二三㌻）に「此の三大秘法は二千余年の当初・地涌千界の上首として日蓮慥かに教主大覚世尊より口決相承せしなり、今日蓮が所行は霊鷲山の禀承に芥爾計りの相違なき色も替らぬ寿量品の事の三大事なり」とある。

も

毛宝が亀はあをの恩をわすれず　捜神記、蒙求、事文類聚等の諸書に伝えられる中国の故事から引かれたもので、大要は、毛宝という者がある日川へ行き、漁夫が一ぴきの白亀を獲ったのに会い、その亀を自分の着物と交換して買い受けこれを救った。後年、毛宝が邾城の警備の任についたとき、敵の大軍に攻撃され、陥落した城をのがれて川岸にいたったとき、むかし救った亀に会い、その背に乗って川を渡り、危難をまぬかれたという。あお（襖）とは一義に衣類の意で、衣類を売って買われた恩といい、また一義には「ふすま」の意で、ふすまの陰にて養われた恩ともいう。

前説をとるべきである。

濛霧の迷　もや、霧の中で迷っているように、宗教の正邪に迷い正法を見失っていること。

目連　大目犍連ともいう。釈尊十大弟子の一人で、神通第一であった。目連の過去世の母・青提女が、慳貪の罪によって、五百生もの間、餓鬼道に落ちているのを、目連の神通力によって知ることができた。目連は、その苦しみを抜こうとするがかなわず、法華経によってやっと救うことができた。目連は授記品で多摩羅跋栴檀香仏の記を受けた。釈尊入滅の前に、羅閲城にはいり托鉢していたとき、竹杖外道に囲まれ、脱出はするが、過去の業であることを知り、外道に殺されて業を滅した。

目犍尊者　目連のこと。

物類冥召　同類が秘かに通じ合わせる、ということ。

文義意　文とは説かれた経文。義とは、その経文の所詮の実理。意とは根本、肝要、元意である。四信五品抄（三四二ページ）には「妙法蓮華経の五字は経文に非ず其の義に非ず唯一部の意なるのみ」とある。

文殊　文殊師利菩薩をいう。吉祥等と訳し、迹化の菩薩の上首で諸経に活躍する。法華経序品では、過去世に妙光菩薩として生現したというので、釈迦仏の九代前の師となっている。また提婆品では、竜宮におもむき、八歳の竜女を化導している。また観心本尊抄（二五一ページ）の下の文には、東方金色世界の不動仏の弟子となっている。

文証　（要語解説一四七ページ参照）

文上顕本　発迹顕本に文上と文底と二種あり、文上顕本とは法華経本門寿量品で釈尊が五百塵点劫の本地を顕わしたことをさす。

文底下種三段　（要語解説一五四ページ参照）

文底顕本　文上顕本に対する言葉。顕本とは、久遠の本地を開顕すること。文上顕本では始成正覚の迹を発って五百塵点劫の本地を開顕するが、文底顕本では、その五百塵点劫の迹を発って、久遠元初の本地を顕わす。

文底独一本門　仏教の極理である日蓮大聖人の本因妙・事の一念三千の仏法。文上の本迹二門を通じて迹門・理の一念三千とし、それとは峻別して一重立ち入って立てるから独一本門という。

文底秘沈　（要語解説一五三ページ参照）

聞法下種　仏の下種をうけて、ただ法を聞いたが、まだ信受しない未発心の姿をいう。発心下種に対する語。（要語解

説三一九ページ参照）

蠢蝡戒　蠢は蚊。蝡は虻。法華経の戒に対して、小乗の戒を難じてこのようにいう。三大秘法の本門の大戒壇に対しては、すべて蠢蝡戒に等しい。

や

亦有亦無　三玄の一つで荘子が立てた。自然を本とし、自然には有の辺もあり無の辺もあるとする。

薬王　薬王菩薩。星宿光といい、瑠璃光照仏の滅後、日蔵比丘が正法を宣言するとき、雪山の上薬をもって衆僧に供養し、未来世において、衆生の心身の二病を治せんと誓願を立てた。それ以後、薬王といわれるようになった。法華経の会座に列しては迹門流通の対告衆の首位となっている。

薬王菩薩本事品　（要語解説七四ページ参照）

薬師経　唐の義浄、玄奘など四訳があるが、多くは、玄奘の訳。七難が説かれている。

薬師如来　東方浄瑠璃国の教主で、十二誓願を起こし衆生の病気を治すことを誓った。日光菩薩と月光菩薩は脇士である。伝教は比叡山の根本中堂の本尊を、法華経寿量品の釈尊の分身、良医を本として薬師如来を本尊とした。しかし久遠元初自受用身よりみれば、迹中化他の迹仏にすぎない。

薬草喩品　（要語解説六二ページ参照）

夜叉吉遮　夜叉は、八部鬼衆の一つ。暴悪を事とする鬼類で、天夜叉、地夜叉、虚空夜叉があり、天と虚空の二夜叉はよく飛行するといわれる。吉遮は、死者を起たしめ、怨ある人を害せしむといわれている。

耶輸多羅比丘尼　釈尊が悉達太子であったときの妃である。耶輸陀羅、耶輸檀といい、華色、名聞と釈す。羅睺羅を生み、釈尊の成道の後、願って出家し初めての比丘尼となった。

約教約部　天台の立てた義。約教とは八教（蔵・通・別・円・頓・漸・秘密・不定）に約すことをいい、約部とは部すなわち五時（華厳・阿含・方等・般若・法華涅槃）に約すのをいう。共に天台の三種教相の一つである根性の融不融の下にあって、約教は約部に対して部内の教当分（五時の一）について融不融を判ずる当分の義である。約部は約教に対して釈尊一代五時の全体に通じて、その化導の各部節を越えて化導のさまを明かす跨節の義をいい、このことを約教当分、約部跨節という。

宿谷左衛門入道光則　鎌倉幕府の臣で、北条時頼、時宗に近く仕えていた。立正安国論は大聖人より、宿谷入道の手を

経て献上された。極楽寺良観等に帰依していたが、のち改宗し、日蓮大聖人に帰依した。宿谷は宿屋とも書く。

宿屋禅門　宿屋左衛門入道光則のことである。時頼、時宗の側近の士。日蓮大聖人はこの宿屋入道を通して「立正安国論」を時頼に上書したのである。

ゆ

唯我一人能為救護　法華経譬喩品第三の文。「唯我れ一人のみ能く救護を為す」と読む。釈尊が、娑婆世界の一切衆生の主・師・親であることを明かしているうちの師の徳を表わす文である。文底から読めば「能く救護をする唯我一人」とは日蓮大聖人である。

唯心法界　旧華厳廿六に「三界は唯一色なり、心の他の法なし」と説かれている。すなわち華厳宗の根本とする法門。

唯仏与仏乃能究尽　法華経方便品第二に「唯仏と仏といまし能く諸法の実相を究尽したまえり」と説いて、爾前経では秘し隠してきた一念三千の法門を諸法実相に約していることをいう。文底から拝すると、仏と仏とのみ知るとは日蓮大聖人と日興上人のみがよく知るということ。迹仏の境涯の仏では仏法の奥底をあらわすことはできないのである。

維摩経　後漢の厳仏調以来、七回以上訳せられた方等部の経典。現存するのは次の三訳だけ。①呉の支謙訳、二巻、維摩詰経。②姚秦の鳩摩羅什訳、三巻、維摩詰所説経。③唐の玄奘訳、六巻、説無垢称経。このうち、普通は、羅什訳が用いられる。

莠言　正に似ていて邪であり、かえって正を破毀する言葉。

勇猛精進　心をもっぱらにして仏道修行に励むこと。日蓮大聖人の仏法では、信心・唱題に励むこと。宝塔品に「此の経は持ち難し若し暫く持つ者は我即ち歓喜す諸仏も亦然なり、是くの如き人は諸仏の歎る所是れ則ち勇猛なり是れ則ち精進なり」とある。釈にいわく「敢で為すを勇と言い智を竭すを猛と言う」また「無雑の故に精・無間の故に進」と。（要語解説三二五ページ参照）

瑜伽論　瑜伽師地論といい、弥勒菩薩の説。唐の三蔵玄奘の訳が百巻ある。

涌出品　従地涌出品といい、法華経二十八品の第十五、本門の最初にあたり、この品から経末までの十四品が本門である。涌出品は、滅後末法に、法華経を弘めるべく、本化の菩薩が出現する品であり、法華経の肝心である寿量品の直前でもあり、大切な意義をもつ。前半で、他方から来た

迹化の八恒河沙の大菩薩が弘経を請うが、釈尊は許さず「止ね善男子」と制止したとき、大地が割れ、上行などの四菩薩を上首として地涌の菩薩が涌出する。三十二相を具した六万恒河沙もの本化の出現に疑いをもち、代表して弥勒が質問するので、後半ではそれに対し、略開近顕遠を説き、動執生疑するのである。そして、ついに寿量品が説かれることになる。（要語解説六八ページ参照）

勇施菩薩　法華経の陀羅尼品第二十四で、法華経の行者を守護すべき誓いを立てた。一切衆生に布施をする力を惜しまないので「勇施」といわれる。

猶多怨嫉　法華経法師品第十の文。如来（釈尊）の在世においてすら難をうけたのだから、いわんや、釈尊の滅後に法華経を弘める者は、多くの怨嫉をうけ、大難にあうのは当然であるということ。日蓮大聖人は、この文を身業読誦された。

よ

影堅王　頻婆娑羅王のことで、摩竭陀国の王。釈尊の出家をとどめたが、後、仏に帰依し竹林精舎を建て釈尊に奉った。晩年、阿闍世太子のために幽閉せられて獄死した。

要当説真実　法華経方便品第二の偈文。「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」という。釈尊は、初めから法華経を説こうと思ったが、衆生の機根が未熟なので、四十余年の長い間、権教を説いてきたが、いよいよ八年で、法華経の真実の法を説くということ。

永不成仏　声聞・縁覚の二乗は、無余涅槃にはいって仏種を断ずるゆえに、未来永劫、成仏できないのであると爾前の諸経に説かれている。法華経にきて、初めて十界互具が明かされ、成仏できた。

要法寺　京都要法寺のこと。要山ともいわれ、建武元年（一三三四年）の建立。開山は日尊。旧本門宗七本山の一つ。戦後、単独で日蓮本宗と名のっている。

要略広　（広略要の項参照）

与奪　仏教の判釈上の重要語。与は容与の意で、しばらく正義を隠して寛容の義をなす。奪は斥奪の意で、ただちに正義によって劣っているものを奪うこと。たとえば機情に随って説くときには、いちおう与えていい、随自意の折伏には奪っていう。

欲界の一切処　欲界は仏教の世界観の一つで、欲界、色界、無色界の三界の一つにあたり、下は地獄界より上は欲界の

最上である他化自在天宮にいたるすべてをさす。

与同罪　叛逆人の事情を知りながら、いたわったり、見て見ぬふりをすれば、後でわかったときに、同罪になるように、謗法を知って責めなかったり、同志に対する怨嫉を聞いて同調していては罪となり、罰をうける。これを与同罪という。

余の有漏・劣の無漏種　天親菩薩の唯識論のなかの語。煩悩障と所智障を断じても、なお余すところの有漏と劣れる無漏の種ということ。

ら

羅漢　小乗の果位で、声聞の四種の聖果の最高位。

羅睺羅　①釈尊十大弟子の一人、密行第一といわれた。釈尊が出家するまえに耶輸多羅姫との間にできた子。釈尊の出家を恐れて、魔が六年間も生まれさせなかったといわれている。二十歳で仏弟子となり、舎利弗について修行した。途中、おごる心が起こったが、釈尊に戒められ、ついに密行第一といわれるまでになり、法華経で蹈七宝華如来の記別を受けた。②付法蔵の第十五で、インドの迦毘羅衛国の浄徳尊者の子にあたり、生来聡明であった。

羅什　鳩摩羅什の略。羅什三蔵は、中国の後秦の時代に活躍した。「妙法蓮華経」の訳者として有名。

羅刹　悪鬼。

蘭室　高徳の人、善人の居室の意味。香りの高い蘭のある室にいる者は、しばらくするとその香りが身体にしみてくるように、徳の高い貴人と共にいる者は、いつの間にかその徳の感化をうけるという譬えからきた語。

り

理具の一念三千　天台の一念三千は、その義を具してはいるが、ただそれが理性に具していることを論じ、諸法の実相は一念三千の当体であるというにすぎない。ゆえにこれを理具の一念三千という。

利剣即是　念仏の祖である善導が般舟讃に三千仏名経の「罪の縄は心に繋って九百劫を経るとも解け難く脱し難し、唯仏名猛利の剣耳に在るのみ」をとって、人間の煩悩・業・苦を断ち切る利剣は、西方安養浄土の弥陀の名号を唱えるのが第一であると阿弥陀を信仰せしめたことをいう。

理証　（要語解説一四八ページ参照）

理深解微　念仏の祖・道綽の語。「安楽集」にある。法華経の

理は深いが、この理を解り得道する者はないという意味。

理即　天台所立の六即位の第一。理のうえで論ずれば、一切衆生にことごとく仏性があるゆえ理即の凡夫という。

律宗　小乗経で、律を所依とするので律宗という。中国唐朝に、南山の道宣律師が戒律を弘通したのが初めである。比丘は二百五十戒、比丘尼は五百戒の具足戒をたもつ修行をする。日本では、聖武天皇のとき、唐僧・鑑真が来朝し、東大寺に戒壇を築いた。また天平宝字三年に唐招提寺を築き、戒律を講じた。また下野の薬師寺、筑紫の観世音寺に小乗の戒壇を築き、東大寺と合わせて、以上の三つを日本三所の小乗の戒壇という。律宗は、戒を根本として国の宝だといっているが、日蓮大聖人は、末法においては律宗は国賊であると破折されている。

律宗の教義　（要語解説一五ページ参照）

律宗の道宣　道宣は中国唐代の僧で、南山律宗の祖、玄奘の訳経を援助し、堅く戒をたもち随一の大学者であった。その天台に帰伏した意は、修南山の道宣律師、天台大師を賛嘆して「法華を照了すること高輝の幽谷に臨むが若く摩訶衍を説くこと長風の太虚に遊ぶに似たり」（撰時抄二七〇ページ）といっている。

立正安国論　文応元年七月、三十九歳の御作で、宿屋入道を通じて、執権の北条時頼に与えられた第一回の国家諫暁の御書。末法の一切衆生に対する強烈な指南書であり、一大予言書である。七百年前、日蓮大聖人は、当時の民衆が飢饉、疫病、地震などの難に苦しめられているのをごらんになり、その根本原因は邪宗・邪義にあることを示されて、もし、邪教の念仏を捨て、三大秘法の大御本尊を信じなければ、自界叛逆、他国侵逼の二難が現われると予言されている。十大部の一つである。（要語解説二一三ページ参照）

立正佼成会　（要語解説四〇七ページ参照）

理同事勝　法華経と大日経を比較すると釈尊も大日如来も一念三千にほかならぬと、理の上で同一とし、この教理を形の上からあらわす印や真言等の作法は法華経にないから、大日経の方がすぐれているとする、真言宗の邪義である。（要語解説一三ページ参照）

略開近顕遠　（要語解説九五、一五八ページ参照）

略開三顕一　法華経方便品第二の十如実相の文。釈尊は、インドで成道して以来、四十二年にわたって方便権教を説いてきたが、方便品では十如実相を説いて一念三千を明かし、権を開いて実を示した。これが開三顕一であり、方便

品に「唯一乗の法のみ有り、二無く亦三無し」とある。この開三顕一は、略開三と広開三に二大段され、略開三顕一は、十如是の文である。釈尊は、五千の衆が礼仏而退の後「増上慢の人、退くも亦佳し」として広開三顕一を説かれ、三周の説法がある。すなわち、人生に対する目的観を教えるもので、一仏乗・最高の幸福を獲得することが、人生最大の目的であると説く。（要語解説八八ページ参照）

歴劫修行　爾前経で説かれている菩薩の修行は、初発心の後、三阿僧祇百大劫、また動踰塵劫など、無量無辺の長い劫を経て、六波羅蜜などの菩薩行を行ない、成仏すると説かれている。末法では、三大秘法の大御本尊を受持するときに、歴劫修行をしなくても一切の功徳をうけることができる。観心本尊抄（二四六ページ）に「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う」とある。

竜火　落雷のようなものが原因で起こる火災。

竜樹　釈尊滅後七百年のころ、南天竺に生まれた。付法蔵の第十三祖。仏法の奥底をきわめ、大智度論、十住毘婆娑論、中観論、十二門論等を著作し、その義とするところは、中道実相にあり、これは法華経の義によったものである。（要語解説三六七ページ参照）

竜神　八部衆の一つ。金翅鳥、修羅、竜神は、共に地動を起こすといわれる。

竜象　比べる物のない巨大な動物である竜と象を例として、名僧の傑出している代名詞に用いる。

竜女　竜女とは竜の女神をいい、別して竜王の女をいう。なかでも大海の娑伽羅竜王の女で、年が八歳の竜女をさす。この竜女が、文殊菩薩が竜宮で法華経を説いたのを聞いて菩提心を起こし、次に霊鷲山で釈尊の説法を聞いて即身成仏の相を示し、女人成仏の現証を現わした（法華経提婆品第十二）。これを竜女作仏といい、法華経にのみ説かれた法門である。（要語解説九九ページ参照）

竜門　天台山の境内にある瀑布の名。大井荘司入道御書（一三七七ページ）等にある。

楞伽経　禅宗の依経の一。詳しくは楞伽阿跋多羅宝経。釈迦が楞伽山頂において大慧菩薩の問いに対して答えたもの。権大乗経、方等部の経典。

両火房　真言律宗の悪僧、極楽寺良観のこと。建治元年三月二十三日、極楽寺から出火して、鎌倉の将軍家の御所に飛び火して炎上した。極楽寺良観の謗法の心火がその原因で

あるが、日蓮大聖人は、この極楽寺と御所の二か所の焼失を両火と呼び、良観房の音にかけて、皮肉の意味であだ名されたもの。（王舎城事一一三七ページ参照）

良観・念阿　良観は、もと律宗の僧、奈良西大寺に学び、鎌倉にきて極楽寺において律、真言、念仏等を弘めた。日蓮大聖人御在世当時の事跡は諸御書に詳しい。念阿は念阿弥陀仏の略、浄土宗鎮西派の第四祖・良忠のこと、法然の弟子・聖光に師事した鎌倉光明寺の開山である。

了義経・不了義経　法の四依の一つ。「了義経によって、不了義経によらざれ」と読む。了義経とは、最高の極理を説いた経の意で、不了義経の対語。これは相対概念であって、大乗・小乗を相対すれば、大乗経は了義経、小乗経は不了義経、また権経・実経を相対すれば、爾前の権大乗経が不了義経、法華経が了義経であり、種脱相対すれば、三大秘法の南無妙法蓮華経が了義経であり、二十八品の法華経は不了義経となる。

領解　法華経で三周の説法のとき、正説、領解、述成、授記、歓喜の五段に分けて説かれている。正説は仏の説法、領解は正機の弟子が説法を聞いて理解したことを述べる。述成は、仏がさらに領解を補足し、授記は成仏の記別を授け、歓喜は四衆の歓喜するありさまを述べている。

料簡　料度簡択ということでよく考えて、事理を選びわけること。また物のすじみちを分別して決定すること。

了洪　伝不詳で、あるいは奈良の華厳宗の僧かといわれる。

霊鷲山　梵語では、耆闍崛山という。インドのベンガル州にある山で、三千年前、釈尊が法華経を説いた場所。その南が尸陀林で死人捨て場となっているため、鷲が飛来するので「鷲山」といい、三世諸仏の心法である法華経がとどまるので「霊山」という。日蓮大聖人の仏法からみれば、本門の大御本尊に題目を唱える者の住所は、いかなる所も霊鷲山である。別しては、本門の本尊の住所こそ霊鷲山である。（要語解説一〇八ページ参照）

良諝和尚　唐代天台宗の僧で、天台大師より九代の弟子にあたる。智証大師入唐のときの師といわれる。

令初発道心　法華経涌出品第十五の偈文。「初めて道心を発さしむ」すなわち、釈尊が地涌の菩薩をいちばん最初に自分の弟子として仏道修行の心を起こさせたとの意。

霊山一会儼然未散　天台の言葉。「霊山一会儼然として未だ散らず」と読む。霊山一会とは、法華経が説かれた霊鷲山の会座のこと。儼然未散とは、霊山の儀式がいまなお厳然

としてなくならず、永遠に常住しているとの意。今日、総本山および創価学会の姿こそ、霊山一会儼然未散である。

霊山八年　霊山は法華経の説処、八年は法華経説法の期間。

令法久住　「法をして久しく住せしめん」と読む。三大秘法の仏法を末法万年までも弘めるということ。

李陵　漢の人。騎射をよくし、人を愛するので重用視され、騎都尉に任ぜられ、匈奴を征する軍に加わったがとりことなった。前漢武帝の時（西紀前一〇〇年）に、蘇武という人が、匈奴に使いしたが、その王のために岩窟に幽閉された。その翌年、李陵も胡国にはいり、同じく辛酸をなめた。（法蓮抄一〇五二㌻参照）

麟角　麒麟の角は稀なるゆえに、極めて少ないこと、なかなかありえないことに譬えたもの。

臨終　人がまさに死なんとするときをいう。この世における善業・悪業の総決算が臨終であり、来世への第一歩ともなる。したがって臨終の相は、ひじょうに大切である。日蓮大聖人は「なにと・なくとも一度の死は一定なり、いろ（色）いろしあしくて人に・わらはれさせ給うなよ」（兄弟抄一〇八四㌻）と仰せられている。

臨終正念　臨終にあたり、心が迷わないこと。御本尊を拝む以外に、正念はありえない。

臨終の相　（要語解説三三一㌻参照）

輪陀王　馬鳴菩薩の過去の因縁を説いたなかに出てくる王。釈摩訶衍論にある。（内房女房御返事一四二三㌻・曾谷殿御返事一〇六一㌻参照）

輪廻六趣　六趣とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道、輪廻とはこの六道の生命を転々として、しかもこれ以外には出ない生命の姿をいう。六道輪廻に同じ。

輪王　転輪聖王、また転輪王ともいう。この王身に三十二相を具し、位につくとき天より輪宝を感得し、その輪宝を転じて四方を降伏すれば転輪王という。その輪宝に金・銀・銅・鉄の四種あって金輪王は四州、銀輪王は東西南の三州、銅輪王は東南の二州、鉄輪王は南閻浮提の一州である（倶舎論）。現在では指導者はみな輪王であるといえる。ゆえに輪王にも大小がある。

輪王の優曇華　優曇鉢羅華の略。世界を統一する転輪聖王の出現するとき、その先兆として海中に開くといわれる。古代インド人の理想とした花。このようなことは、何千年、何万年の間にごくまれに起こるとされる。日蓮大聖人は、末法に生まれて三大秘法の大御本尊に巡り会うことが、い

かにむずかしいかの譬えとして、輪王の優曇華を引かれている。

る

類聚伝　類をもって聚めた伝記という意味。この本には、善導が念仏修行をやって気違いとなり、柳の木で首をつり、ナワから落ちて腰を打ち、七日七夜苦しんで死んだという有名な話などが書いてある。

盧舎那　毘盧舎那が法身をさすのに対して、盧舎那は報身をさす。

流通　序分・正宗分・流通分のなかの第三流通分と同じ、仏教典はすべてこの三段に分けて説かれてある。序分とはまさに説こうとする教を開明する準備段階。正宗分は、その中心たる教の本体を開説する部分であり、流通分は、正宗分の中心の教に基づいて、この弘通を明かす部分である。釈尊一代の経典を序正流通の三段に分けると涅槃経が流通分となる。（要語解説一五五ページ参照）

れ

黎民　万民、人民。

劣謂勝見　我見にとらわれて、劣れるものを勝れているというもの。見取見と同じ。三惑のなかの見惑に十使があり、五利使と五鈍使に分けられるが、見取見とは五利使のなかの第三番目にある迷いの思想である。

劣応身　一丈六尺、八相成道、老比丘の相を現ずる小乗三蔵の仏身である。（要語解説四八ページ参照）

蓮宮　僧院のこと。

蓮華蔵世界　華蔵世界ともいう。華厳経に説かれている華厳経の他受用身仏の国土のこと。

蓮華比丘尼　華色比丘尼とも云う。阿羅漢果を得た、釈迦在世の比丘尼。提婆達多の謗法を呵責し、打ち殺された。立正安国論（三〇ページ）には「提婆達多の蓮華比尼を殺せしや久しく阿鼻の焔に咽ぶ」とある。

ろ

六師外道　釈迦在世のころ中インドに勢力のあった六人の外道論師（富蘭那迦葉・末伽梨拘舎離子・珊闍耶毘羅胝子・阿耆多翅舎欽婆羅迦羅鳩駄迦栴延・尼乾陀若提子）のことをいう。

勒婆婆　苦行をいう。

六宗　南都の六宗をいう。すなわち倶舎・成実・律・法相・三論・華厳の六宗。奈良時代、平安初期に隆盛であったが、日本の天台宗の開祖である伝教大師にことごとく打ち破られた。

六十巻　天台の著述した玄義・文句・止観の三十巻および妙楽の釈した釈籤・疏記・輔行の三十巻。

六神通　六種の神通力。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、如意身通、漏尽通である。前の五つは菩薩の所得であるが、最後の漏尽通は、ただ仏の所得である。

六瑞　法華経序品第一の説法のとき示された大瑞相で、説法瑞・入定瑞・雨華瑞・地動瑞・衆喜瑞・放光瑞をいう。

六相　華厳宗の教相で、大玄門の一々に六相（総・別・円・異・成・壊）があるとしている。

六即　天台大師が法華経の円意で立てた修行の位。また、その法門。すなわち理即・名字即・観行即・相似即・分真即・究竟即の六即位である。天台宗の六即は法華浄土問答抄（一一七ページ）に、また末法修行の六即の配立は御義口伝下（七五二ページ）に述べられている。理即の位は、いまだ信心しない人。名字即とは御本尊をいただいて信心した人。観行即は朝晩の勤行をきちんとやり、功徳を感じている人。相似即とは三障四魔を粉砕していく人。分真即とは折伏に励み御本尊流布に邁進している人。究竟即の仏とは永遠の生命を感得し、成仏の境涯に達した方で、別しては無作三身如来であられる御本仏日蓮大聖人御一人である。末法の信心のあり方は、折伏に励み自他ともに功徳をうけきる分真即の位でなければならないといえる。しかし、日蓮大聖人の下種仏法では即身成仏なるがゆえに「名字妙覚」と仰せのように、名字即の凡夫が御本尊を拝んで仏の生命を感得したときが、すなわち妙覚の仏である。ゆえに天台宗のように厳密な立て分けはいらないのである。総勘文抄（五六六ページ）に「名字即の位より即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し」とある。（要語解説一一八ページ参照）

六即位　天台が法華経によって立てた修行の位。大聖人の仏法には位の次第はないが、御義口伝下（七五二ページ）では寿量品の如来は理即の凡夫、頭に南無妙法蓮華経を頂戴した時は名字即、修行するは観行即、惑障を伏するのは相似即、化他に出ずるは分真即、無作の三身の仏と究竟したのを究竟即の仏という。

六通羅漢　六神通を得た阿羅漢。六神通とは天眼通・天耳通・他心通・宿命通・神足通・漏尽通。

六道輪廻　六道とは、十界のうち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人界、天界であり、私たち凡夫の一日の生活は、この六種類の生命の状態を、縁にふれて、瞬間瞬間くり返している。これを六道輪廻という。

六度万行　菩薩の修行する六波羅蜜の行で布施波羅蜜、持戒波羅蜜等の六である。菩薩は無量劫の長きにわたってこの修行を積んでいくので歴劫修行という。

録内・録外　古来、日蓮宗門流において立てる偽説。録内は四十八巻、百四十八編をいい、日蓮大聖人の一周忌を六老僧が池上で営んだとき、結集したものであるとする。録外は二十五巻、二百五十九通で、大聖人の三回忌に録内に漏れたものを集めたという。しかしこれらの説は何の根拠もない。録内について記録が現われたのは大聖人滅後百八十年ごろであり、版本になったのは元和八年（一六二二年）の本国寺版が最初である。

六難九易　法華経宝塔品第十一に説かれている。法華経をたもつことのむずかしさを、譬えをもって示したもの。六難は一広説此経難・二書持此経難・三暫読此経難・四少説此経難・五聴聞此経難・六受持此経難。九易は、一余経説法易・二須弥擲置易・三世界足投易・四有頂説法易・五把空遊行易・六足地昇天易・七大火不焼易・八広説得通易・九大衆羅漢易。（要語解説九八ページ参照）

六入　眼・耳・鼻・舌・身・意の六根または、色・声・香・味・触・法の六境をいう。

六波羅蜜　波羅蜜は梵語で「彼岸にいたる」の意、度とも訳す。六波羅蜜とは一に檀（布施）波羅蜜、二に尸羅（持戒）波羅蜜、三に羼提（忍辱）波羅蜜、四に毘梨耶（精進）波羅蜜、五に禅那（禅）波羅蜜、六に般若（智慧）波羅蜜。（要語解説三一ページ参照）

鹿野苑　中インド波羅奈国にある園の名。古くは神仙の住所とされ、国王が狩をし、鹿をつかまえても、放しておいた地だといわれている。釈尊は、最初に正覚を成じたその座で、三七日間華厳経を説いたあと、鹿野苑で、憍陳如などの五人を済度して比丘とした。その後十二年間、十六大国で、阿含と名づけられる経を説いたが、阿含時とも、あるいは、最初の説処にちなんで、鹿苑時ともいう。

六欲天　欲界に六重の天あり、四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・化楽天・他化自在天である。右のうち四王天は須弥の半腹にあり、忉利天は須弥山頂にあり、これを地居天また三十三天と名づけ、兜率天以上は空中にあるので空居天

と名づける。

六老僧　日蓮大聖人が御入滅にあたって、弘安五年十月八日に定められた六人の本弟子。日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持である。（要語解説三五五ページ参照）

漏尽　欲漏・有漏・無明漏の煩悩を断尽するのを漏尽という。

六巻抄　（要語解説三七八ページ参照）

六根　眼・耳・鼻・舌・身・意を六根という。

わ

我が身即妙法蓮華経　（要語解説二八二ページ参照）

惑耳驚心　妙楽が弘決のなかで天台の止観の円頓章を釈した言葉。法華経に示された一念三千や草木成仏の法門を、一般学者が信ずることができず、耳を惑わし、心を驚かしたことをいう。

和合僧　出家の比丘が、一所に集まり仏道修行すること。この和合僧を破って、その修行を妨げるのを破和合僧といい、五逆罪の一つとされている。僧とは、限定されたものではなく、現在、創価学会が信心修行に、折伏に励んでいるこの姿こそ、和合僧というべきである。

和光同塵　仏や菩薩が、自らの光りをやわらげて、衆生の塵に同じ、種々の姿で現われ、化導して利益を与えることをいう。摩訶止観には「和光同塵は結縁のはじめ、八相成道は以って其の終わりを論ず」とある。末法においては、「和光」とは御本尊の、一切衆生を救う力、功徳であり、その人の悩みに応じて、また信力・行力に応じて利益を与えられる。

年表凡例

○この年表は、日蓮大聖人ご誕生の貞応元年（西紀一二二二年）より御入滅の弘安五年（西紀一二八二年）までを収めた。

○年号欄中、改元の月日は右端に数字で表した。

○立宗以後の聖寿欄に、その年の主な御在所を示した。

○全ての事項の冒頭には○印と▽印（年月不確定の項目の意）をつけた。なお、⑤のごとく数字を○でかこんであるのは閏月を示す。

○出典名の正式名称は、左記の通りである。なお、富要集は、巻数とページ数のみで記した。

略符号一覧

あ行

吾妻	吾妻鏡
熱原譜	熱原法難史年譜
一代	一代要記
奥	同書奥書

か行

過去帳	同寺過去帳
関代	関東年代記
関評	関東評定伝
画讃	日蓮聖人註画讃
該書	その書
吉続文	吉続記 近衛家文書
鎌志	新編鎌倉志
鎌日	鎌倉大日記
古刻	日本古刻書史
皇記	皇代略記
綱義	選択集文前綱義
高書	高野山文書
高統	真宗高田派正統記
公補	公卿補任
座記	天台座主記
師守記	師守記
釈書	元亨釈書
宗全	日蓮宗宗学全集
性譜	性公大徳譜
寺誌	同寺寺誌
世縁	佐渡世尊寺縁起
世過	佐渡世尊寺過去帳
聖蔵	日蓮正宗聖典
石蔵	大石寺蔵
石蔵写	大石寺蔵写本
全	日蓮大聖人御書
全付伝	全集
全付表	日蓮大聖人御書
僧伝	全集付録弟子檀那等列伝
増鏡	日蓮大聖人御書
続史	全集付録年表

さ行

た行

大過去帳	大石寺大過去帳
帝編年紀	帝王編年紀
東通	東国通鑑
道元録	道元禅師和尚行録

な行

日興詳伝	日興上人詳伝
年譜	日蓮宗年表 本化高祖年譜

は行

百錬	百錬抄
別統	本化別頭仏祖統紀
墓銘	その墓銘

ま行

宮図	陸前宮野氏系図
妙蓮寺過去帳	富士妙蓮寺過
明義	明義進行録
明月	明月記
蒙牒奥	蒙古国牒状奥書

ら行

鸞伝	本願寺聖人親鸞伝絵
隆伝	隆寛律師略伝
竜文	竜造寺文書
霊記	法華霊場記
蓮誌	富士妙蓮寺寺誌
蓮書	富士妙蓮寺文書

西紀	1222	1223	1224	1225	1226
年号	貞応 4.13	2	元仁 11.20	嘉禄 4.20	2
天皇	河		堀		後
武家	時	義	時	泰	
聖寿	1	2	3	4	5
日蓮大聖人並門下	○2・16 安房東条郷小湊に誕生幼名善日麿（聖五七）				
一般宗教		○2月 道元入宋（道元録）	○1月 親鸞教行信証を著す（高統） ○8・5 幕府専修念仏を禁ず（皇記）	○9・25 慈円寂71（座記）	
日本	○7月 鎌倉大地震（吾妻）	○5月 幕府土御門上皇を阿波に遠流（吾妻）	○6・13 北条義時卒62（吾妻）	○6・10 大江広元卒78（吾妻）○7・11 平政子卒69（吾妻）○10・29 朝廷新制36条を下す（百錬）○12・21 幕府評定衆を置く（関評）	○1・27 源頼経征夷大将軍に任ぜらる（公補） ○8・1 幕府准布を停め銅銭を通用せしむ
世界	○（東南ア）蒙古回々国を滅しインドに迫る	○（東欧）蒙古ロシア諸公を破る	○（中ア）オゴタイ汗国成立	○（東南ア）安南に陳朝おこる	○（中ア）チャガタイ汗国の基礎できる

1230	1229	1228	1227	
2	寛喜 3.5	2	安貞 12-10	
後堀河				
泰時				
9	8	7	6	
	○9月 奈良僧徒の帯仗を禁ず（明月）	○11・28 六波羅高野僧徒の帯仗を禁ず（高書）○空阿寂74（明義）	○6・24 山徒法然の墓を破却（百錬）○7・6 法然弟子隆寛・幸西・空阿等遠流（百錬）○10・11 山徒選択集の印板を焼く（網義）○冬道元帰朝（道元録）○隆寛寂80（隆伝）	
○6・18 北条時氏卒28（吾妻）○6・24 宣旨を下して米価を定む（百錬）○7・16 諸国に霜降る（吾妻）	○4月寛徳以後の新立荘園を停止する	○12・24 九条道家関白に任ぜらる（関評）	○4・22 内裏焼失（百錬）○5・1 高麗より牒状来る（吾妻）○5月 北条時頼生まる（吾妻）	（吾妻）○8・26 太政官文殿焼失（百錬）
○（西欧）ドイツ騎士団プロイセンを平定、植民地開拓を行なう	○（中ア）オゴタイ（太宗）即位	○第5次十字軍	○（蒙）チンギス汗没○（東ア）西夏滅亡	○（西欧）フランチェスコ没

西紀	1231	1232	1233	1234	1235
年号	寛喜 3	貞永 4.2	天福 4.15	文暦 11.5	嘉禎 9.19
天皇	後堀河	条			四
武家	時				泰
聖寿	10	11	12	13	14
日蓮大聖人並門下			○春、安房清澄寺に登る（聖五七）		
一般宗教		○1月 楓尾高弁〔明恵〕寂60（釈書）○親鸞関東を発し京に向かう（高統）	○春道元山城宇治に興聖寺を創す（道元録）	○6・30 幕府専修念仏を禁ず（全94）	○7・24 幕府専修念仏を禁ず（吾妻）○奈良の衆徒春日神木を奉じて入京せんとして宇治に到る（百錬）
日本	○春大飢饉（吾妻）○10・11 土御門上皇阿波に崩ず37（一代）○11・3 朝廷新制42条を下す（近文）	○5・14 泰時式目51ケ条を定む（吾妻）○10・2 藤原定家新勅撰和歌集を上る（該書）	○5・29 摂政近衛基通卒74（明月）	○7・27 源頼経室竹子卒23（明月）○8・6 後堀河上皇崩ず23（明月）	○3・28 摂政九条教実卒26（明月）
世界	○（朝）蒙古高麗へ侵入	○（東ア）イルトウーミシュ、インド中部のグワリオルを征服	○（東ア）蒙古軍洛陽をおとす。宋軍と共同、金軍を破る	○（東ア）金滅亡	○（仏）ノートルダム寺院成る

1240	1239	1238	1237	1236
仁治 7.16	延応 2.7	暦仁 11.23	3	2
四			条	
泰			時	
19	18	17	16	15
		○11・14 安房清澄寺において円多羅義集を写す（奥）	○道善房について得度し是聖房蓮長と名乗る（聖全六・全二四〇七）	
○5月 祇園犬神人山徒の命により念仏を停止す（全94）		○②・29 浄土宗鎮西寂77（聖光上人伝）○7・11 北条泰時大蔵経を園城寺へ奉納（吾妻）	○6・25 幕府諸社寺及び国司領家の訴訟は式目に不拠とす（吾妻）	○1・2 奈良の衆徒神木を宇治に棄て退散す（百錬）○2・14 幕府使いを宇治に遣わし興福寺を諭す（吾妻）
○1・24 北条時房卒66（吾妻）○3・18幕府御家人郎党の任官を禁ず（吾妻）	○2・22 後鳥羽上皇隠岐に崩ず（吾妻）○5・1綸旨を下して人身売買を禁ず（吾妻）○12・5 三浦義村卒（関評）	○1・28 将軍頼経上京（吾妻）○2・23 将軍頼経参内す（吾妻）	○3・10 近衛兼経摂政に任ぜらる（公補）○4・9 藤原家隆卒80（公補）	
○(露)蒙古軍、露国諸侯を臣従せしむ	○(朝)蒙古軍、高麗より撤兵	○(西)グラナダ回教王国成立	○(東欧)蒙古軍の将バドウ、モスクワ、キエフを攻略	○(東欧)蒙古のバツの西征～43

	1244	1243	1242	1241	西紀
	2	寛元 2.26	3	仁治 2	年号
	後嵯峨				天皇
	経時				武家
	23	22	21	20	聖寿
日蓮大聖人並門下			○叡山遊学（別統）	○鶴岡八幡において大蔵経を閲す（別統）	
一般宗教	○6・4 幕府後鳥羽院追福のため法華経百部摺写（吾妻）				
日本	○3・18 御書所を置く（百錬）○4・28 藤原頼嗣将軍となる（公補）○8・29 前太政大臣西園寺公経卒74（公補）	○12・22 幕府奴婢雑人の10歳未満の子女は其の父母に付せしむの令を下す（吾妻）	○6・15 北条泰時卒60（関代）○6・15 北条経時執権となる（吾妻）○9・12 順徳上皇佐渡に崩ず46（増）	○2・7 鎌倉大地震（吾妻）○8・20 藤原定家卒80（公補）○10・22 幕府武蔵野に水田を開く（吾妻）	
世界	○(教)リヨン宗教会議	○(東欧)キプチャク汗国建国	○(中ア)蒙古軍、小アジアに侵入する	○(欧)蒙古軍、中欧諸侯と戦う	
	○3・2 幕府殺生を禁ず（帝編）○5・3 幕府守護地頭等六波羅の	○(伊)ローマ大学創立			

1247	1246	1245
宝治 2.28	4	3
後深	草	後嵯峨
時	頼	経時
26	25	24
○南都薬師寺に大蔵経を閲す（別統）	○三井及び南都に遊学し又京泉涌寺に道隆を訪う（別統）○3・8 日興甲斐大井庄鰍沢に生まる（聖尭）	○叡山横川定光院に住す（別統）○4・8 日朗下総平賀に生まる（別統）
○10月 聖徳太子著法華義疏を開版（古刻）○11・26 法然弟子証空寂71（僧伝）	○6・15 越前大仏寺を永平寺と改む（道元録）○宋僧道隆来朝（釈書）	
○1・19 近衛兼経摂政となる（公補）○4・25 幕府後鳥羽院の祠を鶴ケ岡に新宮す（吾妻）○6・5 北条時頼三浦泰村を討つ（関評）○12・12 幕府本地頭と新地頭の徴租法式を定む（吾妻）	○3・23 北条時頼執権となる（公補）○④・1 北条経時卒33（吾妻）○5・24 北条光時頼経と謀り執権時頼を除かんとす（吾妻）○6・13 北条光時伊豆に流罪（吾妻）○7・11 前将軍頼経京に帰る（吾妻）	命に背き出京せざる者の罰を定む（吾妻）○7・5 将軍頼経出家法名行智（公補）○12・17 幕府諸国の悪党を隠匿するものの所領を没収せしむ（吾妻）
○(朝)蒙古軍、高麗を討つ	○(中)蒙古軍、京湖江淮を侵す	○(中ア)小アルメニア王ヘートン憲宗を訪問

	1251	1250	1249	1248	西紀
	3	2	建長 3.18	宝治 2	年号
後		深	草		天皇
時			頼		武家
	30	29	28	27	聖寿
日蓮大聖人並門下	○8月 叡山を下り三井に遊学（霊記）○11・15 寂日房日華甲斐二十日村〔秋山氏〕に生まる（蓮書）○日頂駿河重須に生まる（別統）	○11・24 京五条坊門富小路に五輪九字秘釈を写す（奥）	○浄本を介して摂津天王寺に遊学（別統）○日持駿河松野に生まる（別統）	○叡山に帰り定光院に住す（別統）	○藤原為家に歌道及び書道を学ぶ（別統）○高野・三井等遊学、又法印真広を介して東寺・仁和寺に遊学（別統）
一般宗教		○北条長時鎌倉に浄光明寺を創す（鎌志）	○波多野義重大蔵経を越前永平寺へ寄進（道元録）		
日本	○2・20 北条時頼将軍頼嗣を廃す（吾妻）○2・21 九条道家卒60	○2・10 鎌倉大火（吾妻）○12・3 幕府鎌倉市街商売の区域を定む（吾妻）	○4・20 幕府庶民の帯刀を禁ず（吾妻）	○2・1 京大火、閑院内裏焼失（百錬）○7・20 佐渡院に順徳院の追号を上る（帝編）○10・8 朝廷沽価法を定む（百錬）	○5・18 安達兼盛卒（吾妻）○12・23 幕府百姓と地頭との訴訟の法を定む（吾妻）
世界	○(中ア)フビライ大理を撃つ	○(中ア)蒙古第4代憲宗即位	○(中近)エジプト、アイユーブ朝滅び、マムルーク朝興る		○第6次十字軍～54（独）ケルン大学院成る

1255	1254	1253	1252
7	6	5	4
後		深	草
時			頼
34 鎌倉	33 鎌倉	32 鎌倉	31
○蓮盛抄を著す○諸宗問答抄を著す○念仏無間地獄抄を著す○一生成仏抄を著す○主師親書を著す	○1・1、1・15 生身の愛染・不動を感見模写（聖六五）○日朗得度（別統）○富木常忍入信（別統）	○3・28 安房清澄寺に宗旨建立の内証を宣示（聖六七）○4・28 安房清澄寺に立教開宗（全三八）○父母を授戒し日蓮と更名（高祖伝）○8・26 草庵を鎌倉松葉ケ谷に構う（画讃）○11月 日昭入門（別統）○日向安房尾金に生まる（別統）	
		○8・28 道元寂54（道元録）○11・8 時頼鎌倉に建長寺を創し道隆を請ず（吾妻）	
	○1・10 鎌倉大火（吾妻）○4・29 幕府宋船入泊の員数を定めて五艘となす（吾妻）○11・21足利義氏卒29（吾妻）	○10・1 幕府奴婢雑人の法を定む（吾妻）	（公補）○4・1 宗尊親王征夷大将軍に任ぜらる（吾妻）○4・2 頼嗣鎌倉から京に帰る（吾妻）○8・17 宗尊親王の病気平癒を祈念し大仏を造り深沢に安置す（吾妻）○9・30 幕府諸国に沽酒の禁制を下す（吾妻）
○(西ア)蒙古軍、西南夷を平ぐ	○(独)ライン同盟成立	○(西ア)フラグの西南アジア遠征始まる	

西紀	1256	1257	1258	1259
年号	康元 10.5	正嘉 3.14	2	正元 3.26
天皇	草	深	後	
武家	時		長	
聖寿	35 鎌倉	36 鎌倉	37 鎌倉	38 鎌倉
日蓮大聖人並門下	○四条頼基・進士善春・工藤吉隆・池上宗仲・荏原義宗等入信（別統）		○2月 駿河岩本実相寺に大蔵経を閲す（聖六〇六）○駿河岩本実相寺学徒甲斐公〔日興〕入室し名を伯耆房と賜わる（聖六〇六）○2・14大聖人父妙日卒（大過去帳）○2・14 一代聖教大意を著す○一念三千理事を著す○一念三千法門を著す○和泉公日法下野 小山に生まる（聖七三〇）○十如是事を著す	○念仏者追放宣旨之事を著す○十法界事を著す○守護国家論を著す○爾前二乗菩薩不作仏事を著す○南条時光生まる（妙蓮寺過）
一般宗教	○11・23 時頼道隆により落飾、法名覚了房道崇（吾妻）	○7・1 加賀法印祈雨（吾妻）○8・23 鎌倉社寺大地震により一宇も残さず倒壊（全三・吾妻）	○1・17 鎌倉寿福寺及び若宮宝蔵・同別当坊等焼失（吾妻）	
日本	○8・6 鎌倉大風・洪水・疫病流行（関評）○8・11 藤原頼経卒39（吾妻）○9・25 藤原頼嗣卒17（公補）	○2・10 太政官庁焼失（帝編）○5・18鎌倉大地震（吾妻）○8・1 鎌倉大地震（吾妻）○11・8 鎌倉大地震（吾妻）	○8・1 大風雨諸国田園損亡（全三・吾妻）○8・7 皇弟恒仁親王を皇太弟となす（百錬）	○春大飢饉・大疫病（全三・皇記）○5・4 近衛兼経卒50（公補）
世界	○(独)大空位時代はじまる	○(仏)ソルボンヌ大学創立	○(朝)蒙古、高麗征服、アッバス朝を滅ぼす、イル汗国建国	○(中)蒙古軍、宋に侵入を始める

1263	1262	1261	1260
3	2	弘長 2.20	文応 4.13
亀		山	
長		時	
42 鎌倉	41 伊豆	40 伊豆	39 鎌倉
○2・22 流罪赦免鎌倉に帰る（聖三四・全三三）○7・13 熱海小沢大乗寺2代金剛阿行満日行寂（墓銘）○持妙法華問答抄を著す	○1・16 四恩抄を著す（伊豆御勘気抄）○2・10 教機時国抄を著す○寂仙房日澄生まる（聖六七）○顕謗法抄を著す▽熱海真言僧金剛院行満日興により改衣して日行と名乗り自坊を大乗寺と号す（日興詳伝）	○4・28 書を椎地四郎に与う○5・12 伊豆配流日興供奉（全二六九・聖六〇六）○日興伊豆宇佐美・吉田の地に弘教（聖六〇六）○伊東の地頭八郎左衛門より海中出現の仏像を受く（全一四六）○6・27 書を船守弥三郎に与う○同一鰹味抄を著す	○2月 災難対治抄を著す○4・21 十法界明因果抄を著す○5・28 唱法華題目抄を著す○7・16 立正安国論を幕府に献ず〔第1国諫〕（全二六・聖五六七）○8・27 松葉ケ谷法難（全三五・霊記）○下総富木邸に百日間説法（霊記）○比企大学三郎・太田乗明・曾谷教信・秋元太郎等入信（別統）○一代五時図を著す○日目伊豆仁田郡畠郷に生まる（聖六〇三）
	○11・28 親鸞寂90（鸞伝）		○6・12 幕府諸国寺社に疾疫退治の祈禱を命ず（吾妻）
○4月 高麗牒使を送りて邦民の沿岸を侵すを禁ぜんことを請う（東通）○9・10 幕府切銭を禁ず（吾妻）○11・22 北条時頼法名道崇最明寺に卒37（吾妻）○12・10 幕府時頼逝去による御家人の出家を禁ず（吾妻）	○この年幕府沽価法年紀法、負物利子法などを定める	○3・13 幕府政所・公文所・問注所焼失（吾妻）○11・3 北条重時卒64（吾妻）	○諸国飢疫止まず（全三三）
○（蒙）太廟を建つ	○（蒙）安国王に任ず	○（東欧）東ローマ帝国復興	○（蒙）フビライ汗即位 世祖となる

西紀	1264	1265	1266
年号	文永 2.28	2	3
天皇	山		亀
武家	村		政
聖寿	43 鎌倉	44 鎌倉	45 鎌倉
日蓮大聖人並門下	○3・1 書を三位日行に報ず〔御興振御書〕○4・17 書を大学三郎妻に報ず〔月水御書〕○7・29 法華真言勝劣の事を著す○7月 日目父新田五郎重綱卒（一一三三）○9・22 当世念仏者無間地獄事〔浄円抄〕を著す○秋 安房に帰り母の病気平癒を祈る（全九六五・画讃）○9月 書を南部六郎恒長に与う○11・11 安房東条小松原にて地頭景信に要撃さる、鏡忍房・工藤吉隆殉難（全一四六）○11・14 安房花房蓮華寺に師道善房と会す（全六八九）○12・13 書を南条兵衛七郎に与う〔慰労書〕○日向得度（別統）○題目弥陀名号勝劣事を著す ○木絵二像開眼之事〔法華骨目肝心〕を著す	○3・8 南条兵衛七郎法号行増〔時光父〕卒（大過去帳）○上総興津佐久間重貞弟竹寿麻呂〔日家〕同長男長寿麻呂〔日保〕得度（別統）○女人成仏抄を著す○薬王品得意抄を著す○太夫阿日尊陸前玉野に生まる（聖七〇七）○聖愚問答抄上下を著す	○1・16 法華題目抄を著す○2月伊東八郎左衛門尉祐光卒（年）○8・11 千日尼父卒（全一三四）
一般宗教	○3月 山徒自ら延暦寺を焼く（続史）○5月 山徒園城寺戒壇を焼き梵鐘を奪う（続史）	○4月 幕府延暦寺衆徒の武装を禁止する	
日本	○8・21 北条長時卒（関評）○10月 幕府越訴奉行を置く	○12月 藤原為家、「続古今和歌集」を撰進	○3・6 幕府引付衆を廃し問注所に命じ評定衆をして聴訴せしむ（関評）○7・4 北条時宗将軍宗尊親王を廃す（吾妻）○7・20 吾妻鏡記述終わる（該書）
世界	○(英)イングランドの諸侯、国王ヘンリー3世と争う、諸侯シモン・ド・モンフォールら国王を捕える	○(英)国会開催	○(蒙)高麗に日本招諭の元使を出す

1270	1269	1268	1267
7	6	5	4
亀		山	
時		宗	
49 鎌倉	48 鎌倉	47 鎌倉	46 鎌倉
○9・26 書を富木入道に報ず〔真間釈迦仏供養逐状〕○10・23 書を某に報ず〔大豆御書〕○11・28 書を太田金吾に報ず〔大師講御書〕○真言天台勝劣之事を著す○善無畏三蔵抄を著す○書を富木入道に報ず○真言七重勝劣事を著す○日持・和泉公日法・治部公日位得度（別統）	○5・9 書を富木入道等に報ず〔問注得意抄〕○6・7 書を富木入道に報ず ○12・8 駿河実相寺大衆幕府に訴状を呈す（一〇―三七）○12・8 立正安国論を書写し奥書す（全三）○書を三位日行に与う（法門可被申様之事）○龍華院日像下総平賀に生まる（別統）	○3・23 北条時宗駿河岩本実相寺山内粛正につき下文を与う（一〇―三六）○4・5 書を法鑒房に与う〔安国論御勘由来〕○8・21 書を宿屋入道に報ず○10・11 書を北条時宗へ送る ○10・11 書を宿屋左衛門光則へ送る○10・11 書を平左衛門尉頼綱へ送る○10・11 書を北条弥源太へ送る○10・11 書を建長寺道隆へ送る○10・11 書を極楽寺良観へ送る○10・11 書を大仏殿別当へ送る○10・11 書を寿福寺へ送る○10・11 書を浄光明寺へ送る○10・11 書を多宝寺へ送る○10・11 書を長楽寺へ送る○10・11 書を弟子檀那中に与う	○8・15 大聖人母妙蓮尼卒（大過去帳）○12・5 書を星名五郎に報ず○安房より上総藻原を経て下総富木邸に越年（別統）○日頂得度（別統）
		○1・29 凝念八宗綱要2巻を著す（奥）○4月 幕府諸社寺に蒙古調伏を祈らしむ（窓記）	○8月 良観鎌倉極楽寺に入る（性譜）
		○①・18 蒙古国牒状鎌倉到着（全三）○2・7 幕府蒙古・高麗の国書を奏す（八愚）○2月 時宗蒙古の使を退く（蒙牒奥）	
○1・11 蒙古船対馬に至る（鎌日）	○4・27 幕府問注所を罷め五方引付衆を置く（関評）○9月 蒙古重ねて来牒（関評）		
○第7次十字軍	○(蒙)クビライ、パスパ文字を制定	○(蒙)日本に牒状を出す ○(中ア)カイドウの乱起る	○(伊)トマス・アキナスの「神学大全」成る

西紀	1271	
年号	文永8	
天皇	亀山	
武家	時宗	
聖寿	50 佐渡	
日蓮大聖人並門下	○1・11 書を秋元太郎兵衛に報ず〔五節句事〕○4・17 寿量品得意抄を著す○5・7 書を四条金吾女房に報ず ○5・8 書を四条金吾に報ず〔月満御前御書〕○5月 書を三位房に与う〔十章抄〕⊙7・12 書を四条金吾に報ず〔旃餓鬼御書〕○7・13 浄土僧行敏の難状に答う〔行敏御返事〕○7月 良観等の訴状を論破す〔行敏訴状御会通〕(全一八〇) ○9・10 問注所に召出され平頼綱に見参す〔第2国諫〕(全一八三) ○9・12 書を平頼綱に与う〔一昨日御書〕○9・12 龍口法難(全九二) ○9・13 相模依智本間邸に送らる(全三三) ○9・13 日朗等5人投獄さる(全一三三) ○9・14 書を富木入道に報ず○9・21 書を四条金吾に報ず ○10・3 書を日朗等5人に与う〔五人土籠御書〕○10・5 書を太田・曾谷・金原等の3人に与う〔転重軽受法門〕 ○10月 書を清澄寺大衆中に与う〔佐渡御勘気抄〕○10・9 書を日朗に与う〔土籠御書〕○10・10 相模依智本間邸を発し佐渡に向かう(全九三一) 日興供奉(聖三六) ○10・21 越後寺泊に着く(全九三一) ○10・22 書を富木入道に与う〔寺泊御書〕○10・28 佐渡に着く(全九一六) ○11・1 佐渡塚原の配所に入る(全九一六) ○11・23 書を富木入道に報ず ○早勝問答を著す▽三位日行京より鎌倉に帰る(全一三六) ▽阿仏房・千日尼入信(別統)	○1・16―17 塚原問答(全九一八・全九五九) ○1・16 本間重連に自界叛逆を予言(全九一八・全九一九) ○1・17 法華浄土問答抄を著す○2月 初旬最蓮房入信(全一三〇)
一般宗教	○6・18―7・4 良観雨を祈る(全九二三)○7・8 浄土僧行敏大聖人を問難(全一七九)	○冬覚信尼、親鸞の墓を京大谷より吉水に移し庵室を
日本	○9・2 幕府高麗牒状を奏す(吉続) ○9・23 蒙古三度来牒(吉続) ○10・23 法皇公卿をして蒙古の牒状を議せしむ(吉続)○12・16 勅使を伊勢に遣わして異国降伏を祈らしむ(吉続)	○2・11 評定衆名越時章、同教時伏誅(全九二六・関評) ○2・15 南方六
世界	○(蒙)国号を元とす ○(伊)マルコ・ポーロ、イタリアを出発	○十字軍終わる ○(伊)イタ

1273	1272
10	9
亀	山
時	宗
52 佐渡	51 佐渡
○1・28 選法華経文〔祈禱経〕を最蓮房へ送る〔祈禱経送状〕（全一三六）○3・13 佐渡妙円尼〔世尊寺2代下江房日増室〕卒（世過）○4・25 観心本尊抄を著す ○4・26 観心本尊抄を富木入道に送る（全三三）○5・17 諸法実相抄を最蓮房に与う ○5・28 書を義浄房に報ず〔己心仏界抄〕○5月 如説修行抄を弟子檀那中に与う〔随身不離抄〕 ○5月 四条金吾鎌倉より佐渡に詣る（全付表一四）○⑤・11 顕仏未来記を著す○7・6 書を富木入道に報ず○8・3 書を南部六郎三郎に報ず ○8・15 書を経王御前に報ず ○9・19 書を弁殿尼御前に報	○2・11 書を最蓮房に報ず〔生死一大事血脈抄〕○2・18 書を富木入道に与う〔八宗違目抄〕○2・18 本間重連入信（全九九）○2・20 書を最蓮房に報ず〔草木成仏口決〕○2月 開目抄2巻を著す ○3・13 書を阿仏房に報ず ○3・20 書を弟子檀那中へ与う〔佐渡御書〕○4・3 一ノ谷へ移居（全一三六・全付表一四）▽中興入道・一谷入道入信（全付伝三・全付表一四）○4・10 書を富木入道に報ず ○4・13 書を最蓮房に報ず〔供物書〕○4月 書を四条金吾妻に報ず〔同生同名御書〕○5・2 書を四条金吾に報ず〔煩悩即菩提書〕○5・5 書を富木入道等に報ず〔真言諸宗違目〕○乙御前母〔日妙〕鎌倉より佐渡へ詣る（全一三七）○5・25 書を乙御前母に与う〔日妙聖人御書・楽法梵志抄〕○7・26 書を日昭等3人に与う○7月 真言見聞を著す○9月 日目走湯山円蔵坊に入る〔13才〕（聖二〇三）○9月 書を四条金吾に報ず〔梵音声書〕○祈禱抄を著す ○書を四条金吾に報ず〔経王御前御書〕▽本尊を顕す（六―二三）▽本尊を顕す（六―二四）
○12・7 良観弟子道観等の訴えにより佐渡の領主武蔵前司宣時私の御教書をもって大聖人の外護を禁ず（全二三・全九六）○一遍時宗を開く（聖六）	建つ（鵞伝）
○3月 元使趙良弼太宰府に来り京に入るを得ずして去る（東通）○5・27 北条政村卒69（関評）○7月佐渡に石灰虫降り稲害（全三九・全九四）	波羅探題、北条時輔伏誅（全九六・関評）○5月 高麗の使元の牒状を携えて来る（関評）
○（西欧）ハプスブルク家のルドルフ1世帝位につく	リア人ボルゲサノ、紡車による糸機を発明 ○（元）劉整を燕王に封ず、日本に元使を出す

西紀	1274	
年号	文永 11	
天皇	後宇多	
武家	時宗	
聖寿	52	53 鎌倉・身延
日蓮大聖人並門下	ず○当体義抄を最蓮房に与う○小乗大乗分別抄を著す○書を四条金吾に報ず〔呵責謗法滅罪抄〕○妙法曼荼羅供養事を著す○曾谷教信本尊抄を拝し迹門不読の義を唱う〔全九七三・別統〕○遠藤四郎盛国改宗して下江房日増と称す（世縁）	○1・14 書を富木常忍等門下中に与う〔法華行者逢難事〕○2・14 幕府赦免状を発す（全三三・聖三六四）○2・21 書を弥源太入道に報ず ○3・8 赦免状佐渡に着く（全九三〇）○3・12 書を遠藤左衛門尉に与う○3・13 一ノ谷を発つ日興等供奉（全九二八・聖五九六） ○3・14 網羅滞留（全九二八） ○3・16 越後柏崎へ着く（全九二八）○3・26 鎌倉へ着く（全三二八） ○4・8 平頼綱に見参〔第3国諫〕（全三三） ○5・12 鎌倉を発つ（全三三）○5・15 駿河大宮黒田に宿す（全九六四）○5・17 波木井郷に着く（全九六四）○5・17 書を富木常忍に報ず ○5・24 法華取要抄を著す ○6・17 身延沢に庵室成る（全一五四三）▽日興駿河岩本実相寺方面に往復して弘教す（熱原譜）○7・11 書を南条後家尼に報ず○7・26 書を南条時光に報ず○8・10 南条七郎太郎〔行忍〕水死（蓮誌）○9・17 書を弥源太入道に報ず○9・26 書を四条金吾に報ず〔主君耳入此法門免与同罪事〕○11・11 書を南条時光に報ず〔一管書〕○11・20 書を曾谷入道に報ず〔自界叛逆御書〕○12・15 顕立正意抄を著す ○12月本尊を顕す〔万年救護本尊〕（聖六〇七・保田妙本寺蔵）○立正観抄を著す〔法華止観同異決〕○日目初めて日興に謁す15才（聖六〇三） ○陸前一ノ迫宮野陸前守弘次〔葛西氏〕受法し身延山に参詣（宮図）
一般宗教		○4・10 加賀法印祈雨（全九三一）
日本		○4・12 鎌倉大風（聖三五八）○8・1 宗尊親王卒33（一代）○10月 蒙古来襲〔文永の役〕（全一三九）
世界		○(東ア)元日本第1次侵寇に失敗

建治 4.25

後宇多

時宗

54 身延

○1・24 書を太田金吾入道に与う○1・27 書を四条金吾妻に報ず○1月下旬書を南条家に与う〔春の祝御書〕○1月下旬日興南条家に到り故兵衛七郎行増の墓に代参し富士下方に弘教す（全一三一〇）○2・7 書を富木常忍に報ず ○2・16 書を安房の新尼に報ず ○書を三沢某に与う ○2・28 立正観抄を最蓮房に送る〔同送状〕○3・6 書を四条金吾に報ず〔此経難持書〕○3・10 書を曾谷入道・大田金吾に与う ○3・21 教行証御書を三位房に与う ○3月 書を曾谷入道に報ず〔方便品長行事〕○4・12 書を四条金吾に報ず〔王舎城事〕○4・12 書を国府入道に報ず○4・16 書を池上兄弟に与う〔兄弟抄〕○書を曾谷法蓮に与う〔法蓮抄〕○5・3 書を南条時光に報ず〔造営書〕○5・8 書を一谷入道妻に与う○5・25 書を桟敷女房に報ず○5月 書を妙一尼に与う ○6・22 佐渡世尊寺 2代下江房日増寂 84（過）○6・10 撰時抄2巻を著す ○6月 佐渡国府入道身延に参詣（全一三四）○6・16 書を佐渡国府尼に与う○6・22 書を西山入道に報ず〔三三蔵祈雨事〕○6・27 書を浄蓮房に報ず〔細見抄〕▽日興の教化により駿河熱原滝泉寺寺家下野房日秀・越後房日弁・少輔房日禅・三河房頼円及び在家若干帰伏して弟子となる（熱原譜）○6月滝泉寺大衆の改宗により院主等謗徒の迫害起こる（熱原譜）○7・2 書を南条時光に報ず○7・2 書を大学三郎に与う ○7・2 書を太田金吾妻〔即身成仏抄〕に報ず▽日興及び日向・覚乗房富士加島高橋家に在りて弘教す（全一四六三）○7・12 書を高橋入道に報ず〔加島書〕○7・12 書を南条時光に報ず○7・22 書を四条金吾に報ず○7・26 書を高橋入道に報ず○8・4 書を日妙尼に報ず〔乙御前御消息〕○8・6 書を高橋入道に

○4・27 山徒竜象の坊を焼く（座記）○12・26 真言僧強仁勘状を大聖人に呈す（全一八四）

○4・15 蒙古の使者杜世忠等長門室津に至るついで幕府之を鎌倉に召す（関評）○9・7 幕府蒙古使者杜世忠等を龍口に斬る、朝廷、幕府の公事を減じ民力を休養して兵備を厳にす（関評）○11月 幕府元寇により北条実政を鎮西に遣わす（帝編）

○(元)マルコ＝ポーロ、世祖に謁す ○(朝)高麗元の日本遠征を援助し財政困難。官制を元の風に改める

	1275	西紀
	建治　4.25	年号
	後宇多	天皇
	時宗	武家
	54 身延	聖寿

日蓮大聖人並門下

報ず〔異体同心事〕○8・18 書を南条時光に報ず○8・21 書を池上兵衛志に報ず ○8・23 書を富木常忍に与う〔不可親近謗法者事〕○8・25 書を妙心尼に報ず ○8月 書を南条内方に報ず〔単衣抄〕○9・3 書を佐渡千日尼に報ず○9・20 書を石本日仲に報ず ○9・28 書を富木常忍妻に報ず〔御衣並単衣御書〕○10月 本尊を南条時光に授与(六一三三) ○10月 高橋六郎兵衛入道卒(全一四八三) ○11・3 書を太田入道に報ず〔転重軽受事〕○11・20 書を池上兵衛志に報ず ○11・23 書を富木常忍に報ず〔観心本尊得意抄〕○11月 本尊を顕す(六一一七七・石蔵) ○12・22 書を南条時光母に報ず〔上野殿母尼御前御返事〕○12・26 真言僧強仁の勘状に答え公場対決を促す(全一六四) ○書を西山殿に報ず〔蒙古使御書〕○書を四条金吾に与う〔瑞相御書・真言所破之事〕○書を某女に与う〔善無畏抄〕○書を南条時光に与う〔神国王御書・真言亡国抄〕○書を南条時光に与う〔本門取要抄〕○上行菩薩結要付嘱口伝を著す○日法〔日弁弟子〕日興を介し大聖人の室に入る(聖一三〇) ○最蓮房流罪赦免(別統) ○大進房をして故高橋入道の墓に代参せしめ兼ねて書を妙心尼に与う〔滅劫御書〕(全一四六七) ○書を富木常忍に与う〔聖人知三世事〕

○1・11 書を清澄寺大衆中に与う〔虚空蔵菩薩書〕○1・19 書を南条時光に報ず〔初春書〕○2・5 本尊を顕す(六一三〇・西山本門寺蔵) ○2・15 船守弥三郎卒(蓮慶寺過) ○2・17 書を松野六郎左衛門尉に報ず ○2月

一般宗教

○1・9 山徒蜂起(座記)

日本

○5・4 花山院通雅卒44(公補) ○10・23 北条実時卒53(関評)

世界

○(元)臨安を落し、宋の恭宗を捕える

2

後宇多

時宗

55 身延

本尊を顕す(八―三三) ○2月 本尊を顕す〔鉄砲曼荼羅〕(八―三五) ○3・16 清澄の道善房寂(大過去帳) ○3・18 書を南条時光に報ず ○3・27 書を富木尼に報ず ○3月 書を光日房に与う ○3月 三位房・日向等安房に在り(全九三一) ○③・5 書を妙密に報ず ○③・24 書を南条時光に報ず〔大橋書〕▽因幡房日永改衣(全三四三) ○4・8 日目伊豆走湯山円蔵坊において日興により得度(聖六三) ○4・8 寂日房日華身延に入室し二十家阿闍梨と賜う(蓮誌) ○4・12 書を佐渡国府入道に報ず ○4月 本尊を顕す(八―三五) ○6・27 書を四条金吾に報ず ○7・15 書を四条金吾に報ず〔釈迦仏供養事〕 ○7・21 書を日昭に与う〔弁殿御消息〕 ○7・21 報恩抄2巻を著し日向等をして道善房の墓前に読ましむ(聖三六・全三〇) ○7月 宗論準備のため日向等をして経論を諸寺に探訪せしむ(全三三〇) ○8・3 書を曾谷入道に与う〔成仏用心抄〕 ○8・10 書を道妙禅門に報ず ○8・13 本尊を顕す(八―三〇四・日向定善寺蔵) ○8・13 本尊を顕す〔病即消滅不老不死本尊〕(八―一七・石蔵) ○8・13 本尊を顕す(八―三五) ○9・6 書を四条金吾に報ず〔有智弘正法事〕 ○9・15 書を南条九郎太郎に報ず ○11・24 日目身延山に詣で常随給仕す(聖六三) ○11・29 書を富木常忍に報ず ○12・9 三位房を使いとし書を松野六郎左衛門に報ず〔十四誹謗書〕 ○12・13 書を富木常忍に報ず〔道場神守護事〕 ○12月 書を南条平七郎に報ず〔本尊供養書〕 ○書を富木常忍に与う〔忘持経事〕▽書を光日房に与う〔種々御振舞御書〕 ○書を大井荘司入道に報ず ○書を西山入道に報ず ○書を松野六郎左衛門に報ず ○滝泉寺院主代 行智遂に下野房日秀・越後房日弁・少輔房日禅・三河房頼円に称名念仏の誓状を求む、頼円之に応じ三師擯出せらる、日禅は河合に日秀・日弁は寺中に在りて弘教す(全六三三)

○3月 幕府鎮西将士に命令して石塁を築く

西紀	1277
年号	建治 3
天皇	後宇多
武家	時宗
聖寿	56 身延

日蓮大聖人並門下

○2月 日目身延において五戒口決伝受を書写す〔聖全二〕○3・2 書を池上兵衛志妻に報ず○3・19 書を六郎次郎に報ず ○3・20 三位房を加島に遣わす（全一四六）○3月 法華初心成仏抄を駿河岡宮妙法尼に与う○3・23 富木常忍不審状を呈す（宗全一一六〇）○4・10 四信五品抄を富木常忍に与う〔末代法華行者位並用心事〕○4・12 書を太田乗明に報ず〔金珠女書〕○5・15 書を南条時光に報ず○6・9 三位公鎌倉桑ケ谷にて竜象房と問答す（全一三三）○6・23 四条金吾江馬入道より勘気を蒙る（全一一三三）○6・25 四条金吾に代わりて陳状を書く〔頼基陳状〕○6月 因幡房日永に代わりて書を下山兵庫光基へ与う〔下山抄〕○7・13 書を治部房祖母へ報ず〔盂蘭盆御書〕○7月 書を四条金吾に報ず〔為法華経不可惜所領事〕○8・4 書を弥三郎に報ず○8・23 書を日女御前に報ず〔多宝塔中本門本尊事〕○9・9 書を松野六郎左衛門に報ず ○9・9 書を池上兵衛志に与う ○9・11 書を四条金吾に報ず〔崇峻天皇御書・同地獄抄〕○10・13 船守弥三郎妻卒（蓮慶寺過）○11・1 書を富木常忍に報ず〔裏権出界抄・常忍抄〕○11・7 書を池上兵衛志妻に報ず○11・18 書を太田入道妻に報ず〔八寒地獄事〕○11・28 書を曾谷入道に報ず〔如是我聞抄〕○12・17 書を南条七郎次郎に報ず〔大白牛車書〕○12・30 示病（全一一七九）▽身延の草庵を修理す（全一三三）○書を四条金吾に報ず〔八風抄〕○書を四条金吾に報ず〔告誡書〕○書を四条金吾に報ず ○書を聖密房に遣わす○書を南条時光に与う〔庵室修復書〕

一般宗教

○5・8 興福寺僧徒春日神木を揺がす（続史）

日本

○12・19 幕府六波羅政務の条規を議定す（建治三年日記）

世界

○(伊)ヴィスコンティ家、ミラノの支配権をにぎる。このころ、眼鏡発明される
○(元)文天祥の兵を破る、ビルマを征討開始

弘安 2.29

後宇多

時宗

57 身延

○1・1 御義口伝成る（聖二八）▽駿河岩本実相寺衆・四十九院衆謗言怨嫉をなす（全一四三）○1・16 書を実相寺豊前公に報ず〔実相寺御書〕○1・25 書を四条金吾に与う▽四条金吾勘気を解かる（全一一五）○2・13 書を松野六郎左衛門に報ず○熱原神四郎・弥五郎・弥六郎入信（九―二五八）○2・17 書を桟敷女房に報ず○2・23 書を駿河三沢小次郎に報じ熱原の謗徒の迫害に抗すべく駿河僧俗の結束を励ます〔三沢抄〕（全一四七）○2・25 書を南条時光に報ず〔蹲鴟書〕○2・28 書を富木常忍に報ず〔始聞仏乗義・種々相待抄〕▽立正安国論を再治す〔建治の広本〕（全一六四）○3・19 門弟に法華経の講を始む〔御聞講書〕（全六〇七）○3・21 公場対決の使者並びに書状到来す（全一三四）○3・21 書を門下一同に与う（諸人御返事）○3・24 石河新兵衛道念日実室妙大〔南条時光姉〕卒（家譜）○3月 四十九院申状 ○4・1 書を南条時光に報ず〔法要書〕○4・11 書を檀越某に報ず○4・23書を太田左衛門尉に報ず○4月 書を浄顕・義浄房に与う〔華果成就御書〕○5・1 書を妙法尼に報ず〔松野殿御返事〕○5・3書を西山窪尼に報ず ○5・24 書を南条時光妻に報ず〔八木書〕○6・22 尾張次郎兵衛卒（全一四〇六） ○6・25 書を日女御前に報ず〔死活抄〕○6・26 書を池上兵衛志に報ず○6・26 書を四条金吾に報ず〔二病書〕○6・27 書を窪尼に報ず○7・3 書を妙法尼に報ず〔六難九易御書〕○7・7 書を南条平七郎に報ず〔種々物御消息〕○7・8 書を南条時光に報ず○7・14 書を妙法尼に報ず ○7・27 佐渡阿仏房日得身延に三度参詣（全一三四） ○7・28 書を千日尼に報ず○8・11 書を弥源太入道に報ず○8・16 書を妙心尼に報ず○8月 本尊を日頂に授与（八―三三） ○9・6 書を

○5・15 山徒園城寺長吏隆弁の鹿谷坊を焼く（続史）
○7・24 建長寺道隆寂66（釈書）
○京建仁寺焼失（一代）

○11月元の世祖、日本商船の交易を許可する

○(元)文天祥を捕える

西紀	1279	
年号	弘安2	
天皇	後宇多	
武家	時宗	
聖寿	58 身延	57
日蓮大聖人並門下	○1・3 書を南条時光に報ず ○1月 興津時業、日興書写の法華経一部を請く(九一巻首) ○2・2 書を四条金吾妻日眼に報ず〔日眼女釈迦仏供養事〕 ○2・21 書を池上宗長に与う〔孝子御書〕 ○2月 本尊を日目に授与(六一三三) ○3・21 阿仏房日得佐渡に卒91(全一三〇) ○3・26 書を松野後家尼に報ず ○4・8 法華行人四郎男駿河三日市場浅間神社分社に法敵のために傷害さる(全六三) ○4・20 書を南条時光に報ず〔杖木書〕 ○三位房日行寂(全六九九) ○5・2 書を新池左衛門尉に報ず〔八木抄〕 ○5・4 書を西山窪尼に報ず ○5・11 書を西山入道へ報ず〔宝軽法重事〕 ○5・17 書を富木入道に報ず〔四菩薩造立抄〕 ○5月 書を弟子某に与う〔出家功徳御書〕 ○武蔵金竜山浅草寺座主寂海改宗し日寂と賜わる(長昌寺寺誌) ○6・2 日寂武蔵橘場〔鐘ケ淵〕に長昌寺を創す(寺誌) ○6・20 書を松野六郎左衛門尉妻に報ず ○7・2 遠藤守綱・父阿仏房日得の遺骨を身延に葬る(全一三三) ○7・27 書を太田乗明に報ず ○8・8 書を南条時光に報ず ○8・17 書を曾谷道宗に報ず〔五	妙法尼に報ず ○9・15 書を四条金吾に報ず ○9・19 書を南条時光に報ず〔塩一駄書〕 ○9・24 書を太田入道妻に報ず ○9月 本尊問答抄を浄顕房に与う ○10月 書を四条金吾に報ず〔所領書〕 ○⑩・12 書を南条時光に報ず〔柑子書〕 ○⑩・19 書を千日尼に報ず ○⑩・22 書を四条金吾に報ず〔必仮心固神守則強書〕 ○11・1 書を南条九郎太郎に報ず ○11・29 書を池上兵衛志に報ず
一般宗教		
日本	○6月 宋僧祖元北条時宗の請により来朝(釈書) ○7・29 幕府元使を博多に斬る(師守) ○12・27 前権大納言藤原為氏亀山上皇の院宣により続拾遺和歌集20巻を選進す(増)	
世界	○(東ア)元南宋を滅ぼす ○(印)ベンガルにトラグリルの反乱	

58 身延

味主抄」○8・18 本尊を佑盛日合に授与（六―）七七・石蔵）○8月 弥四郎男法敵に首を斬らる（全六五三）○9・16 書を寂日坊に与う ○9・21 大進房等落馬悶死（全二九〇・日興詳伝）○9・21 駿河熱原の信士神四郎等20人滝泉寺行智等に讒せられ鎌倉に送らる 〔熱原法難〕（全六四九・全一四五五）○10・12 本門戒壇の大御本尊を造立す ○10・12 和泉公日法一体三寸の造り初めの御影を造立す大聖人印可（聖七三）○10・12 書を日興・日秀・日弁等に報じ滝泉寺申状草案を与う（全六四九・全一四五六）○10・15 下野房日秀・越後房日弁等滝泉寺申状を幕府に上る（全六四九・全一四五六）○10・15 日興等鎌倉より大聖人に法難の状を急報（全一四五五）○10・17 書を日興・日秀・日弁等に報ず 〔聖人等御返事・変毒為薬御書〕○10・20 書を日朗・池上宗仲に報ず 〔両人御中御書〕○10・23 書を四条金吾に報ず 〔剣形書〕○10月 四条金吾要撃さる（全一九三）○10月 三世諸仏総勘文教相廃立を著す ○11・2 書を妙心尼御前に報ず ○11・6 書を南条時光に報じ熱原信徒の法難を賞す 〔竜門書〕（全一五六〇・石蔵）○11・25 書を富城入道尼に与う ○11・25 大聖人、日頂に付して下野房日秀・越後房日弁を富木入道の許へ赴かしむ（全九〇一） ○11・30 書を中興入道に報ず ○11月 本尊を俗日増に授与（六―一七七・石蔵）○12・3 書を池上宗仲に報ず ○12・27 書を南条時光に報ず ○12・27 書を西山窪尼に報ず ○日興に文永11年12月の本尊法口決を記す（聖六一三） ○日興三大秘〔万年救護本尊〕を賜う（聖六一三・保田妙本寺蔵）▽本尊を顕す（六―三三） ○書を富木常忍妻に与う〔可延定業書〕

西紀	1280
年号	弘安3
天皇	御宇 多
武家	時宗
聖寿	59 身延

日蓮大聖人並門下

○1・11 日興に法華本門宗血脈相承〔百六箇抄〕を相伝す(聖三三・聖六三・全六三)○1・11 書を南条時光に報ず○1・27 書を太田入道に報ず〔慈覚大師事〕○1・27 書を秋元太郎兵衛に報ず〔筒御器抄〕○2月 書を新池左衛門尉に与う ○2月 本尊を優婆塞日安に授与(六―三三)○2月 本尊を顕す(六―一六・土浦永井藤蔵蔵)○2月 日興遠江の新池家に在り(全一四四)○3・3 書を日住禅門に報ず ○3・8 書を南条時光に報ず ○3月 本尊を顕す〔紫宸殿本尊〕(六―一六・石蔵)○3月本尊を顕す(六―三三)○4・8 熱原神四郎・弥五郎・弥六郎鎌倉に刑死す他17人放免(日興詳伝六四)○4・10 書を富木入道に報ず ○4月 本尊を顕す(六―一六・下総富久成寺蔵)○5・3 書を窪尼に報ず〔三物書〕○5・4 書を妙心尼御前に報ず○5・8 本尊を寂日坊日華に授与(六―三三)○5・9 本尊を少輔公日禅に授与(六―一六・東京法道院蔵)○5・18 書を妙一尼に報ず○5・26 本尊を民部日向に授与(六―一六・石蔵)○5・26 書を富木入道に報ず〔諸経与法華経難易事〕○5・28 門弟への法華経の講終る〔御講聞書〕(全六〇七)○6・15 南条七郎次郎・七郎五郎兄弟身延に参詣(全一五四・全一五六七)○6・27 書を窪尼に報ず ○6月 本尊を顕す(六―二六・仙台仏眼寺蔵)○7・1 佐渡遠藤守綱再度身延に参詣(全一三三)○7・2 書を佐渡阿仏房尼に報ず ○7・2 書を南条時光に報じ神主等の身辺を案ず(全一五四)○7・7 書を某に報ず〔浄蔵浄眼御書〕○7・14書を妙一尼に報ず〔真言法華即身成仏抄〕

一般宗教

○6・24 山徒園城寺北院を焼く(一代・続史)○11・14 鎌倉八幡宝殿焼く(全一九六)

日本

○2月 朝廷、諸寺に異国降伏の祈禱を命ずる ○12月 幕府、鎮西の守護・御家人などに異賊警固に同心することを命令する ○この年、阿仏尼『十六夜日記』成る

世界

○(中近東)インド貿易の中心エジプトに集中。紅海沿岸の諸港繁栄。マムルーク朝の黄金時代

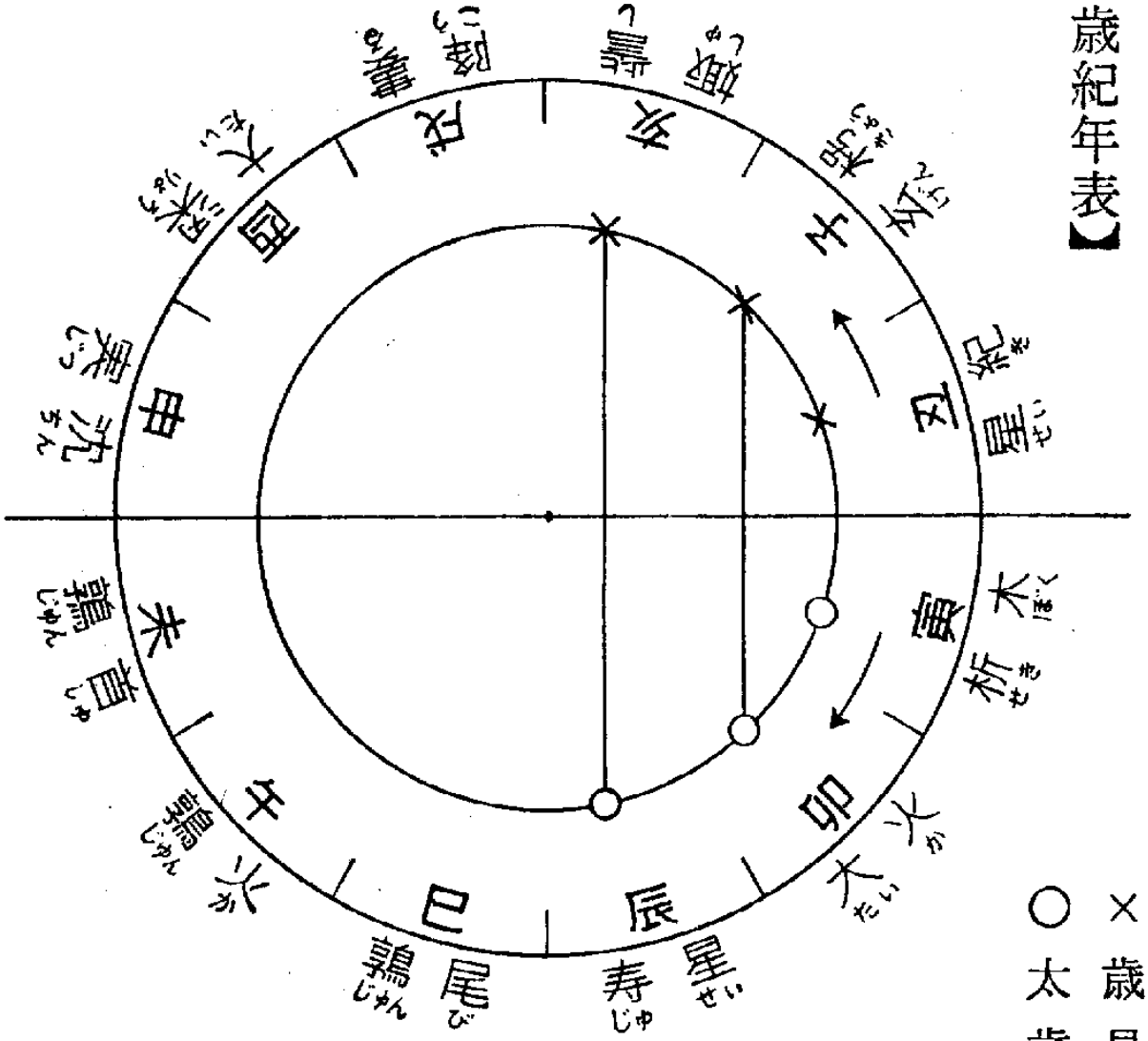
1281	1280
4	3
後宇多	
時宗	
60 身延	59 身延
○1・13 書を南条母尼に報ず（石蔵）○3・18 書を南条時光に報じ神馬を労わる（全一三七）○3月 本尊を俗日大に授与（八―二三・讃岐本門寺蔵）○4・8 書を太田金吾に報ず〔三大秘法稟承事〕○4・25 本尊を顕す（八―一六・東京常泉寺蔵）○4・25 本尊を比丘尼持円に授与（八―二三）○5・26 書を池上兄弟に与う〔八幡宮造営事〕○6・16 蒙古来襲につき門下一同の言動を誡む〔小蒙古御書〕（全一三四）○6・18 書を池上兵衛志に報ず○⑦・1 書を曾谷二郎入道に報ず○8・8 書を光日房に報ず ○8・22 書を治部房に報ず ○9・11 書を南条時光に報ず〔鶏冠書〕○9・20 書を南条時光に報ず ○10・22 書を富城入道に報ず ○10月 本尊を平太	○8・14 書を内房女房に報ず ○8月日若生まる〔南条時光長男〕（全一三六）○8・26 書を南条時光に報ず〔子財書〕○9・1 書を松野六郎左衛門妻に報ず○9・3 本尊を俗日目に授与（八―三三）○9・5 南条七郎五郎〔時光弟〕卒16（全一三三）○9・6 書を南条時光に報ず（石蔵）○9・11 天王寺屋浄本卒（年譜）○10・5 書を妙一尼に報ず〔法華即身成仏抄〕○10・8 書を四条金吾に報ず ○10・21 書を刑部左衛門尉妻に報ず ○10・24 書を南条母尼に報ず〔中陰書〕○11・3 十八円満抄を著し最蓮房に送る ○11・29 書を日厳尼に報ず ○11月 本尊を日崇に授与（八―二三）○11月 本尊を和泉公日法に授与（八―二六）○12・16 書を四条金吾妻日眼に報ず〔八幡抄〕○12・18 書を智妙房に報ず ○12・27 書を南条時光に報ず ○12月 諫暁八幡抄を著す（石蔵）○12月 書を南条時光に報ず ○書を南条時光に報ず（石蔵）○書を南条時光に報ず ○書を池上宗仲に報ず ○書を王日女に報ず ○書を某に報ず〔法衣書〕
○2月 東寺真広身延登詣聞法（年譜）○10・18 興福寺僧徒入洛敷訴す（続史・一代）	
○4・28 鎌倉大風（全二〇七）○5月 蒙古来襲〔弘安の役〕（全九三）○6・6 元・高麗の軍船志賀島等を襲う（八愚）○7・2 竜造寺季時等敵軍と壱岐に戦う（竜文）○⑦・1 蒙古船大風に遭い難破大敗す（全九九三）	
○〔東ア〕元日本第2次侵寇に失敗する	

西紀	1282	
年号	弘安5	
天皇	後宇多	
武家	時宗	
聖寿	61 池上	60
日蓮大聖人並門下	▽諸要文により法華経を注す〔注経〕○日興、法華本門本尊問答抄を写す（下総富久成寺蔵）○1・7 書を四条金吾に報ず〔八日講御書〕○1・14 書を内記左近入道に報ず ○2・22 岡宮妙法尼寂（年）○2・28 南条時光の病につき法華証明抄を著し日興に与う〔死活抄〕（全一三六六） ○2・29 園城寺御下文を賜わる（石蔵写）○3月 書を南条時光に報ず〔延三枚御書〕（石蔵）○6・26 書を富木常忍に報ず〔治病大小権実違目〕○此夏 首題について奥義口伝等日興に相伝す（聖一四）○9月 日興を唯授一人本門弘通の大導師と定め日蓮一期弘法付嘱書を賜う（聖三九）○9・8 身延出山（聖六四）○池上への途次大聖人の命により日目、伊勢法印を論破す（聖六〇三）○9・18 池上着（聖六一・全一三六）○9・19 書を波木井実長に報ず ○9・25 池上に立正安国論を講ず（聖一四）○10・8 日興に産湯相承を相伝す（聖七八）○10・8 六老僧を定む（聖六一）○10・10 日郎に授与（六―三六）○11・15 書を南条母尼に報ず○11・24 身延山久遠寺十間四面の大坊成る（全一三七五）○11・25 書を南部六郎に与う〔地引御書〕○12・8 書を南条母尼に報ず〔所労書〕（石蔵）○12・27 書を窪尼に報ず ○12月 本尊を優婆夷一妙に授与（石蔵）○本尊を日教に授与（六―一六・金沢妙喜寺蔵）○日興園城寺申状を代奏す〔初度天奏〕（聖六三）○書を某に与う〔大白牛車御消息〕○書を岡宮妙法尼に報ず○書を西山入道へ報ず	
一般宗教	○12・19 興福寺僧徒の訴えによりて権中納言久我具房・按察使源資平を配流す（帝編）○12月 北条時宗 円覚寺を創し宋僧祖元を請ず（続史）	
日本		
世界		○(英)インングランド王エドワード1世、ウェールズを征服。アラゴン王ペドロ3世シチリア島を併合。○(伊)フィレンツェにギルド首脳者からなる執政委員会成立。民主政治を実施。

1282		
5		
後	宇	多
時		宗
	61 池上	

興に御本尊七箇之相承・教化弘経七箇之口決大事を相伝す（聖三七・聖六一四・宗全三―三九）○10・10 日興神天上勘文を著す（聖三二）○10・11 日興に法華本門宗血脈相承事〔本因妙抄〕を賜う（聖三四一・全六七）○10・13 日興を身延山久遠寺の別当と定め身延山付嘱書を賜う（聖三四〇）○10・13 辰の刻池上宗仲の館にて御入滅（聖五六二）○10・14 戌の刻入棺、子の刻葬送〔御火葬〕（聖五六二）○10・16 日興〔大聖人御遷化記録〕を記す（聖五五）○10・21 日興遺骨を奉じ池上を発す（五―一四五）○10・21 夜、飯田宿所（五―一四五）○10・22 湯本宿所（五―一四五）○10・23 車返宿所（五―一四五）○10・24 上野南条時光館宿所（五―一四五）○10・25 身延に帰山（五―一四五）○12・11 波木井実長書を日興に奉る（西山文書）

【太歳紀年表】



○ 太歳　× 歳星

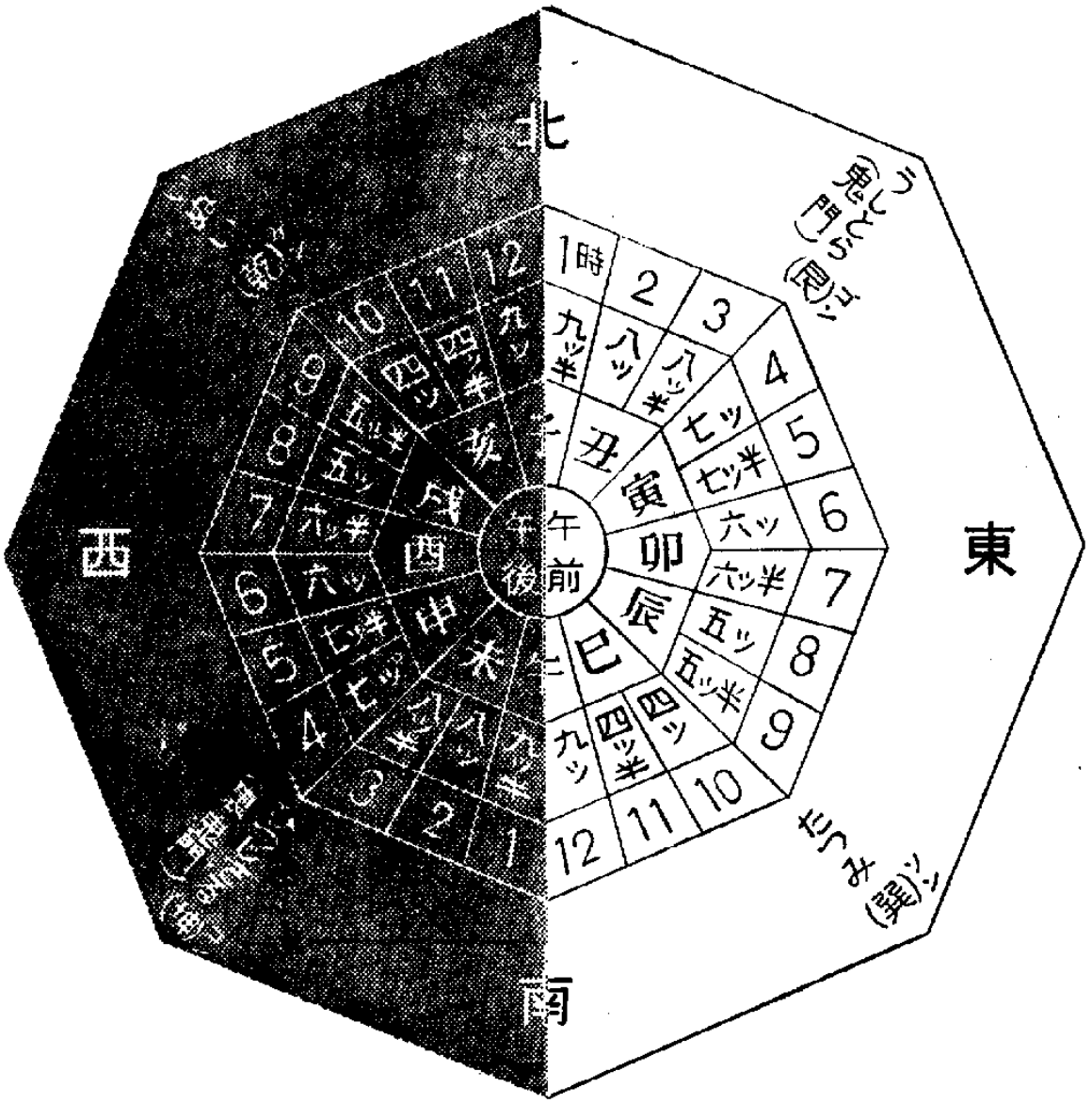
太歳（たいさい）について

木星（歳星）は十二年の周期をもって天を一周するので、十二支の運行に当てはめて、歳星のあるところの干支をもって歳を記するようになった。

しかし歳星の運行は十二支の配当とは逆方向なので歳星と逆方向に進む仮想の太歳を設定し、その太歳の位置をもってその歳に名づけた。これを太歳紀年法といい、現行の干支紀年法の前身である。

御書における太歳は、とくに公文書等。年代を明確にする必要のある場合に、用いられたように思われる。

【方位時刻表】



【月の異名】

一月	むつき（睦月）	孟春・初春
二月	きさらぎ（如月）	仲春
三月	やよい（弥生）	季春・晩春
四月	うづき（卯月）	孟夏・初夏
五月	さつき（皐月）	仲夏
六月	みなづき（水無月）	季夏・晩夏
七月	ふづき（文月）	孟秋・初秋
八月	はづき（葉月）	仲秋
九月	ながつき（長月）	季秋・晩秋
十月	かんなづき（神無月）	孟冬・初冬
十一月	しもつき（霜月）	仲冬
十二月	しわす（師走）	季冬・晩冬

【十干十二支】

（十干）

甲（こう）	乙（おつ）	丙（へい）	丁（てい）	戊（ぼ）	己（き）	庚（こう）	辛（しん）	壬（じん）	癸（き）
木		火		土		金		水	
兄	弟	兄	弟	兄	弟	兄	弟	兄	弟
きのえ	きのと	ひのえ	ひのと	つちのえ	つちのと	かのえ	かのと	みずのえ	みずのと

（十二支）

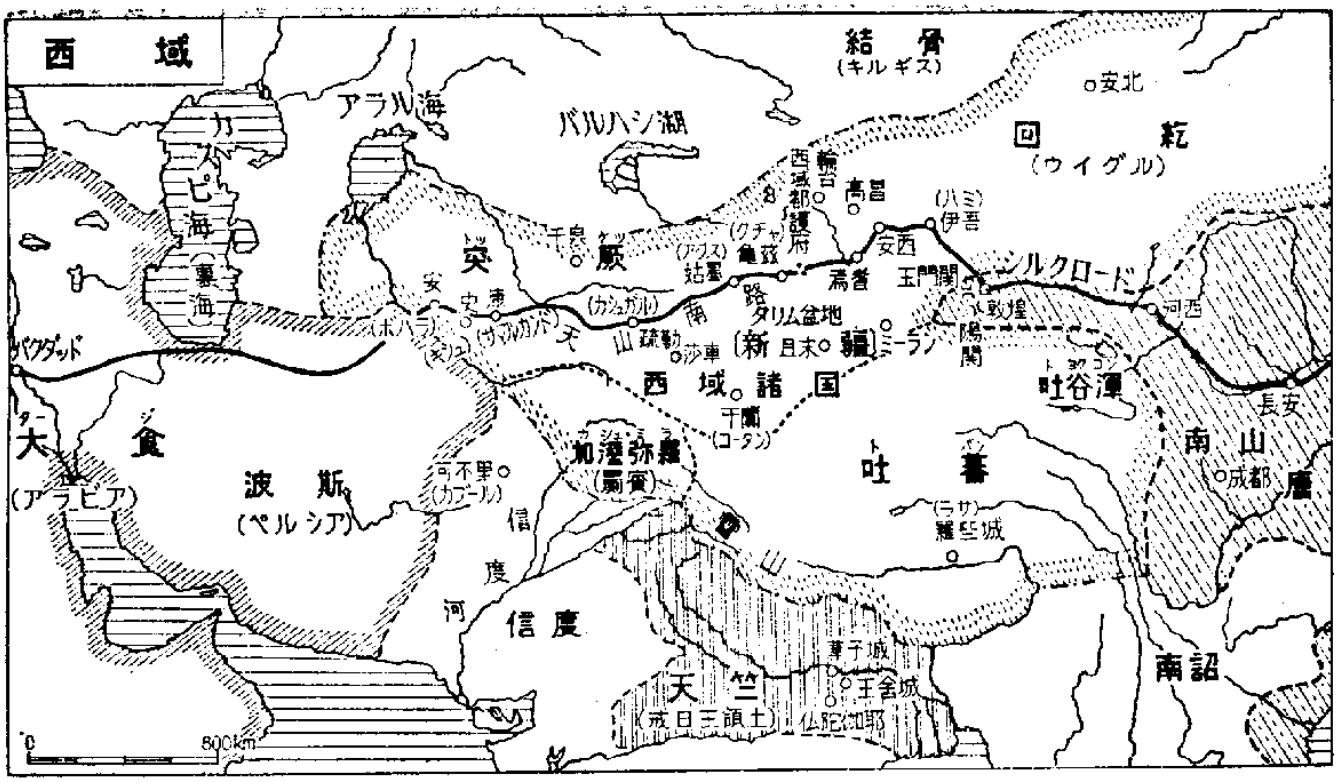
子（し）	丑（ちゅう）	寅（いん）	卯（う）	辰（しん）	巳（し）	午（ご）	未（び）	申（しん）	酉（ゆう）	戌（じゅつ）	亥（がい）
ね	うし	とら	う	たつ	み	うま	ひつじ	さる	とり	いぬ	い

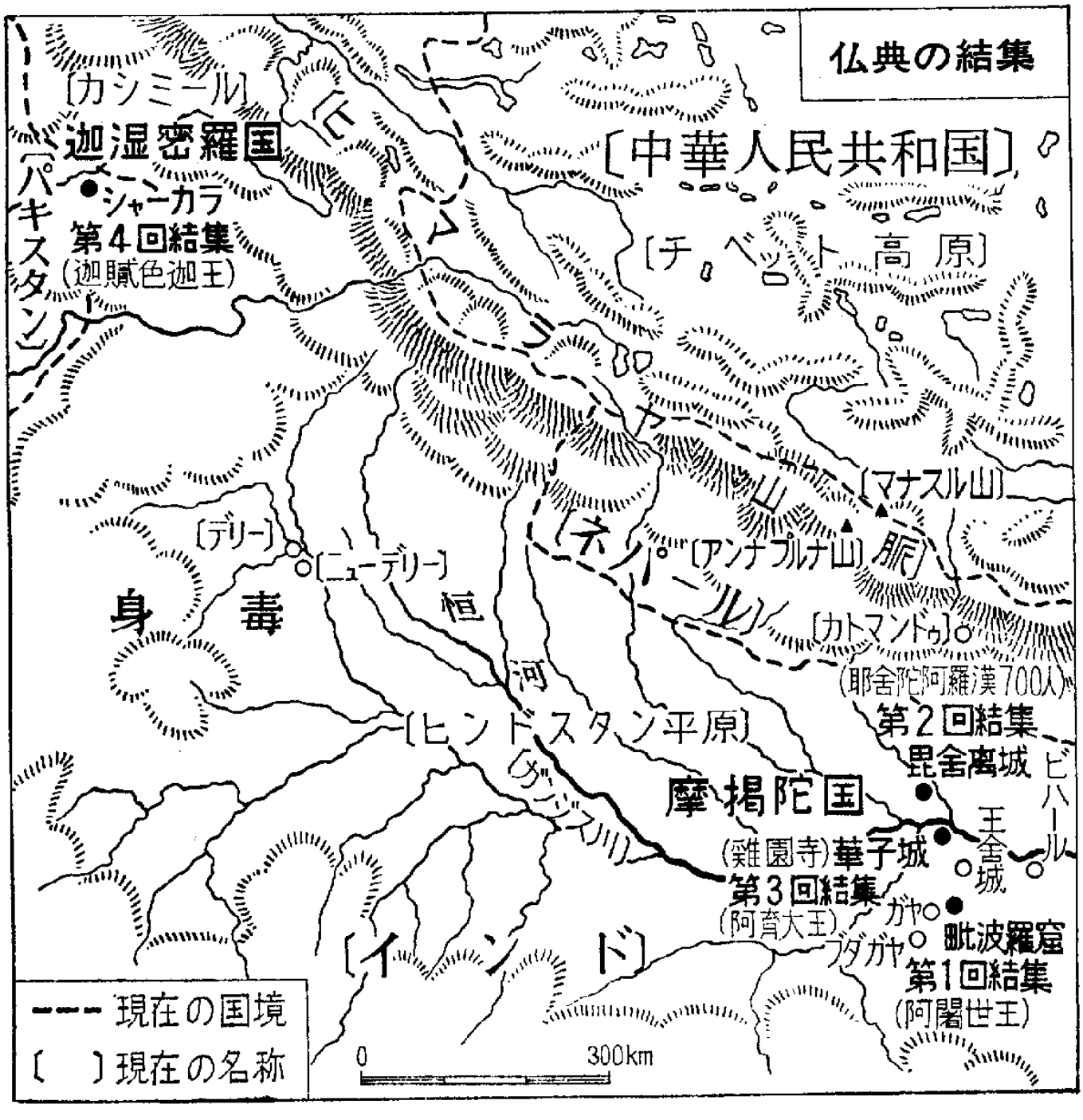
（干支組み合わせ表）

干支	干支番号	干支	干支番号	干支	干支番号	干支	干支番号	干支	干支番号	干支	干支番号
きのえ ね 甲子	1	きのえ いぬ 甲戌	11	きのえ さる 甲申	21	きのえ うま 甲午	31	きのえ たつ 甲辰	41	きのえ とら 甲寅	51
きのと うし 乙丑	2	きのと い 乙亥	12	きのと とり 乙酉	22	きのとひつじ 乙未	32	きのと み 乙巳	42	きのと う 乙卯	52
ひのえ とら 丙寅	3	ひのえ ね 丙子	13	ひのえ いぬ 丙戌	23	ひのえ さる 丙申	33	ひのえ うま 丙午	43	ひのえ たつ 丙辰	53
ひのと う 丁卯	4	ひのと うし 丁丑	14	ひのと い 丁亥	24	ひのと とり 丁酉	34	ひのとひつじ 丁未	44	ひのと み 丁巳	54
つちのえたつ 戊辰	5	つちのえとら 戊寅	15	つちのえ ね 戊子	25	つちのえいぬ 戊戌	35	つちのえさる 戊申	45	つちのえうま 戊午	55
つちのと み 己巳	6	つちのと う 己卯	16	つちのとうし 己丑	26	つちのと い 己亥	36	つちのととり 己酉	46	つちのとひつじ 己未	56
かのえ うま 庚午	7	かのえ たつ 庚辰	17	かのえ とら 庚寅	27	かのえ ね 庚子	37	かのえ いぬ 庚戌	47	かのえ さる 庚申	57
かのとひつじ 辛未	8	かのと み 辛巳	18	かのと う 辛卯	28	かのと うし 辛丑	38	かのと い 辛亥	48	かのと とり 辛酉	58
みずのえさる 壬申	9	みずのえうま 壬午	19	みずのえたつ 壬辰	29	みずのえとら 壬寅	39	みずのえ ね 壬子	49	みずのえいぬ 壬戌	59
みずのととり 癸酉	10	みずのとひつじ 癸未	20	みずのとみ 癸巳	30	みずのとう 癸卯	50	みずのとうし 癸丑	50	みずのとい 癸亥	60

〈収録地図一覧〉

仏教流布の国
西域
仏典の結集
インド全図
鎌倉
安房の国
下総の国
旧国名、近国・中国・遠国
日蓮大聖人逢難の跡
富士大石寺周辺図
日興上人行蹟図

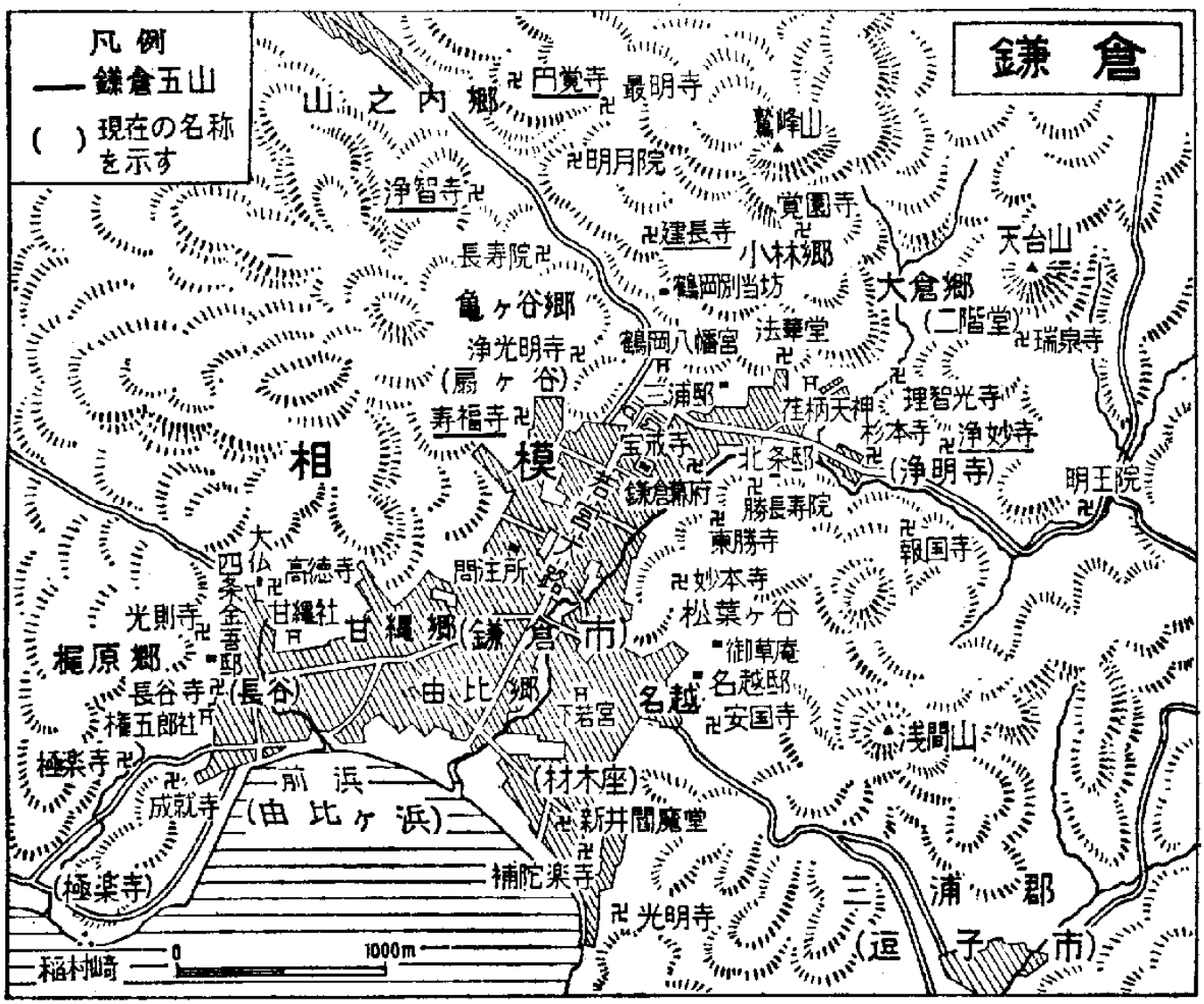

西域
結骨
(キルギス)
アラル海
バルハシ湖
回紇
(ウイグル)
カスピ海
裏海
突厥
(アクス)
亀茲
(ハミ)
伊吾
高昌
西域都護府
安西
玉門関
シルクロード
敦煌
陽関
河西
安北
安中
(カシュガル)
南路
タリム盆地
沙車
〔新疆〕
ミーラン
西域諸国
干闐
(コータン)
吐谷渾
長安
成都
大食
(アラビア)
波斯
(ペルシア)
呼不里
(カブール)
迦湿弥羅
(罽賓)
吐蕃
(ラサ)
羅些城
信度河
南詔
天竺
(五天竺)
草子城
王舎城
仏陀伽耶
0
800km

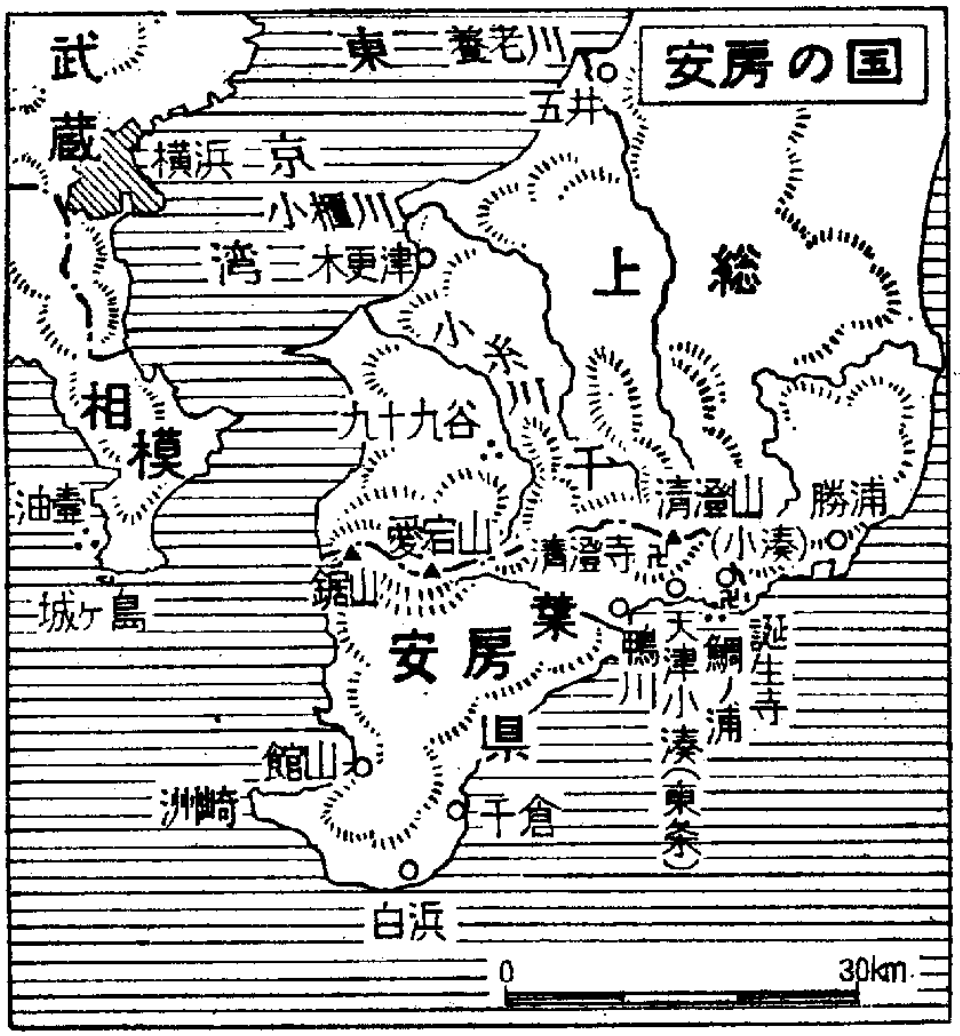

仏典の結集
〔カシミール〕
迦湿弥羅国
シャーカラ
第4回結集
(迦膩色迦王)
〔パキスタン〕
ヒンドゥークシュ山脈
〔中華人民共和国〕
〔チベット高原〕
カラコルム山脈
〔マナスル山〕
〔アンナプルナ山〕
ヒマラヤ山脈
〔デリー〕
〔ニューデリー〕
身毒
恒河
〔カトマンドゥ〕
(耶舎陀阿羅漢700人)
第2回結集
〔ヒンドスタン平原〕
毘舎離城
ビハール
摩掲陀国
(雞園寺)華子城
王舎城
第3回結集
(阿育大王)
ガヤ
ブダガヤ
毗波羅窟
第1回結集
(阿闍世王)
〔インド〕
現在の国境
〔 〕現在の名称
0
300km

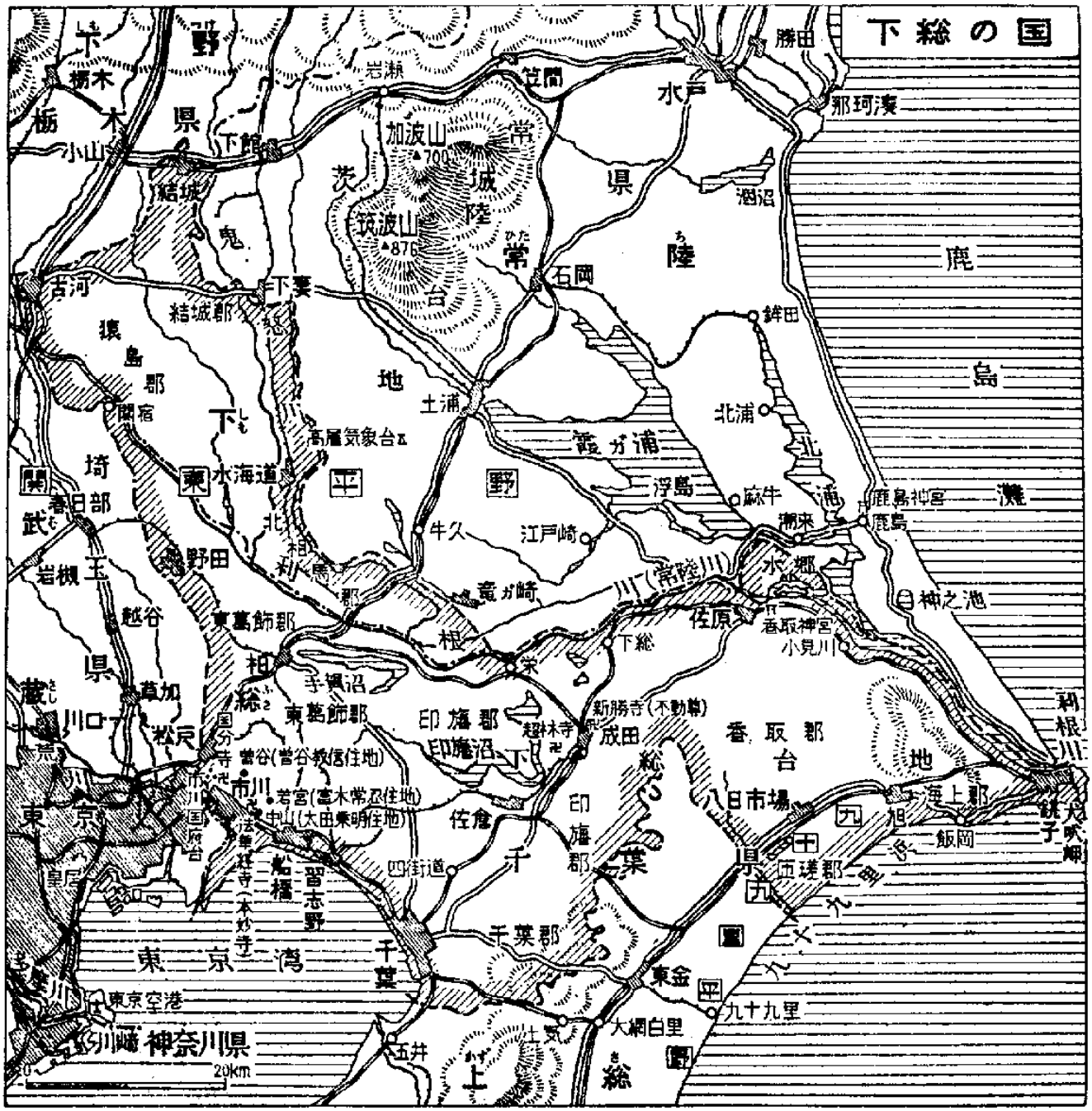
上　インド全図ならびにインド最古の都の一つで仏教遺跡の多い王舎城。

右上　西域とシルクロード。

右下　仏典の結集。第1回は釈尊入滅の年。第2回は釈尊滅後100年ごろ。第3回は釈尊滅後200年ごろ。第4回は釈尊滅後400年ごろ。


凡例
鎌倉五山
( ) 現在の名称を示す
鎌倉
山之内郷
円覚寺
最明寺
明月院
浄智寺
長寿院
建長寺
覚園寺
小林郷
亀ヶ谷郷
鶴岡別当坊
大倉郷
(二階堂)
天台山
浄光明寺
(扇ヶ谷)
鶴岡八幡宮
法華堂
瑞泉寺
三浦邸
荏柄天神
理智光寺
寿福寺
杉本寺
浄妙寺
(浄明寺)
相模
宝戒寺
北条邸
明王院
鎌倉幕府
勝長寿院
東勝寺
報国寺
大仏
高徳寺
四条金吾邸
問注所
妙本寺
松葉ヶ谷
光則寺
甘縄社
甘縄郷
(鎌倉市)
梶原郷
御草庵
名越邸
長谷寺
(長谷)
由比郷
名越
安国寺
権五郎社
下若宮
浅間山
極楽寺
前浜
(材木座)
成就寺
(由比ヶ浜)
新井閻魔堂
補陀洛寺
(極楽寺)
光明寺
三浦郡
(逗子市)
稲村ヶ崎
0
1000m


安房の国
武蔵
東養老川
五井
横浜
京
小糸川
湾
木更津
上総
相模
九十九谷
千
油壺
清澄山
勝浦
愛宕山
清澄寺
(小湊)
鋸山
城ヶ島
天津小湊(東条)
誕生寺
安房
鴨川
鯛ノ浦
県
館山
洲崎
千倉
白浜
0
30km



上　下総の国。東海道15か国の一つで，比較的古くから開けており，日蓮大聖人の門下も多かった。

右上　日蓮大聖人の大法弘通の中心地であった鎌倉の略図。

右下　日蓮大聖人御誕生の安房の国。

左　日蓮大聖人逢難の跡

下　平安京を中心とした近国，中国，遠国の図。

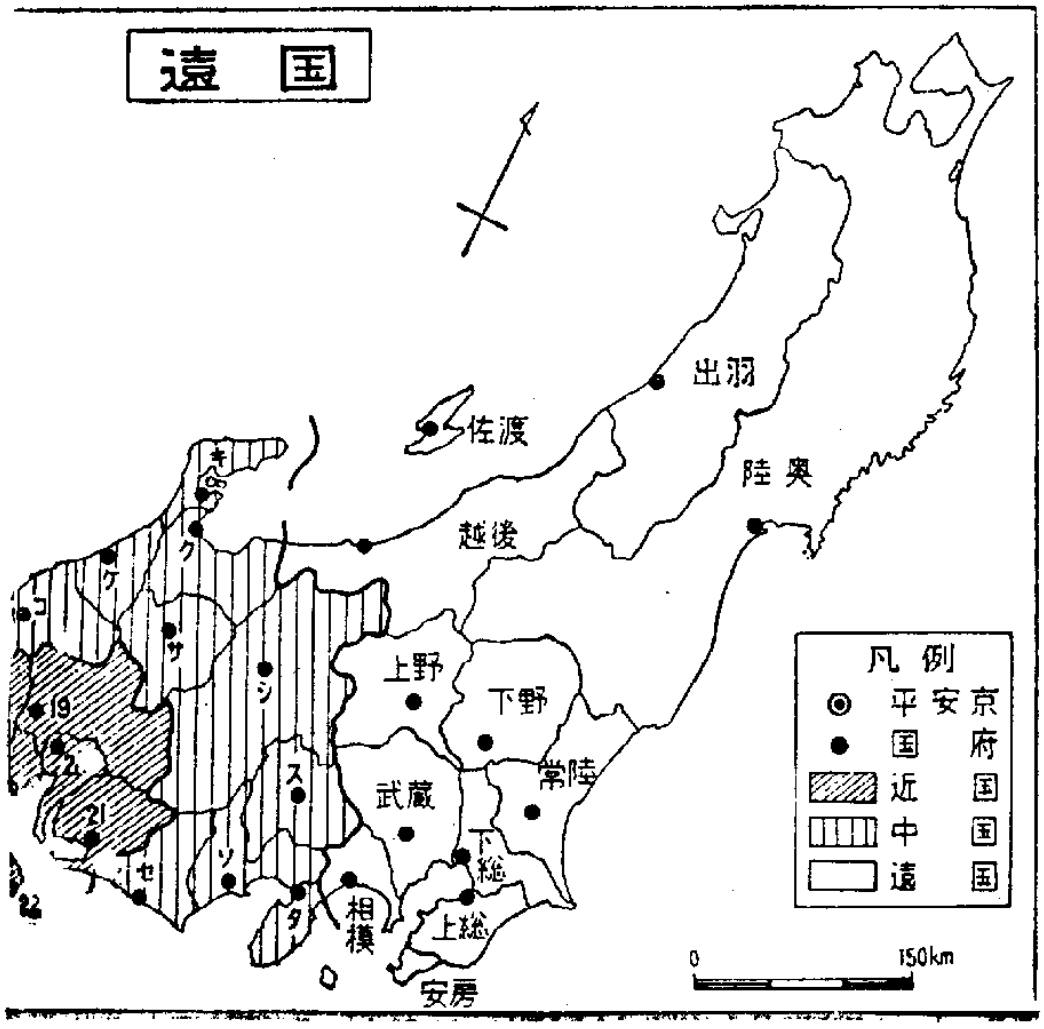
近国と中国の名称は次のとおりである。

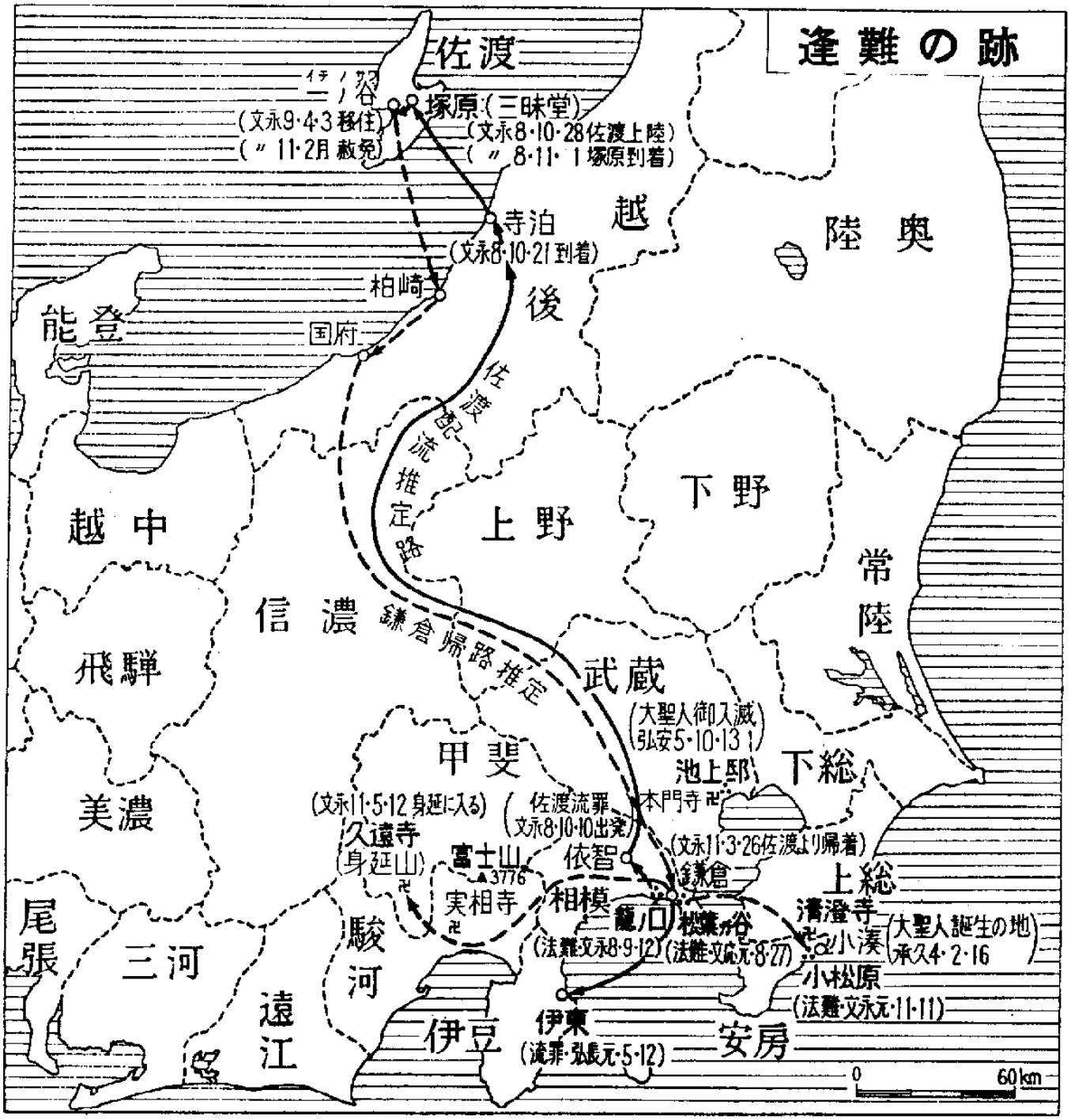
近国

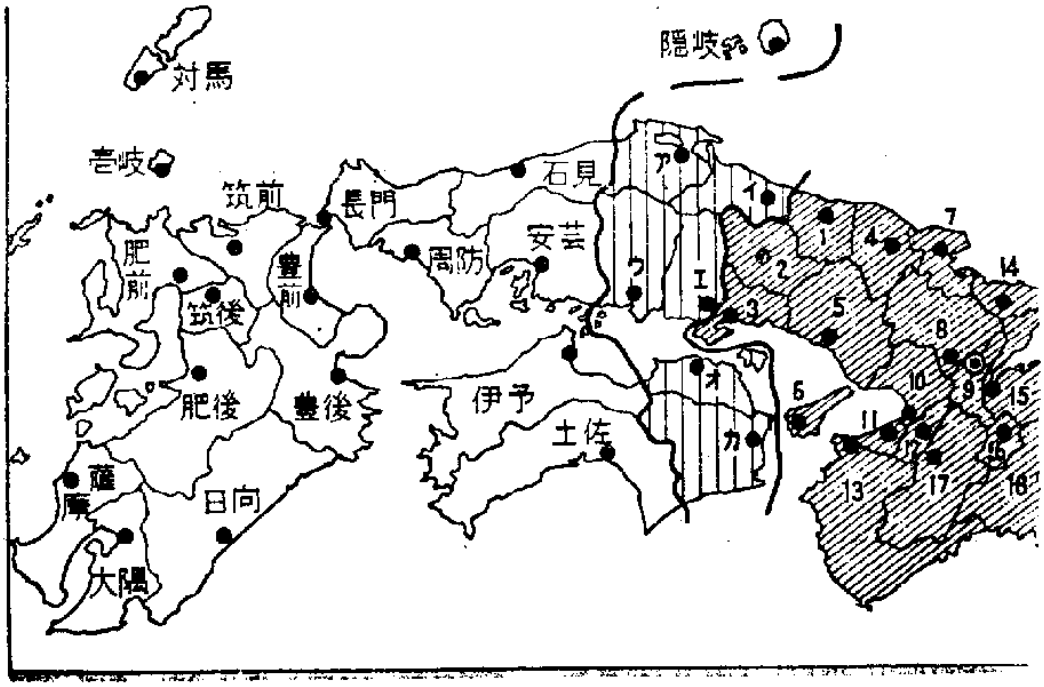
1 因幡	7 丹後	13紀伊	19美濃
2 美作	8 丹波	14若狭	20尾張
3 備前	9 山城	15近江	21三河
4 但馬	10摂津	16伊賀	22志摩
5 播磨	11和泉	17大和	
6 淡路	12河内	18伊勢	

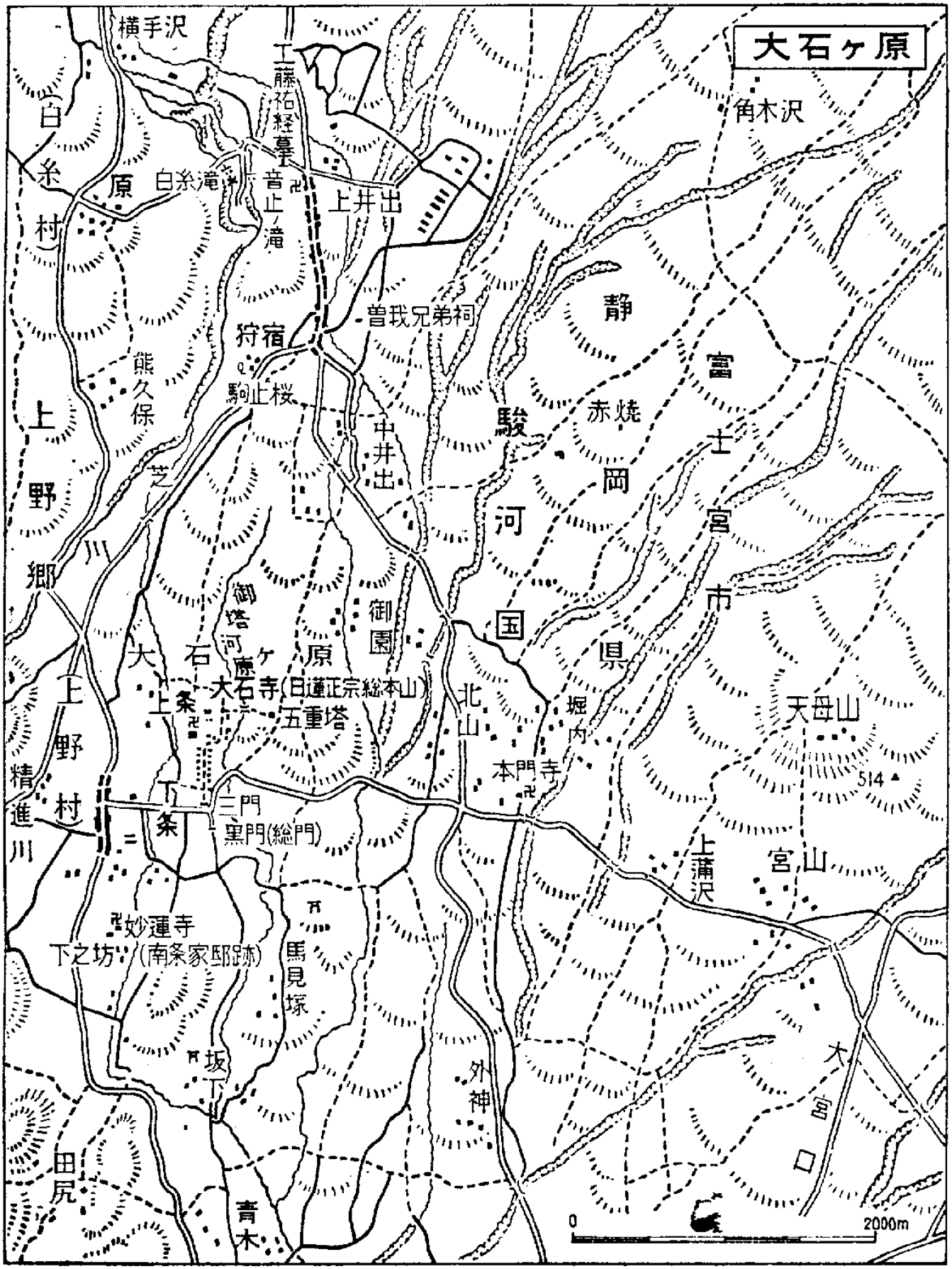
中国

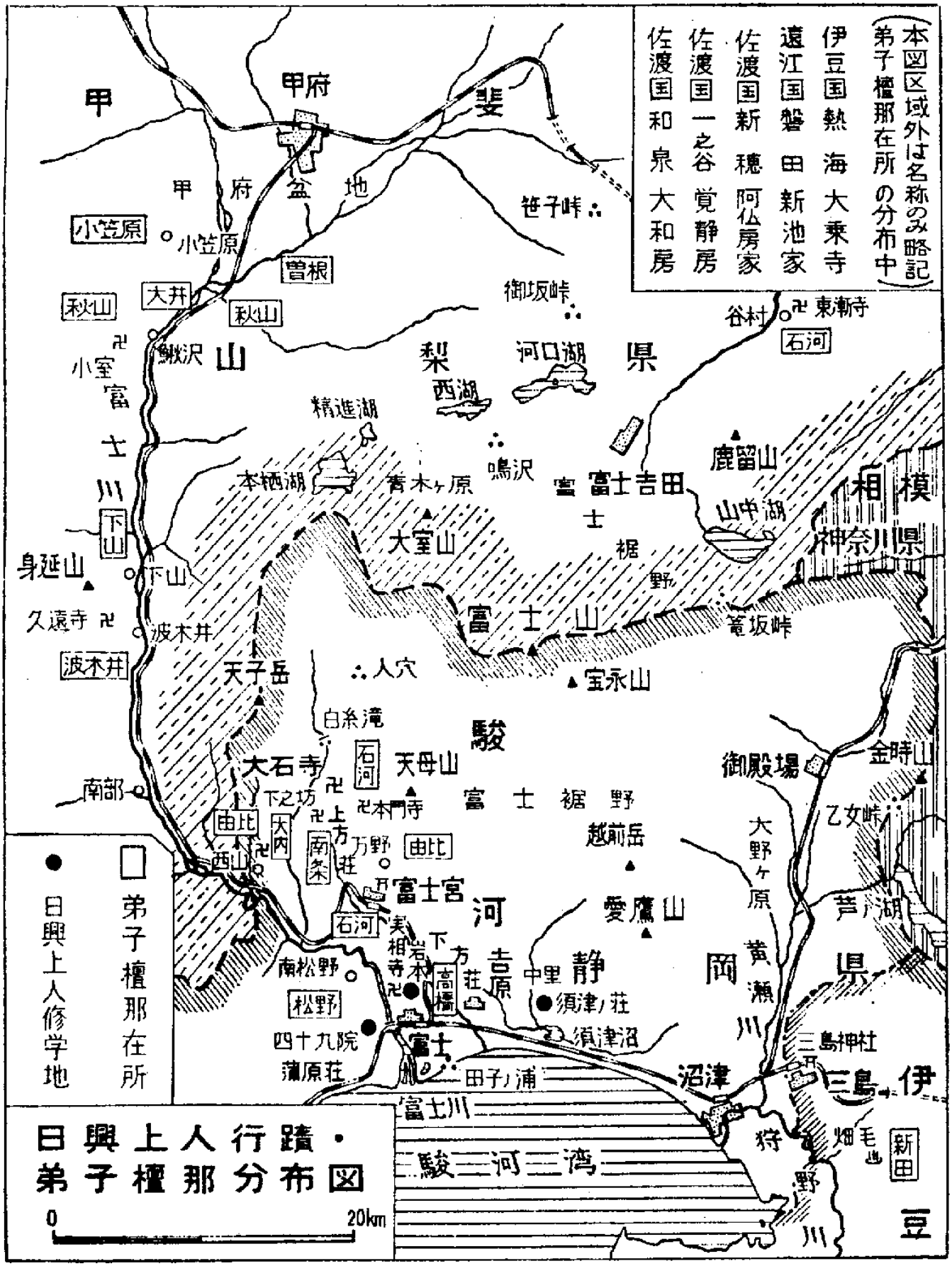
ア出雲	オ讃岐	ケ加賀	ス甲斐
イ伯耆	カ阿波	コ越前	セ遠江
ウ備後	キ能登	サ飛騨	ソ駿河
エ備中	ク越中	シ信濃	タ伊豆




逢難の跡
佐渡
一ノ谷
(文永9・4・3移住)
(〃 11・2月赦免)
塚原(三昧堂)
(文永8・10・28佐渡上陸)
(〃 8・11・1塚原到着)
寺泊
(文永8・10・21到着)
柏崎
国府
能登
越後
陸奥
越中
佐渡配流推定路
上野
下野
常陸
信濃
鎌倉帰路推定
飛騨
武蔵
(大聖人御入滅
弘安5・10・13)
甲斐
池上邸
下総
美濃
(文永11・5・12身延に入る)
佐渡流罪
(文永8・10・10出発)
本門寺
(文永11・3・26佐渡より帰着)
久遠寺
(身延山)
富士山
3776
依智
鎌倉
上総
実相寺
相模
龍口
(法難・文永8・9・12)
松葉ヶ谷
(法難・文永元・8・27)
清澄寺
小湊
(大聖人誕生の地
承久4・2・16)
尾張
三河
駿河
小松原
(法難・文永元・11・11)
遠江
伊豆
伊東
(流罪・弘長元・5・12)
安房
0
60km


対馬
隠岐
壱岐
筑前
長門
石見
肥前
豊前
周防
安芸
筑後
肥後
豊後
伊予
土佐
薩摩
日向
大隅


大石ヶ原
横手沢
角木沢
白糸村
原
白糸滝
工藤祐経墓
音止ノ滝
上井出
曽我兄弟祠
狩宿
駒止桜
熊久保
芝川
中井出
静
富
士
宮
市
駿
河
国
赤焼
岡
県
上野郷
御塔ヶ原
御園
大石寺(日蓮正宗総本山)
大石寺五重塔
北山
本門寺
堀内
天母山
514
上野村
精進川
下条
三門
黒門(総門)
上蒲沢
宮山
妙運寺
下之坊
(南条家邸跡)
馬見塚
坂下
外神
大宮
田尻
青木
0
2000m


本図区域外は名称のみ略記
弟子檀那在所の分布中
伊豆国熱海大乗寺
遠江国磐田新池家
佐渡国新穂阿仏房家
佐渡国一之谷覚静房
佐渡国和泉大和房
甲府
甲府盆地
笹子峠
小笠原
曽根
大井
秋山
御坂峠
谷村
東漸寺
石河
鰍沢
小室
富士川
下山
身延山
久遠寺
波木井
梨
山
県
河口湖
西湖
精進湖
本栖湖
青木ヶ原
鳴沢
富士吉田
鹿留山
山中湖
相模
神奈川県
大室山
富士裾野
富士山
篭坂峠
天子岳
人穴
宝永山
白糸滝
駿
大石寺
石河
天母山
南部
下之坊
本門寺
由比
大内
南条
万野
上方
西山
富士宮
河
越前岳
愛鷹山
大野ヶ原
芦ノ湖
石河
実相寺
下方
岩本
高橋
南松野
松野
吉原
中里
静
岡
県
黄瀬川
須津ノ荘
四十九院
蒲原荘
富士
須津沼
三島神社
三島
伊
田子ノ浦
沼津
富士川
駿河湾
狩野川
畑毛
新田
豆
御殿場
金時山
乙女峠
弟子檀那在所
日興上人修学地
日興上人行蹟・弟子檀那分布図
0
20km

御書にみる御供養品一覧

〔通　貨〕

青鳧（せいふ）
青い鴨の意。一貫文ごとに銭の穴にひもを通して束ね、一結（ゆい）、一さし、一連などと呼んだ。

鷲目一結（がもくひとゆい）
鷲鳥の目のように丸く、また、そのひとみのような四角の穴があいている通貨。

銭三貫（ぜにさんがん）
金、銀、銅、鉄、真鍮で鋳造した通貨の総称。

〔穀　物〕

米（こめ）
八木（こめ）
鼈牙（こめ、しらよね）
白米（しらよね）
乃米一だ（しらよねいちだ）
白米とは、精白された米のこと。一駄とは、馬一頭に積んだ量二俵をもって一駄という。
麦一箱（むぎひとはこ）
白麦（しろむぎ）
舂麦（つきむぎ）
麦の白米
あわの米（あわのよね）
大豆一石（だいずいっこく）
焼米（やきごめ）
焼米とは、新米をもみのまま炒（い）り、ついて殻をとったもの。
干飯（ほしい）
干飯とは、ほしてかわかして貯えておく飯、これを水にひたせば、すぐたべられる。
青麨（あおざし）
青麦をいり、臼でひいて糸のようによったもの。
餅（もち）
餈（もち）
十字（むしもち）
角粽（ちまき）
粽（ちまき）
ちまきとは、古代中国より日本に伝えられた菓子の類。もち米をチガヤ（茅）の葉で巻くから「ちまき」という。

洗芋（あらいいも）
洗ってある芋。さといもであろう。
家の芋（いえのいも）
さといもの古称。
蹲鴟（いものかしら）
さといものこと。蹲とはすわるの意。鴟は鳶の一種の鳥。芋の形が鳥のすわった姿に似ているので、こう呼んだ。
芋の頭（いものかしら）
芋（いも）
八頭（サトイモの一種）のこと。
毛芋（けいも）
「かしゅういも」ともいう。中国の原産。
根芋（ねいも）
里芋などの芽ばえを食用にするもの。
薯蕷（やまのいも）
やまのいも科の多年生蔓草。別称じねんじょう。

〔野菜・総菜〕

枝大豆（えだまめ）
山葵（えびね・わさび）
茎立（くぐたち）
野菜のとうをいう。とくにスズナのとう（薹）。
牛房一束（ごぼうひとたば）
豇豆穂尖（ささげひげこ）
ささげとは豆の一種。ひげことは竹籠の一種。すなわち竹籠入りのささげの意。
山椒（さんせう）
生姜（はじかみ）
薑（しょうかう・はしかみ）
しょうがのこと。根茎を食用に供し、粉末にしたものは香辛料となる。
大根（だいこん）
筍（たかんな）
筍（たかんな）
笥（たかんな・たけのこ）
霊芝（たこ）
きのこ、たけのこ等の説あり。
土筆（つくづくし）
つくしのこと。スギナの地下茎から出る胞子茎（ほうしけい）。
野老（ところ）
やまいも科の蔓草。
茄子（なすび）
名荷（みょうが）
蒟若十枚（こんにゃく）
摺豆腐（すりどうふ）
一般に今の高野豆腐といわれている。

〔果　物〕

栗一籠（くりひとかご）
柚（ゆず）
泡消柿（あわしがき）
あわしかきとは灰汁で洗い、十数日保存して渋味を抜いた柿。
串柿（くしがき）
柘榴（ざくろ）
瓜（うり）
柑子一籠（こうじひとかご）
ミカンの一種、風味は淡白である。
梨（なし）

〔海産物〕

海苔（のり）
海紫菜（あまのり）
河苔二帳（かわのり）
山間の渓谷の清流に、岩石に付着している緑藻でつくったのり。日本特産種である。
昆布（こぶ）
小藻（こも）
海草の一種、石蓴（せきじゅん）ともいう。ひるむしろ科の多年草。食用のほか、むしろ、ふとんの中身となる。
鶏冠菜（とつさかな）
とさかのりのこと。紅藻類トサカノリ科の海草。塩づけ、または乾燥して保存食とする。
生ひじき（なまひじき）
干ひじき（ひるひじき）
生和布（なまわかめ）
海藻（わかめ）
裙帯菜（わかめ）
荒布（かちめ）
かちめとは、温暖な海水に生ずる褐藻類コンブ科の海藻。
於胡（をご）
おごのりのこと。紅藻類オゴノリ科の海藻。現在は寒天や刺身のつまなどに用いられる。

〔酒・その他〕

聖人（すみざけ）
清酒（せいす）
聖人を清酒といひ、濁酒（にごりざけ）を賢人という。
あまざけひとをけ
モチゴメにこうじを入れてつくる酒。
千日ひとつ（さけひとつ）
千日（さけ）とは、千日酒のこと。良い酒をいひ、中国の故事にある。
古酒（ふるざけ）
古酒とは、去年作った酒。
酒大筒・小筒
油筒一（あぶらひとつつ）
塩一駄（しおいちだ）
酢一桶（すひとおけ）
酢筒（すずつ）
味文字（みもじ）
味噌の女房詞。
みそをけ
飴桶（あめおけ）
もち米をむし、大麦のもやしを入れ、熱湯を加えてしぼり練ったもの。
菓子一籠（かしひとこ）

〔衣　服〕

袈裟一帳（けさいっちょう）
絹の袈裟（きぬのけさ）
薄墨染衣（うすずみごろも）
御衣（おころも）
薄墨染衣とは、淡い墨色に染めた衣。日蓮正宗の僧侶のみこの色の衣を着用する。
単衣（ひとえ）
単衣とは、盛装用の衣服の一。
御単衣（おんひとえ）
単衣布（ひとえぎぬふ）
御衣布（おころもふ）
絹片裏（きぬかたうら）
厚綿の白小袖
あつわたの小袖
白小袖（しろこそで）
青き裏の小袖
柿のあをうらの小袖わた
小袖とは、小さい袖の衣服のこと。また、絹の綿入れのこと。
帷一領（かたびらいちりょう）
帷とは夏の着物の一種。片方という意。
細美帷（さいみかたびら）
細美帷とは、麻布の帷。
明衣（ゆかたびら）
明衣とは、ゆかたの一種。
太布帷子（たふかたびら）
たふかたびらとは太糸で織った目のあらい布の帷のこと。
腰三具（こしさんぐ）
衣服・袴・裳などの腰部にあたる部分。また、その辺に結ぶ紐の称。
直垂三具（ひたたれさんぐ）
もと庶人の平服で、後に武家の礼服となり堂上の人も用いた。

帽子一（ぼうしひとつ）
昔、布帛（ぬのわた）で造ったかぶりものの総称。頭巾。

をび一すじ

〔什器・用度品〕

銅の御器（かねのごき）
御器とは食器のこと。また、仏前を荘厳にする五器（一対の花瓶と一対の燭台と一個の香炉をいうこともある。

御ざの筵（ござのむしろ）

筵（むしろ）
藺（り）の茎を織って作った敷物。

焼香二両（しょうこうにりょう）
灯明・立華・焼香の三具足の一つ。香炉のこと。

筒（つつ）
竹筒の形をした器で、水や酒等の液体を入れる食器のこと。漆（うるし）ぬりである。

筒御器一具付

提子（ひさげ）
つるのある小鍋形の具。

筆十管（ふでじゅっかん）

墨五丁（すみごちょう）

紙（かみ）

太刀（たち）

扇（おうぎ）

五明（おうぎ）
舜（しゅん）の作った扇を五明扇という。